永劫の世界へ

ちゃなな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永劫の世界へ

【Ｎコード】
Ｎ４４７８Ｓ

【作者名】
ちゃなな

【あらすじ】
両親の都合で稲羽市の親戚の家に居候することになった瀬多総司。だが越して早々、平和な田舎町で奇怪な殺人事件が起こり始める。

マヨナカテレビ。
深い霧。
そして、もう一人の自分――ペルソナ。
殺人のカラクリを知った総司達は、事件を追い始める。

その彼らの前に現れる一人の少女。
彼女もまたペルソナ使い……それも総司と同じワイルドの力を持っていた。

※注意事項※

・これはＰ３Ｐ女主がＰ４時代にトリップするタイプのクロスオーバー物です。
・Ｐ４再構成であり、Ｐ３・Ｐ３Ｐ・Ｐ４の致命的なネタバレと妄想を含みます。
・Ｐ４は推理要素も含んでいるのに、普通に真犯人もネタバレしてしまいます（真ＥＤルート）。
・Ｐ３Ｐ女主がょぅι”ょ（笑）です。
・クロスなのに、肝心の女主が出るのは3話からです。
・ＵＰ主はＦＥＳ持ってますが未プレイです（あらすじだけは知ってます）。
・戦闘なんて書けません。ペルソナは喚んだら（集中切れるまでは）出っぱなし設定です。
・他にもしれっと独自設定が混じります。

未プレイの方でも読めるようには書いて（るつもりでい）ますが、上記に書いた通りにネタバレもネタバレなので、プレイする気のある方にはオススメできません。
もちろん、面白いゲームですので、読んで興味を持ってくださったならプレイしてくれると嬉しいです。

とりあえず、名前がないと不便なので主人公・ｓは名前付けてます。

★Ｐ３Ｐ女主
有里（ありさと）　茜（あかね）
漫画版Ｐ３主人公の有里湊から。
湊は男女どっちでも通用する名前だと思うけどややこしくなりそう

なので、名の方を変更しました。

★Ｐ４主人公
瀬多（せた）　総司（そうじ）
こっちは漫画版Ｐ４そのまま引用。

それでは、上記の注意を読んでいただいて、それでも構わないというお客様はどうぞお進みください。
楽しんでいただけたら幸いです。

終わりの始まり《エピローグ》

住宅街から少し離れた山の中。
そこに、その建物はあった。
斎場…つまりは、火葬場。
その時、その斎場の待合室には数人の男女が集まっていた。
各々、置かれた菓子やお茶を口に運び、ボソボソと会話をする。
会話の内容は大抵愚痴であり、彼らがこの場に集まって居るのは半ば以上義務だと思っていて、さらに不満でもあるらしいのがハッキリと分かる。
そんな中、ただ一人だけ異色の雰囲気を纏う女性がいた。
桐条美鶴。
唯一その場に居る彼らの誰とも血縁関係を持っていない彼女は、唯一その場に居る彼らとは違い現在炉に入っている少女を悼んでいた。
チラチラと視線が飛んでくる中、美鶴は腕を組んで窓から外を眺めていた。
葬式らしい葬式はなかった。
仲間と、少女が個人的に仲が良かった者を知っているだけ招いて別れの会は開いたが、それに参加して更にこの場にいるのは美鶴しかいない。
家族葬というより密葬と呼んだ方がいいのだろう。
他の仲間達がこの場に立会うのは断られてしまった。
美鶴だけが唯一許されたのは、彼女が”桐条”だからだ。
世界有数の複合企業、桐条グループ。
元々は巨大コンチェルンである南条の分家で、日本で双方の名を知らぬ者はいないだろう。
美鶴は現在、その桐条の総帥という立場にある。
だから、そんな桐条に睨まれたくないと思ったのだろう。

少女の急な転校の背景に、桐条の権力が使われていたのもあるのかも知れない。
しばらく後、背広姿の職員が現れて終了したことを告げる。
案内に従って先程も訪れた炉の部屋へと赴く。
小さな机には骨壷が用意され、炉が開かれて台が引き出される。

「……え？」

呟いたのは誰だっただろうか。
全員の視線が台の上に集中した。
棺や敷き詰められた花の灰。
それはいい。
だけど、あるのはそれだけだった。
美鶴も、他の者たちも見たはずだ。
少女の入った棺の蓋が閉められるところを。
台に乗ったその棺が炉に納められたところを。
火を入れるスイッチが押されたところを。

しかし、そこには。
彼女がいた証拠、骨の一本たりともそこには存在していなかった。

／＊／

目を開けたとき、総司は辺りを白い光に包まれているのだと思った。
一面の、白い世界。
総司は膝を付き、ただ一人そこにいた。

白くないのは、黒い学生服を来ている自分と、赤いキューブの並んだ床…通路だけ。
白い世界だと思ったのは、一面を覆う深い霧のせいだった。
腕を前に伸ばせば、指の先が見えないほどの、深い霧。

（ここは一体……？）

背後にはキューブの通路はなく、それ以上は進めない。
通路は海か湖の上に浮かんでいるようで、手を伸ばすと熱くも冷たくもない水に触れることができた。
通路は一本道のようで、道なりに進んでみる。

リィィィン。

――真実が知りたいって……？

誰かの声がしたような気がして、総司はその場に立ち止まった。
辺りを見回すが、白い霧に閉ざされていて何も見通すことができない。

リィィィン。

――それなら…捕まえてごらんよ……

また、聞こえた。
甲高い音と、不思議な声。
最近聞いた声のような気もするし、初めて聞いたような気もする。
声は、奥の方からだ。
更に進むと、壁があった。
その向こうに、誰かの気配。

手をふれると、壁は音もなく口を開けた。
扉、だったらしい。
中に足を踏み入れると、人影が見えた。
霧が深いせいでぼんやりとしかその姿は見えない。
ふと重さを感じて手を見ると、いつの間にか刀が握られていた。

――追いかけてくるのは…君か……

呆然と手の中の刀を見つめていた総司は、声をかけられて我に返った。

――ふふふ…やってごらんよ……

敵だ、と感じた。
戦わなくてはいけない。
自分には…そのための力がある。
なんの疑問もなく、そう感じた。
人影に向かって刀を振るう。
小さな手ごたえ。
掠ったらしい。

――へえ…この霧の中なのに、少しは見えるみたいだね……

狙う。
精神を集中する。
中空に青白く光るカードが現れ、総司は手を伸ばした。
自分には、それが出来るとわかる。
カードを握りつぶすと、自分の中から薄っすらとした人型の影が現れて手を掲げる。
やはりそれも、霧に紛れてよく見えない。

それでも構わず、総司は叫んだ。

「”ジオ”！」

それは呪文。

総司から現れた人型の影の指先。

そこから迸った雷光は狙いたがわず人影に当たった。

だが、あまり堪えた様子はない。

珍しいものを称えるような声色で相対する人影は呟く。

――なるほど……

確かに…面白い素養だ……

でも…簡単には捕まえられないよ……

求めてるものが”真実”なら、尚更ね……

人影が腕を広げると、さらに霧が辺りを閉ざした。

もう人影も見えない。

あたりをつけて切りかかっても、手ごたえはない。

――誰だって、見たいものだけを見たいように見る……

そして霧は何処までも深くなる……

辺りを見回す総司に、声が届く。

近いようで遠い。

どこにいるかつかめない。

――いつか…また会えるのかな……

ここことは別の場所で……

フフ、楽しみにしてるよ……

意識が、遠くなってゆく。
霧に包まれるように。

まっしろに。

／＊／

トントン、と覚醒を促すような音がする。
目を開けると、もうそこは白い世界ではなかった。
天井が見える。
起き上がると、部屋の隅に積まれたダンボール箱と、まだ何も置かれていない棚が目に入った。
もっと近い所に目を移すと、今度は今まで自分が被っていた布団が目に入る。

（夢、か……）

電車の中のうたた寝で見た青い部屋の夢とか、白い霧の世界とか、環境の変化で疲れているとはいえ最近見る夢は意味不明だ。

（まぁ、夢なんて、そんなものか）

体を伸ばすと、布団の誘惑を断ち切る勢いで立ち上がる。
トントン、ともう一度音がした。
誰かが部屋の扉をノックしているらしい。

「朝ご飯、出来てるよ？」

聞こえてくるのは幼い声。
この家の家主、堂島遼太郎の一人娘の菜々子の声だ。

「ああ、今行くよ」

そう言って、総司は学習机の椅子に引っ掛けておいた制服を手に取った。

真夜中のテレビ

■４／１３

”マヨナカテレビ”って知ってる？

電気の消えた暗い室内。
それでも、カーテンを開けたままにしていることで入る街灯の明かりで、何とか物の輪郭が分かる…そんな暗さ。
雨が窓ガラスを叩き、水滴は光をうけて斑の影を落とす。
もうすぐ、日が変わる。

雨の夜の午前０時に、消えてるテレビを一人で見るんだって。
で、画面に映る自分の顔を見つめてると、別の人間がそこに映ってる…ってヤツ。
それ、運命の相手なんだってよ……

放課後、学校で知り合った陽介らと行ったジュネスという大型スーパーで聞いた、千枝の話。
皆でやろうという事になって、総司は今、消えたテレビに向かい合っている。
高校生にもなって、とは思ったがこれも付き合いだと割り切っていた。
何も転校二日で輪を乱そうとは思わない。
一年間、この町で過ごすのだ。
出来るだけ過ごしやすいようにしたいと思っていた。
ちらり、と時計を確認する。
後、数秒。
消えたままのテレビ画面には、光の反射で総司が映りこんでいる。

0時。
変化は、ない。
つい小さく鼻で笑い、視線を外す。
心の中では多少期待していたらしい。
寝ようと布団に向かおうとして、背後の光に振り返った。
テレビが、点いている。
電源は入れてないし、入っていない。
電源が点いていることを示すランプは消えている。
それでもテレビは映像を流す。
粗い、チューニングが出来てないような、そんな映像だ。
飛び飛びに、砂嵐の隙間から見える人。
ウェーブのかかった髪を振り乱す……あれは女、だろうか。
つい最近見たような気がするが、町に来てまだ数日。
会う人全員が初見で心当たりが多すぎる。

――我は汝…

声。
頭の中で、直接響く。
そのせいか酷い頭痛がした。

「……っ、は……くぅ……」

――汝は我…

足元が定まらない。
ふらつき、膝をつき、頭をおさえる。

「ぁ……あぁっ」

――汝は扉を開く……

カチン、という音と共に、時計の長針が1分を指した。
痛みに閉じた瞼でも分かるような眩しい光が目を眩ませる。
痛みがひく。
声は、もう聞こえない。
いつの間にかテレビも沈黙していて、残るのは粗い息を吐く総司だけだった。
ゴロゴロ、と声の代わりに遠くの音が聞こえ、先程の光が雷光だったのが分かる。

（な、んだ……？　今の……）

頭に響く声も、テレビの映像も。
自分に何が起こったのか分からない。
未だふらつく足を宥め、総司はテレビの前に立った。
もう聞こえない声の事は調べようがない。
ならば、テレビの方だけでも調べるべきだろう。
おそるおそる指を画面に近づける。

リィィィン。

触れた指先を、慌てて引っ込める。
水が波紋を描くように、触れた画面は光の波紋を描いた。
もう一度。

リィィィン。

今度は引っ込めず、更に指を沈める。
抵抗無く沈んでいく。
手首まで入れても、底に触れる感触はない。

「……これ、どこまで……ぅあ……っ！？」

いきなり、引きずり込まれた。
突然で抵抗も出来ずに頭も画面に入ってしまう。
このまま身体が全部入るかと思ったが、画面の枠に左肩がぶつかり、それでなんとか出たままだった左手で枠を掴んで踏みとどまることが出来た。
引っ張る力に抗って、もがく。
そして、すっぽ抜けた。
引き戻そうとする力と、引きずり込もうとする力。
その片方が唐突になくなったのだ。
総司は勢いよくテレビから抜け……そのまま後ろに転んでテーブルの角に頭を強打した。

「～～～～～～～っ！！」

今度は、先程のように呻く事も出来ない。
頭を押さえて悶絶していると、トタトタと軽い足音が階段を登ってくる。

「だいじょうぶ？　すごい音、したけど」

菜々子だ。
どうやら起こしてしまったらしい。
しかし、今の総司は痛みに耐えるので精一杯で、何とか……、というので精一杯だった。

■４／１４

チャイムがなり、教師が出て行くと、生徒達はいくつかのグルー

プで固まってお喋りに興じ始めた。
幾人かの生徒は机の横に引っ掛けた鞄を掴んで教室を出て行く。
総司は鞄に荷物を詰めながら、なんとなしに耳を傾けていた。
話題の種類は少ない。
皆が皆、同じ話をしている。

「逆さにぶら下がってたって何なの？　ヤバくない？」
「処刑とか、そういうアピール？　怖すぎ～」

それは、二日前に起こった事件の話だ。
ワイドショーやニュースで大々的に取り上げられたこともあったし、その異常性から話題は尽きない。
死体が、見つかったのだ。
恐らく、それだけならここまで騒ぎにはならなかっただろう。
酷い話だとは思うが、よくあることだ。
ただ、その死体の状況が異常だった。
民家のアンテナに逆さ吊りにされていたのだ。
更に、その死体となった人物は最近ニュースを騒がせていた地元のアナウンサーで、同じ地元の議員秘書の男性との不倫騒動が報じられていた。
これで話題にならないはずがない。
そして、狭い田舎ということもあって、さまざまな噂が飛び交っていた。

「死体見つけたの、三年の小西って人らしいよ。先輩が言ってて～……」

そんな噂を右から左へ聞き流していると背後から声がかかった。
陽介だ。
何か言いにくそうに口ごもっている。

「花村？」
「や、その、大した事じゃないんだけど……実は俺、昨日、テレビで……
あ、やっぱその…今度でいいや。
あはは……」
「花村ー、ウワサ聞いた？
事件の第一発見者って、小西先輩らしいって」

総司と陽介が話して居るのを見て、今まで席を外していた千枝も入ってくる。

「だから元気無かったのかな……今日、学校来てないっぽいし」

陽介は心配そうに呟く。
ガタリ、と音がしてそちらを見ると、千枝の前の席である天城雪子が立ち上がったところだった。
その手元には、すでに帰り支度の済んだらしい鞄がある。

「あれ？　雪子、今日も家の手伝い？」

彼女の親友を自他共に認める千枝が声をかける。
それに雪子は憂い顔で頷く。

「今、ちょっと大変だから……ごめんね」

そう言って教室から出て行く。
その足取りは、トボトボと擬音が付きそうなほど消沈した様子だ。

「なんか天城、今日とっくべつ、テンション低くね？」

同じ事を思ったらしい陽介が言う。
「忙しそうだよね、最近……」
千枝も心配そうに表情を翳らせる。
しかし、すぐに言いたい事を思い出したのか、二人に顔を寄せた。
「ところでさ、昨日の夜…見た？」
「や、まあその……お前はどうだったんだよ」
「見た！　見えたんだって！　女の子！
……けど運命の人が女って、どゆ事よ？
誰かまでは分かんなかったけど、明らかに女の子でさ……髪がね、ふわっとしてて、肩ぐらい。
で、ウチの制服で……」
こんな感じで、と手で髪の流れを表現する千枝に、陽介は目を見開く。
「それ…もしかしたら、俺が見たのと同じかも。
俺にはもっと、ぼんやりとしか見えなかったけど……」
「え、じゃ花村も結局見えたの！？
しかも同じ子……？　運命の相手が同じって事？」
「知るかよ……
で、お前は見た？」
陽介は、総司にも話を振る。
総司は一つ頷いた。
昨日の、あの事。
あれを忘れることはちょっとやそっとじゃ出来ないだろう。

「見たよ。制服姿で、髪にウェーブかけてる女の子。
それで妙な声が聞こえて、テレビに飲みこまれかけた。
テレビ小さくて、全身入らなかったけど」

総司の話を聞いた二人は首を傾げる。
映った映像はともかく、どうやら声が聞こえたりテレビの中に飲まれそうになったのは総司だけのようだ。

「お前が見たのも同じ人っぽいな……
しっかし、妙な声ってのはともかく。テレビに吸い込まれたってのはお前……
動揺しすぎ？　……じゃなきゃ、寝落ちだな」
「けど、夢にしても面白い話だね、それ。
”テレビが小さいから入れない”ってとことか変にリアルでさ」
もし大きかったら……」

そこまで言って千枝は何かを思いついたらしい。
視線を陽介に投げかけ、わざとらしい棒読みでテレビの買い替えを検討中な自宅事情を話した。
それに、陽介はニヤリと笑う。

「へぇ。今、買い替えすげー多いからな。
なんなら、帰り見てくか？
ウチの店、品揃え強化月間だし」

そして、総司に笑いかける。

「だいぶデカいのまであるぜ。
お前が楽に入れそうなのとかな」

／＊／

ジュネス。
ここ、稲羽に半年前に出来たばかりの大型スーパーで、陽介の父親が経営している。
地元のローカルテレビでも度々ＣＭが流れており、来て数日の総司も何度かそれを見ていた。
記憶に残していたのは、菜々子が気に入っていてＣＭが流れるたびに曲を口ずさむからだったのだが。
陽介は、ジュネスの開店と合わせて稲羽に越してきたとのことだ。
転校してきたばかりの総司に声をかけてきたのも、自身もそうだったからしい。
そんなジュネスの家電売り場。
目の前には、大画面のテレビ。
横幅は、両手を広げても届かない。

「でか！　しかも高っ！　こんなの、誰が買うの？」
「さあ…金持ちなんじゃん？
けど、ウチでテレビ買うお客とか少なくてさ、この辺店員も置かれてないんだよね」
「ふぅん…やる気ない売り場だねぇ。ずっと見てられるのは嬉しいけど」

確かに、店員の姿はない。
フロア中央のレジカウンターにはちゃんと人は詰めているようだが、それも商品棚の影にかくれてテレビ売り場からは見ることは出来なかった。
辺りの人通りを確認して陽介と千枝は顔を見合わせる。

慎重に、ゆっくり腕を伸ばし、同時にテレビ画面に触れる。
何事も起きないのを確認し、息を吐いて手を離した。

「……やっぱ、入れるワケないよな」
「はは、寝オチ確定だね」
「大体、入るったって、今のテレビ薄型だから裏に突き抜けちまうだろ……
ってか、何の話してんだっつの！
で、里中。お前んち、どんなテレビ買うわけ？」
「とりあえず安いヤツって言ってた。オススメある？」

そう言われた陽介は、千枝を伴って近くの展示されたテレビの元へ行く。
営業スマイルで説明を始めた。

「こちらなどいかがでしょうか、お客様。この春発売されたばかりの最新型で……」

触ったテレビより二周りは小さいテレビだったが、値段を見て千枝は仰け反る。

「ちょ、全然安くないじゃん！　ゼロ一個多いだろって」
「てか、まずお前の”安い”がどんくらいか聞かないと」
「花村のコネで安くしてよ。そんなら、ここで買うからさ」
「そーゆーのは無理だって……
じゃ、こっちとかどうだ？　展示品でちょっと古いけど、これなら……」

二人はテレビを品定めするのに夢中になっている。
総司は目の前の、ジュネスの売り物の中で一番大きなのだと紹介

されたテレビに視線を戻した。
確かに、これだけ大きければ本当に入れそうだ。
腕を、伸ばす。
手の平は何の抵抗もなく画面の中に潜り込んだ。

「そういやさー、瀬多。お前んちのテレビって……
……！！　……！？」

こちらに話を振った陽介が、総司の埋まった腕を見て固まる。

「なに？
どしたの、花…村……？
……！！　……！？」

振り返って、千枝も固まる。
その表情はシンクロしたように同じだ。

「あ、あいつの腕……ささってない……？」
「うわ……
えっとー……あれ…最新型？　新機能とか？　ど、どんな機能？」
「ねーよッ！」

二人は慌てて総司に駆け寄る。
そして画面に潜り込んだ腕を見やる。

「うそ…マジでささってんの！？」
「マジだ…ホントにささってる……
すげーよ、どんなイリュージョンだよ！？
で、どうなってんだ！？　タネは！？」

手だけでなく、もう少し入るかもしれない。
慌てる陽介達を余所に、今度は頭を入れてみる。
また引き込まれるかとも思ったが、今度はそういった力はかからなかった。
中には空間が広がっていた。
視界は白い。
これは霧、だろうか。
外からぼやけた陽介の声が聞こえる。

「バ、バカよせって！　何してんだ、お前ー！！」
「す、すげぇーっ！！」

慌てるもどうしたらいいか分からないようで、おろおろする陽介の声に、ただただ驚きの声をあげるしかないらしい千枝の声。

「中、空間になってる」
「な、中って何！？」
「く、空間って何！？」
「結構…いや、相当広そう」
「ひ、広いって何！？」
「っていうか、何！？」

そんなくぐもった声を聞きながら、総司は霧の向こうを見通そうと目を細めた。
霧以外何も無い、というわけではないようで、うっすらと柱のようなものが縦横に……

「客来る！　客、客！！」
「え！？　ちょ、ここに、半分テレビにささった人いんですけど！！ど、どうしよ！？」

騒がしくて集中できない。
静かに、と言おうとして何かがぶつかる衝撃と、身体が宙に浮く感覚。

重力は、無常だった。

／＊／

落ちたところは、広場のように少し開けた所だった。
広場の周りにはライトや鉄製の柱、その柱と柱の間には天井の足場などがあり、テレビ撮影するスタジオと言われても不自然ではない。
もっとも、カメラはなさそうだったし、霧であたりもよく見渡せないが。
暫らく出口を捜して方向を決めて歩いてみたが、辿り着いたのはマンションのような一室だった。
インテリアや家具を見ると大人の女性の部屋、といった印象を受けたが、その部屋は異様の一言に尽きた。
棚の上やラックなどは確かに整頓されている。
それはいい。
だが、壁に乱雑に貼られた、顔の部分を切り裂かれて穴の開いた着物の女性のポスター。
その上から壁を彩る、大量の血が飛び散ったような跡。
そして、ぽつんと置かれた椅子の上で揺れるロープに括り付けられた、いかにも首吊りしますという感じで輪になっている赤いスカーフ。
見ているだけで不安を誘発する場所だった。
結局そこは行き止まりで、三人で広場に戻ってきたのだが、そこ

にはここに落ちた時には無かったものがあった。
それは大きな塊、だった。
ポテポテと塊が近付いてくる。
キグルミのようだ。
首の部分にジッパーがあり、分離できるようになっている。
フォルムは逆さまにした卵に手足がついたような形で、頭の上の方には丸い獣耳。

「何これ？
サル…じゃない、クマ？」

千枝が呟く。
言われて見れば、確かにデフォルメされたクマのようだ。

「何なんだ、こいつ……」
「き、キミらこそ誰クマ？」
「喋った…！？　だ、誰よあんたっ！？　や、やる気！？」
「そ、そ、そんなに大きな声出さないでよ……」

千枝の剣幕にビビったのか、クマは頭を抱えて震えだす。
案外臆病なクマのようだ。
優しく訊いた方が良さそうだと判断し、総司はなるべく優しく聞こえるようにクマに声をかけた。

「キミは誰？」
「クマはクマだよ？
ココにひとりで住んでるクマ。ココは、ボクがずっと住んでるところ。
名前なんて無いクマ」

答えはあった。
だが、要領は得ない。

「……？
ずっと住んでるところ……？」
「とにかく、キミたちは早くアッチに帰るクマ。
最近、誰かがココに人を放り込むから、クマ、迷惑してるクマよ」
「は？　人を放り込む？
何の話だ？」
「誰の仕業か知らないけど、アッチの人にも、少しは考えて欲しいって言ってんの！」

会話に入ってきた陽介の会話にもクマは応じるが、やはり要領を得ない。
総司に対する時とは違い、強気に言ったクマだったか、千枝が一喝すると怯え、慌てて総司の影に隠れる。
さっき優しく声をかけたことで、優しい人、という認識をしたらしい。

「と、とにかく早く帰った方がいいクマ」

クマは、足で床をノックする。
すると煙と共に縦に積み上がった昭和テイストの、ダイヤル式なテレビが現れた。

「んだこりゃ！？」
「テ、テレビ……！？　どうなってんの！？」
「さー行って行って行ってクマ
ボクは忙しいクマだクマ！」

画面を覗き込む総司たち三人の後ろに回ったクマは、そう言って三人をテレビに向かって突き飛ばす。
突き飛ばされた身体は、画面に突き刺さり、そのまま向こう側へと抜けた。
尻餅をついた衝撃を受け流し、目を開ける。
目の前には大きな液晶テレビ。
耳に届くのはジュネスのＢＧＭ。
家電製品売り場だ。

「あれ、ここって……
戻って来た…のか？」

埃のついた尻をはたきながら立ち上がると、丁度店内放送が入った。
惣菜売り場でのタイムサービスが始まるらしい。

「げ、もうそんな時間かよ！」
「結構長く居たんだ……」

店内放送を聴いた二人が顔を顰める。
総司はタイムサービスの時間を知らなかったのだが、ケータイを確認して納得した。
もうかなりの時間だ。

「そうか……思い出した、あのポスター……
ほら、見ろよ。向こうで見たの、あのポスターだろ！」

辺りを見回していた陽介はそう言って壁を指差す。
その一角に視線を向けると、そこには着物を着た女性のポスターが貼ってあった。

確かに、着物の柄が同じだし、間違いなさそうだ。

「ほんとだ、あれだ……さっきは顔無くて分かんなかったけど、”柊みすず”だったんだ。

最近ニュースで騒がれてるよね。

旦那が、この前死んだ山野アナと不倫してた…とかって」

「おい、じゃ、ナニか……？　さっきのワケ分かんない部屋……

山野アナが死んだ件と、なんか関係が……？　そう言や、あの部屋…ヤバい”輪っか”がぶら下がってたりしたけど……

わー、わー、やめやめ！　おい、やめようぜ、この話。

つか、今日の事まとめて忘れる事にするね、俺。なんかも、ハート的に無理だから、うん」

そう言って、両肩をさする陽介。

怯えた感情表現ではなく、本当に寒気がするらしい。

千枝も体調不良を訴えている。

総司自身も身体のだるさを自覚していた。

二人と別れ家に帰ると、もう堂島も帰って来ていた。

机の上にはカップ麺が置いてある。

フタが閉じてるとこを見ると、まだ湯をいれてあまり時間が経っていないようだ。

「おう、おかえり」

頷いて、席に座るが、どうも体のだるさが取れない。

お腹は空いてるはずなのに、二人の前に置いてあるカップ麺を見ても食欲がわかない。

「あー…のな、まあ、知らんとは思うが……

小西早紀って生徒のこと……

何か聞いてないか？」

一応小西早紀とはすでに顔見知りとなっている。
前日に陽介にジュネスのフードコートで奢ってもらった時に、バイト中の彼女と総司は会話を交わしていた。
だが、そこまで言うのは億劫だった。
だから一言だけ伝える。

「今日は休んだって……」

そう、陽介が言っていた。

「ああ、そうなのか……
実は…行方が分からなくなったと連絡があってな。
うちの連中で捜しているんだが、まだ見つからない……」
「……！」

休んで居るのは知っている。
だがそれは体調不良か、第一発見者ということで騒ぎ立てられたくないからだと思っていた。
それが……行方不明？
総司は顔を上げると、堂島は溜め息をついて仕事が増える一方だとグチを言った。

『……次は、霧の町に今も暗い影を落としている事件の続報です』

アナウンサーの声を聞き、テレビに意識を向ける。

『稲羽市で、アナウンサーの山野真由美さんが変死体となって見つかった事件。

被害に遭う直前の山野さんの行動は、はっきりしていませんでしたが……

地元の名所として知られる”天城屋旅館”に宿泊していた事が、警察の調べで分かりました。

一人での宿泊だったという事ですが、傷心旅行といった事だったんでしょうか……』

『ああ、天城屋旅館！　あそこの温泉はね～、いいですよ～！

女将の高校生の娘さんが働いてるんですが、この春にも跡継ぐかって噂がありましてね。

そしたら”現役女子高生女将”ですよ！　いや～、ボクもまた行きたいな～！』

『な、なるほど……えー、では続いて気象情報です』

下世話なコメントを言うコメンテーターにアナウンサーは顔をしかめるが、すぐに役割を思い出したのか話題を変える。

『雨足は、段々と弱まってきました。

事件のあった稲羽市周辺などでは、これから朝にかけて、霧が出やすいでしょう。

視界が悪くなります。車の運転などの際は、十分な注意を……』

ニュースは続いているが、興味がなくなったので、視線を戻す。

山野アナは、死の直前、天城屋旅館に泊まっていたという。

天城屋旅館は雪子の実家だ。

そして、行方不明になった第一発見者の小西早紀。

「ラーメン、もういい？」

「まだ早いだろ」

そんな会話を聞いていたが、不意に寒気が身体を襲った。

くしゃみが出る。
どうやら、体のダルさは風邪にまで発展しそうな勢いらしい。

「風邪か？　いかんな。
新しい環境で疲れがたまってるんだろ。菜々子、薬」

堂島の指示に頷いて、菜々子は走って家の奥に向かう。

「薬飲んだら、今日はもう寝ろ」

流石に、無理は出来そうにないし、する意味も無い。
素直に頷き、菜々子の持って来てくれた薬を受け取って部屋に向かった。

次の日、緊急の全校集会が開催された。
そこで伝えられたのは、小西早紀の死、だった。

もう一人の自分

■4／15

高いところから落ちる、という事は分かっていた。
バランスを取って着地勢をとり、膝をクッションにして着地する。
しかし陽介は上手くいかなかったらしく、腰をさすりながら立ち上がった。
そこは、白い霧の世界。
テレビの中のスタジオのような広場だった。
早紀の死を知り、陽介は仮説を立てた。
彼女が死んだのは、この世界が関係している、という仮説だ。
陽介は昨日もマヨナカテレビを見て、そこに映ったのが小西早紀だと断定した。
そして、”山野アナが運命の相手だ”とか騒いでた生徒の話。
元々、マヨナカテレビは運命の相手が映る、というもの。
それが本当なら山野アナ…山野真由美と小西早紀、死んだ人間の双方が映ったことになる。
聞いた話だと、遺体の状況も似ている。
アンテナと電柱といった違いはあるが、どちらも高い場所での逆さ吊り。
それでこの世界を調べたいから連れて行って欲しいという陽介の頼みを受け、総司はまたここへ来ることとなった。
二人なのは、千枝を外に置いて来たからだ。
陽介に結わえたロープを命綱として持ってもらっている。
切れたらしく、短くなって揺れているが。
仕方無しに視線をめぐらせると、丸い大きな瞳と目が合う。
クマだった。
その目は、訝しげなものからすぐに怒ったようなものへと変わる。

「最近、誰かがこの中に人を放り込んでる気配がするクマ。
そのせいで、こっちの世界はどんどんおかしくなって来てるクマ……
キミたちはココに来れる……他人にムリヤリ入れられた感じじゃないクマ。
よって、一番怪しいのはキミたちクマ！
キミたちこそ、ココへ人を入れてるヤツに違いないクマァァ！！」
「なんだそりゃ！　人を入れる！？
こんなトコ放り込まれたら、出れずに死んじまうかも知れねーだろ！？
そんな危ねー事するワケ……」
威嚇してくるクマに、怒鳴り返す陽介。
そこで、はた、と気が付いたように止まる。
「って、オイ、待てよ……
……なぁ、今、思ったんだけど、誰かがここに、人を入れてるって話……
まさか、先輩や山野アナの事か……？
その”誰か”ってのが、二人をここに放り込んだって事か？
もしも、こいつの話がホントだとしたら……
誰かが、ハナから殺す気で、人をここに放り込んでる…って事もあり得ないか？
だとしたら……」
二人で視線を合わせ、クマを見る。
犯人として態度を硬化したクマから話を聞きだすのは苦労したが、それでも多少話を進めることは出来た。
このテレビの中の世界の霧は、たまに晴れる。

その日はアチラ…現実の世界で霧が出る。
近年、稲羽は雨が続いた後で霧が出るようになったらしいが、コチラの霧が洩れているかしてるのだろうか。
ここの霧の晴れた日は、シャドウというものが暴れるらしい。
一通り話した後、納得したようにクマは頷いた。
どうやらクマの中では謎は解けたらしい。

「さあ、質問は終わりクマ。
……キミらが犯人なのは分かってるクマ！
今すぐ止めてもらうクマ！」

だが迷探偵のようだ。

「だから、違うって言ってんだろ！！
て言うか、俺らに何だかんだ言う前に、お前がそもそも一番怪しいじゃねーか！
お前こそ、実は犯人なんじゃねーのか！？
大体何だよ、そのフザケたカッコ！！　いい加減、正体見せやがれっ！！」

そう言って、陽介はクマに飛び掛る。
押し問答にいい加減ストレスが溜まっていたらしい。
暴れるクマのジッパーを外して……
スポンっ。
やたらコミカルな音をたてて、キグルミの頭が外れる。
中には……何も無かった。
がらんどうのまま、ジタバタと動き回っている。

「うおぁっ！
な、何なんだよ、お前……

な、中身がねぇ……」

慌てて距離をとる陽介に気付かないまま、クマは宙に手を伸ばす。
頭がないと前が見えないようだ。
陽介が落とした頭を手探りで探し、元の位置に戻してジッパーで再び固定する。

「クマが犯人だなんて……
そんなことするはずないクマ……
クマはただ、ココに住んでるだけ……
ただココで、静かに暮らしたいだけ……クマ」

「……」

「キミたちが犯人じゃないって言うなら本物の犯人を探し出して、こんな事を止めさせて欲しいクマ。
このままじゃ、クマの住むココ、めちゃくちゃになっちゃうクマ……」

そしたらクマは……
ヨヨヨヨ……」

「な、何急に泣いてんだよ……
あーも、ホント調子くるうぜ……
ハァ……おい、どうする？」

陽介は逃げるように総司に決断を丸投げする。
総司は、クマの瞳を見つめた。
キグルミの、無機物の筈のその瞳。
その筈なのに、潤んでいるように見える。
ふいに、声が蘇った。
マヨナカテレビを見た時に聞いた声ではない。
この稲羽に来る前。
その電車の中でのうたた寝で見た夢で聞いた声だ。

それは、総司がこれから向かう地で災いを被り、大きな”謎”を解くことを課せられるだろう、と言われる夢だった。
そして、なんらかの契約を交わす、とも言っていた。
それがこれなのだろうか。
事件の”謎”、クマとの約束という”契約”。

「頼めるの、キミたちしかいないクマ……
約束…してくれるクマか？」

不安げに見上げてくるクマに、総司は頷いた。
約束する、と。

ここに、契約は結ばれた。

喜ぶクマに、陽介は溜め息をつく。

「……色々知りたくて来たのは間違いないからな。
今んとこ、なんもワカンネーし。
俺たちで犯人を捜せか……望むところだ。
その約束、乗ってやるよ。
俺は花村陽介…一応、名乗っとくぞ。
で、こいつは瀬多総司。
お前、名前はなんてんだ？」
「……クマ」
「まんまだな、おい……
けど、犯人捜すって、どうすりゃいいんだ？」
「それは、クマにも分からんクマ。
……でも、この前の人間が入り込んだ場所は分かるクマ。

何か、手がかりがあるかも知れないから、そっちに案内してみるクマ。
あと、そうだ、案内の前に……二人とも、これをかけるクマ」

クマは、何処からとも無く何かを取り出すと、総司と陽介、それぞれに渡した。
見ると、何の変哲もなさそうな眼鏡だ。
陽介も首をひねっている。
とりあえず、かけてみると曇っていた景色がクリアに見えた。
霧が存在しないかのようだ。
試しにちょっとずらしてみると……やはり、レンズを通した部分だけがクリアに見える。

「うお、すげえ……視界が全然違う。
かけてると、濃い霧がまるで無いみたいだ」

陽介もしきりに関心している。
縁は宗司が黒に近い灰色で、陽介がオレンジ色。
形もそれぞれに合わせてデザインしているようだ。
こんなものをどこでどうやって用意したのか気になるところだが、とにかくクマに案内してもらうことにした。
スタジオのような広場を抜け、通路を進んでいくといつの間にか床はアスファルトの道路になっていた。
標識があり、街灯があり、家が並ぶ。
そこまで来て、陽介がうろたえたように辺りを見回した。
総司は駅から堂島家に行く車の中で一度通っただけだから気付かなかったが、陽介が言うには、そこは町の商店街と瓜二つらしい。

「最近、おかしな場所が出現しだしたクマよ
いろいろ騒がしくなって、困ってるクマ……」

少し離れたところからこちらを窺うようにクマが言う。
自分に戦う力は無いので、少し後ろからバックアップする、ということらしい。
逃げる気じゃないだろうな、とボヤきつつも、陽介は店の一つを覗き込む。
無人の商店街は閑散としていて、とても静かだ。

「しっかし、どの辺まで続いてんだ……？
てーか、町の色んな場所の中で、なんで”ここ”なんだ？」
「なんでって言われても……ココに居る者にとってココは現実クマ」
「ハァ……相変わらず、よく分かんねーなぁ……
けど、ここがウチの商店街ならこの先は、確か小西先輩の……」

走っていく陽介を追いかける。
向かった先は一軒の酒屋だ。
看板にはコニシ酒店、とある。

「やっぱり……ここ、先輩んちの酒屋だ。
先輩…ここで消えたって事なのか？　一体、何が……」

酒屋に入ろうと扉に近付く陽介。
それにクマが待ったをかける。

「ちょ、ちょっと待つクマ。そ、そこに、いるクマ！」
「いるって、何がだよ」

クマの示す方向。
そこには闇がわだかまっていた。
闇は全ての色を混ぜ合わせて作ったように黒く、形を持つほどに

凝っている。
粘着性がある液体なのか、クチャクチャと音を立てながら闇は身を震わせる。
沈み込んでいた物が浮かび出すように、闇から仮面が現れた。
そして、さらに凝っていく。
不定型だった闇はボールのように丸く固まり、仮面の反対側には巨大な口が現れる。
その口は、巨大な舌で舌なめずりする。

「……シャドウ。
やっぱり…襲ってくるクマ！」

慌てるクマ。
尻餅をついて、呆然と浮かんだボールを見る陽介。
そして総司は、声を聞く。

――我は汝…汝は我……双眸を見開きて……

耳鳴りがする。
頭が痛い。
あの声だ。
マヨナカテレビを見た時に頭に響いた声。
これは……
総司は、痛む頭を押さえていた手の平を見やった。
そこには青白く光る一枚のカード。
ひっくり返しても、絵柄は無い。
しかし、総司には分かった。
そこに描かれるべき絵が。
意識せず、口は笑みをつくる。
そうだ、これは。

――汝、今こそ発せよ……！

これは、自分自身の声だ。

もう頭痛はしない。

扉を開く。

今こそ発する。

「ペ…ル…ソ…ナ……っ！！」

／＊／

「おおおおおおあああああああああああああ！！」

カードを握りつぶして、そこから溢れだした青き炎に包まれながら総司は叫ぶ。

それは実際の炎ではない。

身を焼くことも無い。

ただ心を律せないほどに弱ければ、その心を灼く…そんな炎だ。

やり方は、分かる。

あの時。

あの夢の中、あの霧の世界で当たり前のように〝力〟を使った自分。

出来ることは、分かってる。

だから、あの時と同じように叫んだ。

「〝ジオ〟！」

それは呪文。

自身から現れた人型の影は、その腕を振るい、電撃を生み出す。
今はその姿がはっきりと見ることができた。
鋼を組み合わせたような仮面の男だ。
黒いレザーのコートを翻し、白いレザーの鉢巻をたなびかせる。
ボールは電撃に弱いらしく、体制を大きく崩す。
そこにもう一撃。
それで口のあるボールは跡かたなく消え去った。
電撃を生み出した男は、握りつぶしたはずのカードとなる。
もう、柄のないカードではなかった。
それは身体に染みこむようにして消える。

我は汝。
汝は我。

そうだ。
彼は自分だ。
もう一人の、自分。
名前は、イザナギ。

「すっげ……
な、なんだよ、今の!?」

興奮した様子で陽介が駆け寄ってくる。

「”ペルソナ”って言ったよな!?
あれ、どういう……
てか、一体何したんだよ!?
なあ、俺も出せたりすんのか……?」
「いやはや、センセイはすごいクマね!
クマはまったくもって感動した!

こんなすごい力を隠してたなんて……シャドウが怯えてたのも分かるクマ！
もしかして、この世界に入ってこれたのも、センセイの力クマか？」

クマも随分と興奮している。
いつの間にかセンセイ扱いだ。
そして確かにテレビに入ることが出来るのは総司だけだったから頷くと、クマはうれしそうにスゴイスゴイと連発した。

「よし、お前のおかげで何とかこの先、進んでけそうじゃん！
捜査再開、がんばって行こうぜ！
にしても……ここで一体、先輩に何があったんだろうな？」

陽介は明るく言うが、次の瞬間、凍りついたように固まる。
その原因は……

――ジュネスなんて潰れればいいのに……

ペルソナの声のように頭の中に響くわけではなく、宙から落ちてくるといった感じの声だった。

――ジュネスのせいで……

今度は別の声。
やはり宙から降ってくる。

「な、何だよコレ……」

陽介は呟く。

彼の顔は青ざめている。
台詞の内容のせいだろう。

――そういえば小西さんちの早紀ちゃん、ジュネスでバイトしてるんですってよ。
――まあ…　お家が大変だって時に……ねえ。
――ジュネスのせいでこのところ、売上も良くないっていうし。

「や、やめろよ……」

陽介は呟く。
だが、聞こえる声はとまらない。
雑多な、さまざまな声が落ちてくる。
その大半は女性のもののようだ。
井戸端会議の主婦の噂話、というのがイメージとしては一番近いだろう。
しかし内容は随分悪意に満ちている。

――娘さんがジュネスで働いてるなんて、ご主人も苦労するわねぇ。

――困った子よねえ……

「おい…おい、クマ！
ここは、ここにいる者にとっての現実だとか言ってたな！
それ……ここに迷い込んだ先輩にとっても現実って意味なのか……？」
「クマは…こっち側の事しか分からない」
俯いたまま言う陽介に、クマは答える。

「上等だよ。
一体何がどうなってるのか……
俺たちで確かめてやる！」

ザワザワと煩い声を払いのけるように気合を入れて、陽介は酒屋の扉を潜る。
総司とクマも、その後を追った。
店内の電気はついておらず、薄暗い。
人の気配はないが、酒屋の中も、声で溢れていた。

――何度言えば分かるんだ、早紀！

酒屋の外で聞いたような主婦のような声ではない、男の怒鳴り声だ。

――お前が近所からどう言われてるか、知らない訳じゃないだろ！
代々続いたこの店の長女として、恥ずかしくないのか！　金か？　それとも男か！？　よりによってあんな店でバイトなんかしやがって……

「何だよ、これ……
バイト…楽しそうだったし、俺にはこんな事、一言も……
こんなのがホントに先輩の現実だってのかよ！」

陽介が声を荒げる。
ジュネスは稲羽で初めて出来た大型スーパーだ。
品揃えもいいし、そこで何でも揃える事が出来る。
薄利多売ということもあって、値段も安めだ。
だからこそ。
だからこそ客はジュネスに流れる。

そして、その分商店街は寂れる。
閉めた店も多いのだろう。
だからこそ、外で聞いた声がある。
便利なジュネスは一般の住民にはありがたいものだっただろう。
だけど、商店街で生活する人間には決して受け入れられるものではなかったのだ。
それが分かるからこそ、陽介は声の降ってくる中空から視線をそらせた。
それで何かに気付いてレジに近付き、その上に乗っていたものを取り上げる。
総司もそれを覗き込んだ。
それは一枚の写真だった。
数人の男女が、こちらを向いて笑っている。
その中には早紀も写っていた。
その隣には陽介もいる。

「これ…前にバイト仲間と、ジュネスで撮った写真じゃんか……」

――ずっと…言えなかった……

今度の声は、早紀だった。

「この声…先輩!?」

陽介は中空に視線を戻す。
そこには、ただ酒屋の天井が見えるだけだ。
声が、落ちてくる。

――私、ずっと花ちゃんの事……

「え…？
俺の事……？」

――……ウザいと思ってた。

陽介の表情が固まる。

――仲良くしてたの、店長の息子だから、都合いいってだけだったのに……

勘違いして、盛り上がって……ほんと、ウザい……
ジュネスなんてどうだっていい……
あんなののせいで潰れそうなウチの店も、怒鳴る親も、好き勝手言う近所の人も……全部、無くなればいい……

「ウ、ウソだよ…こんなのさ……
先輩は……そんな人じゃないだろ！！」
「悲しいなぁ……可哀想だなぁ、俺……」

陽介の叫ぶ声に被って聞こえる、陽介の声。
慌てて声のした方を振り返る。

「てか、何もかもウザいと思ってんのは、自分の方だっつーの、あはは……」

そこには、もう一人陽介がいた。

「あ、あれ？　ヨ…ヨースケが二人…クマ？」

クマが目を白黒させる。
陽介は、新たに現れたもう一人を睨みつけた。

「お前、誰だ！？
お、俺はそんな事、思ってない……」
「……アハハ、よく言うぜ。
いつまでそうやってカッコつけてる気だよ。
商店街もジュネスも、全部ウゼーんだろ！
そもそも、田舎暮らしがウゼーんだよな！？」
「な、何言ってる……？
違う、俺は……」

陽介が、陽介を追いつめる。

「お前は孤立すんのが怖いから、上手く取り繕ってヘラヘラしてんだよ
一人は寂しいもんなあ。みんなに囲まれてたいもんなあ。
小西先輩の為に、この世界を調べに来ただぁ？
お前がここに興味を持ったホントの理由は……」
「や、やめろ！！」

陽介が遮る。
だが陽介は止まらない。
嘲笑いながら、言い放つ。

「お前は単に、この場所にワクワクしてたんだ！　ド田舎暮らしには、うんざりしてるもんな！
何か面白いモンがあんじゃないか……ここへ来たワケなんて、要はそれだけだろ！？」
「違う……やめろ、やめてくれ……」

搾り出すように言う陽介の声は弱い。

それに、もう一人の陽介は更に嗤う。

「カッコつけやがってよ……あわよくば、ヒーローになれるって思ったんだよなぁ？
大好きな先輩が死んだっていう、らしい口実もあるしさ……
俺は、お前……お前の”影”……全部、お見通しなんだよ！」
「ふ…ざけんなっ！」

ついに陽介の感情が爆発した。
それは拒絶の感情。

「お前なんか知らない！」

それは、決定的な一言。

「お前なんか……俺じゃない……！！」

／＊／

風が吹き荒れる。
台風の目のようになった風の中心に立つのはもう一人の陽介だ。
嗤う陽介の瞳が金色に輝く。

「ははっ……いいぜ、いいぜぇ……！」

その身体に、闇色に染まった風が絡みついていく。
呆然とそれを眺めていた陽介が突然力を失ったように倒れそうになり、総司はそれを支えた。
風に巻き込まれないようにクマに預け、自身はもう一人の陽介と相対する。

もう一人の陽介が叫ぶ。
その姿は、もう闇に呑まれて見えない。

「そうだ！　俺は俺だ！
もうお前なんかじゃない！！」

闇が膨張する。

「我は影…真なる我……」

形作られた闇は、四つん這いになった大きな化け物の背に乗ったような形で同化した、のっぺりとした顔の人型となった。
黒い体の中で、首に巻いた赤いマフラーと山吹色の手袋が存在を主張している。

「退屈なモノは全部ブッ壊す……
まずは…お前からだ！！
──”忘却の風”！！」

人型の腕が振るわれる。
その瞬間、全方位に突風が吹き荒れた。

「う、わ…っ！？」

体勢を大きく崩し、総司が声を上げる。
全身を殴りつけられたかのような衝撃。
雷を操るイザナギだが、風は苦手としている。
尻餅をついた彼を見て、陽介の影は嗤う。

「いつまで耐えられるかな？」

「……くっ」

ゴルフクラブを杖にして立ち上がる。

（なんども食らうのはヤバいな……）

全身に走る痛みに顔を顰める。

飛びそうになる意識を繋ぎ止め、集中する。

中空から目の前に降ってくる青く輝くカードに手を伸ばす。

「”ジオ”！」

イザナギが陽介の影に指を突きつけた。

そこに目掛け、小さな雷が落ちる。

「ギァッ！！」

陽介の影が大げさな叫びを上げて体勢を崩す。

互いの攻撃が弱点になっているらしい。

「もう一発だ、イザナギ！！」

命じられたイザナギがもう一度電撃を浴びせる。

それと同時に突っ込んだ総司は思い切り武器として持っていたゴルフクラブを叩きつけた。

「アグゥ……このぉ…ウゼぇ…ウゼえよお前！！

邪魔すんじゃねえ！！」

化け物の前足がなぎ払われる。

懐まで入り込んでいた総司は避けられずに吹き飛ばされ、積んである酒瓶のケースに叩きつけられ、ケースが崩れる。
何とかケースの下敷きにはならずにすんだものの、集中が切れてイザナギの姿が消えた。
もう一度呼び出そうと立ち上げる総司に、クマが叫ぶ。

「センセイ！！　防御するクマ！」

その声に、咄嗟にゴルフクラブを横に構えて衝撃に備える。
突風が吹き荒れたのは次の瞬間だった。
ケースは後方に飛んでいくが、身構えていたこともあり、総司自身は今度は体勢が崩れなくて済んだ。

「助かった、クマ！！　……来い、イザナギ！！」

再び呼び出されたイザナギが雷を落とす。
その一撃で、勝負はついた。
雷光が闇を剥がしていく。
剥がれた闇は、外で戦ったボールの時のように空気に溶けていき、残ったのはもう一人の陽介だけだった。
今まで暴れていたのが嘘のように大人しい。
その視線は戦っていた総司には向いていない。
ただ、陽介（自分自身）にだけ注がれている。
総司は、クマに預けていた陽介に駆け寄る。

「花村、起きろ」

軽く揺さぶると、うめき声を上げる陽介。
意識が戻りかけている。
それからすぐに陽介は目を覚ました。

「ヨースケ、だいじょぶ!?」
「あ、ああ……
一体…何が起きたんだ……？」

心配するクマに一つ頷くと、現状を確認するように辺りを見回した。
視線はある一点で止まる。
そこには陽介の影が……シャドウが、そこにいた。
途端に、陽介の表情が歪む。

「お前…お前は…
俺じゃ…ない……」
「あれはもともとヨースケの中に居たものクマ……」

再び否定しようとする言葉をクマが止める。

「ヨースケが認めなかったら……さっきみたいに”暴走”するしかないクマよ……」
「誰だって…似たようなもんなんだ……」
「それ、慰めのつもりか？」

呟くように言う総司の言葉に、陽介は苦笑する。

「ちくしょう……
ムズいな、自分と向き合うってさ……
分かってた……けど、みっともねーし、どーしようもなくて、認めたくなかった……」

立ち上がった陽介は、影と向かい合った。

二人の姿は鏡に映ったように同じだ。
違いといえば、瞳の色ぐらいだろうか。
陽介は茶色だが、影は金色の瞳をしている。

「お前は、俺で…俺は、お前か。
全部ひっくるめて、俺だって事だな」

認められた影は、安らいだ表情で小さく頷く。
影は光と共に姿を変えた。
赤いマフラーをなびかせた、小さく開いた穴のような目の上に髪留めのように手裏剣を貼り付けた人影だった。
先程までの暴走状態の面影があるが、もう影（シャドウ）ではなく人格（ペルソナ）だ。
ペルソナは、カードとなって陽介の中に染みこんでいく。

「ジライヤ、っていうのか。
これが俺の”ペルソナ”……」

そう、陽介は呟いた。
そしてへたり込む。
随分消耗が激しそうだ。

「あの時、聞こえた先輩の声……
あれも、先輩が心のどっかで押さえ込んでたモンなのかな……
はは……”ずっとウザいと思ってた”か……
これ以上ねーってくらい、盛大にフラれたぜ……
ったく…みっともねー……」

助け起こす総司に陽介は掴まる。
立ち上がっても足元がふらついて危なっかしいのでそのまま支える。

「お前がいてくれて、助かったよ……
ありがとな、瀬多。
怪我させて、悪かった」
「来る時にお前からもらった傷薬で直せる程度だ。
大丈夫」

そう返事をすると、陽介はホッとしたように息をつき、クマに向き直った。

「なあ、クマ……
もしかして先輩はここで、もう一人の自分に殺されたって事か？
さっき、俺に起きたみたいに……」
「多分そうだと思うクマ。
ココにいるシャドウも、元は人間から生まれたものクマ。
でも霧が晴れると、みんな暴走する……
さっきみたいに”意思のある強いシャドウ”を核に大きくなって、宿主を殺してしまうクマ」
「それが…町で霧が出た日にこっちで人が死ぬ原因なのか……」
「……」
「ヨースケ、だいぶ疲れてるクマね……
もともとこっちの世界は、人間にはちっとも快適じゃないクマ。
これ以上ココには何も無さそうだし、戻るクマよ」

黙りこむ二人をクマが促す。
確かに前回入った時よりかは若干マシではあるが、身体の重さを総司は感じていた。
もっとも、陽介の影と戦って身体を動かしたり殴られたりしたせいかもしれないとも思ったが。
三人は酒屋を出る。

声は、もう降ってはこなかった。

「なあ、クマ」

来た道を引き返している道中、陽介は先導するクマに声をかけた。

クマは歩みを止めないまま身体をひねって視線を向ける。

「お前、ここが現実だって言ってたよな。

さっきの商店街……

それに、前に見たあの妙な部屋……

あれは、死んだ二人がこっちへ入った後で、二人にとっての現実になったって事なのか？

つまり…二人が入ったせいで、あんな場所が出来たのか？」

「今まで無かったことだから、分からないけど……

ココで消えた人たちも、きっと、さっきのヨースケみたいになったクマね……

ココの霧は、時々晴れるクマ。

そうなると、シャドウたちは、ひどく暴れる……

クマ、怖くていつも隠れてるんだけど……

最初の時も、その次も、”人の気配”はその時に消えたクマ……」

「つまりだ……

先輩や山野アナは、こんなトコに放り込まれて、出られずにさまよって……

そのうち体から、あのシャドウってのが出て、そいつが霧が晴れた時に暴れ出して、命を……

そういう事なんだな？

なら俺も、ここの霧が晴れるまで居たら、ずっとヤバい目に遭ってたって事か？」

クマは頷く。

「間違いないと思うクマ。
それに、さっきはセンセイや、クマも側に居たから……」
「くそっ…！
先輩達、たった一人でこんな場所に……
なのに、誰も…先輩達を……」
「ヨースケ……」

クマが沈痛な面持ちで陽介を見上げる。
いつの間にか広場まで戻ってきていた。
スタジオに降り立ったクマは、何かに気付いたように、振り向いた。

「二人とも、ココが晴れた日に消えたけど、それまではシャドウに襲われなかったクマ。
なのにボクら、さっきは襲われたクマ。
シャドウ達、すごく警戒してた……
探索してるボクらを敵と見なしてるのかも……
キケンだけど…でも、ボクらなら、戦って救えるかも知れないクマ」
「俺らなら…この先また誰かが放り込まれても、その人を救えるって事か……！？
消えちまう前に……
俺自身が、さっき助けられたみたいに！」
「ああ、きっと」

振り返られた総司が頷くと、今まで暗かった陽介の顔が明るくなる。

「……とにかく、ここに人を入れてる犯人を捕まえて、やめさせるしかない。
そうか……ようやく、少しは状況が分かってきたぜ」

気合を入れる陽介。
そこに、クマが声をかけた。

「あ、あのさ……
逆にちょっと訊いていいクマ……？」

視線を向けると、首を…かしげるのは無理だったらしく身体を傾けているクマの姿があった。

「何？」
「シャドウが人から生まれるなら、クマは何から生まれたクマか……？」

総司が促すと、クマがそんなことを聞いてくる。

「お前、自分の生まれも知らねーのかよ！？
そんな事、俺らに分かるわけねーだろ」

陽介は呆れたような声を上げた。
自立歩行するカラッポのキグルミが何から生まれたか…だなんて、確かに総司や陽介に分かるようなことではない。
むしろ食事とか成長とかどうなっているのかぜひとも聞きたいところだ。

「この世界の事ならいくつか知ってる……
けど、自分の事は…分かんないクマ。

ちゅーか、今まで考えた事無かった……」
「まじかよ……
つか、そんなんじゃ、俺らが何訊いたってムダなはずだよな……」

ユラユラと身体を揺らすクマ。
考えに没頭しているようだ。
しばらく揺れている姿を眺めていると、クマは気持ち悪そうにお腹と口元を押さえた。

「……なんだかお腹がタプタプするクマ」
「お前中身なんてないじゃん。
何がタプタプしてんだよ」
「う…うぷ。
なんか、あふれ…そう……ク…マ……」

慌てたのは陽介だ。
勢いよく後ろに飛びのく。
さっきまでふらついていたのが嘘のようだ。

「え？　何!?　吐いちゃうわけ!?
てかお前、そのキグルミの口からどうやって吐くと……!」

陽介は急いで辺りを見回し、既にちゃっかり柱の後ろに避難していた総司に駆け寄る。
遠巻きに見守る中、倒れるクマ。
いつの間にかジッパーが外れていたのか転がっていく頭。
今度は中身があった。
粘性の、闇。

「シャドウか……！」

頭が外れ、周りが見えずにバタバタ手足を動かしているクマは逃げられない。
総司と陽介は柱の後ろから飛び出す。
武器を構えるが、襲ってくる様子はなく、総司は警戒しながらも近付く。
何かあっても反応できる位置で立ち止まると陽介に視線でクマを示す。
陽介はそれで総司の言いたい事が分かったようで、迂回しつつクマに近付いていく。
総司がシャドウを引きつけている間に背後からクマを回収する作戦だ。
シャドウは総司に向かってくる様子だが、やはり攻撃の意思はないらしい。
ゆっくりと這い寄り、足元まで来ると少しだけ盛り上がった。

「彼女を……」

シャドウが喋った。
粘性の闇が、何かを模る。
人間だ。
闇に半分溶け込んだような男の子と、その子供に抱きかかえられた菜々子位の年齢の女の子。
男の子は腕の中の女の子を総司に差し出す。
屈んで受け取ると、男の子は安心したように微笑んだ。
その透き通った青い瞳と目が合う。

「茜ちゃんを…お願い……」

そう言って、男の子は粘性の闇に沈んでいく。

「ちょっ……君は！？」

手を伸ばすが間に合わない。
男の子は闇に融け、闇はシャドウを倒した時のように消える。
残ったのは、総司の腕の中の女の子だ。
陽介も、頭を定位置に戻してもらったクマも呆然としている。

「クマから人間が生まれたクマ！？」
「あーもう！　ホントお前なんなんだよ！？」
「だから、自分でも分からんクマ！」

騒ぎ出す陽介とクマ。
それが煩かったのか、目を閉じていた女の子がむずがる。
二人は慌てて口を閉ざす。
そして慎重に覗き込んできた。

「ん…ぅ……？」

女の子の目が開く。
先程男の子が口にした茜という名前に相応しい、綺麗な茜色の瞳だ。

「だれ……？」
「俺は瀬多総司。君の名前は茜で合ってる？」
「…うん。ありさと、あかね」

女の子…茜は総司に答える。

「どうしてここにいるか、分かる？」

辺りを見回した茜は、その質問には首を横に振る。

「……このままここに置いとくわけには行かないな。霧が晴れるとシャドウに襲われるだろうし、それでなくてもここに長いことといたら具合が悪くなる。クマ、この子は人間…だよな？シャドウじゃなくて」

抱え上げながら総司が問うと、クマは頷く。

「その子の気配は間違いなく人間クマよ」

「分かった。じゃあ出口、頼む」

「オーッス！　リョウカイだクマー！」

クマが足で床を突くと、前のように縦に積み上がったテレビが現れる。

「これからクマは、ココで、キミ達が来るのを待ってるクマよ。だからキミたちは、必ず同じ場所から入るクマ」

「ジュネスのテレビから、って事か」

「違うとこから入ると、違うとこに出ちゃうクマ。もしそれが、クマの行けない場所だったらどうしようもないクマからね。アカネチャンもまた来て欲しいクマ。次までに眼鏡用意しとくクマ！」

見送るクマを背後にテレビに飛び込む。

初めて経験する茜は自身を抱える総司にしがみついた。

白い光、そして。

抜けるとそこは現実だ。

／＊／

「……！！
あ……っ」

テレビから放り出された三人を出迎えたのは、千枝の泣きそうな声だった。
いや、泣きそうというのは正しくない。
すでに泣いた跡で顔がすごいことになっている。

「か…帰っでぎだぁ……！！」
「あ、里中？
うっわ、どうしたんだよ、その顔？」

手に持ったロープの束を投げ付ける千枝。
それは陽介の顔にジャストミート。
見事にひっくり返る。

「どうした、じゃないよ！
ほんっとバカ！　最悪！！
もう信じらんない！
アンタら、サイッテー！
ロープ、切れちゃうし……
どうしていいか、分かんないし……
心配…したんだか…ら……？」

ヤケクソみたいに泣きだして喚いていた千枝が固まる。
総司に抱っこされた茜と目があったからだ。

「……これ、なに？」

呆然とした声で聞いてくる。

「あっちで保護した。
警察に連れて行こうと思うんだけど」
「あ、うん……そうだね……案内するよ……」

驚きすぎて反対に落ち着いてしまった千枝が頷く。

「頼む。
……花村、大丈夫か？　警察には俺達で行くから、お前は今日はもう帰って寝た方がいい」
「あー…すまねえ。確かについてくのは無理そうだわ」

倒れた格好のまま、陽介は手をひらひらと振る。

「じゃあ、行くか」
「あ！　てかちょっと待って！！
その子のその格好じゃこっちが捕まっちゃうよ！！」

言われて、総司は腕の中の茜を見る。
おろされた、少々クセッ毛の長めの髪。
首にひっかかっている赤い携帯プレイヤー。
大事そうに抱えた茶色の革張りの本。
そして彼女が纏う、彼女の体には大きい白い襦袢。

それだけ、だった。

今までドタバタしていて気付かなかった。
もしかしたら気付いていて目を逸らしていたのかもしれない。
襦袢は大きいせいで半ばはだけ、色もあってシーツを纏っているだけにも見える。
下着すら身につけていないようだ。
確かにこのまま町を歩けば警察に行くまでもなく御用になるだろう。
黙ったまま総司は茜を千枝に預ける。
幸い、ここは大型スーパー。
衣料品のフロアに子供服のコーナーもある筈だ。
テレビの脇に放置していた通学鞄から財布を取り出し、彼女に放る。

「じゃあちょっと待ってて」
「あ、俺は一旦花村を従業員の控え室かどっか休めるとこまで送ってくる。
ジュネスの入り口で落ち合おう」
「りょーかい」

そう言って、千枝は茜を連れてエレベーターの方へ走っていく。
総司はひとつ溜め息をつくと、休めるところへ連れて行くべく、陽介を引っ張り起こした。
陽介の説明通りにバックヤードにある従業員の休憩室に彼を送った後、真っ直ぐに入り口に行ったが、まだ千枝達は来ていなかった。
時間がある程度かかることは予想できていたので、ガラスの壁に

もたれかかる。
振り続ける雨を見ていると、チン、という軽い音と共にエレベーターの扉が開き、中から千枝と茜が出てきた。
茜は可愛らしいミニスカートのワンピース姿になっていた。
おろしていたクセッ毛は、ふわっと髪をちらしたポニーテールにまとめられ、横髪にはヘアピンで？？？と描かれている。
今まで着ていた襦袢や本は千枝の持つ店のロゴの入った袋に入っているようだ。

「ごめんごめん。髪留めまで見繕ったら時間食っちゃった。
やっぱ可愛い子をコーディネートするのは楽しいね。
半分…とは言わないけど、三分の一くらいはこっちで出したよ。
全部揃えると結構な金額だし。
ほれ、財布」
「サンキュ」

財布を受け取って鞄に入れると、雨に濡れないように、総司は茜を抱え上げて傘を差す。
向かうのは稲羽警察署だ。
道中で、テレビの中であったことを話す。
陽介に配慮して多少ぼかしはしたが、クマと話して知ったこと、あちらがどうやらここ数件の殺人事件に関係あるらしいこと、犯人捜しをする約束をしたこと、そして茜と保護した経緯。
千枝は、特にシャドウやペルソナに関して胡散臭そうに聞いていたが、口は挟んでこなかった。
話よりも、むしろ覗き込んでニコリと笑えば笑い返してくる茜の方が気になっているらしい。
話半分といった様子で千枝は総司に抱えられた茜を構いながら歩く。
そうこうしている内に、目的地に到着した。

稲羽警察署…堂島の仕事場だ。
彼がいると話が早いと思ったのだが、外出しているらしい。
どうやら山野アナや早紀の事件で忙しいようだ。
見回すと、見たことのある若い刑事が入ってきた。
一度捜査中の堂島に会った事があるのだが、その時に堂島と共にいた刑事だ。
総司は記憶を探って、刑事の名前が足立だということを思い出し、声をかける。

「何？　忙しいんだけど」
「あの、この子迷子のようでして」
「迷子？　んー、おなまえいえるかなー？」

足立は抱きかかえられたままの茜に目線を合わせる。

「……ありさと…あかね……」
「あれ？　嫌われちゃったかなぁ？」

総司に抱きついてポツリと名前を告げる茜に、足立は頭をかいて苦笑する。
パソコンに近付くと、待合用のソファを示した。

「捜索願出されてるか調べるからちょっと座っててよ」

頷いて茜を下ろしてソファに座る。
茜は総司の隣に、千枝はその隣に腰を下ろす。

「そういえば茜ちゃん。どうして茜ちゃんはあんな所にいたの？」

手持ち無沙汰になった千枝は茜に問いかける。

「わかんない。起きたら、そうじくんがいたの」
「そうなんだ……　それまではどこにいたか、分かる？」

茜は首を横に振る。

「なんか、頭がごちゃごちゃするの。知ってるはずなのに、言おうとしたら出てこないってかんじ……わかる？」
「あー、何か分かるかも。ド忘れして公式出て来ないとかよくある」
「でも、わかることもあるよ。あたし、カギもってるの」

そう言って、ジュネスの袋から青い鍵を取り出して、総司に見せる。

千枝と話しているのに、なぜ自分にと思いつつ、総司は鍵を見る。
綺麗な装飾を施された群青色の鍵。
宝箱が似合いそうなアンティーク。
少なくとも家の鍵には見えない。

「これ、何の鍵？」

聞くと、茜は首を傾げる。

「あれ？　そうじくん、ワイルドじゃないの？」
「ワイルド？」
「ワイルドって……野生的のワイルド……？」

千枝は呟いて、総司の頭の先から爪先まで視線でチェックしていく。

「うーん。ワイルドって感じじゃないなぁ……

ほら、野生的って言ったらさぁ……」

なぜか会話は野生的の定義についてに取って代わる。

暫らく話をしていると、足立が戻ってきた。

「捜索願、出てなかったよ。

それでさ、今僕ら忙しいんだよね。皆動き回っててさ。

だから、君のとこで保護してて欲しいんだよ。

君のとこは、ほら、堂島さんいるし、同じ歳ぐらいの女の子もいるっしょ？」

「え……でも……」

「んじゃお願いね！

実は僕、忘れ物取りに戻ってきただけでさ。これ以上待たせると怒られちゃうよ」

堂島さんには言っておくからー、と言いながら足立は走り去る。

あまりにもな丸投げっぷりに暫らく呆然と見送った総司は視線を下に向ける。

総司を見上げる茜色の瞳と目が合った。

「あー…そういう事になったみたいなんだけど……

いいかな？」

「うん。

よろしくおねがいしますっ」

／＊／

警察署を出て千枝と別れた総司は、再び雨の中を茜を抱き上げて歩いていた。

茜は疲れたらしく眠っている。

重くはないが、疲れた身体ではきついものがある。
河川敷の休憩所のベンチで休む為に屋根の下に入ると、先客がいた。
向こうもこちらに気付き、顔を上げる。
今日は学校を休んだ雪子だった。
断って隣に座ると、総司は雪子の格好を見た。
着物だ。
桃色で、白の梅の花の模様のついた着物は華美ではないが、雪子によく似合っていた。

「あ…この格好？　驚いた？
家のお使いだったから……
えっと……この町とか、学校には、もう慣れた？」
「まあまあ、かな」

簡潔にそう答える。
正直、慣れたとは言い難いので濁した言い方だったが、それでも雪子はよかった、と微笑んでくれた。

「知らない場所に転校してくるって、大変なんだろうね。
私は、この町から出た事無いから、転校ってどんな気分か、分からないけど……
あ、えっと…私、いつも帰り早いし……」
「旅館手伝ってるんだっけ。
今日休んだのも？」
「あ、うん。そうなの。
ウチの旅館、私がいないと全然ダメだから。
今日もこれから帰ったら板長と明日の打ち合わせしなきゃならないし。
そうだ……千枝とかとは、どう？」

少し考え、仲良くやってると答える。
今日はすごく心配させてしまった。
どうでもいいと思っていたら、あそこまで心配してくれないだろう。
そして茜の事も。
世話を焼いてくれて感謝していた。
よかった、と言う雪子の顔は先程の同じ台詞より明るい。

「千枝ってね、すごく頼りになるの。私、いつも引っ張ってもらってる。
去年も同じクラスでね、一緒にサボって遊んだりしたな……
そう言えば、その子は？　妹さん？」
「いや、えーと…迷子みたいで。
うちで預かることになったんだ。
堂島さん、刑事だからちょうどいい、って」
「そうなんだ……かわいい子だね。
瀬多君も早く帰ったほうがいいよ。雨で濡れちゃうと、その子風邪ひいちゃうかもしれないし。
あたしも、そろそろ帰らないと……」

雪子はそう言って立ち上がり、脇に立てかけてあった傘を広げた。
つられて総司も立ち上がる。
休憩できたおかげで、腕の疲れも大分とれた。
これなら後は休憩なしでも家まで茜を抱えていけるだろう。

「……えと、また学校でね」
「ああ、じゃあな」

／＊／

「ただいまー」

玄関を開けて声をかけると、奥からおかえり、と幼い声が聞こえる。

台所を覗くと菜々子は惣菜を皿に取り分けていた。

玄関で茜を抱えたまま何とか傘を閉じようと格闘していたら彼女が起きてしまったので、手をひいて台所に入る。

「……？　その子、だれ？」

菜々子が気がついて箸を止めて首をかしげた。

「有里茜ちゃんって言うんだって。家がどこか分からなくて、うちで預かることになったんだ」

「まいご？」

「んー、そんな感じ…なのかな？」

「ふぅん。おうち、見つかるといいね。わたし、菜々子」

菜々子がにこりと笑って自己紹介すると、茜もにこりと笑顔を返す。

総司と繋いでいた手を放し、一歩前に出る。

「あたしはあかねだよ。よろしくね！　ななちゃん、ってよんでいい？」

「うん！　わたしはあかねちゃんってよぶね」

お互い自己紹介しあうのを横目で見つつ、総司はキッチンに置かれたテーブルに目を向けた。

今日の夕飯らしい惣菜がトレイから三枚の皿に途中まで分けられ

ている。
戸棚から、同じ柄の皿をもう一枚取り出した。

しばらくして。
食卓の上には惣菜が取り分けられた皿と、カップ麺。
大きめのトレイに入った惣菜も分けてしまえば少なくなってしまった故のメニューだ。
堂島家では目玉焼きなどの簡単な料理を菜々子が朝食に出してくれるが、学校での昼食は売店のパンで、夕飯は大抵惣菜かインスタントになる。
総司も一応作れないことはないが、家庭科で習ったというレベルの話で、パンに飽きるか材料があれば弁当を作らせて貰おうかなと考えている程度だ。

「お父さん、おそいな……」

テレビを見ながらも、集中しきれてないようで、菜々子は皿に残った惣菜を突きながら呟く。
番組も、いつの間にかバラエティからニュースへと移っていた。
アナウンサーが挨拶をし、ニュースを読み上げ始める。

『では、今夜のトップニュース…稲羽市で起きた異常殺人の続報です。
今朝7時頃、稲羽市の住宅街で、地元高校の3年生、小西早紀さんが遺体で見つかった事件……
警察は、遺体の状況が極めて似ている事や、被害者が遺体発見者であった事などから、先の山野アナの事件から続く連続殺人の可能性もあると見て……』

「またジケンだね……
またお父さん、かえってこなくなる」
「お父さん、心配だね」
「うん……
お父さんけいじだから、いそがしいのは、しょうがないよね」
総司が声をかけると、菜々子は小さく頷く。
「ねえ、ななちゃん。おふろわいたらいっしょに入ろ？
せなかながしてあげるよ」
茜が言うと、分かってはいても寂しい様子を見せていた菜々子は伏せていた顔を上げて明るい表情になる。
母親がおらず、父親も忙しい。
総司が来るまで家では殆ど一人だった菜々子はもちろん誰かと入浴する機会などなかった。
嬉しそうに頷く。
「うん！　アヒルさんもうかべよう！」
「アヒルさん、いいね！　……あ」
『……鮫川の上流に軒を構える、地元髄一の歴史をもつ高級温泉宿”天城屋旅館”
源泉かけ流しのラドン泉の露天風呂を備え、遠方からのリピーターも覆い高級温泉旅館だ』
お風呂の話をしていたから温泉という言葉に惹かれたのだろうか、ナレーターの台詞と共にテレビに映し出された温泉宿に茜が反応する。
画面の向こうには落ち着いた和の建物に、そこに佇む和服姿の雪

子。

今日の帰りに総司が会った時に着ていた、あの着物だ。

『えー、事件後、女将が一線を退き、今はこちら、一人娘の雪子さんが代わりを務めています。

言ってみれば”現役女子高生女将”…といった所でしょうか……

何ともこう、惹かれる響きです。

お話うかがってみましょう……すみません！』

『…え？

私……私ですか？』

『女子高生で女将、という事ですが』

『いえあの、私は代役で……』

『でも、跡継ぐわけでしょ？

て言うか和服色っぽいね、男性客多いでしょ？』

どんどん下世話な話題になってくる。

声の調子も下心ありありな口調で不愉快になってくる。

画面越しに見ている総司でもそう思うのだから、それを向けられた雪子は尚更だろう。

顔を伏せて、今にも逃げたそうにしている。

「……つまんない」

菜々子が呟く。

まったくだった。

菜々子の台詞に総司は心の中で頷くが、茜はじっと画面を注視している。

「どうした？」

総司が声をかけると、はっとした様子で顔を上げ、首をかしげた。

「んー、なんでもない。かんちがいかも。
おさら、あらわなきゃね」
「そうだね、皆でやろう」

堂島家では夕食はテレビを見ながら畳の居間で摂るが、朝食は板張りのキッチンのテーブルで食べる。
居間とキッチンの間に壁などもなく、三人並んでも狭さは感じない。
全員で食器を運び、洗う人、濯ぐ人、拭いて仕舞う人と役割を分担して片付ける。

「みんなでやると、早いね」

そう言って、菜々子は笑った。

／＊／

外が雨なのを確認して、カーテンを閉める。
もうすぐ日が変わる。
０時前のニュースはすでに終盤に入っていた。

『今日のニュースにもありました稲羽市ですが、今年も頻繁に濃霧が観測されています。
実はこれは、ここ数年みられるようになった異常気象で、原因はよく分かっていません。
周辺にお住まいの方はご注意ください。
今日は、稲羽市の事件について時間を延長してお伝えしました…
…間もなく午前０時です』

私の王子様

■4／16

気がつけば総司は車のシートに深く腰をかけ、そこに存在していた。
色を除けば、テレビで見たようなリムジン。
内装は青い。
深い青は神秘的で、不思議と落ち着く感じがする。
テーブルを挟んだ正面のシートには、妙に長い鼻の老人が目をぎょろつかせていた。

会ったことがある。
同じように、同じ場所で。
それは、稲羽に来る時の、電車の中で見た夢の中。
その時、老人は総司が”契約”を交わすことを予見した。
名前も、覚えている。
老人の名は、イゴール。
その隣に控え、総司を興味深そうに見つめる銀髪の女性はマーガレット。
総司の意識が自分たちに向いたのに気付いたらしいイゴールは一呼吸置くと、その口から嗄れた声を出した。

「ようこそ、”ベルベットルーム”へ。
ご心配めさるな。現実の貴方は眠りについていらっしゃる……
私が夢の中にて、お呼び立てしたのでございます」
「ここは、何かの形で”契約”を果たされた方のみが訪れる部屋……
貴方は日常の中で無意識に目覚めを促され、内なる声の導く定めを選びとった……

そして見事…”力”を覚醒されたのです」

イゴールが口上を述べ、マーガレットが引き継ぐ。

「これをお持ちなさい」

イゴールが指を振るうと、総司の目の前に青い鍵が降ってくる。
それを手に取り、視線を落とす。
アンティークの、宝箱が似合いそうな青い鍵。

「今宵から貴方は、この”ベルベットルーム”のお客人だ。
貴方は”力”を磨くべき運命にあり、必ずや、私共の手助けが必要となるでしょう。
貴方が支払うべき代価は1つ……
”契約”に従い、ご自身の選択に相応の責任を持って頂く事です」

その言葉は、自然に総司に溶けこんでくる。
気がつくと、分かったと頷いていた。
その返事に、結構、とイゴールも頷く。

「貴方が手に入れられた”ペルソナ”……
それは、貴方が貴方の外側の事物と向き合った時、表に現れ出る”人格”。
様々な困難と相対するため自らを鎧う、”覚悟の仮面”…とでも申しましょうか。
しかも、貴方は他者とは少々異なる、特別な力をお持ちです。
貴方の様なペルソナ能力を、我らは”ワイルド”…そう呼んでおります」
「……！
ワイルド……」

「そうです。
からっぽに過ぎないが、無限の可能性も宿る。
……言わば、数字のゼロのようなもの。
ペルソナ能力とは”心”を制御する力……
”心”とは、”絆”によって満ちるもの。
他者と関わり、絆を育み、貴方だけの”コミュニティ”を築かれるが宜しい。
”コミュニティ”の力こそが、”ペルソナ能力”を伸ばしてゆくのです」
「コミュニティは、単にペルソナを強くするためのものではありません。
ひいてはそれは、お客様を真実の光で照らす輝かしい道標ともなってゆくでしょう」

イゴールの、ごきげんようという言葉と共に、意識が浮上する。
青い色は白へと代わり、白は朝日の光だと認識する。
手に触れた硬質のものを、布団から引き出して、カーテン越しの光に翳す。
光に照らされ、青い鍵が総司の顔に影を落とした。

／＊／

「やっぱり、そうじくんはワイルドだったんだね」

朝食とその片付けが終わり、歯を磨きに席を立った茜を追いかけて青い鍵を見せると、そう彼女は言った。

「茜ちゃんも……？」
「うん。体はおぼえてないけど、心がおぼえてる。
同じだからかな？　…そうじくんのこと、すぐに分かったよ」

茜は、青い鍵を差し出していた総司の手に、手を重ねる。
水仕事をした後特有の、しっとりとした手触り。
赤い瞳が、真っ直ぐに総司を見つめる。

「そうじくんは、これからふりかかるくなんにたいこうするために”力”を手に入れた。
あたしは、そのお手つだいをするよ」
「振りかかる苦難……？
何か、知っているのか？」

何かを知っているような、気付いているような口ぶりに聞いてみるが、彼女は首を横に振る。

「知ってるのはそうじくんだよ。
体は分からなくても、心が、たましいが気づいたから、その”力”は”ペルソナ”として”かくせい”したの。
ペルソナつかいにはね、自分の中の死を見つめて、せっきょくてきにかかわろうとするものだけがなれるんだよ」

茜のいう事に、総司は覚えがあった。
あの丸いシャドウが襲って来た時。
確かに、”死”を感じた。
そして、それを跳ね除ける為に手を伸ばしたのだ。
それならば。

「……」

総司は茜を見つめ返す。
それならば、この少女も死を感じたことがあるのだろうか。

小学生の菜々子と同じ年頃の、この少女も。
それは、あまり嬉しくない想像だった。

「あたしは、答えをわすれちゃった。
でもね、そうじくんといたら思い出せる気がするの」

そんな事を感じさせない、でも少し寂しそうな微笑みで茜は言う。

「だから、てつだうかわりに、そばにいさせて?」
「……ああ、かまわない」

そんなことを言われて、断れるはずがない。
総司が頷くと、茜は満面の笑顔になる。

「ありがと!!」

やはり、茜には寂しそうな微笑みより、そんな笑顔が似合うと総司は思う。
茜との間に、ほのかな絆の芽生えを感じる。
心が近づいたのと同時に感じる、心の力の高まり。

「……!
これは……」
「これが、コミュニティだよ。
心がちかづくたびに、きずながふかまるたびに、あたしたちはつよくなれる」

総司と茜は、同じ物を見ていた。
それは脳裏に浮かぶ、タロットカード。
総司はイゴールの言葉を思い出す。

心を御する力。
絆によって満ちるもの。
これが、そうらしい。

？？？…宇宙。
それが有里茜だった。

そして。
同じナンバー、同じ意味を持つ、しかし異なる名称のアルカナ。

？？？…世界。
それが瀬多総司だった。

「よろしくね、”せかい（ワールド）”」

「ああ、よろしく、”宇宙（ユニバース）”」

／＊／

校門前で陽介と会って共に登校し、ホームルームが始まるまでの一時を今回の件を話して過ごす。
もちろん声はひそめているが、周りも話す内容と言えば事件の事ばかりなのであまり気にする者もいないようだ。
昨夜のマヨナカテレビには、白い靄の中でひとり佇む人影が映った。
何か分かるかも、と手をテレビに入れてみたのだが、映像は途切れてしまい結局誰だかは分からなかった。
陽介の方でも同様だったようだ。

「とにかく放課後、様子を見に行こう。
クマから何か聞けるかも知れないし」
「だな。
それと…実は昨日さ、俺んちのテレビで試したら、頭突っ込めたんだよ、お前みたいに」
「……！　もしかして、ペルソナがきっかけ……？」
「だと思う。
もしかすると、事件を解決する為に、俺たちが授かったもんかも知れないよな」

そんな事を話していると、突然大きな音が教室内に響き渡った。
皆が首をすくめ、恐る恐る音のした方を見やる。
全開の教室の扉、そこに立つ千枝。
今の凄まじい音は千枝が扉を思い切り開けた音だったらしい。
しばらくシンと教室は静まり返るが、すぐに喧騒は戻ってくる。

「ねえ！　雪子、まだ来てない？」
「え、あ、天城？
さぁ…まだ見てないけど」

突進するように駆け寄ってくる千枝に陽介は半分腰が引けたように半歩下がるが、質問には何とか答える。
だが、うろたえたような様子の千枝はそれに気付いていないようだ。

「ウソ…どうしよう……
ねえ…昨日言ってたよね？
その…マヨナカテレビに映った人は”向こう側”で……その……殺される、ってヤツ」
「ああ、おそらく今ちょうどその話してさ、後で確かめに行こう

かって……」
「昨日、映ってたの…雪子だと思う。
あの着物、旅館でよく着てるのと似てるし、この前、インタビュー受けたときも着てた」

ふいに、昨日雨宿りした時に会った雪子を総司は思い出した。
千枝の言っているインタビューは昨日放映されたニュースのものだろう。

「心配だったから夜中にメールしたんだけど返事こなくて…
でも、夕方頃にかけた時は、今日は学校来るって言ってたから…
あ、あたし……」
「分かったから、落ち着けって。
で、メールの返事はまだ無いのか？」
「うん……」
「メールに気付いていないのかも。電話はしてみた？
とにかく先に天城の無事を確かめた方がいい」

総司の言葉に頷いて、千枝はケータイのボタンを押す。
ケータイを耳に当て、ジリジリとコール音が変わるのを待つ。

「どうしよ…留守電になってる……
で、出ないよ……」
「マジかよ……
じゃあまさか、天城はあの中に……？」
「や、やめてよ！
きっと、他に何か、用事とか……」
「旅館は？
手伝いしてたらケータイ出れないんじゃないか？」

用事と聞いて、昨日の会話を思い出して総司が口を挟む。

「手伝いって…学校休んでか？」

「昨日、天城休んでただろ？
帰りに会ったんだけど、旅館の手伝いしてたって言ってたぞ」

「そうなん？」

「と、とにかく、かけてみる。
えっと…天城屋旅館は……」

もう一度、千枝がケータイを操作する。
アドレス帳を呼び出し、再び発信して耳に当てる。

「雪子…お願い……」

数秒後、繋がったのか千枝の体がピクリ、とはねる。
次の瞬間、表情が和らぐのを見て、総司と陽介は目的の人物が電話口に出たのを悟った。
やはり相手は雪子だったようで、千枝は二～三言話して通話を終える。

「よかった、雪子、いたよ～。
急に団体さんが入って、手伝わなきゃいけなくなったって。
あ～そう言や今までも、年に1回くらいは、こゆ事あったっけね～。
明日もずっと旅館のほうにいるって」

そう殆ど半泣きの体で報告した後、陽介をジト目で見る。

「……って、花村～！
要らない心配しちゃったじゃん！

てか、全然無事じゃん！
”まさか、天城はあの中に…？”とかってさ！
まったく……」
「わ、悪かったって……
けど俺ら、”マヨナカテレビ”に映るのは”あっち側”に居る人だって思ってたんだ。
だってそうだろ、テレビの中に居るからテレビに映っちまう…いかにもありそうじゃん？
でも、天城はちゃんと現実にいる。
どういう事か、確かめた方がいいかもな」

本鈴が鳴り、教室に教師が入ってくる。
三人は放課後ジュネスに行くことを約束してそれぞれの席に戻っていった。

／＊／

ページをめくる。
そこに描かれているのは青い帽子をかぶった、愛嬌のある顔の雪だるま。
ジャックフロスト。
ページをめくる。
そこに描かれているのは額に角を持つ白い馬。
ユニコーン。
その本には妖精や神……伝説に伝えられてきた存在の数々がが描かれているのだが、内容は節操がなくギリシャ神話の英雄がいたと思えばソロモン王の魔人がいたりする。
それぞれにタロットカードの大アルカナが割り振られていて、開いた左側の奇数ページには名前と挿絵に簡単な伝説の解説、右側の偶数ページには棒グラフの様なものと何かの一覧表が書かれている。

並びはアルカナ順になっているようで、大アルカナの中でゼロを割り当てられている”愚者”から始まり”魔術師”、”女教皇”と続いて”永劫”で終わっている。

因みに最後の”永劫”の前には”審判”があり、”世界”と”宇宙”が同じアルカナなのと同じように、”永劫”と”審判”は同じ意味を持っている。

本来はアルカナ順に並んでいる以上、その後に”世界（宇宙）”が来るはずなのだが、そのページは存在していなかった。

だが、法則性に規則正しく記されたその本は辞典と読んでいいだろう。

あるいは全書、と。

中身の言語は日本語なものの、全体的に色褪せた紙と皮で装丁されたその本はアンティークを思わせた。

そんな変わった茶色の本のページを小さな手の平が繰り、あるページで栞を挟んだ。

栞にはサンダルウッドのオイルが染み込ませてあるのか、香のような匂いがうっすらと漂う。

「んー」

本を繰り、ところどころに付箋を貼りながら茜は呟く。

「よべなくはないと思うけど…あんていしなさそう……
水でっぽうじゃダメかな、やっぱり」

手で拳銃の形を作り、自身のこめかみに当てる。

首を傾げて、手を下ろす。

「まあ、今はほりゅうかな」

そう言って、茜は立ち上がった。
丁度、ガラガラと玄関が開く音がする。

「おかえり、ななちゃん」
「ただいま！」

出迎えると、学校から帰宅してきた菜々子が元気良く答える。
今までは誰もいない家への帰宅ばかりだったので、その受け答えが新鮮だったらしく、クスクスと笑う。

「学校終わるの早かったんだね」

時計の短針は１２を指した後、まだ幾ばくかも進んでいない。
茜が言うと、菜々子はカレンダーを指差した。
４月１６日、土曜日。

「土よう日はね、半日じゅぎょうなの」
「なるほど。
ね、ちょっとかいたいものがあるんだ。
おみせ、あんないしてほしいの。
ついでにお外でごはんたべない？」
「いいよ！
ジュネスいこ、ジュネス！」
「ジュネス？」

固有名詞に茜は首を傾げるが、すぐに昨日のスーパーの事だと気付き、一つ頷く。
もしかしたら帰ってくるかもしれない総司宛に出かける事を茜が書き置きする間に、菜々子はランドセルを部屋に置いてすぐ戻ってきて、茜と手を繋ぐ。

えへへ、と照れたように笑う菜々子に、茜も微笑む。
離れてしまわないように握り返して家を出た。

／＊／

日没間際に総司が堂島宅に戻ると、すでに玄関を開ける前からいい匂いが漂ってきているのに気がついた。
放課後、陽介らとジュネスの家電製品売り場に行った総司だったが、今回は人目があったので、結局テレビの中に入ることは出来なかった。
アナログ放送からデジタル放送への移行もあり、エコポイントは終わっているもののセールともなれば普段閑古鳥のなく家電フロアにも客はくるようだ。
何とかテレビ越しにクマと話をしたのだが、クマを呼ぶ為にこっそり入れた手を噛まれるというアクシデントに見舞われたにもかかわらず、現在テレビの中に入れられた人間はいないという情報を得られただけだった。
その疲れもあって、匂いに空腹を刺激される。

「ただいま」

居間に入ると、茜と菜々子がキッチンから机に皿を運んでいるところだった。
どれも出来たてのようで湯気が立ち、既製品の惣菜とは明らかに違う。

「これ…どうしたんだ？」
「あ、おかえり！
あのね、あかねちゃんが作ったの！
あかねちゃん、すごいんだよ」

総司の質問に、興奮気味に菜々子が言う。
振り返ると、テレて少し顔の赤くなった茜と目が合った。

「”そのとき”になれば、ちしきはとりだせるみたい。
ななちゃんにも、手つだってもらったの」
「へぇ。すごいね、二人とも」
「えへへっ」

菜々子は褒められて嬉しそうに笑う。
茜もまんざらではなさそうな様子で机に促す。
机には、凝ったものこそないが、主食に主菜副菜汁物といかにも夕飯らしい品揃えが展開される。

「夕ごはんは、あたしがつくるよ。
そうざいとか、インスタントばかりだと体にわるいからね」

／＊／

夜の交差点。
数日前からの雨は、明日からは晴れると予報されていたが、まだしばらくは止みそうにない。
パトカーが止まり警官が点在する中、堂島は黒い傘を差して佇んでいた。
そこにビニール傘を差した足立がドタバタと走ってくる。
歩幅が一定じゃないのは水溜りを避けようとしているからのようだ。
だが失敗して思い切り足を突っ込んでしまい、ズボンの裾に泥が跳ねて顔をしかめる。
堂島の目の前まで進んだ足立は髪を掻きながら、首と肩で傘が落

ちないように挟みつつ手帳のページを繰り、報告する。
しかし、その内容は芳しくはない。

「やっぱこれ以上は出ませんね。
犯人に直接つながる物証は無し……」
「まだ殺しと決まった訳じゃない」
「殺しですよ絶対！
あんな遺体、事故死な訳ないですって！」
「……まあな」

はしゃいだ声を上げる足立に、堂島は溜め息をつく。
だが、確かに事故死とは考えにくいことは確かだった。
警察でも死の状況を掴めないのに同じ格好の死体が二つ。
最初はよくある三角関係のもつれだと思われていた。

夫が不倫をし、その浮気相手が殺される。
よくある、三角関係のもつれだと。

しかし事件当時、妻である歌手の柊みすずは海外公演中。
通話記録もあり、アリバイは固かった。
そもそも愛人問題がメディアに出たのはみすず本人が会見で暴露したから。
これから殺そうという時に、わざわざ自分に疑いが向くようなことはしないだろうと彼女は容疑者候補から外された。
しかし、みすずの夫であり山野真由美の不倫相手であった生田目太郎にしても、警察がいくら調べても何も出てこなかった。
スキャンダルにより解雇された事で最近町に戻ってきた生田目だったが、事件当時はまだ中央に勤めており、市外の議員事務所に詰めていた。
もちろん、山野真由美の死んだ日も。

泊り込みで作業していたと裏も取れてる。
失踪前後に接触した形跡は全く無く、結局生田目も容疑者から外されていた。
それにこの事件で騒がれたせいで秘書をクビになった彼は、生き残った関係者の中では、むしろ一番の被害者だと言えた。

そして、発見された二人目の遺体。
山野真由美の遺体の第一発見者である小西早紀。

その遺体が逆さ吊りにされていた電柱を堂島は見上げる。
雨を遮っていた傘が動いたことで、堂島の顔に水滴が落ちる。

「口封じとしちゃおかしな話だ。
小西の死は1件目が世に出た後だし、それにあの遺体…隠すどころか見て欲しいって風だ。
他の繋がりって言や、ガイ者の山野が死の前に滞在した宿の娘と同じ高校…ってくらいか。
だが動機と全然絡まねえし、こんな人の少ない田舎じゃ、そんくらいの偶然はある」
「ですねぇ……
ニュースで見たっすよ、その辺」
「な…なにぃ？
宿の話、もう出てんのか？」

呆れた声を出す堂島に、足立は「ええ」とのんきに頷いてみせた。
そしてよくよく思い返してみると、確かに事件の報道の時に天城屋旅館の名が出ていたのを思い出す。
堂島の大きな溜め息が雨の音に混じった。

「……

ともあれ、今はガイ者まわりをしつこく洗うしかねえか……
……犯人…町の人間だな」
「おっ、出ましたね、刑事の勘！」

堂島の呟きに、足立ははしゃいだ声を上げる。
二人が組んでそう長い時間は経っていないが、しばしば堂島は確信的な事を言い、それは今の所外れたことはない。
不謹慎な声色に堂島は顔をしかめ、そして話していない事柄があったのを思い出した。
ジロリ、と半目になって足立を睨む。

「それと、お前に言っとかないとな。
……保護した子供を勝手にこっちに回すなよ。
何の為に託児所があると思ってるんだ」
「えー、だって連れてったり書類書いたりとかって大変じゃないっすかぁ。
なーんか嫌われたっぽくてついて来てくれそうにもなかったですし、代わりに書類とか報告してくれる人探そうにも、あれだけ入れ替わり立ち替わりだと難しいですし。
もしかして堂島さん、追い出しちゃったんですか？
あーんな小っちゃい女の子を？」

面倒なので押し付けたと堂々と言い、そのくせ責めてみせる足立に、堂島は大きく溜め息をついた。
さっきから溜め息ばかりだと思いつつも止められない。
足立の言い様だけではなく、昨夜の顛末を思い出したからだ。

「いや…昨日帰ってから少し話してな」

そう。

足立からその事を報告され、夜中になってしまったが一度帰ったのだ。
そして茜は起きていた。

「結論から言うと、家で保護することを了承した。
ただ言っとかないと、次から次へと迷子を家に放り込まれたんじゃ迷惑だからな」

適当な返事をする足立を余所に、堂島はもう一度溜め息をつく。

「……泣き落としって…卑怯だよなぁ……まったく……」

その呟きは、足立にも届かないまま雨の音にかき消されていった。

／＊／

ザ…ザザ……ザ……

乱れる画面。
電源の消された黒い画面に砂嵐が走り、次第に鮮明になる。
フリルがたっぷりの赤いドレスを来た、艶のある黒い腰までのストレートヘアの女性。
背後にあるのは西洋風の城。
少し小さめのテーマパークにありそうな感じの外観で、使われているレンガは塗装されておらず赤茶のままだ。

『こんばんはぁ！！』

そして、この第一声。

妙にテンションの高い女性がマイクに声を吹き込む。

『えぇっとぉ～、今日は私、天城雪子がナンパ！　逆ナンに挑戦してみたいと思いますっ！
題して…”ヤラセなし！　突撃☆逆ナン・雪子姫の白馬の王子様探し！！”！
もぅ、ちょ～ホンキぃ！！』

イメージ的にはここでテロップが入るのだろう。
女性は、カメラ目線で流し目を送る。
そのまま、思わせぶりにスカートを押さえる。

『見えないトコまで勝負使用……　は・あ・と！　みたいな、ね！！』

前かがみになって女性が胸を強調させると、カメラは自然とそこをアップに映し出す。

『もー、私用のホスト倶楽部をブッ建てるくらいの意気込みで……じゃ～あ！　行ってきまぁす！！』

カメラが引き、女性は背を向けて走っていく。
その後姿が城の中に消え、砂嵐が画面を覆い尽くし。
乱れる画面。

ザザザ……ザ…ザ……

■４／１７

「後は…瀬多だけか……」

タイムセール目当ての客も大分落ち着いた夕刻。
フードコートの椅子の一つに座った陽介が、すでにカラになったジュースの紙コップを弄りながら呟く。
そのテーブルの向かい側には千枝が座り、その隣では茜が陽介に奢ってもらったジュースを飲みながら足をプラプラとさせている。

「……なあ、茜ちゃん」
「だめ。あたしも行くのっ」

陽介の言葉を、茜は皆まで言わせずに切り捨てる。
すでに、この問答は片手では数え切れない回数にのぼっていた。
朝一番で集まった総司と陽介は、色々あって警察署を訪れたのだが、そこで前日の夕方から雪子が行方不明になった事を知った。
そして雪子と連絡がつかなくなったと駆けつけた千枝と共にテレビの中へと行く為に、各自準備をしてフードコートに集合となったのだが、そこに茜が自分も行くと言ってやってきたのだ。
すでに夕飯の準備も最後の仕上げを残すばかりとなってるという念の入れようである。
陽介がいくら危険だからと言っても聞いてはくれず、千枝は今にも一人で飛び出して行きそうなほど落ち着きがなく説得すらしようとしない。
ため息をついてると、丁度やってきた総司がテーブルに駆け寄ってくる。

「おまたせ。あれ、茜ちゃん?」
「あー、来た来た瀬多!
茜ちゃん止めてくれよ! 付いて来るって言って聞いてくれないんだ」

待ち合わせに含まれてなかった茜までいることに総司は驚いたように声を上げ、現れた救世主に陽介は助けを求める。
しかし、救世主たる総司は陽介ではなく茜の味方だった。

「茜ちゃんもペルソナを使える。
置いていこうとしても自分でテレビの中に入れるから無理だな」
「うぇ！？
マジで！？」
「えっへへー」

肩をすくめて総司が言うと、陽介は驚きの声を上げて笑う茜を見る。
茜は椅子から飛び降りると、脇に立てかけてあった棒を両手で掴んだ。
棒は片方の端が網になっている。
どこかで見たことがあると思ったら、ラクロスで使うスティックだった。

「どうしたんだ？　それ」
「きがえかいなさいって、どうじまさんにお金もらったから、あまったぶんでかったの。
じゅーとーほーにいはんしない上にテキをころがしやすい、ばんのーぶきなんだよー」

得意げに武器を披露する茜に、総司と陽介の二人は乾いた笑みしか出せない。
彼らが警察署を訪れる事になった”色々”とは用意した武器による銃刀法違反による補導だったからだ。
堂島が丁度署に居なければ、二人の経歴に補導歴がついただろう。

「ま…まあ、その話は置いといて！
そろそろ人もまばらになって来たし、そろそろ行こうぜ」

苦し紛れに陽介が促し、ジリジリと待っていた千枝が勢い良く立ち上がる。

このメンバーの中で千枝だけがペルソナを持たず、テレビに自力で入ることが出来ない故に今まで我慢をしていたが、そうでなければとっくに一人で進んでいただろう。

警察はあてには出来ない。

このタイミングで行方不明になった雪子は、現在警察の見解では容疑者とまでは行かないものの重要参考人と見られていた。

足立から聞き出した話によると、天城屋の女将である雪子の母は殺された山野アナに接客態度などでひどい言葉を投げつけられ、それでノイローゼになって倒れたらしい。

それで雪子が女将代理として旅館に駆り出されていたのだ。

行方不明になったのは都合が悪い事があって隠れてるのではないかと警察では判断したらしく、足立から遠まわしに犯行を匂わす台詞を聞かなかったかと探りを入れられた。

なによりテレビの中に入れられてシャドウによって殺される、などと正直に話しても信じてもらえはしないだろう。

そんな事もあって、千枝は雪子を助けるのは自分だと普段にも増して意気込んでいるのだ。

／＊／

それぞれの決意を胸に、４人はテレビの世界へダイブする。

霧の中、彼らを出迎えたのは、頭を抱えて何やら悶える丸いキグルミ、クマだった。
自分自身について考えていたとは言うものの、すぐに思考が脱線してしまうようであまり進展はしてないらしい。
千枝が昨日テレビに誰か入って来たかを聞くと、クマはビックリした様子で頷く。

「なんと！
クマより鼻が利く子がいるクマ！？
お名前、何クマ？」
「お、お名前？　……千枝だけど。
それはいいから、その”誰か”の事教えてよ！」
「確かに昨日…キミらとお話したちょっと後くらいから、誰か居る感じがしてるクマ」

そして、広場から伸びる通路のうちの一つを指し示す。

「気配は、向こうの方からするクマ。
多分あっちクマ」
「あっちね……」
「今アカネチャンとチエチャンの分のメガネを……ってチエチャン！？」

体を探っていたクマが素っ頓狂な声を上げる。
方角を知った千枝がさっさと一人でかけ出してしまったのだ。

「里中！」

総司が呼び止めるが止まらない。
あっという間に千枝の姿は霧の中へと消える。

「あんにゃろ、突っ走りやがって！
急いで追っかけようぜ」
「ちょ、ちょ！　ちょっと待つクマ！
アカネチャン、このメガネかけるクマ。
霧の中が見通せるようになるクマよ」

ワタワタとクマはラメの入ったピンク色のフレームのメガネを取り出し、茜に渡す。
レンズとテンプルの接合部に小さな花のアクセントの入った、女の子らしい可愛いデザインの物だ。
メガネを茜がかけるのを確認し、クマの先導で通路を進む。
千枝はずいぶん先行しているようで、追いつけない。
白い霧に赤いものが混じり、スタジオの硬質な床がレンガへと代わり、西洋風の城が目の前に現れる。
マヨナカテレビに映った雪子の背後にあった城で間違いなさそうだ。

「うわー、おしろだー」

口を大きく開けて茜が感嘆の声を上げる。
赤みがかった霧の中にそびえ立つ城はテーマパークにありそうなデザインで、確かに不気味な雰囲気を醸し出しているのを除けば子供受けは良さそうな外観だ。

「あの真夜中の不思議な番組……
ホントに誰かが撮ってんじゃないんだな？
この城って、昨日出てきたのそのものなんだけど」
「何かの原因で、この世界の中が見えちゃってるのかも知れないクマね。

まだ色々と分からないけど、キミたちの話を聞く限りだと……
そのバングミっての、その子自身に原因があって生み出されてる
…って気がするクマ」
「天城自身が……あの映像を生み出してる？
だけど天城が”逆ナン”なんて言うかぁ？」
「”逆ナン”……？」

耳慣れない言葉にクマが首を傾げる。
それをスルーして陽介は閉ざされた城の入口をくぐっていく。

「”逆ナン”って何クマー！？」

／＊／

しばらく進み扉を開けると、そこは少しひらけた場所になっていた。
シャンデリアが下げられたホール。
その中にポツンと千枝は立っていた。

「あ、チエチャンみっけ！」
「無事か、里中！」

しかし、声をかけても反応しない千枝に陽介は首を傾げる。

「里中……？」

千枝の視線は中空を見つめている。
そこに降ってくる声。

――赤が似合うねって……

「!?
天城!?」

雪子の、声。
あの商店街のように雑多なものではないので、声の主はすぐに分かった。

――私、雪子って名前が嫌いだった。
雪なんて、冷たくて、すぐ溶けちゃう。
はかなくて、意味のないもの……
でも私にはピッタリよね……
旅館の跡継ぎって以外に価値の無い私には……
……だけど、千枝だけが言ってくれた。
雪子には赤が似合うねって。

「これ…天城の、心の声か?
確か、小西先輩の時も聞こえた……」
「そして多分、この場所は、ユキコって人の影響でこんな風になったクマ」
「雪子……」

――千枝だけが…私に意味をくれた……
千枝は、明るくて強くて、何でも出来て……
私にないものを全部持ってる。
私なんて……私なんて、千枝に比べたら……

「!」

千枝の体が揺れる。

――千枝は…私を守ってくれる……
何の価値も無い私を……
私……そんな資格なんて無いのに……
優しい千枝……

「雪子、あ、あたし……」
「優しい千枝…だってさ。
笑える」

千枝の声に、千枝の声がかぶった。
赤いビロードのカーテンの影から、もう一人千枝が出てくる。
金の瞳の千枝。
その瞳の色に覚えのある陽介が身構える。

「あれってまさか……！？」
「ヨースケと同じクマ！
抑圧された内面……それが制御を失って、シャドウが出たクマ！」

千枝の影は千枝にだけ視線を向ける。
千枝は怯んだように千枝の影の方に視線を彷徨わせる。
二人とも、総司達の存在に気付いてすらいないようだった。
もう一人の千枝がお腹を抱えて笑う。

「雪子が、あの雪子が！？
あたしに守られてるって！？
自分には何の価値も無いってさ！
ふ、ふふ、うふふ……
そうでなくちゃねぇ？」
「アンタ、な、何言ってんの？」

「雪子ってば美人で、色白で、女らしくて……
男子なんかいっつもチヤホヤしてる。
その雪子が、時々あたしを卑屈な目で見てくる……それが、たまんなく嬉しかった。
そうよ、雪子なんて、本当はあたしが居なきゃ何にも出来ない……
あたしの方が……あたしの方が……あたしの方が！
ずっと上じゃない！！」
「違う！
あ、あたし、そんなこと！」

もう一人の千枝と違って、千枝の顔は血の気が引いている。
言い合いは次第にヒートアップしていき、特に一度自身のシャドウと対面した陽介は危ないと感じて総司を見る。

「ど、どうする！？　あのままじゃヤバそうだぞ！」
「とりあえず、暴走すると危ない……里中を守るぞ」

駆け寄ると、その足音を聞いて千枝が振り返る。
その表情は恐怖に染まっていた。

「や…やだ、来ないで！　見ないでぇ！！」
「里中、落ち着け！」

踏み出す陽介に、首を振って千枝が叫ぶ。

「違う…違う、こんなのあたしじゃない！」
「バ、バカ！
それ以上、言うな！」

制止の声を遮って、もう一人が笑う。

「ふふ…そうだよねぇ。
一人じゃ何もできないのは、本当はあたし……
人としても女としても本当は勝ててない、どうしようもない、あたし……
でもあたしは、あの雪子に頼られてるの……
ふふ、だから雪子はトモダチ…手放せない……
雪子が大事……」
「そんなっ……あたしは、ちゃんと、雪子を……」
「うふふ…今までどおり、見ないフリであたしを抑えつけるんだ？
けど、ここでは違うよ。
いずれ”その時”が来たら、残るのは…あたし。
いいよね？
あたしも、アンタなんだから！」
「黙れ！！
アンタなんか……」
「だめだ、里中！」

陽介が制止するが、千枝は止まらない。
紡がれる、決定的な拒絶の言葉。

「アンタなんか、あたしじゃない！！」

黒い風が吹く。
その中心にいるのは金の瞳の千枝。

「うふふ、うふ、ふ、きゃーっはっはっは！！」

狂ったように笑い、黒い何かが千枝の影を包んでいく。
千枝の影が力を得たのとは対照的に、力を抜き取られたかのよう

にふらついた千枝を総司が抱きとめる。

「クマ！　里中を！！」
「リョーカイクマ！」

クマに預けて攻撃が当たらないように下がってもらう。

「我は影…真なる我……」

改めて総司が千枝の影と向きあうと、もう彼女は闇を纏い千枝の姿をしていなかった。
成熟した体に露出の多いボンデージの衣装を纏い、八十神高等学校の制服を着た女生徒達に担ぎ上げられた女王様の姿。
顔はマスクで覆われているが、その後ろからは地面に届くほど長く黒いストレートヘアが伸びている。
スタイルといい髪といい、その姿からは千枝が雪子を意識していることがハッキリと見て取れた。

「なぁにアンタら？
ホンモノさんを庇い立てする気？
だったら、痛い目見てもらっちゃうよ！」

千枝の影は高みから武器を構える総司達を見下ろして枝分かれした革の鞭を振るう。
固まっていた三人が散開すると、その間の床に鞭が叩きつけられて絨毯の毛が飛び散る。
後方に飛び下がった総司が武器を持っていない方の腕を伸ばす。
宙から降ってきた青く輝くカード。
それを握りつぶす。

「”ジオ”！」

呼び出されたイザナギが、総司の命に従って電撃を飛ばす。

「きゃはっ！　無駄無駄～！」

だが、あまり効いている様子はない。

鞭が振るわれ、電撃は散らされそのままイザナギの肩を薙ぐ。

バチン、という硬い音と共にイザナギの左肩の皮が弾け、総司のそれと同じ場所に血が滲む。

「ち、雷はあまり効果ないみたいだな」

「んならこれはどうだ！？」

呻いて左肩を押さえる総司の代わりに、今度は陽介が千枝の影に攻撃を仕掛ける。

総司の時と同じように宙から降ってくる青いカードに、武器代わりに持ってきたスパナを叩きつける。

カードは光となって砕け、陽介のペルソナ、ジライヤが召喚される。

「ペルソナ！　”ガル”！！」

漫画に出てくる忍者が印を組むようにジライヤが指を組むと、突風が吹き荒れる。

その突風に押されるように千枝の影の体勢が崩れた。

「効いてるクマ！！」

千枝を戦闘の余波から守りながら敵を観察していたクマが報告す

る。

「よっしゃ、もう一発っ」

陽介がジライヤに視線を送る。
ジライヤは頷き、もう一度印を組む。

「”緑の壁”！」
「”ガル”っ！」

ほぼ同時に発動する、千枝の影と陽介が呪文。
緑色の光が千枝の影を包み、その直後にジライヤの放った風が千枝の風に直撃する。
しかし、先程とは違い少しも堪えた様子がない。

「な、なんで……っ」
「耐性強化呪文クマ！
風から身を守る魔法クマよ！！」

慌てる陽介に、クマが相手の使った魔法の解説をする。
その慌てように千枝の影が哂う。

「キャハハ、ダサ、目がマジじゃん！
けど…まだまだこっからだよ！！」

千枝の影が鞭を横薙ぎに振り払った。
声高に呪文を唱える。

「泣き喚け！”マハジオ”！！」

その言葉と共に、千枝の影の周囲に電撃が降り注いだ。
離れているクマはともかく、総司・陽介・茜は範囲内。
離脱する間もなく電撃の雨に晒される。
電撃を扱うイザナギは電撃には耐性を持ち、更にコートの中に総司を隠す事でほぼ完全に防ぐ。
茜も少し顔をしかめる程度。
しかし、影だった時と同じように電撃に弱いジライヤには耐えることが出来なかった。

「うあっ！？」

集中が乱れてジライヤがその姿を保てずに消え、陽介が膝を付く。

「ヨウスケ！」
「く…っ、痺れ…て……！」

クマが叫び、陽介は何とか立ち上がろうとするが、痺れは全身に回り力が出ないようだ。
起き上がろうと床についた腕に力を込めるが肘を伸ばすことが出来ずに倒れこむ。
千枝の影が追い打ちをかけようと鞭を振り上げる。

「トドメよ！」

その鞭に走る雷撃の光。
だがそれが振り下ろされる事はなかった。

「てーいっ！！」

そんな掛け声と共に、千枝の影の背後に回り込んでいた茜が影を

支えていた女子生徒の足をラクロススティックで薙いだ。
足を取られた女子生徒が転ぶ。
その上に担ぎ上げていた他の生徒や女王様と共に。

「あー、もう！
アンタ達何やってんの！！　早く立てー！！」

床に尻餅をついてしまう格好になってしまった千枝の影が怒って倒れた女子生徒に鞭を振るう。
生徒達が慌てて千枝の影を抱え上げようとするのを横目に、転けさせた張本人の茜はウエストポーチのようにスカートに引っ掛けたブックホルダーから茶色い本を取り出した。
ペルソナの描かれた辞典を。

「えーと。
せいしんをしゅうちゅう。ペルソナを入れかえるようりょうでカードをぐげんか……」

先程見た総司と陽介の召喚を手本に、茜はブツブツと呟きながら手順を踏む。
茜の不完全な知識の中では、召喚には拳銃型の召喚器を使っていた。
それを自身に向けて轢鉄を引くことで死を強く意識し、死を回避するための力を呼び出すのだ。
死を感じることが出来れば召喚器を使わずとも召喚する事は可能だが、相当の集中力を必要とし、さらに力も不安定になってしまう。
この手順は、自身に向けて轢鉄を引くとまで直接的では無いものの、やはり死をイメージする為のものだ。
付箋の挟まれたページの1つを選び、開いて精神を集中させれば青く輝くカードが具現化される。

イラストは開かれたページに描かれているのと同じものだ。
そのカードを押しつぶすように本を勢い良く閉じる。
ペルソナとは”もう一人の自分”。
そのペルソナが描かれたカードを破壊することによって、死の体感とする。

「おいで、ピクシー……”ディア”！」

手順を踏んで呼び出されたペルソナは、小さな妖精ピクシー。
ピクシーは可愛い仕草でくるりと空中でターンして腕を陽介に振るう。
唱えられた呪文が陽介の傷を癒す。

「サンキュー、茜ちゃん！」

痺れまでは完全には取れないが、傷が目に見えて小さくなった陽介が礼を言って立ち上がった。
更に茜はピクシーを総司に向かわせる。
今度は総司に向けて腕を振るうと、先程の鞭による傷が大分塞がる。
少なくとも、もう新たに血は滲まない。
それを、ようやく体勢を立て直したシャドウ千枝が忌々しそうな目付きで見下ろした。

「何なのよ、アンタら…ホンモノさんなんて庇っちゃって……
そんな女よりアタシの方が、アタシの方が！アタシの方が！！
ずっと優れてるのに……！」

悔しそうな嫉妬の声。
それにクマの報告がかぶさる。

「センセイ！
相手の”緑の壁”の効果が切れたクマ！
仕掛けるなら今クマよ！！」
「分かった！
花村、　耐久力を下げる！　影を吹きとばせ！！」
「おう！」

総司が陽介に指示を出すと、陽介はそれに答えてもう一度自身のカードをスパナで破壊してジライヤを召喚する。
そして、ほぼ同時に魔法を放った。

「”ラクンダ”！」
「”ガル”！！」

突風が千枝の影を襲う。
風はもう一人の千枝が纏っていた闇を吹き飛ばし、長い黒髪も、成熟した体も、自身を担ぎ上げていた生徒達も失った女の子だけが後に残された。
茶髪のショートに、御世辞にもグラマーとは言えない体型の、金の瞳の千枝だけが。
千枝の影が元の姿に戻ったおかげか、意識を失ってクマに預けていた千枝が目を覚まして起き上がる。
少しふらついているが目立った外傷はない。

「里中、大丈夫か！？」

陽介が駆け寄り、千枝は陽介に視線を向ける。
だがその視線は陽介を通り越し、その向こうに立っていた静かに立ったままで悲しげに金の瞳を揺らしたもう一人の彼女に焦点が結

ばれた。

「何よ…急に黙っちゃって……
勝手な事ばっかり……」
「よせ、里中」

震える声で、それでも拒絶しようとする千枝を陽介がとめる。

「だ、だって……」
「ちゃんと分かってる。
あれが、里中の全てじゃないって」
「で、でも、あたし……」
「瀬多の言う通りだ。
……俺もあったんだ、同じような事。
だから分かるし……
その…誰だってさ、あるって、こういう一面……」

しばらく千枝は俯いたり、視線を彷徨わせていたが覚悟を決めたのか、もう一人を向きあう。
否定した瞬間、力を吸い取られたような感覚で意識は飛んでしまったが、そんな状態でも起きるまでの事は覚えていた。
流れこんできた、もう一人の…シャドウの心。

「アンタは…あたしの中にいたもう一人のあたし…って事ね……
ずっと見ない振りしてきた、どーしようもない、あたし……
でもあたしはアンタで、アンタはあたし、なんだよね……」

本当は分かってた。
親友と言いつつも、心のどこかで相手を卑屈な目で見てる自分がいて、心のどこかで相手を見下してる自分がいた。

もう一人の千枝が頷く。
影は人格へと姿を変え、カードとなって千枝の中に溶け込んでいく。
ペルソナとなった千枝のシャドウは、角のように一部が伸びたヘルメットを装着したライダースーツの女性の姿をしていた。
「アンタはあたし、あたしはアンタ……ホントにそうだね、トモエ……」
もう一人の自分の名前をつぶやき、それを見守っていた総司達の顔を見て千枝は俯く。
「あ…あたし……その、あんなだけど……
でも、雪子の事、好きなのはウソじゃないから……」
「バーカ。
そんなの、分かってるっつの」
笑いかける陽介にホッとした表情を見せた千枝だったが、不意に足をもつれさせて倒れそうになる。
今までちょっと離れて立っていた茜が駆け寄って支えようとするが、小さな体では支えきれる筈もなく。
一緒に倒れそうなところを反対側から総司が支えることで何とかこらえた。
「お、おい、里中！」
「へーキ…
ちょっと、疲れただけ……」
慌てる陽介に千枝は強がって言うが、どう見ても無理しているのが透けて見え、ため息をつく。

「へーキ、じゃねーだろどう見ても……
それに多分、お前……
俺たちと同じ”力”、使えるようになってるはずだ」
「え……？」

千枝は、思わずといった感じで自身の手の平を見る。
もう青いタロットカードはそこには無かったが、求めれば心（トモエ）は応えるだろうということはすぐに理解できた。

「なぁ、どうする？」
「……一度戻って立てなおそう」
「そうだな、里中を休ませないと」

心の中を確かめている間に、総司と陽介が引き返す方向に話を進め、千枝は気付いて慌てて割って入る。

「か、勝手に決めないでよ！
あたし、まだ…行けるんだから……」
「無理しちゃイヤクマ！」

両側から支えていた茜を総司から離れてよろけながらも一人で立とうとする千枝をクマが止め、陽介もそれに賛同する。

「別に、信じてない訳じゃねーよ。
ただ、俺らは天城を絶対助けなきゃなんない。
俺たちと同じ力があって、一緒に戦えるなら、回復しといてもらった方が心強いって事。
その為にも、一旦戻って、体勢を立て直すべきって言ってんだ」
「でも雪子はまだ、この中にいるんでしょ！？

あ、あたし…さっきのが雪子の本心なら、あたし…伝えなきゃいけない事がある。
あたし、雪子が思ってるほど強くない！
雪子が居てくれたから……
二人一緒だったから大丈夫だっただけで、ホントは……」
「……なら、それを伝えるためにも、まずキミが、元気になるクマ！
ユキチャンは普通の人クマ。
ココにいる影は、普通の人間は襲わない。
襲うのは、ココの霧が晴れる日クマ」

クマが千枝の手を取って言い聞かせるように説明する。

「……それまでは、天城は無事だって事だな？」
「まず、間違いないクマ」

陽介の質問に、クマはしっかりと頷く。
大丈夫だからと繰り返し言われ、ようやく少し落ち着いた千枝は自身の手に触れるクマの手を見た。
キグルミの手触りは滑らかで、さわり心地が良い。
それで、更に少し心が落ち着いた。

「確か…向こうで霧が出る日がこっちで霧が晴れるんだよね？」

数日前に茜を構いながら上の空で聞いていた話を思い出しながら尋ねると総司が頷く。

「ああ。一旦外に戻っても、それまでは……町に霧が出るまでは、天城は安全だろう」
「間違いない。
前の山野アナや先輩の時も、状況は同じ……

知ってるだろ。
二人とも、死体が発見されたのは霧の日だ」
「ここで…もう一人の自分に、殺されて……？
こないだ瀬多君が話してくれたトンデモ話、全部本当だったんだね……」
「ああ。
……霧が出るのは、大体雨の後だって話だったな」
「天気よほう、しばらくはれだって。
だから、だいじょうぶ」

昨日テレビで確認した週間天気予報を思い出して茜が言う。
それでもどうしても諦めきれない千枝は渋る。

「でも…だからって……
雪子は今一人で…怖い思いしてるのに……」
「だけど、俺らが無理してやられたら天城を助けるヤツがいなくなる。
絶対に失敗出来ないんだ。
……違うか？」

そう言われて、千枝は俯く。

「……」

千枝の影であったトモエの記憶は、もう千枝のものだ。
意識を失っていても、戦ったことは覚えている。
ペルソナが受けた傷とリンクして傷ついた総司。
電撃を受け、倒れたところにもう一撃振り下ろされそうになった陽介。
受ける攻撃が致命傷になる可能性は確実にあるのだ。

「一旦戻ろう、里中」
「……分かった」

総司の言葉を千枝は受け入れる。
そして全員に小さく頭を下げた。

「さっきは、ごめんね……
一人で、勝手に突っ走っちゃって……」

総司は少し微笑んで手を差し出す。
千枝はその手を取り、ようやく明るい笑みを浮かべた。

「なら、今度は一緒に行こう」
「……うんっ！」

／＊／

城の中に声が降る。

――もうすぐ王子様が私を迎えに来てくれます。
ふふ……
私はいつまでもお待ちしてます……
いつまでも、いつまでも……

――王子様、早く私を連れ去って！

どこか……
私の事なんか誰も知らない世界に……

城の中に声が降る。
自分を救い出してくれる”誰か”を求める霧の中のお姫様。

――いらっしゃいませ。
本日は天城屋旅館にお越し頂き誠にありがとうございます。
こちらがお部屋でございます。
何か御用がございましたらいつでもお申し付け下さい。

籠の中の鳥

■４／１８

中央通り商店街。
その名の通り中央道路につながる商店街の道は広く、交通の便も良い。
だが、茜が足を踏み入れたそこは中央道路を行き交う車の数とは裏腹に閑散としていた。
道の両端には相当数の店舗が立ち並んでいるが、その殆どは閉まったまま手入れされておらず、典型的なシャッター通りとなっていた。
閉店しました、と張り紙の貼られた自転車店や理容店。
店名が剥げて読み取れない店舗。
シャッターが閉められた電気店の窓には随分前の日付で”閉店セール開催中”と書かれている。
神社にも入ってみたが、人手がないのかあまり手入れは行き届いていないようだった。
そのせいか動物が入り込んでいるようで、物陰から林へと飛び込む影が見えた。

「あれ？　茜ちゃん？」

不意に掛けられた声に振り返ると、総司が鳥居の向こうに立っていた。
駆け寄ると、学生鞄と共に手に提げた紙袋が目に入る。

「かいもの？」
「ああ。里中の分の武器の買出し。

俺のと違って銃刀法に違反しない分、運搬は楽だな。補強してあるって言っても靴だから」

総司は紙袋のロゴを示す。

そこには”だいだら”と書かれていた。

「昨日の今日だから里中も本調子じゃないだろうし、再突入は明後日にしようと思う。

バックヤードの一室を借りれることになって武器とか置かせてもらってるから、その部屋に買い物した荷物をおいて、放課後……そうだな、16時くらいにジュネスのフードコートで待ち合わせでいいかな？」

「うんっ」

「ところで、茜ちゃんは散歩？」

「ううん。このしょうてんがいのおトウフ、おいしいってきいたから」

「えっと…丸久豆腐店かな？

来た道にあったから案内するよ」

そう言って、総司はかすかに笑みを浮かべて思い出したように学生鞄を開いた。

中から、神社の前にある惣菜大学と印字がしてある小さな紙袋を取り出す。

中身はコロッケだった。

「今買った所だから、まだ温かいよ。

特製コロッケが一番人気って聞いたけど、残念ながら売り切れてたからビフテキコロッケなんだけど」

総司が装備品を買った後も商店街を歩いていたのは買い食いの為

だったらしい。
ありがとう、と礼を言ってかぶりつく。
中の肉は筋張って固いが、その分噛みごたえがある。
自身もコロッケを口に入れながら、総司は茜を促した。
開店している店はシャッターを下ろしている店よりずっと少ないので、目的の店を探すのは簡単だった。

「そこが丸久豆腐店だね。
その向こうのがだいだら・。最後に・（テン）があるだろ？　あれ、”ぼっち”って読むんだって。
で、だいだらぼっち」

総司の示すように、看板を見ると確かに・が書かれている。
先程は小さくて気付かなかったが、総司が持っている紙袋にもだ。
金属細工の工房とのことだが、武器になるような物まで置いてあって何屋か一見では分からない。
隣の豆腐屋に入ると、白い割烹着を着て頭に三角巾をしたお婆さんが応対してくれる。
茜は絹ごしの豆腐を三丁選び、それをパックに詰めてもらった。
体の小さい菜々子と茜は半丁計算らしい。

「今日は湯豆腐？　冷奴？」
「ざんねんー。マーボードウフでしたっ！」
「そっか。それは楽しみだ」

／＊／

静かな部屋に、カチカチという時計の秒針が時を刻む音がする。
ふと総司が時計を確認すると、針は後数分で0時を指そうとしていた。

マヨナカテレビの事を知ってから、ついつい２３時を過ぎると時間を気にし出してしまう。

もっとも、今は曇ってはいても雨は降っていないのでマヨナカテレビの条件は満たしておらず、映ることはないだろうが。

一年間しか滞在する予定はないので娯楽になるような本は実家に置いてきたし、勉強という気分でもない。

だから今日はそのまま寝ることにして、その前に水を飲んでトイレを済ませておこうと１階に降りる。

古い家なので、階段を昇り降りする時は特にギシギシと音がする。もう寝ているだろう菜々子達を起こさないように、慎重に階段を降りる。

静かに台所に入ると、先客がいた。

居間にある大きな窓の外は縁側になっていて、そこに茜が腰をかけている。

「茜ちゃん、風邪ひくよ？」

桜の花も咲き、昼間は大分暖かくなったが、やはり夜はまだまだ冷える。

それで近づいて声をかけると、茜は視線を空から総司に向けた。

「何見てたんだ？」

「まんげつだなぁ、っておもって」

そう言って茜は再び空を見上げる。

総司も空を見ると茜の言った通り、空には丸い月が雲の間に浮かんでいた。

「月が好きなのか？」

茜があまりに月を食い入るように見つめるので聞いてみたが、茜は首を傾げる。

「すき、っていうのはちがうかも。
力のつかいかたも、ちしきものこってる。
だけど、あたしはおもいでをわすれてる。ううん…とりだせなくなってる。
それでも月を見てるとね、すこしだけおもいだせるの」
「どんな事？」
「たたかいのきおく」

総司が息を飲む。

「戦いの、記憶？」
「うん。
あたしが…あたし”たち”がたたかってたのは、まよなかだったみたい。
ミドリの空に、大きな、大きなきなまるい月」

脳裏に浮かぶのは、どこかの建物の屋上。
自身と、もう一人。
そしてシャドウ。
だけどテレビの中の世界のように霧がかかってハッキリと見ることが出来ない。
足元に滑ってくる銀色の銃。
引かれる引き金。
自身に向けて、祈るように。
死の体感。
呼び出されるペルソナはもう一人の自分。

そして…”死”そのもの。

ぼんやりした記憶を胸に焼き付けて、茜は縁側から居間に入ると開け放っていた窓を閉めた。

それだけで、随分寒さが和らぐ気がする。

「ひづけ、かわったね。

そろそろねなきゃね……おやすみなさい」

与えられた部屋に戻って行く茜に、おやすみ、と総司は返事をする。

壁にかけられた時計を見ると、確かに長針も短針も１２の文字盤を指していた。

だけど、特に何も起きない。

夜空は深い紺であって緑ではない。

居間のテレビも沈黙したまま。

夜は、更けていく。

■４／２０

再び、総司達四人と一体は雪子のいる城までやって来た。

千枝は学校を休んででも助けに行きたがっていた分、とても気合が入っている風だ。

今度は全員揃って城内に足を踏み入れる。

ところどころシャドウが徘徊しているが、強さ的にはそれ程ではない。

単純に戦力が増えたのもあるし、茜が戦い慣れているらしいのが大きかった。

ペルソナの召喚こそしないが、片っ端からシャドウを転ばせてい

くのだ。
それに追撃をかけるのは簡単だった。
特に問題なくいくつかの階段を登る。
たまに宝箱の中に役に立つ道具があったりするので、入った部屋に階段がない場合でも一通り検めていく。
いくつかの階段を上り、いくつかの扉を開けて探索していると、その内の一つのドアの前でクマが立ち止まった。
フンフンと鼻を鳴らす。

「どした？」
「扉の向こうに誰かいるみたいクマ……」
「もしかして、雪子っ！？」

陽介の質問に答えたクマの言葉に、千枝が反応する。
両開きの扉を思い切り開く。
そこにいたのは確かに雪子だった。
雪子だったが、何かがおかしい。
まずは服装。
童話の中のお姫様のようなドレスに、頭の上には王冠を模したティアラ。
そして、後ろ姿でも分かる異様な雰囲気。
雪子の様子に千枝は首を傾げる。
部屋になだれ込んできた面々の気配に気づいたのか、雪子が振り返った。
同時に雪子を照らすスポットライト。

「あらぁ？　サプライズゲスト？
どんな風に絡んでくれるの？
それとも、もしかして王子様？
なら、どうか私を助けてください！

私は囚われの身なんです！」

夢見る乙女のように雪子は手を祈るように組む。
しかし、ニヤニヤ笑いながらではどうみても夢見る乙女には見えない。

「雪子じゃない……
あんた…誰！？」
「うふふ、なーに言ってるの？
私は雪子……雪子は私」

千枝の誰何に雪子が笑う。
その瞳は金の色をしていた。

「んふふっ、王子様ならきっと……
きっと、どんな困難な道のりも乗り越え私を解き放ってくれるはず……
もちろん、こんな衛兵に負けるはずなんてありませんよね？」

雪子の影が手を振るうと、そこに闇が凝り、シャドウとなる。
足の無い、宙に浮いた軍馬を駆る黒の騎士甲冑。
騎士は手に持ったスピアを掲げて雪子の影と総司らの間に割って入った。
それに満足そうに雪子の影は頷くと、マヨナカテレビに映っていた時に持っていたマイクに声を吹き込む。

「さてさて、私は引き続き、王子様探し！
一体どこに居るのでしょう？
こう広いと、期待も高まる反面、なっかなか見つかりませんね～！
あ、それとも、この霧で隠れんぼ？

よ〜し、捕まえちゃうぞ！」

そう言って、雪子の影はさっさと部屋の奥に見える階段を駆け上がっていく。

止める千枝の声もお構いなしだ。

とっさに追いかけようとする千枝を、騎士がスピアを振るって威嚇する。

「とりあえず、こいつを片付けるぞ！」

総司が声を上げ、イザナギを呼び出す。

それに合わせて各々騎士を囲み込む。

イザナギが総司に攻撃力強化呪文であるタルカジャを掛け、総司は模造刀を振るう。

模造刀は馬上から放たれたスピアに止められ、軌道を流される。

たららを踏む総司に、今度は頭上に向けてスピアが突き出された。

総司の眼前に迫るスピアをイザナギが手に持った剣で受け止める。

目の前を飛び散る火花に、総司は目を見開く。

数秒の拮抗。

総司の視界の端にペルソナ召喚特有の青白い光が映る。

陽介が呼び出したジライヤが動けないイザナギに加勢する。

背後から殴りかかるジライヤを、黒騎士は篭手で受け止めた。

硬い音と共に、陽介の表情が歪む。

ジライヤが攻撃したのと同じ方の手の甲に血が滲んでいた。

陽介の黒騎士への攻撃はあまり効いた様子はないが、意識がジライヤに向いた分、総司に向いていた力が緩む。

イザナギはスピアを跳ね除け、一歩踏み出した総司が武器を薙ぐ。

胴体を横一線に薙いだ刀は不快な音と共に騎士鎧に傷を刻むが、それは浅い。

「来て、トモエ！！」
「ジライヤ、”ガル”だ！」

光のカードを蹴り砕いてトモエを喚んだ千枝の声と、ジライヤに命じる陽介の声が重なる。
トモエは小さな氷の欠片をいくつか飛ばし、ジライヤの起こした風が氷塊の速度を上げて騎士甲冑を襲う。
氷塊は甲冑をへこませ、その隙間から黒い靄が血のように漏れ出る。
黒騎士は、その攻撃で千枝が危険だと判断したのか馬頭を彼女に向ける。
そして、その身を躍らせた。

「え…っ」

小さく、千枝が叫ぶ。
次の瞬間繰り出されたスピアが千枝の肩口に突き刺さった。

「里中っ！」
「だ…だいじょ……う……く、ぅ……」

陽介に答えようとした千枝は、呻いて倒れこむ。
追撃を放とうとする黒騎士を、イザナギがジオを撃って止める。
一瞬、電撃を浴びて動きの止まった黒騎士の前に、茜が立つ。
その手には、ブックホルダーから外された一冊の本。

「足ないし……　ぶつりききにくいっぽいし……
しかたないか……」

そう言って、茜は手に持った本の付箋のページを選んで開き、他

のページに挿んであった栞を開いたページに挿みなおす。
足が無く転ばせられない上に、騎士のような鎧を着込んでいるせいで武器で攻撃してもあまり堪えた様子がないシャドウに、茜はスティックで殴りかかることを諦めていた。

「ペルソナ！」

呼び出されたペルソナは美しい容姿の悪魔だった。
コウモリのような翼で空に浮かび、その状態で茜にしなだれかかる。

「リリム、〝アギ〟！」

茜の命令にリリムと呼ばれた悪魔は妖艶な笑みを浮かべ、右手は茜に絡めたまま左手を騎士に向けた。
その手から炎が迸り、騎士の体を包み込んだ。
炎は千枝のブフによる氷の攻撃で歪んだ鎧の間から中に入り込み、内側から騎士を燃やす。
黒騎士は炎を消そうと暴れる。
しかしそれも長くは続かず、落馬し、力尽きたように騎士は闇へと溶けていった。

「ナイス、茜ちゃん！」

見事なプロポーションのリリムに目を奪われながら陽介が茜を褒める。
リリムは不躾な視線に少しムッとした表情になり陽介にデコピンして消える。
あいた、と呻いて額を押さえた陽介を千枝は刺された肩を押さえたまま呆れた様子で半眼で睨んだ。

「キズ、見せて」

茜は千枝の側に駆け寄って、座ったままの彼女の傷口を見るために膝を付く。

男連中に背を向けさせて千枝のジャージをはだけさせる。

傷口は赤黒く変色していた。

千枝の顔色も少し悪い。

「……どくだね。ちょっとまってね」

茜は手に持ったままの本のページを繰る。

目的のページを見つけたのか、茜はリリムを召喚する時に挟み直した栞を、さらにそのページに挿みなおした。

「アプサラス。――”ポズムディ”」

召喚に応じて青い髪の羽衣をはためかせた女性が現れ、千枝の傷口に指を向ける。

唱えられた呪文が毒素を取り除く雫となり、指先から零れ落ちた水滴が傷に触れると変色していた皮膚の色が引いていく。

千枝はただの傷口になったそこに、大きめのバンドエイドを貼ってジャージを戻した。

茜はアプサラスを呼ぶときに挿み直した栞を再び別のページに挿む。

「もういいか？」

「あ、うん。もう平気」

総司の言葉に、千枝が興味深そうに茜の抱える本を覗き込みなが

ら許可を出す。

「茜ちゃんって召喚に本使うんだね」

「そう言えば、里中ん時もそれ使ってたな。必死でよく見てなかったけど」

千枝に続いて、額を押さえたままの陽介も本を見ようと身を乗り出す。

そして、千枝はちょっとだけ考える素振りをして首を傾げた。

「今喚んだペルソナと、さっきアギ使ったペルソナ、姿違うくなかった？」

「え、そうなん？

ペルソナって一人一体じゃねーの？

あ、でも確かに里中ん時に召喚したペルソナじゃなかったよな、さっきの」

アプサラス召喚こそ背を向けて見なかったものの、千枝のシャドウとの戦いの時に呼び出したピクシーを覚えていた陽介も首を傾げる。

「えっとね。

ペルソナつかいの中にもいくつかしゅるいがあって、かめんをつけたり外したりするみたいにペルソナをかえることができる人もいるの。

ワイルド、っていうんだよ」

「あ、そう言えば警察署でワイルドがどうとか言ってたよね？

瀬多くんに”ワイルドじゃないの？”って」

「ああ。俺もペルソナを付け替えることができる。

魔を降ろす、で降魔って言うんだけど」

千枝の言葉を総司は肯定する。
す、っと総司が空中に手を滑らせると、その軌道に沿って青白く輝くタロットカードが数枚現れた。
その絵柄はそれぞれ違う。
総司が初めて使ったペルソナであるイザナギ、千枝のシャドウ戦で茜も使ったピクシー、白い翼のエンジェル。
総司はベルベットルームで新たなペルソナを生み出し、あるいは戦闘を経て覚醒し、所持するペルソナを選別する。
茜は茶色い本…ペルソナ全書から呼び出すペルソナを選び出す。
総司のように新たなペルソナの降魔にベルベットルームに行く必要がないがページ数が多く、とっさに望むペルソナのページを開くことができない。
栞や付箋はそれを解決するためのものだ。
そして、呼び出すペルソナにも制限がかかっている。
幼い茜の精神力では強力なペルソナを召喚することができない。
５０ｃｃしか入らない計量カップで一度に１００ｃｃの水を組み上げることが出来ないように。
ただ魔法や技を使うには召喚する必要があるが、降魔するだけならその必要はないので普段は身体能力……特に通常攻撃や身体能力を上げる自動補助の能力に特化したペルソナを選んで降魔していた。
体力や腕力等、どうしてもそれらで総司達に劣る茜が戦えるのは、降魔しているペルソナの身体能力が茜を補佐している為だ。
付箋されてるページの大半は今の彼女でも召喚できる弱いペルソナだが、いくつかは降魔しているだけでも恩恵が得られるタイプの高レベルのペルソナである。

「へぇ、便利なんだね」
「便利なだけでもないけどな。
どうしてもペルソナに経験を積ませるのに時間がかかるし、召喚

回数が増えるからバテやすくなる。
さて……回復を済ませたら出発しよう」

／＊／

――言ってみれば”現役女子高生女将”…といった所でしょうか。
何ともこう、惹かれる響きです。
お話うかがってみましょう……すみません！

いやらしい笑みを浮かべて、男がマイクを向けてくる。

（うるさい……）

――でも継ぐわけでしょ？
て言うか和服色っぽいね、男性客、多いでしょ？

嘗め回すような視線。
気持ち悪い。
キモチワルイ。

（私に構わないで！
もうウンザリ！
ウンザリよ……）

王子様はまだ来ないの？
王子様、早く私を連れ去って！
どこか……
私の事なんか誰も知らない世界に……

／＊／

「……ぅん……？」

夢を見ていた気がする。
それも、すごく嫌な夢。
ゆっくり身を起こして辺りを見渡す。
手に触れているのは深紅の絨毯。
金糸で縁取りがされていて高級感がある。
絨毯が敷いてある以上室内のはずだが、霧が深くて見通すことが出来ない。
霧の向こうを見ようと彷徨わせた視線が、一箇所に固定される。
数段の階段で少し高くなった場所に設えられた椅子。
立派な装飾のされたそれは玉座だ。
それに、一人の女性が腰をかけていた。
ドレスを来た、長いストレートの黒髪の女性。
毎日鏡の中で見る顔。

「私……！？」

雪子が小さく叫ぶのと同時に、背後で重厚な扉が開く音がした。
そちらを振り返ると、霧をかき分けるように千枝達が走りこんできた。
雪子が千枝を呼ぶ前に玉座に座るもう一人が立ち上がる。

「あらららら～ぁ？
やっだもう！
王子様が、三人も！

もしかしてぇ、サプライズゲストの方達？
余計なのもいるみたいだけど……
いや～ん、ちゃんと見とけば良かったぁ！」

興奮したような声を上げ、ドレスの雪子が総司達を迎えた。
そして一歩進み出るとしなを作り、媚びた声、媚びる目線で目の前に現れた面々にアピールする。

「雪子ねぇ、どっか、行っちゃいたいんだぁ。
どっか、誰も知らない遠くぅ。
王子様なら、連れてってくれるでしょぉ？
ねぇ、早くぅ」
「むっほ？　これが噂の”逆ナン”クマ！？」

鼻息荒く食い入るように雪子を見つめるクマの瞳がキラキラと輝く。
女好きなようだ。
確かに雪子はお淑やかそうな美人で守ってあげたいと思う人間は多いだろうし、誰だって頼られれば悪い気はしないだろう。
実際雪子にアタックする男は多く、しかしその全てを彼女は断り続けているため、学校内では彼女に告白することを苗字とひっかけて”天城越え”と言われているくらいだ。
だが今の媚を売る様なポーズや台詞は、過剰すぎて逆に彼女の魅力を落としていた。
とりあえず、台詞に引っかかった千枝は自分たちを省みる。
小さな女の子とキグルミな茜とクマは除外。
男子は総司と陽介。

「三人の王子って……
まさかあたしも入ってるワケ……？」

千枝が心なしか胸を強調するデザインのドレスを着た雪子と、自分のジャージで隠されたそれを比べるように視線を動かして項垂れる。

ショートの髪型も相まって、男の子のカテゴリに入れられてもそれほど不自然ではない。

少なくとも……

「三人目はクマでしょーが！」

「それは無いな……」

少なくとも、クマを王子様換算するよりかは自然だった。

雪子の影がクスリ、と笑う。

「千枝…ふふ、そうよ。

アタシの王子様……

いつだってアタシをリードしてくれる……

千枝は強い、王子様……」

王子様が三人も現れたと言い、誰でもいいというように振舞っていながら、雪子の影の視線は千枝にだけ固定される。

「……王子様”だった”」

含む所がたっぷり滲み出るような口調で雪子が言う。

「だった……？」

「結局、千枝じゃダメなのよ！

千枝じゃアタシを、ここから連れ出せない！

救ってくれない！」

千枝が聞き返すと、雪子の影が心を吐露する。

「や、やめて……」

小さく雪子が呻くように呟くが、影は止まらない。
更に声高く雪子が隠していた心情を暴露する。

「老舗旅館？　女将修行！？
そんなウザい束縛…まっぴらなのよ！
たまたまここに生まれただけ！
なのに生き方……死ぬまで全部決められてる！
あーやだ、イヤだ、嫌ぁーっ！！」

それは、生まれから来る未来への否定。
逃避願望。
だけど自分では動かない……そんな他力本願の祈り。

「どっか、遠くへ行きたいの……
ここじゃない、どこかへ……
誰かに、連れ出して欲しいの……
一人じゃ、出て行けない……
一人じゃ、アタシには何も無いから……」
「そんなこと、ない……
やめて…もう、やめて……」

雪子が搾り出すように声を上げる。

「希望もない、出てく勇気もない……
うふふ…だからアタシ、待ってるの！

ただじーっと、いつか王子様がアタシに気付いてくれるのを待ってるの！
どこでもいい！　どこでもいいの！
ここじゃないなら、どこでも！
老舗の伝統？　町の誇り？
んなもん、クソ食らえだわッ！」

雪子の影が叫ぶ。

「なんてこと……」

家族を。
自分の中心だった世界を。
それらを罵倒にされ、雪子の頬に赤みがさす。
それを見て、雪子の影が鼻で笑う。

「それがホンネ。
そうよね……？
もう一人の”アタシ”！」
「ち、ちが……」
「よせ、言うなッ！」

決定的な拒絶の言葉を放とうとした雪子を止めようと、陽介が声を上げる。
だが、雪子はもう一人の自分を拒絶する。

「違う！
あなたなんか……私じゃない！」

雪子の拒絶が力を得たかのように風となって部屋の中を吹き荒れ

る。
ドレープがはためき、雪子の影は酔ったようにその風に身をまかせた。

「うふふふふふ！
いいわぁ、力がみなぎってくるぅ！
そんなにしたら、アタシ……
うふ…あはは、あはははは！！」

シャンデリアが落ちてきて、地面から少し浮いたところで止まる。
その中央部分はアンティーク調の巨大な鳥籠になっていて、底辺部から四方八方に伸びて籠を取り囲んでるキャンドルホルダーの蝋燭から炎が立ち上っていた。
炎に囲まれた人の身長の二倍はありそうな鳥かごに収まるのは一羽の赤き鳥。
だが、それは普通の鳥ではない。
黒いストレートの髪を乱して緋色の人面鳥が鳴く。

「ああ…っ！！」
「雪子！！」

陽介や千枝の時と同じく、糸が切れたように倒れそうになった雪子を千枝が抱きとめ、クマが部屋の柱の陰まで運ぶ。

「我は影…真なる我……
さあ王子さま……楽しくダンスを踊りましょう？
ンフフフ……」

人面鳥となった雪子の影が妖しく笑う。
千枝は、宙に浮かんだカードを回し蹴りで破壊し、トモエを呼び

出す。
両端が刃になっている薙刀を構え、トモエは人面鳥と向かい合った。

「待ってて、雪子……
あたしが全部受け止めてあげる！」
「あらホントぉ……？　じゃ私も、ガッツリ本気でぶつかってあげる！！」
「おいで、雪子！！」

人面鳥が千枝の声と共に彼女に飛びかかる。
急降下の鉤爪での一撃は鳥と千枝の間に割って入ったトモエが薙刀で受け止めた。
羽ばたいて鳥籠の入り口まで戻った雪子の影が口を開く。

「んふふ、まだまだよ。
もぉっと強さを見せてちょうだい！」

そうして、翼を広げる。
どこからかスポットライトが絨毯を照らし、その場所に闇が凝り始める。

「いらっしゃい……
アタシの王子様！！」

凝った闇はスポットライトの光の中、人の形になって立ち上がった。
前髪がぱっつんとした金色のショートボブの頭の上に小さな冠をかぶった、童話の中に出てきそうなデフォルメされた王子様。

「シャドウがもう一匹……！？」
「クマクマ！　アナライズしたクマよ！
個体名、『白馬の王子様』！
回復魔法が使えるみたいクマ！！」

後方で戦況を見ながら雪子を守っていたクマが声を上げる。
白馬の王子様という割には馬には乗っていないが、まぁそういうものなのだろう。
しかし、問題になるのはそこではない。
回復魔法が使えるという事。
いくら攻撃しても、回復されては仕方が無い。
総司と同じように陽介もそう考えたようで、陽介は王子様に狙いを定めた。

「じゃあ、先に倒したほうが良さそうだな。
行くぞ、ジライヤ！」

スパナがカードを破壊すると共に召喚されたジライヤが王子様に襲いかかる。
ジライヤの突撃を王子様は手に持ったレイピアで受けるが、体が小さな王子様が持つ玩具のような細い剣で防ぎきれるはずもなく、弾き飛ばされてコロコロと転がっていく。
転がっていった王子様を追ってジライヤが距離を詰める。
王子様は、近づいてくるジライヤを見て叫び声を上げた。

「～～～～っ！
何だ、この声……っ」

その叫び声は妙に甲高く耳に響き、恐怖を掻き立て身を竦ませる。
恐怖を植え付ける声で陽介は集中を乱してしまい、ジライヤが王

子様に攻撃を当てる前に消えてしまう。
身を竦ませた陽介を見た雪子の影は、鳥籠を掴んで羽ばたく。
そして浮かんだシャンデリアごと、陽介に向かって突進した。

「うわあああぁぁ！！」

王子様の植えつけた恐怖と、巨大な質量が頭上に落ちてくる恐怖で陽介が叫ぶ。
あれほどの重量の物に押しつぶされては、人は一溜まりもない。

「リリム！　”ラクカジャ”　！！」
「オモイカネ！　”タルンダ”　！！」

茜と総司の呪文を唱える声が重なる。
茜の召喚したリリムが陽介の防御力を上げ、総司の召喚した脳の様な姿をしたペルソナ・オモイカネが陽介を潰そうとしているシャンデリアの攻撃力を下げる。
威力が下げられた事で速度が落ちたシャンデリアだったが、止まることはなくそのまま陽介の上に突っ込む。
鎖の長さが足りないのもあって、巨大な鳥籠とそれに乗っかった人面鳥の重さがそのまま陽介にのしかかることは無かったが、それでも押し倒された陽介はシャンデリアをどけない事には立ち上がれない。
だが、それは陽介を押さえておくなら雪子の影も動けないということ。

「”ジオ”　！」

オモイカネの触手から放たれた電撃が人面鳥の翼を撃つ。
突然体の中に電気が流れたのに驚いたのか、雪子の影は思わず鳥

籠から飛び立つ。
押さえ込んでいた重しがなくなり、鎖に引っ張られてシャンデリアは元の位置に戻って行く。
解放された陽介は、急いで立ち上がり、距離を取る。
叫ぶのをやめた王子様が今の電撃で受けた傷を癒そうと雪子の影に向かう。
その背後を、千枝は狙った。

「”ブフ”！」

トモエの放った氷塊がまともに王子様の背に当たり、王子様は前のめりに倒れこむ。

「弱点にヒットクマ！」
「こっちも”ブフ”だよ、リリム！」

茜のリリムが追撃でブフを放ち、それで王子様は形を保っていられなくなったようで消滅する。

「王子様っ！？
もう一度……！」

驚愕の声を上げた雪子の影が再び翼を広げた。
再び絨毯を照らすスポットライト。
だけど、そこにもう闇は凝らない。
誰も、自分を助けに来てくれない。
連れ出してはくれない。

「なんで…
なんで来てくれないの……」

雪子の影は泣きそうな声を出す。

「雪子！」

「千…枝……

ちがう！！

違う！　アンタなんか王子様でも何でもない！！」

千枝の呼ぶ声に一瞬雪子の影は縋るような声を上げるが、すぐに首を振ってそれを振り払う。

「焼き払え！！」

人面鳥の叫びと共に、シャンデリアの蝋燭の炎が業火となって浮かび上がる。

それらは鳥の羽ばたきによって薙ぎ払われ、全方位に猛威をふるう。

「きゃあぁっ！！」

「里中！

く…っ、間に合え！！　”赤の壁”！」

氷系統の術を使えるが故に炎に弱いトモエを降魔している千枝が体勢を崩し、追撃の炎が蝋燭から立ち上る。

総司はとっさにペルソナを付け替えて火耐性強化の呪文を千枝にかける。

千枝の影が風系魔法を防いだ時に使ったものと同系統の魔法。

ただしこれには大きな問題があった。

それは、火耐性強化呪文をもつペルソナ自体が火に弱い側面を持つという事。

耐性を持っていたら覚える必要のない呪文なので、当然といったら当然なのだが。
鳥の羽ばたきが、再び全方位を焼き払った。

「……っ」

防御でやり過ごす暇もなし。
だが、炎は総司には届かなかった。
雪子の影と総司の間に茜が割って入っていたのだ。
火炎を吸収する特性のペルソナを降魔したのか、周囲の炎を吸い寄せて総司には熱風すら感じられない。

「すまない、助かった」
「火につよいコにかえて、かえて！！」

礼を言い、茜が言う通りに火に耐性を持っているペルソナを降魔しなおす。
まだ他のペルソナより育ってなくてステータスは低いが、この炎の海のような場所なら適任だろう。

「瀬多！　飛び込め！！」

総司が武器を構えると同時に、陽介が叫ぶ。
陽介が喚び直したジライヤが、　三度立ち上がった炎を風を操り吹き消す。
炎が消えたのは一瞬だったが、その隙間に総司は飛び込んだ。
刀を力任せに振り下ろす。
模造刀とは言え、袈裟に斬られた鳥は甲高い悲鳴を上げる。
そこに、総司と入れ替わるように千枝が人面鳥の前に出る。

「雪子、もういいよ……
今、助けてあげる！！」

千枝はそう言って、思い切りサマーソルトキックを見舞った。
それで耐えられなくなったようでシャンデリアが地に落ち、鳥籠から転落した人面鳥が倒れる。
人面鳥の姿をまとっていた雪子の影は再びドレス姿へと戻り、クマと柱の影に避難させていた雪子は小さく呻き声を漏らすものの立ち上がる。
それに気づいた千枝は真っ先に雪子に駆け寄った。

「雪子！！
雪子、ケガは……！？」

千枝の姿を見た雪子は泣きそうな顔で俯く。
駆け寄った勢いのまま、千枝は雪子に抱きついて、ごめんね、と嗚咽を漏らした。

「あたし……自分の事ばっかで雪子の悩み、全然分かってなかったね……
あたし、友達なのに……
ごめんね……」
「千枝……」
「あたし、ずっと、雪子がうらやましかった……
雪子は何でも持ってて…あたしは何にも無い……
そう思って、ずっと不安で…心細くて……！
だから雪子に、頼られていたかったの……
ホントは、あたしの方が雪子に頼ってたのに。
あたし、一人じゃ全然ダメ……
花村たちにも、いっぱい迷惑かけちゃったし……

雪子いないと…あたし、全然分かんないよ……」

いつも自分の手を引っ張ってくれていた、雪子姫の王子様。
それに甘えて、雪子はただ黙ったまま助けられるのを待つばかりで今まで何もしようとしなかった。
体を離し、雪子は千枝と至近距離で見つめ合う。
ずっと強いと思っていた千枝が涙を流して鼻をすすっている。
雪子は千枝の手を取った。
手を差し伸ばされるのを待つのではなく、自分から、初めて。

「私も、千枝の事、見えてなかった……
自分が逃げる事ばっかりで」

視線を千枝から外すと、黙ったまま立つもう一人の自分。
雪子は自身の影と向い合う。

「逃げたい…誰かに救って欲しい……
そうね……確かに、私の気持ち。
あなたは、私だね……」

そう言って、雪子はもう一人の手も取った。
黒と金の視線が交差する。
そして影は人格へを姿を変える。
醜悪な人面の鳥ではない。
桜を身に纏った姿が鳥の翼のようにも見える美しい女性だ。

「あなたは私が連れて行くわ。コノハナサクヤ」

／＊／

その光景を、茜は黙ったまま見つめていた。
ヘアバンドをつけた、綺麗な黒い髪。
雪子という名前。

「……？
茜ちゃん、どうした？」

茜の様子がおかしい事に気づいた総司が屈みこんで視線を並べる。

「うん…テレビで見たときから気になってて……
気のせいだとおもってたんだけど……あたし、しってるみたい」
「何を？」

茜の記憶は満月の夜を期に、少しづつ戻りつつあった。
ふとした切っ掛けで、そんな事もあったな、といった感じで思い出す。
雪子と会って、茜はまた一つ思い出す。

「ゆきちゃんのこと。
あたし、しってる……！」

／＊／

こうして、総司達は一人を救った。
茜の記憶（霧）は少し晴れ。
しかし事件の謎（霧）はますます深まっていく。

行方不明者として捜索願の出されていた雪子が戻ったことによって、雪子は警察の事情聴取を受けることになった。
雪子は誰かに呼ばれた気がするものの、その後のことは覚えていないと証言した。
ただ、覚えていないという真偽が本人にしか分からない証言と、警察でも追いきれない足取りのせいで多少疑いを持っている者もいるらしい。
テレビの中に数日の間いた雪子の消耗は激しく、彼女はしばらく学校を休むことになった。
助けだした時も、詳しい話を聞けずじまい。
全ては雪子が回復してからとなった。

■4／22

「あれ、そうじくんだ」

総司が河川敷のベンチに座り胸焼けしたお腹をさすっていると、そんな声を掛けられた。
声の方を見ると、ジュネスのレジ袋を両手に下げた茜が総司の座るベンチに駆け寄ってくる所だった。
茜が堂島家の台所を掌握してから、彼女は毎日欠かさずに買い物に出かけている。
タイムサービスなどをフル活用するので、昼間は留守番、夕方は買い物といった感じで帰宅は寄り道した総司と同じような時間になるのだが。

なので、総司は帰宅途中に出会った時は荷物持ちすることにしていた。
茜は持っていたレジ袋をベンチに置くと、総司の隣に腰を下ろす。
ふと気になって総司がレジ袋の中を覗くと、ジャガイモと牛豚合いびき肉のトレーが目に入った。
他にもキャベツやトマトといった他の食材も入っていたが、冷蔵庫の中のストックを思い出して、総司は嫌な予感を覚える。

「……今日の夕飯、何かな？」
「きょうはミートコロッケだよ！
このあいだ、そうじくんにもらったの、おいしかったから」
「う…そうなんだ……」

嫌な予感は的中し、総司は項垂れた。
胸焼けの原因。
これは陽介に誘われて行った惣菜大学でコロッケを食べ過ぎたせいなのだ。

「どうしたの？」
「いや、なんでもない……
あ、そうだ。茜ちゃんのあの本、ちょっと見せてもらっていいかな？」

しょんぼりした総司を茜が心配して顔を覗き込むが、自業自得なので誤魔化しておく。
話題転換としては急だったな、と総司は心のなかで反省するが、それは元々その内話そうと思っていたことだった。
ワイルド同士、すぐに言いたいことを理解した茜が、背中のリュックを総司に向ける。
財布だけならポシェットやウエストポーチでもいいのに、わざわ

ざそれを背負うのは本を持ち歩く為なのだ。
総司は、そのリュックから本を取り出してページを捲った。

「やっぱり、きづいちゃった？」
「そりゃあね。
茜ちゃん、あまり前には出ないけど皆が危なくなったら助けに入ってくれてるし」

茜は何も言わなかったが、総司は彼女のペルソナ能力の強さに気づいていた。
全書のページは全て埋まっていて、白紙のページはない。
その意味と凄さが分かるのは、おそらくベルベットルームの住人か同じワイルドくらいだろう。
ペルソナ全書のページ数は、ワイルド能力者の可能性。
全てのページを埋めるという事はすなわち自身の可能性を全て手に入れ、尚且つそれを制御できるということなのだ。
降魔しているペルソナの目印として挿まれた栞のページを開いて、能力やスキルを確認して総司は笑う。

「うわ。
味方身体強化三種に、体術指南（アドバイス）、自動防壁（ハイパーカウンタ）に……武具の心得（マハオート）？
ああ、武器の強化なのか。
普段こんなの降魔してるんだ」
「だって、そうでもしなきゃついていけないんだもん。
しょうかんしなくても、たたかえるからバテないし」
「普段滅多に召喚しないわけだな」

一応物理技も1つリストにあるものの、その他は非召喚を前提としているペルソナ。
徹底されたスキル構成は、そのペルソナが戦闘を経て覚醒した最

低限の力しか持たないデフォルトの状態ではなく、可能性とコミュニティの力を掛け合わせて生み出されたものである事を示していた。
ベルベットルームでマーガレットに管理して貰っている自身の白紙だらけのペルソナ全書を見た総司には、それを理解できた。
見た目は子供でも、彼女は自身よりずっと経験を積んだペルソナ使いなのだと。
だから、その言語を言うのに躊躇いを持たなかった。

「俺のペルソナ能力を鍛えて欲しい」

その言葉に茜は少し驚いたような顔をして、すぐに微笑んで頷いた。

「いいよ。
そばにいて、お手つだいするっていったもんね。
それじゃあ、ちょっとやってみる？」
「え？　テレビの中じゃないとペルソナ出せないんじゃあ……」
「でも、こうまることはできるでしょ？
アプサラスもってる？」
「あ、ああ。ちょっと待って」

総司は目を閉じ、心（ペルソナ）を切り替える。
茜の指定したアプサラスは雪子の城での戦闘で覚醒していた。
同じ名前でも、呼び出す人間が違えばやはり引き出せる能力に差があるのか、茜のとは違い毒を浄化する能力はない。
その代わりのように総司のアプサラスは小さな傷を癒す呪文を持つ。
ペルソナ全書の栞を別のページに挟んだ茜は、ベンチに座ったままの総司の前に立ち、目を閉じたままの彼の両手を取って静かに語りかける。

「しんこきゅうして…あたしと心をかさねて……
ペルソナとも一つになるの……」

茜の声が心に沁み込んでくる。
ゆっくりと。
ゆっくりと。
ふいに、音楽が聞こえた気がした。
総司の心の中で、アプサラスが羽衣をはためかせる。

「きこえる……？」
「ああ」

音楽は気のせいではなかった。
ポロン、ポロンと聞こえるそれは、琴の様な弦楽器の音だ。
それに合わせて、アプサラスが舞う。
体が軽くなるような、軽快な音楽。

「できそうだね」

そう言って茜が手を離すと流れていた音楽は消え、意識が現実に戻ってくる。
目を開くと茜は元のページに栞を挿みなおしていた。
そして、話し始めた時より大分沈んだ夕日に目を細める。

「でも、じっせんでつかうには、ちょっとキツイみたい。
じかん、かかりすぎだし。
でも、こうやってシンクロのれんしゅうしていけば、ペルソナのはんのうそくども上がるよ」
「今のは……？」

「ペルソナのふくごうしょうかん。
ミックスレイドっていうんだよ」

■４／２９

学校は全国的に休日となる昭和の日。
朝、いつもより遅く起きだした総司は窓の外で止む気配のない雨を見て出かけるのを断念した。
億劫なのもあったが、数日前に千枝の特訓に付き合った時のうさぎ跳びダッシュが未だにこっそり響いているのもそれに拍車をかけていた。
ソファに身を沈めると、商店街の書店で購入した”素敵な漢”という本を読んでみることにする。
今日は家にいると聞いて部屋に遊びに来た茜と菜々子もそれぞれ本を用意していた。
茜は”家庭の料理全書?”という妙に分厚い料理本、菜々子は歳相応の童話。
総司は手の中の本に視線を向ける。
各章は全て、”人たるもの、漢たるべし”から始まっていた。
内容は古今東西、男女問わずの人物列伝で、筆者が素晴らしい漢魂を持っていると思った人々が紹介されている。

「ヘンな本だね」
「うん。
ヘンだよね」

そう言って、ちょっと覗きこんでいた茜と菜々子がクスクスと笑う。
総司は手の中の本に視線を向ける。

そして、じっくりその場所を読んでページを捲った。
総司は思う。

……結構胸熱な本なんだけどな。

／＊／

茜と菜々子が風呂から上がって居間に戻ると、珍しく夕飯時に帰ってきていた堂島はソファで新聞を広げ、総司はお茶を飲みながらテレビを見ていた。

「おふろ、あいたよ」
「ああ。
総司、お前が先に入れ。
俺はまだ新聞のチェックが終わってないから」
「ん」

堂島に促され、総司は湯呑みに残ったお茶を煽って立ち上がる。
付けっぱなしのテレビでは番組の終わりを告げ、ＣＭに変わる。

『ジュネスは、今年もゴールデンウィークは休まず営業！
来て、見て、触れてください』

地域の企業ＣＭが流れるローカルテレビでは、やはりジュネスの存在は目立つ。
それに聞いたことのないような中小企業より、どうしても知っている大型スーパーの方が記憶に残る。

『エブリディ・ヤングライフ！　ジュネス！』
「「エブリディ・ヤングライフ！　ジュネス！」」

何度も聞いたフレーズを、ＣＭと同じタイミングで歌いあげる。
茜と菜々子とＣＭ、見事なユニゾンだ。
それに思わず総司が噴き出す。

「茜ちゃんまで洗脳されたのか」
「えへへっ。
かいものにジュネスいくからね。
そうじゃないときは、おるすばんだし。
耳にするきかいもおおいんだよ」

からかうように言う総司に、茜は頬を染める。
それを尻目に、菜々子は期待を込めた目で堂島を見上げた。
この期待に満ちた目を拒めるものは中々いないだろう。
もちろん、堂島も含めて。

「ハハ、分かった分かった。
連休、どっか行きたいのか？」
「いいの！？」

広げた新聞を下ろし尋ねる堂島に、身を乗り出して菜々子が聞き返す。
堂島は、視線を総司に向ける。

「お前どうだ、予定空いてるか？」
「あ、うん。
空いてるよ」
「だったら、みんなでどっか行きたい！

菜々子ね、ジュネスがいい！」

小学校の授業参観で当ててもらいたい時のように片手をピンと上げ、菜々子が元気よく希望を言う。

そのあまりにもご近所なお手軽コースに堂島は苦笑する。

「ほんとにジュネスでいいのか？

そんなの、いつでも行けるだろ……」

「ね、ねえ…っ！

あ…あたしも行っていい……かな」

「いつも行ってるだろうに……

もちろん、おいて行ったりしないさ。

ほら、もう遅いから寝なさい」

上目遣いでお伺いをたてる茜に頷いて二人を寝室に行くよう促す。

「「はぁい」」

二人は声を揃え、エブリディ・ヤングライフ！と歌いながらトタトタと走っていく。

総司はそれを見送って、風呂に入るために居間を後にした。

／＊／

部屋の扉がノックされたのは、日付が変わる丁度5分前だった。

ソファに座ってニュースを聞きながら読書の続きをしていた総司が返事をすると、茜がひょっこりと顔を出す。

来訪者がもう寝たと思っていた茜で、少し総司は驚く。

しかし茜はそんな総司にお構い無しに部屋に入ってテレビに目を向ける。

ニュースは0時を目前にして最後のコーナーに入っていた。

『……終日降り続いた雨の影響により、各地とも気持ちのいい晴れ間とはいかないようです。

特に稲羽市方面では、今夜半から明日にかけて、濃い霧の発生が予想されています。

お出かけの際には十分ご注意ください。

では時間帯ごとの天気を見てみましょう……』

「きょう…だね」

「ああ」

茜の言葉に総司は頷く。

クマの言っていた、向こうの霧が晴れ、こちらが霧に包まれる日。

向こうで殺された死体がこちらに現れる日。

テレビの中の雪子を救いはしたが、これで本当に食い止めることが出来たのか……それが、今日分かる。

茜がカーテンを開けると、テレビの中の世界のように霧で辺りは覆われていた。

ニュースが終わり、総司がテレビを消す。

二人で固唾を飲んで見守る中、マヨナカテレビが映しだされる。

そこには誰も映らない。

ただ、チューニングの合ってない雑音だらけの映像が流れるだけだった。

／＊／

霧の中の商店街。

街灯の光だけが霧の中に浮かび上がる中に立つ影がひとつ。
明かりの当たるところには足だけが入っていて、後は霧に包まれて見ることが出来ない。
影はしばらく何かを探すようにしていたが、その場を立ち去っていく。
もう誰もいなくなった地面を街灯の明かりは照らし続ける。

■４／３０

あくびをしながら、総司は通学路を歩いていた。
辺りのうわさ話に耳を傾けてはいるが、特に目新しいものはない。
つまり、何も起こらなかったという事だ。

（祝日明けなんて眠いだけだよな……土曜は午前中だけしか授業しないんだから休ませてくれればいいのに）

そんな事を考えながら歩いていると、おはよう、と声を掛けられる。
声の方に視線を向けると、校門の門柱を背に雪子が立っていた。

「おはよう。
もう大丈夫なのか？」
「う、うん……
今日から学校、来るから……よ、宜しくね
お母さんも仕事に復帰したし、もうしばらくは学校休まなくてもよくなると思う。
仲居さんたちもすごく協力してくれて、なんだか前より上手く回ってるみたい。
私、無理してたのかな……

何でも自分がやらなきゃって、思い過ぎてたのかも。
あれから、自分の事とか…少し冷静に考えられるようになったと思う」

そう言う雪子の表情は、以前より明るい。
そして、ちょっと赤くなって顔を背ける。

「で、でも、なんか恥ずかしいな……
自分でも見たくないと思ってた事、みんなに見られちゃったし……
それにすごく迷惑かけちゃったよね。
ごめんね……」
「こういう時は、ごめんじゃなくて、ありがとうの方が嬉しいな」
「そっか……うん、そうだね。
……ありがとう」

／＊／

放課後、菜々子と昼ごはんを済ませた茜と合流して、ジュネスのフードコートに集まる。
雪子の体調の事もあって聞けなかった事情を聞くためだ。
今日から始めたというビフテキをつつきながら。
肉が苦手だという雪子は食料品売場からサンドイッチを買ってきていた。

「ウチとしても名産広めんのには協力したいし、それに立派な鉄板もある事だしさ」

昼ごはんをどうしようかと言う皆にビフテキを薦めた陽介が笑う。

「焼きソバ屋の鉄板じゃん……
まぁ、美味しそうだから構わないんだけど」

千枝はそうツッコむが、誘惑には逆らえないらしく、鉄板の上でジュウジュウと音を立てている肉に鼻をひくつかせた。
すでに昼食を終えてる茜はジュースだけだが、総司が一切れ切り分けてフォークを口元に持って行くとそれを口に頬張る。
幸せそうに顔を綻ばせる茜に皆目尻が下がる。
思わず時間を忘れてそれに魅入りそうになるのを慌てて陽介が戻し、一つ咳払いをして話を進め始めた。

「なぁ、天城さ、ヤな事ムリに思い出さす気は無いんだけど……改めて、聞かせて欲しいんだ。
……さらわれた時の事、やっぱ何も覚えて無いのか？」
「うん……
落ち着けば思い出すかなって思ったけど、時間が経つ程、よく分からなくなっちゃって……
ただ、玄関の…チャイムが鳴って……誰かに呼ばれたような気は、する……」

口の中のパンを飲み込んで、思い出すようにゆっくりと雪子は話す。

「けどその後は……気付いたら、もうあのお城の中だったの」
「やっぱその来客ってのが犯人かな」
「どうだろうな……もしそうなら相当大胆だぜ。
玄関からピンポーンなんてさ。
目撃者が無いか警察も洗ってんだろうけど……あんま期待できねーな。
すく身元割れるようなナリで歩き回んねえだろうし」

雪子の話を聞いて、少しづつ事件を整理する。

「なんでこんな事すんだろ？」

千枝が肉をつつきながら首を傾げるが、そればかりはいくら推理しても分かりそうにない。

それでも、分かることはある。

誰かが来て、その後気づいた時には城の中。

それはつまり……

「人が次々”向こう”に行ってんのは偶然じゃない。

こっちに居る誰かが、さらってテレビに放り込んでるんだ。

……こいつは”殺人”だ」

そういう事なのだ。

陽介はビフテキと一緒に購入したお茶で話疲れた喉を潤す。

そして思い出したように、そうだ、と付け加える。

「言ってなかったな。

俺とコイツで」

陽介は総司を指差す。

「犯人挙げちゃうことにしたからさ！

この事件、正直警察には無理そーだけど、俺らには”力”があるからな」

「あたしもやるからね！

あんな場所に、人放り込むなんてさ。

も、絶対ブチのめす！」

「あたしもやるからね！」

指された事で視線の集まった総司が頷く。

それに負けないように千枝が片手を振りかざして宣言し、茜も一緒になって片手を振りあげて宣言する。

そして。

「私も…私も、やらせて！

どうしてこんな事が起きてるのか知りたい。

それに…もし自分が、殺したい程誰かに恨まれてるなら、知らなきゃいけないと思う。

もう、自分から逃げたくないの」

雪子も自身の心で決め、宣言する。

皆顔を見合わせ、そして頷く。

「おっし！

じゃあ、全員で協力して、捕まえてやろーぜ！」

「うん！」

全員で気合を入れ、事件の整理を再開する。

目下は犯人を探す方法。

唯一犯人と接触した雪子に犯人に関する記憶が無い以上、手がかりは無いと言っていい。

そこで、追いかけるのではなく先回りする事を考えることにする。

犯人の凶行が終わらず、更に狙われる人がいるのならば。

次に狙われる人間を特定できれば先回りすることは不可能ではないだろう。

今までの被害者は……

一人目、女子アナの”山野真由美”。
二人目、”小西早紀”。
三人目、”天城雪子”。

分かりやすい共通点としては、全員女性であることが上げられる。
女性ばかり狙うなんてヘンタイだ、と千枝は憤慨する。
総司達はそれ以外の繋がりとして、最初の事件の被害者と接点があることと推理した。
小西早紀は山野真由美の死体の第一発見者。
天城雪子は山野真由美の泊まっていた宿の娘。
しかし、それだけでは次に狙われる人間を特定するには至らない。
それでも、マヨナカテレビと行方不明者の関係を知っている者には話は違ってくる。

それは、”居なくなる前にぼんやりとでも映る”という事だ。

まるで誘拐の予告のようだが、ぼんやりとでも見えれば、山野真由美の関係者で女性というキーワードで特定することは不可能ではなくなる。
なので、次狙われる人間の特定は次にマヨナカテレビを見てから再度話し合う事に決まった。

次に動機の話に移る。
山野真由美に関してはアナウンサーというメディアの表に出る人間であったり、不倫という不祥事もあってかなり報道も派手にされている。
その分、犯行に及びそうな不倫相手やその妻にアリバイがあるこ

ともニュースで分かっていた。
小西早紀に関しては死体の発見者という事もあり、その時に犯人に繋がる何かを見聞きしたかで口封じの線が強いのではないかという結論に達した。
だが、犯人が実際にやった事といえば人をテレビに入れただけ。
警察に捕まるほどの証拠があるかどうかは甚だ疑問だった。

一通り話を終え、雪子をきちんとクマに紹介するためにテレビの中へ行こうという事になった。
ただ、茜だけがタイムセールに間に合わなくなるので別行動となる。
そこで移動となったのだが。

「ああっ、しまった！
肉がゲンナリしてる！」

千枝が叫びで、もう一度腰を落ち着けることとなった。
肉がゲンナリ……千枝の表現はいささかシュールではあるが、すでに湯気の立ってない肉は食べ頃を逃した感は確かにある。
もったいない、と千枝が肉を食べる間、雪子が思い出したように声を上げた。

「休んでる間にね、私、過去の宿帳を探してみたの。
茜ちゃんが私の事知ってるってことは、もしかしたら過去のお客さんかもって思って」
「それで、見つかったか？」

陽介の言葉に、雪子は横に首を振る。

「とりあえず、保存されてる5年分は見てみたんだけど。
団体さんは個人名書いてない事が多くて…○○高校、とか……
茜ちゃんの年齢だとそういうのは省いていいとは思うんだけど……
親同伴じゃないとダメだから宿帳にあった有里さんには一通り連絡してみたわ。
でも……電話番号変わってる人もいて、全部には……
ごめんね、茜ちゃん……」
「ううん。
ゆきちゃん、からだキツイのに……うれしいよ、すごく。
ありがと！」

テレビの世界に人間は適応してない。
普段の生活と同じようにしても、テレビの中だと何倍もの疲労が溜まる。
そんな場所で数日間過ごし、自身の心の闇と向い合って消耗しているのに自分の為に行動してくれた。
それが茜には嬉しかった。

／＊／

「4日と5日、だな……」

新聞を読みながら、堂島がボソリと呟いた。

「4日と5日なら、まあ…休み、取れそうだな」

唐突なその呟きに、全員の視線が集まる中発せられる堂島の言葉。
その内容に、菜々子が目を輝かせて立ち上がる。

「ほんと！？」

そう言ってソファに座る堂島に駆け寄るが、すぐに不安げな顔になって、ほんと？と聞き直す。
その響きは先の物と違って疑心が込められている。
堂島は読んでいた新聞を下ろすと、心外だという顔をした。

「なんだよ、疑ってるのか？」
「……いつもダメだから」

ポソリと言う菜々子に、途端に堂島はバツの悪そうな顔になる。
心当たりがあるようだ。

「ま、毎年じゃないだろ。
ジュネスに行きたいんだったか？
近所じゃなくても、少し位遠くたっていいぞ」

言い繕うように言う堂島の台詞に、菜々子は顔を上げる。

「ほんと？
りょこう？」
「あーまー、たまには、旅行もいいかもな。
何処もメチャクチャ混むだろうけどな……」

堂島が頷いて見せると、菜々子は休みが取れると聞いた時以上に顔を輝かせた。

「やったー、りょこう！」
「…お前、どうする？
一緒に、どっか行くか？」

喜ぶ菜々子の様子に少し笑い、堂島は総司に話を振る。
ちらりと総司が菜々子を伺うと、期待に満ちた瞳で菜々子は総司の言葉を待っている。
その期待に満ちた目には逆らえない。

「行きたい」

総司が言うと、菜々子はその場で飛び跳ねる。

「うん、みんないっしょに行こう！
ね、あかねちゃん！」
「うんっ！」

茜も頷く。

「菜々子、おべんとう、もって行きたい！」
「じゃあ、あたしつくるよ」
「俺も手つだうよ。
いつも食事作ってもらってるし。
俺も多少出来るから」

菜々子の要望を茜が請け負い、総司も手伝いを名乗りでる。
折角旅行に行くなら、少しでも二人が遊べるように負担を軽くすべきだと思ったのだ。

「やったー、おべんとう！」

諸手を上げて、菜々子が笑う。

「りょこう、りょこう！

たのしみだね！」

本の中身（後書き）

冒頭の方に出てきた茜が普段使いにしてるペルソナ、あたしが普段使ってるのです。

剛毅ジークフリード

・武具の心得
・アドバイス
・マハオート三種
・空間殺法
・闇反射
・ハイパーカウンタ

ダンジョンでボス戦以外ＳＰもＨＰも使いたくない派なんで、これでクリ大武器使って総攻撃（フルボッコ）。
みなさんはダンジョン攻略ではどんなペルソナ使ってますか？
Ｐ４は背後回っても気づかれるんで苦手……

親子の約束

■5／2

堂島が休みを取れなくなったと連絡してきたのは、夜遅く、総司が天気予報のチェックの為に風呂上りにニュースを見ている時だった。

電話を取った菜々子は落胆した様子で受話器を総司に渡す。

ハンドレスタイプなので、そのまま座ったまま受け取った受話器を耳に当てる。

声をかけると、固い声が受話器の向こうから聞こえる。

『悪いが今日は遅くなる、戸締りして先に寝てくれ。

それと、4日と5日の休みの件なんだが……

実は若いのが一人、体壊してな……

抱えてる事件の内容からいくと、穴は空けられん……俺が出るしか無さそうだ』

「残念だけど……事件じゃ仕方ないよ」

テレビに視線をやりながら総司は応える。

ニュースでは珍しく霧の中の連続殺人とは関係のない事件を流していた。

信用金庫のＡＴＭが重機で壊され奪われたというものだ。

恐らく、この件で駆りだされているのだろう。

『すまんな、急な事で……

菜々子は…どんな風だ?

悪いが、気にしてやってくれ……

……じゃあな』

それで通話は切れる。
先程までいた菜々子はもういない。
茜を連れて部屋に戻ってしまっていた。
総司は一つため息をついて、受話器を戻した。

テレビはニュースから天気予報に変わり、ゴールデンウィークの間はずっといい天気で行楽日和であることを告げていた。

■5／3

ゴールデンウィークの幕開け。
憲法記念日である。
特に予定もなく、朝自然に目が覚めるまで布団に包まっていた総司もようやく起きだし階下に降りると、菜々子と茜はテレビを見ていた。
縁側から見える外には洗濯物が干してあるのが見え、すでに家事の大半が終わっているようだった。

「あ、おはよ」
「おはよう」

気づいた茜と菜々子が声をかけてきて、総司はそれに返事をする。
そのまま戸棚から食パンを出して、バターを塗ってトースターに放り込む。
休日の朝は起きる時間がバラバラなので各自適当にある物を食べるようになっていた。

牛乳を飲んでいる間にパンは焼け、バターが程良く溶けて染み込んだトーストを咥える。
焼いていたのは1枚だけだったので早々に食べ終わり、残った牛乳を煽ったところでインターフォンが来客を告げた。
総司がコップから口を離す前に茜が玄関に向かう。

「そうじくん。
ちえちゃんだよ」

来客を確認して玄関の中に通した茜が戻ってきて総司を促す。
総司が顔を出すと、千枝は元気におっす、と手を上げた。

「おー、よかった、居るじゃん。
ね、今日ヒマなら遊び行かない？
雪子も来るし。
菜々子ちゃんと茜ちゃんも一緒にどうよ？」

茜に玄関まで連れてこられた菜々子はそれを聞いて総司を見上げる。

「え、えっと……」
「一緒に行こう」
「え…い、いいの？」

総司は頷く。
それに菜々子の表情が明るくなる。

「ま…まってて！
じゅんびしてくるっ！！」

言って菜々子は奥に引込み、ドタバタと音を立てた後駆け戻ってくる。
持ってきたのはピンク色の可愛らしいポシェット。
随分慌てて引っ張り出したらしく息が切れている菜々子の様子に総司は笑い、ちょっと乱れた髪を整えてあげた。
くすぐったそうに笑う菜々子。
茜もいつも買い物に持って行っているリュックを背負って来て、四人でジュネスに向かうこととなった。

／＊／

「ゴールデンウィークだってのに、こんな店でじゃ菜々子ちゃん可哀想だろ。
特に茜ちゃんなんかいつも来てるわけだし」
ジュネスのフードコートでフライドポテトを噛りながら陽介が言う。
雪子と陽介とフードコートで待ち合わせて合流したのだが、どこに行くでもなくこうして喋りながら軽食をつまんでいた。
ちなみに総司はトースト1枚じゃやはり足りなかったのか結構色々買い込んでおり、茜と菜々子はそれを分けてもらっている。
その微笑ましい様子を堪能していた千枝が、陽介の台詞に唇を尖らせて彼を睨んだ。
「だって他ないじゃん」
千枝の言葉は、稲羽を端的に表していた。
稲羽には娯楽施設が全くと言っていいほど無く、今は事件の報道等で多少有名になったものの、電車で沖奈市まで出なければ高校生が遊べるような所がない程の田舎なのだ。

だからこそ様々な物を扱うジュネスは時間を潰すのに持って来いの施設であり、商店街がシャッター街になってしまう原因の一つになってしまったのである。

「ジュネス、だいすき」

菜々子が機嫌よく言うと、陽介は感極まったように目をうるわせる。

でもね、と菜々子は少し顔を伏せる。

「ほんとは…どこか、りょこうに行くはずだったんだ。おべんとう作って」

「お弁当、菜々子ちゃん作れるの？」

千枝の問いに、菜々子はちらりと横を見る。

茜と、その向こうの総司。

それで弁当作成を誰がするのか分かった千枝がニヤニヤと笑う。

「へー、家族のお弁当係？すごいじゃん、”お兄ちゃん”」

からかいの言葉に総司の顔が少し赤くなる。

「た…ただの手伝いだよ」

そう言って手元の唐揚げを一つ口に放り込んでごまかして視線を明後日の方向に向けた。

菜々子も千枝の言葉に思うところがあるようで、チラチラと総司を見て何か言いたそうに口を動かす。

「……お前、料理とか出来んだ。
確かに、器用そうな感じあるけどさ」
「両親が出張ばっかでさ。
今回こっち来ることになったのも両親ともに海外に仕事に行っちゃったからだし。
作る機会が多かったから、一応、家庭科の延長ぐらいのは」

陽介の評価に総司は一応注釈しておく。
元々茜が来る以前の堂島家もカップ麺や惣菜が多かったが、料理を作る人間のいない男子学生の食生活はそれはひどいものだ。
両親ともにフルタイムの勤務な分、それだけ食費として結構な額を貰っていたが、それがインスタントな食生活を後押ししていた。
料理をやり始めたのも、コンビニ弁当とめぼしいカップ麺を制覇し終わって飽きたからに他ならない。

「あ、あたしも何気に上手いけどね、多分。
お弁当ぐらいなら、言ってくれれば作ってあげたのに、うん」

総司の言い様が、やろうと思えば誰にでも出来ると言っているように感じたのか、千枝が胸を張って主張する。
ただしその顔に浮かんでいる冷や汗を見ると、とてもそうだとは思えない。
それも語尾に”多分”とまで付けられたら信じる者はいないだろう。

「いっやー……無いわ、それは」

陽介も同じ事を思ったらしく、目の前で手をパタパタと振る。

「なんでムリって決め付けんの！？

んじゃあ、勝負しようじゃん」
「ムキんなる時点でバレてるっつの……
てか勝負って、俺作れるなんて言ってねーよ？
あ、けど、不思議とお前には勝てそうな気がするな……」
「あはは、それ、分かる」
「ちょ、雪子！？」

今まで黙っていた雪子にまで言われ、千枝は抗議の声を上げた。

「じゃあ、菜々子ちゃんが審査員かな。
この人ら、菜々子ちゃんのママよりウマイの作っちゃうかもよ～？」

何を言おうとしているのか予想が出来て、総司は慌ててボディランゲージで陽介を止めようとしたが気付いてもらえなかったようだ。
宙に伸ばした手を額に当ててため息を吐く。

「お母さん、いないんだ。
コウツウジコで死んだって」

菜々子の発言で、一気に辺りが静かになった気がした。
もちろん口をつぐんだのは総司達だけでフードコートの喧騒はそのままなのだが。
それでも近くの声がなくなっただけで随分静かに、そして空気を重く感じる。
千枝が声を潜めて陽介を嗜める。

「え、だってさっき瀬多、お弁当作りは手伝いだって……」
「……茜ちゃんの手伝いなんだ。
俺より得意で。

ジュネスで茜ちゃん、買出ししてるだろ？
普段から食事作ってくれてるんだ」
「うぇ！？
そ、そうなん？
手伝いだと思ってた……
そ、そっか…えっと……その……ごめん、知らなかったからさ……」

陽介が神妙な顔で菜々子に謝罪すると菜々子は、へーきだよと笑って言った。

「お母さんいなくても、菜々子には、お父さんいるし。
あかねちゃんも……」

菜々子は少し頬を赤く染めて総司を見る。
総司が先を促すと、菜々子は少し小さな声で言葉を続けた。

「…お兄ちゃんも、いるし」

先程の千枝が総司を”お兄ちゃん”と言ったことで、自分もそう呼びたかったらしい。

「今日はジュネスに来れたし、すごいたのしいよ」
「……そ、そっか」

屈託の無い笑顔を見せてくれる菜々子に、陽介はホッと息をつく。

「お姉ちゃんたち、いつでも菜々子ちゃんと遊んであげるからね！」
「うん、遊ぼう」

千枝が言い、雪子もそれに賛同する。
陽介は、残っていたジュースを一気に煽り、勢い良く立ち上がった。

「よし、菜々子ちゃん。
一緒にジュース買いに行くか！」
「うん！」

陽介と菜々子は連れ立って自販機の方に向かう。

「お兄ちゃん、あかねちゃん、なにかいるー？」

振り返って声を上げる菜々子に、総司と茜は顔を見合わせ、二人揃って席を立った。

■5／5

茜が朝早く準備して隠しておいた荷物を引っ張り出して居間に戻ると、玄関の扉を閉める音が耳に届いた。

「あれ。
そうじくん、でかけちゃった？」
「うん、まだ行ったことないとこ、さんさくしてくるって。
夕ごはんまでにかえってくるって言ってたよ」
「あちゃあ……休みの日ってそうじくんおそいから、だいじょうぶだとおもったんだけどな」

玄関の方に顔を向ける茜に菜々子が言う。
一昨日、昨日と休日は昼前まで寝ている総司は今日は早起きだったらしい。

サプライズを演出しようとしたのに一人居なくなってしまったのは残念だが、ワイルドの行動は自身の能力に関わってくる。
それを知ってる茜は仕方ないと納得して、菜々子に向き合う。

「どうしたの？」

菜々子が首を傾げる。
茜はいたずらっこの様な笑みを浮かべて、手に持った荷物を見せた。
押入れの中に押し込められていた大きなバスケット。
遠出は無理だが、その前に菜々子が行きたいと言ったジュネスには行った。
だから、今日は。

「おべんと、つくったんだ。
ピクニック、いかない？」

／＊／

折角の快晴。
折角のお弁当。
ならば芝生の上で食べたい、という事で二人は鮫川河川敷にまでやってきた。
休憩場所のベンチではなく、可愛らしいキャラクター物のビニールシートを広げて地面に座る。
土手なので少し地面は坂になっているが、転げ落ちる程ではない。
バスケットをなるべく平になっている部分に置いて蓋を開けると、菜々子が感嘆の声を上げた。
中にあったのは色々な具材が挟まれたバケットやベーグル。
サイドメニューの皮付きフライドポテトこそ冷凍食品のようだが、

サンドウィッチの方は凝っている。

「サンドウィッチだーっ！！
すごーいっ！」

「3人ぶんのつもりでつくったから、おおいよ。
のこったら夕ごはんにまわすから」

「うん！
いただきまーす！」

菜々子はベーグルサンドの一つを取ると、口に頬張る。
片側に力が入ったことによって反対側から具材が溢れそうになって慌てて防ぐ。

「あかねちゃん！
これ、すごくおいしいよ！」

「ふふ、ありがと」

嬉しそうに笑う菜々子に笑い返し、茜もサンドウィッチに手を伸ばす。
固いバケットは中々噛み切れないが、噛んでるうちに味が出てくる。
風も気持ち良く、土手の緑に川の反射する光が綺麗で、ピクニックの雰囲気は十分味わえる。
サンドウィッチの具材の事や最近あった楽しい出来事を話していると、背後から声を掛けられた。
振り向くと、茜や菜々子と同じ年頃の子供が数人、土手の上の道路から二人を見下ろしていた。

「ななこちゃん、何してるの？」
「その子、見ない子だね。

しんせき？」

子供達が興味深そうに茜を注視する。
菜々子は一つ頷いて、茜を紹介してくれた。

「あかねちゃんっていうの。
しんせきじゃないんだけど、今、うちにすんでるんだよ。
あかねちゃん、こっちは学校のトモダチ。
こっちからヨーちゃん、ミワちゃん、タケヨシくん」
「よろしくね！
おちかづきのシルシに、サンドウィッチどう？」

各々挨拶を交わして、子供達は茜の示したバスケットを覗き込む。

「うわ、すげっ！
これあかねちゃんが作ったんか？」

タケヨシが驚きの声を上げる。
他の二人も同じ思いらしく、目を丸くして茜を見た。

「ざいりょうきって、はさんだだけだよ」
「すげー」

すごいすごいと連発するタケヨシを見たミワが、茜にこっそり近づいて、自分に作り方を教えて欲しいと申し入れた。
それに、茜は笑って頷く。

「さ、たべて、たべて」

思いがけず大人数になったが、元々食べ盛りの高校生男子を考慮

した個数を作っていたので全員にサンドウィッチが行き渡る。
道を行き交う大人たちが、明るく談笑する子供達を横目で見て目を和ませた。

／＊／

バスケットの中身が空になっても夕暮れまで新しくできた友達と話し込んだ茜と菜々子が家に帰ると、すでに総司は散歩から戻っていてテレビを見ながらお菓子を嚙っていた。

「おかえり。
どっか出かけてたんだな。
何か良い事あったか？」
「うんっ！
ともだち、いっぱいできたよ」
「そっか、それはなにより。
こっちも新しい友達ができたよ」

総司の方も何か得るものがあったらしく、機嫌がよさそうだ。
茜はバスケットをテーブルに置くと、夕飯の為に用意しておいたタレに漬け込んだ肉を冷蔵庫から取り出してエプロンをつけた。

「やくだけだから、すぐできるよ。
テレビでも見て、まってて」
「菜々子も、なにかつくりたい」
「じゃあ、サラダたのんでいい？
トマトと、レタス。
あとアボカド」
「うん！」

スープは温めただけのパック入りのポタージュ。
メインはタレに漬け込んでおいて焼いただけの生姜焼き。
そして切って盛りつけただけのアボカドサラダ。
ご飯は予約機能のおかげでもう炊きあがっていて保温状態になっている。
速さ優先で手間を省いてある上、更に菜々子が手伝った分、かなり素早く夕飯の準備が整う。
ＢＧＭは付けっぱなしのテレビから流れるニュースだ。

『先頃、稲羽北のＡＴＭが重機で壊され持ち去られた事件で、容疑者逮捕です。
逮捕されたのは、重機盗難を届けていた会社の元従業員プメナ・スシン容疑者、２６歳です。
警察の調べによりますとスシン容疑者は……』

机を拭いたりドレッシングを出したりと雑用をこなしていた総司がニュースを聞いて顔を上げる。

「これ、堂島さんが追ってた事件じゃなかったっけ？」
「ジケン、かいけつしたのっ？」

菜々子が目を輝かせる。
それと同時に玄関が開く音と、ただいまと言う男の声。

「おかえりなさい！」

駆けつけて出迎えた菜々子の頭を堂島は撫でる。
数日ぶりに会えて嬉しいらしい菜々子はぴったりと堂島にくっつき、食事を並べた後もすぐ隣に腰を下ろした。

「…ったく、病欠で何日穴空ける気だ……
ほんっと最近の若いのは……
……菜々子、悪かったな、また約束破っちまって……」
「あのね、お兄ちゃんたちがあそんでくれた」

バツが悪そうにする堂島に、菜々子は休みにジュネスに連れて行ってもらったことや今日のことを話す。
今まで恥ずかしがって名前も呼ぼうとしなかった総司の事を”お兄ちゃん”と呼んだ菜々子の変化に気づいたのか、堂島は小さく笑みを浮かべて総司に顔を向けた。

「そうか。
……ありがとうな」

礼を言う堂島を挟んだ向こう側に何かが見え、菜々子が少し体をずらす。
そこにあったのは紙袋。
そのロゴを読み取った菜々子が声を上げる。

「あ、ジュネスの袋！
なに？」
「はは、もう見つかったか。
ま、今日は5月5日だからな。
菜々子にプレゼント買ってきたんだ」

堂島は袋から畳まれた服を出し、菜々子に差し出す。

「やったーっ！！」

受け取った菜々子は服を広げて掲げる。
キャラクター物のTシャツだ。
胸の部分に大きくプリントされたそのキャラクターを見て、総司は微妙な顔をする。
総司には、デフォルメされたその生物が何か判断出来なかった。
だが、目付きがマヌケでイラストとして、デザインとして微妙なのは分かる。
それでも菜々子は嬉しそうだ。
ちなみに、堂島が言うにはカモノハシらしい。

「選ぶのにえらい時間くったけどな、ハハ。
気に入ったか？」
「なんか、ヘンな絵がかいてあるー。
へんなのー、あはは、やったー」

やはり、女の子の感性からしても変らしい。
妙に総司がホッとしていると、堂島は袋からもう一着服を取り出した。
それを、今度は茜に差し出す。

「ほら、お前にも。
菜々子だけってのは不公平だからな。
色違いだ」
「あ…ありがとう！！」

驚いたように茜が礼を言い、服を広げる。
そこにはやはり間抜けな目付きの謎生物、もといカモノハシ。

「えへへ……おそろいだね！」
「うん、そうだね」

嬉しそうに菜々子が笑い、茜も満更でもなさそうな様子で頷く。

「こっちはお前のだ」

そして、総司の目の前に差し出される布。

まさか自分のまでおそろいかとも思ったが、二人のとは違い、色使いが派手で違う物だと分かる。

広げると、Ｔシャツではなく水着だった。

微妙な柄なのは変わらないが、水着ならそこまで気にはならなそうだ。

「……ありがとう」

「まぁ、とっとけ。

そのうち要るだろうと思ってな。

さて…じゃ、メシにするか」

言って、堂島は目の前に置かれた箸を取る。

ぴったりと菜々子にくっつかれて少し食べにくそうにしながらも、堂島の顔には笑顔が浮かんでいた。

染物屋の息子

■5／12

授業の終了を告げるチャイムの音が鳴り響く。
今まで静かに筆記具を走らせていた生徒達が、一斉にそれを机の上に置く。
机上のプリントが速やかに回収され、教師が出て行くと一気に喧騒が広がった。
4日間の中間テストがようやく終わった今、開放感はものすごいものがある。
陽介もそのようで、思い切り背を伸ばして凝り固まった肩を揉みほぐした。

「やーっと終わったなー。
うあー、この開放感！
これだけは全国共通だな！」
「ちょっとうっさい！」

ノートとにらめっこして、雪子と答え合わせをしていた千枝が陽介を睨みつける。
だが千枝は成績のいい雪子と尽く違う答えを書いていたらしく、途中で声を上げてノートを机に放り投げた。
教室のあちこちで、千枝のように友達と答え合わせをする者、おしゃべりに興じる者といくつかグループが出来ている。
その時聞こえてきた会話も、そんなグループのものだった。

「聞いた？
テレビ局が来てたってよ」

最近、マヨナカテレビやテレビの世界と関わった関係で、総司はテレビ関連の話だとつい耳をすませてしまう。
これも一つの情報収集の形だ。
他の仲間達も同じようで、直接顔を向けないまでもそのグループの会話を聞き取ろうとしていた。
話の内容は、霧の事件に関係するものではなく中央道路に出没する暴走族の事だった。
たまにスペシャル番組でやっている、警視庁２４時とかそういったものの取材のようだ。

「暴走族？」

会話の内容に雪子が首を傾げる。
雪子は心当たりがないようだが、千枝はあるらしく、ウンザリした顔になる。

「あー…たまにウルサいんだよね。
雪子んちまでは流石に聞こえないか」
「うちなんか、道路沿いだからスゲーよ」

それぞれの自宅の位置で騒音被害に随分差があるようだ。
雪子の家は隠れ家的な静かな旅館という事もあって町から外れた所にあり、全く被害はないらしい。
総司も越してきてそれほど時間は立っていないが、今のところ騒音被害にはあっていなかった。

「うちの生徒も居るらしいじゃん？」
「あー確か、去年までスゴかったってヤツがうちの１年に居るとか、たまに聞くな。

中学ん時に伝説作ったって、ウチの店員が言ってたっけ。
んー、けど…暴走族だっけな……？」

千枝が言って、陽介が肯定しつつも首を傾げる。
又聞きだけあって信憑性は微妙なラインだ。
だが、陽介の台詞の一部に雪子の顔が輝く。

「で、伝説って？」

雪子の興味深々と言った様子に、千枝は苦笑を浮かべる。

「あー、たぶん、雪子が考えてるのとは違うと思うよ？」

■５／１３

『静かな町をおびやかす暴走行為を、誇らしげに見せ付ける少年たち……
そのリーダー格の一人が、突然カメラに向かって襲いかかった！』
『てめーら、何しに来やがった！』

新聞のテレビ欄で、噂になっていた番組があるのに気付き、総司はその番組を見ていた。
映像が揺れ、カメラに手を伸ばす少年の姿が大写しになる。
あまり編集する気はないようで、お情け程度に目元だけはボカシを入れてあるものの、殆ど白くなるまで脱色して後ろに流した髪や、肩にマントのように制服を羽織っている姿がハッキリと見て取れる。
声も変えてないので、この少年を知っている人間が見たら一発で分かるだろう。
事実、堂島が新聞から顔を上げ、この声、と呟いた。
テレビの中の白髪の少年が声を荒げる。

『見世モンじゃねーぞ、コラァ！！』

堂島はため息を吐く。

「あいつ、まだやってんのか……」

「お父さん、しりあい？」

「うーん、まあ、仕事の知り合いだな。

”巽完二”……ケンカが得意で、たかだか中３でこの辺の暴走族をシメてた問題児だ。

けど確か高校受かって、今はどっか通ってんじゃなかったか？」

どうやら、白髪の少年…巽完二は警察に覚えられるくらいの補導歴があるようだ。

高校生と聞いて、総司は完二の羽織った制服を見る。

最近とてもよく見るデザインの学ランに、とても見覚えのある校章。

つまりは八十神高等学校の制服だった。

「あーあー、折角顔にボカシかかってんのに丸分かりだなオイ。

こいつ、実家が老舗の染物屋でな。

確か…母親が夜寝られないから、とかで毎晩走ってた族を一人で潰しちまったんだ。

動機はともかく、暴れ過ぎなんだよ……

これじゃ、その母親が頭下げる事んなっちまう」

「……それはまた…凄まじい動機で。

あれ、でもそれなら暴走族のリーダーってわけじゃないのか」

総司が首を傾げる。

完二の後ろを、バイクに乗った少年達が蛇行しながら走っていく。

それを見て、菜々子がポツンと呟いた。

「ぼーそーぞく…って、かっこいいね」

どうやら蛇行運転を曲乗りあたりと勘違いしているようだ。

茜も怒鳴り散らす完二を見ながら、うんうんと頷く。

「あーいう人って、あんがいやさしいよ。

りょうりがじょうずだったり、わんこのなまえをちゃんづけでよんだり」

「……子供に悪い影響与える番組だな……

総司、お前友達やなんかは……」

堂島は総司を見る。

そして、少し沈黙する。

「……いるようだな、色々と」

何やら難しい顔をして堂島は言う。

「お前の交友関係にまで、どうこう口出しするつもりはないが……

その、な。

……お前ら、よくジュネスに溜まってるらしいな」

堂島の探るような視線が痛い。

先日雪子の復帰で集まった日、茜がタイムセールに降りた後、仕事をサボってる足立に会ったのだが……

ちくったな、と総司は表情には出さないものの苦々しく思う。

「ほら、花村はジュネスの息子だから。

買い食いもできるし、ダベるのに向いてるんだ」
「ああ、そうだな。それ自体は何でもない。
問題なのは……
なんでしょっちゅう家電売り場に出入りしてるか、だ」

誤魔化そうと口を開くが、堂島は手強い。
弱いところをピンポイントで突いてくる。
言葉を探していると、それまでテレビを見ていた菜々子が堂島を呼んだ。

「お父さん……」
「あ、いや、違うぞ。
これは事情聴取なんかじゃなくてな……」

菜々子の不満そうな声に、堂島が焦ったように取り繕う。
だが、菜々子の不満はそこではなかった。

「お兄ちゃんとばっかり、ずるい」

菜々子の言葉に、堂島が固まる。

「……何？」
「だって……今日は、お父さんいるのに……
もっと菜々子ともおはなししてよ」
「……お前とはいつも話してるじゃないか」

呆れたように言う堂島だが、菜々子は引かない。

「いつもって、いつ？」

その言葉に、衝撃を受けたように堂島の動きが止まる。

「菜々子も……
いっしょに、いる……」

そう言いながらも菜々子は眠そうに目をこする。

「ったく……
もう寝る時間だろ、お前は。
今日はもう寝なさい。
今度…遊んでやるから」
「……ぜったいだよ」

堂島の言葉に、しぶしぶとだが菜々子は立ち上がった。
それに茜が付き添う。

「あのね、どうじまさん。
そうじくんがジュネスうろつくの、あたしのかいもの、まっててくれてるからだよ。
にもつはこぶの、手つだってくれるの。
……それじゃあ、おやすみなさい」
「……ああ、そうなのか。
分かった。
この話は、終わりだ。
おやすみ」

見事にフォローしてくれた茜に総司が目線で礼をすると、かすかに茜は頷いて居間を後にする。
茜と菜々子が出て行くと、堂島はソファに思い切り体を預けた。

「まいったな……”いつもって、いつ？”か……」

疲れたように息を吐く。

思い当たるふしがいくつもあるようだ。

この間の、ゴールデンウィークの休みが潰れた時のように、仕事で会話がなくなることがよくあるのだろう。

どことなく辛そうな表情で堂島は言う。

「正直な話、あの子のことは妻…あいつの母親に任せっきりだったからな……

その…どう接すればいいか、加減がな、よく分からねえんだよ。

それに…俺じゃあ、あいつの家族は務まらん……」

「務まる、務まらないじゃなくて、貴方は親だ。

家族だろう？」

「正直だな、お前は」

堂島は苦笑いを浮かべる。

だけどな、と堂島は続ける。

「血が繋がってりゃ、”家族”か？」

その言葉に、総司は何も言えなかった。

総司の両親は、何度も仕事で全国を飛び回っていた。

長期になることも多く、その場合は総司も転校を余儀無くされてきた。

今回だけではないのだ。

海外ということもあって、今回は親戚に預けるという手段がとられたが、2年と同じ地にいたことはない。

正直、陽介に話しかけられなくてもどうとでもなったのだ。

担任である諸岡に落ち武者だと紹介されて、”誰が落ち武者だ”

と平然と返せるほど、総司は転校による緊張とは無縁になるほどに慣れていた。
確かに、総司は”お前の両親は家族か？”と聞かれても、”まあ、血縁上そうなるんだろうな”としか返せない。
ようするに、総司にとって家族とはその程度のものなのだ。

「そうじゃない……」

重い空気の中、堂島の呟きだけが総司の耳に届く。

「そうじゃ…ないんだ……」

／＊／

次の日、雨は降った。
一週間ぶりの真夜中に降る雨。
マヨナカテレビがほんやりと人影を移す。
だが、映ったのは今までの推理を覆すものだった。

ぼんやりとした影は誰かまでは判別できない。
だが、間違いなく総司と同じ年頃の――男、だった。

■５／１５

「えー、それでは稲羽市連続誘拐事件、特別捜査会議を始めます」

ジュネスのフードコート。
場所こそは同じだが雨が降っているのでいつものプラスチック製

のテーブルではなく、屋根付きの木のテーブルとベンチにメンバーは集まっていた。
集まった面子の前で妙に勿体ぶった口調で陽介が口火を切る。

「ながっ！」

その長ったらしい名称に千枝がツッコミを入れる。
だけど雪子は満更でもなさそうだ。

「じゃあここは、特別捜査本部？」
「おー、それそれ！
天城、上手いこと言うな」
「”トクベツそーさほんぶ”……
んー、そう聞くと惹かれるものが……」
「なんか、かっこいいね！」

やはりそれらしい名称が付くとやる気が出るものだ。
盛り上がる中、陽介が咳払いをして話を戻す。

「つーわけで、昨日の夜だけど……」
「映ってたのは誰だろうな？
俺はちょっと分からなかった。
誰か、この人かも、って思う人いる？」
「うーん、ちょっと分かんなかったなぁ……
でもアレ、男だったよね？」
「ああ。
それと多分、高校生（タメ）ぐらいだと思うんだけど」

千枝の確認に、総司が補足する。

「私も、あんな風に映ったんだ……」

実際にマヨナカテレビを初めて見た雪子が感慨深げに言う。

被害者の共通点だと推理した”一件目の事件に関係する女性”という前提条件は崩れ、個人の特定にも至れないようだ。

だが、雪子が事件に遭った夜から内容がバラエティのようなものに変わった前例があるので、まだ拐われていない可能性は十分にあった。

前後で映像の鮮明度が変わるのは、以前クマが言った通り中の人物が見えてしまっているということなのだろう。

今回のマヨナカテレビの視聴で特定できなかったのは残念だが、まだはっきりと映ってない以上、先回りのチャンスは残っている。

陽介も千枝もどこかで見たことがある気がすると主張していたし、昨日から降り続いている雨は明日までは止まないらしい。

もう一度各自マヨナカテレビをチェックするということで今回は解散となった。

／＊／

ザザ……ザ…ザザ……

人影は、見えない何かに拳を振るう。

映像はやはり、ぼやけたまま。

霧に包まれて、人影は腕を振るう。

……ザ…ザザザ……

■5／16

人物の特定は完了した。

”巽完二”。

見たことがあるのは当然だ。

彼が暴走族のリーダー格の人間として紹介されたあの番組を見たばかりだったのだ。

総司は堂島から染物屋の息子だと聞いていたが、雪子は旅館の土産物として直接の取引があるということで、総司より詳しいことを知っていた。

今は完二と直接の関わりはないが、母親の方とは今でも会話することがあり、接触するならそちらにしようと話はまとまる。

普段テレビの中に入る時や話し合いをする場合はフードコートに集まるのだが、その日商店街を集合場所にしたのは、染物屋が商店街にあるためだった。

神社の鳥居の下で電話で呼び出した茜が合流するのを待ち、総司達は染物屋の暖簾をくぐった。

染物屋・巽屋。

神社の隣に店を構えるそこは、商店街に残る数少ない店の一つだ。

店内に入ると、着物の上品な女性と、客らしい黒いコートの小柄の少年が何かを話している所だった。

入り口を開ける音に気づいたようで、二人の視線が総司達に集まる。

小柄の少年は手ぶらで、観光客にも見えずあまり客らしくない。

中性的な整った容姿で年齢的に言えば総司とそれほど変わらなそうだが、キャスケットを深くかぶって表情を隠していても幼さが目立っていた。

その少年の側にいた店員らしい着物の女性が、総司の後ろから入ってきた雪子を見て目を和ませる。

彼女が巽屋の女主人、巽完二の母親だった。

「あら、雪ちゃん。
いらっしゃい」
「こんにちは」

雪子が挨拶を返す。
それに合わせて少年は退去の意を完二の母親に伝えた。

「それじゃあ、僕はこれで」

その言葉に少し残念そうに完二の母親は頷く。

「あんまりお役に立てなくて、ごめんね」
「いえ、なかなか興味深かったです。
ではまた」

完二の母親に目礼し、踵を返す。
一行とすれ違う時、一瞬少年と総司の視線が合う。
だが総司が何か言う前に、少年は小さく会釈をしてそのまま店を出て行く。

「なんだ……？
変なヤツ」
「見ない顔だよね」

陽介と千枝がボソボソと呟く。
観光客にも見えなかったが、地元の人間でもないらしい。
雪子は少しでも情報を集めようと完二の母親と世間話を始め、四人は話の邪魔にならないように静かに商品を眺める。
老舗の染物屋ということで、色使いも落ち着いてて上品な物が多い。

巾着や染物を使った小物、ハンカチ、スカーフ。
様々な柄は目を楽しませる。
特に男勝りな千枝はともかく、茜は興味深そうに見て回っている。
そんな中、総司は見たことのある色彩を目の端に捉え、立ち止まった。
その正体は、一枚のスカーフだった。
同じ柄のない染物の中、それだけが見覚えがある。
千枝が総司の視線に気づいたようで、同じスカーフに目を止めた。
陽介も寄ってくる。

「あれ、このスカーフ……
コレ、どっかで見たような……」
「ん？　あー、見覚えあんな……
何処で見たっけか……」

やはり、総司の気のせいではないらしい。
しばらく記憶の中を探るように宙を見つめた後、千枝が声を上げる。

「分かった、あそこだ！！
テレビん中！！」

それで総司も思い出す。
初めてテレビの中に入った時。
迷い込んだ女性の部屋。
山野真由美の心の部屋の天井から垂らされたロープの先で輪になっていたスカーフと同じものだ。

「そうか、顔無しのポスターあった部屋の……！
ということは、山野アナの……」

「あなたたち、山野さんとお知り合い？」

呟きを聞きつけて、雪子と会話を続けていた完二の母親が顔を総司達に向ける。

「あ、ええ、ちょっと……

えっと…もしかして山野さん、これと同じの持ってました？」

「ええ、それは元々、彼女に頼まれたオーダーメイドだったの」

陽介の言葉に完二の母親は頷く。

「男物と女物のセットだったんだけど、やっぱり片方しか要らないって言われてね。

仕方なくもう1枚は、こうして売りに出してるのよ」

「ヤバイよ…最初の事件と関係あるじゃん……

どうしよう……」

「どうしようって……」

片頬に指を当てて困ったように首を傾げる完二の母親の言葉に、千枝が不安そうな声を上げる。

お互いに顔を見合わせる。

そのタイミングで、店の奥からインターホンの音が響いた。

店の奥が自宅になっているらしい。

「まいどー、お荷物でーす」

「あ、はーい」

完二の母親は店の奥に向かって声を上げる。

そして雪子に向き直って残念そうな顔をした。

「ごめんなさい、ちょっと外すわね」
「あ、いえ、あたし達もう帰りますから」
「おばさん、また今度ね」
「そう？
じゃあ、お母さんにもよろしくね」

それぞれ完二の母親に会釈をして店を出る。
扉を完全に閉めたところで、全員が顔を近づけた。

「ここもやっぱり、最初の事件と繋がってる……
けど、たかがスカーフだろ？
そんなんで狙うか……？
くっそ、どういう事なんだ……」

陽介が言い、そのままそこで思考を整理しようとするが、雪子が道路の向かい側にいる完二に気付き、隠れることになった。
だが、商店街の建物と建物の間には隠れられるほどのスペースは空いていない。
そこで巽屋の脇にある郵便ポストに身を寄せることになった。
隠れたところで突っ立ったままの茜に気付き、総司が慌てて抱えてポストの影に戻る。
しかし茜一人でも無理があるのにプラス高校生四人では隠れきれるはずもない。
ぼやく千枝に、会話が聞こえないと陽介が叱咤する。
完二は、先程店を出た少年と話をしていた。

「あ、明日なら別にいいけどよ……
あ？　学校？
も、もちろん行ってっけど……」
「じゃあ、明日の放課後、校門まで迎えに行くよ」

どうやら、待ち合わせの約束のようだった。
だが会話のぎこちなさから知り合いというわけではなさそうだ。
去っていく少年を見送りながら、完二が小さく呟く。

「きょ、きょうみって言ったか、アイツ……？
男のアイツと…男のオレ……
オレに…興味……？」

戸惑った様子で視線を彷徨わせる完二。
その視線と、隠れきれてない総司達の視線がばっちりと合った。

「あん？
何見てんだぁゴラァァ！！」

その恫喝に、思わずポストの影から飛び出して逃げ出す。
商店街の少し傾度がある坂道を勢い良く下っていく。
北側に位置する巽屋から南側の出口に近い本屋の前まで逃げて、
ようやく総司達はその足を止めた。
恐る恐る後ろを振り返るが、追いかけてくる様子はない。
ようやく一行は息を吐いた。

「ビビった～。
テレビで見るよか迫力あんね……」
「あははははっ！
おもしろ～い！！
そうじくん、もういっかい！　もういっかい！！」

千枝が胸に手を当てて動悸を抑えようとする中、茜がご機嫌な様子で声を上げる。

総司に抱えられて隠れていた茜は、そのまま総司に抱えられたまま坂を駆け下りることになったのだ。
駆け下りる時の振動、流れる景色は茜のお気に召したらしい。

「今度、ね」

陽介達の息も切れていたが、もちろん茜を抱えていた総司の息は皆より絶え絶えで、ようやくそれだけ言うと茜を地面に下ろした。
総司の息切れが治まってから、状況の整理を始める。
最初に言葉を発したのは雪子だった。

「それより……昨日の映像って、やっぱり完二くんだね」
「ああ……
それに、思ったんだけどさ。
例の”共通点”…母親の方なら該当してんだよ。
一件目の山野アナの関係者で、しかも女性だ。
でも、テレビに映ってたのは、息子の完二の方……どういう事だ？」
「映った人間が拐われるのが確定なら、やっぱり完二だとは思うんだどな。
今まで女性だったのは偶然重なっただけなのかもしれない。
ただ、決め付けることは出来ないけど」

確かに前の推理の通り、一件目の被害者との繋がりはあった。
狙われるのは母親の方か完二の方かという話になるが、今までの被害者と同姓ではあっても、やはりマヨナカテレビに映った完二の方が可能性は高いだろうと総司は結論付ける。
考えて見れば、雪子の時から一件目との繋がりは間接的なものになっていた。
宿の娘とは言っても、実際山野真由美と関わったのは女将である

雪子の母親であって雪子ではない。
それならスカーフを直接売った完二の母親より完二の方が狙われてもおかしくなかった。
だけど、動機は更に分からなくなる。
ここまで関係が薄くなれば口封じにも恨みの線も考えにくい。
そこで総司達は次の日張り込みをすることにした。
狙われる可能性の高い完二と、狙われる可能性を消すことが出来ない完二の母親とを。
母親の方と面識のある雪子と雪子の携帯の番号を知っている千枝が分かれ、雪子と総司が巽屋の張り込み担当、千枝と陽介が完二の尾行となる。
家事の関係で茜だけが役割を外され、少し不満そうにするものの、話はそのように決まった。

■5／17

「ターゲットは登校しているな！？」
「登校は確認済みであります！
ターゲットは本日、昼休み終了間際、母親の手作り弁当持参にて登校。
現在は、トイレで髪の毛いじってるであります。
ターゲットはやたらソワソワしており、絡まれたらイヤなので出てきたであります！」

校門の影で待機していた千枝が校舎の中から出てきた陽介に声を掛け、陽介は最敬礼で答える。
陽介・総司が校舎内にいる間の完二の尾行、雪子・千枝が校門で昨日の少年が来るのを見張っていたのだ。

「あ、来た！」

小さく千枝が声を上げ、全員に注意を促して校門に身を寄せる。
玄関から髪を整え終わったらしい完二が出てきていた。
完二は一行に気づかずに横を通り過ぎていく。
丁度、校門に続く坂を昨日の少年が登ってくるところだった。
完二の目の前まで来ると、少年はニコリと微笑む。

「ごめん、待たせちゃったかな」
「や、オ、オレも…今、来たトコだから……」

少し目をそらして、あまつさえ頬を朱にそめて答える完二。
表情の固まった総司達を背に、二人は連れ立って坂を下りていく。

「な…なんだ、アレ……」

陽介が呆然と呟く。
それは仕方ない事だろう。
台詞だけ見ればカップルのようだが、実態は美少年とテレビで暴走族のリーダー格と称されても違和感のない不良だ。
美女と野獣以上に違和感がある。
その姿が随分小さくなって、ようやく千枝が我に返る。

「と、とにかくさっ！
追っかけないと見失っちゃうよ！」
行くよ、花村」
「よし、じゃあバレないように、俺ら恋人同士のふりで行くぞ！」
「やーだーっつの！
見られなきゃ必要ないっしょ？
ったく……さっさと尾行するよ！」

前日決めた通りに、千枝と陽介が連れ立って完二を追いかけていく。

「あの二人、大丈夫かな」

騒がしく坂を駆け下りていく二人を見送りながら総司が呟く。
それもまた仕方ない事だろう。

／＊／

所変わって、辰姫神社前。
横目で巽屋の様子を確かめながら、総司は鳥居にもたれかかっていた。
一人なのは、雪子が巽屋に完二の母親の話を聞きに行っているからだ。
しばらくして戻ってきた雪子の手には、近くの自販機で買ってきたらしい缶ジュースがあった。
その内の1本を総司に渡す。

「お待たせ。
……これ、飲み物」

総司は礼を言って缶のプルタブを開ける。
中身を呷って、その刺激から総司はすぐ缶から口を離した。
ラベルを見ると、胡椒博士ＮＥＯと印刷してあった。
炭酸飲料なのだが、妙に刺激が強い。
一気には飲み干せず、チビチビと総司がジュースを飲んでいる横で、雪子は巽屋での事を報告する。

「お店の方は特に変わった事は無いみたい。

このまま何もなければいいけど……
犯人、来るかな……？」
「来たら守ってやるよ」

不安そうにする雪子に、総司は言う。
それは、自然に出た言葉だった。
ずっと見て見ぬふりをして関わり合おうとはしなかった総司に出来た仲間達。
存外総司の中で大きな存在になっていたようだ。
もう今までのようにそっとしておいて、再び土地を移動する準備をしておく事はできそうになかった。
それに、一度は助かったからといって、もう安全だとは限らない。
今回の連続誘拐事件で初めての助かったケースなのだ。

「また狙われる可能性もあるから。
注意しとかないとな」
「あ、そ…そうだよね、うん。
……ありがと」

赤くなった雪子は顔を隠すように缶に口を付ける。
そして、ぽつりと頼りにしてる、と呟いた。

「もし本当に来たら、ちょっと怖いけど……
私も、捕まえるの協力する。
みんなに助けてもらったのに、自分だけ何も出来ないなんて、嫌だから。
……私にも出来る事あるって思うから……
……な、なんでこんな話ししてるんだろ。
な、なんか緊張してるみたい」

気を落ち着かせる為に、雪子は手に持ったジュースを呷った。
盆ジュースと名付けられているそれは、清涼飲料水なのだがホットだ。
何故か”あたたか～い”と表記された所から出てきたせいなのだが、雪子には顔の温度が伝播したように感じられた。

「同年代の男の子と二人だけで話すとか、そういうの無かったから……
千枝もね、ああいう性格だから男の子の友達多いけど……
今はあなたや花村くんと一緒が一番楽しいみたい。
……。
……私も、楽しいよ」

雪子の言葉に、総司が微笑む。

「ケータイ番号、聞いていい？」
「え？
う、うん。いいよ。
家の仕事で出られない時あるかも知れないけど……いつでも、かけて」

赤外線通信で番号を交換する。
こうして、総司はどんな男にも果たせなかった”天城越え”の第一歩、アドレス交換を果たしたのだった。

／＊／

一方。
完二と少年を尾行する千枝と陽介。
悠然と周りの景色を見ながら話を振る少年とは違い、完二は少し

赤くなったり焦ったり落ち着きがない。
街路樹に身を寄せてしゃがみこんだ千枝が唸る。

「アヤシイ……」
「ああ……どう見ても俺ら、不審人物だな」

千枝の後ろに立った陽介も唸る。
確かに、細い街路樹にへばり付くように尾行を続ける二人は怪しいと言う他ない。
だが、完二達に注意を払っている千枝は自身の不審行動には気づいていないらしい。

「いや、あたしらでなくて、前の二人。
な～んか、ミョーな雰囲気が……」
「ミョー？　どの辺が？」
「どの辺って、うーん……
なんてったらいいか……
あたしの気のせいなんかな……」

千枝の言っている意味が分からず、陽介は首を傾げる。

「それよりさ、店に行った二人、どうなってるかな？」
「さあなー。
案外アイツ、天城の事口説いてたりして」
「まっさか。
アンタと違うでしょ」

陽介が尽く雪子にアプローチを失敗している事を知っている千枝が笑う。

「第一、雪子ってそういうの興味無いしね。
……てゆーか、彼ってもしかして、雪子の事気に入ってんの？」
「や…それはどうだろ。
あいつが転校してきた早々、この騒ぎだろ？
あんまりそういう話、する暇なかったし」

本来なら、そういった話でも盛り上がりたかった陽介だが、事件の捜査にテレビ内の探索、そうでなくても人脈を広げて忙しそうな総司とは馬鹿話をする機会に恵まれていなかった。
どうしても二人で会話していると事件の話になってしまうのもある。
陽介がある意味有名なのもあって、バイトの待遇改善やら苦情やらで邪魔されたこともあった。
そんな事を言い合っていると、頭上に影が落ちた。
千枝と陽介、そろりと顔を上げるとそこに強面の男が立っていた。
正確に言うと、巽完二が立っていた。

「……おうコラ。
何してんだ……お前ら。」

二人の表情が固まる。

「あ、いや、えーっと……
通りすがりの…バカップルです！」
「誰がよ！」
「バカ、いちいち突っ込むなよ！」

ジリジリと迫ってくる完二に対して、及び腰で言い訳しながら二人は下がっていく。

「テメェら、たしか昨日の……」
「あ、あはははは……！
や、やだなー、たまたま後ろ歩いてただけだって……」
「あの、二人の邪魔とかするつもり無いし、なんもアヤシイとか思ってないし……」
「ア、アヤシイ……！？」

千枝の言葉に完二が反応する。
その表情を見て、慌てて二人は背を向けて走りだした。

「ちょ、待て、コラァ！！
そっ、そんなんじゃねえぞっ！
お、おうコラ、マジちげーかんな！
あぁ！？
聞いてんのかゴラアアァ！
マジ、ぜってー、ちげーかんな！！」

／＊／

這々の体で逃げ出した陽介と千枝は、巽屋張り込み組である総司と雪子と合流し、本日は引き上げることとなった。
次の日の張り込みと尾行を約束して。

だが、その日のマヨナカテレビ。
そこにはハッキリと映る完二の姿があった。

折角の満月だというのに、夕飯時から降りだした雨で月を見ることは出来なかった。
今思えば、”あの年”は雨が少なく、満月の日の雨は一度足りともなかった。
それは結構運が良かったのかもしれない。
あの閉ざされた時間の中、雨がどうなるかは分からなかったが、水は流れていたように茜は記憶していた。
どちらにしろ、屋外の戦いはより厳しいものになっただろう。
降りしきる雨を見ながら、茜はそんな事を思う。

「そろそろだ」
「……うん」

総司が言い、茜は開けていたカーテンを閉める。
時計の秒針、長針、短針が0を指し示し、テレビにノイズが走る。

ザザ…ザ……

■5／18

「旅館のちょっとした用のついでを装って、巽屋さんに電話してみたんだけど……
やっぱり完二くん、いないみたい。
どこかへ出かけちゃって、そのまま帰ってきてない、って。
よくある事だって、完二くんのお母さんは言ってたけど……」

席を外して電話をかけていた雪子が結果を報告する。
完二のマヨナカテレビの内容が変わった次の日。
メンバーはいつものフードコートに集まっていた。
陽介の言葉を借りるなら、特別捜査会議ということになる。

「今までの事考えるとさ。
完二はもう、あの中なんじゃねーかな……」
「それにしても……マヨナカテレビって、結局何なんだろ」

千枝が首を傾げる。
マヨナカテレビは、元々”雨の夜の0時に、ついてないテレビをじっと見つめると運命の相手が映る”といった噂だった。
切っ掛けがないと普通は試さない、だけど試せば誰にでも、何度でも見ることが出来る不思議な噂。
実際は運命の相手が映るのではなかったのだが。
クマは、マヨナカテレビの映像は失踪者自身が生み出していると言った。

「あのね、マヨナカテレビのことなんだけど」
「茜ちゃん？」

マヨナカテレビの考察の最中、茜が声を上げる。
ぼんやりとしか映らない状態、ハッキリと映る状態、その両方を見て茜はほぼマヨナカテレビがなんなのかを理解していた。
茜はあのテレビの世界がなんなのかを知っている分、総司達よりも情報量で勝っていた。
それは、あの世界で何の疑問も持つことのなかったクマよりも。
だが理解ができても、記憶のほとんどを失っている今の茜は伝達力に乏しい。
数少ない語彙を駆使して、何とか伝えようと茜は説明する。

「あのテレビのせかいは、海なの。
人の心が、あのせかい。
いい心も、わるい心もぜんぶまじりあって、海になる。
でも、わるい心はかたまることがあって……それがシャドウだね」
「じゃあ、マヨナカテレビは？」
「海をのぞける、まど。
ばんぐみを見てるんじゃなくて、まどの外から中をのぞいてるんだね。
ハッキリうつるようになるのは、まじりあってあいまいだった海に、人っていうかたまった心が入るから……かな」

人の心が混じり合う、海。
その海こそテレビの中に広がっているあの世界なのだと茜は言う。
その中の、”わるい心”が固まったものがシャドウなのだと。
自身からシャドウを生み出してしまった陽介達には、そのあたりはよく分かった。
だけど……
雪子は疑問を口に出す。

「茜ちゃんは…どうしてそんな事を知ってるの？
海とか…それを覗く窓とか……」
「多分、あたしがあのせかいにいたからだと思う。
海の中にいて…だれかと、いっしょだった」

総司は、茜を自身に託した少年の事を思い出した。
もしかしたら茜はその男の子と一緒にいたのかもしれない。
どこかのテレビから落ちるかどうかして。
最初からペルソナ能力を持っていたりと特殊すぎる例だった故に事件の被害者とは別に扱っていたが、落とされた可能性もある事を

考慮していなかった事に総司は思い当った。
その事を言ってみるが、記憶が完全に戻っているわけではない現在、一件目との関わりが分からない事、そしてマヨナカテレビに映っていないという事で一旦保留となる。

「とりあえず、ハッキリ見えるようになるのは被害者が入ってからってのは確定…ってことだよな？
わざわざそんな事するって事は、もちろん犯人も見てるよな、マヨナカテレビ」
「たぶんね。
きっとどっかで面白がっ……」

陽介の言葉に、千枝は相槌を打とうとして、息をのむ。
一つの可能性に行きついたからだ。

「……まさか、楽しんでるって事！？
人を放り込んで、その後に映る”番組”を楽しんでるの！？」

愉快犯。
それならば、被害者の共通点が離れて行っているのも理解ができる。
愉快犯ならばそこまで厳密に被害者の選別などしていないだろう。
特に完二のマヨナカテレビを見た後だと、マヨナカテレビが見たいが為の犯行動機というのは納得できる気がした。
隠されている事を知りたい。
それは人の中によくある欲求だろう。
総司とて、知りたいから事件を追いかけているのだ。
総司は昨夜のマヨナカテレビの内容を思い出す。
確かに、あれはインパクトは大きかった。

見て楽しいものだったかはさて置いて。

／＊／

ザザ…ザ……

砂嵐が収まり、映る映像は鮮明なものだった。
雪子の時のようにバラエティのようなノリらしく、左上には生放送を示すＬＩＶＥという表記と、そして右下には『女人禁制！　突☆入！？　愛の汗だく熱帯天国！』とテロップが表示されている。
場所は銭湯のような暖簾が掛かっている建物の入り口で、建物は白木で作られているようで美しい木目が霧の中でも見てとれる。
そして、画面の中央にいるのはマイクを持った完二なのだが、その格好は白い褌だけの姿だった。

『皆様…こんばんは。
”ハッテン、ボクの町！”のお時間どえす』

ユラユラと体を揺らしながら前かがみでカメラを覗き込む完二。
普段の睨みつけるような視線とは違って眉は八の字に垂れ下がり、頬は上気して赤く染まり、微妙に突き出した唇が特に気持ち悪い。
語尾もおかしいが、完二は言葉を続ける。

『今回は…性別の壁を越え、崇高な愛を求める人々が集う、ある施設をご紹介しまぁす。

極秘潜入リポートをするのは、このボク…巽完二くんどえす！』

完二は背後の建物の入り口を指し示す。

そして身体をくねらせてカメラに背を向けた。

『一体、ボクは…というかボクの体は、どうなっちゃうんでしょうか！？

それでは、突・入、してきます！』

言って完二はがに股でドタバタ走って行く。

ザ…ザザザ……

■5／19

ぶるり、と総司は身を震わせた。

うっかりマヨナカテレビの内容を思い出してしまい、鳥肌の立った腕をさする。

ずいぶんトラウマになっているようだ。

総司がいるのは、商店街。

本来ならテレビの世界に入って完二を探しに行きたいところだったが、それができない理由があった。

完二の場所が分からないのだ。

クマの不調で完二の臭いが追えないらしい。

広いあの世界を無暗に歩いても辿り着ける可能性は低い。

そこで、クマの為に完二の事が分かるような情報を探して聞き込みを行っている所だった。

警察犬に臭いのついたものを嗅がせて犯人を追跡するように、情

報があればクマも相手の居場所を特定しやすくなるらしい。
だが、成果はあまり上がっていなかった。
雪子には巽屋との関わりを活かして昔から完二を知っている人間を当たってもらっているが、昔はいい子だったという以上の収穫はない。
総司、千枝、茜もこれといった情報は手に入らなかった。
陽介にいたってはジュネスを快く思わない人たちに冷たくあしらわれ、情報収集もままらない状態だった。

■5／20

「あかねちゃん、たくあんなくなってるよ」
そう菜々子が言い出したのは三人が夕食を終えた後、堂島がこれから帰ると電話してきたので彼の為の食卓を整えている時だった。
「あ、そっか。さっき食べちゃったから……
明日、買ってくるよ」
「でも…お父さん、このたくあん好きなの。
なくてガッカリしないかな……」
普段忙しく働いている堂島に、菜々子は好きなものを食べて欲しいらしい。
それを見て、総司は立ち上がった。
どうせ、今日はもう寝るぐらいしかやることがない。
読書という気分でもなかった。
ポケットに財布が入っているかを確認する。
「買ってくるよ」
「でも…お父さんが好きなの、ジュネスにしかないんだ。

……あ、じゃあ菜々子も行く！」
「あたしも！　みんなで行こ！」

三人並んで、家を出る。
日は少しずつ長くなってきていたが、さすがにこの時間になるとあたりは暗い。
街灯と月明かり、そして道行く車のヘッドライトが頼りだ。
田舎だけあって、店舗が閉まるのも早く、ジュネスのたくあんでなくてよくても、結局はまだ開いてるジュネスに行くことになっただろう。

「…えへへ。
いっしょに、おかいものだね」

嬉しそうに総司と繋いだ手を揺らして言う菜々子。

「お兄ちゃんって、ひとりっこ？」
「うん。そうだよ」
「あかねちゃんは？」
「いたってきおくないから、多分ひとりっこ」

二人が答えると、菜々子はおそろいだね、と笑う。

「でも、今はお兄ちゃんもあかねちゃんもいる。
……あのね、まえにお父さんが言ってた。
もう、うちに家族はふえないって……
……でも、二人もふえちゃった！」

菜々子は機嫌よく、学校の事や友達の事を話す。
茜の知っているタケヨシ達の話もあって、たまに茜が話を補足し

た。
そうこうしている内に、一行はジュネスに付き、食料品売場へと向かう。

「「あ」」

品物棚の角を曲がり、総司が声を上げる。
その声は、見事にハモった。
相手は茜でも、菜々子でもない。
完二と会っていた、小柄な男の子だった。
巽屋で見かけた時は、店内が落ち着いた暗めの照明だった事もあって黒いコートだと思ったが、ジュネスの照明の下では紺色だということが分かる。
かぶったキャスケットも紺、髪の色も、瞳も黒に近い紺色。
近くで見ると、余計に不思議な雰囲気のある少年だった。

「えっと……
巽完二と会ってた人だよね？」

声をかけると、少年は頷く。
少年の持った籠に視線を向けると、野菜や肉などの食材が入っている。
一人暮らしなのかもしれない。

「ぼくに何か用ですか？」
「んー…と、見ない顔だって聞いたから。
ここ、外の人って目立つし」
「確かにそうですね。
この場所は町のいろんな人に会えて、便利な場所ですよ。
貴方も最近来た人だそうですね？」

事件前に完二に会っていたこの少年から話を聞きたくて少し会話を振ってみた総司だったが、向こうも会話の意思があるらしい。
どうやらジュネスで少年は総司が越してきた人間だということを聞いたようだった。
少年の言葉を、総司は肯定する。

「そうなんだ。
それでこっち来て出来た友達がさ、完二のこと気にしてて。
この間、完二と話してただろう？
何か、おかしなところがなかった？」
「おかしなところ…ですか？」

総司の質問に少年は少し首を傾げて考えた後、ふうん、と呟いた。
意味ありげな目で総司を見る。
その瞳には全てを見通すような光があった。
自分たちがやってる事も見透かされるような気がして内心慌てた総司だったが、視線は逸らされ、ホッと息をつく。

「……ま、いいでしょう。
そうですね……最近の事を聞いたら、何か様子が変でした。
だから、感じたままに伝えました。
”変な人”だね…と。
随分顔色を変えてましたよ。
こちらがビックリするくらいでした」

少年は続ける。

「それを踏まえると、普段の振る舞いも少し不自然だったような気がしましたね。

なにかコンプレックスでも抱えてるのかも……
確証はありませんけど」
「……コンプレックス、か……
そっか、ありがとう」

総司は礼を言う。
もしかしたら、これが完二の居場所を特定する情報になるかもしれない。
”変な人”、という言葉に過剰に反応したという完二。
詳しい事は分からないが、そのあたりが完二のコンプレックスのようだ。

「お兄ちゃーん、たくあん、買ったよ！」

会話している間に目当ての物を購入していたらしい菜々子がレジ袋を掲げる。

「ああ、今行くよ。
……それじゃ、俺はこれで」
「はい。
また、お会いしましょう」

／＊／

ジュネスから帰ると、すでに堂島は帰ってきていた。
ソファに座り機嫌悪そうに居間に入ってきた総司達を睨む。
それに気付かない菜々子はニコニコと堂島に駆け寄った。

「ただいまー。
お父さん！　おかえりー！」

「こんな時間にどこ行ってた」

その言葉で、ようやく堂島の機嫌に気付き、菜々子は俯く。

「あ、えと…ジュネス……」

「遅くに外へ出るなって言わなかったか？」

「で、でも、お父さん、帰ってくるって…だから……」

「どんな理由があろうと、駄目なものは駄目だ。お父さんと約束しただろ」

父親の為にした行動を否定され、菜々子は目に涙を浮かべる。

たまに夜釣りに出たりしている総司はあまり夜に出歩くことに危機感はなかったし、茜も夜の外出には忌避感がなくて普通に出かけたのだが、確かにこの時間に黙って出るのは悪い事だったろう。

総司は頭を下げる。

「ごめんなさい、堂島さん。俺が、連れだしたんだ」

総司が菜々子は悪くないと言うと、菜々子はホッとした顔で総司を見上げる。

だが、すぐに堂島に否定された事を思い出したのか、表情を歪ませる。

「どうして、お父さん、きいてくれないの……お、お父さんのバカ……！バカ、バカ！！」

菜々子はそう癇癪をおこして、自室に引っ込んでしまう。

「菜々子！
親に向かってバカとは何だ！！」
「実は……堂島さんが帰ってくるって言うんで、好物だっていうたくあん買いに行ってたんです……」

追いかけようとする堂島を止め、総司は事情を説明する。
堂島の為。
それを聞いた堂島はバツの悪そうな顔になる。

「俺のために……？
……そうだったのか。
……だからって、子どもがこんな時間に出歩くのを認めるわけにはいかない。
今は色々物騒なんだって知ってるだろ。
お前も、遅くまでフラフラしてるんじゃない！
茜もだ！」

ついでに怒られてしまった。
用意していた食事もさっさと温めて食べてしまったようで、結局たくあんはそのまま冷蔵庫へ入れられることとなった。

■5／21

菜々子との昼食を終えて、ジュネスのフードコートに到着した茜は、仲間達の間に見慣れないイキモノがいるのに気がついた。
赤い前掛けを付けた、ふさふさの大きな尾を揺らす目つきの悪いキツネ。

「キツネさんだぁ」

キラキラした目で思わず呟く茜に、到着に気付いた仲間たちが手招きする。
半日授業の彼らはフードコートで昼食を摂っていたらしく、全員がすでに揃っていた。

「このキツネさん、どうしたの？」
「あー、何でも瀬多が神社で見っけたらしい。手伝ってくれるらしいぞ？」

茜の問いに、陽介が苦笑しながら答える。

「ペルソナつかいなの？」
「流石にそれはないない。山から採ってくる薬草分けてくれるんだって。お金取るみたいだけど」
「えー、じんじゃのどうぶつって、つかえるイメージあるのにー」

えー？、と千枝は笑う。
茜のファンタジーなイメージが楽しいらしい。
総司も茜を微笑ましく見た後、手元に微かに残った飲み物を煽り、立ち上がった。

「じゃあ揃ったし、そろそろ行こう。クマに完二の居場所を特定してもらうんだ」
「うん！」

ゴミを片付け、一行はエレベーターで家電フロアまで降りる。
相変わらず客はそれほどいないが、キツネは商品棚の影と影に素晴く移動して他人の視界に入らないようにしている。
こうやってジュネスの中に入り込んだようだ。

ペルソナ使いでないのでテレビに自力では入れないキツネは、総司に抱えられて世界を越える。
テレビの広場では、クマが今は遅しと待ち構えていた。

「おっ、センセイ！
来たという事は手がかり見つかったクマね！」

嬉しそうに寄って来たクマは、総司に抱えられたキツネを見て動きを止める。
初めて見る生き物なのだろう。
すこし警戒しているようだ。

「ムム！？
そこの怪しい赤エプロンは何奴？」
「キツネだよ。
野良だから名前はないんだけど。
戦闘はしないけど、手伝ってくれるって」

総司はキツネを床に降ろしながら紹介する。

「ほえ？
センセイの助っ人？
すごいクマ！
センセイは顔が広いクマ！
キツネさん、初めまして！
コンゴトモヨロシクだクマ！」

驚いたようにクマは丸い目をさらに丸くするが、すぐに満面の笑みで挨拶をする。
キツネは言葉が分かってるかのように、コンと一声鳴いた。

総司がキツネを撫でてやると、気持よさそうに目を細める。
思ったより毛は固いが、手触りはいい。

「クマも！
センセイ、クマも撫でて～」
「完二の居場所が分かってから、な。
完二は、何かコンプレックスを抱えていたらしい。
”変わってる”、”変な人”という言葉に過敏に反応していたようだ」
「ふむふむ、コンプレックス……
……え、それだけ！？
それだけで探すクマ？
クマ使いが荒いクマね……
しょーがない……
なら、全開で鼻クンクンするクマよ！」

言いながら、クマは宙に向けて鼻を動かす。
唸りながら数分経ち。

「お、なんか居たクマ！　あたりの予感！
ついて来るクマ！」

クマが霧をかき分けて進みだし、総司達も後を追う。
途中ではぐれたら、もう二度と会えないのではないかと思うほど、あたりの霧は深い。
一塊になってしばらく進んでいくと、光が見えた。
霧に反射して、そこだけぼんやりと明るい。
光に向かって進むと、大きな建物にたどり着いた。
完二のマヨナカテレビの背後に映っていた白木の建物だ。
入り口に掛けられた暖簾には『男』と書かれている。

「センセイ！
クマ、見つけたクマよ！　撫でて、撫でて！」
「よしよし」

擦り寄って来るクマを撫でると、クマは蕩けたような表情になる。

「クマクマ～ン！」

喜ぶクマの頭から手を離して、総司達は入り口の暖簾をくぐる。
そこは銭湯の脱衣所のような場所になっていた。
熱気もすごく、蒸し暑い。
ここに漂うのは霧ではなくて湯気のようだ。

「メガネ、くもっちゃった」

雪子はメガネを外し、ハンカチで曇りを拭きとる。
そしてかけ直したとき、妖艶な音楽（BGM）が一行を迎えた。

――僕の可愛い仔猫ちゃん……

その音楽に混じって、ダンディな男の声が降ってくる。

――ああ、なんて逞しい筋肉なんだ……

今度は優男風の声。

――怖がる事は無いんだよ……

「えっ…と……」

事態が理解出来ない風で千枝が呟く。
呆然とする一行を余所に、話は進んでいく。

――さ、力を抜いて……
「ちょ、ちょっと待て！
い、行きたくねぇぞ、俺！」
「ねえ、本当にここに、完二くん居るの？」

頭を抱えて陽介が喚き、雪子が半信半疑の表情でクマを振り返る。
クマは、殆ど体全体を使う大げさな頷きをしてみせ、進むように促す。

「ええ……こんな中つっ込めっての……？
わ、分かったよ。行けばいいんだろ？
……よ…よし、覚悟決めたぞ……
行こう」

そう陽介が覚悟を決め、一行は脱衣所から中に入る。
正直上着を脱ぎたい程に蒸し暑かったが、誰も脱衣所で脱ごうとはしなかった。

ハッテン、ボクの町（前書き）

ごめん、完二。
タイトル思いつかなかった……
他の候補→ボク達男の娘

男のくせに。

え？　巽くん、男のくせにそんなのが好きなの？
うわ、気持ち悪〜い。

これは、そんなにいけない事なのか？
男って……
男らしいって、一体何だ？

／＊／

ダンジョンの中は、銭湯ではなくサウナだった。
壁際には座るスペースがあり、温度も湿度もそれに近い。
長いことといると茹だりそうだ。
暑さで、どうしても歩いてるとダレてしまう。

「ううん、キッツい……」

襟元をパタパタと動かして少しでも風を送りながら陽介がぼやく。

「ホント、こうも湿度が高いと動きにくいよね。
あ、あそこ見て」
「……石炭？」

雪子の指し示した方向を見て、千枝が呟く。
確かに、それは石炭に似ていた。
人の大きさほどもある、黒い岩の塊。
仮面を付けているのを見ると、シャドウらしい。
それが、通路にいくつもゴロゴロ転がっていた。

「じゃ…邪魔だ……」
「このままじゃ通れないな。
倒そう」

総司が指示を出し、それぞれが戦闘態勢を取る。
まず、陽介が攻撃を仕掛けた。
振り下ろしたスパナが岩の表面を叩くが、手が痺れたぐらいでシャドウは堪えた様子がない。

「固っ！
魔法の方が良さそうだ」
「みたいね。
”マハラギ”！！」

雪子の振るう扇子が、カードを破壊しコノハナサクヤが召喚される。
コノハナサクヤの呪文が炎となり、岩を熱する。

「千枝！」
「おっけ！
トモエ、”マハブフ”！！」

今度は千枝の氷結魔法が岩を襲う。
熱くなった岩が急激に冷やされ、脆くなる。

そこからは各自武器や魔法で簡単に壊していく。
何とか通れるくらいに数を減らし、その通路を抜ける。
通路の先には、扉。
先頭の総司が扉を開け――閉めた。

「そうじくん？」
「センセイ、どうしたクマか？」
「……虎……」
「は？」

ボソリと呟く総司に、陽介は首を傾げる。

「虎が、いる」
「はぁ！？
虎ぁ！？」

千枝が驚くと同時に、総司が押さえた扉に衝撃がきた。
向こうから体当たりをしているようだ。

「うわっと」

思わず総司は扉から手を離してしまい、扉が開く。
そこには、本当に虎がいた。
足の一本に鎖で繋がれた鉄球を引きずる、虎。
低い唸り声に全員が一歩下がった。
シャドウとの戦いを重ね、ある程度の異形には慣れてきていたが、
猛獣はその強さがリアルに思い浮かぶため、やはり恐怖が先立つ。
特に野生であるキツネはその傾向が強い。

「グァウ！！」

虎のその吠え声で、追いかけっこが始まった。

／＊／

「もうやめようよ、嘘つくの。
人を騙すのも、自分を騙すのも、嫌いだろ？
やりたい事、やりたいって言って、何が悪い？」

その部屋に辿りついた時、既に完二とその影は対峙していた。

「ボクはキミの”やりたい事”だよ」
「違う！」

影の言葉を完二は強い口調で否定する。

「女は嫌いだ……」

だが、その否定は影の言葉で消える。
否定できない事実故に。

「偉そうで、我がままで、怒れば泣く、陰口は言う、チクる、試す、化ける……
気持ち悪いモノみたいにボクを見て、変人、変人ってさ……
で、笑いながらこう言うんだ。
”裁縫好きなんて、気持ち悪い”。
”絵を描くなんて、似合わない”。
”男のくせに”……
”男のくせに”……
”男のくせに”……！

男ってなんだ？
男らしいってなんなんだ？
女は、怖いよなぁ……」

裁縫などの趣味を男だからという理由で否定され続けてきたこと。
変わってる、と言われること。
拒絶に対する、恐怖。
それこそが、完二の『コンプレックス』だったのだ。

「こっ、怖くなんかねえ」

吃る完二に影は言葉を続ける。

「男がいい……
男のくせにって、言わないしな。
そうさ、男がいい」
「ざっ…けんな！
テメェ、ひとと同じ顔してフザけやがって……！」
「キミはボク……ボクはキミだよ……
分かってるだろ……？」

止める間もなく。
完二は影を否定する。

「違う…違う、違う！
テメェみてぇのが…オレなもんかよ！！」

完二の叫びと共に、影は力を得る。

「ふふ…ふふうふふ……

ボクはキミ、キミさァァ！！」

影が笑いながら闇に包まれて行き、それは大きな人型となった。
膨れ上がった筋肉質の体。
その首にあたる位置から胸元まで薔薇の花で包まれている。
薔薇の中央には首の代わりに完二の上半身が生え、その顔は頬紅、口紅と濃い化粧で彩られている。

「完二くん！」

雪子が叫ぶ。

「みんな、構えー、クマ！」

倒れた完二をキツネと協力して引きずって後方に下げながら、クマが注意を呼びかける。
クマの注意に、それぞれが武器を構え、ペルソナを召喚するために精神を集中し始めた。
影が、その太い腕に抱えた矢印がくっついた巨大な輪のような武器を振り上げる。
雄を表す記号、♂の形だ。
それを合図に、柱の影から二体のマッチョが現れる。

「さ、三体！？」
「我は影…真なる我……
ボクはジブンに正直なんだよ……
だからさ……
邪魔なモンには消えてもらうよ！」
「これ……完二くんの、本音なの……？」
「こんなの本音じゃねえ！

タチ悪く暴走しちまってるだけだ！」

陽介が雪子の呟きを否定し、ジライヤを呼び出す。

「”マハガル”！！」

少し前に使えるようになった広範囲の風魔法をジライヤが放つ。
強風がカマイタチとなって影とマッチョに小さな傷を与える。

「天城！」
「うん！」

総司が雪子を呼び、同時にカードを破壊する。

「ホウオウ！」
「コノハナサクヤ！」
「「”マハラギ”！！」」

二人の火炎魔法が合わさり、単独で放つよりも大きな炎がシャドウを襲う。
だが、マッチョのうちの一体が残り二体の前に躍り出る。
迸る炎はそのマッチョの体に吸い込まれ、陽介の風魔法でついた傷も癒えていく。

「火が効かない…！」

小さく舌打ちをして、総司は別のペルソナに替えるために火の鳥であるホウオウを送還する。

「センセイ！

アナライズできたクマ！！
今、火炎吸収した方の個体名はタフガイ、もう一匹がナイスガイ、そっちは寒さに強いみたいクマ！」

クマの報告を聞いて氷結魔法を使うのを取りやめた千枝は、そのまま近くにいたタフガイに蹴りを放つ。
しかしタフガイの筋肉は、その物理攻撃のエネルギーまで取り込んでしまった。

「うっそ！？
直接攻撃も効かないの！？」

最初に与えた傷が完全に回復してしまったのを見て、千枝が驚愕の声を上げる。
その隙を、タフガイは見逃さなかった。
太い腕から繰り出される三連撃に千枝が苦鳴を上げる。

「千枝っ！」
「だ、大丈夫！」

叫ぶ雪子に、千枝は答える。
盾のように立つタフガイの影で、ナイスガイは完二の影に手を向ける。

「……”ヒートライザ”……」

ナイスガイが呟いた瞬間、影の体が光を放つ。

「……！？
何の呪文だ！？」

「身体能力を底上げする魔法クマ！
ヨースケ、打ち消すクマ！」
「よっしゃ、ジライヤ！
”デカジャ”！！」

初めての呪文に総司は警戒の声を上げ、クマの言葉で陽介が唱えた呪文が完二の影の体を覆った光を消し去る。

「ナイスガイが補助役みたいだな。
攻撃はナイスガイから！」
「ＯＫ！」

総司の指示に、それぞれが頷く。
次に動いたのは、完二の影。
両手の武器を振り回す。
その衝撃が、全員の体を打つ。

「ボクはもう、押し通すって決めたんだ。
どいてよ……じゃないと、潰しちゃうよ！」

完二の影が声を荒げる。
衝撃で動きの止まった雪子に向け、影の武器が振り下ろされる。

「雪子！！」

千枝が雪子と武器の間に割って入り、攻撃を受けて床に倒れる。

「千枝！
しっかりして……！　”ディア”！！」

うずくまる千枝に、雪子が回復魔法をかける。
再び攻撃を加えようとする影は総司が新たに召喚したフクロウの頭と翼を持つ人型のペルソナ、アンドラスが止めた。
頭上から襲いかかるアンドラスへと敵の意識がそれた瞬間、茜のラクロススティックがナイスガイ、完二の影の順番で転ばせる。
残念ながら、物理吸収の特性をもつタフガイをスティックで転ばせることは出来ないが、それで十分。

「今だよ！」

茜の合図と共に、ナイスガイに各自攻撃を叩き込む。
少しではあるが回復した千枝のトモエが薙刀を構えて突っ込み、雪子は炎の中位魔法である”アギラオ”、総司と陽介は範囲魔法の”マハジオ”と”マハガル”で影やタフガイを巻き込みつつナイスガイの体力を削る。

「来て、オベロン！　”ジオンガ”！」

追加で茜が呼び出した蝶の羽をはためかせた妖精の王が中位電撃魔法で止めを刺す。
片割れが倒されたタフガイが、矛先を茜に向ける。
先程までなら、避けれるスピードの攻撃だった。
しかし、魔法を使う為に今の茜でも召喚できるペルソナに替えた状態では避ける事は出来なかった。
今の段階で召喚できるペルソナでは、普段降魔しているペルソナよりもどうしても動きが悪くなるのだ。
連撃をまともに受け、茜の小さな体が床に投げ出される。

「茜ちゃん！！」

総司が叫ぶ。
茜に気を取られた瞬間、背後に回った完二の影に両腕を捕まれる。

「しま…っ！」

動けない総司に、完二の影が顔を寄せる。
そして、耳元でぼそりと何事かを呟く。
言っている言葉こそ良く聞こえなかったが息が耳にかかり、ぞわりと肌が粟立つ。

「ひっ」

気持ち悪さに、思わず情けない声が漏れる。

「こんのぉ！！」

千枝が影を攻撃し、何とか離れる事は出来たが、総司はまだ感触が残っているような気がして息を吹きかけられた耳を手で擦る。
思わず集中を切ってしまって消えてしまったアンドラスをもう一度呼び出して範囲回復魔法である”メディア”を唱える。
茜もその”メディア”で動ける程度に回復したらしく、ふらつきながらも身体を起こした。

「天城は回復に専念、他は魔法攻撃を！」
「了解！」

総司の指示で、物理・火炎が効かないタフガイに攻撃を仕掛けられない雪子は”メディア”を。
総司と茜はタフガイに狙いを定めて”ジオンガ”、まだ中位魔法を扱えない陽介と千枝は範囲魔法で攻撃する。

その集中攻撃でタフガイは倒れ、闇を散らす。
「なんで…なんで受け入れてくれないんだよぉ！！」
「おかしくなんか、ない！」
二体のシャドウを倒され、完二の影が叫ぶ。
それに応えて、茜は声を上げた。
「男の子でもユカタぬえるし、絵だってかくよ！
りょうりだって、おいしく作れる。
だれにもうけ入れてもらえないなんて、そんなことないんだよ！」
「嘘だ！！
自分らだって”ヘン”って思ったクセに……
心の底じゃ…認めてないクセにッ！！」
茜の言葉を否定して、完二の影は呪文を解き放つ。
完二の影が使える中で、最強の魔法。
「そんな奴に…絶対、負けるかぁッ！！
”狂信の雷”！！」
部屋中に雷が降り注ぐ。
雷鳴が悲鳴を飲み込む。
後方にまで及ぶ攻撃から、総司は何とかクマと完二、キツネを庇う。
運が良かった。
火炎・氷結以外の中位魔法と回復魔法を使えるという理由だけで降魔したアンドラスだったが、電撃が効かないという特性を持っていたのだ。
そうでなければ間に合わなかったろう。

総司は電撃が収まるのを待って、顔を上げて被害を確認した。
茜はオベロンが雷撃無効の為、新たな傷は負っていない。
雪子、千枝も片膝をついてはいるが無事。
”メディア”二回で体力が全快していたのが良かったのか、雷撃が弱点のジライヤを降魔している陽介も倒れずに済んでいた。
大技を放った完二の影が、泣きそうな顔で息を吐く。
そこに、総司達はそれぞれ残った精神力の全てを使って魔法を叩き込んだ。

「イクぅ……っ！！」

影の断末魔と共に、ふくれあがっていた影が元の姿を取り戻す。
それと同時に意識を取り戻した完二が悪態をつきながらも起き上がった。
気づいた雪子が完二に駆け寄ろうとするのを、様子がおかしいと陽介が止める。
総司の視線の先で起き上がった完二の影は、ふらつきながらもまだ総司達に向かおうとしていた。

「ま、まだ向かって来るクマ！
よっぽど強く拒絶されてるクマか……？」
「そりゃ、こんだけギャラリーが居ちゃ、無理もないな……」

自身の心の闇と向き合い、受け入れた陽介だったが、もしコレが自分の影だったら正直受け入れる自信はない。
だが、また攻撃してくると思われていた影の台詞に場が凍る。

「情熱的なアプローチだなぁ……」
「……は？」

一瞬何を言われたか分からなかった陽介が思わず問い返す。

「三人とも…素敵なカレになってくてそうだ」

「や、やめろってー！

そんなんじゃねー！」

舐め回すような視線と言葉に、陽介勢い良く後退り、総司は鳥肌のたった腕をさする。

そして、もう一人の男である完二は震える拳を握りしめる。

「や…めろ……

何、勝手言ってんだ、テメエ……」

「誰でもいい……

ボクを受け入れて……」

「や…めろ……」

フラフラと完二の影が向かってきて、その分陽介と総司は後ろに下がる。

縮まらない距離に、影が叫ぶ。

「ボクを受け入れてよおおお！！」

「う、うわ、ちょ、無理矢理はやめて！！」

「やめろっつってんだろ！！」

二人とは違い、後ろに下がらなかった完二は一歩前に出て、拳を振るう。

その拳は影の頬を捉え、地に這わせた。

「たく、情けねえぜ……

こんなんが、オレん中に居るかと思うとよ……」

「完二、お前……」

腹立たしさを隠そうともせずに完二は吐き捨てる。

「知ってんだよ…テメェみてえのがオレん中に居る事くらいな！
男だ女だってんじゃねえ……
拒絶されんのが怖くて、ビビッてよ……
自分から嫌われようとしてるチキン野郎だ」

分かっていた。
ただ拒絶が、受け入てもらえないことが怖かっただなんて。
完二は幼い頃から染物屋の仕事を見ていた。
そこには様々な小物や、和柄の布で作られたティディベアなどがあった。
それを見て育った完二は裁縫が得意で、可愛い物が好きだった。
ぬいぐるみの型をとるのにイラストだって描く。
だけど、人は言う。
”裁縫好きなんて、気持ち悪い”。
”絵を描くなんて、似合わない”。
”男のくせに”。
その点は、確かに影の言った通りなのだ。
特にその声は完二が大きく、ガタイが良くなるにつれて大きくなっていった。

「俺だって料理するし、裁縫も…浴衣は無理だけどボタン付けぐらいならできる。
裁縫も、絵も…おかしいとこなんて、何もない」
「ま、男同士でアレコレってのはちょっと……だけどな？」

極端にねじ曲げられた質の悪い暴走だと分かっていても散々引い

た陽介が付け加えるが、総司は勇気づけようと声をかける。
るっせー、と完二は苦笑して倒れたままの影に近づく。

「……オラ、立てよ。
オレと同じツラ下げてんだ……ちっとボコられたくらいで沈むほど、ヤワじゃねえだろ？
テメエがオレだなんて事ぁ、とっくに知ってんだよ……
テメエはオレで、オレはテメエだよ……クソッタレが！」

／＊／

テレビから出ると、もうタイムセールも終わっており、ただでさえ人の少ない家電フロアは客がまったくいないような状況だった。
それでもこんな所で行方不明になっていた人間を囲んでいるのを見られるとまずいので、普段武器を置かせてもらっているバックヤードに移動する。
完二は随分消耗しているようで息を荒らげていたが、それでも顔を顰めながらも随分スッキリした表情をしていた。

「ほら」

言って、総司は帰宅の準備を済ませても座り込んだままだった完二に手を貸し、立ち上がらせる。
一気にダンジョンを攻略し、戦闘をこなして疲れてはいたが、普段からテレビの中の世界でペルソナを鍛えたり体を慣らしたりしていたので、そのぐらいの余裕はあった。
負った傷もテレビから出る前に癒してしまい、不審な目で見られない程度に服装も整え終わっている。

「ここで解散にしよう。
完二を送ってくる。
何か聞かれても、”その辺で適当に拾った”で通じるだろう」
「うん。
お願い」

雪子が頷き、買い物袋を持った茜と彼女に寄り添ったキツネが総司の横に並ぶ。
神社は巽屋の隣なので、キツネも付いて来るようだ。

「なあ……
さっき、オレの前で起きたのぁ……」

肩を貸し、部屋を出ようとすると完二は呟きを漏らす。
夢だったのか現実だったのか、少し混乱しているようだ。
話をしなくてはいけない。
話さなきゃいけない事も、聞かなきゃいけない事もたくさんあった。
だけど、それは今じゃない。

「今度、話す。
あそこは、長時間いていい場所じゃないんだ。
まずは休んで元気になってから、だ」
「ああ…ゼッテー、だぞ」

／＊／

「巽完二を見つけたの……お前なんだってな？」

そう堂島が切り出したのは、珍しく夕飯前に帰ってこれた彼と食

卓を囲んでいる時だった。
総司は、口に含んでいた分を飲み込んで頷く。
「ああ。
具合悪そうだったから肩貸したんだけど……
どうして？」
「……実家の染物屋から捜索願が出てたんだ。
それとな……実は最近、お前があの染物屋に来てるの見たってヤツが居てな。
学生が立ち寄るような店じゃないだろ。
不思議に思ってな」
とぼける総司に、堂島が言う。
商店街で聞き込みをしたりしていたのが耳に入ったらしい。
情報を集めるのには便利だが、こちらの情報も筒抜けになってしまうのはやはり玉に瑕と言えるだろう。
ジュネスを溜まり場のようにしてるだけでも探りを入れられたのに、事件に首を突っ込んでいると知られたら厄介なことになるのは目に見えている。
だが、今回は茜のフォローはいらないだろう。
言い訳は話が出た辺りで考えていた。
「友達付き合いだよ。
天城がさ……ほら、旅館の子。
旅館の土産物で取引あるらしくて、それで」
総司は言いながら次のおかずに箸をのばす。
巽屋は天城屋旅館に品物を卸している。
完二の母親と主に話したのは雪子だったし、完二がいなくなった際、電話で話を聞き出したのも雪子だった。

双方の店の関係の調べが済んでいたのか、それともただ知っていたのか堂島は頷く。

「ああ…例の天城雪子か。
ふう……まあいい。
ただ、危ない事に関わるなよ。
いいな？」

完全には納得しているわけではないようだが、そう言って引いてくれる。
それでも、一言付け加えるのは忘れないが。

「……ん」

総司は心の中で謝りながらも一つ、頷いた。

死者の逝く場所

■　５／２２

日曜の朝。
完二の救出が成功し、ゆっくりできると惰眠を思う存分貪った総司は昼近くにようやく布団から抜けだした。
寝癖を手櫛で整えながら階下に降りると、茜が食い入るようにテレビを見ていた。
どこかで聞いた事がある気がする妙に耳に残るＢＧＭがテレビから流れる。

あなたの　テレビに　時価ネットたなか～　み・ん・な・の　欲の友！

ああ、通販番組かと総司は納得する。
かなり有名な長寿番組で、業績もなかなからしい。
何度か総司もこの番組を見て商品を注文したことがある。
ＢＧＭと一緒になって歌う茜に声をかけるとビクンと身体を震わせ、総司だと分かると顔を赤くして俯いた。

「おはよう」
「……おはよ」

テレビに視線を受けると、司会が滑らかな口調で営業トークを繰り広げていた。
この司会は同時に時価ネットたなかの社長でもある。
時価ネット”たなか”の社長だから名前は”田中”。
覚えやすさも業績の良さに一役買っているのかもしれない。

商品が気になったが、既にもう番組も後半にさしかかっていたので茜に聞いてみることにした。

「何かいいのあった？」

「んー、クツかな」

「ふうん。

靴なら…里中か」

言って受話器を取ると、茜は嬉しそうな顔で総司を見上げた。

「いいのっ？」

「こないだのテストの成績よくてさ。

堂島さんに小遣い貰ったから、今ちょっと余裕があるんだ」

財布の中身が如何ほどかを思い出しながら総司は言う。

団体の活動にはどうしてもお金がかかってくる。

総司たち特別捜査隊の場合だと、武器や薬代がそれにあたる。

幸いシャドウを倒した時に残った欠片…布だったり小物だったりと様々だが、それらはだいだらで買い取ってくれるのでそれを活動費に充てていた。

足りない場合は自身のバイト代なども使うが、その代りある程度総司個人でも自由に使っていいということになっている。

ダンジョン探索の日程計画に装備品の購入・割り振り等総司の負担が大きいので、その駄賃ということだ。

自分用の物を買うわけでもないのに喜ぶ茜を見ると、多少の散財などどうでもよくなってくる。

「時価ネット、好きなの？」

「うん。

ようじがないかぎり、見てる。

田中社長、いい人なんだよ」
「そうなんだ。
よかったね」
「うん！」

田中は急成長した会社の社長である。
その関係で黒い噂は結構ある。
何年か前になるが、結構な額の使途不明金があったというのもその一つ。
茜がいい人だと断言するのは田中社長の半生を追う番組でも見たのかな、と総司は心の中で呟く。
総司が取り合えず話を合わせると、我が意を得たりとばかりに茜は笑った。

■5／23

あくびをかみ殺す者、素直にあくびをする者。
行動は分かれるが思いは一つだろう。
昼食後の授業は眠い、ということだ。
満腹感、窓から差し込む日差し。
これで眠くならない程生徒たちは授業に熱心ではない。
それも……

「貴様ら、眠そうだなぁ。
…ダラけとる！　人としての尊厳を持て！」

こんなことを怒鳴り散らすだけの授業なら尚更だろう。
倫理科目なのだが、こうして担当教諭である諸岡の怒鳴り声が響くだけで実のある話はほぼないといっていい。
その倫理も『部活に入る＝異性あさり』と表現するくらいの極端

なもので、人間としての在り方や生き方を学べるとは到底思えない。
容姿の良い女子ならば進路相談などにいけば菓子を振舞ってくれるらしいが、男である総司には関係のない話だ。
担当教諭の性格のせいで教科書も役に立たないが、諸岡の好みそうな回答を想像すればテストの点だけは取れるのが救いと言えば救いだろう。
とにかく罵倒が多いので、諸岡金四郎というフルネームからモロキンと呼ばれ、生徒から嫌われている。
モロキンが担任なんて転校早々ついてないね、とは総司がこの学校に来て初めて生徒から掛けられた言葉だ。

「貴様らがそんなだから、規律がゆるんで1年がダラけるんだ！
巽完二のようにな！
あんなサボってばかりの、腐ったミカン即刻退学にしてやりたいわ！！
他人事に思うなよ、貴様らも同じだからな！
ハレンチな事件でも起こしたら、即刻！　退学にしてやるから肝に銘じとけ！」

諸岡の罵倒は止まりそうにない。
総司は教科書を読んで時間を潰す事にした。

／＊／

「へえー、けっこう片付いてんじゃん」

部屋に入るなり、陽介が言った。
放課後、半ば押しかけるように陽介が遊びに来たのだ。

「物がないだけだよ。

親の仕事柄引っ越しが多いから、元々あまり持たないようにしてるんだ。
荷造り、面倒くさいし」

グラスに入ったジュースをテーブルに置きながら総司が返事をする。

「……で？
やっぱ例のモノは布団の下？」
「え？
何が？」
「まったまた、トボけちゃって。
大丈夫、お前がアウトローな趣味でも友達でいてやるって、うん」

それでようやく言葉の意味に気付いた総司が赤くなる。
その総司の表情に、陽介はニヤリと笑った。
完二の張り込みの際、こういう事でも盛り上がりたかったという事を思い出し実行しに来た身としては、反応が返ってくるとやはり楽しい。

「そう言やお前、ここに女の子呼んだこととかあんのか？」

ニヤニヤと笑いながら陽介が言う。
だが、やられっぱなしの総司ではない。
ある事に気付いた総司は、意趣返しとして反対に陽介をからかってみることにした。
意味ありげに微笑んで、余裕を見せつける。

「ふ。
もうすぐ…てトコかな」

「マジかよ!!
それって今、落とし中ってこと!?」

見事に食いついて、身を乗り出す陽介。
その瞬間、扉をノックする音。

「ねえ、お兄ちゃんいるー?
かいらんばん、しらない?」
「ほら、来た。
…入って」

階段を上ってくる音が聞こえていたのだ。
総司は扉を開けて菜々子を迎え入れる。
総司の言った”もうすぐ部屋に呼ぶ女の子”が菜々子だったことでからかわれた事に気付いた陽介は項垂れ、苦笑して髪をかき上げる。

「な、菜々子ちゃんかよ……はは……
菜々子ちゃん、今日ヒマなの?」

気を取り直して話しかける陽介に、菜々子は首を横に振る。

「ううん、これからタケヨシくんのおうち行く。
あかねちゃんとミワちゃんとヨーちゃんといっしょに」
「えっ!?
おっ、男の家に!?」

驚愕して陽介は仰け反る。
菜々子は首をかしげた。
この年齢の女の子に、異性の友達の家に行くのに抵抗などないの

だ。

「あのね、タケヨシくん今日休んでたから…れんらくちょう、とどけに行くんだ。
となりの席なんだよ。
ミワちゃんはタケヨシくんがすきだから、いっしょに行くって言ってたよ」
「すきだから……
す、進んでんなぁ最近の子は……」

頭を押さえる陽介。
立ち直る前に、階下から菜々子を呼ぶ声が届く。

「ななちゃーん、かいらんばん、あったよー！」

茜の声だ。
探していた回覧板が見つかったらしい。

「今行くー！
…じゃあ、いってくるね」
「ああ、いってらっしゃい」
「気をつけてな」
「はぁい」

菜々子が扉を閉める向こうで、ドタバタと騒ぐ音が響いた。

菜々子が階下に降りると、上から響く音に首を傾げる茜が立っていた。
背にはいつものリュック、手には回覧板が抱えられている。

「上、なにしてるの？
プロレス？」
「よくわかんない。
ふとんの下、はっくつするんだって」

／＊／

缶ジュースを買うついでに陽介を途中まで送ってきた総司が帰ると、堂島がすでに帰ってきていた。
マグカップにインスタントコーヒーの粉を放り込んでいる。
お前も飲むか、と訊かれて、総司は手に持った缶ジュースに視線を落とした。

「んー……じゃあ、折角だし飲もうかな」

冷蔵庫にジュースを入れて答える。
これは風呂上がりにでも飲めばいいだろう。

「ミルク入りで」

そう総司が言うと、堂島が顔を上げる。
驚いたような表情に、総司は首を傾げた。

「あ、い、いや……
そう言われるのは、久しぶりだと思ってな」

堂島はそう言い繕ってマグカップを追加する。

「お父さん、ニュース始まるよ。

あ、菜々子もコーヒーのむ！」
「はいよ。
ミルクと砂糖さっぷりでな」
「うん！」
「茜は？」
「ウィンナーコーヒー」
「インスタントだっての。
生クリームもない。
甘めにしてやるから…それでいいか？」
「はぁい」

茜の無茶振りに堂島は苦笑しながらマグカップに粉を追加していく。
堂島は傍に立ったままの総司に、座ってテレビでも見ていろと居間を指さす。
だが、一人で四人分ともなると運ぶのも大変なはずだ。

「数多いし、手伝うよ」
「あー、いや、いい。
コーヒー淹れるのだけは、家での俺の仕事だ」

手伝いを申し出るが、堂島は断る。
その目は優しげな光があった。

「……菜々子の母親にな、結婚するとき、約束させられたんだ。
家のことはこれだけでいい。
その代わり、必ずずっとやること、ってな。
だから……まあその、何だ。
すっかりクセになっちまったってわけだ」

そう言われては邪魔は出来ない。
総司は大人しく居間の座布団に腰を下ろした。
しばらくして片手に二つずつマグカップを持って台所から移動してきた。
テーブルに置かれたそれを、各自手に取る。
堂島と菜々子のマグカップはお揃いのデザインで、ただ縁に淡い色が付いていて、その色だけが違う。
総司と茜は戸棚の奥に仕舞ってあったらしい何かの景品らしきペアマグカップを使わせてもらっていた。
コーヒーを飲みながら、ニュースに耳を傾ける。

『……それでは次のニュースです。
本日未明、沖奈市郊外で自転車に乗っていた女性が車にはねられ、死亡しました』

いくつかのニュースが報じられ。
アナウンサーがそのニュースを読み上げ始めると、堂島の表情が険しくなった。

「菜々子、テレビ消せ」
「あ…うん」

堂島の言葉に従って、菜々子は手元のリモコンを操作してテレビを消す。
途端に音のなくなる居間。
堂島はソファから立ち上がり、コーヒーを半分以上残したまま自室に引っ込んでしまった。

「……
あのね…〟こうつうじこ〟のニュースしたから……」

菜々子がポツリと呟く。

「お母さん、じこで死んじゃったから。
菜々子、おぼえてないんだ。
お父さん、ぜんぜん話してくれないし……
ねえ、お兄ちゃん。
死んじゃったら……
人はどうなるの？」

「そうだな……
天国ってところに行くというのはよく聞くな」

「やっぱり、そうなんだ。
お母さんも、天国へ行ったんだよ」

総司の答えに、小さく菜々子は微笑んだ。

■　5／24

タイムセール中の店内を歩き終わった茜は、機嫌よくサッカー台で商品を詰め込んでいた。

機嫌がいいのは首尾よく本日の特価品とチラシの入っていた豚肉が手に入ったのもあったが、主な要因は持参したエコバッグに綺麗に荷物が収まったからだ。

今まではレジ袋を使っていたが、総司や菜々子が学校に行っている日中は暇なので、その間に作った自作の物を持ってきたのだ。

布も糸も飾りさえもシャドウ戦での戦利品という金をかけない自信作である。

買い物カゴの中や周囲に忘れ物が無いか確認して、茜はエコバッグを台から持ち上げる。

帰ろうと出口に向かうところで、前を歩く総司と雪子に気がつい

た。

「そうじくん！　ゆきちゃん！」

声をかけると、二人が振り返る。

「おかえりなさい！
買いもの？」

総司の手に下げられた荷物を見て茜が尋ねると、雪子が頷く。
さりげなく総司が茜のエコバックを受け取ると、総司の持っていたレジ袋を雪子が代わりに持つ。
雪子の買い物だったが、総司が荷物持ちをしていたのだ。
三人並んで帰る途中、雪子の買い物の理由を聞いた。
なんでも、高校を卒業したら実家を出ると決意したらしく、一人暮らしに向けて料理を覚えようという事らしい。
お金を貯めるために在宅でできる封筒貼りや翻訳のアルバイトも始め、資格をとる勉強もしているようだ。
雪子は成績もいいし、なにより熱心だ。
勉強すれば資格を取るのはそう難しい事ではないだろう。
雪子と別れ、家に帰るとダンボールで荷物が届いていた。
日曜に頼んだ通販の物だ。
開けると、頼んだ靴にオマケのダイエットフードと何枚か集めるタイプの応募シールが入っていた。

「そうじくん、そのダイエットフード、ちょうだい？」
「え？　使わないからいいけど……
茜ちゃん、痩せる必要ないよ？」
「そうじくん。
女の子はね、ちょっとでもキレイになれるかのうせいがあるなら、

やってみたいと思ういきものなのよ」

あまりにもキッパリと言う茜の剣幕に無言でダイエットフードを手渡す。

受け取って機嫌を直す茜に、総司は胸をなでおろした。

／＊／

夕食後。

総司は茜を誘って弁当を作ることにした。

ゴールデンウィークに一緒に作ると約束したものの、果たせなかったからだ。

豚肉を一口大に切り、下味をつける。

野菜を油通しし、片栗粉をまぶした豚肉を揚げる。

弁当用なので、タレのとろみは固めに。

総司がそうやってメインとなる酢豚を作っている間に茜は他のおかずを詰めていく。

最終的には彩り鮮やかなお弁当が完成した。

弁当箱を大きなハンカチで包みながら、茜は帰宅途中に引っかかった事柄を口に出す。

「ゆきちゃんって…”おんなきょうこう”だよね？」

総司は頷く。

人にはそれぞれ、ペルソナと同じように心の象徴となるアルカナがある。

ワイルドは、絆を結んだ相手のアルカナを知ることができた。

茜なら”宇宙（ユニバース）”、総司なら”世界（ワールド）”。

そして、雪子は”女教皇”。

茜は雪子とコミュニティを築いていないようだが、雪子のコノハ

ナサクヤのアルカナが”女教皇”なのでそこから推察したのだろう。
だが、なぜそんな事を聞いてくるのか総司は分からず首を傾げる。

「”おんなきょうこう”がりょうり……」

そう呟く茜の顔は青い。
そして、茜は総司の手をとった。
泣きそうな、同情たっぷりの表情で茜は言う。

「強く…生きてね……」
「あ……？　ああ……」

総司がこの言葉の意味を知るのは、しばらく後の話だ。

■5／26

総司が風呂から上がると、堂島が帰宅していた。
茜と菜々子は食器を役割分担して洗っていて、堂島は忙しそうに新聞を繰っている。
見ると、ところどころ黄ばんでいて古新聞なのだと分かる。

「あるとすりゃ、後は……
ったく、今時の若ぇのは資料の整理ひとつ、まともにできねえのかよ」

愚痴りながら堂島は繰っていた新聞を置き、別の場所に積まれた新聞を手に取る。

「探し物なら手伝うけど？」
「いや…いいんだ。
あんまり気ぃ遣うな」

堂島は苦笑して首を振る。
そして新聞記事に目を通しながら言う。

「昔の…新聞記事だ。
ボロくなったからコピーを取り直したんだが……
そのコピーがどっかに紛れちまったらしくてな。
まだ犯人が挙がってない、ある事件のものだ。
新しい事件のせいで風化しかかってる……
けどな、俺だけは諦めるわけにはいかねえんだ。
……絶対にな」

余程思い入れのある事件なのか、堂島の表情は思いつめたものだ。
総司は何か言った方がいいのかなと思うが、それより早く、茜が菜々子を呼ぶ声が総司を現実に戻した。

「茜？
菜々子がどうした？」
「わかんない。
でも顔色、わるいの」

立ち上がる堂島に、茜は菜々子を支えて不安そうに答える。

「なんだ、どうした？」
「なんか、おなかいたい……
おなかの下のほう、ちくちくする」

菜々子がお腹を押さえながら言う。
茜の言う通り、その顔色は悪い。

「何だって!?
きゅ、救急……
い、いや、確か前にもあったな。
あの時と同じか!?」

堂島が大声を上げる。
前にも同じような症状があったようだ。
分からない、という菜々子の言葉に、堂島は頭をかく。

「参ったな……
あの時の薬は確か……」

薬箱のある場所に向かおうとする堂島にかかってくる電話。
焦りながら携帯を取る堂島の代わりに、茜が総司に菜々子を預けて薬箱を取りに行く。

「ああ、クソッ!
何だってんだ、こんな時に……
はい、堂島!
足立か……切るぞ」

電話は足立からのようだ。
仕事の呼び出しかな、と総司は堂島の声に耳をそばだてる。
足立の声が聞こえなくても、片方の声が聞こえるならある程度は会話の内容が推察できるかもしれない。

「……封書?　俺に?」

堂島は胡乱げな声を出すが、すぐに何かに気付いたらしく電話を握り直す。

「ひょっとして、市原さんからか！？
いつ！？
……忘れてただぁ！？
ふざけやがって……
すぐ行く！」

大声で電話の向こうの足立を叱りつけると、堂島は通話を切る。
堂島はそのまま出かけようと身を翻し、不安そうに見上げてくる菜々子に気付いて動きを止めた。
しかし数秒逡巡した後、総司に出てくると告げる。

「救急箱の中に薬があるはずだから……頼む」

総司に薬の名称を言い、堂島は家を飛び出していく。

／＊／

電気の消えた部屋。
明かりは、外の街灯のみ。
雲は数少ない光源である月を覆い隠していた。
その部屋に敷かれた布団は一つ、菜々子と茜が横になっていた。
普段は別に布団を出しているが、今日は一緒にいたかった。

「どうして、わるいひとは…わるいことするのかな」

ポツリ、と菜々子は呟く。

薬のおかげで、菜々子の腹痛はすでに治まっている。
だけど、別の部分の痛みは中々消えない。

「わるいひとがいると、お父さん帰ってこないんだ。
去年はジケンあんまりなくて、お父さん、おうちいたのに……
お父さんは菜々子より、わるいひとの方が大事なのかな……」

ため息を吐いて、菜々子は言う。
寂しそうな、声。
その声を聞いて、茜が菜々子に寄り添った。
茜のクセッ毛が菜々子の頬にかかり、くすぐったさに菜々子は笑う。

その夜、堂島が再び戻ってきたのは、日が変わってからだった。

被害者の弟

■　6／4

2日の午後から降り続いていた雨は、いつの間にか止んでいた。
代わりに辺りを覆うのは白い霧。
普段頼りない光量の街灯の光が霧に反射して妙に明るい。
それなのに辺りが全く見通せない商店街に一つ、人影があった。
光の中、足元だけが照らされている。
日付が変わる。
4日から、5日へ。
霧の日の、24時。
あるいは、0時。
人影は、しばらく道路の真ん中に立ちつくした後、不満そうに呟く。

「またか……」

人影は歩きだし、霧の中に消えていく。
後に残るのは、全てを覆い隠すような濃い霧だけだった。

■6／6

「あー、えっと、テレビを使って殺人……？
って事ぁ、撲殺で決まりスね？」
「ちげー！　テレビで殴ってんじゃねーよ！」

口に入れたビフテキを呑み込んで言う完二に陽介がツッコミを入れる。

一行がいるのはジュネスのフードコート。
特別捜査本部である。
休養と警察の事情聴取からようやく復帰した完二を招き、話し合いを行っていた。
完二の食べているビフテキセットは、新たな仲間へ先輩である2年組からのおごりである。
夢中になって食べている彼に事情を説明したのだが、先の台詞からすると理解しているとは言い難い。
学校に復帰した彼は、総司たちに対して丁寧な態度を取った。
まるで舎弟のようである。
恩があるから。
先輩だから。
完二が丁寧な態度を取るのはそういう理由らしく、初対面の時には分からなかったが義理堅かったり体育会系の上下感を持っているようだ。
説明を黙って聞き、質問も素直に答える。
しかし、結局犯人の事は覚えてないようだ。
ただ、雪子の時と手口は同じようで同一犯だと思われた。
警察にも同じ回答をしたらしく、そちらでも捜査の進展は難しそうだ。
事件前に会っていたキャスケットの少年の事も、完二はよく知らないらしい。
会ったのは二度だけで、気付いたら”また会いたい”と口走っていたそうだ。
そしてその時の会話も、最近変わった事なかったか程度のものだったと完二は語った。
「つーかさ、例のテレビ、最近けっこー面白くね？」
しばらく撲殺ではないという説明をしていたのだが、近くのテー

ブルからそんな声が聞こえ、一行は耳をそばだてる。
総司達と同じ制服を着た男子生徒だ。

「”次に出んの誰？”とか、気になるな」
「オレ前から、次はぜってーアイツって思ってたんだよ。
名前なんだっけ、１年の暴走族上がりの……」

完二に余計な伝説が増えてしまったようだ。
一行は微妙な表情で顔を見合わせ、当事者である完二は席を立った。

「次は誰だと思ったって？」

低い声で声をかけると、談笑していた男子生徒達が凍りつく。

「そいつぁ多分、”巽完二”って名前だな……
ちなみに、ゾク上がりじゃなくて、ゾク潰した方だけどな。
誰だテメェら……！」

完二が一喝すると、蜘蛛の子を散らすように生徒達は逃げ出した。
エレベーターホールに逃げ込むのを確かめて、完二は再び椅子に腰を下ろす。

「んだよ…つまんねーな」
「やり切れないね……」

千枝がため息を吐く。

「殺人事件との絡みとか、よく知らないで言ってんのかもだけど、
同じ学校の子なのに……」

「関係ねーとか、自分は大丈夫だとか、観客気分なんだろ……
次に誰が狙われるか、分かんなくなって来たってのによ」

完二が狙われ、”被害者は女性”という共通点は崩れた。
もう一つの”山野真由美の事件と関係ある人間”という線も関わりが薄すぎて微妙としか言いようがない。
”スカーフを売った店の息子”程度の関わりで狙われるなら、誰が狙われてもおかしくないのだ。

「なんだ先輩ら、手がかり無しスか？
じゃーここらでオレが、すんげーの出しちまうぜ？」

総司達が唸っていると、完二は宝物を披露するかのようにもったいぶって一枚のメモ用紙を取りだした。
切り口がギザギザで、乱暴に破り取ったのが分かる。

「なんだ、それ？」
「今日オレが復帰ってんで家から出たら、なんか目障りなのがチョロチョロいたんスよ。
先輩やオレが行方くらました事、面白半分にかぎ回ってやがったんで、没収してやったんス。
ま、書いてある意味は、よく分かんねんスけど」
「分かんないんじゃん……」

いかにも重要な手掛かりといった風に出したのに分からないと言われて千枝が苦笑する。
そのメモを奪った時の様子がありありと思い浮かぶようだ。
おそらく、チョロチョロしてたのは足立だろう。
あのいい加減な刑事はいかにも逃げ遅れそうだった。
総司は、渡されたメモに視線を落とし、声に出して読み上げる。

メモには幾つかの項目に分けられて書き込みがされていた。
まずは、一つ目。

「えーと……”演歌ヒットチャート”。
5月…第一位は柊みすずの新曲、だな」

元々、”演歌界の若きプリンセス”と称され、海外公演までこなす実力派の演歌歌手だったのだが、事件があってからさらに売上が上がっているらしい。
議員秘書である生田目とは離婚したが、生田目が浮気していたということは相手が有責ということで慰謝料も多く貰っているだろう。
山野真由美の事件によって、一番得した人物と言える。
アリバイは完璧らしいが……
総司は次の項目を読み上げる。

「次は、”女子アナランキング”。
ローカル局別の人気女子アナランキングらしいな。
3月分で……山野真由美は中の下ぐらい」
「あの事件があるまで、そんな有名だったワケでもないのかな?」

総司も不倫報道で大々的に取り上げられるまでは名前も知らないアナウンサーだった。
総司の住んでいた所では稲羽のローカルチャンネルが見れなかったせいもあるのだが。
素なのか柊みすずに訴えられた事による心労か、天城屋旅館に泊まっていた時は感情の起伏が激しかったようだが、茶の間の受けはよかったらしい。

「最後は……”テレビ報道番組表”。
山野真由美…4月11日、小西早紀…4月13日……」

総司の読み上げる文章に、陽介は首を傾げる。

「なんだこの日付？
４月１１日……？」

「あ、遺体が発見された日…」

その横で、思いついたように千枝が顔を上げるが、すぐにまた思考に耽る。

「…は、違うか。
始業式の日だったから、１２日だ。
１１日はその前の日だけど……」

１１日は、丁度総司が稲羽に越してきた日だ。
越してきた早々巻き込まれたなとは思っていたが、本当に越してきた途端だったんだな、と総司はため息を吐く。
それから数日でペルソナに覚醒して……
そこまで考えて、総司の思考が止まる。

「小西先輩の遺体が出たのは１５日だ。
忘れらんない日だからな……
え、微妙に何の日か分かんねえぞ？
てか、”テレビ報道番組表”ってどういう意味だ？
”小西早紀、４月１３日”って何だ？」
「……テレビだ……」

総司が呟く。

「え？」

「小西早紀がテレビ報道に出た日だ。
死体の第一発見者として。
そうだ…その日に初めてマヨナカテレビ見たんだ……」

初めて、マヨナカテレビを見て。
初めて、ペルソナの声を聞いた日。
印象に残ってたからか、総司はその日のことを思い出すことが出来た。
ジュネスで陽介に奢ってもらい、そこでバイト中の小西早紀と知り合いになり、死体の第一発見者としてテレビに映る彼女を見たのだ。

「そっか……
ああ、多分間違いない」
「あー…それ、あたしも見た。
インタビューされてたヤツっしょ？」

陽介が頷き、千枝も肯定する。
山野真由美の方も、確か稲羽へ向かう電車に乗るときに駅の向かいにあったビルの壁面の街頭テレビで報道されていたと総司は記憶していた。
つまり、１１日だ。

「おい待てよ……
天城も確か、インタビューされたよな？
あのインタビュー流れたの、いつだった!?」
「た、確か、学校休んでた間……えっと……」

陽介の質問に、雪子は思い出そうとするが、それより先に今まで黙っていた茜が口を挟んだ。

「あたしが、そうじくんの家におせわになりはじめた日だよ。
４月１５日！」

どうやら話に付いてこれなかったり好きで黙っていたわけではなく、その頃の事を知らないので口を挟めなかったようだ。
茜の言葉で思い出したようで、雪子は頷く。
そして、完二の出た特番。
あの特番を見て、その後張り込みをしている。
事件のニュースの内容にばかり目が行っていたが、今までの被害者全員が、居なくなる前にテレビで報道されている。
”テレビに取り上げられる”、それこそが犯人の狙う被害者の共通点だったのだ。

「ま、こんだけ分かってりゃ、次こそ先回り出来そうだし、タイホも時間の問題かもね」
「それに、今度こそ犯行終わりって可能性もあるかも知れないし」

犯人に繋がるだろう被害者の共通点が分かり、雪子の表情も明るくなる。

「だといいけどな……二度も邪魔してやったんだ、いい加減懲りて欲しいぜ。
とりあえずは、今まで通り雨の日にテレビチェックするって事だな」
「そういえば……来週、林間学校だ。
雨降らないといいけど。
1、2年合同だから、完二くんも一緒っすね」

千枝は肩の荷が降りたとでも言うように別の話題を振る。

それに、茜は拗ねたように唇を尖らせた。
「うー…あたしおるすばん……」
ここにいるメンバーの中で自身だけが仲間はずれなのがつまらないらしい。
完二は茜とは違う意味で表情を崩した。
「マジスか？
学校かぁ…かったりーなぁ……」
「じゃあ、かんじくんのかわりに、あたしが行く！」
面倒臭そうに言う完二に代わり自分が行くと張り切った声を上げる茜。
それに陽介は苦笑いを浮かべた。
「いや……流石にそれは無理っしょ……」
「うー…今、すごくわんこのきもちが分かった」
ボソリという茜に、皆の気持ちが一つになる。
「……なんで犬のキモチ……？」
／＊／
クマを紹介ついでに完二をシャドウとの戦闘に慣らす為にダンジョンにしばらく篭った後、総司達は解散した。
ケンカが得意ということもあって、完二はすぐにペルソナを召喚

しての接近戦もこなせるようになった。
武器自体はジュネスで借りているバックヤードの一室にあったパイプ椅子なのだが、暴れっぷりが凄まじい。
そんな完二にクマが用意したメガネは色の入ったレンズのはまったグラサンだ。
柄の悪さはアップしたが、正直、似合うとしか言い様がない。
クマのメガネ選びのセンスは中々良いと言えるだろう。
完二は可愛らしく動くクマに触りたがっていたが、あっさり断られてショックを受けていた。
シャドウに対する暴れっぷりも、その八つ当たりからだろう。
いつものように茜の荷物持ちをしながら共に帰宅し、茜の作った料理を菜々子を含めた三人で食べる。
堂島が帰ってきたのは、茜と菜々子が一緒に風呂に入りに居間を出てしばらくしてからだった。
疲れた様子の堂島に、総司は缶ビールとつまみに用意してあった柿の種を出した。
すまんな、と言って、堂島は缶ビールのプルタブを開けて呷る。
総司は堂島がビールを飲んでいる間に冷めた料理を温める。
味噌汁の鍋を火にかけ、魚の切り身をグリルに入れる。

「そうだ…堂島さん、この間探していた新聞記事のコピーって見つかった？」
「ん……ああ、見つかったよ。
……妻の…千里の記事なんだ。
ひき逃げされて、死んだ時のな……」

堂島の手に力がこもる。

「前に話したな。
まだ犯人挙がってないって。

アイツは……
菜々子の母親は、菜々子を保育園に迎えに行く途中、ひき逃げされたんだ。
寒い日で、目撃者は無く、発見も遅れに遅れた。
俺に知らせが入るまで、菜々子は保育園で一人、ずっと待ってた。
いつまで経ってもこない迎えを、たった一人で、な……」

手に持った缶の形が歪む。
堂島の表情も、一緒に。

「殺されたなんて……菜々子には言えなかった。
犯人を捕まえるのが仕事の父親が……
足取り一つ、掴めてねえってこともな……」

死亡ひき逃げ事件の、県警から発表される検挙率は９５～１００％と高い。
昨今は少し落ちているようだが、それでも９０％台だ。
それなのに、手がかり一つ得ることが出来ない。
それに堂島は憤っていた。
そこに、諦めの色はない。

「……だが、俺は必ず犯人を挙げる。
そのためにはプライベートなど無い。
……菜々子だって、分かってくれるさ」

だけど、その言葉に総司は頷くことは出来ない。

「……だからって…それは、体調の悪い菜々子を置いていく理由にはならない」

分かるからこそ我慢してても、寂しさは消えない。
それを分かってくれるからと押し付けるのはただの甘えだ。

「……！」

堂島は唇を噛み締める。

「……すまん、今は一人にしてくれ」

俯いて言う堂島の前に温め終わった食事を置いて、総司は自室に戻ろうと背を向ける。
その背に、堂島は小さく礼を言う。
堂島は随分歪んでしまった缶を見つめて、一気に中身を煽った。

■6／8

放課後、総司は教科書をしまいながら今日はどう過ごそうかと思いを巡らせていた。
誰かに誘われてはいないので、どう過ごすかは自分次第。
部活に出るか、キツネや仲間を誘うか、それとも……
そんな感じで脳内のスケジュール帳を繰っていると、隣の席である千枝が椅子を寄せてきた。

「ね、今日さ、テレビの中行かない？
こないだ瀬多くんがくれた靴の調子見たいんだよね」

そう言って、床を蹴る。
もっとも、校舎内では上履きなので今千枝が履いているのはこの間時価ネットで買って彼女に渡した靴ではないのだが。
前回テレビの世界に入った6日は完二の慣らしだったので、シャ

ドウの弱い浅い領域にしか行っておらず、満足していなかったようだ。
だが、返事をする前に横から声をかけられる。
座っている状態なのでその方を仰ぎ見ると、そこには諸岡が立っていた。

「お前は確か、委員会に入っておらんかったな？」
「……え？
ああ、はい。入ってないですね」

高圧的に言ってくる諸岡に素直に答える。
運動部と文化部を掛け持ちし、その他にバイトをしたりダンジョン探索などまでこなしてるとてっきり何でもやっている気になっていたが、委員会には参加していないのだった。
諸岡の要件は、病欠している保健委員の代わりに委員会に出席してこいというものだった。
すでに先方との話はついているという事後承諾ぶりに千枝は抗議するが、言いたい事だけ言って諸岡は去ってしまう。

「……強制か。
すまない、里中。
テレビはまた今度、な？」
「うん……
頑張ってね……」

落胆する千枝に断りを入れて、総司は保健室に向かう。
保健室の利用はした事はないが、一通り校舎の中は見て回っているので迷わずに辿り着くことができた。
ノックをして扉を開けると、中にいた全員の視線が総司に集まる。

「あれ、瀬多君、だっけ。
転校生の……
何かケガとかした？」

その中の一人である女生徒が声をかけてくる。
委員長らしい。

「諸岡先生から話聞いてない？
ウチのクラスの保健委員が病欠だから代わりに行けって言われたんだけど」
「え？　そうなの？」

委員長の言葉に、総司は肩を落とす。

（話ついてるんじゃないのかよ……）

心の中で愚痴ってしまうのは仕方のない事だろう。
委員長はそんな総司を余所に、人出が増えた事を喜ぶ。
校内を見回るように言われているが、保健室を空にすることもできなくて困っていたらしい。
委員長はテキパキと班分けを告げていく。
臨時である総司は留守番組だ。

「オレ一人かよ……」

二人一組の班分けで一人だけ仲間外れとなった男子生徒がボヤく。

「仕方ないよ、後来てないのは小西くんだもん。
あんなことがあったし……」

生徒の一人がそう言い、総司は顔を上げる。
小西。
珍しくはないが、”あんなことがあった小西”というと思い浮かぶのは一つだ。

「うん、可哀想だよ。
だからその分、アンタがやればいーの」
「ヒデーなー！」

男子生徒が不満を口にしたのと同時に、保健室の扉が開く。
総司が入ってきた時と同じように、入ってきた人間に視線が集まる。

「すんません、遅れて」

そう言って入ってきたのは、灰褐色の髪を後ろに流した男子生徒だった。
癖っ毛らしく、その髪は少し波打っている。
彼が小西なのだと、総司はすぐに分かった。
髪の色が小西早紀と同じ色だ。

「いっ、いーよいーよ！
委員会、来なくていいんだって、ホント。
おうちの手伝いとか、大変でしょ？
代わりいるし、大丈夫だから」
「……
けど、俺だけ……」
「じゃっ…じゃーさー、瀬多君とここの整理と留守番、してくれる？
あたしたち見回りした後報告会するし、瀬多君には下校時刻まで留守番して貰うんだけど、小西君はテキトーな時間に切り上げてく

れていいから、ね！？」
「そ、それじゃ、いってきまーす！」

そそくさ、という表現が似合う様子で委員達は校舎内に散っていく。
残されたのは、総司と小西と呼ばれた男子生徒だけだった。

「1年の…小西です」

しばらく黙っていた男子生徒が名乗る。

「3年の、小西早紀…知ってますよね。
あの人の弟です」

それを聞いた総司は、やはり、と思う。
小西は、総司を睨みつける。

「あんた…花村のツレですよね？
俺、嫌いです。
花村も…あんたも」

総司が陽介と仲がいいのは、もう知れ渡っている。
田舎の情報伝達力は凄まじい。
越してきて日がそんなに経っていないのに、初めて会う人に”堂島さん家に来た人でしょ？”と言われて総司は驚いたものだ。
同じように親交情報も出回っていて、ジュネスの息子と一緒にいるなんてと言ってくる人間もいる。
小西早紀の生み出した、テレビの中の商店街で聞いた声によると小西の父親もジュネスに良い感情は持っていなかったはずだ。
それを聞いて過ごしてきたであろう小西も二人に良い感情は抱か

ないだろう。
ジュネスの息子である陽介の事も、その友達の総司の事も。
ただ、突然率直に嫌いだと言われた総司が驚いている間に、小西は背を向ける。

「……もう、帰っていいですか？」
「いいよ。
テキトーでいいらしいからね」
「……それじゃ」

そう言って、小西は保健室を出て行く。
一つため息を吐いて、総司は手近な所から整頓を始めた。

／＊／

完全下校時刻が迫り、総司は保険医の机に留守番中に受けた伝言メモと整頓した際の在庫表を置くと保健室を後にした。
一度教室に戻ってカバンを回収した後、玄関に向かう。
総司は階段を降りたところで、帰ったと思っていた小西がまだ残っていた事に気付いて立ち止まった。
窓の外をぼうっと眺めている小西に近づく。

「帰ってなかったんだ？」
「あ……
……ど、ども」

声をかけると小西は驚いたように振り返り、総司に気づいて気まずそうに下を向く。

「……みんなが働いてるのに、先帰るの嫌だっただけです。

何となく……
……で、何か用ですか？」
「話がしたいな、って思って」
「……俺は嫌ですね」

小西の言い方はトゲトゲしい。
だが、転校に転校を重ねてきた総司はこの程度邪険に扱われるくらい何でもない。
にこり、と笑う。
しばらく無言のにらみ合いが続くが、折れたのは小西だった。

「……俺と話したいなんて、珍しい人ですね。
分かりました、帰りながらでいいですか？」
「もちろん」

総司は頷き、共に靴を履き替えて玄関を出る。

「そうだ……あれから他の委員に呼ばれて、俺、保健委員は”おみそ”扱いになりました。
”おみそ”って…知ってます？
いてもいなくても、いいってやつ」

言いながら、小西は笑う。

「俺、出ても出なくても……いてもいなくても、良くなったんです。
家が大変だから、”特例”だって。
……可哀想だからって、言えばいいのに」

その笑みは暗い。
小西早紀が殺されてから、どんな扱いを受けてきたか総司は分か

る気がした。
それは恐らく、先程の委員会の生徒達の様な。
腫れ物に触るような特別扱い。

「それで？」

小西は言う。

「話したいことって何ですか？
あんたも事件について聞きたくて話しかけたんですか？」
「……そうだな。
それは否定しない」

確かに、それは大きい。
事件を追っている総司としては、少しでも情報は欲しいところだった。
雪子と完二に関しては彼らから聞くことが出来る。
山野真由美についてはテレビで随分流れたから、人間関係などの情報やアリバイなどはもう手に入っている。
だけど、小西早紀については殆ど情報はないと言ってよかった。
総司が正直に言うと、小西は少し驚いた顔をした。

「…ははっ。
面白いっすね、あんた。
俺…小西尚紀です。
あの、よく知らねーのに嫌いとか言って、すみませんでした」

さっきより余程明るい顔で尚紀は言い、小さく頭を下げた。
総司の物言いは尚紀の気に入るところだったらしい。
頑なな態度は殆ど消えていた。

「みんな、俺のこと”可哀想”って遠巻きなんすよ……居心地はいいっすけどね。
でもあいつら、好奇心丸出しの顔なんです。
”どうやって殺されたの？”。
”どうして殺されたの？”。
”犯人が憎い？”……
聞く勇気も無いくせに、目だけ輝かしちゃって俺を見てるんですよ……
一挙手一投足。
面と向かって言ってくれた先輩には何か話したいとこだけど、残念ながら言えることは無いっすよ。
テレビで発表されてるのが、俺の知ってる全部」
そう言った後、少しだけ付け足す。
「あー、”犯人が憎い？”には”いいえ”…ですね」
尚紀が立ち止まり、つられて総司も立ち止まる。
いつの間にか、二人は小西酒店の前に着いていた。
振り返った尚紀は、総司の袖口が汚れているのに気付き、指摘する。
「さっきの…整理のせいですね。
はは……すみません、本当は俺がやるはずなのに……」
先程と同じように頭を下げ、尚紀はポケットの中を漁る。
「これ、良かったら……」

取り出したのは一枚のハンカチ。
綺麗に折りたたまれたそれは、男が持つには可愛らしいしろものだ。
それに出してから気付いたらしく、小さく尚紀は声を上げるが、引込みがつかなかったようで、そのまま総司に渡す。

「それじゃ、さよなら」

そう言って、尚紀は店の中に入っていく。
総司は手に持ったままの可愛らしいハンカチに視線を落とし、汚れていた袖口を拭った。

／＊／

家の前まで帰り着いた総司は、道の脇で猫と戯れる茜に気付いた。

「あれ？
茜ちゃん？」
「あ、そうじくん。
おかえりなさい！」

声をかけると、茜は猫を構いながら返事をする。
猫は随分茜に馴れてるようで、頭を茜の顔に擦りつけて甘えた声を出し、茜もそれに応えて頬を擦りつける。
これぞ、正に猫可愛がりといった様子だった。
総司もたまに釣った魚を野良に与える程に猫は好きだし、懐かれてる茜の姿は微笑ましい。
茜が抱えていた猫を降ろしてもすぐにはどこかへ行かず、足元に擦り寄ってしっぽを絡めてから静かに去っていく。

「じゃあ、入ろうか」
「うん。
あれ？　そうじくん、そのハンカチだれの？　かのじょ？」
視界が低いせいか、総司のポケットからはみ出していたハンカチに茜は気付いた。
「残念ながら」
総司は苦笑しつつ答える。
「学校で作業した時に汚れたら貸してくれたんだよ」
「じゃあ、あらってかえさないとね」
そう言って茜は総司からハンカチを受け取る。
日中家にいる茜が平日の家事を一手に引き受けているからだ。
「ところで、あの猫随分人に馴れてるみたいだけど、どっかの飼い猫？」
「ううん。
……すてられちゃったんだって」
茜は俯いて悲しそうに言う。
「今はあちこちの家に通いにゃんこしてるって」
「誰かに聞いたの？」
聞いた話を語っているような様子の茜に総司は聞くが、茜は首を振る。

「ことばはないけど、大体分かるよ。
思いが、あるから。
そうじくんも、コンちゃんの言いたいことちょっと分かるでしょ？」
「そうだね」

総司は一つ頷く。
キツネの言葉は総司には分からない。
だけど仕草で、表情で、声の調子で分かることもある。
茜も同じなのだろう。

「あのにゃんこね、あたしのコミュあいてなの。
”あくま”の。
あのユーワクのまなざしとなき声は正にあくまなんだよ」

絶対逆らえないの、と嬉しそうながらも悔しそうな茜に、総司は羨ましいコミュニティだなと心底思った。
自身の悪魔コミュである誘惑してくる年上の女性の誘いは普通に断っている総司だったが、あの猫に撫でて欲しいと迫られたら断れるとは思えない。
時間を忘れて構い倒してしまうだろう。
可愛いは、正義なのである。

■　６／１０

『…も梅雨入りとなりました。
ただ、今年は空梅雨で雨は少なくなるもようです。
そのため今年の夏は渇水が心配されています』

いつものお天気キャスターが気象情報を読み上げる。
総司はその内容に、少し安心して息を吐いた。

「良かった。
もし毎日雨が降るようなら、毎晩テレビに注意しなきゃならないところだった」
「雨、もう止んでるね。
朝からふってたからもしかしたら、って思ってたんだけど。
今日もマヨナカテレビは見れないみたい」

窓から外を覗いていた茜が報告する。
時刻はもう１２時近く。
菜々子も堂島ももう就寝していて、茜だけが布団から抜け出して総司の部屋にやって来ていた。
カーテンを閉めて、茜はソファに座っている総司の横に腰掛ける。

「林間学校、来週まつだっけ？」
「ああ。
１７、１８日だよ」
「週間天気、１７日は…晴れ、だって。
いいなぁ、キャンプ楽しそう」

テレビ画面の下部に映し出された天気予報を見て茜が言う。
その様子に、総司は苦笑する。

「俺も、前の学校の時になかったり参加できなかったりしたイベントだし、ちょっと楽しみにしてたんだけど、実態は泊りがけで近くの山のゴミ拾いらしいよ。
確かに、飯盒でご飯炊いたりテントで寝たりはするらしいんだけど」

これは、毎年やっているので地元の人間はよく知った話らしい。
千枝と雪子にそう言われ、陽介は絶望の声を上げていたものだ。
林間学校の目的は”若者の心に郷土愛を育てる”。
大抵建前となる目的は、八十神高校ではそうはならないようだ。

「俺と、花村、里中に天城。
見事に全員同じ班」
「同じハン……」
「……テントは別だぞ？」

呟きで繰り返す茜に、総司は注釈する。

「そうじゃなくて」

茜が言う。
総司が考えないようにしていた、不安点を。

「おりょうり、ゆきちゃんが作るの……？」

つい数日前、茜がこぼした言葉。

”女教皇”の料理。
絆を深める過程で、総司はすでにその恐ろしさを体験していた。
”一人暮らしを目指すため、料理を”。
そう考えた雪子に、総司は弁当の味見を頼まれたのだ。
結果は……微かに震える二人の様子が物語っていた。
そして、林間学校では力仕事を男子がする分、女子が料理をする事と決められている。
頼みの綱の千枝も、ゴールデンウィークでの言動からすると正直頼りない。
ちなみに、茜が築いている”女教皇”コミュの相手はゴールデンウィーク中に仲良くなったミワ。
好きな男の子であるタケヨシに作ってあげるために料理を教えてくれと頼まれているのだが、こちらもひどい有様なのであった。

■6／12

休日の朝、茜は階段を降りてくる足音を聞いて洗濯物を干す手を止めた。
おはよう、と身だしなみを整えた総司が居間に顔を出して冷蔵庫を開ける。

「おはよう、そうじくん。
おでかけ？」
「うん。
さっき天城から電話が来て。
夕飯までには帰るよ」

総司は茜に答えて、取り出したハムとチーズをテーブルに出してあった食パンに乗せる。
それをトースターに入れて、ペットボトルのジュースを煽った。

「あ、そうだ。
あたし、今日はななちゃんといっしょに、冬ふくと夏ふく入れかえるんだけど……そうじくんは、もうすんでる？」

済んでないならやっとくよ、と茜は言う。
明日から衣替え。
なので茜と菜々子は今日のうちにタンスの中身を入れ替えようと昨日から計画していた。

「大丈夫だよ、借りてるタンスに冬物も夏物も収まりきってるから」
「そっか」
「俺より、茜ちゃんの方が大変じゃないか？
夏物、持ってないだろ？」

そう言って、総司は財布から数枚お札を出して茜に渡す。

「いいの？」

渡されたお金は決して少ない額ではない。
顔を上げて訊くと、総司はにこりと笑って頷いた。

「皆で稼いだ分だしね。
それじゃあ、行ってくる」

チン、と鳴ったトースターから総司はパンを取り出して咥え、そのまま出かけていった。
茜は手元のお金に視線を落とす。
衣替えが終わったら、菜々子と一緒にジュネスに行こう、と茜は思った。

／＊／

午前中を使って二人がかりで普段の家事をすませ、昼食を挟んで衣替えを終わらせた頃には、結構いい時間になっていた。

それでも普段買い物に出る時間よりかは早いので、予定通りに茜は菜々子と共にジュネスへ出かけた。

一緒に服を選んで、小物を見る。

最近は茜が買い物を済ませてしまうのでジュネスに行く回数が減っていた菜々子の機嫌も良い。

ショッピングを楽しんで、買出しも済ませて、並んで帰宅の路につく。

途中、本屋に寄りたいと菜々子が言い、二人は商店街の四目内書店に立ち寄った。

窓に貼ってある「”弱虫先生、お金に困る”６／２８発売予定１５００円　弱虫先生が説く、頭を下げる男気！」と書かれたポスターにまず目が行く。

なんでも、寛容な気持ちになれる本…だそうだ。

四目内書店は小さい店構えながら、時々都会にもないようなこだわりの本があるとして利用客は中々多い。

ポスターで紹介されるような本は発売日に殆ど捌けてしまうほどらしい。

「何買ったの？」

店内を見て回っていた茜の元へ、紙袋に入った本をもって嬉しそうに駆け寄ってくる菜々子に尋ねる。

「えへへ……

魔女探偵ラブリーンだよ」

「マンガ？
どんな話？」
「んっとねー」

どうやら”魔女探偵ラブリーン”は低年齢向けのマンガのようだ。
菜々子の話によると、目立たない女の子、ラブリが魔女犬を拾ったことから始まるラブコメ事件とのことだった。
そんな事を話しながら書店から出ようとした茜の目に、その本は映った。
思わず立ち止まり、もう一度、今度はよく見る。

「あかねちゃん？
どうしたの？」
「……この本……」

茜は本を手に取る。
菜々子もその本を覗きこんだ。

「絵本？
……あかねちゃん？」

泣きそうな顔で絵本を見る茜を、心配そうに菜々子が見やる。

「ん……
ちょっと、思い出したから……」

少し目を擦って、茜は笑う。

「じゃあさ、その本、買おうよ。
それで、お父さんによんでもらお！

菜々子も、ひさしぶりにお父さんによんでもらいたい」
「……そうだね。
あたしも自分で読むより、だれかに読んでもらいたいな」

そうして茜は絵本を買ったのだが、その日、堂島に本を読んでもらうことは出来なかった。
堂島が帰ってきたのがもう寝る時間間際だったのだ。
さすがに夕飯も済んでいない堂島を付き合わせるつもりはない。
だが、堂島は明日読むことを約束してくれた。
上機嫌で茜は堂島の食事を温め、菜々子がビールを運ぶ。
食卓についた堂島に菜々子が缶ビールを差し出し、堂島が受け取る。
その堂島の顔は、すこし辛そうに曇っていた。

■6／14

食後のお茶を飲みながら、いつものようにテレビを見る。
堂島はまだ帰ってきていなかった。
番組の内容は、少年が実の父親を探すというドキュメンタリーもの。
菜々子は食い入るようにその映像を見つめている。

「ほんとの、お父さん……」

小さく菜々子は呟く。
そして、総司に顔を向けた。

「ね、お兄ちゃん。
”ほんと”…って、どういうこと？」
「……血が繋がってるってこと、だよ」

菜々子の問いに総司は少し詰まり、常識的な答えを言う。
だが、それに茜は異を唱えた。

「えー、ちがうよー。大すきな人ってことだよ。
だってあたし、ちのつながってる人たちより、”ほんと”があったもん。
わすれても、きえないのが…のこってるんだよ」

胸に手を当て、微笑む茜の言葉に菜々子も嬉しそうに笑う。

「そっか…じゃあ、お兄ちゃんは、ほんとのお兄ちゃんなんだ。
お父さんも、ほんとのお父さんだ！」

そう明るく菜々子は言うが、直後、その表情は曇る。

「でもお父さんは、菜々子のこと、好きじゃないと思うな。
もしかして……
……菜々子、”ほんと”じゃないの？
お父さんの”ほんと”の子どもじゃないから、お父さん、おうちに帰ってこないの？」
「お父さんがそう言った？」

総司が言うと、菜々子は首を横に振る。

「……言ってない」

菜々子は安心したように息をつく。
そうして、菜々子は遠くを見るような目で思い出を語った。
母親と父親と菜々子、三人で鮫川の花を摘んだ事。

母親はコーヒーに砂糖を入れず、ミルクのみだった事。
それを父親が菜々子の分と一緒に入れてやり、それを母親が優しく見ていた事。

「……お母さん……
どうして、菜々子おいていったんだろ……」

菜々子の瞳に涙が浮かぶ。
だけど、総司は菜々子に笑って欲しかった。
”ほんと”の兄だと言われたからこそ。
少し考えて、総司は机の影で細工をし始めた。
なにやらゴソゴソやり始めた総司を、菜々子は不思議そうに見つめる。
輪ゴムを、人差し指と中指に通す。
菜々子と茜に見えない位置で、薬指と小指にも引っ掛ける。

「何やってるの？」

黙ったまま総司は観客である二人の目の前に手を差し出す。
自然と二人の視線がその手に集まる。
総司は軽く握っていた手を広げる。
すると輪ゴムが人差し指と中指から外れ、一瞬にして薬指と小指に移動した。
テレビでやっていたのを思い出して真似た手品だったが、ちょっと速さが足りなかったようで、少し種が見えてしまった。

「見えたー！
あのね、ぴゅって、とんだの見えた！
もう一回！　もう一回やって！」

楽しそうに菜々子がせがむ。
その瞳に浮かんでいた涙はすっかり引っ込んでいた。
総司は菜々子の要望に答え、同じ手品をもう一度やり、他に覚えている手品も披露する。
そうしている内に堂島も帰ってきた。
茜は時計を見る。
それほど遅い時間ではない。
堂島に食事を出し、食べてる間に風呂に入れば丁度寝る時間には堂島の手も空いているだろう。

／＊／

茜が思った通り、寝る準備を終えて菜々子と共に居間に戻ると堂島は食後のお茶を飲み終わって新聞を広げているところだった。

「もうねる……」
「ん？
ああ、もうそんな時間か……おやすみ」
「……」

あっさりとおやすみと言う堂島に、菜々子は不満そうな視線を向ける。
堂島はそれに気付いて読んでいた新聞を下ろした。

「何だ？」
「お父さん……きょう、ねるまえに本よんでくれるっていった」
「あ…ああ、そうだったか……
分かった分かった、少しだけだぞ」
「「やったー！！」」

茜と菜々子は堂島の答えにハイタッチをする。
二人の喜びように堂島は苦笑して立ち上がる。
その懐から鳴る携帯のコール音。

「ちょっと待ってろ。
はい、堂島……市原さん！
はい…はい……
それじゃ、けっきょく……
あの、市原さんの都合さえよければ、今からそちらに……
……
……分かりました。
それじゃ……」

電話を取った堂島は、そう言って会話を終える。
断片的にしか話は聞こえなかったが、堂島が出かけようとしているのは分かる。

「……お父さん、行っちゃうの？」
「仕事…だからな」

菜々子の言葉に、堂島は答える。
それでも、菜々子は食い下がる。

「でも、きょうは本、よんでくれるって……」

”ほんと”のお父さんなら、好きだと思ってくれるなら傍にいてくれる筈。
家にあまりいないのは、自分を置いて行ってしまうのは自分が”ほんと”ではないんじゃないかと不安なのだ。

「そんなの、いつでも……」
「”いつでも”っていつ？」

堂島の言い訳じみた言葉を、椅子に座って聞いていた総司がバッサリと切り捨てる。
前に菜々子が言っていた言葉だ。
”いつも”一緒に話している。
”いつでも”本を読んでやる。
そう言って”いつも”後回しにして、”いつでも”約束を反故にしてきたのだ。

「うぐっ、そ…それは……」

その自覚はきちんとある堂島は呻く。
そして、しばらく視線を彷徨わせた後、観念したかのように苦笑いを浮かべた。

「けんか…してるの？
い、行っていいよ……お父さん」
「そんなんじゃない……
ごめんな、菜々子。
それより本ってな、どれだ？」

俯く菜々子に、堂島は言う。

「……いいの？」
「約束、したからな。
ほら、行くぞ、菜々子」
「うん！」

堂島と菜々子、そして茜は寝室に移動し、布団にダイブする。
菜々子と茜の布団の間に、堂島は胡座をかく。
茜に差し出された絵本を受け取って表紙を開く。
布団から顔を出して期待を込めて見上げてくる二人に笑って、堂島は朗読を始めた。

――ピンクのワニ――

ある森に全身がピンク色のワニがいた。
だけどピンクのワニでは目立ちすぎて獲物を捕まえることは出来ず、気味悪がられて友達も出来なかった。
だからワニはずっと一人ぼっち。

でもある一匹の小鳥がピンクを良い目印と思いワニの頭に留まった。
ワニはそれが嬉しかった。
二匹は仲良しになりワニの頭の上で小鳥は歌ったりして一緒に過ごした。

ワニは獲物を取れずほとんど食べ物を口にしてない日が続いた。
ある日、ワニの口の中で休んでいた小鳥を、ワニは寝ぼけて飲み込んでしまった。
慌てて吐き出したけれど、小鳥はすでに息絶えていた。
ワニは悲しくて悔しくて泣き続けた。
そしてワニは流した涙に溺れて死んだ。

涙は小さな湖になった。
湖の周りには木が生い茂り、そこに美味しい実をつけた。
湖には森の動物が集まるようになった。

でも、誰もその湖がワニの涙だとは知らない。
ピンクのワニがいなくなったことにも気づかなかった。

ワニが生きた意味はワニにはない。
だけど動物たちには、ワニが生きた意味がある。
たとえ、それを誰も知らないとしても。

絵本を読み終えた堂島は、挿絵に描かれているピンク色のワニをしばらく眺めた後、本を閉じた。
主人公であるワニの派手なピンクの明るい色とは正反対と言っていい暗い話。
しかし、そこには「生きる意味は死んだ後に明かされる」という思いが込められていた。
生きる価値や生きる意味は自分自身に無くても、社会や誰かに影響すればそれが価値になるのだという。
だとしたら、彼女の意味は何だったのだろうか。
千里の意味は。
先程の電話は堂島千里のひき逃げ事件の捜査で鑑定をやってもらっている、堂島の元先輩である市原からのものだった。
鑑定結果が出たという、電話。
だけど、同時に分かっていた。
声の調子から、警察での調べ以上のことは出なかったのだろうという事は。
出向いたところで、それが変わるわけがないという事も。
分かっているのは、白のセダンだということ。
恐らく大きなアメリカ車。
八十稲羽には無いことは調べがついている。
修理も廃車も、該当する記録は出てこなかった。
もう日本に無い可能性だってあった。

堂島は、怖かった。

犯人が捕まえられないことが。

大事な人を失った気持ちを、ぶつける場所を見つけられずに飲み込むしかないと感じることが。

菜々子を見るたび、千里と似たところを見つけるたびに堂島は現実を突きつけられている気がしていた。

もちろん、いつまでもこのままでいいわけではないとは分かっている。

チャンスは、今しかないだろう。

総司が堂島家にいる一年間。

それで駄目なら結局は逃げ続けるであろう自分を堂島は理解していた。

小さな寝息をたてる菜々子を見て、堂島は微笑む。

起こさないように立ち上がり、電気を消すと静かに障子を開ける。

暗くなった室内に、再び細くはあるが光が差し込む。

出て行く背中を、薄く目を開けた茜は見送った。

そうして、呟く。

「お父さん、か……」

ホントウのお父さん（後書き）

茜の”女教皇”コミュ、堂島宅前のマズメシ主婦にしようと思ってましたが、”女教皇”の正位置の意味の一つに”独身女性”というのがあり、切り替えましたｗｗｗ

”恋人”を考えてたんですけどね。（ただし裏設定）

アイドルの帰省（前書き）

みんな大好き（？）林間学校イベントは全カットでお送りいたします。
ごめんね！

アイドルの帰省

■6／17

まず家を出たのは総司だった。
林間学校は朝早く、山登りから始まるのだ。
普段は制服の総司も、今は八十神高校指定のジャージに身を包み、宿泊用の荷物を詰め込んだボストンバッグを手に持っている。

「そうじくん」
「あれ、起きてたの？」

玄関に顔を出した茜に、総司は少し驚く。
まだ時間は早いので、総司は出来るだけ静かに行動していたし、もう起きだしていたとは思わなかったのだ。

「うん。
わたしたい物があって」

そう言って、茜は手に持ったタッパーを総司に差し出した。
中身は惣菜大学で売っているビフテキ串に似ているが、大きさは記憶にあるのよりもかなり大きい。
それが４本入っている。

「何？　これ」
「そうざい大学がおとくいさんにだけ売ってくれるビフテキぐしＤＸだよ」

そして、茜は総司の手を取って瞳をうるわせた。

「生きてかえってね……」
「……うん……」

背中に哀愁を漂わせながら、総司は林間学校へと挑むために玄関を出る。
ビフテキ串ＤＸが見事に総司達を救う事を、彼はまだ知らないのだった。

次に出かけたのは菜々子。
朝ご飯を一緒に摂り、見送る。

「じゃあ、いってきます！」
「いってらっしゃい。
今日、もしかしたらおそくなるかもだから、おなか空いたらわるいけどカップメン食べて」
「うん、わかった」

そして堂島が出かけた後、茜は玄関のカギをかけた。
堂島が使った食器を洗い、家事もスピード優先ではあるが終わらせる。

「さて」

茜は居間のテレビの前に立って呟いた。
腰にはブックホルダー、右手には普段ジュネスのバックヤードに置かせてもらっているラクロススティック。
そして、テンプルの接合部に小さな花のアクセントがあしらわれ

た、ラメ入りのピンクのメガネ。
完全にダンジョンへと出かける姿だった。
何も持っていない左手をテレビに向けると、指は抵抗なく画面に沈み込む。

最後に家を出たのは茜。
指に続き顔を入れてしばらく様子をうかがった後、茜はテレビの中に飛び込んだ。
茜が降り立ったのは、懐かしい緑色の世界。
霧の中、大きな満月と聳え立つ塔がそこにはあった。

／＊／

この日、クマは暇を持て余していた。
自分が何なのかという答えは出ないし、仲間たちは最近忙しいらしくテレビの中に来てくれない。
今まで、こんな事はなかった。
手持無沙汰になる事も、こんなに考え込む事も。
今まで、どう過ごしてきたのかが分からない。
クマは総司に、静かに暮らしたいから、と事件の解決を頼んだ。
今はとても静かだ。
自身以外誰もおらず、シャドウも比較的落ち着いている。
なのに、これは違うと思ってしまうのだ。

「みんな、クマの事忘れて楽しそうに……
クマ、見捨てられた……
どーせクマは、自分が何なのかも知らんダメな子クマ」

分からないことを不安に思う。

独りが寂しいと感じる。
そんな事、クマは知らなかった。

「ううう…あっちの世界の楽しそうな声まで聞こえる気がするクマ。
寂しくて泣きたい気分って、こういうのクマね……」

それでも涙は流れない。
カラッポなキグルミの体では、泣けない。

「切なくて、胸が張り裂けて綿毛が飛び出しそうクマ～」

一匹で呟きながらゴロゴロと転がっていたクマだったが、不意に耳をひくつかせて体を起こす。
シン、と幻聴が聞こえそうなほどの静寂。
だが、最近は鼻が利かなくなってきたとは言え探査役のクマには近くに誰かがいるのが分かった。

「誰クマ！？」

耳をピコピコと動かしながら声を上げる。
その声に合わせて、霧が動いた。

「え？　え？
アカネチャン！？」

霧の中から出てきたのは茜だった。
茜の消耗した様子に、慌ててクマは駆け寄る。
広場には、ずっといた。
考えに没頭しすぎてスルーしたというのも考えにくい。
クマは、すぐに茜が別のテレビから中に入ったんだという事に気

付いた。

「はう～…やっぱナビいないとキツイなぁ……」

「”キツイなぁ”じゃないクマ！！

この霧の中で迷子になったら戻れなくなるクマよ！」

「う……ごめんなさい……」

それまでは疲れてはいても呑気な様子を見せていた茜だったが、クマの剣幕に素直に謝る。

「分かればいいクマ！

次はちゃーんと、クマをナビとして指名するクマよ」

「はーい」

茜は、クマの言葉に片手を上げて返事をする。

そんな茜を、クマは眺めた。

総司達にとってもそうなのだが、クマにとっては尚更茜は不思議な少女だった。

カラッポの自分の中から現れた人間の少女。

シャドウに守られていたペルソナ使い。

彼女こそが自身に答えを与えてくれるのではと思いながらも、クマは言い出すことが出来なかった。

分からないことは怖い。

だけど、自身の正体がハッキリした時、拒絶される事も怖いのだ。

だから、気付かないふりをした。

自身の正体が分かった時、拒絶されると理解している、自分に。

「さ、今日は帰るクマ。

次はいつものテレビから入るクマよ！」

■６／１９

全員揃って食卓を囲む。
疲れた、と言って１８日総司が帰宅した時にはもう寝ていた茜も、今日はいつも通りに起きていた。
昨日、一昨日と惣菜にカップ麺という手抜きが続いたが、今日はちゃんと手作りされた夕飯だ。
これは総司も手伝っていた。
総司が、茜が一日寝込んだのは家事疲れと判断したからである。
自分達よりうまく立ち回り、ペルソナ能力が強くとも、茜は菜々子と同年代の女の子なのだ。
掃除洗濯、料理に戦闘。
やはり負担をかけすぎたんだろう、と総司は心の中で反省していた。

「お兄ちゃんも、料理じょうずだね。
これ、すごくおいしいよ！」

だけどそれを別にしても、おいしいと言いながら食べてくれる人がいると作ったかいがある。
菜々子にとって惣菜の夕飯はあたりまえで今まで何の不満もなかったのだが、どんな惣菜も心のこもった手作りにはかなわない。
これを食べ慣れてしまうと、もう惣菜生活に戻れそうになかった。

「おお、確かに旨いな。
俺は料理はからっきしだし、これだけ作れるのは凄いと思うぞ」
「てぎわもいいんだよ、そうじくん。
アクシデントにも強いし」

菜々子に続いて堂島が褒め、足りなくなった材料を機転でカバー

した所を見ていた茜も褒める。
称賛の嵐に耐え切れなくなった総司は、赤い頬をごまかすように咳払いを一つしてテレビに視線を向ける。
テレビは、ワイドショー番組の途中だった。
右下に表示されたテロップには”久慈川りせ・電撃休業”となっている。
最近テレビCMや雑誌によく載っているブレイク中のアイドルだ。
愛称は”りせちー”。
デビューして間もないが、男女共に彼女のファンは多い。
綺麗だな、可愛いなとは思っても容姿をそれ程重要視せず、美醜で誰かのファンになったりはしない総司だったが、巧い演技で久慈川りせには好感を持っていた。
久慈川りせは休業後、親族の家で静養するらしい。
だが、その”親族の家”とやらが稲羽なのは何の皮肉だろうか。
インタビューしている雑誌記者もネタになると判断したのだろう、連続殺人と結び付けようと質問がヒートアップしていく。
これ以上はまずいと判断したのかりせの所属事務所がストップをかけて記者会見を切り上げる。
部屋を出ていくりせ達を追おうと会場は騒然となった。

「りせちゃん、テレビやめちゃうの？」

総司の視線を追いかけてテレビを見ていた菜々子ががっかりした声を上げる。

「さあな……けど実家ここって事ぁ、面倒な野次馬が増えそうだな、こりゃ……」

騒然とする会見会場から、画面はCMへと切り替わる。
それにもりせが映りこんでいた。

『メンドーなのもー、我慢するのもー、りせには、ムリ！　キライ！　シンドスギ！』

りせが水着姿で水滴を浴び、頬に缶ジュースを当てて首を可愛らしく傾げる。

『カロリーと体脂肪が気になるあなたに、特定保健用食品の”ケロリーマジック”。
ケロリとスリムな体型をプロデュース！』

そのＣＭを見て、堂島は大きなため息をついた。

「久慈川りせ…か
何も無いのが取り柄だったような田舎町が、今年はエラく騒がしいな……」

■６／２０

朝から町中が騒がしかった。
特に、商店街の周辺が。
原因は昨日の久慈川りせの電撃休業だ。
りせは稲羽出身ということで、この町にはかなりの数のファンがいるようで、あの記者会見の視聴率は高かったらしい。
アイドルが稲羽に引っ越してくる。
テレビで言っていた”親族の家”は商店街のマル久豆腐店の事らしい。
天城屋旅館が料理にそこの豆腐を使っていたことがあるらしく、マル”久”が”久”慈川から来ていることを雪子が知っていた。
他にも知っている人間はいたらしく、その事で皆、生で見たいと

盛り上がっているのだ。
仲間達も例外ではない。
特に陽介はファンらしく人一倍騒いでいた。

「あの豆腐店行ったら、りせに会えんのかな!?
会ってみたいな～、なんたってキャワイイし!」
「そりゃあまあ、話の種にはなるだろうけど……
疲れて休業してる所に押しかけるのはちょっと……」

浮かれた声を上げる陽介に、総司は苦笑する。

「キャワイイって…オッサンかよ。
それに重要な点から逸れてってない?
アンタ推理忘れたわけじゃないよね?
”テレビ繋がり”っていう!
狙われるかもよ、彼女?」

呆れた口調で千枝も言う。
陽介は水を差されて少し口をとがらせた。

「そんな、りせは別に昨日今日テレビに出た訳じゃないじゃん。
大体、りせと事件って関係あるわけ?」
「それ、気になって調べてみたの。
りせちゃんとアナウンサーの山野さんは、繋がり自体、ほとんど無いみたい。
同じ番組に、一、二度出た事があるだけ」

陽介の質問に雪子が答える。
雪子と千枝は記者会見のテレビを見た時点で連絡を取り合っていたらしく、後を千枝が引き継ぐ。

「アイドルなのは前からだけど、彼女いまニュース流れて、この町の”時の人”じゃん。
しかも本人、ここに越して来んだよ？」

テレビで取り上げられる。
注目される。
先日の推理が正しいなら、目をつけられるには十分だろう。
雪子の調べ通りに山野真由美と接点がないのなら、ほぼ”最初の事件の関係者”という線はなくなる。

次の日、雨は降った。
砂嵐と霧で判別のしにくい女性の映るマヨナカテレビ。
だが予想していたからか、その中で彼女に繋がる部分は見てとることができた。
ふわりとボリュームのあるツインテールに、水着姿。
誰もが思った。

映っているのは、久慈川りせだと。

■6／22

普段なら閑散としている商店街は、異様な人だかりとなっていた。
豆腐店の前だけではあるのだが。
運送会社のトラックが道路に引かれた白線を越えてくる人々のせいで通りにくそうにスピードを落とし、店の前に立っていた足立が手に持った誘導灯でトラックが行きやすいように誘導する。
陽介が豆腐店に行ったらりせに会えるかもと言った通り、そう考えた他の人間もつめかけているようだった。

授業を全て受け、茜と途中で待ち合わせていた総司達は出遅れたといっていいだろう。
特に完二は元々サボリ気味だった上に先日の事件のせいで学校を休まざるを得なかった為に出席日数が拙いらしく、きっちりと授業に参加していた。
流石に留年はしたくないようだ。
ちなみに、今日は男三人に茜を加えて四人での行動である。
千枝と雪子は先約があるということでここには来なかった。

「あれ、刑事さん、なんかあったんですか？」

陽介が代表して、ダラダラと誘導灯を振り続ける足立に声をかける。

「ああ、君らか。
いやぁ…ヤジ馬が次々車で押しかけて商店街の真ん中で止まろうとするからさぁ」

声に振り返った足立はうんざりしたように愚痴る。

「なんかワケありスか？」
「いやホラ、久慈川りせだよ、知らない？
もしかして、もう見た？
居たの？　どっち？」
「あ……？　交通課じゃねえ私服のデカが、なんで出張ってんのかって訊いてんだよ」

店の前にいるのに店の中は人込みで見えず、自身は店に背を向けての交通整理だというのが悔しいのか足立は妙に食いついてくる。
完二は苛立たしさの滲んだ声を上げると、足立はビクリと一瞬体

を震わせた。
この間完二にメモを奪われた時の事を思い出したのかもしれない。

「え…あ、いや、えっと……」

足立は汗をかき、どもりながら答える。

「ほら、稲羽署小さいし、人出足りなくてさ。
……じゃ、まだ仕事あるし、またね」

そしてそのまま早歩きで逃げ出してしまった。
それに陽介が呆れた声を上げる。

「お前…高1で現職の刑事ビビらすとかねーだろ……」
「別に。
思った事言っただけっスよ」

何でもないような顔で完二は言う。
言っても無駄だと思ったのか、陽介もそれ以上は言わなかった。

「はい、失礼、ちょっと道空けて。
……おーい、足立！」

その時、知っている声が聞こえて総司と茜は顔を上げる。

「ったく…持ち場空けんなっつったろ……」

そう言って頭をかきながら豆腐店から出てきたのは堂島だった。
足立を捜して視線を巡らせた堂島と総司の目が合う。

「お前たち、こんな所で……」

呆れた声を出した堂島は、次に総司の同行者に驚きの表情を浮かべた。

「ん…？　巽完二！
お前ら…仲いいのか？」
「ああ、この間俺が完二拾って送っていっただろ？
その縁で」

総司が行方不明になっていた完二を発見して、巽屋へ送って行ったのは堂島も知っている。
用意しておいた言い訳を伝えると、堂島は一つ頷いた。
ちらりと茜に視線を向ける。

「……そうか。
それより茜まで混じって何してるんだ、こんなとこで」
「学校帰りのそうじくんたちと会ったから、いっしょに夕ごはんのざいりょう買いに来たの。
今日はとうふのおみそしるにしてお魚か、コンソメスープにしてとうふハンバーグにするか…ってなやんでるんだけど、どうじまさんは、どっちがいい？」

堂島の質問に、茜は笑顔で答える。
嘘らしさの欠片もない笑顔に堂島は毒気を抜かれたような表情になり、魚、と呟いた。
そして、陽介を中心に視線を向ける。
その眼光に、陽介は一歩下がる。

「いくら芸能人だろうが、ここは自宅だ。

迷惑にならないようにしろよ」

そう釘をさして、堂島はその場を立ち去る。

「……なんで俺メインに言うんだよ……」

堂島の姿が見えなくなり、陽介はぐったりした様子で呟いた。

それにからかうような様子で完二が言う。

「ミーハーぽいって思われてんじゃないスか？

実際、先輩がりせのファンなワケですし」

「納得いかねー……」

「で…先輩、あのデカ、知り合いなんスか？」

堂島が完二の名前を知っているように完二も堂島の顔を知っているようだが、総司との関係は知らないらしく訊いてくる。

「母さんの弟で堂島遼太郎さん。

つまり叔父。

今俺と菜ちゃんは堂島さんの家に住んでるんだ」

「へえ…先輩の叔父貴がデカたぁね……

てか、今の空気なんスか？

……先輩ら、疑われてんスか？」

「まあ、少し。

ジュネスの家電売り場に入り浸ってるの知られてるし、行方不明になってたお前と天城…どっちとも親交があれば多少疑われるのは仕方ないだろ」

それでなくても銃刀法違反で一度補導されかけてるわけだし、という言葉は胸に秘めておく。

だけど、全てを話す事はできない。
テレビの中の世界の事、シャドウの事……話しても信じないどころか、ますます疑われて動き辛くなることは目に見えている。
連れていけば信じるかもしれないが、それで騒ぎになるのも避けたいところだった。
そんな事を話していると、人混みが解散し始める。
いつも店番をしている老婆だけでりせの姿が見えず、飽きたらしい。
ヤジ馬同士の会話を聞いた陽介が、大声を上げる。

「え？
りせちーいるって、ガセネタ!?
いねーの!?　結局ぅ!?」
「ぷッ、なんだ今のダセー声。
あのデカの見立て、間違いねーじゃんかよ」

あからさまに落胆した陽介に、完二は思わず噴き出す。

「う、うるさいよ!
とにかく、人ハケたし確かめに行こうぜ!」

陽介は赤くなって怒鳴り、さっさと店に突撃していく。
三人はそれに続いて店内に入った。

「すいませーん、おとうふ買いにきたんですけどー」

真っ先に飛び込んだわりには戸惑っている陽介に代わり、茜が店の奥に向かって声をかける。
暖簾の向こうで、割烹着を来た人物が背を向けて作業をしていた。
全員、その人物がいつもの老婆だと思っていたのだが……

茜の声に気付いた、暖簾の向こうにいた人物が顔を出す。
その人物は、老婆ではなかった。
三角巾をかぶり、割烹着に身を包んだ少女。

「あ、と……りせって、お前？」

我に返った完二が尋ねると、少女は微かに眉をしかめる。

「……なんで呼び捨て？」

やはり、久慈川りせ本人のようだ。
陽介が身を乗り出す。

「うそ…ホントに、りせちー？」
「……何の用？」

テレビでの明るいキャラクターとは随分印象の違う様子に陽介は戸惑う。
一歩前に出てりせの前に立った茜が人好きのする笑顔で声をかける。

「おとうふ、買いに来たの」
「…お豆腐？
どれにするの？」

茜に視線を向けて、茜の明るい笑顔を見たりせの表情が少し柔らかくなった。

「きぬごし！
2ちょう！」

「絹ごしね？
待ってて」

りせは水に沈められている豆腐を手早く分け始める。
陽介はこっそりと総司に顔を寄せた。

「なんか…テレビで見んのと全っ然キャラ違うな……
たまたま疲れてんのかな……？
いやー、でも本物の”りせちー”だよ……」

りせのテレビとのギャップに戸惑っているようだが、陽介はそれでも鼻の下を伸ばす。

「来て良かった……本日のミッション達せ…
……じゃなかった、本題がまだじゃん！
あのっ……！」

我に返ったらしい陽介はりせに話しかける。
りせは顔を上げて首を傾げた。

「さ、最近、変な事無かった？」
「変な事……？
ストーカーとかって話？
……キミたち、私のファンってこと？」
「オレらってか、この人がファンな」

完二が陽介を顎で示す。

「ばっ…お前、しれっとバラすなよ！
ごめん、えっとさ……

”真夜中に映るテレビ”の事って知ってる？
つっても深夜番組とかじゃなくて……
んー、なんて説明したらいいか……」
「……昨日の夜のやつ？
”マヨナカテレビ”だっけ」

説明に陽介は口ごもるが、りせはマヨナカテレビの存在を知っていたらしい。
しかも話しぶりからすると実際見たようだ。
陽介の言っていた意味が分かったのか、りせは補足する。

「でも、昨日映ってたの、私じゃないから。
あの髪型で水着撮った事ない。
それに、胸が」
「は？」

りせの言った事が理解できなくて、陽介が問い返す。

「胸、あんな無いし」

陽介は、その言葉にりせの胸元に視線を移す。
割烹着に包まれたそこには確かに女性らしい膨らみがあるが、確かにマヨナカテレビで見た程の迫力はない。
マヨナカテレビの彼女は、胸や太ももを誇示するようなポーズを取っていた。

「あー、言われてみれば……」

納得して呟いた陽介だったが、それがいかに女性にとって失礼なことか思い至ったようで、慌てて謝る。

「…って、あー、何言ってんの俺！
あ、その、ごめん……！」
「……謝りすぎ。
変なの」
「あ、笑った」

あまりの慌てっぷりをみせる陽介に、思わずといった感じでりせは微笑んだ。
その表情に陽介の顔も明るくなる。

「あれって、何が映ってるの？」
「や、ハッキリした事はなんも……」
「だけど、あれに映った人は次に誘拐されるかも知れないんだ」

総司が言うと、りせは驚いた表情を浮かべる。

「やぶからぼうじゃ、信じらんねえよな。
……けど、嘘じゃねえ。
他にもそういう目にあったヤツがいるんだ。
オレも、その一人」
「だから俺たち、色々調べてるんだ。
それで知らせようと思って」
「ふうん…あれ、やっぱり夢じゃないんだ。
昨日は、疲れたけど眠れなくて。
ちょうど雨降ってたから、たまたま聞いてた噂、試しただけなんだけど……」

りせは、パックに詰めた豆腐を入れたレジバッグを茜に手渡した。

「……分かった、ありがとう。
気をつける」
「ありがとう！
……あれ？　りせちゃん、おとうふ多いよ？」

袋が重いのに気付いて袋の中身を確認した茜が声を上げる。

「みんなにおまけ。
なんか、心配してもらったみたいだし」

茜に視線を合わせて、りせが微笑む。
茜も笑って、もう一度ありがとう、と礼を言った。

／＊／

「……ちょうど頂きます。
ありがとうございました」

手に乗せられた小銭を数え、りせは頷く。
商品の入ったレジバッグをもらい、足立は表情を崩した。
堂島につつかれ、慌てて顔を引き締める。

「ひとまず騒ぎは収まったみたいなんで、自分ら、とりあえずこれで。
今後も騒がしいようなら、署まで連絡ください」
「はい」

足立の言葉にりせは頷く。
時刻はもう夜。
総司達が立ち去った後も何度かヤジ馬が店の前で人垣を作ったが、

もういつもの静けさを取り戻していた。

「あー、失礼、いくつか訊きたい事が」

堂島の言葉に、りせは首を傾げて堂島を見る。

「最近、この辺りで物騒な事件が連続してるの、知ってるね？
身の回りで、怪しいヤツは見ませんでしたか？」

「別に…今まで通りです」

りせの返事に、堂島はため息をつく。

「あー、今まで通りな…仕事がアイドルじゃ、ストーカーだの、ハナから怪しいのだらけか……
どうして休業されたんですか？」

堂島は矢継ぎ早に質問をしていく。
インタビューだと思う事にして、りせも簡潔に答えていく。

「脅かすつもりは無いんだが…あなたには、これまでの被害者と幾つか共通点がある。
だから、その……」

「誘拐されるかも知れないんでしょ？
さっきも同じ事言われました。
気をつけます」

りせのその返答に、堂島も足立も驚きの声を上げる。

「えっ…さっきも言われた？」

「女の子を連れた三人連れで…制服着てたから、たぶん高校生だと

思うけど……」

りせの言う高校生に心当たりのありまくる堂島は顔をしかめる。

「もしかして、三人のうちの一人はこう…何て言うんだ、若干”ヤンキー風”の？」

その堂島の質問に、りせは頷いた。

／＊／

マル久豆腐店から出て、堂島は頭をかく。

頭の痛い問題だらけだ。

最近頻発する失踪事件。

殺人に至った事件を含めて、警察でも掴めていない謎は多い。

堂島がりせに警告したのも、堂島の刑事としての勘でしかない。

それなのに、事情も知らないはずの高校生が先回りをして同じ警告を与えた。

有名人の顔を見に来るための口実か。

それとも。

「堂島さん……？」

空を見上げて考え込む堂島に、足立は声をかける。

「八十神高校、な……

2件目のガイシャの小西早紀に、一時行方をくらました学生二名

……

久慈川りせが通学予定なのもあそこ、か……」

「学校関係者の捜査の方も、何も出てないんですよねえ……

このままだと、ウチらマズくないですか？
県警もそろそろ……」
「要らん心配してるな！
捜査続けろ」

弱気になる足立を堂島は叱咤する。
聞かなくてはいけない。
総司に。
心が重くても。

張り込みのオキテ

豆腐の味噌汁、豆腐サラダに豆腐ハンバーグ、そして白いご飯。
ハンバーグは茜と菜々子が一つずつ、総司は二つで堂島は一つ＋焼き魚。
本来味噌汁の具だけの予定だった豆腐は、堂島がおまけとして貰い追加されたために豆腐尽くしのメニューへと変更されていた。
焼き加減等も丁度良く、茜としても上位の出来栄えだと思うのだが、雰囲気が重いせいで味に集中することができない。
総司も堂島も同じようで、箸の動きが遅い。
菜々子も気になるのか、堂島の顔を覗きこんだり総司に視線を移したり、雰囲気を和らげようと話しかけたりしていた。
だが、そんな菜々子の努力も空しく、効果は芳しくない。
堂島は噛みしめるように一口食べ、美味いな、と呟いた。
意を決したように、総司を顔を向ける。

「久慈川りせと、何を話した？」

味噌汁を飲もうとしていた総司の手が止まる。
それは一瞬で、改めて一口飲んで器を置いた。

「……別に。
ただの…世間話だよ」
「……そうか」

堂島は口ごもり、そのまま話は終わるかと思われたが小さく首を振った後、堂島は言葉を続ける。

「総司……何故か、事件の陰にはお前がいる。

……考えたくはないが、事件が始まったのも、お前がこの町に来たのと同時期だ」

山野真由美の遺体が発見されたのは12日だが、死亡推定時刻は11日から12日にかけての数時間。
11日、つまり総司が越して来た日だ。
小西早紀がバイトをしていたジュネスの店長の息子との繋がり。
一時行方不明になった天城雪子と巽完二との関係。
特に巽完二は総司が発見者となっている。
そして今回の久慈川りせへの忠告。

「俺の仕事はな、まず始めに偶然って選択肢を消すとこから始まる。これ以上、お前が俺の領分に足を突っ込んでくるようなら、その時は……」

そこまで言って、堂島は口を噤む。

「いや…すまん」

俯いて謝る堂島に、不安そうな表情をしていた菜々子は、ふと気づいて顔を上げる。

「お父さんたち、りせちゃんに会ったの!?」
「そうだよー、りせちゃんち、おとうふやさんなんだよ。今日買い物行ったら会えちゃった♪」
「わあ!
いいなあ、菜々子も会いたい!」

茜の返事に菜々子は弾んだ声を上げた。
だが、空気の重さはいかんともしがたい。

「……」
「……」

沈黙が落ちる。

「……けんかしてるの…？」

菜々子は堂島の顔を覗き込む。
少し責めるような視線に、堂島はみじろぎする。

「お兄ちゃん、わるいことなんてしてないよ」
「わ、分かってるって。
そんなつもりじゃあない」

弁解する堂島に、菜々子は口を尖らせた。

「だって、いじめてる……」
「い、いじめてなんかないぞ。
ちょっと話をしてただけだ。
ほら、早く食べなさい」
「ん……」

／＊／

うやむやの内に話と夕食は終わり、夜も更けて日が変わろうとしていた。
足を組んで深くソファに座る総司の横に、部屋の電気を消した茜がちょこんと腰掛ける。
暗いが、外にある街灯のおかげで見知った部屋を歩くぐらいは平

気で出来るのだ。
外は雨。
茜はマヨナカテレビを確認するために布団を抜け出して来ていた。
テレビは居間にもあるが、階下には堂島も菜々子もいる。
個室の方が都合が良い。
総司は、１２時になるのを待ちながら思考に耽る。
鋭い堂島の事もだが、事件の事も考えなくてはならない。
例えば、マヨナカテレビ。
それは全てが混じり合い、曖昧だった海に入れられた人間を核にして固まった心が覗ける窓。
そういうものならば、入れられた後にハッキリと映るのは理解できる。
だが、入っていない状態で事前に映る理由は分からない。

「茜ちゃん」

傍らの茜に声を掛けると、すぐになあに？と返答がくる。

「事前に映る、ぼんやりとした映像なんだけど。
あれ、入れられる人間以外の心が映ってるって可能性はある？」
「どういうこと？」
「例えば…犯人、とか」

入れられた後、マヨナカテレビはその人物の心を映す。
だけどそれ以前に映るのは、入れられる人物というより、その人物の事を考えている人間の心が映っているのでは、と総司は思っていた。

「人をテレビに入れている以上、犯人も俺達と同じ能力を持っている筈だ。

つまりは、ペルソナ使い。
あちらに影響を与えることが出来るだろう？」
「はんにんの、”これからおそっちゃうぞー！”て考えがあっちにえいきょうしてうつってる、ってこと？」
「ああ。
…ないかな？」

総司の言葉に茜は少し考えた後、肯定する。

「そうだね。
かのうせいはあると思うよ」
「そっか。
……そう言えば、茜ちゃんは俺がワイルド…つまりペルソナ使いだって気付いたわけだけど、仲間以外のペルソナ使いがどこにいるかとか分かるか？」

犯人はペルソナ使いなのだから、それが分かるなら話は早い。
しかし、茜は首を横に振った。

「あたし、たんちできるペルソナもってない。
そっちのさいのう、ないから……
そうじくんのことが分かったのは、あたしと同じだったからだよ」
「同じ……？
ペルソナ使いの中でもワイルド同士だからって事？」

首はもう一度横に振られる。
茜はキーケースを取り出すと、その中の一本を取り出した。
青い、宝箱が似合いそうなアンティークの鍵。
ベルベットルームの物だ。

「契約……」

総司の呟きに茜は頷いた。

「会った時、まだそうじくんはけいやくを交わしてなかったけど、ベルベットルームにはよばれてたでしょ？あたしもけいやくを交わす前に何回かよばれたし」

「ああ」

「あそこのないそうや、こまかいトコロはワイルドの心によってかわるらしいんだけど、同じばしょなんだ。たぶん、心がそこでかさなったんだね」

それにね、と茜は続ける。

茜はペルソナ全書を開き、街灯の光で何とか見える位置に本をかざす。

開かれたのは最初のページ。

”愚者”の一人目。

総司のペルソナ全書でいうとイザナギのページだ。

開かれた本を総司は覗き込む。

そこには、ハート型の竪琴を持った機械の乙女が描かれていた。

髪は丁度、髪を下ろした茜と同じくらい。

名前はオルフェウスとなっていた。

ピクシーやアプサラスなど、総司と茜が呼び出せるペルソナは被っているものが多いのだが、オルフェウスは総司の全書には載っていない。

同じく、総司のイザナギも茜の全書には載っていなかった。

恐らく最初に覚醒したペルソナなのだろうと総司はあたりをつける。

「ホントはオルフェウスって男の人なんだけどね。

もう一人の自分ってイメージしたらこうなっちゃった。
知り合いにもにてるから、そっちのイメージかもしれないけど」

茜はくすりと笑う。

「オルフェウスとイザナギのでんせつって、けっこうにてるんだよ」

どちらも妻を亡くし、冥界に迎えに行ったという事。
そしてどちらも失敗に終わっているという事。
違いがあるとすれば、妻を”連れ帰れなかった”か、妻を”置き去りにした”かということぐらいだろう。

「そうなんだ……
今度調べてみようかな。
せっかく色々な神や悪魔を召喚できるんだし、そういうの知っておくのもいいかもしれない」

そう総司は答えて、時計に視線を向ける。
12時まで、もう少し。
マヨナカテレビに関しては、今までの情報から分かるのは先ほどの考察程度だろう。
全部省いて犯人を見つけるのも困難だということも分かった。
次に総司が考えるのは、犯人が人をテレビに入れる理由だ。
動機さえ分かれば犯人の目星が付け易くなる。
すでに二人もの人間が亡くなっている以上、入れて放置すれば死んでしまうことは分かっているだろう。
それでも入れるという事は殺意があるという事になる。
警察が証明できない上に、行方不明時は兎も角、死亡時刻にアリバイを作れる点から言ってもあの世界を凶器に使うのはありえる話だ。

だが、動機は分からない。

「殺意がある、って事は恨みかな……」
「みんなにきょうつうするウラミ……
テレビに出てゆうめいになるなんてナマイキだー、とか？」
「うーん……」

確かに、自己顕示欲が激しい人間が、そういう理由で誰かを恨むのはあるかもしれない。
だが、総司はその考えを検討し、最終的には否定をした。
柊みすずが襲われなかったからだ。
山野真由美と同じように、柊みすずもあの頃の報道でさらに人気を伸ばした。
襲われる可能性は十分にあった筈だ。
現に、全国区で有名だったりせはマヨナカテレビに映っている。

「分からない。
だけど」

総司は消えたままのテレビを見やる。

「うん。
まだ、先回りできる」

茜も総司と同じようにテレビに視線を向けて頷いた。
視線の先では、電源が切れたテレビが淡い光を放ち始めていた。

／＊／

堂島が足立に電話したのは、日が変わる直前の事だった。

その視線はからっぽの布団に向いている。
茜のものだ。
たまに茜はこうして布団を抜け出し、総司の部屋に行っていることを堂島は知っていた。
仕事の合間に本庁に問い合わせたりしているものの、預かって2ヶ月が経った今でも茜の情報は上がってきていない。
捜索願が出された様子もないし、名前から調べてもみたが戸籍を見つけることも出来なかった。
いてくれて、正直非常に助かっている。
特に食事の面で。
惣菜生活は費用がかかる上に栄養バランスも偏りがちになるのは分かっていたが、自身は料理は作れず、菜々子も目玉焼きが精一杯だったのだ。
そして、総司の事も。
堂島のいない間、菜々子の相手をしてくれ、自身もかなり深い所まで悩みを打ち明けている自覚はあった。
だが、その預かっている二人ともが事件と関わっている可能性がある。
堂島の勘はそれは確実だと告げていた。

『ふぁい、足立です』

数コールの後、気の抜けた声が堂島の耳に届いた。

■6／23

「やっぱ、アンパンと牛乳だよね」

菓子パンコーナーでアンパンを手に取った千枝は言った。
場所は商店街の四六商店。

傷薬や解毒効果のあるどくだみ茶などダンジョン探索に役に立つ商品が多いので、総司は結構な頻度でこの店に訪れていた。
子供が買うような昔ながらのオモチャなども扱っていて、その中の投げ付けると煙が出てくるイタズラグッズとして売られているドロン玉はシャドウとの戦闘から逃げる際に重宝している。
だがこの日はダンジョンに挑む準備ではなく、マル久豆腐店の張り込みの為の買出しに来ていた。
千枝の言葉に、陽介はニヤリと笑う。

「張り込みっつったら、それしかないだろ。あとアレな。携帯用オムツ」
「いらねー！つか、売ってないし！」
「ジュネスには揃ってるよ？」
「いらねーっつの、その情報！」

二人して騒いでいると、すでに選び終わったらしい完二が呆れた表情で声をかける。

「買うモン、決まったっスか？さっさと行きましょーよ」

千枝と陽介は他を待たせていることに気付いて、慌てて買いたい物を選ぶ。
レジに品物を積み上げて、支払いは特別捜査隊の財布を握っている総司がする。
袋だけ分けてもらい、それぞれに渡していく。
そして店を出ようと出入り口に向き直ると、足立と目が合った。
足立は目をそらして口笛を吹くように口を尖らせる。
しかし音は鳴らず、するのは空気の音だけだ。

「あれ？
なんでここに？」
「え、まー…聞き込みの最中」

陽介が尋ねると、足立はそう答えた。
だが、真実は違う。
堂島の頼みでここに来たのだ。
日が変わる直前に来た電話。
それは総司を尾行して欲しいという依頼だった。
見つかったのを幸いに、足立はヘラヘラとした笑顔を向ける。

「それより、君らこそ何してんの？
買い食い？」

尾行が面倒ならば、同行すればいい。
警察がいて拙い事なら刑事である自身がいる間はやらないだろうし、そうでなければ面倒事も起こらない。
そう考えた足立は豆腐屋に行くと言う総司たちに自分も行くところだったのだと同行を申し入れた。

／＊／

マル久豆腐店。
足立は店番ののりせ相手に大義名分である聞き込み。
茜は店内で水に沈められた豆腐を楽しそうに覗き込んでいる。
スーパーに慣れている身をしては昔ながらの店というのは新鮮で面白いものなのだ。
千枝と雪子は店先で喋りながら客のチェックをし、陽介・完二・総司は商店街を往復しながら怪しい人間が居ないか見回りをしてい

た。
だが、もう何往復もしているので、商店街を歩く人の中ではダントツに総司たちが怪しくなってしまっている。
実際引き返して居る最中に、最近多いらしいカツアゲグループだと勘違いされて警官に職質されてしまった。
ぐったりしつつ、マル久豆腐店に向かうと、視界に怪しい影が飛び込んできた。

「あ…っ！
おい、あれ！！」
「ど、どうした！？」

総司が声を上げると、足立が豆腐店を飛び出してくる。
そして総司の声を聞いて宙を見上げた一行の視線を追って顔を向けると、すぐに総司が示したものが何なのか足立にも分かった。
それは、電信柱に登って屋根に飛び移ろうとしている怪しい男。

「だっ、だれだー！」

足立の大声に驚いたらしい男は、足を滑らせて電信柱を伝って地上に落ちるような勢いで降り立つ。
そして慌てた様子で逃げ出した。

「あっ、逃げた！」
「待ちやがれッ！」

千枝と完二を先頭に逃げた男を追う。
出遅れた足立は、騒がしさに出てきたが突っ立ったままの茜に気付いた。

「ほら、置いていかれるよ！
茜ちゃんも！！」
「ふぇっ！？」

いきなり視界がぶれて、茜は驚きの声を上げる。
足立に抱え上げられたのだ。
そのまま足立は男を追いかけて言った総司達の後を追う。
やりとりの間に随分離されたらしく、男はすでに幹線道路に出ようとしていた。
交通量の多い幹線道路を渡ってしまわれると追うのが難しくなってしまう。
総司達も間に合いそうにない。
だが、丁度角を曲がって商店街に入ってきた運送会社のトラックに突っ込みそうになってしまった男の走るスピードが緩まる。
そのお陰で総司達は男に追いつくことが出来た。

「逃げんなテメ…このッ！」
「く、来るな！」

男に向かって一歩踏み出した完二に男は大声で叫ぶ。

「と、飛び込むぞ！
僕が車に轢かれても、いーのか！？」

じり、と男は後ずさりする。
その背後では車が行きかっている。

「だっ、駄目だよ！
被疑者が大けがしたら、警察の責任問われていっぱい怒られ……
……あ」

知ったことかと言いたげな表情をする完二を慌てたように宥める足立は、思わず警察という言葉を使ってしまって口を押さえるが、言った言葉は取り消せない。
こういう場合、警察関係者がいると知られると相手はパニックになって強硬手段に出やすくなってしまうのだ。

「マジで飛び込んじゃうぞ！
ほ、ほら、もう追うなよ、行けよぉ！」

この時もそのようで、傍目にも判るほど顔を青くした男は大きく一歩下がり、喚いた。
足立に抱えられたままの茜は、一つ溜め息を吐き、道路の対岸を指差した。

「あーっ！
あんなとこでりせちゃんが水着にっ！！」
「「え！？　どこどこ！？」」

反応した声は三人分。
陽介と足立と、そして怪しい男。
視線は一様に道路の対岸へ。

「いまだっ！」

その隙を逃さず、総司と完二が男に飛び掛った。

「ぷぎゃっ！」

二人に潰されて男が情けない声を上げる。

道路に飛び出せないように商店街よりに男を引きずり、全員で囲む。

囲むのは、ようやく降ろしてもらえた茜も参加していた。

プンスカと足立から離れ、総司の近くに陣取る。

総司に抱えられて商店街の坂を疾走した時は楽しそうだったが、足立に抱えられては嫌だったようだ。

囲んだことで落ち着いて、ようやく男をしっかり観察する。

冴えない男だった。

チェックのシャツ、その裾はジーパンの中に入っていて、首からはカメラが下げられている。

背にはリュックがからわれていて丸められた紙がはみ出している。

「きっ、君らね、善良な一市民にこんな乱暴なマネして……」

「るせえ！

ひと様ぶっ殺しといてテメェはそれか!?　あぁ!?」

囲まれて腰の引けた男が声を上げるが、それを完二の声が遮る。

「はぁ!?　タンマ！

ぶっ殺しって、何のこと!?」

焦ったように言う男。

「と、とぼけたって、ムダだから！」

背後の雪子を守るように、どもりながらも千枝は気丈に宣言する。

「ちょ、ちょっと待って下さいよ！

僕ぁただ、りせちーが好きで、部屋とか、ちょっと見てみたくて……」

「はいはい、犯人ってのは、みんな言うんだって、そういう事。
じゃ、後はこの僕が預かるからね」

両手を振って弁解する男の手を取って、足立は警察手帳を取り出して印籠のように突き出す。
そして、男の手に手錠をかけた。

「話は署で聞こうか……」

珍しく真面目な顔になって普段より意識したような低い声を出す。
ただ、キリッとした表情はそれほど続かない。
余韻に浸るように表情が緩む。

「くー！　このセリフ、言ってみたかった！」
「やっ、やめてくださいよぉ！
僕が何したっていうんですかぁ！？」

そんな足立の余韻に浸るセリフを、手錠をかけられて更に青くなった男が喚いてかき消す。

「し、知ってんだから！
日本には、”盗撮罪”ってのは無いんだ！」
「バーカ、状況分かってる？
お前の容疑は”殺人”なの！」

いい気分に水を差された足立は少しムッとした表情になり、手錠をかけた男の腕を引っ張る。
抵抗できない男に足立は気分を持ち直したらしく、笑顔になって総司達に向き直った。

「いやぁ、こうも上手く捕まるとはね！
ホント、大金星だよ！
君らもお疲れ様！
犯人逮捕に、ご協力感謝します！」

そう言って敬礼してみせる。
あ、はい…、と陽介が微妙な表情で頷いた。
手錠かける以外はしてないじゃんというツッコミは入れない。
茜の意識をそらす作戦で一緒になって引っかかった身としては何も言えないのである。

「でも事件に関わるの、これっきりにしなよ。
危ないし、堂島さんも心配してたしさ。
何より、子供連れなんだから。
……ほら、キリキリ歩け！」

そう言って、足立は犯人を促して悠々と引き返していく。
一旦豆腐店に戻ろうと総司達もその後を追う。
あまりにもあっさりとした逮捕劇にあまり実感は湧かないが、ここから先は警察の仕事だ。
ただ、りせに一声掛けることは出来るだろう。
だが店に戻るとりせは出かけたらしく、店番はりせの祖母がやっていた。
彼女が言うには、黙って出て行ってしまうことはたまにあるとのことだが……
このタイミングで姿が見えない事に皆不安を感じる。
ただ、足立だけが犯人は逮捕したんだから、と楽観的だ。
取調べがあるから、と男を連れてさっさと行ってしまう。
残された総司達は、念のために辺りを探すことにした。

だが、りせの姿は見つからず。
目撃証言すら得られないまま雨が降り始め、引き上げることになった。

／＊／

……ザ…ザザザッ……ザ…

砂嵐が徐々に引いていく。
チューニングがきちんと合ってないような、そんな映像。
だが、誰だか判別するのも難しかった映像と比べると、非常に鮮明だ。

「”マルキュン！　りせチーズ”！」

カメラの前に進み出てきたりせが、手でハート型を作って、それを左胸の前にかざす。
それが”りせチーズ”のポーズらしい。

「みなさーん、こんばんは、久慈川りせです！
この春からね、私進級して、いよいよ花の”女子高生アイドル”にレベルアップ、やたー！」

言いながら、水着を着たりせは胸を強調するかのように前かがみになった。
カメラがりせに寄って行き、その迫力ある胸が大きく映る。
やはりバラエティのノリらしく、左上にはＬＩＶＥ、右下にはテ

ロップが入っていた。

「今回はですね、それを記念して、もうスゴい企画に挑戦しちゃいます！
えっとね、この言葉聞いたことあるかなぁ？」

テロップ曰く。

「スゥ・トォ・リィッ・プゥー♪
ん、もう、ほんとにぃぃ？」

『マルキュン真夏の夢特番！　丸ごと一本、りせちー特出しＳＰ！』。
高いテンションのままりせは言い、カメラに背を向ける。

「きゃあ、恥ずかしー！
て言うか女子高生が脱いじゃうのって、世の中的にアリ！？
でもね、やるからにはど～んと体当たりで、まるっと脱いじゃおっかなって思いますっ！
きゃはっ、おっ楽しみにー！」

一通り騒いで、りせは背後に聳え立つピンクのネオンが怪しい建物に入っていく。
映像が荒れていく。
砂嵐が画面いっぱいに広がって。

ザザ……ザ…ザザ……

ホントウの自分《りせ》

■6／26

時は、待たない。

時間は無限ではない。

少し疑いを持たれている現在、目立つ行動は避けたい。

例えば、帰宅時間が遅くなるような。

授業が終わってジュネスに向かうと、テレビに入るのは16時頃になる。

堂島家の夕飯は一般家庭のそれより遅い時間ではあるが、それでも帰宅後食事の準備があることを考えれば一時間～二時間が限度だ。

そこでクマがりせの位置を探知しやすいように情報を集めながら、一日自由になる日曜を待ってテレビの世界に突入していた。

途中で食事を取れるようにと茜が用意した弁当入りのバスケットとジュースや茶のペットボトルの入った手提げ袋は、戦闘に参加しないクマが持って…もとい、からっぽのその体の中に入れて運んでいる。

揺らさないようにと茜が言った為か、それともただ単に動きにくい為か、少しクマの動きはぎこちない。

すり足のようにジリ、と一歩進み、クマは目をしばたたかせる。

それは、現在歩いているりせの生み出したダンジョンの内装のせいだった。

入り口にネオンで”特出し劇場丸久座”と記されたそのダンジョンは劇場とパブを足したような雰囲気の場所で、接客用のテーブルとソファが点在し、通路の壁は絞り緞帳で目隠しがされていた。

ネオンと所々にあるネオンライトで作られたシャンデリアだけが光源で、ピンクや紫のその光は派手なくせに薄暗い。
一部のライトアップだけが眩しく、眼鏡をしていても目が痛くなりそうだ。
りせの影がストリップすると宣言していたことも手伝ってか、18歳未満お断りの風俗店のような妖しい雰囲気に満ちていた。
もちろん、そんな店にはメンバーの誰も入ったことはないのであくまでもイメージなのだが。

「このピンクな世界にクマ、ちょっと酔っちゃいそう……」

クマは頭に手をやりながら言う。

「雰囲気がいかにも…て感じだよな。
それにしてもマヨナカテレビ、どんどん企画ヤバくなってね？」
「花村……
長引いたら脱げるんじゃないか、とか、そういう煩悩はマジ厳禁だかんね」
「んな手の込んだ悪巧みしねーよ！」

半眼になって忠告する千枝に、陽介は一筋垂れた汗を拭いながら怒鳴る。
会話しながらでも道に迷わずに済むのは探知能力でシャドウの位置を察知することができるクマがマッパーの役割も請け負っているからだ。
一度通った道やアナライズした敵の情報は忘れないらしい。

「センセイ！
そこの角曲がったとこに、シャドウがいるクマ。
敵、三体！！」

「よっしゃ、やろうぜ！！
先輩！　オレにＧＯサインをくれ！」
「よし、戦おう」

このダンジョンでのシャドウとの初遭遇に、完二が気合十分の声を上げる。
総司が頷くと、完二は曲がり角に飛び込んだ。
そこにいたのは、ヒモが絡まって棒人間のような姿になったシャドウ。
それが、三体。
初めて見るタイプだ。

「おらぁ！！」

完二が暫らく前に新調した武器である鉄板をシャドウに叩きつける。
棒人間のような体がくの字に折れ曲がり、数歩下がった。

「おいで、コノハナサクヤ！！」

雪子の持つ扇子がカードを打ち払い、シャドウ三体を炎で包み込む。
だが炎はシャドウの身震いひとつであっさり消えてしまう。

「火耐性持ちみたいクマね。
カンジの物理攻撃は普通に効いてたクマ！
アルカナは運命…固体名、ミス・ジェーン！」
「なら……！
こんのぉ！！」

アナライズ結果を聞いて、千枝が蹴りを放つ。
足がミス・ジェーンの体の中心を捉える。
そして、体を打ち抜いた。
絡まった糸と糸の間を。

「え？
ちょっ…抜けない！？」

ミス・ジェーンを構成するヒモはゴムのような性質を持っているらしい。
絡まったゴムから足が抜けず、蹴られた反動で中腰になっていたミス・ジェーンが立ち上がると千枝は片足を絡め取られたまま逆さ吊りになってしまった。

「ぎゃーっ！！
見るなぁ！！」

真っ赤になった千枝が重力に従って落ちてきたスカートを押さえる。
下手に片足が自由なせいで全然隠せてない上、どの道普段からスカートの下から覗いてるスパッツなのだが、そういう問題ではないらしい。
茜が千枝に飛びついて、伸びたゴムを総司が斬って千枝を救出する。
千枝らが十分離れたのを確認して、完二の鉄板がカードを打ち砕いた。

「来い、タケミカヅチ！」

完二の声と共に現れる、骸骨のペイントがなされた黒い巨体をも

つペルソナ、タケミカヅチ。
手に持った雷を模した武器をタケミカヅチ自身がその手で打ち壊すと、シャドウ全体を雷の雨が襲いかかった。
ゴムに電気は効かないと思いきや、それが弱点属性だったようで倒れこむミス・ジェーンをそれぞれが武器を持って襲い掛かった。

／＊／

──みなさん、こんばんは！
りせちーです！
みんないつも見てくれて、どうもありがとー！

あたしを見て。

──ファンのみんなに、りせのこと、ちょっとだけ語っちゃおうかな？

んーと……何から話そっかな……
そうだなぁ…今の仕事は……
ウン、とっても充実してるかな。
小さい頃からずっと憧れてたから今は毎日がとても楽しいよ！
理想の男性は……うーん……
やさしくて清潔感がある人かな？
あ、顔とか別に興味ないかも。
あたし、逆にかっこいい人とかって苦手なんですよね～。
やっぱり人は中身が大切じゃないですか？

あたしを見て。
本当の、あたしを。

――メンドーなのもー、我慢するのもー、りせには、ムリ！　キライ！　シンドスギ！

我慢してる。
無理してる。

中身が、大切。

でも、あたしには。

誰か……あたしを見て。

中身を見てくれる人が誰もいない。
自分ですら、どれが自分の中身なのか分からない。

しんどいよ……

／＊／

「さて、そろそろ出発しよう。
クマ、匂いは分かるか？」

広間に陣取っていた蛇のようなシャドウを倒し、確保したそこで昼食休憩をとった後、総司は立ち上がった。
通路や小部屋で見かけるものより強かったが、そのせいかこの部屋には他のシャドウは入ってこないらしくゆっくりと休むことが出

来た。
聞かれたクマは、宙を見上げて鼻を動かすが、あまりいい結果が出なかったらしく俯きながら報告する。
「……正確な位置は分からんクマ。この階には、いないと思う」
「分かった。じゃあ、階段を探して上に行こう」
「クマは何をやってもダメなクマチャンね……クマ匂いわかんなくなってきて役に立たなくなったら捨てられる？」
「そんなこと、ないよ」
不安そうに総司を見上げるクマに、総司は首を横に振って答えた。
「クマ…みんなと一緒でいいの？」
「うん。事件が解決して、静かになったこの世界を一緒に散歩しような」
「あたしも！おべんとう、また作るよ！クマも食べられるように、なんか考えてみる」
「センセイ…アカネチャン……うん…約束、クマ！」
茜も賛同すると、クマの表情が一気に明るくなる。皆が昼食を摂っている間、キグルミであるクマは会話に参加するくらいしかすることがなかったのだ。
荷物も片付け終わり、探索を再開する。
クマの足取りも軽くなって、休憩で疲れがとれたことも相まって雰囲気は明るい。

いくつかのフロアを抜けてオペラカーテンを開くと、探していた上の階層に行く階段が見つかる。
階段を登ると、宙から降ってくる声が総司達を出迎えた。

――あれー！？
こんなトコまで来るなんてりせのファンの人？
マジ！？
りせちー、超うれしー！

ハイテンションなりせの声。

――せっかく来てくれたんだから特別にサービスしちゃおっかなぁ……

……でも、ちょっと恥ずかしいから……電気、消すね！

りせがそう言った瞬間、パチンと音がしてネオンの光が消える。
薄暗いくせに妙に眩しかった光が消えて辺りはもう見渡せない。

「ぬおっ！
真っ暗になったクマ！」
「いくらクマさんがいても、この暗さじゃシャドウの正確な位置が分からないよ……」

クマが慌てた声を上げ、雪子も不安そうに辺りを見渡す。
闇だらけの通路…どこからでも凝ってシャドウが飛び出してきそうだ。

「そうだな……
ちょっと待って」

言って、総司は手を宙に滑らせる。
それに沿って青白く輝くカードが数枚現れた。
それで辺りが見えるほど明るくなるわけではないが、暗い空間には眩しく映る。
総司はその中から一枚を選び、降魔する。

「何だ？　それ」

光の残滓が消えた総司の手の平を見ながら陽介が聞く。

「マタドールっていう、死神。
ちょっと”マハンマ”使えるこいつが必要で作ったんだけど、ついでに”警戒”も覚えたみたいで」
「えっと…ペルソナ合体？、だっけ」
「ああ。
複数のペルソナを掛け合わせて新しいペルソナにスキルを継承させることが出来るんだ」

それが、ワイルドの利点であり、欠点でもある。
いくつものペルソナを代わる代わる降魔し、弱点を変えるワイルドの能力者は、それ故に一体一体のペルソナに経験を積ませることが厳しい。
そこで初めから強い力を持ったペルソナを生み出したり、弱点を補強するスキルを継承したりさせるのだ。
コミュニティを築いていれば、新たに生み出されるペルソナは更に強い力も得ることも出来る。
ベルベットルームは膨大なペルソナの管理の他に、そういった作業を補佐する為に存在するのである。
因みに”マハンマ”は呪札をばら撒いて、その光の中に閉じ込めた敵を浄化して滅ぼす呪文。

そして”警戒”は……

「”警戒”スキルがあれば、ペルソナの探知能力で俺にもある程度敵の動きを察知できる」

総司の言葉に、茜がへえ、と声を上げた。

本来、茜も総司と同程度の探知能力を持ってはいる。

だが、かつて茜が戦っていた時と今とでシャドウとの関わりが異なっていることもあり、スキルの取捨選択に差が生じていた。

討伐の為に積極的に戦っていたかつての茜達と、捜索の障害として火の粉を払う目的で戦う総司達。

狩られるシャドウと、襲ってくるシャドウ。

この世界のシャドウが捜査をしている総司達を敵視してるのもあるのだろうが、こちらを見かけるなり問答無用で襲いかかってくるここのシャドウとは違い、相手の力を推し量り、逃げ出す知能をかつての彼らは持っていた。

そして敵の背後からの不意打ちが推奨されていた上に情報分析タイプのサポートが優秀だったこともあって、襲撃を警戒することがほとんどなかったのもある。

よって使わないスキルとして整理され、茜のペルソナも、そして茜自身もそんなスキルがあったことをすっかり忘れているのだった。

双子でも育つ環境が違えば全く別の個性になるが、これもその一種と言えるだろう。

暗い中での戦闘はやはり難しくはあったが、クマと総司の探知能力で何とか先へと進んでいく。

ようやく階段を見つけ、登った先にあったオペラカーテンを開けると、眩しい光が総司達を出迎えた。

スポットライトの光だ。

ミラーボールの光が周囲にハートの模様を乱舞させる。

「来てくれたんだね！
いいよ。
りせ、心の準備は出来てるから……」

光の中に佇むのは、お立ち台の真ん中に設えられたポールの前に立つ、水着姿のりせ。
その側には割烹着姿のりせが座り込んで、呆然とした表情でもう一人の自分を見つめていた。

「さあ、見て！
ゲーノージンのりせなんかじゃない！
ここにいる、このあたしを見るのよ！！」
「やめて！」

もう一人のりせがポールに腕を絡めて観客である総司達にアピールするのを、りせが叫んで止めようとする。

「んっもー！
ホントは見て欲しいくせに、ぷんぷん！
こぉんな感じで、どぉ！？」

ポールに絡まりながら、くるりと一回転。
くねくねと体を動かし、ポールに体を擦り付ける。

「もう…やめてぇ……」
「ふふ、おっかしー。
やめてだって」

再び制止の声を上げるりせに、もう一人は表情を歪ませる。

「ざぁっけんじゃないわよ！！
アンタはあたし！
あたしは、アンタでしょうが！！
ベッタベタなキャラ作りして、ヘド飲み込んで作り笑顔なんて、
まっぴら！
”りせちー”？　誰それ！？
そんなヤツ、この世に居ない！！
あたしは、あたしよぉぉぉ！
ほらぁ、あたしを見なさいよぉぉぉ！」
「やめてってば！！
違う…違う……っ！
あなたなんて……！」

踊りが激しくなっていくもう一人の叫び声に、りせの叫び声が重なる。

「だめ、言っちゃダメ！！」

ハッと我に返った千枝が声を上げるが、遅い。
決定的な言葉が紡がれる。

「あなたなんて……私じゃない！！」

／＊／

高笑いと共に、もう一人のりせの体を闇が覆っていく。

「さーて、お待ちかね。
今から脱ぐわよぉぉ！
丸裸のあたしを、焼きつけなァ！」

闇が凝り、模ったのは片足だけでポールからぶら下がる、全裸の女性の姿。
ミス・ジェーンに絡め取られた千枝の格好と似ているが、千枝とは違い、ゆらゆらと体を揺らしながら投げキッスをする余裕すらある。
その顔には六角形の鏡が花のような形で組み合わされたアンテナが張り付き、体中に派手な色合いのマーブル模様がペイントされていた。

「これで！
あたしわぁ、あたしィィッ！！」
「チッ…来るぞ！」

感極まったようなりせの影の声に、完二が舌打ちする。

「我は影…真なる我……
さあお待ちかね、モロ見せタ～イム！
フフフ……特等席のお客さんには……
メチャキッツーいのを特別サービスよッ！」

目が無いので視線は分からないが、りせの影は顔を総司に向けてアピールする。
総司は、クマに倒れたりせを連れて下がるように指示を出すと、手の中の剣を構えた。
それに機嫌よくポールダンスをしていた影の雰囲気が少しイラついたものに変わる。

「あらぁ？　ステージの上に手ェ出そうっての？
勘違いなお客……

おさわりは禁止だから！
”マハアナライズ”！！」

そう言った影から放たれた緑色のレーザー光が総司達を透過していく。

「な、何だ！？」

痛くはない。
だが、正体不明の攻撃に総司は警戒する。
クマは光が触れた場所を気味悪そうに触った。

「こっちを探ったみたいクマ！
…ちょっとまずいクマよ！！」
「マズイって、どんな風にだよっ！？」
「関係ねえ！
行くぜ、タケミカヅチ！！」

弱気な陽介の台詞を遮って、完二がカードを破壊する。

「”デッドエンド”！！」

召喚されたタケミカヅチが、武器をりせの影に勢いをつけて突き出す。
だが、当たらない。
逆さまに揺れていたら避けていた。
そんな自然な動きだった。

「な……っ！」
「アンタは、風ね。

”ガルーラ”！」
「のわあ！？」

りせの影は、避けた動きでポールに絡まったまま片手をタケミカヅチに向けて風の呪文を放つ。
タケミカヅチを風の渦が包み込み、ペルソナが負った傷の分、完二の体に血が滲む。

「こんのぉっ！」

完二の体制が崩れるのをフォローするように千枝がポールの側に駆け寄る。
その勢いのまま蹴りを放つが、自然体のままりせの影は避ける。

「アンタは、炎。
”アギラオ”！」
「あっ！」

放たれた炎が千枝を包み込み、千枝は転がるようにその場を離れる。

「んなら魔法ならどうだ！
来い、ジライヤ！！
”ガルーラ”！」
「合わせて、コノハナサクヤ！
”アギラオ”！！」

先ほどりせの影が使ったのと同じ、風と炎の中位魔法。
風が炎を巻き込んで竜巻となってりせの風を襲う。
しかし、それもそよ風のように受け流された。

「キャハハ！　懲りないのね。
雷に、氷。
”ジオンガ”、”ブフーラ”！」
「ぐわっ！」
「きゃああ！」

雷が、吹雪が二人を襲う。
こちらの攻撃は当たらない。
だけど向こうは確実にペルソナの弱点属性をついてくる。

「何なの、アイツ！？
全然、こっちのが当たんないじゃん……」

スカートの火を消した千枝が、小さな呟きを漏らす。

「それなら！」
「いっくよー！」

総司と茜が動く。
総司が手を伸ばした先に、青白く輝くカードが現れる。
茜の手が栞を頼りに開いた全書の上に青白く輝くカードが現れる。
カードを、破壊する。

「暴れろ、マタドール！」
「”空間殺法”！！」

総司の召喚した赤いムレータを閃かせたマタドールが、闘牛のように縦横無尽に暴れまわる。
茜の呼び出した血のように赤い鎧に身を包んだ勇者ジークフリー

ドが、手に持った大剣で縦横無尽に斬撃を放つ。
避けきれない程の密集した攻撃なら、あるいは。
そう思い、放った攻撃は、それでも避けられる。
ポールを巧みに使い、クネクネと踊るように避け、それでも避けきれないのはポールを盾に。

「”アギラオ”！」
「”赤の壁”！」

反撃にりせの影が使ってきた火炎系中位魔法を総司の傍に舞い戻ったマタドールが、ムレータで防ぐ。
それになまいき、と呟いたりせの影が耐性消滅呪文を使い、”赤の壁”の加護を消し去った。

「そっちの子も……って、なんだ。
妙に強い力を感じると思ったら、無理してたのね」

りせの影の言葉に総司が茜の方を見ると、その額には大粒の汗が浮かんでいた。
顔も赤く、目がうるんでいる。

「茜ちゃん！？」
「だ、大丈夫」

総司の心配する声に茜は答える。
だが、その表情はとても大丈夫なようには見えない。
普段茜が降魔しているジークフリードを召喚するには、普段召喚しているペルソナよりもずっと精神力を要する。
記憶を取り戻すにつれ、かつての力を取り戻しつつあった茜だが、ジークフリードレベルのペルソナはまだ負担が大きい。

連続してスキルを使うことも出来ないし、長い間呼び出しておくことも出来ない。
現に攻撃を放ったジークフリードはすでに茜の中に戻っていた。
”空間殺法”は物理攻撃手段の中では、茜のジークフリードの強化もあって最も強力なものだ。
それが、避けられた。
りせの影の反応速度はそれ程速くない。
それでも避けられるのは、りせの影の能力によるものだ。

「クマより強い、たんちけいののうりょくしゃ……！！」

情報分析。
それがりせの影の能力。
こちらの全てを察知し、事前に動く。
だから、攻撃が当たらない。
だから、正確に弱点をついてくる。
茜に攻撃をしかけなかったのも、降魔しているジークフリードに弱点属性が存在しない為だ。

「フフ、そうよ。
アンタたちのことは全てお見通し……
キャハハッ！」
「ク、クマ、何の役にも立たんクマ……」

笑い声を上げるりせの影。
自分より上位の能力のせいでアナライズが上手くできないクマが泣きそうな声を出す。
再び、緑色のレーザー光が総司達を透過した。

「はーい、解析完了ォ……！

じゃ……いくよォ！！
かわせるもんなら、やってごらんッ！！」
「や、やめるクマ！！」

光。
それが目を眩ませると同時に、凄まじい衝撃が体を襲う。
ようやく目が見えるようになった時、クマの目に飛び込んできたのは傷つき、倒れた仲間たちだった。
皆より離れていたクマ、純粋に強いペルソナを降魔していた茜だけが立っている。
魔法でありながら、魔法反射のスキルでも防ぐことが出来ない属性。
万能属性と呼ばれる攻撃、それが今の光の正体だった。

「ウソだろ……こんな……」

起き上がろうとしてして失敗して再び倒れ込んだ陽介が言う。

「…か、勝てないって事？」
「わ、私たち……し、死んじゃうの……？」
「ダメクマ！！
し、死ぬとか絶対ダメクマよ！！」

千枝と雪子から零れる声に、クマは咄嗟に叫ぶ。
だけど、状況の打開策はない。

「クマはどうすればいいクマ……
みんな…センセイ……」
「早く……」
「え…っ？」

オロオロと何かをしようと、だが何も出来ずに左右に体を揺らして震える声を出すクマに、総司の声が届いた。
よく聞こえずに、クマは聞き返す。
総司は、もう一度言い直す。

「早く、逃げろ……
後一撃くらいは…抑えるから……」

ゆっくりと立ち上がり、りせの影を睨みつける。
その横で、茜も無言でペルソナを入れ替えた。
全員は逃げられない。
今走れる程に動けるのは、茜とクマだけ。
そして茜は戦うことを選んだ。

「み、みんなを見捨てて……
クマだけ……？
そんな事できないクマ！」

呆然とクマは呟く。
たった一人であの広場に立つ自分を思い浮かべる。

「クマは、また一人ぼっちになるの……？
いや…いやクマよ……」

皆が会いに来れなかった期間、たった一週間程ではあったが寂しかった。
胸が張り裂けて、綿毛が飛び出すかと思うほど。
クマの体が震える。
三度レーザー光が宙を走る。

また攻撃が来るのだ。
ペルソナを召喚する為に、総司は手を宙に伸ばし、茜は本を広げる。
総司は、今降魔できる一番対魔力に優れたペルソナを呼ぼうとしていた。
死なない為に。
少しでも攻撃を防ぎ、一秒でも長く全員を生き延びさせる為に。
茜は、自身の持つ一番の火力を持つペルソナを呼ぼうとしていた。
死なせない為に。
ジークフリードよりもずっと強力な力を持つペルソナ。
今の段階でそれを呼び出した時、自身にどれほどの影響があるかは分からなかったが。
それでも、やらないで死ぬことなんて出来ない。

「さよなら……永遠にね」

そうりせの影が呟いた瞬間。
クマの中で、何かがはじけた。

「「クマ！？」」

総司と茜が叫ぶ。
クマは、倒れた仲間たちの前に立った総司と茜の、更に前に飛び出していた。

「か、考えるより先に、か、体が……
な、なに前に出てんだ、わしゃあ！？」

クマの体が震える。
怖かった。

一人ぼっちが。
それに比べれば、敵の攻撃なんて何でも無いことに思い当たる。
震えが、止まった。

「こ、こうなったら、やってやるクマ！」
「……！？
なにこの反応、すごい高エネルギー……
これ…あのヘンなヤツ！？」

開き直ったクマは体を丸めて力を込める。
込めた力が漏れ出し、金色の光がクマを包み込んだ。
りせの影の驚きの声。

「クマ！！
テメ、何する気だオイ！！」

完二が叫ぶ。
クマも叫んだ。

「クマの生き様……
じっくり見とクマーッ！！
ぬおおおおおおお！！」

クマを包み込んだ光が更に強くなり、限界を超えてクマはりせの影に向かって飛び出した。
りせの影が光を放つ。
光と光がぶつかり合い、視界を白く染める。

「クマー！！」

陽介が光の中に消えたクマを呼ぶ。
何も見えない中、ドサリと何かが地面に落ちる音が耳に届いた。
光が治まり、痛む目を開けた時、そこには闇をかき消されたりせの影だけが倒れていた。
クマの姿は見えない。

「クマ？
どこ……？」
「あ、あそこだ！」

クマの姿を求めて辺りを見回す茜に、上を見上げた総司が宙を指差す。
ヒラヒラと。
ぺったんこになって落ちてくるクマを、茜が受け止めた。

「クマ！！
バカ…むちゃして……！」
「クマ……みんなの役に立てたクマか……？」

泣きそうな声でクマを抱きしめる茜に、クマは力を使い果たしたかのような弱弱しい声で問いかけた。

「立ったどころじゃねーよ……
……命の恩人だよ！」

そう答える陽介の言葉に、よかった、とクマは呟く。
そして、自身の腕を見た。
体が固まる。

「な…なんじゃこりゃあ！！

おおお…クマの自慢の毛並みが……
おおぉぉぉ……」

ワナワナと震えながら悶えるクマに、今まで神妙にしていた陽介の表情が呆れたものに変わる。

「……とりあえず、死にそうではないな」
「帰ったら、空気入れてブラッシングしてあげるからね」

ピンチを救ってくれた、ぺったんこの英雄に茜は笑顔を向ける。
茜はクマをそのまま助け起こすと、彼が救ったもう一人を示した。
そこには、目を覚まして起き上がった割烹着姿のりせ。
視線を彷徨わせ、大小傷を負った総司達を見て、沈痛な面持ちで顔を伏せる。

「ごめん…なさい……
私のせいで……」
「大丈夫。
もう、無理しなくてもいいんだ」

総司の言葉に、りせはハッとしたように顔を上げ、もう一度俯いた。
その表情は先程とは違い、少し赤い。

「……うん
いつ以来だろ……
そんな事言ってもらったの……」

りせはそう言って、倒れたままのもう一人に近付き、助け起こす。

「ごめん……今まで、ツラかったね。
私の一部なのに、ずっと私に否定されて……
私…どの顔が”本当の自分”か、考えてた。
けど…それは違うね。
そんな風に探してちゃ……」

りせとりせが視線を合わせる。

「”本当の自分”なんて……どこにも無い」

たとえ瞳の色が違っても、二人は同じ存在。
どちらかがニセモノなんてことはなく、片方だけがホンモノということでもない。
その言葉に、茜に抱えられたクマは顔を上げた。
呆然とした様子で呟く。

「本当の自分なんて…無い……？」

りせの言葉は続く。

「あなたも…私も……テレビの中の”りせちー”だって…私から生まれた。
全部…”私”」

水着姿のりせは泣きそうな、しかし安らいだ表情で頷いた。
影（シャドウ）が人格（ペルソナ）へと変わる。
バイザーを持った背の高い女性。
その顔には形こそ違うものの、影の時と同じようにアンテナが刺さっていた。

「おわっと、りせちゃん！」

その姿が消え、ふらりと倒れそうになったところを陽介が受け止める。

りせは顔を上げると小さく微笑む。

「りせ、でいいから……

確か、お店に来てくれた人だよね……」

「あ、うん、こいつらも……」

陽介は集まってきた仲間たちに視線を向ける。

それで分かったようで、りせは頷いた。

ありがとう、と消耗したせいで小さくはあるが礼の言葉を口にする。

「後で、全部ゆっくり説明するから、今は……」

りせをテレビの外へと連れ出す。

それで、りせの救出は終わる。

その筈だった。

「本当の自分なんて…いない……？」

だが、まだ終わらない。

クマの呟きに、全員の視線が集まる。

視線を向けた瞬間、りせが大きく震えた。

「あの子の中から、何か……！

ねえ、キミ！　下がって！！」

りせがクマを抱えていた茜に叫ぶ。
次の瞬間。
巨大な獣の爪が、茜の体を貫いていた。

ホントウの自分《りせ》（後書き）

Ｐ３に”警戒”があった事にスキル表調べなおしている時に気付きました。
必要なかったから凄まじくスルーしてた……！
慌てて書き直したよ……（｀Ａ、）

ついでに。
Ｐ３ＰとＰ４でジークフリードさんの耐性は違います。
Ｐ３Ｐだと斬撃・光無効、闇弱点だけど、Ｐ４だと物理無効、氷耐性、風弱点となってます。

ホントウの自分《クマ》

一瞬、何が起こったのか分からなかった。
ペルソナを召喚して異形と戦うことが日常となった今でも、それは現実感の無い光景だった。
人の体から太くて鋭い動物の爪が生えてるというのは。
茜の体が床に縫いとめられ、誰かが叫んだ。
それでようやく総司も我に返る。

「茜ちゃんっ！！」

茜は答えない。
苦しそうに顔を歪ませ、その口からは空気の漏れる音がした。
生きている。
体を貫かれ、床に押さえつけられて動けないようだが、それでも茜は生きていた。
爪が栓の役割をしているからか、血はそれほど流れていない。
彼女が支えていたクマも一緒に下敷きになっているが、こちらは傷はないようで押さえつけている腕をペラペラの腕でポカポカと叩いていた。
その叩かれてる腕からその先についている物を見て、ようやく何も考えられないほどにパニックに陥っていた総司にも事態が把握できた。
腕の持ち主は、大きな、クマに似た壊れた何かだった。
床を破壊して上半身を出したそれが、右腕で茜とクマを床に縫いとめている。
顔の部分は仮面のように硬質な素材でできているらしく、目の部分がひび割れて穴が開き、中に闇が覗いている。
その闇にはネオンのような色合いの光で気味の悪い目が描かれて

いた。

「”本当”？
”自分”？
ククク……実に愚かだ……」

壊れた仮面の奥の闇から、低い声が紡がれる。

「ま、まさか……”もう一人のクマくん”？
クマくんの、内面って事!?」
「茜ちゃんに何しやがんだ!
その手どけろ!!」

千枝が青い顔で呟き、完二が怒りの声を上げる。
だが、その声を受けるクマの感情は全く揺れない。

「その必要はない」
「んだと!?」
「……お前たちは、ココで死ぬ。
知ろうとしたが故に、何も知り得ぬままな」

クマの影がそう呟いた瞬間、弾かれたようにりせが顔を上げた。
そして、叫ぶ。

「皆!!
伏せて!」

咄嗟に声の指示に従う。
次の瞬間、頭上に風を感じた。
クマの影の左腕が振るわれたのだ。

「我は影…真なる我……
お前たちに”真実”を与えよう……
ここで死ぬという、逃れ得ぬ定めをな！」
「くっそう……
否定したわけでもねえってんのに！」

陽介が、なぎ払われた腕を避けた時に痛みを思い出したわき腹を押さえながら悪態をつく。
全員、りせの影との戦闘でかなりの傷を負っている。
動くのもやっとの状態で、クマの援護も望めない状況。
それでも、歯を食いしばって武器を構えた。

「あ…ぐう……っ」

茜が呻く。
クマの影の爪と爪の間から出た小さな腕が動く。

「茜ちゃん！」

茜の苦鳴に、総司が青い顔で叫ぶ。
青白い光が視界にちらつく。
ペルソナのカード。
茜は微かに動く腕を動かして、そのカードに触れた。
そして、総司がそうするようにカードを握りつぶす。
カード破壊による死の体感。

「うく……ペ…ルソナ……！
”メシアライザー”っ！！」

声を振り絞って茜が叫ぶ。
全書が取り出せない今、茜はペルソナを交代させることができない。
りせの影と対峙する為に降魔した、火力特化のペルソナ。
今茜が呼ぶことが出来るのはそのペルソナだけ。
それも、現段階の茜の精神力では一度呼ぶのが精一杯。
それならばやることは唯一つ。
召喚された、いくつも連なった棺を引きずる白い男が腕を振るう。
その名はメサイア。
救世主(メシア)を名に持つそのペルソナは殆どの属性に耐性を持ち、茜もある事情から思い入れがあるので強力な魔法をいくつも継承させていた。
優しい光が総司達全員を包み、痛みが引いていく。
全体回復呪文だ。

「……皆、構えて」
「ちょ…まさか、その体で一緒に戦う気!?」

辛そうに表情を歪めながら言うりせに、千枝が驚きの声を上げる。
りせは頷く。

「平気…私は多分、クマの代わりが出来るから。
あんな小さい子が痛みを堪えてがんばってるのに、黙って見てるだけなんて、出来ない……!
だから……」

りせが胸に手を当てて目を瞑ると、その背後にりせのペルソナ、ヒミコが現れる。
ヒミコは手に持ったバイザーをりせに被せた。
ゆっくりと目を開く。

バイザーの内側に、情報が映し出される。
直接の戦闘行為が出来るわけではない。
りせの影の時に使えていた属性魔法や皆を苦しめた万能属性魔法も、もう使えない。
だけど、情報解析の力は残っていた。
それこそがりせの力だった。

「今度は、私が助けてあげる！」

／＊／

軽くなった体に戸惑うように体を捻ってみて、陽介は痛みがないのを確認すると武器を握りなおす。
クマの影から視線を放さないようにして辺りを窺うと、全員の傷が塞がっているようだった。
”メシアライザー”は、総司達の傷をほぼ一瞬で塞いでいた。
救世主（メシア）とはよく言ったものだ。
陽介は、壊れた仮面を被ったクマの影を見上げる。

「クマのやつ…見かけよりずっと悩んでたみたいだな……
あんなのを溜め込んでやがったなんて……」
「それだけじゃない、だれかが……
だれ……？」

りせもクマを見上げる。
バイザー越しでクマの影を見上げると、アルカナの情報などが見て取れる。
りせは目を細めた。

「強い干渉……何なの、これ……」

「どういう事だ？」

りせの呟きを聞きつけた総司が尋ねる。

「確かに、クマは悩んでいたみたい……

影が、出るくらいに。

でも、それを誰かが…何かが干渉して後押ししてるみたい」

何かの力を、りせは感じ取っていた。

りせの影だった時にヒミコが使った”マハアナライズ”で総司達の能力を、りせはほぼ把握している。

そのおかげで、りせは自己紹介も済んでいない総司達の名前も把握できていた。

クマのアルカナは”星”。

一方、クマの影のアルカナは”月”。

”抑圧された精神が具現化したもの”というだけでは説明がつかない。

同じ存在から分離しただけならば同じアルカナになるはずだ。

ペルソナを変えることで自身の属性を変えてしまう茜や総司とは違うのだ。

しかし、それ以上は今のりせでは無理だ。

辺りの空間よりなお濃く、その答えを霧が覆い隠している。

クマの影が動いて、りせの思考は中断を余儀なくされる。

狙いは、雪子。

巨大な爪が雪子の腕を掠め、腕から血しぶきが舞う。

「雪子に何すんのよ！！

トモエ、来て！」

雪子の負傷に怒った千枝がカードを勢いよく蹴り砕く。

「”ブフーラ”！」

トモエが薙刀を振るうと、吹雪がクマの影を襲う。
だが、クマの影は堪えた様子はない。
それどころか、闇に浮かぶ目を細めて気持ち良さそうにしている。

「効いてない！？」
「氷結吸収属性みたい！
千枝先輩は物理攻撃を！」
「りょ、了解！」

収集した情報をヒミコに覚えさせながらりせが言うと、千枝は頷く。
千枝が小さくジャンプしながらリズムを取り、トモエは薙刀を構えた。
それをクマの影はさめた視線で上から見下ろす。

「何故お前たちは真実を知ろうとする？
真実など、得る事は不可能だ……」
「そんな事、ない！
氷が効かないなら……コノハナサクヤ！」

雪子が扇でカードを破壊する。
氷結に耐性を持っている場合、その相手は火炎に弱い場合が多い。
千枝のトモエしかり、シャドウしかり。
総司のペルソナも大抵そうだ。

「”アギラオ”！」

コノハナサクヤの呼び出した火炎がキグルミの表面を炙る。
当たった部分が黒く焦げ付く。
効いてはいるが、体勢を崩す程ではないようだ。

「真実は常に、霧に隠されている。
手を伸ばし、何かを掴んでも、それが真実だと確かめる術は決して無い……
なら…真実を求める事に何の意味がある？
目を閉じ、己を騙し、楽に生きてゆく……
その方がずっと賢いじゃないか」
「な…何言ってるクマか！
お前の言う事、ぜ～んぜん分からんクマ！」

低い声で言う影の言葉に、クマは食ってかかる。
拘束が緩まないかと影の腕を何度もペチペチと叩く。
しかし、ペラペラのクマの攻撃では全く緩む気配はない。

「クマがあんまり賢くないからって、わざと難しい事を言ってるクマね！
失礼しちゃうクマ！
クマはこれでも一生懸命考えてるの！
さっさと、クマたちを解放するクマ！」

クマの物言いに、影は鼻で嗤った。

「それが無駄だと言っているのさ……
お前たちはココで死ぬし、何よりお前は”初めから”カラッポなのだから」
「……！」

影の言葉に、ビクリと大きくクマが震えた。
影がクマに向ける視線に含まれるのは、侮蔑と嘲笑。
そして一握りの悲哀と、諦め。

「お前は心の底では気付いてる……
でも認められず、別の自分を作ろうとしているだけさ……」

言葉を投げかけられるクマの顔は青い。
それを心底哀れそうな表情で影は見つめる。

「失われた記憶など、お前には初めから無い。
何かを忘れているとするば、それは”その事”自体に過ぎない。
この女とは違うんだ」

言って、影は茜に視線を移す。
先程の召喚で力を使い果たしたのか、ぐったりと目を閉じていて、
その呼吸は浅い。
普段から白い肌は青ざめて更に白くなっていた。

「そ…そんなの……ウソクマ……」
「なら、言ってやろうか。
お前の正体は、どうせただの……」
「やめろって言ってるクマー！！」

影の言葉を、クマは大声で遮る。
その必死な様子を影は嘲り、視線を今度は総司達に向けた。

「お前達も同じだ……
真実など、捜すだけ無駄だ。
真実が欲しいなら、簡単な事。

ただ、お前たちが”真実”と思えばいいだけさ……」

言って、クマは”コンセントレイト”、と呟く。

「魔力増幅魔法……！
大きいのが来るよ！」
「天城はりせのとこまで下がって！！」

りせの叫びに合わせて、総司は雪子に指示を出す。
雪子が下がるのを確認しつつ、総司もりせの方に走りながら宙に手を滑らせてカードを呼び出すと、その内の一枚を選んで降魔する。
氷結に耐性を持つものは反対属性である火炎に弱い傾向を持つ。
それと同じくらい、属性耐性にはもう一つ傾向がある。
それは、属性耐性を持つものは、その属性の魔法を扱う事が出来るという事だ。
肉弾戦が得意なものはそうでもないが、何らかの魔法が使える場合、耐性を持つ属性がそのまま所持魔法という場合は多い。
クマの影の場合は氷結吸収、つまり氷結に耐性があるので氷結属性の魔法を使える可能性が高いのだ。
火炎魔法が使えて火炎に耐性を持つ代わりに、氷結属性を弱点に持つコノハナサクヤを降魔する雪子の天敵と言っていい。

「おりゃあぁぁ！！」

完二が裂帛の気合と共に鉄板を振るって殴りかかる。
それをクマの影は爪で受け止める。
火花が散り、クマの影が押し返すように腕を振るう。
弾かれた完二は床に手を付いて体勢を保つ。

「く…っ、硬ってえ！」

完二が悪態をつく。

「来るよ！」

「全員防御！」

りせが魔力の解放の気配を察して注意を促す。

総司は指示をして、自身はりせと雪子の前に立って腕を広げた。

「”マハブフーラ”……！」

クマの呪文と共に、全方位を吹雪が襲う。

推理通り、氷結属性の全体魔法。

それぞれ身構えてやり過ごし、能力がサポートに偏り身を守る術を持たないりせと、いくら防御してもダメージを避けられない雪子を総司が守る。

クマの影と同じように氷結属性の攻撃を吸収できるペルソナ、ゲンガーを降魔しているのだ。

吹雪の冷気は総司の体に呑み込まれて、りせと雪子には届かない。

この庇い方は、雪子の影との戦闘の時に茜が総司に対してやったやり方だった。

「”メディア”！」

防御してても凍えた体を、コノハナサクヤが範囲回復魔法で癒していく。

初撃で受けた雪子の腕の傷も殆ど完治する。

回復が鬱陶しく思ったのか、クマの影が再び雪子に向けてその腕を振るう。

「させない！」

氷結に耐性を持ち、更に”メディア”ですぐに動けるようになった千枝とトモエが雪子を庇う。

トモエが手の平をクマの影に向けて腕を伸ばすと、物理攻撃を反射する”テトラカーン”がたまに発動するスキル、”カウンタ”が発動してクマの影の腕が弾かれる。

その腕に総司は斬りかかった。

クマの影と同じように氷結属性を吸収し、氷結属性魔法を操るゲンガーは召喚出来ない。

ゲンガーを降魔している限りは、普段の茜と同じように降魔の恩恵だけで戦わなくてはいけないのだ。

それに合わせて完二と陽介がカードを破壊する。

「”ガルーラ”！」

「”ジオンガ”だ！！」

電撃を纏ったカマイタチと刃がキグルミの腕を切り裂く。

破れた生地の間から、闇が零れ出て霧散する。

「ぬ……、消えていろ」

そうクマが言った瞬間、召喚されていたペルソナが一斉に耳に当たる部分を押さえて姿を消す。

姿を消したのは、コノハナサクヤとタケミカヅチ。

トモエとジライヤは耳を塞いでいた手を離し、首を振って構え直す。

ヒミコには影響はないらしく、微動だにしない。

「な、なんだぁ！？」

消えたタケミカヅチがいた場所を見上げ、茫然とした声を上げる完二。
その隙を、クマの影は見逃さなかった。

「”愚者のささやき”！
精神をかき乱してペルソナの召喚や魔法を封じるスキルよ！
完二、避けて！！」

りせが叫ぶ。
クマの影の腕が地面に叩きつけられ、傷口から漏れ出た闇が弾丸となって完二を襲う。

「……”虚無への導き”！」

衝撃と共に、完二が後ろへと倒れた。
闇はそれで霧散するが、完二は倒れたまま動かない。

「おい！
完二！？」

陽介が起き上がらない完二に駆け寄る。

「……大丈夫だ。
気絶してるだけみたいだ」

息をしている事を確認して、陽介が息を吐く。
総司もホッと胸を撫で下ろすと、自身の状態を確認した。
中に、ペルソナの意思を感じる。
自身のペルソナは封じられていないことを確認して、剣先をクマ

の影に向ける。

「”ディアラマ”」

陽介の視線に頷いて、ジライヤが完二の傷を癒す。

回復魔法はコノハナサクヤの得意魔法だが、今は封じられて使えない。

”ディアラマ”はつい最近覚えた中位回復魔法だった。

即座に回復とまではいかず、そこに振り下ろされる追撃を総司が剣で受け止める。

クマの影が押し切ろうと力を込め、腕と総司との距離がじわじわと縮まっていく。

そこを千枝の蹴りが影の腕の軌道を逸らせて腕は総司の横の床を叩く。

「無駄な事はやめろ。

抗っても、何も見えはしない！

”ウルトラチャージ”！」

クマの影は声を荒げると、片手を上げた。

その掌に、闇色の風が集まっていく。

茜が小さくうめき声を上げた。

片手が上げられた事により、体重が床に付いたままのもう一方にかかっているのだ。

総司が茜に視線を向ける。

だが、クマの影を大人しくさせないことには助ける事は出来ない。

目に見える暴風を、りせは見上げた。

「何……？

やな予感がする……」

「っぐ……
何だ、今の……」

回復魔法が効いたようで、完二が目を覚ます。
頭を振って身を起こす。

「……！
攻撃がくるよ、防御して！」
「愚かしい隣人ども！
さあ、末期は潔くするものだ！
”魔手ニヒル”！！」

腕が勢いよく横薙ぎに振るわれる。
その掌に集められた闇色の風が総司達を煽る。

「のわあ！？」

目が覚めたばかりで状況が呑み込めていなかった完二が、情けない声を上げて迫る爪をかわす。
身構えていた総司達には影響はない。
腕が薙ぎ払われた為に突き刺さった爪が捩じられて、茜のうめき声が苦鳴に変わった。

「アカネチャン！！」

クマが叫ぶ。
総司は別のカードを選びとってペルソナを降魔しなおした。

「里中！」
「うん！」

総司がカードを握りつぶし、青い炎の中からマタドールが現れる。
トモエが薙刀を振りかぶる。

「「”暴れまくり”！！」」

二人の声が重なる。
ペルソナ二体が縦横無尽に暴れまくる。
マタドールの細剣が、トモエの薙刀がキグルミの生地を切り裂いていく。

「何故だ…無駄な事のために、どこからそんな力が沸いてくる……！」

クマは唸り、”マハラクンダ”を唱える。
”カジャ”と付く魔法は身体強化の効果を持つが、”ンダ”と付く魔法は身体弱化の効果を持っている。
”ラクンダ”は衝撃を通りやすくする、つまり防御力を下げる魔法だ。
ちなみに、”マハ”は全体の意味を持つ。
クマの影の攻撃パターンは、何かステップを踏んでから行う場合が多いようだ。
そう総司は推察する。
”コンセントレイト”の後の氷結魔法、”ウルトラチャージ”後の魔手ニヒル。
ならば防御力を下げた後に来るのは……
そこに思い至った総司は大声で指示を飛ばす。

「物理攻撃がくるぞ！
全員防御！！」

指示に、それぞれ武器を盾代わりとしたり身構える。

「”デクンダ”！！」

「”ヒートウェイブ”！！」

少しでも衝撃を防ぐ為に、総司は掛けられた弱化魔法を打ち消す。

”デクンダ”はンダ系魔法を打ち消す力を持っているのだ。

次の瞬間、クマの腕が床に叩きつけられた。

地震の様な揺れと、体を打つ衝撃波。

「ぐぅっ、わっ！」

一人だけ防御体制を取らずに動いていた総司の体が衝撃を受けて床に投げ出される。

受身も取れずに床を転がるはめになり、息が詰まった。

他の者も、なんとか衝撃をやり過ごしたものの、構えが解ける。

そこに、クマの腕が振るわれた。

やはり回復役目当てなのか、狙いは雪子。

陽介も回復魔法は使ってはいたが、ペルソナの封印がまだ効いている雪子を優先させたのだ。

「雪子っ！！」

その軌道上から雪子を押しのけて、千枝が入る。

尻餅をついて、その衝撃に一瞬目を瞑り、再び開けた雪子の目に飛び込んできたのは、爪に串刺しにされる千枝の姿だった。

「いやあぁぁぁぁあ！！」

雪子の悲鳴に、体が床に倒れる音が重なる。
再び、クマの影は片手を上げた。
掌に闇色の風が集まっていく。
その爪には生々しい赤色がべっとりと付いていた。

「この……っ！」

完二が歯軋りする。
同時に戻ってくる、ペルソナの呼び声。
封印が解けたのだ。
促されるまま、完二は叫んだ。

「来い！　タケミカヅチ！！
”デットエンド”ォオォォ！！」

鉄板にカードが破壊され、タケミカヅチが顕現する。
雷の形の武器を振りかぶり、それをクマの影に叩き込む。
クマの影は少し呻き、だが、かかげた腕は下ろさない。
完二と同じようにペルソナの封印の解けた雪子が、倒れた千枝を抱きかかえながら扇を薙いでカードを破壊する。

「”リカーム”！」

死に瀕した魂を繋ぎ止める魔法で、千枝の意識を戻す。
ただ、重症なのは代わりない。
陽介が駆け寄り、千枝に”ディアラマ”をかけて傷を塞いだ。

「来るよ、防御して！！」

バイザー越しにクマの影の集めた風が臨界に達するのを見て、り

せが警告する。
”魔手ニヒル”。
それは、来るのを覚悟して身構えていればただの風でしかない。
そうでなければ意識を刈り取る。
だが、一定の条件をクリアすることで、それは問答無用で命を奪う魔の風となる。
条件は”意識を失っている事”。
実際にその目で見て、りせは”魔手ニヒル”をそういう技だと分析していた。
りせの声にしたがって、全員が風をやり過ごし、その結果何も起きない。

「どうして、諦めない……？」

二度目の”魔手ニヒル”を完全に無効化され、クマの影は呟く。

「真実など探すから、辛い目に遭う……
正体すら分からず、元よりないのかもいれないというのに……
なのに……どうして……」
「真実は、ある。
必ず。
だったら、探す方法もあるはずだ」

総司が痛む体を引きずって、クマの影の前に立つ。
一人まともに”ヒートウェイブ”を食らった総司はかなりの怪我を負っていた。
総司の声に従って、マタドールが装飾のついた銃をクマの影の眉間に押しつけた。

「そうしてまた、自分を更なる苦難に晒すか……

全く…理解に苦しむよ」

そう言って、クマは向けられた銃口を見ながらため息を吐く。

「”シングルショット”」

引き金が引かれ、影の仮面は砕けた。

ホントウの自分《クマ》（後書き）

ゲームではりせの影戦が終わるとＨＰＳＰ完全回復しましたが、ＳＳにするにあたり納得できないので茜にメシアライザー使ってもらいましたがいかがだったでしょうか。
メサイアをこの段階で出すのはちょっと悩んだのですが、メシアライザー初出はメサイアに使って欲しかったので強行。
このメサイアさんは特四仕様設定です。

とりあえず謝っとく。
ゴメン、茜。
元々この戦闘はクマの影に押さえつけさせて参加させないってのは決まってたんだが、いつのまにかぐっさりやってた。

警察の協力者

「茜ちゃん！」

重石が無くなり、解放された茜とクマに全員が群がる。
栓が無くなったことにより血があふれ、真っ赤に染まった衣服に顔をしかめてペルソナを喚ぶ。
雪子、陽介、総司の三人がかりの”ディアラマ”で傷を癒す。
だが、回復魔法で傷は塞げても、失った血は戻らないのでその顔は青い。
完二に支えられて身を起こした茜は全書をめくり、栞を挿し変えた。
ちらりと総司がそのページを確認すると、どうやら降魔することによって自然回復力が上がるペルソナらしい。
命の危機を脱して全員が息を吐く。
そして、改めてクマの影に向き直る。
クマはペラペラの体で器用に起き上がり、影の目の前に立った。

「クマは、自分が何者か分からないクマ。
ひょっとしたら、答え無いのかも…なんて、確かに時々、そんな気もしたクマ……
だけどクマは、今ココにいるクマよ……
クマは、ココで生きてるクマよ……」

影は、黙ったままクマの言葉に耳を傾ける。

「クマ」

総司はクマに声をかける。

「え……？」

振り返るクマ。
その大きな黒い瞳には総司達が映っている。
総司に陽介に千枝に雪子。
完二に、彼に抱き上げられた茜にりせ。

「ほら、クマは一人じゃない。
皆、いるよ」
「それじゃあクマはもう……
一人で悩まなくても、いいクマか……？」

泣きそうな声のクマに、総司は頷いた。

「ああ。
一緒に、探すって言ったろ？」
「そうそう、そんなに悩みが大きくなる前に、相談すりゃいいんだよ」

陽介がクマの影を指し示す。
クマの影は、クマより一回り大きな体を持ち、その目も他の影のように金色ではあったがクマの丸い瞳と違い目つきが悪い。
暴走した千枝の影の髪がストレートの黒髪だったり、りせの影の胸がりせ自身より大きかったり、コンプレックスや悩みは影の姿に影響する。
一回り大きい体は、そのままクマの悩みが大きくなっていった事を示しているようだった。

「この世界の事を探っていくうちに、クマさんの事も、きっと分か

ると思う」
「み、みんな！
クマは…クマは果報者クマ！
およよよ……」

雪子もやさしい言葉をかけると、ついにクマは泣き出した。
それを見ていたクマの影は一つため息をつく。

「全く…本当に理解に苦しむよ」

それの言葉には戦闘時の嘲りなく、苦笑しながらのものだった。
もうひとりのクマの体が青白い光に包まれる。
総司達が見守る中、クマの影は姿を変えた。

「クマの…ペルソナ？
キントキドウジ……」

ミサイルを両手で持ち上げた、赤くて丸いボディのペルソナ。
金太郎の名の通り、腹には腹掛けにも見える金の模様に、その真ん中には金を意味する元素記号”Ａｕ”がデフォルメされて印字されていた。
キントキドウジは頷いて、クマの中に溶け込んでいく。

「それ…すごい力、感じるよ……
よかったね、クマ……」

そう呟いて、倒れそうになったりせを近くにいた千枝が慌てて支える。
ペルソナ使いになればある程度の耐性を得てマシにはなるが、テレビの世界は人には合わない。

覚醒してすぐにペルソナを呼び続けたりせの負担は相当なものだったろう。

「だいじょーぶ！
スキルにダンジョンから脱出する魔法があったクマ！！」

急いでテレビの外へ戻ろうと道を引き返そうとする総司達をクマが引きとめる。
そして、高らかにペルソナを喚んだ。

「GO、キントキドウジ！
”トラエスト”！！」

／＊／

ジュネスに戻った総司達は、誰にも見られないようにコソコソと移動し、バックヤードの部屋に飛び込んだ。
流石にボロボロの衣服では歩きまわれない。
特に茜の服は血に染まっている。

「クマ…へいきかな……」

抱き上げられたまま移動していた茜はパイプ椅子に降ろしてもらい、テレビの世界に置いてきたクマを思って呟く。
クマは、しばらく一人にして欲しいと、テレビの世界に来る事を拒否した。
毛が生えかわるまでトレーニングに励むらしい。

「大丈夫、すぐ元気になるさ。
もう一人と向き合えたんだから。

次会った時、ブラッシングしてやればいい」
「……うん」

総司に頭を撫でられ、茜は頷く。

「じゃあ、少し待っててくれ。
代わりの服買ってくる。
その格好じゃ帰れないから」
「あ、瀬多くん。
あたしのもお願い。
穴開いちゃったから。
羽織るものでいいし」
「分かった。
花村、手伝ってくれ」

おう、と返事して陽介は立ち上がる。
総司は完二に視線を移した。

「完二と天城はりせを送ってやってくれ」
「うん」
「了解っス」

総司と陽介、完二と雪子とりせがバックヤードを出ていき、部屋には茜と千枝だけが残された。
千枝は心配そうに茜を覗きこむ。
本人はパイプ椅子に腰かけて足をプラプラさせているが、赤く染まった服と血の気が引いた顔色は痛々しい。

「……茜ちゃん、傷はまだ痛む？」
「キズはふさがってるから、平気。

頭、フラフラするけど。
どっちかと言うと、メサイアよんだえいきょうで、体がすごくおもくかんじるのがキツイかな。
ちえちゃんは、だいじょうぶ？」

茜は千枝の穴の開いた服を見る。
クマの影に串刺しにされた時のものだ。
こちらも茜と同じように”ディアラマ”で傷は塞がっていたが、服まではそうはいかなかったのだ。

「だ、大丈夫！　鍛えてるし！！」

元気だという事をアピールするように手をパタパタと動かす。
しかし、その手はすぐにスカートの上に落ちる。

「……茜ちゃん、やっぱり茜ちゃんは捜索に参加しない方がいいんじゃないかな。
危ないよ……」

そう言う千枝の表情は暗い。
今までも十分認識しているつもりだったが、何度もダンジョンに入り経験を積み、徘徊するシャドウに苦戦することが少なくなっていくにつれて、人外の化け物と戦うという恐怖は薄れてきていた。
だが茜が目の前で串刺しとなり、自身も命に関わる傷を負った事で千枝の危機感は今までに無いほどに膨れ上がっていた。
勧善懲悪の物語が好きで、大事な人を守って悪を懲らしめることができると捜査に参加した千枝は、今回守ることが出来なかったのだ。

「またこんなことがあったら、本当に死んじゃうかもしれないんだ

よ……？」
「ちえちゃん」
茜が千枝に向かって言う。
「あたしは、あたしの目的のためにそうじんを手つだってるの」
「目的？」
「あたしは、わすれてることを思い出したい。
そうじくんといっしょにいて、みんなといっしょにいて、大分思い出してきた。
でも、まだ足りない。
まだ答えを思い出してないから」
その瞳は揺るがない。
声にも迷いは微塵も混じらない。
「何の……？」
「いのちの答えだよ」
キッパリと茜は言い切った。
「だから、あたしはたたかうの」
しばらく見つめ合った後、千枝は溜め息をついた。
止められない。
それが分かったからだ。
「……そっか」
もっと強くならなきゃ。

そう、思った。

■6／27

ダンジョン探索の終わった次の日。
総司は探索で得た戦利品を売りにだいだら．に来ていた。
シャドウの残留物は布や金属など多彩だが、それを素材として引き取ってくれる。
その素材で武器や防具になる物を作ってもらえるのだ。
一応金銀細工の工房を謳っている為にインテリアやアクセサリー等もあるが、普通に刀剣が置いてあって高校生にも何も言わず売ってくれるあたり、真っ当な店ではないと正直思う。
この店のおかげで戦えているので口には出さないが。
一通りの売買が終わり、小さいものは紙袋に入れてもらうが、剣はそうもいかないので茜作の竹刀袋に入れて背負う。
中さえ見られなければ、これで前の学校で剣道部だったとでも言えば誤魔化せる。
外に出ると、隣のマル久豆腐店の前にワンボックスカーが停まっていた。
車体に印字されたロゴを見るとテレビ局の物のようだ。
りせがいなくなったという噂を聞いて来たのかもしれない。
狐の様子を見てからジュネスに荷物を置きに行くかと総司は考えながら車の横を通り過ぎる。
だが、総司は鳥居を潜ろうとしたところで足を止めた。
坂の上の方が騒がしい。
そちらへ向かうと、騒ぎの中心は小西酒店のようだった。
ビールケースを運んでいる男に、マスコミ関係者らしい男がマイクを向けている。
そのマスコミ関係者の声が無駄に大きく、それが騒がしさの原因のようだ。

どうやら、りせの所の取材のついでといったところらしい。
総司は、こっそりと尚紀が店から出ようとしてるのに気付いた。
向こうも総司に気付いたようで、一瞬その動きを止める。
その動きの停滞でマスコミに気付かれて尚紀にもマイクが向けられる。

「ちょっと人と約束があるんで」

言って尚紀はそそくさと総司の元へ走ってくる。

「お待たせしました、先輩」
「じゃあ、行こうか」

総司は近くの惣菜大学を指差す。
尚紀は頷くと、店にビフテキコロッケとビフテキ串を四つずつ注文して露天スペースの椅子に腰掛ける。

「話、合わせてくれてありがとうございます。
未だに話題がなくなったり、こっち来ることがあったら押し掛けてくるんですよ。
酒屋の仕事よりそっちの対応が忙しいくらいで」

頭を下げる尚紀に、総司はいいよ、と返す。
しばらくして運ばれてくるコロッケと串焼き。
尚紀は代金を支払って受け取ったトレイをテーブルの中央に置いた。
どうぞ、と促す。
話を合わせて脱出に手を貸したお礼らしい。
総司は礼を言ってコロッケに手を伸ばした。
食べながら世間話をする。

それは、全く事件とは関係のない話題ばかりで、つい噴出してしまうような失敗談などが中心だった。
特に、胸焼けするほどコロッケを食べて帰ったら夕飯がコロッケだったという話は尚紀に好評で、尚紀は腹を抱えて笑った。
その笑い声が聞こえたのか、近くを歩いていた主婦の二人組がちらりと総司達の方を見て、通り過ぎた所で立ち止まる。

「あの子、ほら、酒屋さんの……」

この時点で嫌な感じがしたが、その主婦の声は一応潜めてるつもりのようだが大きくて総司達の元にも余裕で届く。

「小西さんとこの、男の子でしょう？」

今まで笑っていた尚紀は、暗い顔で唇を噛む。

「殺されちゃってねえ」
「可哀想にねえ」
「テレビで、霊能力者が言ってたわよぉ。
”先祖が罪を犯した”とかって……」
「方角が悪いって聞いたことあるわー」

二人の主婦はそんな事を言うと、振り返って尚紀の様子を窺い見る。

「でも、あの子は元気そうねえ。
普通、悲しんでるものだと思うけど。
冷たいのねえ」
「歳の近い姉弟だと、仲良くも無いのよぉ。
ウチだってね……」

再び歩き出して主婦達は遠ざかっていく。

「小西」

総司が呼びかけると、尚紀は分かっていますと答えた。

「言うだけ無駄ですもんね。
分かってくれる人がいれば、いいです」

尚紀は主婦の後姿を見送って溜め息をついた。
串に残った肉にかぶりつく。

「いつもああいう”監視の目”があるんすよ。
もう、慣れましたけど……
俺が被害者面してないと、満足しないみたいで」

肉を飲み込んで、吹っ切るように尚紀は笑う。

「だから今日みたいに、くだらねー話とか、笑ったりとか……
久々で、楽しい」

食べ終わった串をトレイに戻して、尚紀は酒屋の方を振り返ってから立ち上がった。
もう騒がしい声は聞こえてこないので、マスコミはいなくなったらしい。

「じゃあ、そろそろマスコミも捌けたようなんで、帰ります」
「っと。
ちょっと待ってくれ」

尚紀を引き止めて総司は鞄を漁る。
そして、綺麗に畳まれたハンカチを差し出した。

「小西、これ」
「あ……
別に、捨ててくれてよかったんですけど……」

出会った日、総司に貸したハンカチだと気付き、受け取った尚紀は頬を掻く。

「これ、姉のハンカチなんです。
親が間違えて、俺のカバンに入れてて……
もう、使う人いないから……
このハンカチも役目果たせて、嬉しいと思います。
今日は、ホント…ありがとうございました」

／＊／

尚紀と別れた後、装備品を置く為に一旦ジュネスに寄って帰ると、すでに夕飯が出来ていた。
レバニラ炒めにひじきと南瓜の煮物、そしてあさりと小松菜のスープ。
どれも貧血に効果があると言われている素材で作られた料理だ。
血が足りてないのがメニューに反映されている。
こっそり大丈夫か訊ねたら、茜からは大丈夫という答えが即座に返って来た。
茜はレバーを口に放り込むが、少し取りすぎたようで目を白黒させる。
菜々子が慌てて水を持って来て茜に渡し、飲ませてると玄関が開

く音が聞こえた。

「かえってきた」

走って出迎えようとした菜々子の足が止まる。
それは堂島の他に、もう一人いたからだ。

「ああホラ堂島さん、前、危ないですよ」

足元の覚束ない堂島を支えて入ってきたのは足立だった。
堂島はぐてんぐてんに酔っ払っている。
たたきの段差に躓き、足立を巻き込んで膝を付く。

「いって！
……ったく、誰だ！
こんなとこに段作ったヤツぁ」
「大工ですよ。
てか家にツッコんでないで、ほらっ」

足立は何とか堂島を助け起こして居間まで運んでくる。

「おーおー、帰ったぞー。
菜々子ただいま、ただいまな」
「お、おかえり……」

出迎えた菜々子に、堂島はオーバーアクションで手を上げて声を上げ、菜々子の頭を乱暴に撫でる。
グチャグチャにハネてしまった髪を撫でながら菜々子は返事をする。
足立は何とか堂島をソファに座らせながら、菜々子に布団を敷い

てきて欲しいと頼んだ。
菜々子は頷いて居間を後にする。

「ふー、やれやれ……
いくらなんでも飲みすぎだよ、ハハ」
「これが……ヒック！
飲まないで…やってられるかってんだ！
ったく、あのガキ偉そうに……」

苦笑いする足立に、ぐったりとソファに体を預けながらも堂島は抗議する。

「こっちぁな…こっちぁ、オメーらがランドセルだった時分から…
このショーバイやってんだ！」
「……子供？」

総司を睨みつけながらの言葉、そしてガキという単語に引っ掛かり、何があったのか訊ねる。
その質問には足立が答えた。

「実は、県警から”特別捜査協力員”ってのが送り込まれて来たんだよ。
いやほら、４月からの連続殺人に、あんまり進展が無いからさ…
…はは。
で、その協力員ってのが、名の知れた私立探偵事務所のエースらしいんだけどさ。
会ってビックリ、君くらいの子供なんだよ！
頭はやたら切れるって話だけど……」

足立の言葉で思い出したのか、堂島は苛立ちを押さえきれない声

で愚痴を言う。

「ただのガキだろ、あんなの。
役に立つワケねーよ、ヒック。
やれ推理、推理、推理……ケッ。
エースだかなんだか知らんが、ガキの遊びに付き合わされる身にも、なりやがれってんだ……
バカにしやがって……ヒック」

「……その彼”難事件を解く力になれれば報酬は要らない”なんて言っちゃっててさ。
おかげで上がすっかり気に入っちゃって、僕らも断れなくて……」

「足立ッ！」

余りにもペラペラと内部情報を洩らす足立の声を堂島は遮る。
元はといえば、足立がりせの家を覗こうとしていた男を早合点で逮捕してきたからなのだ。
スンマセン、スンマセンと足立はお辞儀をする。

「それと、お前！」

堂島はその勢いで据わった目で総司を指差す。

「お前も悪ィんだぞ……
何かと現場ぁチョロチョロしやがって……ヒック」

言うだけ言って堂島は力尽き、ソファに完全に横になる。
沈黙が落ちる中、堂島のイビキが響く。
ちらり、という足立の視線が食卓に落ちた。

「ね。

堂島さん布団に運び終わったら、レバニラ貰っていい？
ビールに合いそうだから」

居間に総司と茜の盛大な溜め息が落ちた。

三人目の犠牲者（前書き）

Ｐ４アニメが楽しみで仕方ない（´∀｀＊）
放映までにどこまで書けるかな……

三人目の犠牲者

7月に入り、居間に小さな笹が飾られた。
飾りつけは茜と菜々子。
枝に吊り下げられた折り紙の飾りに短冊。
短冊には大きく「ひこぼし」「おりひめ」「せかいへーわ」等と書かれて目立っているが、その影に隠れて小さく「お父さんがケガしませんように」と書かれた短冊が飾られている。
更に奥には「お兄ちゃんができて、うれしいです」という短冊が飾られていた。
これは飾り付けの際に茜が見つけ、からかった結果、菜々子にポカポカと叩かれるハメになった。

■7／2

菜々子は手元のプリントを見て、溜め息をついた。
右上に印字された発行日は先月初めのものだ。

「どうしたの？」

茜が菜々子に声をかけ、総司と共に覗き込む。

「……これ。
おうちの人に、わたしなさいって……」

差し出されたプリントには”授業参観の開催希望日アンケート”と書かれている。
提出日は11日になっていた。

「いつ来れるか、書いてもらいなさいって……
……お父さん、おしごとあるから……
きっと、来れないよね？」
「一緒に頼んであげるよ。
もしかしたら、休みが取れる日があるかもしれないしね」

今は丁度、りせの件も終わったことだし、外部協力者も追加されたのなら一日ぐらいは空けられるだろうと考えて総司は答える。
その答えを聞いて、菜々子の表情が明るくなる。

「ほんと？
お兄ちゃん、ありがとう！
うん…これ、お父さんにわたす。
来てって……言う」

一年生の菜々子にとって、初めての授業参観。
幼稚園の頃は、行事といえば母親だけが参加する形だったが、彼女はもういない。

「ちゃんと、来てくれるよね。
……”ほんと”のお父さんだったら……」

祈るように、菜々子は言った。

／＊／

「……ただいま」

堂島が帰って来たのは、菜々子の呟きから一時間程経った頃だっ

た。
帰宅を告げる声は疲れているようで、もしかしたら数日前に言っていた協力者とやりあったのかもしれない。
だけど、菜々子は気付かずに堂島に駆け寄る。

「おかえりなさい！
お父さん、あの…あのね！」

手の中のプリントにシワがよらないように握り締めて、菜々子は一気に話そうとする。
だが、堂島も菜々子の様子に気付かないらしく、疲れた声のまま頭をかいた。

「あー、悪い、菜々子、後にしてくれ……」
「で、でも、プリント……」

出鼻を挫かれた菜々子は小さく言ってプリントを差し出す。
プリントを受け取った堂島は、それをざっと斜め読みする。

「授業参観のアンケート？
参ったな……
希望日って言われてもな……」

堂島は面倒くさそうに溜め息をついた。

「……いい」

ポツリと菜々子が呟く。
顔は伏せられていて、その表情は見えない。

「もう、いい……
もういいよ！」

突然の大きな声に、堂島が驚いたようにプリントから顔を上げた。

「書かなくてもいいよ！
来なくていい！！
どうせ、ジケンなんでしょ！？
おしごとなんでしょ！？
お父さんは菜々子より、わるいひととか、みんなとかがダイジなんでしょ！？」

癇癪を起こす菜々子を堂島はどう扱って良いか分からないようで、うろたえて視線を彷徨わせる。
総司も茜も口を挿めない。
菜々子は泣きそうな声で叫ぶ。

「”ほんと”じゃないから……
お父さんは、”ほんと”のお父さんじゃないから！！」

言って菜々子は居間から走って出て行く。

「なっ…菜々子！　待ちなさい！」

堂島が制止の声を上げるが、菜々子は止まらない。
ガラガラと音がする。
玄関を開けた音だ。
呆然と見送って、堂島はなんだってんだ、と呟いた。
だが、それどころではない。
菜々子はそのまま出て行ってしまったのだ。

マヨナカテレビに菜々子は映ってないとは言え、まだ事件の犯人は捕まっていない。

「外は危ない。
探しに行こう」
「ああ…ああ、そうだな。
俺が呆けてる場合じゃない」

総司が呆然としている堂島に声をかけると、ようやく我に返ったようで頷いた。

「俺はジュネスの方を見てくる。
総司は、商店街の方を探してくれ。
茜、すまないが……」

堂島は総司に言い、茜に視線を移す。
単独行動させるわけにはいかず、一緒に行動して気を取られていたら見落としも出てくる。
それに、菜々子が戻ってくるかもしれない。
茜は神妙な顔で頷いた。

「うん、るすばんしてる。
……いってらっしゃい」

／＊／

昼間もそれほど人通りが多いとは言えない商店街は、夜になると一層ひっそりと静まり返っていた。
家からずっと走っていた為、総司の息は荒い。
T字路でようやく立ち止まって、左右を見渡す。

背後から複数の足音が聞こえてきて総司は振り返った。

「花村……？　皆……」

その足音は仲間達のものだった。

陽介に、雪子に千枝。

商店街の坂の上の方からは完二も走ってくる。

ジュネス付近を探していた堂島を見かけて陽介が事情を聞いたらしい。

他の皆は陽介に電話を貰って集まってくれたのだ。

「もう、水クサイよ！」

頬を膨らませて言う千枝に、総司は苦笑する。

探さなきゃという想いでいっぱいで、誰かを呼ぶことを全く思いつかなかったのだ。

落ち着け、と自分に言い聞かせて一つ深呼吸をする。

「菜々子ちゃん……

みんなで捜したら、きっと見つかるよ」

「ああ……ありがとう……」

「なあ、どっか菜々子ちゃんが行きそうなトコ、心当たりとかないのか？」

言われて総司は考える。

菜々子の好きな所と言えばジュネスだ。

そちらは堂島が探している。

学校、友達の家、あるいはそこへ向かう道。

――さめがわでお花つんでね……

脳裏に、そう話してくれた菜々子の声が蘇った。
母親が生きていた頃の思い出話。
母親と父親と菜々子、三人で鮫川の花を摘んだ事。

「……鮫川だ。
鮫川河川敷！」

菜々子から聞いた話を伝えると、陽介は頷く。

「鮫川か……
よし、瀬多は直行しろ。
一番可能性高そうだ。
俺らは、手分けして他当たってみる。
何かあったら連絡し合おう」

／＊／

水溜りがパシャリと音を立てる。
だが、走る総司には撥ねた水も気にならない。
鮫川河川敷に辿り着いた総司は、石段を駆け下りて川原を見渡す。
たまに夜釣りに来るポイントなのだが、今は昨日降った雨のせいで水嵩が増している。
川原には誰もいない。
念のために川に目を凝らしてみたが、普段と変わり無さそうで、
少し総司はホッとして石段を登って道路に戻る。

「総司、菜々子はいたか！？」

堂島が走ってくる。
総司が首を振ると、堂島は毒づいて辺りを見渡した。
そして一点に視線を移して、あ、と呟いた。
総司が堂島の視線を追うと、そこには広場の東屋のベンチに座る菜々子がいた。
菜々子に駆け寄ろうと一歩足を踏み出した堂島は、少し迷う素振りをした後、総司に迎えに行くように促す。

「”本当の父親じゃない”か……
総司…頼む、お前が迎えに行ってくれ。
お前の言うことの方が素直に聞くだろ……」
「そんなことはない」
「いや、あるさ……」

総司の否定の言葉を、堂島は否定する。

「お前はあの子の”家族”だ……
俺なんかより、れっきとした…な。
俺は…菜々子が無事なら、それでいい。
……頼む」

そう言って、堂島は一人背を向けてその場を立ち去る。
見送って総司は溜め息を付いて菜々子に歩み寄った。
気配に気付いた菜々子が顔を上げる。

「お兄ちゃん……」
「さ、帰ろ」

菜々子が不安に思わないように、総司は微笑んで手の平を差し出

す。

「……うん」

泣き出しそうな顔で菜々子は頷き、総司の手を取って立ち上がる。

総司が来てくれて、嬉しかった。

最初に自身を見つけたのが堂島だと教えてもらえて、それも嬉しい。

だけど、今は。

一番母親に会いたかった。

／＊／

堂島が玄関を開けると、すぐに居間から心配そうな顔をした茜が飛び出してきた。

「心配かけたな。

菜々子、見つかったよ。

総司と一緒に帰ってくる」

「うん。

……よかった」

茜の顔に笑顔が戻る。

走り回っただろう堂島に、茜は麦茶を用意する。

差し出された麦茶を、堂島は礼を言って受け取り一気に煽った。

冷たい香ばしさが喉を滑り落ちていく。

一息ついて、堂島は空になったコップを食卓に置いてソファに座る。

そして茜を呼んで横に座らせた。

「……茜は……」
「……？」

茜は首をかしげて堂島を見上げる。

「記憶喪失だと言っていたな。
その……調子はどうなんだ？」
「少しなら」

堂島の質問に、茜は曖昧に答える。
断片断片ではあるが、本当は大分思い出してきている。
だが、堂島に話せることが少ないのは確かだ。
思い出した事と言えば、戦いに関することと、戦ってきた一年間の思い出が大半なのだ。
その思い出で、茜は自分が見た目通りの年齢じゃないことも気付いていた。

「そうか……
その、だな……」

言いにくそうに堂島は口篭る。

「……親の事とかは、どうだ？
思い出してるか？」
「……」
「……茜？」

黙り込む茜に、堂島は声をかける。

「……どっちもね、しんじゃった。

ずっと、ヒトリだった」
「え、あ……
す、すまん」

茜の返事に、堂島は焦ったように謝る。
親である事、家族である事に自信がなく、他の親がどんな風に子供と向き合っているのか聞きたくて、ついした質問だったが、茜の両親が共にいない可能性に思い至らなかったのは、堂島が余りにも焦っていたせいだろう。
菜々子と同じ年頃の子供が数ヶ月も行方不明になっていて、捜索願が出されないはずがないのだ。
堂島の謝罪に、茜は微笑む。
両親が死んだ時の事は思い出せても、それ以前の事は思い出せない。
それは、茜が取り戻そうとしている記憶とは違う。
あの時。
あの橋の上で死んでしまった記憶だ。
そればかりは、いくら記憶を取り戻しても戻ることはないだろう。

「いいの。
今は、ヒトリじゃないから」

玄関が開く音がする。
二つのただいま、という声。
それを聞いて、茜は出迎える為に走って行った。

■7／9

ジュワ、と香ばしい音と匂いがフライパンから立ち上る。
落とし入れたバターがとろけて小麦粉をまぶして焼いた鮭に絡ん

だ。
いい匂いに、茜の頬が緩む。
襖が開く音がして茜が振り返ると、困り顔の菜々子が居間に入ってきた。
居間の座布団を捲ったり、机の下を覗いたり何かを探しているようだ。
茜は火を止めて、冷めないようにフライパンに蓋をかぶせる。
テレビを見ていた総司も気になったようで、菜々子にどうしたのか訊ねた。

「あのね、学校でもらったプリントなくしちゃった。
どうしよう……先生におこられる」

話を聞いてみると、一週間前に菜々子が家を飛び出す原因となった授業参観のアンケートのプリントが見当たらないという事だった。
提出日は１１日。
参加してもらえないにしろ、その旨を書いて週明けには出さないといけない。

「おそうじした時は見なかったけど……みんなでさがせば見つかるかも」
「ん。
手分けしよう」

茜と総司が言うと、菜々子は安心したように息をつく。

「ん……ありがと」

菜々子はもう一度ランドセルの中やその周辺を、茜は居間を、総司はテーブル周りを探す。

チラシの間に挟まってないかとパラパラと捲っていると、その横に置いてあるバインダーからはみ出た紙が総司の目に入った。
堂島がよく見ている資料だ。
開いてみると、そこにはバインダーには閉じてない紙が挟んであって、それがはみ出していたらしい。
栞代わりに挟んでいたのかもしれない。
裏返しのそれをめくると、そこには”授業参観の開催希望日アンケート”と書かれていた。
記入ももう終わっている。
希望日を書くように空けてあったスペースには”いつでも可能”と書いてあった。

「あったよ」

茜に声をかけると、頷いて、茜は菜々子を呼びに行く。
総司は開いた資料を閉じようとして、もう一枚何かが挟んであったことに気付いた。
それは写真だった。
少しだけ若く見える堂島に、それに寄り添う女性。
その間で抱きかかえられているのは小さな女の子だ。
総司は、茜に連れられてやって来た菜々子にプリントを渡した。
菜々子はすでに記入された希望日のスペースに目を走らせる。

「”いつでも…なんとか”って書いてある」

可能という字が読めなくて首を傾げた菜々子だったが、いつでもという文面から何が書いてあるのかを察して顔を上げる。

「いつでも…いいよってこと?」

総司が頷くと、菜々子は少し恥ずかしそうに、そして嬉しそうに顔を伏せた。

「そっか…えへへ」
「後、この写真があったんだ」
「しゃしん？」

菜々子は差し出された写真を受け取って、あっ、と声を上げた。
父親と母親と、小さい菜々子の家族写真。
アルバムの中は菜々子一人が写ったもの、菜々子を抱えた堂島のツーショットばかりで、カメラで撮るばかりだったらしい母親が写っているのは他にない。
堂島が捨ててしまったのだと思っていた。
アルバムからなくなっていたから。
母親の事も話してくれない。
菜々子は、堂島が彼女のことを忘れようとしてるのだと思っていた。
写真の中の堂島は優しげに笑っている。

「お父さん、わらってる……
お父さん……
どうして、わらわなくなっちゃったの……？」
「きっと、お父さんも寂しいんだよ」

総司が言うと、菜々子はビックリしたように顔を上げた。

「お父さんも、さびしい……？」

菜々子は少し考えるような素振りをして、納得したようにもう一度写真に視線を落とした。

「そっか…そうだったんだ……
お母さんが死んじゃって、菜々子、さびしかったけど……
お母さんがいなくなってさびしいのは、菜々子だけじゃないんだ
……
お父さんも……きっと、さびしかったんだ……
お父さん……ごめんなさい」

そう呟く菜々子の表情は、どこか大人びて見える。

「ありがとう、お兄ちゃん、あかねちゃん。
お父さん…いつかまた、こんなかお…してくれるかな？」

呟いて、菜々子はしばらく写真をじっと見つめ続けた。

■7／9

0時前。
お天気アナウンサーが気象情報を読み上げる。
終日雨が降り続いた稲羽市に濃い霧が予想されているという。

「外は？」

総司は外を眺めている茜に訊ねる。

「まっしろだよ」
「そうか……」

総司はテレビを消し、茜はカーテンを閉めて電気も消して、総司

の横に腰を下ろす。
暫らく息を潜めて時間が過ぎるのを待っていると、電源の付いていないテレビが光を映す。
砂嵐の中には何も映らない。

「0時……
何も…映らないね」
「ああ」

マヨナカテレビの光が消えて、霧の夜の確認が終わる。
総司はホッと息をついた。
犯行は阻止できた。
今回も間に合ったのだ。

／＊／

人気のない霧の中の商店街。
だが、誰もいないわけではなかった。
商店街から見える、アパートの屋上に。
だが、霧が深くてそこに何かがあると知ってないと気付くことすらできないだろう。
霧の中から覗くのは艶の消えた革靴と、ズボンの裾。

／＊／

朝、遠くから聞こえるサイレンの音で総司は目を覚ました。
時計を見ると、普段はまだ寝ている時間だ。
今日が休日でなく、平日だとしてもまだ早い。
だが、眠気はもう吹き飛んでいた。
胸を占めるのは嫌な予感。

布団から出て、すぐに服を手に取る。

「そうじくん！」

茜が総司の部屋をノックしたのは、丁度総司の着替えが終わった時だった。

すぐに扉を開けると、泣きそうな顔の茜が立っていた。

「何があった？」

「しょうてんがいの外れで、したいが…見つかったって。どうじまさんにデンワがかかってきて、今出てった」

茜の言葉に総司の思考が止まる。

霧の中の殺人。

それは食い止めた筈なのに。

「……どうして…りせは助けたのに……」

「ううん。

りせちゃんじゃないみたいなんだ」

呆然と呟く総司の言葉を茜は否定する。

「……！？

じゃ、じゃあ、誰だ？」

「そこまでは、言ってなかった。

でも……」

茜は一度言葉を切ると、胸を押さえて言った。

「でも、男の人、だって」

キグルミの中身（前書き）

イベント長いｗｗ
終わらん＼（＾ｏ＾）／

キグルミの中身

エレベーターの扉が開きフードコートに辿り着いた時、既に他の仲間達は集まっていた。
だが、自宅の距離的に真っ先に辿り着く筈の陽介だけがその場にいない。
二人が出るとエレベーターの扉はゆっくりと閉まり、現在位置を示すランプの数字が少なくなっていく。
総司と茜に気付いて千枝が手を上げた。

「あっ、こっち！」

駆け寄り、空いている席に手を掛ける。

「花村は？」
「今、現場見に行ってる。
たぶん、もうそろそろ……」

そう千枝が答えていると、再びエレベーターの扉が開く。
中には息を切らせた陽介が乗っていた。
現場からずっと走ってきたようだ。

「ハァ…やっぱ、殺人だ。
死体、アパートの屋上の手摺りに、逆さにぶら下がってたって…
…」

テーブルに走り寄るなり見聞きしてきたことを報告する。
陽介の報告を聞いて、雪子が口を手で覆う。

「そんな……
そんな事って……」
「それよか、大変なんだよ！
殺されたの……」

息切れした呼吸を整えて陽介が言う。

「”モロキン”だ」

ガタッと音を立てて、茜以外の全員が椅子から立ち上がる。
モロキンを知らない茜だけが首を傾げた。

「モ、モロキン……！？」
「モロキンって、あのモロキンか！？」

千枝と完二が陽介に詰め寄る横で、茜は総司の服の裾を引っ張る。

「ね、ね。
モロキンって、だれ？」
「担任だよ。
俺らのクラスの」

小さな声で訊ねてくる茜に、総司は同じく小さな声で答える。
自分達の間でモロキンと言えば、それは総司・陽介・千枝・雪子の所属する2年2組の担任である諸岡金四郎でしかありえない。
何故、という疑問ばかりが浮かぶ。
マヨナカテレビはおろか、普通の番組の中でも諸岡が映ったことなどないはずだ。
ならば、テレビに映った者が狙われるというのは間違いだったのか？

全て、ただの偶然だったのか？
これは推理の前提が崩され、振り出しに戻ったと言える。
とにかく、クマの話を聞く必要がある。
クマが一人トレーニングしてるからと言っている場合ではない。
総司達はそう結論付けて、家電コーナーからテレビの世界に行く為にエレベーターのボタンを押した。

／＊／

そして再びフードコート。
占領したテーブルの上には人数分のジュースの缶が置いてある。
その数は7個。
総司に茜、陽介、千枝、雪子、完二。
そして……クマ。
家電コーナーに向かった総司達は、そこのマッサージチェアで寛ぎまくっていたクマと合流した。
そしてあまりにも目立っていた為にフードコートへ引き返したのである。
出ていいのか、そもそも出れたのかと驚く皆に、出口があるんだからとクマは言った。
確かに、出れず、出る必要がないのなら出口を作る能力など初めから持っていたりしないだろう。
どこのテレビからでも中に入るだけならできるが、外に出るにはクマの力が必要なのだ。
そう考えれば出れるのは当然だと理解できるが、クマはつい最近まで出るという発想自体がなかったらしい。
総司達と知り合い、外の世界の話を聞いて興味を持ったからその発想に辿り着いたようだ。
ついでとばかりに総司達はクマに質問したのだが、分かった事はただ一つ。

諸岡はテレビの世界には入っていないという事だけだった。
クマは、あちらの霧が晴れ、そして再び霧が立ち込めるまではあちらの世界に留まっていたらしい。
誰かが入ってきた気配はしなかったとクマは言った。
マヨナカテレビにも映らず、クマが気配を全く感じられなかった以上、諸岡がテレビに入れられた可能性は無視していいだろう。
つまり、殺害現場はテレビの中ではなく、現実世界。
殺したのは諸岡自身のシャドウではなく、犯人自らということになる。
一行の議論は”なぜテレビに入れなかったのか”ということに集中した。
入れようとして失敗した？
入れる気は無かった？
それとも、何度か阻止されてテレビに入れても殺せないと判断した？
幾つかの可能性が思い浮かぶが、そうだとすると、もうテレビの中の探索だけに集中することができなくなる。
直接犯人を押さえない事には犯行を防げない。
だが、その判断は犯人にリスクが高すぎると言って良いだろう。
テレビに入れる最大のメリットは、証拠を警察に掴まれない事、そして死亡時刻にアリバイを作れる事にあるはずだ。
それを捨ててまで、外で殺す？
安全で不確実より、多少危険でも確実に殺したかったということなのだろうか。
炎天下の中、議論は白熱し、時間が経つにつれさらに日が昇り暑くなっていく。
キグルミのクマの体が揺れた。
「ハァ～、それにしても暑っクマー。
……取ろ」

クマはおもむろにそう言って、もぞもぞと動き出した。
呆れたように陽介がクマに視線を向ける。

「取るって、まさか”頭”か？」

言ってクマの中身を思い出し、陽介は慌てて周囲を見回してクマの頭を押さえた。
話に集中していて意識してなかったが、見た目が可愛らしいキグルミのクマは子供達の注目の的になっている。
周りの総司達の会話があまりに白熱していて近付いては来なかったようだが、ジュネスのキャンペーンか何かのキャラクターだと思われているようだ。

「やめろよ、子供見てんだろ！
ったく…中身がカラッポで動いてるとか、トラウマ残るっての…気ィ遣えよ。
だいたい、中カラッポなのに、頭開けたって暑さ関係ねーだろ」

陽介はため息をついて、動きの止まったクマから手を離す。
そんな陽介に、クマはふふーんと笑ってみせる。

「クマもうカラッポじゃないクマよ。
チエチャンとユキチャン、そんでアカネチャンを逆ナンせねばって、復活頑張って、中身のあるクマになったクマ！」
「はいはいエラい、よくやった」

呆れたように千枝が言い、逆ナンネタを続けるクマに雪子がうなだれる。

「あーっち。
もう、限界クマ……！」

うなだれる雪子に構わずクマは喚くと、その短い腕を何とか後ろに回して、頭を固定するチャックのチャームをつかむ。
ゆっくりとチャックが外され、皆が見守る中、クマの頭が外された。

「っふ～」
「のわっ！？
お、お前……！」

気持ちよさげな声に、陽介が驚きの声を上げて仰け反る。
夏の日の光を反射して、飛び散った汗が光る。
つまり、キグルミの中には汗をかくイキモノがいたのだ。

「あ～、いい風！」

頭を振るってまぶしい日の光に目を細める。
それは、金髪の少年だった。
しかも、素晴らしく見目がいい。

「……ウッソ……」

千枝が茫然と呟く。
声は確かにクマのものだ。
だが、すぐにはキグルミとその少年がイコールで繋がらない。
クマはキグルミの手で目の前に置かれた缶ジュースに手を伸ばし、少年の口でそれを煽った。

「ぷは～っ！
生き返るってカンジ？」

その笑顔がまぶしい。
少年がにっこりと細めていた目を開いた。
その瞳は透き通るような青。
総司はその瞳に既視感を覚えた。
どこかで見たな、と思い、今の少年のようにクマのキグルミから出てきた、茜を守っていたシャドウの少年を思い出した。
この少年の方が明るい色をしているが、透き通るような感じなのは一緒だ。

「ねぇ、チエチャン、ユキチャン、アカネチャン」

少年はクマの声で言う。

「は、はい……？」

笑顔を向けられた千枝が上擦った声を上げる。

「着る物とか、無いかな？
ボク、生まれたままの姿だから……」

花を飛ばすような爽やかさでクマが言う。
確かに、キグルミの肩口から覗く少年の上半身には何も纏われてはいないようだ。

「ほ、ほんとに…クマくん？
てか、生まれたままとか言った！？」

まじまじと少年の姿を見つめていた千枝は我に返ったように声を上げ、そして想像したのか少し赤くなる。

「や、ここで全開とかダメだから！
着る物だよね？
い、行こう、とにかく……
瀬多くん、ちょっとクマくん連れて服買ってくる！
ゆ、雪子、茜ちゃんも！　手伝って！」
「え？
あ、うん」
「いいよー」

千枝が音を立てて椅子から立ち上がり、雪子も千枝に言われてまだ茫然とした表情のまま立ち上がる。
総司は隣の椅子から立ち上がった茜に捜査隊用にしている財布を渡した。
茜の足りない服や、この前のボロボロになったり汚れたりした服の替えをここから出したから、今回もそうするべきだろう。

「あー、えっと。
俺達は先に商店街に行っとくから。
りせのお見舞いって言えば会えるだろうし、そろそろ話、出来ると思うし」
「分かった。
さ、行くよ、クマくん！」
「了解クマ！」

千枝に促され、クマは笑って答えた。

／＊／

「あ、先輩。
クマたち待ってる間、アイス食っててていいっスかね、アイス。
四六商店、”ホームランバー”あるんスよ」

商店街に入ると、そう言いながら既に走り出しそうな勢いで完二が言った。
ゆっくりと歩いては来たが、クマ達は追いついてきていない。
全身揃えるのだからまだかかるだろうし、炎天下の中歩いて体が冷たいものを欲しがっている。
ジュネスで買った缶ジュースはもうとっくに飲み終わり、空っぽの缶も熱を持っていた。
総司が頷くと、我先にと完二は走っていく。
苦笑しながら総司は歩くスピードを変えずに後を追う。
だいだら・を通り過ぎ、マル久豆腐店の前を通る。
丁度一人客が出てくる所だった。
見た顔に、総司とその横を歩いていた陽介が立ち止まる。
いつかの少年だった。
完二が会っていた少年。
流石に暑いからか、今日は前に見たコートは着ていない。
空色のワイシャツに黄色いネクタイを締めていた。
少年は総司の顔を見て目を細める。

「おや、やっぱり来ましたね」

予想が当たったとばかりに少年は微笑む。

「ジュネスで会った時以来ですね。
今度は、久慈川りせを懐柔ですか？」
「懐柔？

確かに友達になりたいとは思っているけど。
今日はお見舞いだよ。
見つけたの、友達だから」

妙に突っかかった言い方をしてくる少年に総司は言い返す。

「友達、ね。
そう言えば、まだ名乗っていませんでしたね」

少年は真っ直ぐに総司の目を見て宣言する。

「僕は白鐘直斗。
例の連続殺人について調べています」

陽介が驚きの声を上げる。
総司も驚いてはいた。
いたのだが、やはりという思いもある。
捜査に参加しているという、自分と同じ年頃の子供。
堂島が言っていた、県警から派遣された”特別捜査協力員”の探偵というのが彼なのだ。

「ひとつ、意見を聞かせてください。
被害者の諸岡金四郎さん……皆さんの通う学校の先生ですよね」
「……ああ」
「そ、それが何だよ？」
「第二の被害者と同じ学校の人間……世間じゃ専らそればかりですが、そこは重要じゃない。
もっと重要な点が、おかしいんですよ」

直斗の声色には、やはり確信めいたものが滲んでいる。

「この人…”テレビ報道された人”じゃないんです」

全てを見透かすような瞳で直斗は言う。

視線は総司から陽介へ。

陽介はビクリと体を震わせる。

揺さぶりをかけるなら、総司より陽介の方がやりやすそうだと判断したのか、直斗は今度は陽介に向かって言う。

「どういう事でしょうね？」

「しっ…知るかよ、そんな事」

直斗は、どもりながら答える陽介に小さく笑う。

「まあいいです」

言って、総司の横をすれ違いざまに総司の顔を覗き込む。

「とにかく……

僕は事件を一刻も早く解決したい。

皆さんの事、注目していますよ」

いずれまた、と言いおいて直斗は悠々と歩いていく。

その後姿を見送った陽介は疲れた顔で胸を撫で下ろした。

「何なんだ、あいつ……

しかもテレビの事気付いてるし」

「俺達もそこまで辿り着いてるってのも気付いてるみたいだしな」

「だけど注目って……疑われて動きにくくなったら……

って、おい、あれ……」

ぐったりとしていた陽介が驚きの表情で直斗が去っていった方を指す。
その方向から歩いてくるのは、女性陣とクマだ。
もちろんクマがまとっているのはキグルミではなく、洋服だ。
その服はクマにとても似合っている。
だが、場所に似つかわしくない。
田舎のシャッター街の商店街に、開襟のフリルの付いたブラウスの胸に赤いバラを挿した金髪の美少年は似合わないのだ。

「ク…クマか、お前？」

未だに信じられないと言うような雰囲気を漂わせながら陽介が問いかける。

「イッエース、ザッツライト。
イカガデスカ？」

クマが日本語が苦手な外国人のような妙な口調で言いながら服を見せ付けるようなポーズをとる。
コーディネートしたらしい茜も得意げに胸を張る。

「エッヘヘー。
ブリリアント？」
「あ、ああ。
ブリリアント……
正直、ビックリした」
「…合わせなくてもいいから。
それにしても茜ちゃん、ブリリアントって何語よ？
どこでそんな言葉覚えたんだが」

コクコクと頷く総司に千枝は苦笑しつつ言う。

「あたしもビックリだけどさー。
間違いなくクマくんだから。
てか、性格まんまでまいったよ……
見るモン全部新鮮らしくて、もう大騒ぎでさ」

千枝は惨状を思い出して溜め息をついた。
通りがかった女性物のフロアでコーフンして叫び出したり、放り込んだ試着室から着方が分からないと何も着ないまま出てこようとしたり。
茜がいなかったらもっと酷いことになっていただろうな、と千枝は嘆息する。
そんな事を話していると、再びマル久豆腐店から人が出てきた。
騒がしかったかなと総司が視線を向けると、りせと目が合う。

「……いらっしゃい」

店番は流石にしてなかったようで今日は割烹着姿ではなく私服だった。
体は大丈夫なのかと訊ねる雪子にりせは一つ頷く。

「そっか、良かった……」
「それを確かめに来たの？」

陽介の安堵の言葉にりせは小さく首を傾げる。

「お見舞いに来たんだ。
それと、少し話を、って思って」

「うん。
私も、話さなきゃって思ってた。
……あれ？
これで全員？」

総司に応えて、りせは視線を巡らせる。
自身を助けに来た人数と合わないことに気付いたらしい。
探知型のペルソナの関係か、金髪の美少年がクマだという事にも気付いているようだ。

「一人は四六商店に行ってる」
「そうなんだ？
なら辰姫神社にしよっか。
その人を呼ぶにしても流石にこの人数じゃ、家、狭いし」

言ってりせは総司の横に並んで促す。
四六商店に着くと、既に完二は何本目かのアイスの包装紙をめくろうとしていた。
包装紙を剥がしている方の手には食べつくされたアイスの棒が挟まれている。

「んぁ、先輩やっと来たっスか。
やっぱ”ホームランバー”の季節っスねー。
旨いっスよ！」
「腹壊すぞ……」

陽介が呆れたような声を出す。
初めて見るものに興味津々のクマと、甘くて冷たいアイスが食べたい茜が店の前の冷凍ショーケースに駆け寄った。

／＊／

「うん、家に居た事は覚えてるんだけど……」

賽銭箱の置かれた階段に座ったりせは言う。

雪子や完二と同じように、気付いたときにはすでにテレビの中だったらしい。

白鐘直斗は何度か来てやはり事件の事を色々聞いてきたが、りせは適当に誤魔化していた。

だが、またしても犯人に繋がるような話を聞くことはできなかった。

総司は溜め息を飲み込むように手に持った缶の中身を煽る。

話を聞くのに夢中になっていた茜のアイスは少し溶けてしまっていて、境内に入ると同時に屋根から飛び降りてきていた狐が茜の手についたアイスを舐める。

その様子にりせは微笑んで、立ち上がった。

「あの……
助けてもらっちゃって……」

そこまで言ってちょっと考える素振りをしたあと、りせは可愛らしくポーズをとる。

「……ありがとね！
嬉しかった！」
「えっ…あはは。
いーって、そんなの！」

突然のハートや星が飛びそうな口調とポーズにビックリしながら千枝が言う。

陽介は片手で顔を押さえる。
その指の間から覗く顔は赤い。

「やば、カワイイ……
あー、今やっとホンモンって実感した。
確かに”りせちー”だ」
「その…最近の私、疲れてて少し暗かったから、嫌かなと思って……
喋り方…へん？
あ、でも、世間的には今の感じの方が、私の”普通”なのかな…
…」
「何でもいいんじゃないか？
”全部自分”、なんだろ？
少なくとも、変ではなかったよ」

不安そうな言葉に総司が答えると、りせは安心したように息をついた。
決意を秘めた瞳で総司を見つめる。

「私、あの世界でみんなを助けられるんでしょ？
あの”力”で」

総司は頷いてクマを促す。
クマはポケットからメガネを出してりせに差し出した。

「一応、これが仲間の証みたいになってる。
霧の中を見通せるんだ」

差し出されたメガネをりせは受け取る。
赤白コンビのセルフレームのオシャレなメガネ。
嬉しそうに撫でて、胸に抱いた。

「ふふ、よかった。
最初に知り合ったのが、先輩たちで。
……これで仲間、だよね」

柔らかい表情でりせは微笑む。
”りせちー”のような明るい表情ではないし、出会った店番の時のような少し暗い表情とも違う。
それでもそれは”りせの表情”だ。

「私、明日から、八十神高校に通うの。
同じ学校。
でも私、まだ友達いないから、仲良くしてね」

／＊／

――こんばんは、”ニュースアイ”です。
まずはヘッドラインから。
稲羽市で起きていた連続殺人事件。
ついに、三人目の犠牲者です。
2件目から三ヶ月が過ぎ、終息との見方もあっただけに、地元は衝撃を受けています。
殺されたのは地元高校の教師で、遺体の状況が前2件と酷似しており、同一犯の犯行と思われます。

ニュースキャスターが手元の原稿を読み上げる。
映し出される被害者の顔写真。
その下には諸岡金四郎と書かれている。

――小西早紀さんの事件から、2件続けて、同じ学校の関係者が被害に遭った事になります。

被害者の諸岡さんは厳しい指導方針で知られ、度々生徒との摩擦を抱えていたという事です。

警察では、今回の事件が犯人特定への大きな手がかりになると見て、明日から大規模な捜査を行う事にしています。

では、現場から中継でお伝えします……

スタジオも現場もいつになく盛り上がっている。

救えなかったと嘆く者など知らぬげに。

容疑者の少年（前書き）

羊毛フェルトにかまけてました。
１００円ショップに白い羊毛があったので。
←出来上がったのはコイツです。
／人？？？？人＼（僕と契約して魔法少女になってよ！）

カービィからにしとくべきだった……

容疑者の少年

クマは陽介が連れて帰った。
だが、しばらくこちらを満喫したいようでテレビの世界には戻らなかったらしい。
クマは家電コーナーをキグルミ姿で満喫中、店員に名前を聞かれて”クマだ”と名乗ったことで”熊田”と認識され、その名前で陽介の部屋に転がり込んだ。
そして宿賃代わりにジュネスで働くこととなった。
マスコットとして。

■7／11

朝から教室はいつにもまして騒がしかった。
その騒がしさは不安を少なからず含んでいる。
テレビで報道されてもあまり実感が沸かないのだ。
慕っていたとは決して言えないとはいえ身近な人間が、担任が死んだ、だなんて。
だが教室の扉が開かれ、中に入ってきた人物を見ると否応無しにテレビの報道は正しかったのだと皆が悟った。
教室に入ってきた教師は女性だった。
妙に科を作りながら、胸元の大きく開いた服を着た教師、柏木典子が言う。
今日から貴方達の担任になったのだと。

／＊／

放課後のフードコート。
茜が持っていた荷物の詰まったエコバッグを総司が机に置いてや

っている横で、千枝が愚痴りながらダレている。
来週から期末テストがあるのだ。
教師が殺され大変な時期の筈なのだが、こういう時だからこそスケジュール通りにと校長が言ったらしい。
その辺は流石林間学校の目的に”若者の心に郷土愛を育てる”を掲げ、それを建前にさせない学校だと言える。
言えるが、正直有りがたくない。
特に転校して一週間で範囲の広い期末テストを受けなくてはならないりせは大変だろう。
総司にしても部活は休みになるし、友達の勉強は邪魔できないしでテスト前は憂鬱な期間と言える。
誰かと話すのが難しくなるからだ。
自身も復習しなくてはいけないし、そのせいで事件を考える余裕も少なくなってしまう。
そう、事件を推理する為に集まったのだと全員で気持ちを切り替えて話を始める。
主にこれまでと話が違う三人目の被害者、諸岡金四郎の件だ。
同じなのは死体が見つかったのが霧の日だという事と、死体の状況。
違うのは、雪子や完二、りせが狙われたのはテレビ報道で有名になったからだと今は仮定しているが、諸岡はテレビ報道されず、マヨナカテレビにも映らなかったという事。
動機が他の者と違うのだ。
諸岡の性格が性格なので恨んでる人間は多そうではあるが。
向こう側に落ちた可能性も低い。
それにしても頭が痛くなる問題ばかりだ。
同じ学校の関係者が続けて亡くなった以上、警察は学校の人間に目を光らせているだろう。
総司達が目を付けられたのも、堂島という近しいところに刑事がいるという以上にそういう所が関係してるのかもしれない。

だが、実際亡くなったのは二人だが、狙われた八十神高校関係者はまだ転入してなかったりせを省いても四人にのぼる。
ここまで続いているのだから、八十神高校に関係あるとして片っ端から、と言う千枝の少々過激な提案を、聞き覚えのある涼しげな声が遮った。

「その必要はありません」

エレベーターホールから、毅然とした足取りで直斗が総司達のテーブルに近付いてくる。
完二が驚いた顔を直斗に向けた。

「諸岡さんについての調査は、もう必要ありません」

完二の様子には気付かないようで直斗は淡々と告げる。

「な、なんでよ?」
「容疑者が固まったようです。
ここからは警察に任せるべきでしょう」
「容疑者固まったって…誰なのッ!?」

訝しげな様子だった千枝は、直斗の言葉を聞いて身を乗り出す。

「僕も名前は教えてもらっていません。
容疑者…高校生の”少年”ですから」

総司達の驚く顔を尻目に直斗は話を続ける。
メディアにはまだ伏せられているらしいが、八十神高校の生徒ではないようだ。
警察は既に手配を済ませていて、それによほどの確信があるらし

い。
周囲の証言で事件と問題の少年との関連がハッキリしているそうなのだ。
ここまでくれば、もう逮捕は時間の問題との事だった。

「容疑者は…高校生……」

呆然と陽介は呟く。
それは総司も同じ気持ちだった。
無意識に自分と同じ年頃の人間が犯人かもしれないという思考を省いていたのだ。
そうか、と呟いて、一つ息をついた陽介は気を取り直したように直斗に視線を戻す。

「で、お前は何しに来たんだ？
伏せられてるんだろ？
なんでわざわざ知らせに来た？」
「皆さんの”遊び”も、間もなく終わりになるかも知れない……
それだけは、伝えておいた方がいいと思ったので」

そう言って直斗は総司に視線を合わせる。
命がけで戦ってきた以上、遊びと言われるのは心外だが……

「終わるなら、終わった方がいいんだ」

心外だが、総司はそうとだけ言った。

「……関わった事は否定しないんですか？」

少し驚いた表情を直斗がする。

それに一矢報いたと総司は小さく笑った。

「今の会話が聞かれていた以上、隠しても無駄だろう？」

「……まあ、いいでしょう。

僕もこれ以上、どうこう言う気はありません」

だが遊び発言に、総司より心に引っ掛かった人間がいた。

りせだ。

厳しい顔で直斗を睨む。

「遊び……？

遊びはそっちじゃないの？」

直斗が初めてりせに視線を向けた。

りせは言葉を続ける。

「探偵だが何だか知らないけど、あなたは、ただ謎を解いてるだけでしょ？

私たちの何を分かってるの？

……そっちの方が、全然遊びよ」

そして陽介も。

「こっちゃ、大事な人、殺されてんだ……

遊びで出来るかよ……」

好きだった先輩を死に追いやった犯人を捜すために事件を追い始めた陽介にとって、”遊びでやってる”と思われるのは我慢できなかったようだ。

「それに……」

陽介はちらりとクマを見やる。

「約束もしてるしな……」

その言葉にクマは目を潤ませた。

その様子を見ていた直斗は目を伏せる。

「遊び…か。

確かに、そうかも知れませんね……」

「な…なによ、急に物分りいいじゃん……」

「そっか、容疑者固まったのに、な～んでこんなトコぶらぶらしてんだと思ったら……

容疑者わかったらお払い箱なのか？

んで、寂しくて来てみたとか？」

直斗の様子から、彼が置かれている立場に気付いた陽介が少し意地悪そうに笑う。

それに直斗もくすりと笑った。

「探偵は元々、逮捕には関わりませんよ。

それに、事件に対して特別な感情もありません」

そう言った直斗は、ただ…と呟きを落とす。

「…必要な時にしか興味を持たれないというのは…確かに寂しい事ですね。

もう、慣れましたけど……」

「……」

俯く直斗に、完二は心配そうな視線を向ける。

「謎の多い事件でしたが、意外とあっけない幕切れでしたね……
……じゃ、もう行きます」

言いたいことだけ言って、直斗は背を向けて歩いていく。
エレベーターの扉が開き、直斗は一人、箱に乗った。

■7／12

夏休み前に行われる期末テストで赤点を取ると夏休みに夏期講習があるらしい。
この日陽介に泣きつかれた総司は、図書室で勉強を教えた。
前述の家庭教師のバイトで大分教え方は上手くなったと思う。
家庭教師に学力はもちろん必要だが、それよりもそれを伝える伝達力が必要なのだ。
教えることで自身の復習にもなったし、今日の勉強は中々捗ったと言えるだろう。
都会には進学校が多いし、そういう学校に転校になった時ある程度出来ると過ごしやすいので、総司はそう言った理由で普段から予習復習を心がけていた。
友達が出来るまでは暇だったという事もある。
授業も真面目に受けているし、居眠りしたりもしない。
それが総司がそこそこ勉学に自信がある理由だった。
放課後降っていた雨も学校を出る頃には止んでいて、総司は上機嫌で帰宅する。
家に入ると夕飯は既に出来ていて、茜と菜々子がキッチンのテーブルから居間の机に皿を運んでいるところだった。

総司も手伝おうとテーブルに向かうと、その上に乗った小さな瓶に目が行った。
バニラエッセンスとラベルに印字されている。

「あ、それ？
ヒマな時におかしでも作ろうと思って」

皿を取りながら茜が言う。

「分けてもらっていい？」
「いいよ！
どうせバニラエッセンスはちょっとしかつかわないし」

総司が聞くと、茜は明るく頷いた。
勉強で頭を使ったし、甘い物が取りたい気分になっている。
砂糖はもちろんあるだろうし、牛乳も卵も切れないように茜が買出ししてくれている。
夕飯が済むと、総司はさっそくそれに取り掛かった。
蒸し器や小さめの鍋、それにいくつかのガラス製のカップを用意する総司を、菜々子と茜が興味深そうに覗き込む。
牛乳を温め、卵と砂糖を混ぜたものに加えて液を作り、それにバニラエッセンスを数滴垂らしてからカップに入れて蒸し器にセット。
蒸している間に鍋でソースを作る。
カラメルソースだ。

「プリンっ！？」

菜々子が声を上げ、それに総司が肯定すると、菜々子は小さく飛び跳ねて喜ぶ。
蒸しあがったプリンの内三つにカラメルソースをかけ、残ったカ

ラメルソースを瓶につめて残りのプリンと共に冷蔵庫へ入れる。
ソースをかけたプリンは食器を下げた居間の机に置いてスプーンを添える。

「温かいまま食べるの？」
「ああ」

総司が促すと、菜々子は緊張した面持ちでスプーンで掬ったプリンを口に運ぶ。

「わぁっ」

その口から零れるのは感嘆の声だ。
嬉しそうに総司を見上げる。

「おいしいよ、お兄ちゃん！」
「うん、おいしい！
あまくて、とろとろ♪」
「そっか、良かった。
冷蔵庫に入ってるの、二個は明日の昼食のデザートに持ってくけど、まだあるから明日は冷やしたのを食べて」
「やったぁ！！」

上々の評価に、総司の頬も緩む。
総司もプリンを掬って口に運んだ。
あまりバニラの匂いはしない。
熱で匂いが飛んでしまったようだった。
それでも甘い味が口の中に広がった。

■7／15

茜は総司の部屋をノックした。
時刻はもうすぐ日が変わる頃。
マヨナカテレビが映る日以外は大体日が変わる前に寝ている茜だったが、今夜は眠れずにいた。
なぜか満月の日は中々眠れないのだ。
なので、茜は満月の日は月を眺めながら微かに残る記憶に思いを馳せることにしていた。
この日も縁側で月を見上げていたのだが、ふと視線を移すと二階の窓から洩れる光に気付いた。
総司の部屋。
おそらくテスト前で勉強しているのだろうとあたりをつけた茜は、数日前のプリンのお礼にと夜食代わりとして菓子とジュースを用意したのだ。
扉の向こうから返事があり、盆を傾けないように気をつけてノブをひねる。
総司の部屋に入って目に飛び込んできたのはテーブルに広げられた新聞紙。
その上にはいくつかの箱に細々とした部品、ニッパーやカッター、やすり等が置かれていた。
そしてテーブルの前に座る総司の手にはまだ作成途中らしくあちこちがまだ取り付けられてないロボットの模型が握られていた。
勉強しているようにはとても見えない。
茜の視線に、総司はへらっと笑った。

「……おかし、食べる？」
「……いただきます」

総司は少しバツの悪そうな様子で勉強机を指差す。
ソファ前のテーブルに物が置けないのだ。

「勉強、いいの？」
「最近、勉強中心だったから。息抜き。
日曜に運動部の友達と勉強する約束もしたしさ」

言って、総司は無くならないように箱に入れておいた部品の一つを本体に組み込む。
簡単に外れないか、バランスは大丈夫か確認する。

「茜ちゃんは眠れないの？」

一つ茜は頷く。

「……だいじょうぶだと分かっていても、まんげつの夜はねむくならないの。
世界が緑色にそまってしまわないか……時が止まってしまわないか……
それをかくにんするまでは」
「時が、止まる？」

もう一度茜は頷く。

「フツウの人は知らない時間なの。
ペルソナ使いだけが、知ってる。
ペルソナ使いだけが”あの世界”を知ってるように……
その時間の中で、あたし、たたかってた」

茜はジュースを一口飲んで喉を潤す。
そして、知ってる？、と続けた。

「緑色って、死者の色なんだって」
「ケルトの話だね。
緑は死の色、豆は死者の食べ物、っていう」

総司は最後の部品を模型に取り付けて、手の中で回しておかしな所がないか点検し、一箇所だけやすりをかける。
やすりで出た粉を息をかけて吹き飛ばして完成したプラモデルをテーブルの上に立たせた。
両腕から盾らしい突起が飛び出しているデザインの、緑色にカラーリングされたロボットだった。

「それ、なんていう名前？」
「量産型ブラフマン。
昔やってたアニメに出てたんだ。
……懐かしいな。
茜ちゃんは、アニメとか見る？」
「見るよ。
でも、アニメよりせんたい物の方が見てるかも。
ふしちょうせんたいフェザーマンシリーズとか」
「ああ。
あのシリーズも長いよな。
最新のは…Rだっけ。
そろそろまた続編出るかな？」

言いながら総司はテーブルの上を片付ける。
箱の一つに工具を入れ、プラモの入っていた空き箱と一緒に棚に仕舞う。
その棚はシンプルなスチール製のメッシュラックだが、置かれているのはその箱とコンポぐらいで開いてる部分が目立っている。

「ブラフマン、その棚に飾るの？」
「そうだよ。
でも、その前に見せたい人がいるから」

汚れた新聞紙を丸めてゴミ箱に捨て、荷物が片付けられてスッキリしたテーブルにプラモを置きなおす。
そして盆の上の皿からクッキーを一枚摘んで口に放り込んだ。
少し口の中が乾いたが、ジュースは既に茜が飲んでしまっている。
元々菓子とジュースを届けたら勉強の邪魔にならないようにすぐに戻るつもりだったので茜は自分の分を用意してなかったのだ。
総司の視線をうけて、茜がえへっと笑った。
総司の背後の壁にある時計を見る。
もう日付を跨ぎ、１６日になっていた。
茜はホッと息をつく。
時は止まらず流れ続ける。
そして世界は死者の色には染まる事はなかったから。

■７／２３

「テスト、どだった？」

茜がそう言ったのは、テストが終わり久しぶりにジュネスのフードコートに集まった時の事だった。
その手に持った紐の先にはジュネスのロゴの入った風船が浮かんでいる。
総司がチラリとフードコートの一画に視線を向けると、子供達に囲まれたキグルミ…クマが気付いて手を振った。
大分マスコット役が板についてきたようだ。
だが、集まったメンバーの約半分はその様子を気に出来るほどの余裕はないらしい。

具体的に言うと、千枝と完二とりせの三人だ。
千枝と完二はうなだれ、りせは癇癪を起こしたように声を荒げる。
「英語ぐらい何よ！
いざとなったら、通訳でも何でも付けてもらうもん！」
いかにも芸能人らしい発想である。
「も、いースよ、テストの話は……
それより、事件の方どうなってんスか？」
ぐったりした様子で完二は言う。
だが、事件の事を話そうにもテスト前から事態は全く動いていない。
容疑者を特定したという割りにはまだ逮捕には至っていない。
証拠固めにでも手間取っているのだろうか。
このところ堂島の帰りが遅いので、その点で忙しいのかもしれない。
それに。
総司は視線を売店の方に向ける。
それに釣られて、全員の視線が一点に集まる。
「ったく、容疑者上がったのはいいけど、どこ行ったんだが……
こっちはもう、クタクタだっての……」
ダラダラと歩きながら売店の食べ物を物色している足立がそこにいた。
こうやってサボっている人間がいるから堂島の帰りが遅くなっているのだろう。
総司達全員に視線を向けられ注目されているのに気付いた足立が

一瞬ビクつく。
足立はヘラヘラと誤魔化すように笑う。
そして一つ咳払いをして真面目な表情を作る。
曰く、容疑者は固まった。
曰く、犯人が捕まるのは時間の問題だから。

「無差別に人をさらって殺人、なんて、絶対に許されないからさ！
キバってるよ？
安心したまえ、うん！」

疑心の目を向ける総司達に、もう行かないとと言って慌てて通り過ぎて行く。
エレベーターホールに戻らないという事は一応サボり以外にここで何かする事があるのだろうが。
頼りにならなさげなこと甚だしい。
足立の独り言を信じるなら容疑者の少年は逃走中らしいが、警察が手配しているのなら自分達が出る幕はないだろう。
高校生が探すような場所はもう警察が捜しているだろうから。

「そ、そうだ。
テストで分かんないとこあったんだけど」

重くなった空気を誤魔化すようにりせが話題を変える。

「”銀鏡反応に使われ、４０％溶液がホルマリンとして知られる、化学式ＨＣＨＯとは何か？”…だっけな……
でさ、”ＨＣＨＯ”って、何？」
「「ホルムアルデヒド」」

総司と茜の声がかぶり、思わず顔を見合わせる。

陽介が驚きの声を上げた。

「すっげ。
茜ちゃん、分かるんだ？」

「あ…えーとね。
テレビで、やってた。
家のざいりょうのせっちゃくざいでシックハウスしょうこうぐん…とか、発ガンせいがどうとか…とか」

「う…そうなんだ……
私、”酢酸”にしちゃった。
そっか、お酢なワケ無いよね。
茜ちゃん、物知りなのね」

りせがニコリと笑いかけると、茜もニコリと微笑み返す。

「昼間みんないないから、家事おわったらヒマなの。
本読んだり、テレビ見たりしてる」

「そっか……
帰り、ゲームでも見てくか？」

タイムサービスや特別捜査隊の活動もあり、夕方からは忙しいが、学校に行っていない茜はどうしても総司達が学校に行っている間は暇になってしまう。
陽介がオモチャ売り場に誘うが、茜は少し考えてから首を横に振った。

「んー、それよりあみぐるみ作りたいな。
かんじくん、今度、あみぐるみ用の小物の作り方教えて？」

「んなっ……
あみぐるみって、それ、どっから……！」

真っ赤になって慌てる完二は、ハッと気付いて総司を見る。
だが、総司は何処吹く風だ。

「隠すような事でもないだろ？」

総司は完二の作ったあみぐるみを見る機会があったのだが、パラソルや洋服など凄く凝ったものだった。

「特に茜ちゃんは完二の時いたわけだし」
「そりゃそうっスけど！！」
「まっ、まあまあ！」

今にも噴火しそうな程真っ赤になってしまった完二を宥めて、千枝が話題を戻す。

「ほら、りせちゃん。
勉強なら雪子に訊いたら？」
「え、だってせっかくなら、異性の先輩に訊きたいでしょ？」

きょとんとした表情でりせは答える。
そして総司に甘えた視線を向けて椅子を少しずらして近付きつつ上目遣い。

「先輩、私のこと…迷惑ですか？」

あまりの直球ぶりに、千枝はすげー、としか呟くことが出来なかった。

／＊／

『特集です』

画面の中のアナウンサーが手元の原稿を捲る。

『稲羽市で連続している、逆さにぶら下がった状態で遺体が見つかるという異様な殺人事件。

三人目の犠牲者が出て以降、捜査の進展は、未だ発表されていません。

番組では、これまでの流れを、事件映像を元にまとめました……ご覧下さい』

フリップや再現映像で事件が振り返られる。

警察から発表があった内容、犯罪心理学者が憶測で語った内容が盛り込まれて、随分な推測が事実のように語られている。

だが、真実はそれより随分な内容と言えるだろう。

もちろんテレビの中の世界の事など微かにも出てこない。

テレビの中で語られる犯人像はどんどん重度の異常者になっていく。

容疑者の少年に関する情報はまだ流れていないようだった。

■7／27

カチリ、と時計の針が全て文字盤の12を示し、26日が終わる。

暗い部屋の中、電源を付けていないテレビが映像を映し出す。

「……映った…！」

何度か雨の日はあったものの、久しぶりに日が変わるまで降り続けた雨の夜。

マヨナカテレビに映った映像を見て総司が声を上げた。
左上にＬＩＶＥ。
今回はテロップはない。
真ん中に映るのは少年で、背後の建物は大きな立方体を重ね上げて作られているようで輪郭がカクカクしていた。
鮮明な映像。

「もうハッキリしてる……
中に、いるね……」

茜が呟く。
画面に映っている暗い雰囲気を発散する少年は、知らない人間だ。
そう思った総司は少し考えて首を傾げる。
知らない、だけど見たことはある気がする。
テレビ報道では無い筈なのだが。
少年が口を開いた。
そこから漏れるのはボソボソと呟くような、聞き取りにくい声だ。

『みんな、僕のこと見てるつもりなんだろ？
みんな、僕のこと知ってるつもりなんだろ？
……それなら、捕まえてごらんよ』

陰気さがにじみ出た笑みを浮かべながら、少年はそう言った。

／＊／

都合がいいのは確かだった。
おあつらえ向きに、この日から夏休み。
宿題は出ているが、時間はたっぷりある。
マヨナカテレビを見た総司は全員に朝ジュネスのフードコートに

集まるようにメールし、メンバーは欠けることなく集まった。
りせとクマは一足先にテレビの中に入り探りを入れている。
その間に残りのメンバーで作戦会議をすることになった。

「今回のヤツって、ニュースや特番で見かけなかったよな？
というか誰かあいつの事知ってっか？
知らない筈なのに、どーっかで見たことがある気がすんだよなぁ……」

「あ、俺も。
見たことはある気はするんだよ」

陽介の言葉に総司は同意する。
名前等は思い出せないが、顔は見たことがある気がするのだ。
陽介もそうな以上、まったく稲羽と関係の無い所からあちらの世界に堕ちたわけではないだろう。
直斗の話が確かなら、容疑者は高校生。
諸岡殺害の件で足がついて指名手配された少年。
テレビに映った少年の年頃、タイミング。
捕まえてごらん、という挑発。
彼が警察に指名手配された容疑者という可能性は高い。
警察から逃げる為に手の届かないあちらに逃げる。
それは大いにありえると思われた。
八十神高校の生徒ではないという話なので、雪子や完二が無事に出てきているという情報は知らなくてもおかしくないが、芸能人であるりせになると話は別。
彼女が無事に戻ってきている事を犯人は知っている筈だ。
少なくとも出る方法がある事を確信して入っているのだろう。
だが、出口を出せるクマがこちらにいる今、他に出る方法が無いのならば彼は霧の日に自分の影に殺されるだろう。
それでは駄目だ。

真実を知ることが出来なくなる。
なぜ山野真由美を初め、次々と死ぬと分かっていてテレビに入れたのか。
なぜ諸岡金四郎だけはテレビに入れず殺したのか。
こちらは一応推測だけはしている。
テレビに入れても殺せなくなったから直接殺した、というのがそれだ。
高校生という事は、他の年代より高校教師である諸岡と関わりある機会は多いだろう。
特に強い恨みを諸岡に抱いてる可能性は高かった。
一旦戻ってきたりせによると、やはり中に誰かがいる気配はあるらしい。
だが、クマ共々情報が少なすぎて足取りが掴めないようだ。
映った少年が何処の誰なのか。
警察に追われている容疑者と同一人物なのか。
あちらの探査を続行するりせとクマ以外で情報を集めることになった。

■7／29

久保美津夫。

マヨナカテレビを見ていた中学の同窓生が気付いたらしく、卒業アルバムの写真を引き伸ばして回覧していたものを譲ってもらうことが出来、顔と名前を確認することが出来た。

マヨナカテレビに映っていた少年で間違いない。

写真を手に入れる過程で足立から聞き出した容疑者の経歴とも一致するし、警察が追っている少年と久保美津夫はやはり同一人物のようだ。

直斗から聞いた情報では八十神高校の生徒ではないという話だったが、退学して別の高校に移ったものの、元は八十神高校の生徒だったらしい。

諸岡が生徒を退学に追い込んだ事があるという話は諸岡が担任になってかわいそうねと転校早々言われた時に聞いていたが、その退学になった生徒というのが久保美津夫だったのだ。

つまり、諸岡に特別強い恨みを持っていたということだ。

愚痴や悪口の多い人間で、山野真由美の不倫の事も色々と言っていたらしく、その中で”浮気なんかする女は死刑にしろ”というのがあったらしい。

マル久豆腐店でもりせに暴走族に関する悪口を延々話し続け、あしらい方は慣れていたが疲れていたりせは無視を決め込んだそうだ。

暴走族に嫌悪感を抱いていて、りせに無視されて。

それが二人への犯行動機かもしれない。

そして、雪子に対しても美津夫には動機があった。

一度きりで思い出せなかったのだが、転校早々の4月、総司が目撃した”天城越え”。

初対面でいきなり雪子と呼び捨てて、デートに誘うも、断られて走り去った少年。
それが久保美津夫だったのだ。
小西早紀への動機に関する話は聞くことが出来なかったが、随分データはそろった。
総司が渡した写真を手に、りせが精神を集中する。
背後に現れたペルソナが、りせの頭にそっとバイザーを被せた。

／＊／

「何コレ…ゲーム？」

千枝が言うのも無理はない。
辿り着いた美津夫の心が作り出したダンジョン。
立方体が積み重なりドット絵のようになったそこは、昔のＲＰＧに出てくるダンジョンそのものだった。
まるでゲームの中に迷い込んだようだ。
視線の先には宙に文字が浮かんでいる。

［＜ＧＡＭＥ　ＳＴＡＲＴ
ＣＯＮＴＩＮＵＥ

捕まえてみろとテレビで言っていたぐらいだから、本人はゲーム感覚なのかもしれない。

「ゲームスタート！」
「男はみんな、ゲーム好き」

ついつい懐かしくなってノリ良く声を上げる総司に、陽介は苦笑する。

文字の下を通り建物に近付くと、入り口の上に設えられた角の生えたドクロに目が行った。
霧が怪しさを演出し、いかにも魔王が棲んでそうな雰囲気を醸し出している。
ダンジョンはレンガ造りで、所々に設置された蝋燭のドットの炎が規則正しく揺れている。
足を踏み入れると、宙に現れるメッセージウィンドウ。

ぼうけんをはじめる
ぼうけんをやめる

総司が”ぼうけんをはじめる”、と書かれた方に触れると、選択したことを示すのか”＞”と記号がついた。

なまえをいれてください
＊＿＿＿

黙ったままウィンドウを覗きこんでいると、下の入力部分らしい場所には自動的に”ミツオ＿”と入力される。

「ゲーム開始ってこと!?
何かムカつくー!」

りせが顔をしかめる。

「……行こう。
パーティは俺、天城、クマ。
もう一組は茜ちゃん、花村、里中、完二。
りせは俺の方に付いて来てくれ。
キツネは茜ちゃんの方に」

「パーティって……
まぁ、いいけどさ」

ゲーム用語を混ぜる総司に少し呆れた声を出す千枝。
キツネが心得たとばかりにコーン、と鳴いた。
りせがメンバーに入った事で離れた場所のサポートも出来るようになったので、最近のダンジョン探索はメンバーを分けることにしていた。
ダンジョンの通路はそこまで広くなく、ペルソナを召喚することを考えると一度に戦えるのは四人が限界なのだ。
ワイルドで様々な属性を扱える総司と茜を基本分け、なるべくバランスが取れるような布陣にする。
階段などを見つけたらりせを通じて合流、共に次のフロアへと行く等人数が増えていくつか探索のルールも出来ていた。

／＊／

＊「わあっはっはっはっ！
くさった　ミカンの　ぶんざいで
ワシに　はむかうとは　いい　どきょうだ！」
＊「きさまの　ような　にんげんの　クズには
えいえんの　くるしみを　あじあわせて　やる！
くらえっ！」

せいさいのいちげき！

白い文字が赤く染まる。

ミツオは　いしきを　うしなった…

＊「おはよう。」
＊「ゆうべは　よく　ねむってた　みたいね。
　パトカーの　おとが　あんなに　すごかったのに
　きづかないで　ねてるんだから。」
＊「きっと　おおきな　じけんね…あれは。
　アーケードのＣＡＦＥで　コーヒー　かってきて。
　おかねは　たてかえて　おいてね。」
＊「きいた？
　おんなのこが　ころされたんだって。」
＊「ぶっそうに　なったわね。
　あんしんして　であるけないわ…」
＊「きをつけてね。
　あまり　おそくならない　ようにね。」

／＊／

分かれ道で総司達と別れた茜達は、彼女を先頭にダンジョンを進んでいた。
他のメンバーは一度は危ないからと先頭を名乗り出た事もあったが、何度かのダンジョン探索で茜が先頭を進むことに否を言えなくなっていた。
リーダーが板に付いていると言うか、指示が上手く、戦いやすいのだ。
彼女自身、召喚こそ必要最低限だが、降魔しているペルソナの能力のおかげで不意を突かれてもあまり痛手を受けるということもない。
ただ、たまにシャドウを倒した後、茜が何も無い方を見つめていたと思ったら小銭や武器が降ってきたり、どこからともなく鎖が擦りあうような音が聞こえ出したりする時があるのだが。

それでも茜がもう一つのパーティのリーダーとして隊を引っ張ることの効率と安全性は皆が認める所となっていた。
今も真っ先に飛び出した茜が手に持ったラクロススティックでキューピッドのような姿をしたシャドウを一刀両断する。
なぜラクロススティックで斬れるんだという疑問は湧くが、まだ敵は残っている。
総司の方で既に戦ったシャドウで、すでにりせを通して弱点は教えてもらっていた。
陽介が手に持った包丁でカードを切り裂き、ペルソナを呼び出す。

「”マハガルーラ”！」

ジライヤの巻き起こした風が残りのキューピッド…盲愛のクビドを地に叩き落とす。
背中に小さな翼は生えているが、あまり飛ぶのは上手くないようで気流を乱されると飛んでいられないのだ。
体勢を崩した盲愛のクビドを一掃し、陽介はジライヤを送還する。

『気をつけて！
援軍、来るよ！
敵……三体！！』

ここにはいないりせの声が頭の中に飛び込んでくる。
背後に迫る刃を、寸でで完二は武器として使っている鉄板で防いだ。
完二の使う武器の形は基本盾の形をしていて、身を守るのにも使えるのだ。
刃は、岩から削り出して研いだような、そんな巨大な剣のものだった。
切れ味はそれほどありそうではないが、鈍器としては優秀そうだ。

それを握るのは地面から突き出した石像の腕。
受け止めた鉄板ごと完二を叩き斬ろうとする剣の腹を、千枝が蹴り飛ばす。

「来い！
タケミカヅチ！！」

自由になった鉄板を振るい、完二はカードを砕いた。

／＊／

じょしアナが　あらわれた！
どうする？
＞たたかう
　にげる

ミツオの　こうげき！
じょしアナを　たおした。
ミツオは　レベルアップした！
たのしさが　４　アップした！
むなしさが　１　アップした！

したいはっけんしゃが　あらわれた！
どうする？
＞たたかう
　にげる

ミツオの　こうげき！
したいはっけんしゃを　たおした。

ミツオは　レベルアップした！
かなしさが　５　アップした！
むなしさが　８　アップした！

――チガウ……
チガウ…チガウ……

／＊／

陽介はすぐ横に腰を下ろした茜に視線を向ける。
その胸元には肩に引っかけたイヤーインナー型のステレオフォンが揺れていた。
そのコネクタはネックストラップに取り付けられた円柱型の小さなデジタルオーディオプレイヤーに繋がっている。
戦闘中にヘッドフォンで音楽を聞く陽介は、前々から茜が聴いている音楽が気になっていたのだ。

「なあなあ、茜ちゃん」
「なぁに？」

階段を見つけ、別行動中の総司達を待っている今がチャンスだと、陽介はプレイヤーを見せてほしいと頼む。
茜は二つ返事で了承し、代わりに陽介が首にかけているヘッドフォンを受け取った。
大きなそれを頭にかぶせて茜が笑う。
戦闘時にプレイヤー本体を弄るわけにはいかないので、曲は流しっぱなしに設定してあるらしい。
アップテンポで流れる曲と歌詞は戦おうとする魂を奮い立たせて

くれる。

「おお…入ってる曲殆ど横文字じゃん。
数年前の曲ばっかみたいだけど、最近の曲、キライ？」
「それ、元から入ってた曲なの。
どうじまさんち、パソコンないから新しいの入れられなくて。
この曲、いいね」
「お？　やっぱそう？
んじゃさ、今度家来た時、データ入れるよ。
クマも喜ぶしさ」

曲のセンスを褒められた陽介は機嫌よく茜を誘う。
茜も嬉しそうに頷き、ヘッドフォンから流れる音楽に耳を傾けた。

／＊／

＊「おはよう。
　ゆうべは　よく
　おんなのこが　ころされたんだって。」
＊「アーケードのおとが　あんなに　すごかったのに
　パトカーのＣＡＦＥで　コーヒー　かってきて。」
＊「おかねは　あんしんして　たてかえて
　きづかないで　であるけないわ…」
＊「きいた？　おはよう。
　ぶっそうに　おそくならない　ようにね。」
＊「あんしんして　きをつけてね。」

／＊／

「うほー！

おっきいクマねー」

クマがキラキラした瞳をそれに向けて素直な感想を言った。
総司も心の中で全面的に同意する。
目がキラキラしているのも理解できる。
子供が好きそうなこのデザインは、基本的に幼い思考を持つクマも好むだろう。
それは、右手に剣を携えた巨大なロボだった。
右肩には”正”、左肩には”義”と書かれている。
戦隊物に出てきそうなデザインなので茜も量産型ブラフマンよりも気に入るかもしれないと総司は思った。

「ねえねえ、先輩！
あそこ！」

りせが総司の服を引っ張って注意を促す。
りせの示す先に宝箱がある。
どうやらこの巨大ロボはあれを守っているようだった。

「どうする？」
「ん……
わざわざ守ってるっていうのが気になるな。
戦おう」

雪子の問いに総司は答え、ロボの前に進み出る。
総司に気付いたロボがその巨体を動かした。
その体の大きさに見合う巨大な剣が振られる。
何とか総司は身をかわし、剣は総司の近くの床に叩きつけられる。
総司が反撃する。
狙いは、剣を振り下ろした事によって地面近くに伸ばされている

ロボの腕。
そこに、総司は剣で斬りつけた。
金属の体に線が刻み付けられる。
だが、それだけ。
さすがの巨体、さすがの金属製だけあって武器攻撃では壊せる気がしない。
反対に痺れた腕に総司は顔を歪めた。

「個体名、鋼鉄の巨兵。
今の攻撃、物理に耐性があったよ！」

アナライズしたりせが声を上げる。

「なら、魔法行くよ！
コノハナサクヤ！！」
「クマも行くクマ！
キントキドウジ！！」

雪子とクマが同時にカードを破壊する。
青い光が立ち上り、二人のペルソナが具現化する。

「”アギラオ”！」
「”ブフーラ”！」

炎が、吹雪が鋼鉄の巨兵を襲う。

「……っ、ウソ！
両方に耐性持ってる！？
攻撃来るよ！」

りせが報告と警告をする。
この分だと他の属性にも耐性がありそうだ。
防御特化のシャドウなのかもしれない。
鋼鉄の巨兵が剣を振りかざす。

『”ナバスネビュラ”』

合成音声の言葉と同時に剣から眩い光が迸る。
そして光が爆発する。
爆音が悲鳴を飲み込んだ。

「ぁ…っぐ……
無事か！？」
「う、うん……
ペルソナっ！」

総司に何とか答え、雪子が今の衝撃で消えてしまったコノハナサクヤを再度召喚する。
回復の緑光が三人を包んだ。

「クマ！」
「っ、だ、大丈夫クマよ！」
「俺がもう一度回復魔法を使うから、クマはガードキルを」
「了解クマ！」

雪子の中級範囲回復魔法（メディラマ）でも回復しきれなかった傷に総司は顔を顰める。
防御だけでなく火力も高いという厄介な敵だ。
総司は回復用に作っておいたペルソナを降魔し直し、その間にクマは再召喚を果たす。

「”氷結ガードキル”！」

キントキドウジが耐性消去魔法を唱えると、一瞬鋼鉄の巨兵が震えた。

特定の属性の耐性、無効、吸収を打ち消し、その属性の攻撃が効く様にする魔法だ。

これで先程殆ど通らなかった氷結魔法も効きやすくなった筈だ。

「パールヴァティ」

総司のペルソナを呼ぶ声に応えたのは美しい女性型のペルソナ。

パールヴァティが腕を振るうと、再び総司達を緑色の光が包んだ。

傷を癒す力を増幅させる”神々の加護”を持っているので、それでほぼ傷は塞がる。

雪子もガードキルを使い、炎の耐性を消去する。

そこからはそれ程時間はかからなかった。

防御に絶対の自信を持っていたためか、シャドウの体力自体はそれほど高くなかったのだ。

途中、もう一度パールヴァティで回復魔法を使う必要はあったが、三人がかりの中級攻撃魔法の何度か目で撃破することができた。

随分と精神力を使ってしまった。

もう数回しか呼ぶことは出来なそうだった。

総司は鋼鉄の巨兵が守っていた宝箱に近付き、蓋を開けた。

中には手の平サイズの透明な玉がひとつ。

「水晶玉？」

「んーと……

くらやみのたま、だって」

バイザー越しに水晶玉を見たりせが答える。
道具の鑑定まで出来るようだ。
だが、効果までは分からないという事だった。
それでも苦労した末に手に入れた戦利品。
総司はポケットの中にくらやみのたまを押し込んだ。

／＊／

＊「わあっはっはっはっ！
くさった　ミカンの　ぶんざいで
ワシに　はむかうとは　いい　どきょうだ！」

諸岡が　あらわれた！
どうする？
＞ころす
　にげる

ミツオの　こうげき！
諸岡を　殺した。
ミツオは　レベルアップした！
ちゅうもくどが　１６　アップした！
わだいせいが　１７　アップした！
かっこよさが　３　アップした！

／＊／

階段を上ると一際大きな扉が総司達を出迎えた。

「大きな扉……
ここかな？」

千枝が振り返るとりせが頷く。
扉の向こうから人の気配がするようだ。
総司が一歩前に出て扉に触れる。
しかし、他の扉は触れるだけで開いたのに、ここのは動く様子がない。

「……ん？
開かない」

呟くと、ポケットに入れていた水晶玉から闇が溢れ出た。
一瞬シャドウかと皆が身構えるが、くらやみのたまから漏れ出した闇は凝らずに扉を包み込んだ。
薄まった闇が消えると同時に扉が開く。
扉の向こうはコロシアムのようになっていた。
円形状の部屋、その壁には観客席が描かれている。
その真ん中で向かい合う二人の少年。
その姿は鏡写しのように同じものだ。

「テメェが久保か！
野郎、歯ぁ食いしばれッ！！」
「待て、完二！
…なんか様子がおかしい！」

特攻しようとする完二を陽介が止めた。
美津夫の内の一人が声を荒げる。

「どいつもこいつも、気に食わないんだよ……
だからやったんだ、このオレが！」

地団駄を踏んでもう一人を睨みつける。

「どうだ、何とか言えよ！」

その癇癪を起こす美津夫を、もう一人が冷めた目で見つめる。
瞳が金色だという事はこちらがシャドウだ。

「たった二人じゃ誰もオレを見ようとしない。
だから三人目をやってやった！」

その言葉にももう一人は反応を返さないが、総司達は違う。
彼は自分こそが犯人だと言ったのだ。
無視できるわけがない。

「オレが、殺してやったんだっ！！」

総司達が色めき立つが、もう一人の美津夫はやはり何も言わない。
冷めた目で見つめたままだ。

「な、何で黙ってんだよ……」
「何も…感じないから……」

もう一人がそう呟く。
声は小さく、聞き取りにくい。
囁き声にも劣るほどに音量の小さな呟きだった。

「なに言ってんだ！？
意味分かんねーよテメェ！！」
「な、なによ……？
どっちがシャドウ？」

癇癪を起こし地団太を踏む美津夫を見て千枝が戸惑いの声を上げる。
今までの本人と影（シャドウ）との対話は、影が本人の心の闇を暴き、本人が否定しようとする度に反発が強くなっていった。
だが、この対話では反発どころか殆ど無視と言っていい。

「僕には…何も無い……
僕は、無だ……」

ボソリと影が呟く。

「そして……
君は、僕だ……」
「なんだよ…なんだよ、それッ！
オレは、オレは無なんかじゃ……」
「いけない……！」
「それいじょうは、言っちゃダメ！」

否定しようとする美津夫を止めようと雪子と茜が叫ぶ。
その声に、背を向けていた美津夫が振り向いた。

「な、何だお前ら！？
どうやってここへ……
こんなとこで何やってんだよ！？」
「るせえ！
テメェを追って来たに決まってんだろが！」

一瞬驚き戸惑った様子で視線を彷徨わせた美津夫は、すぐに癇癪を起こして声を荒げるが、さらに大きな声で完二が遮る。

「アンタが…犯人なの？」

千枝が、睨みつけながら言う。
その言葉に美津夫は嬉しそうに笑った。
ようやく話が分かる人間が現れた、そんな笑いだった。

「あはははははは！！
そうだよ、決まってんだろ！
オレが全部やったんだよ！！」

そして再びもう一人と向き合う。

「ニセモノが何言おうが知るかよ！
ははは、そうだ、お前なんか関係ない！
オレの前から消えうせろッ！」

影は黙ったまま美津夫を見つめる。
だが、美津夫を見つめるその瞳には何も映らない。
反応の無い影に苛立たしげに表情を歪め、美津夫は総司達に振り返る。

「お前らもだ……
こんな所まで追いかけて来やがって！
お前らも殺してやる！
まとめて殺してやる！」

声を大にして宣言する。

「オレは出来る……

オレは、出来るんだからな！」

その言葉に、ずっと俯き加減だった影が初めて顔を上げた。
だがその瞳は相変わらず何も映さない。
見つめ続けている美津夫さえも。

「認めないんだね、僕を……」

もう一人が、ポツリと呟いた。
その瞬間、美津夫が力が抜けたようにへたり込む。

「うっ……
なんだ、これ……」

闇が膨らむ。

「うわあぁぁっ！！」

背後の闇が爆発的に膨らんだことによって美津夫が弾き飛ばされた。
倒れ込んだ美津夫に総司達が駆け寄る。
息はしているが、気を失っている。
闇からは頭部が異様に肥大化した赤ん坊が飛び出して宙に浮かんだ。
頭の周囲に、土星の輪のように文字化けしたような記号が回る。

「くそっ……結局こうなんのかよッ！」

陽介が悪態をつく。

「みんな、頑張って！」

戦闘に直接参加が出来ないりせが叫ぶ。

「コイツ倒せば、事件解決は目の前よ！」

赤ん坊が頭を押さえて金切り声を上げた。

立方体が現れ、足元から積みあがって人の姿を形作る。

それは赤ん坊を殻のように包み込んだドット絵の勇者だった。

「何かと思や”ゲームキャラ”ってか？

ったく、どこまでフザけたヤツだよ！」

「行くぞ！」

陽介が言って手に持った二本の包丁を握りなおす。

号令をかけ、総司が剣を構える。

仲間たちもそれぞれ武器を構えた。

「僕は…影……」

音の高低だけで無理矢理表現したような聞き取りにくい声で美津夫の影が言う。

＊「おお　ゆうしゃ　ミツオ
　みごとであった！」

＊「そなたの…」

＊「そそそそなたのののの」

――……

ボクニハ……
ボクニハ…ナニモナイ……

「おいでよ。
……空っぽを、おわりにしてあげる」

空っぽの冒険（後書き）

四人で突入してもボス部屋には全員でなだれ込むんで、いっそのこと、とＰＴを二つに分けて皆でダンジョン攻略することにしました。ダンジョン内で会った仲間と話できたりアイテムもらえたりしますし、Ｐ３（Ｐ３Ｐ）だと散開できるし別行動時のナビも（多分）大丈夫。

戦闘しないしセリフもないので影が薄いですがキツネもいます。

総司とＰＴ組んでる時は目をそらして足並み揃えていた茜は、リーダー時はシャッフルタイム突入です。

後、本来くらやみのたまを守っているのはキリングハンドさんですが、弱いのと地味な為にチェンジ！発動しました。

「外側を崩さないと本体には攻撃できないみたい！」

ヒミコの持ったバイザー越しにドットの勇者を解析したりせが報告する。

茜の意識が戦闘に向かい、茜の中のペルソナが、”勝利を呼ぶ英雄”たるジークフリードの心が高揚する。

発動する味方身体強化（マハオート）。

そのスキルは総司達全員の力を上げ、守りを固め、体を軽くする。

軽くなった体で総司は踏み込み、剣を凪ぐ。

「よし……
てやぁっ！！」

気合の声と共に振るわれた剣が切り裂いた部分が一瞬崩れ、奥に隠れる赤ん坊が見えた。

だが、赤ん坊が見える時間が短すぎて、追撃で中に攻撃を届かせることは出来そうにない。

反撃を避けるために総司が飛び退る。

中空にメッセージウィンドウが現れ、浮かぶ。

コマンド
＞たたかう
アイテム
まほう

ダンジョンも対峙する勇者もそうなら、戦闘もゲームのようだ。

たたかうコマンドが選ばれた勇者はそれに従いドットの剣を振る

う。
立方体で作られた、切れ味が皆無のように見えるその剣を完二は鉄板で受け止める。
その衝撃で鉄板が少しへこむ。
完二からくぐもった声が洩れた。
ウィンドウが別の選択肢を表示する

コマンド
たたかう
＞アイテム
まほう

アイテムコマンドが選ばれ、更にウィンドウが浮かび上がる。

＞バクダン

勇者の背後に素早い身のこなしで迫っていた陽介の目の前に、ドットで描かれたバクダンの絵が現れた。
そのバクダンが爆発のエフェクトを撒き散らし、ドットが陽介を襲う。
陽介は慌てて引くものの、よろけて膝をつく。

「ぐ……くそ、なんだこれ……」

力が、入らない。
陽介は霞む目を擦り、頭を振る。

「今の攻撃…爆風に当たった人を衰弱させる効果があるみたい。
誰か、花村先輩を！」
「了解クマクマ！

ペルクマ～！！」

りせの報告にクマはカードを呼び出しキグルミの腕に嵌めた爪で破壊する。

現れたキントキドウジから放射された光が雨となって味方全員に降り注ぐ。

気力の雨を体に取り入れることにより衰弱を治療するスキル、”エナジーシャワー”だ。

再び青白い光が散る。

千枝の回し蹴りがカードを砕いていた。

「トモエ！！

”黒点撃”！」

薙刀を構えたトモエが武器を突き出す。

だが勇者の体を貫通するものの、奥に隠れた赤ん坊には届かない。

コマンド

＞たたかう

アイテム

まほう

狙われたのは総司。

ドットで形作られた剣とアートとして作り出された剣がかみ合い、鍔迫り合いを演じる。

コマンド

＞たたかう

アイテム

まほう

一際力を込めた勇者の攻撃に弾き飛ばされて勇者と総司の距離が開く。
同じコマンドを命じられた勇者が剣を振るう。
振るわれた剣は総司と雪子の間を縫い、りせに向かう。
それを上からラクロススティックを叩きつけて茜が防いだ。

「りせちゃん、もうちょっと下がってて！」
「う、うん！」

慌ててりせはキツネと共に倒れたままの美津夫を引きずって戦闘を続けている皆から離れる。
それを横目で確認して茜が駆ける。
押さえつけたドットの剣の上を滑らせてラクロススティックが勇者に迫り、その勢いのままドットを切り裂く。
十分下がったりせが美津夫から手を離し姿勢を正すと、待機していたヒミコがもう一度バイザーを被せ直した。

「来い！
ジャックランタン！」

総司がカードを握りつぶす。
現れたのは、ランタンを持ったカボチャが可愛い妖精。
その妖精に総司は命じる。

「”アギラオ”！！」
「我は汝…汝は我……
こっちも行くわよ、コノハナサクヤ！
”アギラオ”！」

ジャックランタンの振るわれたランタンから、コノハナサクヤの振るわれた腕の通過した空間から炎が迸り、勇者を包み込む。

コマンド
＞たたかう
アイテム
まほう

「させねえ！」

持ち上げられようとなったドットの剣の上に陽介が飛び乗り、再び剣は地面に叩きつけられる。
普通の剣では無理だが、立方体で構成されたこの剣ならそれができるのだ。

「行くぜ、完二！」
「いつでもいいっスよ！」

迸る二つの青白い光。
そこから飛び出した二人のペルソナが勇者に飛び掛る。
ジライヤが閃光の様に一瞬で死角に回りこんで殴りつけ、タケミカヅチが正面から雷を模した武器を連続で振るう。
積み重なっていたドットが崩れ落ちてシャドウを倒したときのように消える。
外殻を失った赤ん坊が地面に落ちた。

「今だ！　かかれっ！！」

総司の号令を受け、体勢を崩した赤ん坊にそれぞれが攻撃を仕掛ける。

迫る武器を視界に収め、赤ん坊が呪文を唱えた。

「”デカジャ”」

＞ささやき

総司達に掛かっていた身体強化が解除され、体が重くなった感覚と共に動きが鈍る。

そしてウィンドウと共に足元に現れた立方体に足を取られて追撃は諦めざるを得なかった。

仕切り直しするために距離をとり、立方体を見ると撃破した勇者のもののようだ。

だが、現れているのは足だけ。

「あの殻の完成までには時間がかかるみたいだね……

完成するまでに壊しちゃえ！」

そうりせが言う通り、いくつか手順を踏まないと勇者を再召喚できないようだ。

「すぐだよ。

怖がらなくていいよ」

赤ん坊がニヤリと哂う。

「ジャックランタン！」

総司がジャックランタンに指示を出す。

「”マハラクカジャ”！」

「キントキドウジ、クマもやるクマよ！
”マハタルカジャ”！！」

補助呪文を唱え、解除された身体強化の内の二種を掛けなおす。
茜がペルソナ全書を繰り、栞を挿みなおした。
現れたカードを本で押しつぶすと、緑色の鮮やかなドレスを翻した美女が現れる。

「ティターニア！
”コンセントレイト”！！」

一瞬茜を光が包み、茜の魔力が跳ね上がる。

＞えいしょう

「”蒼の壁”」

勇者のドットが腹の部分まで積みあがり、蒼い光が赤ん坊を包む。
雷系の呪文の耐性を付ける呪文に、今正に雷系の魔法を打ち込もうとしていた完二は命令を切り替える。

「”キルラッシュ”！」

指示を受けて再びタケミカヅチが武器を何度も振るった。
千枝、陽介、雪子の扱う属性は雷系ではないので、それぞれ中位魔法を放つ。
バイザー越しに攻撃の効果を確かめていたりせは、吹雪の、強風の、炎の向こうで赤ん坊の口が呪文を唱えようとしているのを見た。
また補助解除（デカジャ）呪文かと考えたりせは、しかしある可能性に思い当たる。

魔法が使えるシャドウやペルソナは、耐性を持つ属性の攻撃魔法が使える可能性が高いという事に。

「気をつけて！
雷が」
”マハジオンガ”」

りせと赤ん坊の声がかぶった。
周囲に雷が降り注ぐ。
美津夫の影は使う耐性強化呪文で自身の属性を変えるシャドウだったのだ。
電撃が弱点なのは陽介とクマ。
そして。

「きゃあぁぁぁっ！！」

雷に撃たれた茜が悲鳴を上げる。
茜の召喚するティターニアの弱点属性が雷だったのだ。
三人の体勢が崩れ、追撃の中位万能属性魔法（メギドラ）が放たれる。

「く、う……っ、コノハナサクヤ……
”メディラマ”っ！！」

爆煙が視界を塞ぐ中、”メギドラ”を耐えた雪子が回復呪文を唱える。
再び電撃が来る前に茜が栞を挿むページを変え、総司もカードを選びなおす。

「パールヴァティ、”メディラマ”だ！」

総司も”メディラマ”を唱え、確実に傷を塞いでいく。

「クマクマ～っ！！」

ダメージから回復し、体制を立て直したクマが大振りで積みあがった立方体をなぎ払った。

それで勇者になろうとしていたドットは崩れ落ちる。

霧とは違う”何か”が総司達の体を包む。

ぞわり、と冷たいモノが背筋を伝う。

精神を不安定にさせ、体の調子を悪化させやすくなるスキル、”淀んだ空気”。

その後に来るのは、それを後押しするものだ。

「ぐわっ」

「きゃっ、あ、ああっ！」

悲鳴が上がる。

赤ん坊の攻撃が、ペルソナの足や腕を斬り飛ばしていた。

幻想の血飛沫が舞う。

ペルソナと、その召喚主はリンクしている。

ペルソナの固有能力を得る代わりに、ペルソナが傷を負えば同じ部分に傷を負う。

肌が弾け、血が滲む程度だが、感触はある。

自身が切り刻まれる感触。

集中が途切れ、ペルソナが消える。

残るのは恐怖の感情。

「天城っ、”メパトラ”を！」

青ざめた顔で総司は精神安定の魔法を指示するが、雪子の耳には

届いていないようだ。
自身を抱いて叫び続けている。
本を閉じる音が総司の耳に届いた。
青白い光の中に現れたのは、一人の女神。
先程まで総司が呼び出していて、そして刻まれて消えたペルソナ。
パールヴァティ。

「”メパトラ”！！」
「”亡者の嘆き”」

赤ん坊の追撃より、茜の召喚したパールヴァティの魔法が全員を包む方が速かった。
恐怖を抱いた相手を呪殺する”亡者の嘆き”は不発に終わる。
もしも、間に合わなかったら確実に仲間の大半が倒れていた。
総司は降魔するペルソナを変更する。
恐怖から心を守る能力を持つペルソナに。
これで同じコンボを使われそうになっても”メパトラ”を確実に使うことができる。

「……どうして？」

赤ん坊が口を開いた。

「楽になりたくないの？」

＞ささやき
＞えいしょう

ドットが積みあがっていく。

「僕はね…僕がここに居る証拠が欲しいんだ……
だから……」

＞いのり

「君らを殺さなきゃ！」

再びドットの勇者が現れる。

ミツオは　レベルが　あがった！

青白い光が数個上がった。
カードが砕かれ、ペルソナが再召喚される。
一度心の海に戻った彼らの傷はすでに無い。

「行けっ！
”ガルーラ”！」
「トモエ、”黒点撃”！！」

ジライヤの風魔法が、トモエの繰り出した薙刀が勇者を襲う。
総司が中空に伸ばした手がカードを握りつぶす。

「ヤタガラス！
”マハスクカジャ”！」

勾玉を首から下げたカラスが翼を広げる。
体が軽くなる。
解除されていた身体強化の、最後の一種。
雪子はもう一度コノハナサクヤを呼び出して”メディラマ”を唱え、あちこち血の滲んだ傷口を塞いでいく。

コマンド
こうげき
アイテム
＞まほう

＞ギガダイン

「げっ、また雷!?」

ウィンドウに表示されると共に降り注ぐエフェクトを必死に避けながら陽介が叫ぶ。

忍者のペルソナ、ジライヤを降魔しているおかげか、陽介の身のこなしは軽い。

総司のかけた速度強化（スクカジャ）の効果も得て見事に避けきる。

「ちがう…これ、見た目カミナリみたいだけど、ばんのうぞくせいみたい」

雷撃を見切る目を持つパールヴァティの能力で避けようとし、出来なかった茜が言う。

クマも食らいはしたが先程のように体勢を崩すほどのダメージは受けていないようだ。

コマンド
たたかう
＞アイテム
まほう

＞バクダン

「わっ！」

爆風を避け切れなかった千枝が声を上げる。

「チエチャン！」

クマが声を上げ、”エナジーシャワー”を使おうとカードを呼び出す。

「まって、クマ！
かいふく、やるよ。
クマはこうげきして！」
「リョーカイクマ！」

パールヴァティがふらつく千枝に手をかざす。
使う魔法は”エナジーシャワー”と違い、単体にしか効果がないが、その分消費の少ない”シシリディ”。
クマがカードを破壊する。
その横で、完二もカードを砕いた。

「GO、キントキドウジ！
”ブフーラ”！」
「食らわせろ、タケミカヅチ……”キルラッシュ”！！」

吹雪と雷の武器が勇者を削っている間に総司はまたペルソナを変える。
勇者の攻撃は”こうげき”、”バクダン”、”ギガダイン”の三種。
勇者の中に隠れている間は赤ん坊への攻撃は通らないが、同じよ

うに赤ん坊からの攻撃も通らない。
先程のコンボは考えなくてもいい。
ならば、と物理攻撃に耐性のあるペルソナを降魔したのだ。
だが。
ウィンドウが現れる。

コマンド
＞たたかう
アイテム
まほう

物理耐性は意味を成さなかった。
雷の魔法のように見える”ギガダイン”が万能属性のように、剣を使った”こうげき”も万能の属性が付加されていたのだ。
思いのほか強かった威力に総司はよろめく。
そこに。

コマンド
こうげき
アイテム
＞まほう

＞ギガダイン

雷のエフェクトが襲い掛かった。
近くにいた者が庇おうとはするも、エフェクトは全員を飲み込む。
総司は食いしばり、意識を繋ぎ止める。

「”ディアラマ”！」

陽介が一際大きなダメージを受けた総司を回復する。

「ハヌマーン！」

総司の呼びかけに応えたのは、曲刀を構え、鎧を着た一匹の猿神。

ハヌマーンが曲刀を持って勇者に斬りかかる。

茜のパールヴァティもその力を解き放った。

ティターニアが使った魔力増幅呪文（コンセントレイト）はまだ掛かったまま。

強化された魔力が巨大な氷塊を作り出す。

「”剛殺斬”！」

「”ブフダイン”！」

力の全てを込めて叩き込まれた剣が、増幅された上位魔法ががらんどうの勇者を打ち砕く。

「今だよ！

皆、やっちゃえーっ！！」

りせが声を上げる。

次の瞬間、皆の攻撃が赤ん坊の姿の影を打ち破った。

虚構の勇者（後書き）

話内の7月が終わる前にリアル9月に入っちゃいますね。
イザナギを出したい……どっかで事故ナギでも作る場面でも入れようかな。

女の意地？　料理対決！（前書き）

Ｐ４格ゲーだ…と……？
しかもＰＳ３と箱て……
何で仲間同士で戦うんだ……千枝が本気で修行始めたのか……？
アイギス参戦とか……フェスで何を学んだし（・ω・、）

ついでにＰ３ＰにあたるっぽいＰ４ＧはＰＳＶ（プレステヴィータ。ググって初めて知った…）で出るんだって。
ＰＳＰじゃないのか……
格ゲーはともかく、Ｐ４Ｇは出たら買っちゃうと思うけど。

長くてテンション低い前置きですが、本編は打ち上げなので明るいです。

女の意地？　料理対決！

カシャカシャと菜箸がボウルの底を引っかき、それに合わせて卵液が舞う。
二人ぐらいなら広々と使える台所だが、料理をしているのはその倍の人数。
コンロが二人で埋まり、調理スペースが一人で埋まり。
総司は今はテーブルを作業台として卵と格闘していた。
コンロが空くまでに下ごしらえは済ませておきたい。

そう。
総司達は料理をしていた。
それは、りせの一言から始まった。

／＊／

「そうだ！　ねえ、打ち上げしよう？」

美津夫を警察に引き渡した後のフードコート。
終わった後の脱力感と美津夫の語った”犯行動機”に暗くなっていたメンバーにりせはそう提案した。

「ドラマの撮影とかだと、必ずやるよ？
楽しいし、終わったーって実感できると思う」
「あー、打ち上げね！
いいかも！
いっちょ、パーっとやっとく？」

千枝は伏せていた顔を上げて賛同する。
クマも賛同し、手を上げて主張する。

「はいはいはーい！
クマ、ユキチャンのお家行きたい！
宴会、お座敷、温泉、浴衣！
ゲイシャ、フジヤマ、ウハウハ！」

だが、思考が煩悩まみれで皆苦笑する。
旅館で宴会は楽しそうではあるし、温泉も魅力的ではあるが今は夏休み。
シーズン中ということで空いている部屋はないらしい。
傍目にもガッカリするクマにまた今度ね、と雪子が約束する。

「あ、じゃあさ。
代わりにお前んちとか、どうよ？
あーでも、叔父さんに”何の打ち上げ？”って訊かれたら、やり辛いか……？」

陽介は総司に視線を送る。
総司は少し考えて、ニヤリと笑った。

「問題ない！
よし、来い！」
「うん、行っちゃいます！」

快く受け入れる総司に、りせは諸手を挙げる。

「どうせ、ハンニンつかまったから、どうじまさん帰りおそいもん。

だいじょうぶ！」
「そういえば、いつも茜ちゃんが夕飯作ってるのよね？」
「うん、そうだよ」
「じゃあ、みんなで何か作るとかどう？
今日は茜ちゃんと菜々子ちゃんにご馳走作ってあげる！」

雪子がそう言った瞬間。
一部の男性陣と茜の動きが止まった。
その反応に気付かず、りせは首を傾げる。

「へー、いつも茜ちゃんが？
……そっか、豆腐買いに来たの茜ちゃんだもんね」
「前ダンジョンで食わせてもらった弁当……
旨かったスよね……」

件の弁当で茜の料理の腕を知っている完二の表情が緩む。
その味を思い出しているのか、今にも涎が垂れそうな表情だ。

「それにしても先輩たち、お料理得意なの？」
「ま、まあ…それなりに？」
「なにを言っているんだ…この人たちは……
林間学校ん時の記憶を、何処へ置いてきたんだよ！」

りせの問いを半笑いで誤魔化す千枝に、陽介は顔を顰める。
千枝がチラリと総司の方を見ると、総司の体は小さく震えていて、
こころなしか茜の表情も暗い。
林間学校の惨劇の話が茜にまで伝わってるらしいことに気付いた
千枝は慌てて立ち上がる。

「あ、あの時は、たまたまだって言ったでしょ！」

「そうだよ、材料を少し間違っただけ！」
「たのむよ、やめろって……
これ以上、心に傷を負わせないでくれ……」

千枝と雪子の言い訳に、陽介の表情が更に暗くなる。
その横で、りせは少し身を乗り出し上目遣いになって正面に座る総司に料理を作ってあげたいなと迫る。
その様子を見ていたクマは、閃いたとばかりに瞳を輝かせた。

「じゃじゃーん。
クマ、いいこと思いつきました！
料理対決でモッキュモキュ～の巻！、みたいなぁー！」
「つか、料理対決だ？
ますます嫌な予感すんな……」
「あ、えっと…あたし、作るよ？」
「ダメだよ。
茜ちゃんと菜々子ちゃんは審査員だもの」

ますます顔を顰める陽介。
茜が口を挿むが、その提案は雪子によって一刀両断される。

「そ、そうだよね。
お、お、面白そうじゃん」
「えぇー、私が勝っちゃうけど、イベントの絵的に、それでいいの？」
「く、久慈川さん？
調子に乗ってられんのも、今の内ですことよ？」
「…一撃で仕留める」

勝気なりせの言葉。

それにカチンときたらしい千枝と雪子。
顔を青くした陽介は総司に向き直った。

「頼む、お前も作れ、瀬多。
お前がたまに作ってくる弁当旨いし、お前に一筋の希望を感じる」
「じゃあ、キミが男子代表ね！」

こうして。
総司ｖｓ千枝ｖｓ雪子ｖｓりせの料理対決が開催される事となったのだった。

／＊／

溶き終わった卵液の入ったボウルと菜箸を置き総司が顔を上げると、居間の方では茜と菜々子とクマが何やら会話していた。
コンロは今だ埋まっている。
総司は近付いて会話に耳を傾ける。
どうやら、クマが事件が終わったから帰らないとと言い、菜々子がそれを引き止めているようだ。
元々、クマと交わした約束は”事件の犯人を捕まえてクマの住まうテレビの中の平穏を取り戻す”という事。
それが終わった今、静かになるであろうあちらに戻らないといけないと思っているらしい。
約束が済んだから戻らなくてはいけない。
そう悩むクマに、菜々子は新しい約束を提案した。
今度、一緒に遊ぶと言う約束を。
近付いてきた総司に気付いてクマが顔を上げる。

「クマは…センセイたちに、約束を果たしてもらったよね……
だから、もうアッチに帰らなきゃ……」

「気にしなくていい。
こっちにいればいいじゃないか。
気の済むまで」
「で、でも…約束は約束だし……
破ったら、よくないし……」
普段自分の欲望のままに動いてるふうのクマは意外に律儀だ。
「菜々子ちゃんとの約束は？」
「セ…センセイ……
うん……ナナチャンと約束。
遊ぶ約束、確かにした……
クマの方からじゃなくて、ナナチャンの方からの、約束……」
クマが菜々子に視線を移すと、菜々子は頷く。
それでも迷っているらしいクマに茜は笑った。
「いーんだよ。
だって、”カイケツしたら帰る”なんてやくそくしたわけじゃないもん。
雪ちゃんとこにも、おとまりするやくそくしたわけだし！」
「アカネチャン……！
とっても…とってもうれしい……
ありがとう……！」
目をうるませて、クマは立ち上がる。
そしてテーブルの方で完二と不安そうに女性陣の調理風景を見ていた陽介にタックルするように抱きついた。
「ヨースケ！」

「おわっ！？
なんだよ、クマ？」

驚いた陽介がクマを見下ろす。

「クマ、新しい約束ができたから……
も、もすこし、ジュネスでお世話になりたい！
お願いできますか、お代官！」
「はぁ？
バッカだな、当たり前だろ？」

そのクマの言葉に、呆れたように陽介は答えた。

「勝手に職場放棄すんな。
大体、お前が居なくなったら……」
「でーきたーっ！
はーい、ジャマジャマ、先輩！」

何か言いかけた陽介を、お盆を持ったりせが弾き飛ばす。
角があたったらしく、陽介と、一緒になって弾き飛ばされたクマが小さく叫ぶ。
りせはお構い無しに綺麗に盛り付けされた皿を勢い良く食卓に置いた。
りせは自信満々の表情だ。
ともあれ、これでコンロが一つ空いた。
自身も仕上げてしまうべく、総司は居間に背を向けた。

／＊／

食卓には、四枚の皿が並べられた。

その上に乗っているのは、菜々子のリクエストであり本日のお題の料理であるオムライス。
どれも薄焼き卵でご飯を包むタイプで、中身は見えない。
ふと総司が茜の方を見ると、茜は食卓に背を向けてペルソナ全書に栞を挿みなおしている。
総司の位置からではその中は見えないが、そのペルソナのスキルの中には”毒防御”があった。

「どうぞ、召し上がれ！」
「ま、まー待て。
いきなり菜々子ちゃんと茜ちゃんに食べてもらうってのは、その…いかがなもんかな」

明るく皿を薦めるりせに、陽介が待ったをかけた。
その視線は雪子と千枝の方へ向いている。

「こ、こっち見んな！」
「あー、毒見役ってことスか」
「毒見って、ひっどぉーい！
じゃ私のは、まず花村先輩食べてみて。
絶対おいしいんだから！」

陽介の言いたい事を理解した完二が頷く。
それにりせはムッとした表情を浮かべ、毒見を提案した陽介に自身の皿を示した。

「オレが一番でいいのか？
いや実は、ナニゲに期待してんだよ」

陽介は手の中でくるりとスプーンを回してみせる。

「そうじゃなくたって、〝りせちー〟手作りの料理食べるとか、普通絶対ない体験だろ。
じゃ、いただきまーす」

そう言って、陽介は示された皿のオムライスを掬った。
ソースも手作りらしく、それがたっぷりかかっている。
トマトベースなのか、その色は赤い。
陽介は、掬ったそれを口に入れた。

「……！！」

そのまま固まる陽介。

「う……こ…これは……二人には…やれないな……」

必死の形相で飲み込み、それだけを口にした。

「やった、美味しくて独り占め宣言!?」

その様子には気付かないのか、上機嫌でりせは言う。
取りあえず食べてみる為に総司もスプーンを伸ばす。
一匙掬い、口に含む。

「……！！」

辛い。
それは、辛さと熱さで溶岩のようだった。
スペシャルなオムライスだからとりせはフォアグラを購入していたが、そんな食感は全く見当たらない。

段々口の中には鉄のような味が広がり、何故か鈍痛がしてくる。
これは子供が食べていい辛さを越えている。

「これは……うん。
あげられない」

総司も何とか飲み込んでそれだけ言うと、今度は雪子が自身の皿を示した。

「じゃあ、次、私のね」
「味見は、んじゃ、オレっスね」

目の前の皿に向けて、完二がスプーンを振り下ろす。
そのまま豪快に掬い、豪快に口に放り込んだ。

「お、おい、そんな無防備に……」

心配する陽介を余所に、完二は口の中のものを咀嚼する。
しばらく噛んで味わって。

「……？」

首を傾げる。
そしてもう一口、二口。

「ちょ、ちょっと、何か言ってよ」

感想を中々言わない完二に業を煮やして声を上げる。

「いや…その……なんつんだ……？

”不毛な味”っていうか……」
「不毛！？
”不毛”って、味に使わないでしょ！？
おいしいの！？
どうなの！？」

ようやく完二から聞くことの出来た感想が”不毛”。
それに雪子は食って掛かる。
とりあえず危険物ではなさそうなので、総司もそれを一口食べてみる。
他の三人のオムライスとは違い、ケチャップなどのソース類はかかっていない。
食感は普通。
特別な味は、何も感じない。

「……？」

いや、特別な味どころか味そのものが全く感じられない。
素材の味さえない。
ご飯の味もしないし、卵の味もしない。
あるのは食べているという食感ぐらいだ。

「おいしくはないっスね……
なんかこう、”おふ”を生でかじったみてえな……
こんだけ色々入ってて、全く味がしねえって、ある意味才能じゃねえスか？」
「せ、繊細な味が分からないだけよ！」

ソースが掛かっていないタイプなので、総司としてはその分味を濃くしていると思っていたのだが。

これにケチャップをかけたらそのままケチャップの味だけがしそうだ。
菜々子が腕を伸ばし、雪子のオムライスを一匙口に運ぶ。
「…おいしいよ？」
「な、菜々子ちゃん……！」
菜々子の優しい言葉に雪子の目がうるむ。
「じゃ、じゃあ、次はあたしので」
三番手は千枝。
自身の皿を指し示す。
「うー…緊張するなー……
けど、絶対、うまいと思う！
今度こそ！」
「クマがいただきますー」
クマが元気よく宣言して掬い取ったオムライスを食べる。
スピードを緩めず食べ進めているので、これも危険物ではないようだ。
「ど…どう？」
「うん、まずい」
だがそのハッキリとした分かりやすい評価に千枝は絶句する。
クマは自身が食べていた皿を陽介と総司にも薦めた。
「自分で”まずい”つっといて、お前……」

文句を言いながらも陽介と総司はスプーンを伸ばす。

「あー…なるほど……」

一緒に口に運んだ総司には、陽介のその言葉が凄くよく理解できた。

普通にまずい。

多分、材料はあっているのだろう。

特殊なまずさはない。

卵の焼きすぎ、味付けの比率の失敗。

確かにこれは、ただまずいとしか言えない。

「や、ほら…でもさ、前のカレーに比べたら格段の進歩じゃん？」

「ふ、普通にまずいってのが、一番キツイから……

しかも、慰められた……」

千枝はうなだれる。

菜々子が千枝の皿にスプーンを伸ばした。

「これも、おいしいよ」

にこりと微笑んで菜々子は言うも、その声は少し震えている。

「…菜々子ちゃん！」

それでも千枝は嬉しそうだ。

その横で、雪子は自身のスプーンを伸ばして千枝のオムライスを掬い取った。

「あー、ほんとだ……」

それを飲み込んだ雪子が言う。

「ほんとだほんとだ、普通にマズイ、これ！
あはははは！」

ツボに入ったらしい雪子が爆笑する。
雪子は仲間だけでいる時はしょっちゅうこうして爆笑している。
昔は千枝の前だけでしかなかったそうだが。
本当に楽しそうに笑うのだが、マズイといわれた千枝は面白くない。
りせ作の赤いオムライスを指差した。

「じゃあ、りせちゃんのを食べてみなよ！
絶対、あたしのが美味しいんだから！」

笑いを引っ込めた雪子がりせの顔を見る。
りせは期待いっぱいの顔で雪子を見つめる。
雪子はりせのオムライスにスプーンを伸ばした。
それを口に含んで。

「……！！
う…うぼっ……」

バタン、と後ろに倒れ込んだ。
そのまま雪子は動かない。

「せ、先輩！？」
「一撃だ……」

完二が呟く。
雪子は一撃で仕留めると言っていたが、雪子のオムライスは驚きはあったが、一撃で沈める力は無い。
これはりせの勝利というべきだろうか。
しかし、はたして料理対決とはこういうものだっただろうか。

「ま…天城や里中のもウマくはなかったけどさ……
ブッ倒れはしないかな……ハハ……」

同じ事を思ったらしい陽介が総司の思いを代弁する。

「こっ…子どもには分からない味なんだもん！
大人の味なんだもん！
先輩たちが、お子様なんだもん……
私、私……」

りせは手で顔を覆い、泣き出してしまう。
菜々子はりせの皿にスプーンを伸ばした。

「ん……！」

口に入れた瞬間、菜々子が小さく呻く。
あわあわと牛乳を用意する茜の横で、菜々子が笑みを浮かべる。

「からいけど、おいしいよ」

その笑みは引きつり気味で、声も震えているけれど。

「菜々子ちゃん……！」

りせが顔を上げる。

「ねー、そうだよね！
菜々子ちゃんが、一番オトナ！」

泣き声から一転、りせはニコニコと菜々子に笑いかける。
そこに涙の跡はない。

「うっわ、嘘泣きキタ！」
「そう言や、先輩も作ってたっスよね？」

最後に残るは、総司の作ったオムライス。
黄色い薄焼き卵の上にケチャップがかかっていて、見た目はオーソドックスだ。
菜々子は茜から受け取った牛乳を少し飲んで、最後の一皿に向かった。

「お兄ちゃんの！
いただきまーす」

総司は既に何度か堂島家で夕飯を手がけている実績があるので、毒見はない。
菜々子は大きめに一匙掬って口に入れた。
中はケチャップライスではなく、醤油で味付けがされている。
バターの風味と醤油がさっぱりと食べやすい。
菜々子の表情が輝いた。

「すっごい、おいしい！
こんなオムライス、はじめてたべた！

すごい！　おいしい！」

総司のオムライスは見事に菜々子の好みに合ったようで、菜々子のスプーンは止まらない。
そして暫らくして。
カラン、と菜々子はスプーンを置く。
総司の皿は空になっていた。
菜々子は満足そうに息をつく。

「菜々子ちゃん、お腹いっぱいになった？」

千枝の言葉に菜々子は頷く。

「俺らは減ってるけどな……」
「なら食べる？
台所に残ってるよ、〝普通にマズイ〟のが！」

結局毒見分しか食べなかった陽介が言うと、千枝は茜が台所のテーブルまで下げた総司の以外の皿の方を示した。
その台所から、茜が大きなお盆を持って戻って来る。

「だいじょうぶだよ、ほら」

その上には、大皿に大盛りになっている焼き飯に、高校生組＋クマの人数分の小皿とスプーンが乗っていた。

「え？
これは？」
「のこったざいりょうで作ったヤキメシ。
オムライス四つだけだと、みんなはおなかいっぱいにはならない

と思ったから」
「ありがてえ！」

その言葉に一番に飛びついたのは完二だった。
いそいそと大皿を真ん中に置き、それに添えられた蓮華で小皿に分けて回していく。
茜は菜々子の食べ終わった皿とスプーンをお盆へ乗せる。

「とりあえず、空いたお皿とかはあたしがあらっとくから」
「あ、私達が使ったんだから、私達が洗うよ！」
「いいの。
作ってもらってうれしかったから。
そのおれい」

雪子の申し出を茜は断る。
それより折角用意したのだから、と焼き飯を示した。

「菜々子もいっしょにあらう！」
「うん、いっしょにあらおう！」

立ち上がって言う菜々子に茜は頷く。
総司は、茜の唇が少し腫れているのに気付いた。
そっと顔を近づけ、聞いてみる。

「……もしかして、食べたのか？」
「……うん。
自分のムダに高いゆうきが少しうらめしいよ……」

茜はぐったりしたように答え、遠い目をする。

「何よりもビックリしたのは、中和できるかな…って雪ちゃんのオムライスまぜたら、りせちゃんのオムライスの味すら全くなくなっちゃったことだけどね……」
「……」
どうやらケチャップをかけたらケチャップの味をかき消すタイプだったらしい。
りせの料理は雪子を一撃で仕留めたが、雪子の料理はそのりせの料理を一撃で仕留めたようだ。
「ま、ゆっくり食べてって」
気を取り直した茜はそう言って、菜々子と共に台所へと下がる。
「いただきまーす」
「おほー！
たいへんおいしゅうございますー」
千枝が元気に焼き飯を口に運び、クマも嬉しそうに頬張る。
ダンジョンでの弁当の時は食べることが出来なかったので、今回がクマにとって初めての茜の手料理だ。
完二はすでに小皿に取り分けた分を食べ終わり、お代わりをしている。
暫らく無言で食べ進め、ようやく会話する余裕が出てきた頃。
りせが口を開く。
それは自分達から現れた影の話だった。
「それにしても、後に入れられた人って絶対不利だよね。
何かズルい……私もみんなも見たかった！」
「そっか、俺らだけか、全員分見たの」

陽介が総司とクマを見る。
陽介の時は千枝はテレビの外で待っていたので、確かに最初に戦う事となった陽介の影を見たのは彼自身と総司とクマしかいない。

「ね、花村のって、どんなんだった？
もう時効でしょ、教えてよー」

頷く総司に千枝が強請る。

「皆と同じような感じだよ」
「ま、まーまー、いいじゃん！」

誤魔化すように話を遮った陽介は、ふと思い出したように総司に顔を向けた。

「って、そう言えばお前ん時、何も無かったんだよな」
「へ～…え、ホントかなぁ？
やっぱり先輩はトクベツな人？」

りせは首を傾げる。
総司は手に持ったスプーンを軽く振ってあの頃を思い出しながら口を開く。

「多分、初めてテレビに入った時には既にペルソナに覚醒してたからだと思う。
テレビに入る能力はペルソナと同時に手に入るみたいだし、認識できていなくても、降魔してる状態だったんだろうな。
茜ちゃんはシャドウから出てきたけど……アレは男の子だったし茜ちゃんの影ってわけじゃなさそうだった。

茜ちゃんもそういう意味じゃ何も起きてないと言えるだろうな」
「え？
シャドウから出てきたって？
何ソレ？」
「ああ、茜ちゃんの事情は詳しくは話してなかったっけ」
「そう言や聞いてないっスね。
ここが先輩の叔父貴の家で、先輩と茜ちゃんが世話になってる…
て事ぐらいで。
だから茜ちゃんも先輩の親戚だと思ってたんスけど」

雪子には茜に残っていた天城屋旅館の記憶の件で事情を話してい
るが、確かに後から参戦したりせや完二には詳しい話はしていない。

「茜ちゃんとはテレビ（あっち）の中で出会ったんだけど、その時シャドウに
守られていたんだ。
記憶がなくて……それでうちで保護することになったんだ。
正確には、刑事の堂島さんが保護してるという形なんだけど。
出会った時からペルソナには覚醒してたな」

りせは、総司の話す茜の事情に目を伏せる。
記憶というのは”自分”を形成する大事な物だ。
”本当の自分が分からない”。
その悩みを持っているりせには少しだけその不安が理解できた。

「そうなんだ…記憶が……
でも、これで一件落着したんだから、ゆっくり思い出せるね！」
「……
ああ、そうだな……」

総司は一つ頷く。

「ごっそさん！
うまかったぁ～」
「ホント、やっとまともなモンにありつけたっスね」

陽介と、既に大皿から直接蓮華でかき込んでいた完二が匙を置く。
そこに、丁度洗い物が一段落ついた茜と菜々子が皿を回収しに来た。

「おそまつさまでした」
「そだ。
ところでさ、提案があるんだけど」

全員揃ったところで陽介が立ち上がり、注目を促す。

「今度、お祭りあるだろ、商店街のさ。
あれ、みんなで行かないか？」
「あ、さんせい！」
「むほー！
ひょっとして浴衣クマか！？」

りせとクマが諸手を上げる。
茜と一緒に皿を下げに来た菜々子が小さく呟いた。

「おまつり……」
「ななちゃん、いっしょに行こ！」

その呟きに、茜が笑いかける。

「いっしょに、いーの？」

「もちろん」
「ほんと!?　わーい!!」

総司が頷くと、菜々子は小さく飛び跳ねて喜ぶ。
決まりだな、と陽介はニヤリと笑った。

「出店で買うと、大したモンじゃなくてもウマいんスよね、また」

完二は今食べ終わったばかりだというのに、すでに屋台の食べ物を思い浮かべてうっとりとしている。
祭りの日付は8月20日。
総司はカレンダーを一枚捲り、その日付に○を付けた。

／＊／

「早かったね。
菜々子ちゃんは？」
「もうねちゃったよ。
はしゃぎつかれたみたい」

普段、マヨナカテレビを見る為に訪れる時間より随分早く部屋に来た茜に総司が訊ねると、そんな答えが返って来た。
そう言う茜も少し眠そうで、総司はクスリと笑う。
茜はボフリ、と音を立ててソファに座る。
その手にはペルソナ全書。
回数は多くないが、こうして茜はマヨナカテレビを見る時以外でも総司の部屋に訪れていた。
4月に交わした、ペルソナ能力を鍛えるという約束を果たす為に。
総司はテーブルに腰掛けて茜と向かい合うとその手を取った。
集中する為に目を閉じていると、とても静かだ。

心を同調させ、精神を同期させる。
慣れてきた為か初めの頃より随分早くペルソナとの呼吸が合うようになり、そして具体的にその姿を見て取れるようになっていた。
瞼の裏しか見えなかった視界に炎が映る。
ランタンの、炎。
美津夫の影との戦いの時にも召喚したジャックランタン。
ペルソナとの同調訓練として行う複合召喚（ミックスレイド）はいくつかの種類があり、組み合わせは決まっている。
総司が保持しておけるペルソナには数に限りがあるので、合わせるのは自身の召喚可能なペルソナを全て保持している茜の役目だ。
総司の心に入ってきたのは青い帽子をかぶった可愛らしい霜の妖精、ジャックフロスト。
なぜかスタンドマイクを持って現れたジャックフロストはジャックランタンとショートコントを始める。
正直コントの内容はスベっているとしか言い様がないが、その様子は微笑ましい。

「茜ちゃんは、前はミックスレイド一人でやってたんだっけ？」

同調を終え、茜に訊ねる。

「そうだよ。
ワイルドじゃないと、たいおうするペルソナ用意できないし」

茜はそう言った後、少し考えてペルソナ全書のページを繰る。
開かれたのは”皇帝”のページ。
覚えのある名前のペルソナに、総司は声を上げる。

「タケミカヅチだ」
「うん。

この子がひつようなミックスレイドが一つあるから、かんじくんとも出来るかも」

ペルソナの容姿はその存在を知った時の自身のイメージによる。
茜のオルフェウスが女性の姿をしているように。
ペルソナ全書に描かれたタケミカヅチは、完二のそれと随分姿が違った。
完二のタケミカヅチは髑髏のペイントが施された黒い巨人で雷の形をした武器を持っているが、そこに描かれているのはいかにも日本神話から抜け出したような、髪を耳の横で8の字に結った剣を持った男だった。
総司と茜のペルソナは殆ど同じ姿をしているが、それは茜のペルソナ全書を見てイメージが固定されたからなのかもしれない。

「だけど、一人で二体召喚なんてどうやってたんだ？」
「しょうかんをほじょする道具があったんだよ。
でも、高いからあんまりランパツはできないんだけど。
使いすてだし」
「高いって……どれくらい？」
「ほうせき数コで一回使えるくらい」

その答えを聞いて、総司はうへ、と声を漏らした。
総司が近くで見たことがある宝石なんて、中高生向けのアクセサリーショップにあるような安いものぐらいしかない。
高価と評される宝石はテレビの映像や本の中の幻想扱いなのであった。
茜は本を閉じてソファから立ち上がる。
今日の訓練は終わり、という事だ。
正面に座っていた総司は頭がぶつからないように少し体を反らす。
立ち上がったことで近くなった瞳を覗き込む。

「……今回の件、どう思う？」

気がつけば、そう訊ねていた。

茜はもう一度腰を下ろす。

「今回のけん、って？」

茜が聞き返す。

総司は、ずっと心の中で燻っていた問いを口にした。

「久保美津夫……

犯人だと、そう思うか？」

女の意地？　料理対決！（後書き）

というわけで、美津夫への問答（回想）は次回へ持ち越し。

一人目の覚醒

■8／13

マグロ、卵、カッパ巻き。
ウニ、イクラ、大トロ。
定番な物から高級な物まで所狭しと並んでいるその風景は圧巻だった。

「いっやー、スーゴいっすね！
こんだけの大トロ、あんま見ないっすよ！」

ニコニコと食卓の中央に置かれた寿司桶のネタを吟味しつつ足立が興奮気味に言う。
何も起きずに霧が晴れた日の夜、堂島が注文したのだ。

「祝う時くらい、豪勢にいかないとな」

手元の缶ビールに熱い視線を送り、態度で早く始めようと訴える足立をスルーして堂島が言う。
突然のご馳走にポカンとなっていた菜々子が顔を上げた。

「おいわい？」
「あー、ほら、あれだ」

訊かれ、堂島はテレビの方を指差す。
付けっぱなしのテレビは昼前から同じニュースを繰り返していて、今もそのニュースを流していた。
キャスターが原稿を読み上げている。

『…は、”相手は誰でも良かった”、”ムカついた”、”主役になりたかった”などと供述しており……
容疑者の少年は、犯行は認めているものの、反省の色は全く見られないという事です。
他にも少年の供述は多くの点で一貫性がなく、支離滅裂で、精神鑑定が必要との指摘もあり……
警察では、事件の全容解明に向けなお慎重な対応を迫られそうです』

警察は美津夫を指名手配していたものの、あったのは証言と状況証拠だけ。
先日ようやく被害者の服から容疑者の指紋が出るという物的証拠を得て、立件できたそうだ。
これはそのお祝いらしい。
総司はニュースを聞きながら、美津夫が言ったことを思い出していた。
警察でもあの時の態度と変わっていないようだ。
影を倒し、美津夫を起こした総司達は美津夫が諸岡への殺人容疑で警察に追われている事、前の2件も疑われている事を話した。
美津夫はそれを肯定した。
諸岡金四郎だけでなく、小西早紀も、山野真由美も、全て自分が殺したのだと言ったのだ。
誰だって、よかった。
誰も彼もがむかつくヤツだったから。
町の騒ぎ見たろ?、と自身の罪を悪びれなく告白する美津夫に陽介は顔を歪めたが、悪態をつく前に、あの異変は起こった。
冷めた目で笑う美津夫を眺めていた影の姿が消えたのだ。
それを見て更に美津夫は笑っていた。
化け物が消えた、と。

テレビの中で消耗が激しい為か、美津夫の息は荒かった。
それでもその表情は愉悦に歪んでいた。

／＊／

「つかまえといて、今ごろハンニンじゃないかもって言っちゃうの？」

久保美津夫……
犯人だと、そう思うか？

総司のそんな問いに、茜はクスリと笑った。
確かに、その通りだと総司も思う。
りせは、打ち上げをすると実感すると言った。
だけど、違和感は大きくなるばかり。
終わったと湧く他の皆には言えなかった言葉だった。

「でも…何かが引っ掛かるんだ」
「……そうだね。
あたしもそう思うよ」

肯定する茜の言葉に総司は顔を上げる。

「もろおか先生を殺したハンニンは、ミツオくんだと思う。
でも、他のジケンはちがうんじゃないかな」
「聞いていい？」

あっさりとそう言い放つ茜に総司は訊ねる。

茜は一つ頷いた。

「だってミツオくん、ペルソナ使いじゃない」

「……？

分かるのか？

前聞いたときは探知系苦手だから分からない、って言ってたけど」

一度、総司は仲間以外のペルソナ使いがいたら判るかどうかを彼女に聞いていて、その時の返事は”否”だった。

それなのに、今は美津夫がペルソナ使いじゃないと言いきる事に総司は首を傾げた。

「雪ちゃんたちは、どうやってペルソナを手に入れてた？」

質問に質問が返ってくる。

ペルソナを手に入れたきっかけ。

正直、総司は自身がなぜペルソナを扱えるようになったのか分からない。

テレビに入る能力がペルソナ能力とセットになっているのなら、引越しをした直前か直後に唐突に目覚めたことになる。

稲羽に引っ越すための荷造りでテレビに触れたときは飲み込まれそうになったりなどしなかった。

雪子たちは……

「どうって……

暴走した影を止めて…本人が影を肯定して……あ」

そこまで言った総司の言葉が止まる。

もう一人の自分を自分だと認めた時、影は人格（シャドウ ペルソナ）へと変わっていた。

陽介の影はジライヤに。

千枝の影はトモエに。
雪子の影はコノハナサクヤに。
総司と茜を除いた全員がそうしてペルソナ能力に目覚めた。
だけど、美津夫は違う。

「うん。
ミツオくんはシャドウをみとめないで、シャドウは消えちゃった。
ミツオくんは、もう一人の自分にすらみすてられたの」

影は影のまま消えた。
影と人格がイコールで結ばれるのなら、影に見捨てられた美津夫はペルソナ使いではありえない。

「テレビの中に入るには、ペルソナ使いか、ペルソナ使いに入れられるかしないといけない。
もしかしたら、あたしや、そうじくんみたいにシャドウとの対話をしていないペルソナ使いだったのかもしれないけど……
正直…どうかな？
ペルソナ使いじゃないから、テレビの中に入れることが出来なかった。
そんなこと思いつくコトすらなかった。
だから、外で殺した。
ミツオくんがペルソナ使いだったかのうせいより、そっちの方があると思うんだ。
少なくとも、今はもうペルソナ使いじゃない」

長い考察を喋った茜は乾いた唇を舐めて潤す。
長話をする予定はなかったので飲物は用意していない。
茜はソファから立ち上がった。

「ミツオくんが本当にハンニンだったら、これで終わり。
もうあの世界を使ってのはんこうはできないから。
他にハンニンがいる場合でも、はんこうを重ねるのはむずかしくなったと思う。
ツミをかぶってくれる、かっこうの人があらわれて、つかまったから」
「じゃあ、事件はこれで終わる可能性もあるのか……」

茜が立ち上がる邪魔にならないように動いた総司は手を顎に添えて考えをめぐらせる。

「おかまいなしに続けるかのうせいも、もちろんあるけど。
見きわめる方法、何か考えなきゃね。
とにかく、しばらくは……」
「ああ。
考え付くまでは鍛えられるだけ鍛えて、ペルソナを強化していこう」

茜の言葉に総司は頷いた。
シャドウを倒し、経験を積むこと。
絆を深めてコミュニティを育てること。
犯人を特定できる方法、少なくとも、美津夫の他に犯人がいるのか確認する方法を考えなくてはいけなかった。

／＊／

ニュースが次の話題を流す中、足立がいかに警察が頑張ったのかアピールを続ける。

「や、すごいね科学捜査って！

布から指紋取れるなんて、普通思わないっしょ？」

凄さをアピールする為か、その動きはかなりオーバーだ。
その様子に呆れたように堂島は苦笑する。
そして、菜々子に優しく話しかけた。

「もうこんな怖い事は起きないから、安心しなさい」
「うん！」

菜々子は大きく頷く。
町で起こる事件に菜々子は不安を持っていたので、父親のその言葉は何よりも安心できるものだった。

「にしても、ホントふざけた奴ですよねー。
高校生のくせに連続殺人、それも死体ぶら下げるなんて…発想が大胆すぎますよ～」

乾杯するかと堂島に促されて、待ってましたとばかりに足立は喋りながら缶ビールのプルタブを起こす。
プシュ、と軽快な音が鳴った。

「けど、捕まって良かった～！
もうあれこれ疑わなくていいし！」

足立の声も浮き立っている。

「このまま野放しになってたらと思うと……」

そう。
犯人はまだ野放しになっているのだ。

事件は、まだ終わっていない。

■8／15

朝、総司は陽介からの電話で目を覚ました。
何かあったのかと思って飛び起きたが、バイトの要請で拍子抜けする。
しかし、月曜である今日から金曜までの期間、どうしても人手が必要で切羽詰っているらしい。
総司は学習机の上をチラリと見やる。
そこにあるのはいくつかの教科書とノート。
そして製本された冊子と数枚の原稿用紙。
美津夫をテレビの中から救助した後、少しづつ消化していった夏休みの宿題だった。
誰かがテレビに落ちている間は時間がかけられないから、とここ数日の殆どを使っただけあり、机に出された分は終わっている。
もしバイトの後に他の宿題を思い出しても何とかなりそうだと判断し、総司は陽介の要請を受け入れた。
決して、期間中毎日フードコートで奢る、という言葉に釣られたわけではない。

／＊／

炎天下の中、ジュネスのフードコートは夏の熱気だけでない暑さを纏っていた。
人口密度が高いのだ。
太陽が眩しく、そちらに顔を向けると目を開けていられない。
総司の側で客が立ち退いたテーブルの汚れを拭き取った陽介が溜め息をついた。

「ハァ……
たかがヒーローショーやるぐらいで、何でこんな人が……」

その言葉の通り、ここまでフードコートの人口密度が高まり、バイトを急遽増やさないといけなくなったのはジュネスの店長である陽介の父親がヒーローショーを企画した為だ。
特設ステージには”ネオフェザーマンショー”とある。
総司は昔は兎も角、今は見ていなかったので不死鳥戦隊フェザーマンシリーズの最新は”R”だと思っていたが、どうやらそれは一つ二つ前の情報で既に新シリーズは始まっていたらしい。
陽介は”たかがヒーローショー”と言っているが、娯楽施設の少ない稲羽にとっては格好の娯楽なのだろう。
家族連れだけでなく、かなり幅広い年代の人が集まっているようだ。

「あ！
そうじくん！　ようすけくん！」

声をかけられて振り返ると、手を振りながら歩いてくる茜と菜々子が目に入る。

「お、茜ちゃんに菜々子ちゃんも来たのか。
いらっしゃい」
「えへへっ」

陽介が身を屈めて歓迎すると、茜ははにかむ様に笑った。

「ヒーローショー見に来たの。
あかねちゃんにさそわれて」

「そうなんだ。
茜ちゃん、戦隊物好きなの？」
「うん！
でも、いっつも思い出してテレビつけたら次回予告なの……」

茜は残念そうに息をつく。
家事をやっている間に忘れてしまうのだろう。

「じゃあ、今日はしっかり観て楽しまなきゃね」

総司が言うと、うん、と茜は大きく頷いた。
茜の特設ステージに向ける目は菜々子よりもキラキラしている。
普段マメな専業主婦のように働いている茜が歳相応に見えた。

「いらっしゃ～い！
カキ氷、おいしいですよ～！」

千枝のよく通る声が、フードコートに響く。
茜と菜々子が声の出所をキョロキョロと探す。
声の主は、店舗エリアの側に立って客引きをしていた。

「ちえちゃんもバイトなんだね」
「ああ。
クマもな」

陽介は千枝の側を示す。
その指の先ではクマがなにやら動いている。
店舗の外で呼び込みをしている千枝とは違い、クマは店舗の中での仕事を割り振られているようだ。

「顔出してくるね」
「ん」
茜は言い残して菜々子と共に千枝の方へと向かう。
「キンキンに冷えたカキ氷で、一緒にヒーローを応援しよー！」
「ちえちゃん！　クマ！」
呼び込みを続ける千枝に声をかけると、それに気付いた千枝は明るく笑った。
クマも手に持ったピックを振って応える。
「おー、二人とも来てたんだ？
どうよ、カキ氷食ってかない？
サービスするよ」
「サービスするクマよー」
暑い中、キグルミを着て鉄板の前にいてもクマの動きはキレがいい。
言いながらもクマはよどみなく器用にピックを使い、たこ焼きをひっくり返していく。
「じゃあ、カキ氷二つ！
あたしは……ん～、レモンにしようかな？
ななちゃんは？」
「みぞれ！」
茜は目移りしながら、菜々子は迷いなくメニューを告げる。
千枝は頷いて声を張り上げた。

「了解！
カキ氷二丁入りま～す！！」
「ほいさぁ！！」

クマは流れるような動きでカキ氷用のカップを二つ用意した。
シロップは多め。
要所要所にシロップをかけられたカキ氷は、綺麗な山型に仕上がる。
レモンイエローの綺麗な山と、氷そのままの色をした眩しい山。
それぞれ受け取って、二人はストローで作られたスプーンで一匙を掬う。
スプーンは交差し、お互いの口の前へ。
差し出された氷のかけらを口に入れ、二人は笑った。

■８／１９

「おつかれー」

今日で、ヒーローショーは最終日。
よってバイトも今日で終わりとなる。
一足先に自分の持ち場を片付け終わった千枝が総司の横を通り過ぎる。
おう、と手を上げて総司は返事すると、額の汗を拭って息をつく。
モップを持ったまま辺りを見回して、やり残しがないか確認して掃除道具を片付ける。

「サンキュー、瀬多。
助かったよ」

千枝の出て行った扉から陽介が部屋に入ってきてそう言うと、バ

イト代の入った封筒を総司に手渡す。
受け取った総司はそれを鞄に入れて、背負う。

「ん。
じゃあ、帰るよ」
「あ…えーとだな。
途中まで、送る。
ちょっと、その…付き合って欲しくてさ」

歯切れ悪く、しかし真剣な表情で陽介が言う。
総司は首を傾げながらも頷いた。

「ん？
ああ、じゃあ行こうか」

時間的には夕方だが、夏の日は長い。
まだまだ空は高く、辺りは明るい。
河川敷を歩きながら、陽介はポツポツと話し始めた。

「俺さ……お前は、俺と同じだと思ってたんだ。
都会からこんな田舎に来て、つまんねーって不貞腐れてる…って」

総司は陽介の言葉に耳を傾ける。

「けどお前は来て早々、ペルソナとか出して……
リーダーで、人が集まってくる…ヒーローだ。
俺は、そんなお前が好きで、自慢で……
けど同時に、うらやましかったみたいだ……」
「”みたい”って？」
「俺は、気付いてなかった……」

少し前を歩いていた陽介は、総司に振り返る。

「お前は、さ。
俺の”特別”なんだ」

そして、面と向かってそう言った。
陽介は、河川敷の道路から下の川原に降りる階段を示して先に行く。
降りながら言葉を続ける。

「それに気付いた時、分かったんだ。
俺は多分、誰より、お前に認められたかったんじゃないかって…
…」

水面は、まだ高い日の光に照らされて眩しく光っている。
その眩しさに、総司は目を細める。

「だから…瀬多」

陽介は、もう一度振り返った。

「俺を殴ってくれ！」
「……え？」

唐突なその申し出に、総司は戸惑った声を上げる。
陽介はずい、と身を差し出す。

「俺ん中にある、ぐちゃぐちゃしたもん全部、吹っ飛ばして欲しいんだ。

俺は、お前と対等でいたい。
肩を並べていたい。
だから……」

殴るまでテコでも動かなそうな陽介に、総司は一つ溜め息をついた。

「分かった」

総司は手首を傷めないように、ゴキリと手を鳴らして振りかぶる。

「行くぞ！」

右手を振りかぶり、陽介を殴る。
陽介はくぐもった声を漏らし、倒れないように足を踏ん張った。
総司は肩に引っ掛けた鞄をベンチ代わりに立ててある短い丸太に鞄を放り投げて構えをとった。

「んじゃ、次はお前の番だ」
「え……
お、俺はお前殴る理由ねーし……」

慌てたように陽介が言う。

「一方的に殴るだけじゃ対等じゃないだろ。
殴り合えば、対等だ」
「……」

総司の言葉に陽介は言葉を引っ込める。
目を閉じて、ゆっくりと開く。

「そっか……分かった。
”対等”なら…そうだよな」

陽介は呟いて拳を握る。

「おっし、行くぜ！
本気で来いよ！」

言って、二人は同時にお互いに飛びかかった。

／＊／

茜は非常に満足そうな表情で河川敷を歩いていた。
その背にはいつものようにペルソナ全書を収めたリュックを背負い、その手には食材の詰まったエコバッグが握られている。
その彼女の隣を歩くのは、今日茜に付き合っていたミワだった。
ヒーローショーの開催期間中、毎日のように茜は色んな人を誘い観に行っていたのだ。
ショーの感想を興奮気味に喋りながら、二人は歩く。
ふと、騒がしさに気付いてミワが川原を見下ろした。

「あかねちゃん！
あそこ、ジュネスのお兄さんがケンカしてる！」
「え？」

”ジュネスのお兄さん”というのは陽介の事だ。
ジュネスの店長の子と知られている陽介は、ジュネスを絡めた名で呼ばれることが多い。
下手するとジュネス＝陽介という公式が成り立つほどだ。

「もう一人は……ななこちゃんのお兄さん？」
「ホントだ。
そうじくんだ」
「どうしよ……
大人の人に言ったほうがいいかな？
ひゃくとうばん？」

焦ってキョロキョロと辺りを見渡すミワに茜は苦笑する。

「だいじょうぶだよ。
男の人はね、ああやってゆうじょうをたしかめるんだって。
本で読んだよ」
「そ…そうなの……？」
「うん。
夕方、赤くそまった海辺でなぐりあって、〝お前、強いな〟、〝お前こそ〟…ってやるんだって」
「ふうん……
男の人って、かわってるね」

茜とミワが見守る中、総司と陽介の殴り合いは終盤へと移行していた。
二人が同時に振りかぶり、同時にお互いの顔へと向かって拳が繰り出される。
腕と腕がすれ違い、拳が頬へとめり込む。

「おおー……
クロスカウンターだ」
「えっと……
たおれちゃったけど…いいのかなぁ？」

心配そうにミワが言う。
茜はパタパタと手を振った。

「いいの、いいの。
あたしがついとくから」
「そっか。
あのお兄さん、ななこちゃんのお兄さんだもんね。
あかねちゃんがいるならだいじょうぶだね」

茜の言葉にミワは納得して胸を撫で下ろす。
二人はここで別れることにして、茜は川原へと下りる階段に足をかけ、振り返った。

「じゃあね」
「うん。
またね」

手を振って別れ、茜は階段を下りる。
総司と陽介は、並んで大の字になって倒れていた。
邪魔をしないように、茜は階段の一番下の段に腰掛ける。

「いでで……」

陽介は、最後のクロスカウンターで殴られた頬を撫でた。

「お前のパンチ、重すぎんだよ……
一瞬、お花畑が見えたじゃねーか……」
「本気で来いって言ったの、花村だろ」

総司が言うと、陽介は笑った。
その拍子に痛んだようで、少し表情が硬い。

「ふ……
んだな……サンキュな……
なんつーか、その……」

だが、スッキリはしたようだ。

「……いいよな、言葉なんか。
これ、お前にやるよ」

陽介は、ポケットに入っていた絆創膏を取り出して総司に渡す。

「血、出てたら貼っとけ。
んでまた…たまにはケンカしようぜ」

倒れたまま、陽介は空を見る。
遠くに入道雲があるが、真上には何もない。
どこまでも透き通った青い色だけがある。

「はぁ……空、高いな」
「ああ」
「先輩、見てっかな……
俺らんこと、笑ってるかな」

目を細めて陽介は空に手を伸ばす。

「先輩……俺、ちゃんと生きるから。
自分ごまかさずに、だまさずに……

今日みたいな日も、前みたいにくすぶって過ごす日も、大事な1日……」

そう言って笑う陽介の表情はとても優しい。

「先輩が生きられなかった1日だから……
ここで、俺、生きてくから」

その言葉と共に、空よりも深い青い炎が陽介を包んだ。
ペルソナカードを破壊した時に現れる、青白い光。
陽介は驚いて身を起こす。
総司も寝転んだまま陽介に視線を向ける。
見守る中、炎の中にジライヤが具現化した。

「ジライヤ？」

口がなく、目も小さな穴が開いているだけのジライヤの表情は分からないが、微笑んでいるような気がする。
弱さを受け入れ、乗り越えた強い意志が、新たな力を呼び起こす。
ジライヤが光に包まれ、その光が収まった時、そこにいたのはジライヤではなかった。

「変わった……？」

総司が呟く。
そこにいたのは、刃の輪に体を通した、赤毛を逆立てた男。

「まさか…ワイルドに？」

降魔するペルソナを変えるのはワイルドだけ。

そう考えた総司に声がかかった。

「ちがうよ」

「……茜ちゃん！？」

座っていた階段から立ち上がり、近付いてくる茜を見て総司は上半身を起こす。

茜はクスクスと笑い声を上げた。

「夕方の水辺でなぐりあいなんてはじめて見た。

空が赤くそまってなくて、海辺でないのは残念だけど。

つうほうされそうだったよ？」

見られていたのか、と総司は赤くなる。

頬を掻いて、茜に訊ねる。

「はは……

それより…〝違う〟って？」

「これは、かくせい。

ペルソナは、自分の心。

心の成長は、ペルソナの成長。

ジライヤは、上位のそんざいに転生したんだよ」

茜はジライヤが変化したペルソナを見上げる。

眩しそうに目を細めて、陽介に向き直った。

「ね、ようすけくん。

新しいキミのペルソナの名前、教えて？」

ペルソナが陽介の中に溶け込む。

目を閉じて陽介はそれを受け入れる。

「スサノオ。
もう一人の俺の名前は、スサノオだ。
大事なものを守る、新たな力……
へへっ、上等だよ」

そして隣に座る総司に顔を向けた。
拳を突き出す。

「毎日笑って過ごせるように……
頑張ろうぜ、相棒(総司)」
「ああ、相棒(陽介)」

総司は応えて、その拳に自身の拳を合わせた。

一人目の覚醒（後書き）

今回陽介の覚醒イベントを書きましたが、後はクマだけ書く予定です。
特に女性キャラはカップリングに繋がってしまうので書く気はありません。
文章にしてないところで覚醒します。
ご了承ください。
あ、後このＳＳでは総司の事を苗字で呼んでるキャラは、覚醒すると名前で呼ぶようになります。

夏の祭り（前書き）

前回、後書きで書きません（キリ）と言った覚醒イベントですが、
複数の方から書いて欲しいとありがたい感想を貰ったので書くことにします。

皆さんはＰ４ＵのＰＶ見ました？
鋼のシスコン番長ｗｗｗｗ
まさに公式が病気。
ここでナナコンと言われなかったので、このＳＳではシスに茜を入れることが出来ますね（´∀`＊）

夏の祭り

■８／２０

総司は手に持ったパンフレットを広げる。
普段町を歩き回っている総司だが、これから行く所は初めての場所なのであらかじめこういう物を用意してもらっていた。
下手に地図を書いてもらうより、この方が手間もかからず分かりやすい。
何故なら、目的地は大きく紹介されている場所だからだ。
”天城屋旅館”。
それが総司達の目的地だった。
右手にパンフレット。
左手に紙袋。
右側に茜。
左側に菜々子。
二人を連れて初めての道を歩いているのは、今日の祭りの為だ。
女性陣は浴衣を着るらしく、雪子や旅館の仲居が着付けしてくれるらしい。
総司が手に持っている紙袋の中身は二人分の浴衣セットなのだった。

「あ、見えてきた！」

菜々子が言い、パンフレットに視線を落としていた総司は顔を上げる。
パンフレットに掲載されている写真と同じ門構えが見えてきていた。
古い色合いは歴史を感じられる。

もう一息、と足を進めると、何やら揉めている気配に気付いた。
玄関先で、雪子と男達が何やら話しているようだ。
だが雰囲気が穏やかではない。
総司達は急いで門を潜り、駆けつけた。

「真面目な旅番組で、私と母が映らないと言うからＯＫしたんですよ？
それなのに本当はワイドショーだなんて……！」

雪子が声を荒げる。
男達は三人で、ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべている。
先頭に立つ男こそスーツだが、残り二人は薄手のパーカーを着ている。
そのロゴはテレビ局のものだ。

「選り好みなんてしてる余裕なんてないっしょ？
呪われた旅館の次期女子高生女将さん？
僕達は旅番組なんかよりずっといい企画を持って来てやったんだよ？」
「呪われた…旅館？」

雪子はその物言いにムッとした表情を浮かべた。
だが、テレビ局の男達には雪子の感情の変化には興味がないようだ。

「例の事件、もちろん知ってるよぉ。
死んだ山野真由美が泊まってたって。
あれから、町の観光客も減って、おたくらも大変なんでしょ？
だからさー、視聴率とれたほうがいいっしょ？
旅番組なんかじゃダメダメ！」

テレビ局の男は手を広げて力説する。

「”あの呪われた旅館は今！
女子高生女将のはずかし奮闘記！”
…このぐらいの企画じゃなきゃね」

「は…はずかし奮闘記……？
意味がよく……」

「雪ちゃんには大役をお願いしたいなぁ。
温泉の紹介に、入浴シーン撮らせてくれない？」

断るはずがないとでも言いたげに語るテレビ局の男。
好色そうな目を雪子に向ける。
雪子は怯えたように一歩下がった。

「現役女子高生女将の熱いサービス！
うーん、これ数字取れると思うなぁ」

「それ、絶対イケますよぉ！」

自分に酔う男に追随する、軟派なパーカーの男。

「なわけないだろ。
変態オヤジ」

総司が苛立ちを隠さないで声をかける。
その横では茜と菜々子も冷たい目を男達に向けている。
一斉に視線が総司に向いた。
雪子がホッとしたように、少し肩の力を抜く。

「……！

瀬多くん……」
「何だぁ？
関係ない奴は引っ込んでろよ」

しっしっ、ともう一人のパーカーの男が手を振る。
だが、ここで引き下がるつもりは総司にはない。

「客だ。
こんな所で…営業妨害だぞ」
「と…とにかく、お引取りください。
取材はお断りします」

三対一の状況から脱出したことで、雪子が声を上げる。
テレビ局の男が顔を顰めた。
断るはずがないと本気で思っていたらしい。

「お断りぃ？
ったく、これだから子どもは……
テレビの力を知らないのかな？
ま、こんな田舎の高校生じゃ無理もないけど」

溜め息をつき、テレビ局の男は肩を竦めた。
偉そうに上から目線で話を続ける。

「僕らが盛り立ててやろうって言ってんの。
天城屋旅館、お客減ったままでいいの？
次期女将さんなら、賢明な判断が出来ると思うけどなぁ」

男は天城屋旅館がいかになってないかを語る。
その言い分は神経を逆撫でするようなものばかりだ。

老舗なんて古いだけ。
料理はチマチマしてて地味。
仲居は金を握らせないと、ロクなサービスをしない。
そんな、狭い価値観の意見をさも常識のように言い募る。
挙句の果てには、仲居全員”嬢”にして、フトン敷いてそのまま入ってきちゃうぐらいのサービスを企画しなきゃなどと言い出す始末。

「いい加減に……」
「……んじゃないわよ」

聞くに堪えない台詞に総司は声を荒げようとするが、それは雪子の呟きに止められた。
喋り続けていたテレビ局の男も雪子に視線を向ける。
雪子が、吼えた。

「侮辱するのもいい加減にして！」

三人を睨みつけ、強い口調で宣言する。

「誰がそんな旅館なんかに……！
あなた方の局の取材は、今後一切……
とにかく、断固拒否します！」
「……生意気なガキだなぁ！
そっちがそうなら、アンタの暴言、報道しちゃうけどぉ？
サービス業としてはあるまじき……」

常識だと思っているらしい自身の意見を跳ね除けられた男は不機嫌を隠そうともせず声を上げる。
そして、これで言う事を聞くだろうと脅しにかかってきた。

男は歪な笑みを浮かべる。
自身が上なのだと確信する笑み。
それを。

「どうぞ、存分に報道なさってください。
その代わりこちらから、番組スポンサーに抗議しますから」

雪子は切って捨てた。

「ス、スポンサーはヤバくねっすか？」
「……ケッ！」

うろたえたように軟派なパーカーの男が言うと、舌打ちをしたテレビ局の男は肩をいからせて玄関を出て行く。
三人がいなくなり、雪子はホッと息をついた。

「何か…みんなのこと悪く言われて、カッとなっちゃった。
わ、私、怖かった？」
「いや、カッコよかった」
「うん、カッコいい！」
「スッキリしちゃった！」

総司や菜々子、茜が口々に言うと、雪子は少し赤くなって俯く。

「そ、そう？
よかった……」

そして、旅館の中へと視線を向ける。
綺麗に掃き清められた広いロビー。
静寂が戻り、空気が澄んだ感じがする。

雪子は柔らかい笑みを浮かべた。

「言い返そうとしてくれてたでしょ……？
その……ありがと」

礼を言い、雪子は総司達が来た理由を思い出してスリッパを勧める。

「っと……
もう千枝達、中だよ」
「ああ、じゃあ頼む」
「うん」

総司は頷く雪子に手に持っていた紙袋を託す。
男性陣は先に祭りの会場で一通り見て回る事になっていて、後でここで着替えた女性陣が合流する手筈になっている。
勧められたスリッパを履いて、茜と菜々子は振り返った。

「楽しみにしててね！」
「お兄ちゃん、また後でね」
「ああ、また後で」

／＊／

雪子に付いて旅館の中を歩く。
茜はキョロキョロとはぐれない様にしながらも内装などを見て回る。
ロビーには大きなテレビ。
かなり大規模な建物で、エレベーターも設置されている。
歴史を感じさせる部分はそのままに、だけど不自由のないよう手

は加えてあった。
調度品、照明、間取り。
所々が記憶の端々に引っ掛かる。
やはり、ここに来た事があると茜は確信した。
戦闘に関する事は兎も角、日常に関する事はまだ朧げな部分が多い。
記憶のピースがまた一つ嵌った。
雪子がT字路になった廊下を曲がり、それを追って、かかっていた暖簾を潜る。
そこからは全く記憶に触れなくなる。
暖簾からは雪子の自宅となっている母屋らしく、そのためだろう。
客として旅館の方にだけ関わったのは確かのようだ。
雪子が襖を開けると、和服を着こなした仲居に浴衣の着付けをしてもらっている千枝が気付いて顔を上げた。

「お、来た来た」
「おかえり、雪ちゃん。
そして、いらっしゃいお譲ちゃん達」
「おじゃましまぁす」
「こ、こんにちは」

仲居に笑いかけられ、茜と菜々子が挨拶する。
りせはもう着終わっていて、帯の位置を微調整していた。
雪子は部屋の奥を示す。
続き部屋の襖が開いているので空間はかなり広い。
奥は雪子の部屋のようだ。
新しい机に雪子は総司から受け取った紙袋を置く。
その机にはデスクライトが取り付けられ、参考書が何冊かとペン立てが置かれていた。
参考書は夏休みの宿題関係のものではなく、インテリアコーディ

ネーター等の資格関連の物だ。
茜の視線に気付いた雪子が小さく微笑む。

「一人暮らしを始めるなら、仕事しなきゃいけないから。
資格もってたら有利かな、って」

雪子の影が語った家から出たいという願い。
旅館なんて潰れた方が、と吐露された言葉。
それは、確かに雪子の想いだった。
だが今までのように、誰かが連れ出してくれるのをただ待つというのをやめた。
自分自身の足で出ていけるように最近雪子は資格取得の勉強を始めていた。
総司に天城屋以外の職場を知らないからと言って家で出来る内職のバイトを紹介してもらい、お金も貯めている。
全てはここから出て、一人暮らしを始めるための準備なのだ。
こうして着付けの手伝いなどをかって出てくれて良くしてくれる仲居達や、あまりにも危険な雪子の料理修業を慌ててフォローしようとしてくれる板前達の事を裏切ろうとしているのに。
それでも。
雪子は千枝の浴衣の帯を絞めている仲居にチラリと視線を向けた。

「やっぱりここは私のいていい…私の家なんだよね……」

それでも、旅館を貶められる事には我慢ができなかったのだった。

／＊／

着替え終わった茜達は、天城屋旅館のマイクロバスで祭り会場へと向かう。

小規模ではあるが、稲羽で唯一の祭りとして天城屋旅館からも商店街前までのバスが出ていて、それに便乗する形だ。
普段人通りのまばらな商店街も、祭りの開催される二日間は華やかだ。
道の両端に屋台が並び、吊り下げられた提灯が辺りを照らす。
一定間隔で置かれたレコーダーからは御囃子が流れ、気分を盛り上げる。

「ね。
わたあめ、どれがいい？」

雪子が屋台の一つを示す。
わたあめとのぼりに記されたその屋台の脇には子供向けキャラクターの袋に入ったわたあめが展示されている。

「え、でも……」
「いいの。
さっき旅館で褒めてくれたお礼」
「じゃ、じゃあ……」

遠慮しようとした茜に雪子が言い、茜は”ネオフェザーマン”を選ぶ。
菜々子は”魔女探偵ラブリーン”。
ありがとうと言う二人に雪子は微笑んだ。
男性陣との待ち合わせは神社の賽銭箱前なので、屋台はその綿あめ以外は冷やかしに止めて商店街を歩く。
履き慣れない下駄に茜や菜々子や千枝は小まめに下を見たりして転ばないように気を張っているが、着物とセットで慣れている雪子、人に見られる事に慣れているりせはさすがに不自然さが見当たらない。

鳥居をくぐり、茜は拝殿の屋根を見上げた。
僅かにキツネの尻尾が揺れているのが見える。
参拝客が増える事、賽銭が増える事が喜びのキツネにとって、この祭りは一年を通じて一番楽しく嬉しい書き入れ時なのかもしれない。
賽銭箱の前でかき氷を食べていた総司が境内に入ってきた茜達に気付き、手を上げる。
先に集まった四人は既にそれぞれ手に食べ物を持っていた。
総司とクマがかき氷、空腹だったらしい陽介と完二はフランクフルト。

「ごっめん、遅くなっちった」

そう言って近づいてくる千枝の声に、夢中になってフランクフルトにかぶりついていた完二も近付いてくる女性陣に気付いて顔を上げる。
だが、視界に女性陣の姿が入ると慌てた様子で目を逸らした。
その顔は赤い。
浴衣は全員とても似合っていた。
千枝は白地で足元に黄色のグラデーションの入ったもので、黄色い小さな花と赤い水玉、そして四つ葉のクローバーの模様が入っている。
普段カジュアルな格好が多いので、尚更色っぽく見える。

「みんなのお着付けに手間取っちゃって」

雪子は藍染の落ち着いた色合いで紫陽花が白く染め抜かれている浴衣。
黒いストレートヘアは和装によく合い、立ち振る舞いも自然で美しい。

「でもこれ、中に巻いちゃうから、言うほど涼しくないのよね」

りせのは深い赤に白で金魚が描かれていて、とても華やかなのに涼しげに映る。

仕事柄色々な衣装を着慣れているからか、浴衣も見事に着こなしていた。

「歩きにくい……」

「どう？」

菜々子と茜はおそろいの浴衣。

薄紅と白の市松模様。

髪の色が似ているのでまるで姉妹のようで微笑ましい。

「似合ってるよ、茜ちゃんも菜々子ちゃんも」

「…えへへ」

「やった♪」

総司が感想を伝えると、二人は嬉しそうに笑って顔を見合わせた。

「ナナチャン、可愛ーよ！

クマさ、ナナチャンにゾッコンラブ」

「えへへ、ありがとう」

クマが菜々子に笑顔を向ける。

クマは打ち上げの時に遊ぶ約束をしたことで、菜々子を特に気に入っているらしい。

向けた笑顔はキラキラと輝いて、今にも花が飛びそうだ。

「完二、なにそっぽ向いてんだ？
まさか…恥ずかしくて見れねーとかか？
小学生かよ……」

未だにそっぽを向いている完二に気付いた陽介がフランクフルトを齧りながら呆れたような視線を送る。

「そ、そんなんじゃねっスよ！！」
「あはは、完二、かわいー」

裏返った声で否定する完二をりせが笑う。
その背後でよう、と声がかかり全員がそちらを向いた。

「面倒見てもらって、すまんな」

立っていたのは堂島だった。
堂島は最近帰りが早い。
久保美津夫を逮捕したことによって稲羽警察署も平常運転に戻っていた。
菜々子が堂島に駆け寄って、手に持ったわたあめの袋を見せる。

「わたあめ、買ってもらった！」
「そうか…よーし、なら次は、俺と射的でもやるか？」
「あ、やりたい！」
「うん！　するー！」

堂島の言葉に、茜が手を挙げ、菜々子も頷く。

「こっからは子ども達は引き受けよう。
町が賑わうなんて年に何度も無いからな。

お前らも、楽しめよ」

総司達に言い、堂島は背を向ける。
射的の屋台は商店街の方にあるようだ。

「じゃあ、行ってくるね」
「また後でね」
「おう」

茜と菜々子は堂島の後を追う。
ゆっくり歩いている堂島を追い越して、二歩程前を走る二人。
下駄と浴衣なのでスピードは出ていないが、それでも浴衣の布が足に絡んでいて後ろから見ている堂島は気が気ではない。

「走ると危ないぞ」

堂島が声をかける。
その声とほぼ同時に、石畳の凹凸に足を取られた菜々子がよろける。
それを倒れる前に茜が菜々子を支えて助けた。

「ほら、言わんこっちゃない」
「えへへ……」

堂島の言葉に菜々子は振り返り、誤魔化すように笑う。
今度はこけないように堂島と並んで歩く。
射的は丁度プレイしていた人が撃ち終わったところで、三人並んでオモチャの銃を手に取ることができた。
コルクを弾としてつめて発射するタイプだ。
堂島が三人分のお金を払うと、店主が背の低い茜と菜々子の為に

足場用の木箱を出してくれた。
礼を言ってコルクを銃口につめる。
弾は三発分。
棚には大小様々な景品が並んでいた。

「よし、手本を見せてやる」

堂島が銃を構える。
引き金を引くと、軽い音と共にコルクが発射される。
飛んだコルクは棚に置かれた小さな箱を倒した。

「わぁ！
お父さんスゴイ！！」

菜々子が飛び跳ねて喜ぶ。
店主が倒れた箱を手に取り、代わりの的を新たに置くと手に持った箱を堂島に渡した。
煙草の形をした駄菓子だ。
自分で一本を咥え、茜と菜々子にも一本ずつ渡す。

「よーし、負けないぞー」

貰った駄菓子をポリポリと齧りながら茜も銃を構える。
茜もかつては毎日のように引き金を引いていたのだ。
負けられない。
もっとも、的は自分自身で銃から弾が出たりはしなかったのだが。
軽い音と共に飛んだコルクはチョコレート菓子の箱の上の方に当たり、倒れる。

「当たった！」

茜が快哉を叫ぶ。
その横で菜々子が引き金を引くが、それは何もない空間を横切った。

「あー…外れちゃった……」
「まあ、初めてだと難しいかもな。
菜々子、どれが欲しい？」

堂島に聞かれ、菜々子は驚いたように顔を上げる。

「えっ！？
……えーと…あれ」

しばらく棚の商品に視線を彷徨わせ、菜々子は指差した。
それは、この店の一番ではないものの大物で、ぬいぐるみだ。
茜のよく知る、青い帽子をかぶった霜の妖精、ジャックフロスト。
非売品で、クレーンゲームの景品や、こういった祭りのゲームでしか手に入れることが出来ない。
茜も昔、観賞用とプレゼント用に複数手に入れるためにクレーンゲームにつぎ込んだ記憶がある。
恐らくペルソナとして召喚するジャックフロストがぬいぐるみそっくりなのは、その姿がジャックフロストとしてイメージが固まっているせいだろう。

「よっし」

堂島は頷いて銃を構える。
コルクは見事、ジャックフロストの頭に当たった。
だが、軽いコルクでは威力不足だったようだ。

大きく揺れはしたが、それだけ。
倒れなければ景品は手に入らない。

「あー、惜しい」

固唾を呑んで見守っていた菜々子が悔しそうな声を上げる。
堂島はもう一度コルクを銃口に詰めた。
コルクの乗っていた銀色の皿の上はそれで空っぽになる。

「後一発か……」

呟いて狙いを定める。
狙いは先程よりも少し上。
揺れ幅が大きくなれば倒れる可能性は上がる。
軽い音。
コルクは狙い通りにジャックフロストの帽子に当たった。
大きく揺れる。
だが、僅かに足りない。
その時、軽い音と共にもう一発コルクがぬいぐるみの頭に当たった。

「えっ？」

声を上げて堂島が横を見ると、茜が銃を構えていた。
銃口にコルクはない。
揺れ幅が最も大きくなったところでもう一押しされたジャックフロストが倒れる。
店主はジャックフロストを茜に渡した。
それをそのまま菜々子に渡す。

「はい」
「いいの？」
「うん。
どうじまさんと、あたしから、ななちゃんへ」
「お父さん、あかねちゃん…ありがとう！」

菜々子は受け取って嬉しそうに堂島と茜に笑いかけた。

「どういたしまして」

茜は応えながら皿の上に最後に残ったコルクを銃口に詰める。

「よし、残り撃っちゃお。
あたしもまだ後一発残ってるし」
「うん！」

菜々子も頷いて、二発目の用意をする。
その様子を、優しげに堂島は眺めていた。

「……こうしてると姉妹みたいだな」
「え？」

呟きを聞いて茜が顔を上げる。

「いや、なんでもない。
ほら、さっさと撃ってしまえ。
たこ焼き、食べに行こう」
「「はーい」」

二人は返事をして銃を構える。

結局、茜は三発目は商品を掠めるだけに留まり、菜々子は三発目でようやく商品に掠らせる事に成功した。
堂島が宣言した通り、たこ焼きを買うために射的の屋台を後にする。
前を歩く自身と同じ浴衣を着た菜々子を眺めながら茜は歩く。

「……ふみゅ」

呟いて、茜は自分の浴衣の揺れる袖を見る。
くるり、と一回転。

「……どうした？
茜、行くぞ」
「はぁい」

立ち止まった茜に堂島が声をかける。
それに明るく返事をして、茜は二人を追いかけた。

装備の選択（前書き）

番外編として考えていた話を本編に突っ込みました。
なので多分にギャグ要素が含まれています。

装備の選択

■8／22

夏祭りも終わり、夏休みも残り僅か。
そんな中、茜がテレビの中に行きたいと言いだした。
弁当も用意するから、と気合の入れようで。
先日話したペルソナ能力強化の件かと総司は思い了承したのだが、そうではなかったらしい。
茜の頼んできたルートを全てこなすとなると節操無しにダンジョンを巡ることになるので、否応無しに実力は上がりそうではあるが。
標的は決まっているようで、法則性があった。
倒すと布地を残す場合のあるシャドウ、他は銀塊や装飾品に使えそうな物を残すシャドウがそれだ。
茜は留守番中に暇になるとそういった物で裁縫しているので、その為なのだろうとあたりをつける。
浅い領域から深い領域へ進んでいくごとにシャドウは強くなっていく。
初めの方は精神力の温存の為に召喚せずに武器だけで凌いでいたが、流石に強くなってくると難しい。
中には物理攻撃が効かない個体もいるのだ。

「行くぜ……吼えろ、スサノオ！！」

陽介が青白く光るカードを破壊する。

「”マハガルーラ”！」

現れた赤い髪の男が腕を振るうと強風がシャドウの群をなぎ倒す。

シャドウが残らず消滅し、陽介が息をついた。
安全を確認し、スサノオを送還する。

「え、ちょっと。
今のペルソナ何よ？
ジライヤは？」

千枝が見慣れないペルソナに驚いて声を上げた。
総司がペルソナをしょっちゅう入れ替えるので彼が見慣れないペルソナを召喚しても驚かないが、今まで総司と茜以外がペルソナを変更して召喚したことはない。
驚くのも無理はなかった。

「ジライヤがスサノオになったんだよ。
茜ちゃんは”覚醒”だって言ってた。
得意魔法とかには変化ないみたいなんだけどさ、耐性は変わったぜ」

陽介は自身の胸を押さえる。
心の奥にスサノオはいる。
風はもう陽介には効かないし、太陽神として知られるアマテラスの弟だからか炎にもある程度の耐性を持っている。
何より、雷撃という弱点がなくなったのが大きいだろう。

「ま、これは俺の成長の証ってわけだ。
なあ、相棒！」

陽介は、言って総司と肩を組む。
それを受け入れている総司を見てりせは頬を膨らませた。

「え〜、なんかズルイ！
それに夏祭りの頃から花村先輩、センパイの事名前で呼んだり妙に親しげだし」
「そりゃ、俺とこいつは親友だもんよ」
自慢するように言う陽介をりせは一瞥し、総司にすり寄る。
「ね、センパ〜イ！
私もセンパイのこと…そ・う・じ！　って呼びたいなぁ」
「うわ……
この子、マジでスゲー……」
今にもハートを飛ばしそうな甘ったるいりせの声に、千枝は引くことしか出来なかった。

■8／27

茜は店の前で体を揺すってリュックを背負い直し、引き戸になっているガラス戸を開ける。
巽屋に茜は来ていた。
完二から頼まれていた物が出来たと呼び出されたのだ。
完二の母親に挨拶と取り次ぎを頼み、完二が来るまで、と店の中を見て回る。
相変わらず美しく染められたハンカチや和風の小物が多いが、一部のコーナーが様変わりしていた。
そこに展示されていたのはあみぐるみだった。
そこだけ妙にファンシーな空気が漂っている。
付属の小物類も充実していてとても凝った作りだ。
「ふふ、それ、完二が作ったのよ」

戻ってきた完二の母親が、茜が手に取ったあみぐるみを見て嬉しそうに話す。

「かわいいね！」
「ほ、ほら、それよりアレ出来てっから……」

赤い顔でそっぽを向いたまま完二は茜を促す。
茜の背後で、再びガラス戸が開いた。

「やっほー。
茜ちゃん見えたから来ちゃった。
何やってんの？」

入ってきたのはりせだった。
茜は手に持ったあみぐるみを見せる。
ちょっ、と慌てたように声を上げる完二。

「今日は、ミシン借りに来たの。
どうじまさんち、ミシンないから。
ね、見て見て、りせちゃん！
かわいいよ」

差し出されたあみぐるみを受け取って、りせはひっくり返したり着せてある服を引っ張ったりして様々な方向から検分する。

「あみぐるみ？
ホントだ、可愛いね。
へー、細かいトコまで凝ってる」
「そ、それ……

オレが作ったんだ」

あみぐるみを撫でるりせに完二は言う。

りせは、顔を上げて完二を見た。

そして、一言。

「え、キモい」

完二はショックを受けたように一歩下がり、りせに食って掛かった。

「んな…っ！

キ、キモくなんかねえ！

これ見ろ！　こっちも！！」

商品棚に展示されたあみぐるみを一体一体りせに見せ、押し付ける。

りせの手の中はあっという間にあみぐるみでいっぱいになった。

あまりの勢いに、りせはポカンをした表情で完二を見つめる。

その眼前に、完二のズボンのポケットから新たに出されたあみぐるみが突きつけられた。

新作らしい。

「これならどうだ！

キュン死しそうな出来だろ！？」

呆然と眼前のあみぐるみを見つめるりせ。

そして、不意にクスリと笑った。

「……あんた実はスゴイ人なんじゃないの？

そうだね……
うん、可愛いよ。
あみぐるみ」

言って、りせは手の中のあみぐるみを丁寧に商品棚に戻していく。

「そだ。
今日はセンパイは？」

りせは並べながら茜に訊く。

「今日は読書するから、って。
最近、夜はななちゃんの宿題手伝ってるからおりてくるけど、それまではずっと部屋にこもってると思う」

菜々子の通う小学校では、家族とのコミュニケーションを取らせる一環として、親兄弟が手伝う前提でかなりの量の宿題が出る。
漢字の書き取りなどはさすがに手伝えないが、数日前から総司は菜々子の宿題を手伝っていた。
りせが頷く。

「そうなんだ。
じゃあ、帰りに誘ってよ。
完二、茜ちゃん送るんでしょ？
今からミシン使うなら、帰る時は遅いんだろうし。
私と完二も菜々子ちゃんの宿題、手伝っちゃう」

並べ終わり、りせはガラス戸を開ける。
絶対よ、と言い置いてりせは帰っていった。
あみぐるみを突きつけたまま停止していた完二は、ゆっくりと手

を下ろす。
少し満足そうに息をついて、完二は茜を家に上がるように促した。

／＊／

目の前には、大量の布。
元々は雑多な色だったが、そこは染物屋の面目躍如。
今は味のある色合いの白と黒に染まっていた。
用意した完二も少し呆れ気味だ。
布を集めるためのシャドウ狩りで得た他の素材を売る事で随分稼げたが、それも染代等で随分使っていた。
黒の布を広げて、茜がにっこりと笑う。
現在、茜がいるのは完二の部屋。
テーブルに用意されたのは、各種裁縫道具と、キャラクター物のミシン。
これらは、全て完二の私物だ。
茜も堂島宅で使っている裁縫道具をリュックに入れて持ってきていたが、質も数も種類も完二には敵わない。
茜は布の検分が終わると型を取っていく。

「随分手馴れてんだな」

横でミシンの糸をセットしながら完二が言う。

「ちしきが取り出せるってことは、どこかでやったこと、あるんだろうね。
多分、あみものも出来ると思う」

店舗のあみぐるみを思い出しながら茜は答える。
あそこまで凝ったものは厳しいが、簡素なものなら作れる自信は

あった。

「記憶喪失…てヤツだっけか。
えーと…難儀、だよな」

完二の言葉に茜は首を横に振る。

「全部わすれたわけじゃないから。
ペルソナのこと、覚えてたから戦える。
お料理だってできるし、こうやっておさいほうだってできるもん」

そう。
全てを忘れたわけではない。
記憶を取り戻せないわけでもない。
茜は、型通りに生地を切っていく。
その動きに淀みはない。
型である程度出来上がりのデザインを思い浮かべることができた
完二が、彼としては珍しく、不安そうな顔をする。

「茜ちゃん……それ、どうすんだ……？」

完二のその言葉に、茜は意味が分からず首を傾げた。

「着るんだよ？
もちろん」

■8／31

ふわり、とスカートが揺れる。
レースが何重にも重なったパニエでふっくらした黒いスカート、

提灯型の袖。
白いエプロンドレス。
同じ色のヘッドドレス。
それは所謂、メイド服と呼ばれる物だった。

白く糊の効いたドレスシャツ。
黒いネクタイ。
同じ色のベストにスーツ。
それは所謂、執事服と呼ばれる物だった。

それぞれ、要所要所にシャドウ狩りで手に入れた変わったデザインの留め金や、銀の塊で作ったボタンで飾り付けられている。
この辺りの加工はだいだら・の作品だ。
布地がしっかりしているのと、小物の質が良いので素人作品には見えない。
そして人数分しっかり用意されていて、尚且つデザインが一つ一つ異なっていた。

「……」

白と黒の色彩の中、沈黙が落ちる。
呼び出されて、服を渡されて着替えるように言われて。
結局逆らいきれずに着てしまったのだが。

「手伝っといてなんだが……こりゃお前の趣味か……？」
「もちろん♪」

一人だけ普段着のままの茜のキッパリとした物言いに、完二はぐったりうなだれた。
そんな完二は上着のボタンを外して随分着崩している。

完二とは逆に、全く着崩してないクマの衣装は袖や襟元にフリルが沢山付いていて、従者というより主人のようだ。

「てかさ、何で俺だけ英国紳士風？
しかも何かいろいろ間違った感満載だし。
このシルクハットとか、釘バットとか何？」

一人だけ妙に小道具の揃っている陽介が愚痴る。

「だって、”魔術師”だし」
「え！？
”魔術師”ってこんなイメージなの！？」

茜が理由に陽介のアルカナを告げると、陽介はオーバーアクションで嘆きだす。
普段着もフリルの多いクマ以外の男性陣にはあまり好評ではないが、女性陣には何だかんだ言っていても受けている。
女性陣で恥ずかしがっているのは千枝ぐらいだ。

「こ、これ結構ハズイんだけどっ！
しかもメイドって……」
「そう？
メイドって、給仕したりする人だよね？
ようするに仲居の着物と同じでしょ？」

千枝は短いスカートの下が見えないかと何度も押さえながら言う。
バーテンダーの制服のようなベストを着て、ボーイッシュの中に可愛らしさがある。
雪子のスカートはミディアム丈でそちらは気にしていないようだ。
それよりいつものカチューシャの代わりに付けているヘッドドレ

スの位置が気になるようだ。

「今まで色んな衣装着てきたけど、メイド服って初めてかも」

りせは他人にどう見えるか研究する努力を欠かさない。

ロングスカートのドレープがどうすれば綺麗に映えるか何度もポーズを決めてみせていた。

「ただいまー」

ガラガラと玄関を開ける音と、菜々子の声。

「さっき、お父さんに会ってね、スイカもらったって……」

言いながら入ってきた菜々子は、居間に集まった面子の格好に立ち止まる。

「わあっ、みんなかわいい！
カッコいい！！」

菜々子は目を輝かせる。

女の子の大半は、一度はお姫様に憧れるものだろう。

ふわりとしたフリルたくさんのスカート、提灯型のふっくらとした袖はその象徴だった。

本来”仕える側”のメイド服も、この年頃の女の子にとってはお姫様のドレスなのだ。

そして菜々子もそんな憧れを持つ女の子だった。

感想を述べる菜々子に、茜はにっこりと微笑む。

「もちろん、ななちゃんの分もあるよ！

こっち」
「うん！
スイカ、お父さん持って帰ってくるから、みんな食べててね！」
茜に連れられて、菜々子は居間を出て行く。
「おー！
今年、まだ喰ってねーんだよ」
「オレもっすよ。
なんだかんだで喰いそびれちまってたからな」
スイカが食べられると聞いて、自身の格好も忘れたように喜ぶ陽介と完二。
暫らくスイカの話題で盛り上がっていると、着替え終わった菜々子を連れて茜が戻って来た。
「おまたせー」
「えへへ……」
着物に続いて、茜と菜々子はメイド服もおそろいのデザイン。
だからこそ菜々子が帰って来るまで茜は着替えなかったようだ。
ヘッドドレスにフリルたっぷりのミニスカート。
そこからはドロワーズが覗いている。
「すごいよ。
スカート、ふわふわ！」
くるりと回ると広がるスカートに菜々子は大喜びする。
その様子をニコニコと眺める茜に総司は顔を寄せた。

「で、何だってメイド服や執事服を戦闘用にしようなんて思ったんだ？」

総司は茜に耳打ちする。

総司が纏っているのはオーソドックスな燕尾型の衣装。

背の高さも相まってスラッと引き締まって見える。

そして、総司の言った通り、茜が作ったこれらの執事服やメイド服は戦闘に耐えうる物だった。

元々だいだら・で武器や防具の材料になっている物が使われているのだから、当然といえば当然なのだが。

ロングスカートがりせだけなのも、戦闘に参加しない彼女以外だと動きにくくて機動力が下がってしまう為だろう。

「前の時、けっこうそうび自由だったんだよね。

夏祭りで浴衣着た時に思い出して、たまには変わったカッコしたいな、って思って」

「……まさか、前もメイド服とかで戦ってたのか？」

総司の懸念に、茜はニヤリと笑って見せる。

「他にも水着とか。

女子げんていでハイレグアーマーってのもあったよ。

冬はねぇ、サンタ服作るの。

あたしも着たい」

「……水着……」

ぐったりと呟く総司。

水着には嫌な思い出がある。

林間学校での悪夢の一幕だ。

「水着がいいの？」
「絶対嫌だ」

茜の問いを速攻で否定する。
海パン一つでダンジョン探索など考えたくはない。
そんな事を考えて居ると玄関の開く音がして、それが総司を現実に戻した。

「ただい…うぉっ、靴がすげえな。
何人来てんだ？」

堂島が帰って来たのだ。
総勢九名分の靴に驚いている。
堂島の声に菜々子の表情が輝いた。

「あ、帰ってきた！」

そして茜と共に出迎えに走る。
茜が菜々子に視線を送った。

「教えた通りにやるんだよ！」
「うん！　せ～の！！」

どうやら着替えの時に茜が何かを吹き込んだらしい。
総司は少し心配になって玄関へ通じる廊下を覗き込んだ。
茜と菜々子が声を合わせる。

「「お帰りなさいませ、ご主人さま～♪」」
「ぶふぅ」

堂島が、噴き出した。

／＊／

堂島に呆れられ、スイカは着替えてからだと言われて普段着に戻った総司達は、切り分けられたスイカを思い思いに手に取った。
居間の食卓で、日差しの降り注ぐ庭で、縁側に腰掛けて赤い実にかぶりつく。

「次食べるときは、スイカ割りしたいね」
「さんせーい！」

千枝が言い、食べ方が汚くならないように少しづつ食べていたりせが手を上げる。
陽介も口に含んでいた分を飲み込んで頷いた。

「いいねぇ。
やっぱスイカ割りするなら海か？
でも日取り的には、流石に来年かな……」
「らいねん……」

菜々子が呟く。
総司の両親の単身赴任は一年。
来年の４月を迎える頃には総司はこの家を出て行っている。
そして、この場に居る堂島と茜以外は総司の友達なのだ。

「らいねんも、菜々子とあそんでくれる？」

不安そうに言う菜々子に、全員が笑ってみせた。

「あったりまえじゃん！」

千枝が言い。

「おうよ！」

完二が大きく頷く。

「おうよー！」

その口調を真似て雪子が声を上げた。

クマもりせも菜々子に笑いかける。

「その時は、俺も戻って来るよ。

一緒に遊ぼう」

皆の肯定に嬉しそうにしていた菜々子の表情が、総司の言葉でさらに輝く。

「良かったな、菜々子」

「うん！

ありがとー！」

堂島の言葉に、菜々子は頷いて満面の笑みで礼を言った。

その横で。

「海かぁ……」

「……水着は作らないでよ……？」

期待に胸を膨らませている様子の茜に総司が釘をさす。

バレたか、と笑って茜はスイカにかぶりついた。
後に、男性用装備”赤い戦闘服”と女性用装備”桃色の戦闘服”をダンジョンに置かれていた宝箱から手に入れ、他の色も探すと茜が躍起になる事になるのだが、それはまた別の話……

装備の選択（後書き）

というわけで、Ｐ３ＰとＰ４じゃネタ装備に差があるなぁという話でした。
というかグラ変化しないし装備についても何も言及してくれないし……（´・ω・）

メイド服装備のＰ３Ｐ女主の絶対領域っぷりは異常。

記憶の欠片（前書き）

今回、短いです。
書いてる最中、５０００文字きるかと思ったくらい。
ケータイで見てる方が多いようなんですが、長さ的にはどのくらいが読みやすいんですかね。
なのに妙に時間かかったなと思ったんだけど、Ｐ４やってたからだったｗｗ
最近本編イベントとコミュイベントをニコ動で確認してたんで、８月前半でプレイが止まってました。
このＳＳでは恋人を作りませんが、ゲームの中では６股予定。
すでに３人程落としてます。

もうすぐアニメ始まりますね！！
楽しみです（´∀｀＊）

記憶の欠片

■9／1

「えっ？　なおとくんが？」

その話を聞いて、茜は紙コップから突き出しているストローから口を離した。

ストローに残っていた水滴が飛んで、唇を手で拭う。

場所はジュネスのフードコート。

夏休み中は午前中から集まることが多かったので、夕方にこうしてテーブルを囲むのは久しぶりだ。

久しぶりの登校。

そこにはある変化があった。

探偵の白鐘直斗が1年に転入してきたのだ。

直斗はわざわざ校門前で待ち構え、総司達に挨拶をしてきた。

警察への協力は終えたが、事件にはまだ色々と納得できない点があるから、と。

仲間達には結局言っていないが、総司と茜は確かに美津夫以外の犯人がいる可能性を考えている。

ペルソナの事を知らないだろう直斗がその可能性を考えている事にも驚いたが、調べる為にわざわざ転校してまで稲羽に留まる選択をした事にも驚いた。

丁度家の方の事情もあったとは言っていたが、それでも生半可ではそこまでしないだろう。

もしかしたら、前に遊びだと言われたことを気にして居るのかもしれない。

事件を調べる事しか頭に無いのか、対人関係の方は疎かにしているようだ。

廊下で見かけた、遊びに誘ってきた女生徒への断り方はスマートとはとても言えないものだった。

なんせ、”興味無いんです。遊び場にも、君たちにも”だ。

ジュネスへと誘う総司達への断りは興味を惹かれながらも残念ながらというスタンスだったが、女生徒達にもそういう対応だったなら角も立たなかっただろう。

「そうなんだよ。

ったく、直斗のあの態度…明らかにデビューしくじってるだろ……だいじょーぶなのかよ、学校生活？」

陽介は少し心配そうに言う。

社交的ではあったがジュネス店長の息子、という一部の人間に睨まれる要素のあった陽介は、転校当初かなり風当たりが厳しかったようだ。

おどけたキャラを確立することで学校に溶け込むことが出来てからは大分マシになったようだが。

陽介が転校生に声をかけるのは、自身がそれで苦労したからなのだ。

「確かに変わった子だけど、でも何か、こう……不思議な魅力みたいの、あるよね」

「うっそ、天城って、ああいう年下がタイプ？」

雪子の言葉に陽介が反応する。

デートを申し込まれても、それと認識せずにバッサリ切る程に男に興味なさげな雪子が気にかける。

それだけでも陽介にとっては驚きなのだろう。

そういう意味じゃなくて、と雪子は否定する。

完二は少し目を逸らす。

初めて直斗会った時に”また会いたい”と口走ってしまった完二には思うところがあるらしい。
千枝は自分の分のジュースを一口啜り、缶をテーブルに置いた。

「直斗くん、考え事あるって言ってたけど、事件のことだよね」
「名探偵的にはスッキリしてないんだろ。
…もう解決したってのにさ」
「そう…だけど……」

陽介と千枝。
二人して口篭る。
二人も内心、引っ掛かってる部分があるようだ。

「別の話ししよっか」

それを心の中に押し込めたように、千枝が提案する。
陽介はそれに乗って話題を振った。

「そーいや、じきに修学旅行じゃね？
えっと…行き先どこだっけな……」
「辰巳ポートアイランド。
海に面してる人工島なんだって。
かなり大都会」

雪子の言葉に、茜が顔を上げた。
その表情には驚きの色が浮かんでいる。

「え、ポートアイランド？
私よく、ロケで行ったよ？
ムーンライトブリッジの先んとこでしょ？

あの辺なら、結構遊べるとこ多いはず」

りせが嬉しそうに言う。

稲羽は娯楽施設が少ないのでそういった場所に行けるのが楽しみなのだろう。

大抵の学校は修学旅行は2年生の行事で八十神高校もその例に洩れなかったが、予算と生徒数の兼ね合いで今年から林間学校のように1・2年の合同行事にして2年に1回開催することとなっていた。

「いや、それがさぁ、聞いとくれよ……

今回の旅行…遊んでる余裕、無いかも」

千枝がぐったりとした様子で話す。

今年から観光中心の修学旅行は見直されたらしい。

1日目は旅行先の私立高校との交流会。

その交流会も勉強がメインで真面目なイベントになるそうだ。

2日目は辛うじて自由行動だが、基本は工場等の見学で費やされ、3日目は帰宅。

これでは旅行というより社会化見学だ。

ぐったりが伝染したりせと陽介が肩を落とす。

「うは…空気読まないにも程があるソレ」

「この案、不評も出たらしいんだけど、企画立案、バーイ”モロキン”なんだってさ。

アイツらしいと言うか……」

「うおお…モロキン……

死してなお俺らを縛るのか……

…で、私立の学校って、どんなトコよ」

「なんか、すーごい立派な高校らしいよ?

校舎もキレイで。

あたしら行く日、向こうは休校日なのに、返上で頑張ってくれちゃうみたい」

ガタン、と音を立てて茜が立ち上がった。

千枝達が会話をやめ、茜を見やる。

「あたしも行く！！」

叫ぶ茜に、総司達は苦笑する。

完全に林間学校の時の焼き直しだ。

仲間内で一人…いや、クマも入れれば二人だが、残される子供の可愛らしいワガママ。

お土産沢山買ってきてやるからと言って皆で宥める。

それは微笑ましい光景だった。

■9／3

白いレジ袋が足に当たってガサリと音を立てる。

レジ袋に印字されているのはジュネスのロゴ。

街灯に照らされながら夜道を歩くのは４つの人影。

早く帰った堂島が、たまには皆でジュネスに行こうと誘ったのだ。

総司の持ったレジ袋には、堂島が買ってくれた缶のどくだみ茶が数本入っている。

どくだみ茶には解毒作用があるので、いざという時に便利なのだ。

何が欲しいかと聞かれ、近くにあって目に付いたとはいえ咄嗟にダンジョン探索に使えるものを選ぶあたり、職業病なのかもしれない。

ふと、堂島を挟んで茜と歩いていた菜々子が後ろを歩いている総司に振り返り、少し歩くスピードを落とした。

総司の横に並び、見上げてくる。

菜々子は前を歩く堂島に聞こえない程度の小さな声であのね、と言った。

「こないだ、お兄ちゃんが見つけてくれた”しゃしん”……お父さんにかえしたんだ。お父さん、やさしいかおで、ちょっとわらったよ。ねえ、お兄ちゃん……菜々子ね、お父さんだいすき」

柔らかく微笑む菜々子に総司は頷く。

「うん。堂島さんも菜々子ちゃんのこと大好きだよ」

「うん、菜々子もそう思う！」

数ヶ月前、自身が好かれているのか不安そうにしていた菜々子。だけど今、その表情には自信と確信があった。

「お父さんね、さめがわでお花つんだことわすれてなかったよ。”お前もおぼえてたのか”って、うれしそうだった。お父さんは、お母さんがだいすきなんだ。……だいすきな人がいなくなって、かわいそうだね」

菜々子は前を歩く堂島を見る。

ジュネスに誘ってきた堂島は、少しだけ別行動取ったものの、自身の分は何も買わなかったらしく手ぶらで歩いている。

総司は菜々子の手を握った。

「でも、まだ菜々子ちゃんがいる」

「うん！

菜々子、いなくならないよ！」

菜々子も手を握り返す。
小さくて、暖かい手の平。
菜々子が笑う。

「菜々子ね、お父さんの子どもで、よかった！」

■９／４

青い空に、カラフルないくつもの風船。
傍に走り寄ってきた子供に、クマは風船を一つ渡した。
今日もクマはジュネスのマスコットとして活躍中。
夏休みが終わって、子供も総司達も夕方以降しか来なくなって少し寂しく思っていたクマだったが、今日は数日振りに午前中から子供の姿がチラホラ見える。
朝、いつも起きる時間になってもベッドから出てこようとしなかった陽介を起こそうとして、クマは初めて日曜という休日について知った。
学校という物も数日前に陽介に聞くまで知らなかった。
テレビの外には、知らないものが沢山ある。
知らない物事を知るのは楽しい。

「やっほー、クマ！」

エレベーターホールから出てきた茜が手を振って駆け寄ってくる。
クマも手を振って、茜を迎えた。
目の前に立った茜にも風船を渡す。

「ありがと！」

茜は嬉しそうに浮かぶ風船を見上げた。
青い空に山吹色の風船が映える。

「今日はどうしたクマか？
センセイは？」
「雪ちゃんから電話があって出かけてったよ。
ね、今日はバイト、いつ終わる？」

クマは首をかしげてシフトを思い出す。
休日は平日より客入りが多くなるので間で休憩はあるものも、昼からも仕事は入っている。

「えっと……お昼の3時までクマね」

クマは日払い制。
仕事上がりにそのお金でホームランバーを買って食べるのが日課となっていた。
初めて食べた甘くて冷たい物。
ホームランバーはクマの好物となっていた。
9月に入ってからは、ある野望の為に我慢してお金を貯めているのだが。

「じゃあさ、終わったらちょっと手伝ってほしいな」

茜がにっこりと笑う。

「手伝い？」
「うん。
約束通り、来たんだよ」

辰巳ポートアイランド。
海に浮かぶ人工島。
行かなきゃ、と心が叫ぶ。
多分、それが記憶の最後のピースなのだと茜は感じていた。

■9／7

眠気を堪えて通学路を歩く。

「はよざーす、先輩」

背後から声を掛けられ振り返ると、陽介と、彼と共に歩いてくる完二が目に入った。
目の前まで来て、陽介がうーす、と挨拶する。
総司も、おはよ、と返した。

「そうだ、お前、旅行の仕度とかしたか？
こいつ、さっきからその話ばっかでさ」

陽介が苦笑しながら完二を示す。
完二は少し赤くなりながらも陽介に呆れた視線を向ける。

「花村先輩、全然してねんスよ。
明日だっけ、とかつって、あり得ねえだろ」
「お前がハシャギ過ぎだっての。
”おっとっと”何箱持ってくとか、細けえよ。
たかだか2泊3日じゃん。
コンビニ行けば何でもあんだよ、向こうは」
「マジっスか！？

オレあんま、ココ出たことねーし……」

完二は心底驚いたように陽介を見る。

コンビニすらない稲羽では、現地調達という考えは存在しないらしい。

実は、総司もいる物は向こうで買えばいいや、と着替えとケータイの充電器ぐらいしか用意していなかった。

「つーか、こっちの事件って…向こうでも、騒がれてんスかね？」

急に真面目な表情になって言う完二の言葉に、総司と陽介は顔を見合わせる。

「オレらが捕まえた”久保美津夫”っスよ。

テレビで未だにやってるっしょ。

あいつが卒アルに載っけた作文とか、毎度テレビ出てきて、ほんっとウザいぜ」

イライラとした表情で完二が愚痴る。

稲羽ではかなり沈静化し、飽きられてきた久保美津夫だが、テレビでは未だに彼のことを取り扱っていた。

情報を好き勝手に切り貼りして、何気ない言葉の裏を好き勝手に解釈して生まれつきの犯罪者のように仕立て上げて。

会った事もないくせに。

テレビを通してみる久保美津夫は幼稚園の頃からの危険思想の引きこもりだ。

確かに総司達も美津夫に良い印象を持っている訳ではないが、正直テレビの極端さには辟易する。

「外ヅラ悪っぽい奴にゃ、何言ってもいいって世の中なんスかねぇ

……

どっかおかしいだろ、それ」

外見のせいで趣味を理解してもらえず、身に覚えのない容疑で歩いているだけで職務質問される事が度々ある完二にとってはとても人事とは思えなかった。

実際、完二は暴走族のリーダーのような報道をされ、それを真実だと思っている人間も多いのだ。

完二は暴走族を潰した方だというのに。

テレビはこうして事実を捻じ曲げることが出来てしまうのだ。

「確かにそうだな」

総司は一つ頷く。

陽介も頷いて、背後を振り返った。

規則正しい一定の足音に、見覚えのある紺色のキャスケット。

「……お、直斗じゃん」

「！！」

陽介の言葉に、完二がビクンと体を震わせる。

「うーす」

陽介が声をかけると、向こうも気付いたらしく視線が合う。

「おはようございい…」

「あーっと、オ、オレ日直じゃん！

ハハハ！

じゃ、じゃあ、そゆ事で！」

直斗の挨拶の言葉を遮って完二は大声でそう言って、慌てて学校に向かって走り去る。
ポカンと見送った陽介がポツリと呟いた。

「……？
どっかおかしいのは、あいつだよな……」

／＊／

風呂から上がって総司が居間に戻ると、堂島が帰って来ており、台所のテーブルに資料を広げて熱心に繰っていた。
どうやら車の資料のようだ。

「お風呂、空いたよ」

総司が言うと、堂島は一瞬だけ総司を見て、再び視線を資料に落とす。

「悪いな、今ちょっと手が離せない」
「コーヒーでも淹れる？」
「……それは俺の仕事だ。
いらん気を遣うな」

ニヤリと笑って言う総司に堂島は苦笑して資料から視線を外した。
椅子の背もたれに体を預ける。
少し前まで、堂島は菜々子と話していた。
渡したいものがあったからだ。
数ヶ月前と今現在。
忙しくて帰れない日もあったが、ほぼ毎日顔を合わせていた筈だ。

それなのに、最近菜々子が少し変わったような気がする。
大人っぽくなったのとは、また違う。
多分、強くなったのだろう。
堂島は、自分だけが取り残されているような、そんな気がしていた。
恐らく、自分は……

「お前達が…お前と茜が来てから、ここが、その……〝家らしく〟なってきた」

家というのは、ただの入れ物ではないと堂島は思う。
家族が暮らし、共に生きる場所。
一緒に笑い、泣き、ケンカもして。
それでも。

「人生の長い時間を共に過ごす……
そういう…あったかい場所だ。
忘れていたよ……
何より取り戻したかったのに……
……何より避けてきた気がするな」

堂島は横に立っている総司を見上げた。

「どうしてだか、分かるか?」

総司は少し考えて、一番近いと思う答えを言う。

「んー……臆病だから」

そう。

恐らく、自分は臆病だったのだ。
堂島はそれに気付いていた。

「ははっ！
言いやがったな、この野郎。
けど…その通りだ」

ハッキリ言った総司に堂島は笑ってみせる。
臆病だから、片親になってしまった小さな子供にどう接していいか分からず、犯人を捜すという大義名分を理由に逃げてきた。
菜々子は堂島をずっと見ていたのに、堂島は別の方向を向いていて。
同じ場所にいてもバラバラだった。
それを、総司と茜が繋いだ。

「後は…俺自身の問題なんだろう。
どこでケジメをつけるかっていう……」

堂島の、静かな決意。
堂島は目を閉じて息をつくと、勢いよく車の資料を閉じた。

「あー、やめだやめだ！
ったく、俺は今日は飲むぞ！
総司、お前も付き合え。
……って、明日から修学旅行だったか……
なら早く寝ないとだめだな……」

頭を掻く堂島に、総司は笑って冷蔵庫から冷えた缶を二本出す。
一本はビール。
もう一本はどくだみ茶だった。

「一杯くらいなら付き合うから。
俺はこないだ買ってもらったどくだみ茶だけど」

ビールを受け取って、堂島はプルタブを開ける。
プシュ、と軽快な音を立てた。

「おお、よしよし、飲め飲め！」
「んー、つまみになるものってあったっけ？
茜ちゃんに買い置きあるか聞いてくる」

冷蔵庫をもう一度開けて、つまみになりそうなものがないか確認して立ち上がる。
堂島家の冷蔵庫はかなり古いタイプで、冷凍庫が上に位置している。
冷蔵部分を見るためには中腰になる必要があった。

「あー、茜はもう寝てるぞ。
つまみなら収納庫に菓子があったからそれを開けよう」

立ち上がった総司に堂島が声をかける。
総司は首を傾げた。
マヨナカテレビの為に日が変わるまで起きている場合のある茜の方が、菜々子よりも夜に強い。
今の時間は、菜々子もかなりの確立でまだ寝ていない時間だった。

「へぇ…今日は早いね……？
えっと、収納庫……あった」

床下収納庫を開けた総司は中に入っていたスナック菓子を取り出

す。

袋を大きく開けて、テーブルの真ん中に置く。

そして自身は堂島の向かいの椅子に腰掛けた。

「それじゃ……」

言って、総司もプルタブを起こす。

「カンパイ」

缶と缶がぶつかって、軽い音が二人の間に響いた。

記憶の欠片（後書き）

さ、次回は修学旅行です。
書きたいのは修学旅行後の茜とクマのイベントなんですが。

海上の人工島（前書き）

修学旅行長いｗｗｗ
台詞抜き出しの時点で前話の文字数越えたので途中で切ります。
キリのいい所で切ったら前回より話短くなっちゃったけど。

海上の人工島

■9／8

辰巳ポートアイランド。

それは港区にある巌戸台から行くことの出来る海に浮かぶ人工島である。

電車や新幹線を乗り継ぎ、巌戸台からはモノレールでポートアイランドに入る。

昼食は新幹線の中で摂るという、休憩らしい休憩のない強行軍。

電車の座席から解放され、生徒達は各々背を伸ばして体を解した。

今回の修学旅行で交流する私立月光館学園は、ポートアイランド駅からしばらく歩いた場所にあった。

玄関前は相当広い。

八十神高校は田舎ということもあって敷地だけはあるので建物自体は大きいが、ここは広さに加えて建物自体も新しいようで汚れが見当たらず、地面もレンガで美しく舗装されていて洗練されている。

点呼の後、生徒が整列している前方で恰幅の良い月光館学園の校長のスピーチが始まり、その横で一人の女生徒が控える。

眼鏡をかけたストレートヘアの利発そうな女性で、男子の注目はそちらばかりに集中していた。

女子は女子で、デザインの良いブレザーが気になるらしく、そちらばかりを注目する。

校長の長々としたスピーチはほぼ誰も聞いていないといっていいだろう。

陽介もそのようで、”やばい、俺史上、空前のメガネ美人だ”などと呟いていた。

「ようこそ、私立月光館学園へ」

生徒代表から挨拶を、と言われて前に出た女生徒が口をひらく。
その声は正に鈴を転がすといった表現がピッタリだろう。
聞きやすく、綺麗に澄んでいる。

「初めまして。
生徒会長を務めます、3年D組、伏見千尋です。
今日は宜しくお願いします」

言って、千尋と名乗った女生徒が微笑む。
陽介も完二も顔を赤くする。

「他校の方を招いての本格的な学校交流は、我が学園にとっても始めての試みです。
他者を知ることは己を知ることであり、己を磨く第一歩である…と、私は考えます。
この機会が、参加者一人一人の糧となるよう、私達も精一杯、努めさせて頂きたいと思います」

千尋はよろしくお願いします、と言って挨拶を終える。
暖かい拍手があちこちから起こった。
主に男子が多い。
校舎が大きく敷地も広く。
学校に辿り着くまでに通った道も校舎も都会的な美しさを持っている。
そして美人の生徒会長。

「やっぱい、全てが負けてる……」

そう千枝が呟くのも仕方ないことだろう。

挨拶が終わったことで教師がクラスの班毎に分かれるように指示し、それぞれが散って行く。
林間学校と同じく一緒の班になっていた総司達は初めから固まっていたのでその場に残る。
だが何故か1年の完二もその場に残ったままだ。
行かないのか、と総司が声をかけようと口を開くが、それは千尋の声に遮られた。

「やだ、忘れてた！」

その声に総司は顔を千尋に向ける。
千尋は慌てたようにキョロキョロと視線を巡らせると、近くにいて目の合った総司に近付いてきた。

「すいません、ちょっといいですか？」

千尋は手に持ったバインダーから数枚のプリントを抜き取り総司に差し出してくる。

「これ、皆さんの今日の予定表です。
後で、配って頂けませんか？
渡しそびれちゃって……」

総司は受け取ってプリントを覗き込む。
クラス毎のタイムテーブルのようだ。

「遠いところお越し頂いたのに、段取り悪くて、ごめんなさい」
「気にしなくていいよ。
スピーチ、良かった」
「ふふ、ありがとう」

総司の言葉に千尋は微笑む。
実は、スピーチの内容は手伝ってもらって作ったそうだ。
千尋が入学した時に生徒会長だった人物に頼んだらしい。
すごく素敵で憧れの人、という千尋の表情は夢見る乙女のようだ。
照れた様子で話していた千尋は、そこまで喋って慌てたように顔を伏せた。
照れて赤くなっていた頬はさらに真っ赤に染まっている。

「あっ、ごめんなさい！
自分の事ばっかり……
緊張してると喋りすぎちゃうの、直さなきゃ」

千尋は手元のバインダーに視線を落とす。
総司に渡したプリントのコピーが挟んであるようだ。

「えっと、みなさんはこれから特別授業ですね。
教室は2階ですから。
私、そちらの生徒会の方々と打ち合わせがあるので、失礼しますね」

言って千尋は小さく会釈し、歩いていく。
その後ろを見送って、総司は手元のプリントに再び視線を落とした。

「いまナニゲに”特別授業”つわれた？
ここまで来て”授業”！？」

陽介が慌てた様子で総司の横からプリントを覗き込む。
確かに勉強メインだとは聞いていたが、まさか本気で授業を受け

ることになるとは総司も思わなかった。
プリントをめくって2年2組のプリントを一番上にする。
2年2組の特別授業の欄に書いてあるのは”カバラ”という文字。
担当者は江戸川とある。

「……カバ…ラ……？」

書いてある意味が分からなくて、総司は首を傾げる。

「カバ？」

千枝も同じようだ。
果たして、科目にカバラなんてあっただろうか。

「知らねんスか？
ガジノっスよ、カジノ」

自信満々で完二が言うが、そもそもカジノも授業でやるような科目ではない。
陽介が自由行動、自由行動と呟きながらプリントをなぞってタイムテーブルを確認する。
だが、いくら探しても今日の予定に自由という文字は印刷されていない。
タイムテーブルによると、これから夕方までずっと授業で、終わったらホテルへと直行。
今日と明日はホテル泊で、明日と明後日の昼までは辛うじて自由行動のようだ。
一応オススメコースと銘打って自由行動で行くことの出来る施設情報が紹介されているが、殆ど工場などで遊び場などは書かれていない。

溜め息をついて、移動で疲れた体に鞭打って総司達は移動を開始した。

／＊／

「はい、どうもはじめまして。
会うは別れの始め、アルファなり、オメガなり……」

教卓についた教師が口を開く。
左耳に鉛筆を挟んだ、眼鏡をかけた白衣の男。
眼鏡のレンズが分厚くて目を見ることができない。
教師は江戸川と名乗った。

「八十神高校のみなさん……
メニー・ゴッド・ハイスクールですか、ホホー」

色々な学校を転々としてきた総司だったが、ここまで強烈な教師は珍しい。
確かに、濃い教師というのは結構いる。
諸岡金四郎しかり、総司達の新しい担任である柏木典子しかり。
それでもここまで言ってる意味の分からない教師は初めてだった。
だが、さすがに校舎は綺麗だ。
机や椅子も八十神高校のような昔ながらの木の硬い物ではなく洗練されたデザインだった。

「〝カバラ哲学〟の話でも…と思ってましたが、気が変わりましたよ、ヒヒヒ」

やはり意味が分からないが。

「今日は皆さんと、せっかく会えたんですから、”お別れの話”を差し上げることにしましょう。
いやいや、これは”日本で一番古い呪いの話”と言ってもいいかもしれませんねぇ」

江戸川は皆の疑問符だらけの表情にはお構いなしで話を続ける。
それは、この国を作った神様の話だった。
国生みの二神、男神イザナギと、女神イザナミの話。
イザナギ。
自身の片割れの名前に総司が顔を上げる。
仲の良かった夫婦。
だけど、火の神を出産し、死んでしまった妻のイザナミ。
悲しんだイザナギは妻を連れ戻そうと死者の国に赴く。
暗い暗い、黄泉の国へ。
ようやく黄泉の住人になったイザナミの元に辿り着き、一緒に戻ろうとイザナギは言う。
その結果を総司は知っている。
茜の言っていた、オルフェウスとイザナギの似ている伝説。
それはどちらも失敗に終わるのだ。
オルフェウスは連れ帰れず、イザナギは置き去りにして。
追っ手を振り切ったイザナギは、黄泉の入り口としてこの世とあの世を繋いでいたコモツヒラサカを大岩で塞ぎ、追ってきたイザナミに別れを告げる。
”コトド”といわれる呪言。
イザナミは、呪いの言葉を紡ぐ。
”こんな仕打ちをするのなら、私はあなたの国の人間を日に１００人殺します”。
それにイザナミはこう返す。
”ならば私は、日に１５００の産屋を建てよう”。
千が死にゆき、万が生まれくる。

それがこの国にかけられた呪いなのだと江戸川は語った。
終業のチャイムが鳴り響く。

／＊／

もう日は落ちている。
その暗い中で見ると、そのホテルには雰囲気があった。
といっても、幽霊が出そうだとか、そういった類のものではない。
アーチを描く門構え。
全体的に薄暗い照明なのに所々で光る派手な色のネオン。
門の横の料金表には素泊まりの他に休憩という項目がある。
所謂、”ピンク”の雰囲気だった。
生徒を引率していた柏木が振り返る。

「はい、ここでぇす。
シーサイド・シティホテル”はまぐり”。
今日はここにお泊りよぉ」

示されたホテルを見上げて、生徒は顔を引きつらせる。
生徒達が動揺しているのにも関わらず、柏木は自信たっぷりな様子で自分が見つけたのだとのたまう。
何でも、最近オープンしたばかりで値段も手頃。
そして都会っぽい、らしい。
都会を何か勘違いしているようだ。
ヒソヒソと言い合う生徒達を柏木は促してホテルに入っていく。
残されたのは、呆然とホテルを見上げたままの総司達だ。

「ここ…怪しくないか？」
「そう？
地元にこういうの無いから、分かんない」

陽介は顔を顰めるが、千枝は首を傾げるだけ。
りせは顔を赤くして解説する。
ここは”白河通り”というラブホテルの立ち並ぶ界隈なのだと。
全員が赤くなって、お互い目を逸らした。

「ノッフッフッフ……
思ったより早い到着ですね……
それに、なっかなかのホテルです……」

微妙な空気の中、何処からか聞こえる怪しい声。

「ボクと会ったら…たとえばヨースケとかはどんな顔をするのでしょうね……？」
「ッ……！？
殺気……！！」

名指しされた陽介は厳しい表情で辺りを見回す。

「上かッ！？」

叫んでホテル”はまぐり”の向かいのビルの屋上を見上げる。
怪しさを演出する猫の声。
そして、丸いシルエット。

「とうっ！！」

猫に囲まれていたシルエットが宙に舞う。
宙に舞ったシルエットは、激しい音を立てて墜落する。
呆然と見守る中現れたのは。

「ふふんふん…しゅびどぅび」
「クマ！？
テメ、なんでここに！？」

稲羽に残してきた筈のクマだった。
しかもキグルミ姿だ。

「クマの中の寂しんボーイが暴れたのさ！」
「くーっ…
現実でも”探知”できたらいいのに……」

りせが悔しそうに呻く。

「一体、どうやって来たの！？
なんか”能力”ってこと！？」
「いえ、普通に電車です」

千枝にクマが答える。
行き先は陽介の持っていた”旅のしおり”をチェックしたらしい。

「も、もしかして茜ちゃんも来てるのか？」

総司は辺りを見渡した。
修学旅行に付いて来たがっていた茜。
そして、同じ留守番組であったクマが来ているという事は、一緒に来ているのかもしれない。
そう考えての総司の言葉だったが、クマは首を横に振る。

「クマ、眠れなくて居ても立ってもいられないから先に始発で出発

して、今まで観光してたから知らないクマ。
センセイ達と一緒じゃなかったクマ？」
「……ちなみに、お金どうしたんだ？」

電車に乗ってきたのなら、お金がいるはずだ。
しかもクマは両手にお土産店のものらしい大きな紙袋を二袋持っていた。
随分満喫しているようだ。
それだけ買い込んだのなら、結構な金額が必要だったはずだ。
少なくとも移動にかかる費用を考えれば、クマの時給では数日我慢して貯めた程度では賄えないだろう。
クマが言うには、元々二人で来る予定だったらしい。
資金は茜と二人でダンジョンにこもり、シャドウ狩りをして稼いだという。
浅い領域でならクマの鼻も問題なく利くのでクマがナビを務めたようだ。
クマがナビをするとなると、戦闘できるのは茜だけになるが、茜はかなり深い領域でも一人で殲滅できる実力を持っている。
浅い領域限定なら危険らしい危険はなかっただろう。

「だいだらさんで両替した後、お財布二つに分けて一つ置いてったから、こっちはクマの取り分としてありがたく使わせてもらってるクマよ」
「……ちょっと家に電話する」

総司は言ってポケットの中のケータイを取り出した。
アドレス帳から堂島家の電話番号を呼び出す。
茜はケータイを持っていないのだ。
コール音が止まる。
もしもし、と名乗る声は菜々子のものだ。

「……もしもし？
菜々子ちゃん？」
『あ、お兄ちゃん！』

菜々子が嬉しそうな声を上げた。
聞いているこちらまで嬉しくなりそうな声だが、今はそれ所ではない。

「茜ちゃん、いる？」
『あ…うん。
でもあかねちゃん、今日すっごい落ちこんでるの』

茜がいるかどうか訊ねると、菜々子の声はトーンダウンした。
内緒話のような感じで声を潜める。

「そ、そうなんだ？
どうしてかは聞いてみた……？」

単独で出て迷子になっているわけではないことに総司はホッと息をつく。
菜々子が答える。

『んっとね、メインおさいふ持ってかれた…とか言ってた。
それに”しゅうのうこ”に入れておいたオカシも食べられちゃった…って』
「う…っ」

収納庫のお菓子。
それに心当たりのある総司が呻く。

収納庫は、床下収納庫の事だろう。
確かに昨日、総司は堂島とそこに入っていたスナック菓子を食べた。
それは茜が旅行の為に買ったものだったのだ。

『どうする？
あかねちゃんに代わる？』
「あ、いや……
お土産、買って帰るからって言っておいて」
『うん！
じゃあね、お兄ちゃん』

通話が切れる。
総司は大きく溜め息をついた。

「……。
茜ちゃんは、向こうに残ってるみたいだ」

心配そうに聞き耳を立てていた千枝達に言うと、彼女らの表情が緩む。
気を取り直して陽介はクマを見た。

「そっか……
じゃあ、問題はコイツだな。
キグルミ着てきて……泊まれんのか？」
「その辺で夜明かせんじゃねえか？
着てりゃ冷えねえだろうし」
「お金結構あるから余裕で泊まれるクマよ！」

完二の言葉にクマは失礼な、と憤慨しながら言う。

「……そりゃあ、二人分の旅費があれば余裕だろうな……」

総司は顔を覆った。

恐らく、茜は二人分の旅費という大金を持っているのを堂島に気付かれないように資金の殆どをジュネスにメイン財布として置いておいたのだろう。

そしてそこから分けた二つ目の財布で旅行に必要なものを買い求めたのだ。

その一部が床下収納庫に仕舞われていたお菓子というわけだ。

茜の歳ではバイトは出来ない。

堂島に見つかっては言い訳は難しい。

そう判断した茜のやり方はかなり利口だったと思う。

だが、クマの行動が茜の思考の斜め上を行ってしまったのだ。

まさかクマが遠足の前日の子供のように眠れず、挙句に始発で一人出発してしまうという展開は流石に読めなかったろう。

土産物は奮発しよう。

総司はそう思った。

海上の人工島（後書き）

茜、ごめんね？
プロットの段階からクマの影戦と修学旅行には参加させないって決めてたの。
ちなみに、プロット段階ではクマが財布を奪って逃走、という流れでした。
次回、ちょろっとコロマルが出ます。
エピの美鶴以来の（茜除く）Ｐ３メインキャラですね。

抜け駆けの末路（前書き）

ペルソナアニメ放映開始おめでとー！！
さっそく見逃しちゃったんで（寝落ちした）、ニコニコで見ます。
でも、ちょっと詰め込みすぎって話聞いた……
アニメ伝勇伝並みに詰め込まれてなきゃいいなぁ。
でも、もし1話でペルソナ呼ぼうと思ったら……
チマチマカットしてるこの話でも呼ぶのは2話ですからね……

2日目終わった時点で分けた方が良かったかな?と思ったくらい長いです。
でも修学旅行で3話……？　しかもコロマル出てないとこで切っちゃうの?
というわけで、分けませんでした。
分けたとき、2話目のタイトル思い浮かばなかったとか言わない。

抜け駆けの末路

正直、ホテル”はまぐり”は前の営業時（ラブホだった）の備品を使いまわしすぎだと総司は思う。

部屋に入ってまず目に入るのが、大きな円形のウォーターベッド。

それが、一つ。

一部屋に二～三人で泊まるにも関わらず、だ。

もちろん部屋割りは男女別である。

そして、総司は陽介との二人部屋だったが、林間学校の時と同じように完二が転がり込んできていた。

部屋は照明があるものの薄暗く、外観と同じように”ピンク”な雰囲気が漂っている。

内装を弄る費用もケチったらしい。

少しでも明るくする為に、総司はベッドライトをつけようとベッドに付けられたスイッチを押す。

するとベッドが回り始めた。

慌ててもう一度押すと回転は止まる。

沈黙が落ちた。

微妙な空気のまま、夜が更ける。

■9／9

修学旅行2日目。

”はまぐり”では食事は用意されていない。

コンビニかどこかで購入してくるか、ルームサービスを取ることになっている。

だが、長くいたくないのと、完二がしっかり朝食を食べたいというので早めにホテルを後にした。

ちなみにクマもホテルにキグルミを置いて着いてきていて、今は

いつものフリルのブラウス姿である。
あまり休めた気はしないが、折角の自由行動。
殆どの生徒は土地勘がないために学校の用意したオススメコースに行くようだが、総司達にはりせがいる。
今日は1日りせがポートアイランド内を案内してくれることになっていた。
巌戸台の駅前商店街で朝食を摂り、そのままモノレールでポートアイランドに行って観光というコースだ。
商店街はまだ朝早いこともあっていくつかの店は閉まっている。
だが稲羽の商店街とは違い小さいながらも完全に閉店してしまっている店はないようで、長い間閉められたまま放置されている様子のシャッターはない。
古本屋に、甘味処、漫画喫茶。
バーガーショップにラーメン屋、定食屋、たこ焼き屋。
小さなビルとその周辺に店が寄り集っている。
その中の”わかつ”という定食屋に総司達は入った。
出社前なのか、スーツ姿の男が数人席についているが店内は空いている。
総司達が空いてる席に座ると、すぐにお盆を持った店員が出てきた。

「……水だ…です」

接客や敬語になれていないのか、ぶっきらぼうな声と共に水の入ったコップがテーブルに置かれる。
総司が顔を上げると、目付きの悪い男と目が合った。
長めの髪に、ガタイのいい体。
それが上から睨みつけるような視線を投げかけてくる。

「注文、決まったらボタンを押…してください」

水を並べ終わった店員が、テーブルの脇に置かれたボタンを示して厨房に戻っていく。
それを見送って、陽介は息をついた。

「すっげー迫力……」
「何ビビってんスか、先輩」
「ビ、ビビってねーよ」

ニヤニヤと完二に言われ、陽介は否定する。
だが、陽介の言う通り、かなり迫力のある男だった。
威圧感で言えば完二より上だろう。
メニューを広げて何を頼もうかと見ていると、入り口が開いた。
子供が一人、入ってくる。
男の子だ。

「あ…あの子も朝ご飯食べに来たのかな」
「中学生くらいかな？」

千枝と雪子が顔を寄せ合って新たに入ってきた男の子を見る。
少年は、昨日見た月光館学院の制服に似た服を着ていた。
月光館学院は校舎は離れているが初等部から高等部まであるマンモス校らしいので、中等部の制服なのかもしれないと総司はあたりをつける。
少年が空いている席に座ると、厨房に戻っていた先程の店員が再びお盆を持って出てきた。
他の時間は分からないが、朝のホール担当は彼だけらしい。

「……あ、あの子、大丈夫かな？」

心配そうに千枝が呟く。
見守る中、店員の男が少年の席の前に立った。
ドン、と1リットルパックの牛乳が置かれる。

「……ほら、牛乳(いつもの)だ」
「ありがとうございます」

ニコリと少年が笑う。
店員の男の口調も、総司達へのものとは違い、随分砕けている。
無愛想な声色なのは変わらないが。

「朝っぱらから外食か……
外食ばっかだと体に悪ぃぞ」
「寮のご飯、おいしくないんですよ」
「……夜、食べに来い」
「わあ！　ありがとうございます！
オムライス、リクエストします」

少年が言うと、店員は頷いた。

「オムライスだな？
……分かった。
注文はどうする？」
「えーと…じゃあ”ＤＨＡ盛りだくさん定食”お願いします」
「分かった」

注文を伝票に書き込み、店員は厨房に戻っていく。
総司達はその背中を見送った。

「知り合い……みたいだね」

「だな」

／＊／

食事が終わり、総司達は街へと繰り出す。
月光館学園へ向かった時と同じように巌戸台からモノレールに乗り、ポートアイランドへと渡る。
まずは昨日あまり見れなかったポートアイランド駅。
映画館や花屋、おしゃれなカフェが並ぶ美しい駅前広場。
都会的ではあるが、人で混雑したりはしておらず、ゆったりとリラックスできそうな雰囲気だ。
だが、裏路地はあまり治安がよくないらしい。

次はムーンライトブリッジ。
陸地とポートアイランドを結ぶ二つの内の一つ。
モノレールとこの橋が陸地からポートアイランドへの玄関口となっている。
夜になるとライトアップされ、絶好のデートスポットになるそうだ。

そしてポロニアンモール。
噴水広場を中心にして作られた円形のショッピングモールで色々な店が入っている。
昼食はここの喫茶店、シャガールで摂ることにした。
りせのオススメは看板メニューのフェロモンコーヒーだそうだ。
なんでも、飲むだけで魅力が上がるという話らしい。

「クマの魅力がこれ以上上がっちゃったら拙くないですか？

ただでさえ、こんなにプリチーボーイなのにっ！」

クマは言いながらも真っ先にフェロモンコーヒーを頼む。

結局、折角のオススメなのだからと全員が食事とプラスしてコーヒーを注文した。

食事を終え、コーヒーを飲みながら落ち着いていると、妙に視線を集めているのに気付く。

それは果たしてコーヒーのフェロモン効果なのか。

それともただ単に、デートスポットになっているようで男女二人組みの多い喫茶店に総勢七名という大所帯で来ているせいか。

もしかしたら雪子、千枝、そしてりせと女の子のレベルが高いせいかもしれないが。

少し視線を痛く感じた。

「わ、もうこんな時間。

結構遊んだね。

そろそろホテル戻る？」

「やだ、千枝先輩。

夜はこれからなんだから！」

シャガールから出た後はウィンドウショッピングにゲームセンター。

楽しい遊びの時間はあっという間に過ぎ去り、千枝が空腹を感じて時計を見ると、もう随分遅い時間になっていた。

千枝が言うとりせが笑う。

りせも時計を確認して一つ頷いた。

「……ん、もう開店してるな。

じゃ、行きましょ！」

「行くってどこへ？」
首を傾げる総司に、イタズラっぽくりせは笑った。
「もちろん、夜のお店！」
／＊／
クラブ・エスカペイド。
夜しか開いてないその店の中にはもう客が入っていて、アップテンポの曲に身を任せて踊っていた。
ステージにはスポットライトが当たり、眩しい。
階段を上った先にあるロフト部分には革張りのソファにガラスの丸テーブルが設えてあり、踊りつかれた者が休めるような作りになっていて、1階が見下ろせる。
そのロフトのソファに総司達は座っていた。
長いソファに総司、完二、クマ、千枝、雪子。
短いソファには直斗、りせ、陽介。
そう。
直斗もこの場に存在していた。
転入したばかりではあるが、1年生なので彼ももちろん修学旅行に参加している。
りせや完二のように班行動から離れていたのか、彼は一人だった。
先にこの店に来ていて、入れ違うように帰ろうとした直斗を誘い、直斗は誘いに乗ったのだ。
ロフトには総司達以外の客はいない。
りせは店長の所へ行き、あっという間にこのロフトを貸切にしてしまった。
それも、ドリンク付きで。
そのおかげでテーブルの上には色とりどりのジュースがグラスに

入って並べられていた。
なんでも、一昨年にシークレットライブで呼ばれた時に、途中で電源トラブルが起きて中止になってしまったらしく、ここの店長はりせに借りがあるらしい。
この好待遇はそのためのようだ。
綺麗な色のジュースを一口飲む。
フルーツの酸味と甘味が口に広がる。
どうやっているのか、下と上の方で色が違う。
カロン、と氷が音を立てた。
ふと顔を上げると、何人か顔が赤い。
不気味に笑っていたりもする。

「……」

総司はもう一口ジュースを飲む。
美味しいが、特に変わった味はしない。
アルコールは入っていないようだ。
だけどクマの言葉遣いは怪しいし、雪子は箍が緩んだように笑い続けてるし、りせのテンションもおかしい。

「王様ゲエー――ム！」

突然立ち上がったりせが叫んだ。
酔ってるとしか思えない。
でも飲み物はノンアルコール、の筈だ。
もしかして、これが”場酔い”というものなのだろうか。

「オトナは、こういう場合、王様ゲームするの。
法律で決まってるの…ヒック」

機嫌よく力説していたりせの目が据わる。
相当浮き沈みが激しくなっている。

「なによ……自分らで”りせちー”とかロリっぽいキャラ付けしたくせに、子供、子供って……ヒック。
知ってんだから…打ち入りも、打ち上げも、私帰ってからの方が盛り上がってんでしょ！
ぶぁかー！
今日こそ”王様ゲーム”なんだから！」
「な、なんか、よくないカミングアウト始まってんぞ……」

どうやらりせは王様ゲームに相当思うところがあるらしい。
りせは完二に割り箸を用意するように命じる。
何でオレが、と愚痴りながらも用意する完二。

「あ、あのぉ……
王様ゲームって…どんなんだっけ？」
「えっと～、当たりを引いたら王様で～、他のクジには番号があって～……
王様は～、何番と何番はナニしろ～って命令できちゃうの」

引き気味で説明を求める千枝に、雪子が呂律の回っていない声でルールを説明する。
本当にアルコールが入っていないかどうか、総司はもう一口ジュースを飲む。
何度確かめても、アルコールらしい味はない。

「でも誰が何番かは～、命令決まるまでヒミツ！」
「さーっすが先輩、話はやーい！
ほら、引いた引いた！」

りせは完二の用意した箸立ての割り箸にペンで数字と当たりを書き込んで皆に差し出す。
逆らえない雰囲気に観念して割り箸を引く。
総司の引いた割り箸には6番と書かれている。

「はい、じゃあ～、王様だ～れだ？」

全員に割り箸が行き渡り、機嫌よくりせが言う。

「クマの、赤！　赤！
クマ、王様！？」

勢いよく立ち上がったクマが割り箸を掲げる。
その割り箸の先は確かに赤く塗られている。
当たりの印だ。

「うわ、出からやっべー……」

陽介が呻く。
欲望に忠実なクマの絶対命令権。
確かに不安だ。
しかも箍が外れている。

「王の名において命ずる！！
すみやかに、王様にチッス！！
おう、神よ……女子をお願いします3番！！」

やはりというか。
初っ端から危ない命令だ。

6番の総司は胸を撫で下ろす。
その横で、完二がウギャー!!、と叫んだ。
どうやら見事に3番を引いてしまっていたらしい。

「チッス～チッス～!!」

雪子がはやし立てる。
その声を聞いて、クマはキッと完二を睨みつけた。

「おっけ、クマの純情あげちゃう!!」

そしてクマは完二に襲い掛かった。
逃げようとした完二は押し倒されて。

「うわ、イテッ、やめろ!
テンメ、シメっぞ、コラ!
ギャー!　いらねーッ!　助けて!!」

完二の悲鳴も空しく、ブッチュ～、と吸い付く音が響く。
青い顔で総司と陽介がその惨状を眺める中、りせがフフ、と笑い声を上げる。

「さあ…1回戦で早くも脱落者二人よ」
「え、そういうゲーム……?」

千枝が呟くがりせはお構いなし。
全員から割り箸を回収し、脱落者の分だけ数字の割り箸を避けて箸立てに収める。
カシャカシャと箸立てが振られ、割り箸が混ぜられた。
再び回ってきた箸立てから1本取る。

赤い印がついている。
今度は総司が王様だ。
王様を誰何するりせに手を小さく上げる。
陽介と千枝はあからさまにホッとしたような表情になった。
直斗の表情だけは変わらない。
流れについていけてないようで、ただ呆然としているようだ。
マトモな命令で済みそうという千枝に、雪子はチッスの次なのだからそれよりキワドくないと、と反論する。
そして、何故か命令が膝枕、膝に座る、抱きつく、肩車の四択に限定されてしまう。
それにしても、雪子の言う肩車の時代とは何なのだろうか。
雪子とりせの暴走は止まらない。

「え…じゃあ……2番が膝に座る……」

一番無難そうな命令を選ぶ。
2番は……千枝だ。
真っ赤になりつつも、千枝は総司の膝に座る。

「もっと奥までよ、奥～！」
「ゆ、雪子あんたねぇっ！！」

膝の先っぽにちょこんと座る千枝を雪子が囃したて、千枝が声を荒げる。
後姿でも千枝の顔が耳まで赤いのが間近にいる総司には分かった。
これは、想像以上に恥ずかしい。
総司の顔も赤い。
倒れていたクマと完二が復活し、3回戦という事でようやく解放されて千枝は自身の席に戻っていった。
そして、自身が王様だと宣言する雪子。

だが、まだ割り箸は回っていない。
ツッコミを入れる陽介を無視して、雪子は命令を下す。
命令は、”とても口では言えない恥ずかしいエピソードを語ること”。
対象は、直斗。
指名された直斗は一瞬驚いた顔するが、クスリと笑っていいですよと請け負った。

「恥ずかしい過去なんて、思い当たりませんが……とりあえず、生まれの話でいいですか？
その代わり」

直斗は一つ条件を出す。

「僕が話したら、皆さんにも”あること”を話してもらいます」

そう言って、直斗は語りだした。
白鐘の家の歴史を。
代々探偵業を営み、時の警察組織に力を貸してきた白鐘家。
特に科学捜査の無かった昔は、専門知識に基づいて助言できる人材は今より貴重だったらしい。
だから直斗の祖父は警察に太いパイプを持っていて、まだ高校生と若い彼の面倒を色々と見てくれている。
しかし最近の捜査は、医学・科学に通じていないと話にならない。
認めてもらうには、自分はまだまだ未熟。
だから、もっと知識を蓄える必要があるのだ。
語り終え、直斗は口を閉じる。

「なんという急速冷凍……
……え、終わり？

オチは？」
「いや、そういうのを期待されても」
身を乗り出す陽介に直斗は言う。
その横でりせは話の途中で寝てしまっていて寝息を立てている。
「恥っずかし～。
ナオト君、恥っずかし～」
皆のテンションが下がる中、それでも雪子は楽しそうだ。
「帰りてえ……」
陽介が呟く。
同感だった。
「では、次は皆さんの番ですよ」
直斗が言う。
「答えてもらいましょう。
皆さんが本当は、事件とどう関わっているのか」
「お前な…空気読めな過ぎて逆にオモシロイよ……」
直斗の真剣な眼差しに陽介は苦笑する。
だが、何と答えればいいのだろうか。
総司は返答に詰まる。
口を開いたのは雪子だった。
「えっと～、誘拐された人を～、テレビに入って助けに行きま～す

！」

「ば、ばかおまッ……」

いきなりトンデモな真実をぶっちゃける雪子に、素面の全員が固まる。

直斗は胡乱げな表情だ。

慌てて止めようとする陽介の言葉も雪子には届かない。

「それで～、うようよしてるシャドウたちを～、ペルソナで”ペルソナァー！”って……」

言ってしまった真実に、総司は顔を押さえる。

そんな話、信じられる筈がない。

もちろん、直斗はからかわれていると思ったらしく、顔を顰めた。

「……話す気が無いのは分かりました」

「うふー、なんか気持ちよくらってきた……

おやすみらさ～い……」

そして、りせに続いて雪子も沈没する。

「……大体、何にそんな酔っ払ってるんですかね」

直斗は呆れたように溜め息をついてストローを使わずにジュースを煽った。

この店は、飲酒運転への抗議で去年からアルコールを扱っていない。

だから、ここに出されているのは全てソフトドリンクなのだ。

一気に飲み終えられたコップがガラスのテーブルに置かれる。

氷がカランと音を立てた。

■９／１０

修学旅行３日目。
総司達は巌戸台を歩いていた。
クマはチェックアウトしたので今日はキグルミを着ている。
直斗も一緒だ。
因みに、雪子やりせに昨夜の記憶はないらしい。
とりあえず、総司達は二人はすぐに寝てしまったと伝えておいた。
思い出さない方が良い事もあるのだ。
今日は帰る日なので自由行動の時間は短い。
昼食を食べて１４時に集合、それから稲羽に帰るというスケジュールになっている。
なので、今日はポートアイランドへは渡らずに巌戸台を見て回ることにしていた。
ポートアイランドはいかにも都会といった感じだが、港町である巌戸台の方は稲羽とまではいかないが田舎特有の落ち着いた雰囲気となっている。
しかし、それ故に観光地として見所のある部分は少ない。
一行が辿り着いたのは小さな神社。
学業成就が主で、賽銭を注ぎ込めば必ず頭がよくなるという噂がある神社らしい。
他にも病気平癒、金運上昇にご利益があるとりせは解説してくれた。
恋愛おみくじもあるらしく、りせはそちらに乗り気なようだ。
長鳴神社というらしい。
赤い鳥居。
そこから伸びる階段を上ると、一匹の白い犬が総司達を出迎えた。
足音を聞きつけたのか、視線はまっすぐに一行に向いている。
首輪はあってもリードや鎖がないことに総司は不安を覚えつつも、

吠えもせずにじっとしているのでそのまま階段を上りきった。

「お、犬っスよ、犬！」

総司の後ろから階段を上っていた完二は犬に気付くと真っ先に犬に駆け寄っていく。

犬は動かない。

ただ、視線を総司から完二に移した。

「よしよし」

「わふっ」

完二が体を撫でると、犬は気持ち良さそうに目を細める。

千枝もしゃがんで一緒に撫でた。

「おー、うちの犬よりおりこうさんだ」

「里中、犬飼ってるんだ？」

「うん」

総司の言葉に千枝は頷く。

「チョーソカベっていうの」

「ムクだよ……」

千枝の飼い犬を知っているらしい雪子が訳知り顔で言い、千枝は苦笑しながら訂正した。

大人しく撫でられていた犬は鼻をひくつかせながら総司に近付く。

「ワン、ワン！」

匂いを嗅いでいた犬は、嬉しそうに鳴いて総司に飛びついた。

「おっと」

総司は倒れないように足を踏ん張って耐える。

犬は後ろ足で立ち上がって総司の体に前足を着き、尻尾を勢いよく振っていた。

特に犬が好みそうな物は持ってないはずだけど、と総司は首を傾げる。

「さすがセンセイ！
モテますね～」

顔を擦り付けて喜びを表現する犬を見て、嬉しそうにクマが体を揺すった。

雪子が総司に抱きついたままの犬を覗き込む。

「柴犬、かな？
白い柴犬って珍しいね」

「ほら、アレじゃない？
えーと……アルビノ？　ってやつ」

「白い毛に赤い瞳…確かにそのようですね」

千枝が犬を撫でながら言い、直斗は同意する。

先天的なメラニンの欠乏で体毛や皮膚が白く、瞳孔は毛細血管の透過により赤色となるアルビノ。

白い毛並みに赤い瞳を持つ柴犬はその特徴を持っていた。

「そういや、茜ちゃんも目、赤いよな」

犬の赤い瞳に顔を近づけて陽介が言う。
茜を拾った時のことを思い出しているのかもしれない。
確かに、茜が目を開いた時のあの赤い色は印象に残っていた。
その名前に相応しい、綺麗な茜色の瞳だと。

「でも、茜ちゃんはアルビノってわけじゃないんじゃないかな。
肌とか髪とか別に色が薄いってわけじゃないし」

りせは他の部分の色素の事を上げたが、目だけアルビノという場合も実は存在する。
だが目に色素のない、つまり赤い瞳のアルビノは視力が出にくく、それを眼鏡で矯正することも出来ない。
茜にはそういったことから来る不自然さはないし、実際、保護した後記憶喪失という事で堂島に病院に連れて行かれたそうだが異常は無かったと総司は聞いていた。

「っと、ちょっと落ち着いて！」

突然、更に体を押し付けてきた犬に総司は慌てて声を上げる。
ハッハッと息を荒くして、尻尾を千切れんばかりに振っている犬のテンションは最高潮だ。

「先輩、モテモテっスね……」

羨ましそうに完二は言う。

「そろそろ行きますか」

おみくじをひいて戻ってきたりせに気付いて時計を確認した直斗が促す。

総司は頷いて、自身の体に抱きついていた犬の前足を地面に下ろした。
悲しそうにクーンと鳴いた犬は、何かを思いついたように砂場に走って行き、砂を掘り起こしたと思ったら再び総司の元へ戻って来る。
そして、その口に咥えられた何かを総司の手の平に落とした。

「ワフ」
「ん？
くれるの？」
「ワン！」

尻尾を振って犬が鳴く。
総司は自身の手の平を見る。
そこにあるのは、小さな人形だった。
犬を見ると、キラキラした瞳で総司を見上げている。
人形をポケットに入れて、総司は犬に微笑みかけた。

「ありがとう」

／＊／

昼食は駅前商店街で摂る。
集合場所が巌戸台駅なので、ギリギリまでゆっくりできる。
総司達は”はがくれ”というラーメン屋に入った。
りせのオススメスポットらしい。
ドラマのロケで近くに来た時は、ロケ弁を断ってよく食べに来ていたそうだ。

「んーっ！

やばい、うまいよコレ！」

麺を啜った千枝が幸せそうに声を上げる。

「ここのラーメン、この辺で一番おいしいんだから。

あー、変わんないなー、この味。

炭水化物太るから、あんまり来れなかったけど、好きに食べれるなんて夢みたい！」

「あ…おいしい！

ちょっと変わってて、後引く感じ」

「ね、ね？」

千枝や雪子の言葉に、りせは我が事のように嬉しそうに笑う。

その横で、チャックを開けてキグルミの頭と胴体の隙間からラーメンを啜り込んでいたクマが手を上げる。

「おかわり！

メン、固めで！」

はいよ、とカウンターの向こうの店員が返事し、それほど待たないうちにクマの丼に新たな麺が追加される。

繁盛しているようで、客の出入りは激しい。

新しく入ってきた客が席に着きながらはがくれ丼ね、と注文する。

それを聞いたりせが驚いた表情で店内を見渡す。

そして一枚のメニューの短冊を見つけて項垂れた。

前にりせが来店した時は隠しメニューだったらしい。

「そう言や、大丈夫なのか？

顔、モロ出しで来てるけどさ」

「平気、平気」

こっそりと陽介は言うが、りせはお気楽そうに答えて自身の上の壁を指す。
カウンターの上の壁には何枚もの色紙が並んでいた。
その中にりせのサインもあるが、店内のだれも気付いた様子はない。
店員もだ。
ポートアイランドへの玄関口となっているこの町は、見かけは田舎でも人の出入りは激しい。
稲羽とは違い有名人は珍しくなく、似てるなと思っても話しかけられたりは殆どしないのだ。

「しかも殆どノーメイクだしね」
「あ、ほんとだ、サインあるね」
「つーかバレないの、コイツの方が全然目ぇ引くからでしょ……」

千枝が横目でクマを見やる。
クマは、もう一度麺の追加注文をしていた。

「てかお前、さっきもお代わりしてなかったか？
何杯目だよ？」
「クマ、数、分からない」

可愛らしく首を傾げるクマに、陽介はうそつけ、とクマの伝票を手に取る。
そこには数字が正の字で表現されていて、それが二つ。
つまり。

「じゅ、１０杯！？」
「……お待ち」

クマの丼に麺が投入される。

「これで１１ね」

一つげっぷをして、クマは丼を引き寄せた。

時刻はもうすぐ１時。

時計を見た直斗が告げる。

お土産を選ぶならそろそろ店を出る必要があった。

「あー、もうそんなかぁ……

旅行、メンドくさーって思ってたけど、終わってみれば割と楽しかったかも」

千枝は名残惜しそうに言ってスープを飲み干す。

そして、立ち上がった。

他のメンバーも立ち上がる。

「おっし、じゃ行くか。

おいクマ、行くぞ」

クマは動かない。

「おい、クマきち」

陽介はクマの頭を叩いた。

うえぷ、とクマは口元を押さえる。

「おなか、おもたい。

たべすぎた……

動けんクマ…運んでけれー」

そう言うクマの丼の中は、すでに１１杯目の麺もスープも残ってはいなかった。

／＊／

「お前、ちゃんと茜ちゃんに謝れよ？」

ジュネスのエレベーターの中で、陽介はクマに言った。

荷物持ち手伝うからフードコートで待っていて、と総司は事前に堂島宅に電話しておいたので、この時間なら茜はもうフードコートにいるはずだ。

「ううー……」

「ほらほら、付いてってあげてるでしょ」

呻くクマの背を千枝が叩く。

上昇していたエレベーターが止まり、扉が開く。

一行はクマの背を押しながらエレベーターホールを出た。

もうタイムセールは終わっているので客は少ない。

「……え？」

雪子が声を上げた。

視線の先には一人の少女。

茜が走り出す。

「クー！」

スタートダッシュ。
地面を蹴り上げて、跳び上がる。

「マ！」

着地地点は横を向いた椅子。
そこから更に跳び上がる。

「の！」

着地地点はテーブル。
そこから更に跳び上がる。

「バカぁぁ～～～～～～～～っ！！」
「ぬわー――――――――――！？」

そして、見事なドロップキック。
クマは堪らず背中から倒れる。
受身を考えて無さそうなキックだったが、茜の着地場所はクマの腹の上。
ボヨン、と跳ねるだけでケガはない。
茜はクマのチャックを外し始める。

「ちょっ、アカネチャン！？
こんな場所でクマに脱げってゆーの！？」
「おしおきなんだから、あばれちゃだめーっ！！
……ジークフリード！！」
「茜ちゃん、茜ちゃん！！
光！　青い光洩れてるから！！」

ペルソナ降魔による身体能力で無理矢理キグルミを奪おうとする茜に、陽介が叫ぶ。
幸い、人が少ないので見られてはいないようだ。
直斗もこの場にはいない。
結局クマはキグルミを奪われ、中身はポイ、と捨てられた。
茜は中身のなくなったキグルミの中に入ってチャックを閉める。
少しよたついたクマの完成だ。
そして、キグルミ茜は完二に近付く。

「さあ、かんじくん！
思うぞんぶん、ふわふわするがいい！！」

手を広げてそう宣言するキグルミ茜。
クマがウギャー！！、と叫んだ。

「や、やめるクマ！
クマのプリチーボディは女の子とセンセイのなのー！！」

クマの叫びを無視して、キグルミ茜は完二に襲い掛かった。
押し倒されて、完二はキグルミの下敷きとなる。

思う存分ふわふわを堪能したのは言うまでも無い。

／＊／

家に帰った総司に気付き、菜々子は走って総司を出迎えた。
総司は旅行用の大きな鞄に土産物、そして茜の買い物用エコバッグ、と荷物に埋もれている。

茜のお菓子を食べてしまった罪滅ぼしだ。
旅行の感想を聞いてくる菜々子にいい所だったよ、と答えつつ荷物を降ろす。

「今度は家族で行こう。
茜ちゃんも行きたがってたしね」
「ぜったいだよ！
あたし、すっごい行きたかったんだから！」
「うん、菜々子も行きたい！
あのね、デスティニーシーも行きたい！
ジェットコースターでね、ざぶーんて……」

菜々子は楽しそうに行きたい所を羅列する。
総司はようやく軽くなった体にホッと息をついて、紙袋を菜々子に差し出した。

「これ、お土産」
「わー！
ありがと、お兄ちゃん！」

菜々子は受け取って、さっそく広げ始めた。
茜もそれに参加する。
お菓子に佃煮、Tシャツと、とにかく種類を多めに総司は買ってきていた。

「すごーい！
かっこいー！」

その中でも、菜々子は提灯をとても気に入ってくれたようだ。
茜には意外にもカップ麺が好評だった。

いつもしっかり作るからインスタント系はそれほど好きではないのだと総司は思っていたのだが。
はがくれのラーメンが美味しかったので自分用に買ったはがくれカップ麺だったが、茜にあげることにした。
これで機嫌が直るのなら安いものである。
土産物を広げていると、堂島も帰ってくる。
床に並ぶいくつもの土産物に、堂島は少々呆れているようだった。
堂島が帰って来たので菜々子は提灯を飾るために居間を後にし、茜は買って来た食材を冷蔵庫へしまい、仕込みしてあった料理の仕上げに入る。

「すまんな、小遣いから買ってくれたんだろ？
確か、辰巳ポートアイランドだったか。
ハハ、お前、都会は珍しくないんだよな」

堂島は背もたれにスーツの上着をかけて椅子に座る。

「そう言やあれか、1年も合同って事は、白鐘も一緒か。
お前、あいつとは結構話すのか？」
「そうだね、割と。
今日も自由行動一緒したし」

一人ポートアイランドにいた直斗。
下心が透けて見えていたとはいえ話しかけてきた人間を手酷く断り、班行動も取らない彼は、恐らく陽介の言う”学校デビュー”は完全に失敗している。
そんな中で修学旅行の自由行動を共に行動した自分達はかなり話している方だと総司は思う。

「あいつ、妙に大人びてるが、ほんとはお前の1個下なんだよな……

仲良くしてやってくれないか。
生意気なガキだが……根はまっすぐな奴だ」
「それは、もちろん」
「そうか……ああ、そうしてやってくれ」

総司の言葉に、堂島は小さく微笑んで頷く。

「あいつはさ、今も、バカみたいに正論言い張って、上の連中にケムたがられてる。
怒らしたって、切り捨てに遭うだけだってのにな……
……勝手だな、大人は」

直斗が協力者になった当初は酔っ払って帰って愚痴るくらい衝突していたが、堂島は彼を認めているようだ。
その反面、直斗を気に入っていたらしい上層部は今は直斗を煙たがっている。
堂島の表情は優しい。

「夕飯出来たよ！」

夕飯の仕上げが終わり、茜が声を上げる。
茜の機嫌はもう完全に直っているようだ。
手伝うか、と言って堂島は立ち上がる。
総司は食卓を拭く為にテーブルに置かれていた布巾を手に取った。
チラリと総司は茜に視線を向ける。
堂島に盛り付けの終わった皿を渡している茜は明るく笑っていた。

／＊／

時間は遡る。

総司達が立ち去って、数分ほど経った長鳴神社。
そこに中学生くらいの少年と、ニット帽を被ってコートを着込んだ目付きの悪い男がやってきていた。
出迎えるのは、白い犬。

「コロマル！」

少年が名前を呼んで犬に駆け寄る。
コロマルと呼ばれた犬は尻尾を振ってそれを迎えた。

「ワン、ワン！！」

だが、いつもと少し様子が違う。
ニット帽の男が首を傾げた。
男はコロマルの前で片膝をついて視線を近づける。

「どうした？
コロちゃん」
「ワン！　ワワン！！」

コロマルは、尻尾を振って飛び跳ねている。
随分テンションが高い。

「なんか、妙に興奮してますね……」
「何かあったのか……？
でもアイギスがいないからなぁ。
ほら、落ち着けって。
エサ持って来てやったから」

男はコロマルを荒っぽく撫でて、懐から密封されたタッパーを取

り出す。
男がコロマルの為の食事を用意している間に、少年は神社の賽銭箱に近付いた。
その中に、躊躇無く千円札を投入する。
その額に少し驚いて男が顔を上げた。
手を合わせている少年に、何を祈っているのか訊ねる。
少年は少し笑った。

「今は、普通に学業成就ですよ？
昔、勉強法聞いた事があるんです。
皆テスト勉強で部屋にこもってる時期に一人出かけようとしてたんで。
そしたら、ここでのお参りと、”ＤＨＡ盛りだくさん定食”だって」

少年の答えに男は苦笑する。

「勉強法なのか？　それ……
……あいつ、か」

男は遠い目をして空を見上げた。
そんな突拍子もないことを言い、実際そうしてるとしか思えない結果を出す人物を彼らは一人、知っていた。
少年は一つ頷く。

「はい。
茜さん、ですよ」

抜け駆けの末路（後書き）

そう言えばこの話書いてる時に思ったんだけど、なんで9／8は月光館学園、休校だったんだろう。
木曜だし、P3本編の時はチドリ尋問のあたりの筈だけど、学校休みだったっけ？
イベントしか覚えてないや……

まぁ、そういうわけで修学旅行はこれで終わりです。
仲良さげな天田くんとガッキー、そしてクマへの制裁が書けて満足です。
そういや、ハム子一周目は気がついたら天田君一筋になってました。
攻略見てなかったから本命の真田センパイ落とせなかったのよね……
コロマル、愛してる！！（↑超本命）

直斗の計画

■9／12

昼休みの始まりを告げるチャイムが鳴り響く。
教室内に喧騒が広がり、仲の良い者同士で机を合わせたり教室を出て行ったりで昼食に入る。
その中で、尚紀だけが独りだった。
皆、目が合うと逸らしてしまう。
小さく溜め息をついて、自分の机に鞄から取り出した弁当を机に置いた。
弁当箱を包んだ大判のハンカチを解く直前、教室のドアが開く音と同時に名前を呼ばれて尚紀はそちらを見る。
そこには総司が立っていた。
手に持った弁当箱を掲げて、ニッと笑う。

「一緒に、どうだ？」

／＊／

今日は風もなく、屋上は過ごしやすい気温だった。
何組かのグループが点在していて、その中に総司と尚紀もいた。
おかず交換なんて尚紀は久しぶりだったが、貰ったおかずはとても美味しくて、こちらがトレードに出せるのは冷凍食品しかなくて悪いなと思った程だった。
しかも、そのおかずを作ったのが総司自身だという。

「……瀬多さんって、変わってますよね」

口の中のおかずを名残惜しいが飲み込んで尚紀は言う。
誰もが尚紀を遠巻きにする。
可哀相ねといいつつ、全てを取り上げていく。
委員会も、部活も。
テストですらも、課題提出に切り替えられた。
何もしなくてもいいように。
立ち上がらなくていいように。
そんな中、総司だけが違った。
訳知り顔で説教する時以外に誰も近付いてこない尚紀に積極的に話しかけて。
他の人間が遠まわしに、しかし根掘り葉掘り聞き出そうとする話題も直球で聞いてくる。

「そう？」
「そうっすよ。
……居心地、いいです」

尚紀は小さく笑ってご飯を口に運ぶ。
総司の隣は居心地がいい。
聞き上手で、心を落ち着かせてくれる。
だから、誰にも言ってなかった事でも言える。

「……俺ね、シュークリーム好きなんです。
女みたいですけど」

コニシ酒店近くのお気に入りの洋菓子屋のシュークリーム。
学校帰りに寄って、時々買ってきてはお腹が空いたときに食べようと冷蔵庫に入れていた。

「けど、冷蔵庫入れとくと、姉ちゃんに食われちゃうんですよ。

”賞味期限が切れかけてたから食べてやった”とか、適当なこと言うから毎回、口ゲンカになるんです」

空になった弁当箱の蓋を閉める。

「……でももう、シュークリームは無くならない。
冷蔵庫の中で、賞味期限、切れました」

空にならなかった冷蔵庫の中の皿。
”あ、ひょっとして”。
それを見た時、尚紀は初めて喪失感を覚えたのだ。
”ひょっとして、姉ちゃん、いなくなったんじゃねーの”、と。
だから、尚紀はシュークリームを捨てた。
食べる人は、もういないから。

「俺、前に瀬多さんに、”犯人が憎いかと聞かれれば、ノーだ”って言いましたけど……
ほんとは、ノーですら無いんです……
何も、分からない」

あるのは、全てを取り上げられてぬるくなった日常と、威勢を張る親と、電気が消えた家。
そして、腐ったシュークリーム。
どうすれば抜け出せるのか、何が自分や姉のためなのかが分からない。
何故、早紀は死ななければいけなかったのだろう。
尚紀自身や家族も巻き込まれて。
立ち止まっていると分かっていても、このままじゃ駄目だと分かっていても、ぬるい日常はまるで底の無い沼のようで、ずぶずぶと心と体を飲み込んでいく。

「……あの」
「ん？」
昼休みの終わる直前になって尚紀は口を開いた。
放課後、ジュネスに付き合って欲しい、と。
総司は案内するよ、と頷いた。

／＊／

放課後。
約束通りにジュネスの中を案内する。
尚紀は商店街とジュネスの対立なんて関係ないというスタンスを取っていたが、実際入ったことはなかったらしい。
メインは食品売り場。
特に酒屋の息子としては酒類のコーナーは気になるところだろう。
酒の種類の豊富さ、値段に驚いていた。
スイーツの置いてある一角で、尚紀は早紀がジュネスのバイト後にシュークリームを貰ってきた話をしてくれた。
シュークリームを、ジュネスのはマズイといいながら二人で分けて食べた事。
早紀は、ジュネスのバイトが辛い様子だったらしい。
陽介は、早紀は仕事が楽しそうだったと言っていた。
もしかしたらそれは表面だけで辛かったのかもしれないし、家や近所での風当たりが強かったせいかもしれない。
正確には解らない。
それでも早紀は、きっとウチの店のためになるから、と話していたそうだ。
フラフラしているくせに、変なところで長女ぶる。
それが、尚紀から見た姉の姿だった。

「……すごいですね。
あれじゃウチ、勝てないっすよ」

食品売り場に衣料品売り場、そしていつもの家電売り場。
1階からどんどん登って順番に見て行き、最終的にフードコートに腰を落ち着けた尚紀が息をつく。
ジュネスは確かに便利で。
ここに来れば商店街を回っても揃わないものが全て揃う。
値段も安売りの札が一杯で勝てる気がしない。
だけど、最近のコニシ酒店の景気はいい方だった。
早紀の事件で可哀相だと言って買いに来てくれる客が増えているのだ。
なんとも皮肉な話ではある。

「あれ、総司？」

背後に聞きなれた声がかけられて総司は振り返る。
そこにはエプロンを身に着けた陽介の姿があった。

「来てたのか…って……
もしかして、小西先輩の……」
「ど…どうも……」

嬉しそうに駆け寄ってきた陽介は、総司の同行者に気付いて足を止めた。
尚紀は小さく会釈する。

「……ジュネス、初めて来ました。
……すごいっすね、広くて……

見てるだけで、満足できるような……
何か、一つの国みたいだ」

尚紀の言葉に、陽介は苦笑する。

「それ、お前の姉ちゃんも言ってたよ。
……やっぱ顔、似てるな。
あごと、鼻と、目のあたり」

陽介の言葉に、尚紀は顔を背ける。
小さく、呟いた。

「やめてください……
…もう、姉はいないんで」
「……寂しいよな」
「やめてください！
あんたに何が分かるんだよっ！？」

早紀のことを話すのを止めようとしない陽介に、尚紀は食って掛かる。
テーブルを両手で叩いて立ち上がった。
飲んでいたジュースの缶が少し揺れる。

「……自慢の弟だって、言ってたよ」
「……！」

尚紀が息をのんだ。
激昂していた尚紀と違い、落ち着いた表情で陽介は話す。

「俺、お前の姉ちゃんのこと好きだったよ」

「……過去形なんすね」
「俺…俺と、お前の姉ちゃんのために、今、できることをやってる。いつまでも泣いてたら、姉ちゃん、困っちゃうぜ？」
「……泣いてません……」

陽介は小さく笑う。
少しだけ落ち着いたらしい尚紀が座った。
尚紀の言う通り、尚紀は泣いていなかった。
だけど、涙を流していないだけだ。
尚紀の様子は、まだ泣くまいとしていた頃の、まだ乗り越えていなかった時の陽介と被っているように総司には見えた。

「おっし、今日はビフテキ祭りだな。
３枚、買ってくるわ。
あ、総司は後で金払えよ」

そう言って、陽介は売り場の方へ走っていく。
その後姿を尚紀は苦笑しつつ見送った。
お節介だな、と思う。
それは総司にも同じ事が言えるが。
ずっと、嫌いだと思っていた。
しかし話してみれば総司の時と同じように、そんな気持ちはいつの間にか消えてなくなっていた。
今日ここに来れて良かったと、そう思った。
一人では来れなかったし、来ようとも思わなかっただろう。

「ほらほら、ビフテキお待ち！」

目の前に置かれた湯気の立った肉に、尚紀はナイフを当てる。
切って、フォークで口に運ぶ。

硬くて筋張った肉の味。

「うまい？」

「まずいっす」

陽介の言葉にキッパリと尚紀は答える。

大体、稲羽の名物がビフテキなんていう話はここ最近出てきた話だ。

近くに牧場があるわけでもない。

一部で本当は牛肉ではないのではないかと言われているくらいだ。

「じゃ、マトモだな」

声を上げて笑う陽介。

尚紀の食べる様子を、陽介は暖かく見守っていた。

／＊／

家に帰ると、台所と居間には誰もいないようだった。

普段帰る頃は夕飯の準備などで茜が台所にいるし、菜々子も大抵台所か居間にいて、玄関を開けると出迎えたり声をかけてくれたりする。

だけど今日は玄関を開けても静かで、声は聞こえなかった。

台所を覗くが、やはり誰もいない。

今日はジュネスで夕飯（ビフテキ）を食べているのでいつもより帰宅時間が遅かったから、茜達の夕飯も終わって部屋に戻っているのかもしれないが。

事前に夕飯辞退の電話を入れているので、調理スペースにラップをかけて置かれている料理の乗った皿は堂島の分だろう。

電気がついているところを見ると出かけてはいない筈だ。

テレビもつけっぱなしでニュースを流している。
ふと、窓の向こうの縁側に、見慣れた後姿が見えて総司は窓を開けた。

「あ、おかえり」

総司に気付いた茜が言う。

「ただいま。
何してたんだ？」

総司はそう声をかけるが、振り返るまでの茜の視線を追って、彼女が何をしてたのかは分かっていた。
空には丸い月。
満月だ。
茜が微笑む。

「ね、総司くん」

総司は茜の声を聞いて、違和感を感じた。
そして、すぐに気付く。
出会った頃と比べて、茜の言葉がしっかりしてきている事に。
幼い子特有の、舌足らずな部分が消えつつあった。
おそらく、それは記憶が戻りつつある証拠だ。

「あたし、思いついちゃった。
真犯人がいるか確かめる方法！」
「え！？
ど、どんな？」

身を乗り出して訊く総司に、茜は得意げな表情になる。
言葉がしっかりしてきても、頭の回転が速くなっても、こういう部分は変わらないようだ。

「あのね……」

内緒話をするように、茜は声を潜める。
だけど、そのおかげでテレビの音が大きく耳に入ってきた。
聞き覚えのある名前に、今まさに打ち明けようとしていた茜も縁側から身を乗り出してテレビを覗き込む。
スーツを着たテレビのアナウンサーの隣に座る、見知った青い色彩。

『今日は宜しくお願いします』
『はい、よろしくい願いします』

白鐘直斗が、そこにいた。

「な、なおとくん…！？」
「えっと……？
”稲羽市逆さ磔・連続殺人事件を解決に導いた、甘いマスクの探偵王子・白鐘直斗の素顔に迫る！”？」

茜が驚きの声を上げ、総司は右下の部分に表示されたテロップを読み上げる。
未だに事件について報道しているニュース番組の1コーナーらしい。
アナウンサーがお手柄でしたね、と直斗を称える。
褒められても、直斗の表情は変わらない。
淡々とした口調でマイクに声を吹き込む。

『手柄と呼べる程のものじゃありません。
確かに、先日の諸岡さんの事件については犯人の仕業に間違いありません。
ですが、事件の全体像を見渡したとき、僕には幾つか違和感が残ります』
『はあ…と、言いますと？』

予定外だっただろう直斗のその言葉に、アナウンサーは首を傾げた。
具体的な事は残念ながら、と直斗は言葉を濁しつつ、ですがと続ける。

『事は三人もの犠牲が出た殺人事件です。
小さな違和感でも追求すべきだと僕は思います』
『は、はあ……
警察会見の内容と、若干異なるようですが……
で、では次に、”探偵王子の素顔”と題しまして、直斗君自身のことを聞いていきたいと思います。
”探偵王子”が今まで解決してきた事件は何と２４件。そのうち１６件が……』

直斗の段取りには無かったらしい言動にタジタジになりながらも、アナウンサーは何とか予定通りに番組を進めようと次の話題に移る。
だけど、そんな涙ぐましいアナウンサーの努力は茜には届かないらしい。
茜はただ、ぐったりと縁側にへたり込んでいた。

「……なおとくんに先こされた……」

そして呟かれるそんな一言。
つまり、直斗が取った行動は、茜が”真犯人が存在するのか確かめる方法”だったということだ。
そこまで考えて、総司は直斗と茜の狙いに気付いた。

「まさか……」
「んっとね、あたしが”きおくそうしつで親をさがしてます”みたいな感じでニュースに出たらって思ってたんだけど……」

犯人に狙われる前提条件は”メディアに出て急に知名度を上げた稲羽の人間”。
久保美津夫が犯人の場合は、もう捕まっているので何も起こらない。
だけど、真犯人がいて、久保美津夫（スケープゴート）が捕まっているのにも拘わらず犯行を続けようというのなら……

「それで狙われたら真犯人がいるって？
囮じゃないか！
そんな危ないこと……！」
「だ…だって、あたし、ペルソナあるから放り込まれても何とかなるもん」
「それでも、危険な事はダメ」
「ううー……」

怒鳴られて、茜は首を竦める。
頬を膨らめて反論してくるが、それでもダメなものはダメだ。

「だけど……ということは……」

総司は呟いてテレビ画面を見る。

直斗は”難事件を解く力になれれば報酬は要らない”と言うような人間だ。
テレビに自分から出たがる可能性は低い。
このタイミングでのテレビ出演は偶然ではない筈だ。
テレビでは直斗がこれまでに扱ってきた事件や直斗の経歴などを紹介していた。

■９／１３

「……直斗」

朝、学校へ行くために家を出ると、向かいのブロック塀に背を預けていた直斗が姿勢を正した。
直斗は学校の制服ではなく、私服で、通学鞄すらもっていない。

「おはようございます、先輩」
「テレビ、見たよ」
「そうですか」

総司が告げると、直斗は不敵に笑った。

「……実は、事件の事でお話があって来たんです。
現時点での僕の考えを聞いてもらえますか？」
「……いいよ、聞こう」

頷くと、直斗は自身の見解を述べていく。
それは、大体総司達が把握している事柄と合致していた。
殺害の前に必ず誘拐されるという事。
狙われる条件。
総司はそれを肯定する。

「では、単刀直入に言いましょう。
狙われる条件に、貴方のグループの何人かも当てはまるという事は、認めますか？
今回の事件は、2件目と3件目の間に長いブランクがありました。でもさっきの条件を踏まえて調べると、それらしい”失踪”は続いていた」

天城雪子、巽完二、久慈川りせ。
直斗は被害者の名前を挙げていく。

「何かの訳で死を免れたか、自分から目をそらすため、自身を被害者の一人に見せかけたか……
殺された被害者とも何人かは接点がありますし、皆さんの誰かが犯人かと疑った事もあります」
「今は？」
「それと全く逆だと思っています」

直斗は総司の質問に、そう答える。
犯人ではなく、追いつめる”手段”を持っている集団。
懐柔ではなく。
助けたからこそ仲間が増えていっている。
想像に過ぎないが、そう考えれば全ての辻褄が合うのだ。

「ただそう考えると、やはり3件目……
諸岡さん殺しはおかしいんですよ」

例外だらけの3件目。
狙われる条件であるはずのメディアに出ておらず、失踪した形跡もない。

1件目、2件目は未だに詳しい死因は不明だが、諸岡金四郎だけは鈍器による後頭部強打が直接の死因だと分かっていた。

「警察はこの違いに納得のいく答えを持ってないにも拘わらず、事件を収束するのに必死です。

この上は、何か確証を掴める行動が必要でしょう」

「それがあのテレビってわけだな。

囮になるつもりか？」

直斗は頷く。

その為に出たくもないテレビに出たのだ。

そして、この問答が総仕上げ。

言わば保険だ。

自分が誘拐された場合、犯人を追う手段をもっている総司達の誰かに気付いてもらう必要がある。

だけど、彼らが追いつめた犯人はすでに捕まっている。

彼らが直斗が失踪した時に気付かない可能性があった。

だから直斗はグループのリーダーであり、一番事態を理解し、自身の話を理解してくれるであろう総司の所に来たのだ。

そして、総司は直斗が囮になろうとしている事に気付いてくれた。

やはり総司の所に来て良かったと直斗は思う。

「そうです。

僕はしばらく学校を休んでせいぜい目立ってみせますよ」

「うちのがテレビに出るって言い出すタイミングだったからな」

「なるほど……貴方のところで預かっている身元不明の子供ですね。

有里茜さん、でしたか」

直斗は一時、総司達の誰かが、もしくは複数が犯人という可能性を考えていたので、もちろん総司達の事も調べていた。

まだ年齢も一桁だろうに、捜索願すら出されていない女の子。
直斗が調べた中で、茜だけが唯一来歴が分からなかった。

「……気を付けろよ」

総司の言葉に、直斗はもう一度頷く。

「お気遣い、ありがとうございます。
まぁ、結果がどうあれ……
これで何かが掴めるでしょう」

油断するつもりはない。
総司に会いに来たのは、ただの保険。
直斗は、自分こそが解決したいと思っていた。
目線を上げて、総司と目を合わせる。
そう、目線を上げないと、直斗は総司と目を合わせることができない。
きっと、彼なら似合うだろう。
直斗は微かに顔を顰めて、総司に背を向けた。
用は済んだ。

――遊びはそっちじゃないの？

あの日、言われた言葉が直斗の胸を掠める。
この事件は、必ず解決させる。
そう直斗は誓う。
自分のやっていることが遊びではないことを証明するために。

■9／14

商店街の四目内書店の横の壁に、その扉はある。
蒼く仄かな光を放つ不思議な扉。
目を引きそうではあるが、この扉は普通の人間には見ることが出来ない。
それはペルソナ使いでも同じこと。
この扉を見ることができるのは、ペルソナ使いでも特殊な力がいる。
複数のペルソナをその身に宿すことのできるワイルドの力だ。
そして、何らかの契約を交わして鍵を手にしたものだけが訪れることが出来るようになる。
総司は書店の表に平積みされている本を見る振りをして、自身が注目されていないか辺りを見渡した。
誰も見てない隙に、契約者の鍵を鍵穴に差し込んでドアノブをひねる。
次の瞬間、総司は青い内装のリムジンのシートに腰を降ろしていた。
夢と現実、精神と物質の間にあるというベルベットルームだ。
いつものように、テーブルを挟んだ向かい側にはイゴールが座り、窓に背を向けるように設置されたシートにマーガレットが座っている。

「今日はいかがなさる？」
「ペルソナの合体に来たんだ。

何かある？」

静かに微笑むマーガレットに総司は答える。
真犯人がいて動くなら、またテレビの中のダンジョンに挑むことになる。
その前に、少しでも力を強化しておこうという魂胆だった。

「そうね……
今日はハヌマーンとヒトコトヌシを素材にすれば”武道の心得”を覚えるようね」
「じゃあそれで」
「それでは……」

総司の言葉にイゴールは手の平を総司に向けた。
総司の体から青白い光が立ち上り、それは2枚のカードになる。
描かれているのは猿の姿のハヌマーンと、緑の葉が固まって人の形になっているヒトコトヌシ。
白い光。
そして。

「……え？」

カードがひらりと床に落ちた。
いつもなら、光の後に魔法陣が現れてカードが一つになるのだが。
マーガレットが珍しく驚いた顔をしている。
少し慌てたようにイゴールがテーブルの下に入り込んだカードを拾う。
掲げると、もう一度白い光。
光の中から現れたのは。

――……久しぶりだな、汝よ。

イザナギだった。
だが、本来ならあの組み合わせでできるのはホクトセイクンというペルソナであってイザナギではない。
予想外の事態に総司は目を丸くする。

「おっと、これは……
”ワイルドカード”ですな」
「えっと……何？」

総司が訊ねると、イゴールはその長い鼻を決まり悪げに掻いた。

「誠に申し上げにくい事ではございますが……
私どもの力も”完全”とは参りません。
ごく稀な事ながら、カードの展開を誤る事がありまして……
”事故”を生じてしまう事がございます」

人間かどうかは怪しいが、完璧なものなどいないという事なのだろう。
総司がイザナギを見上げると、イザナギが仮面の向こうで笑った気がした。

――コンゴトモ、ヨロシク。

／＊／

学校で、町中で。
直斗の話題は着実に町の中に浸透していった。
直斗の狙い通りに。
雨の中、日付が変わる。

「……うつった！」

茜が小さく叫ぶ。
暗闇の中、電源の切れたテレビに砂嵐に続いて映像が映る。

映像はぼやけていて、人影が映っているが、これだけでは誰だかは分からない。
だけど、それ以外に判断基準があるのなら、誰が映っているのか想像するのは容易い。

「ぼやけてるけど、今までのパターンから行くと直斗だろうな」

メディアに出て、急に知名度が高まるとマヨナカテレビに映るようになる。
確かにぼんやりとした人影を直斗だと思って見れば、そう見えなくもない。
この状態ならまだ入れられてはいない筈だ。

「そう言えば……まだ誘拐されていない段階で映るぼやけた映像は犯行予告みたいだって意見あったよな」

被害者の心が映るのなら、犯人の心も映っているのではないか。
これは、狙いを定めた犯人の心が映っているのではないか。
そんな話だった。
だが捕まっている美津夫は、おそらく外のことは分からない筈。
直斗の知名度が上がったことなど知らないだろう。
それならば、美津夫はマヨナカテレビの映像には関わっていない事になる。
真犯人がいて、その心が映っているのか。
それとも、全く別の理由があるのか……
茜が首を傾げる。

「どうだろ。
うつる対象の事を思ってる人の心がうつってるのは確かだけど。
だれの心がうつってるかまでは分かんない」

そこまでは茜でも分からないらしい。

「だけど」

総司が言い。

「うん」

茜も頷く。

条件は、整った。

後は。

犯人が動くかどうかだ。

直斗の計画（後書き）

総司が茜の変化に気付くの巻。
皆さんは気付いてましたか？

満月の日付を迎える毎に、少しずつ茜の言葉に使える漢字を（見落としあるだろうけど）増やしてました。
５年生レベルになったので、ようやく総司の名前を漢字で呼べます。
正直、舌足らずのひらがなの方が子供っぽくてカワイイと思うんですが、これればかりは記憶を取り戻しつつあるという演出なので避けて通れません。
ひらがなだと台詞分かりにくいし。

そして作っちゃいました事故ナギさん。
でも実際のプレイの方では、まとめプレイしてて日付スルーしちゃいました（ノ∀、）
感想で、事故より主人公覚醒で改を作って欲しいと意見を頂きましたが、主人公覚醒は世界アルカナの某御方イベントがあるのでごめんなさい。
オリジナルペルソナは世界&ａｍｐ;宇宙コミュＭＡＸ解禁の２体だけの予定です。

では以下は事故ナギさんの所持スキルです。
あえて弱点はそのまま。

”愚者”イザナギ　雷耐／闇無／風弱

武道の心得
アリ・ダンス
ラクンダ
利剣乱舞
ブレイブザッパー
チャージ
電撃ハイブースタ
マハジオダイン

理想の探偵

……ザ…ザザザ……

それは、手術室のような雰囲気の部屋だった。
人が寝そべれる大きさの台に、それを照らせる位置で固定された無影灯。
画面の左上にはＬＩＶＥの文字、右下にはテロップが表示されている。
曰く、”禁じられし秘宝！　世紀の大実験・ゲノムプロジェクト”。

『皆さんこんばんは、”探偵王子”こと、白鐘直斗です』

画面中央に歩いてきたのは、本人が言う通り直斗だ。
私服の上から白衣を着ている。
だけどその白衣は大きくて、特に袖口は腕よりかなり長めで指先すらも出ていない。
それが背の低い直斗を更に低く、そして幼く見せていた。

『”世紀の大実験・ゲノムプロジェクト”へようこそ。
僕がこれから受けるのは、人体改造手術……
あなたがたは今こそ目にするでしょう……
この僕の新たな旅立ち…新たな誕生の瞬間を！！』

カメラの視点が変更になるたび、直斗は体ごとカメラの方を向いて目線を送る。

直斗の声は、興奮しているようでどんどん熱が篭っていく。

『僕という人間が、ある日を境に、全く別の人生を歩み始める……
そんな記念日を、皆さんと共に体験したいと考えています！
どうぞ、お楽しみにッ！！』

画面が乱れる。
砂嵐。

ザ…ザザ……ザ……

■9／17

「…なんスかね、ココ」

辿り着いて、あたりを見回した完二が呟く。
直斗がテレビの中に放り込まれて数日。
ようやくりせが直斗の位置を割り出すことに成功し、辿り着いたそこは山奥のようだった。
山奥の、木々の間の広場に建てられた小さな建物。
霧に包まれた建物は金属の板で覆われ、どこか近未来的な印象を受ける。

「ね、ね！
何か、”ひみつ基地”みたいだね！」
「あー、なるほど。
確かにＳＦチックでそれっぽいな」

嬉しそうに言う茜に陽介が頷く。

茜が言う通り、戦隊物にありそうなデザインではあった。
それが主人公の発進基地か悪のアジトかどうかは別として。

「あれ、シンドいらしいよー、現場。
滝とか火の中とか余裕で本人飛び込むらしいし」

今までの大きなダンジョンと比べて、人目を憚るためか随分と小さな金属製の建物を眺めながらりせは言う。

「おま…夢見る子供がいるんだぞ。
あんまぶっちゃけんなって」

陽介がつついて注意するが、夢見る子供であるところの茜はクマと一緒にキラキラした目を建物の入り口に向けていた。
確かに、”秘密基地”と言えば男の子…と一部の女の子が一度は憧れる、男のロマンの基礎のようなものだろう。
大きな木の上をそう呼んで登ったり等は良くある話だ。

「けど、考えてみると、この特撮っぽい場所って直斗の心が出元なんだよな？
だとすると、結構カワイイとこあんのかもな」

小さい体で、大人っぽく振舞っていた直斗の子供のような部分に陽介は苦笑する。
そんな陽介とは対照的に、完二は余裕なさげにイライラしていた。

「にしてもオトリたぁね……
全く…探偵だの手柄だのっつって、テメェが拉致られてりゃ世話ねえだろうが……」
「でも、事件がまだ終わっていないことはこれでハッキリした。

後は、いつも通りにやればいい」

総司はそう言って入り口を覗き込む。
入り口を入るとすぐに階段で、道は下の方へ続いている。
今まではどのダンジョンも上へ向かう構造になっていたがここは違うらしい。

「めずらし…地下に降りて行くダンジョンなんだね」
「ますます秘密基地めいてるな……」
「パーティは……そうだな。
男女で分けよう」

恒例となった組み分け。
総司がキツネを見ると、キツネはスイ、と茜の傍に寄った。

「あーっ、クマがそっちがいいクマ！」

クマが女性陣の方へ飛び込もうと暴れるが陽介に取り押さえられる。
雪子はキツネの前足を掴んで立ち上がらせた。
そして覗きこんで一言。

「……メスみたい」

組み分けは総司、陽介、完二、クマで一組、そしてもう一組は茜、里中、天城、りせ、キツネという事になった。

／＊／

早く大人になりたい。

――またあいつ、夜中まで資料調べてたよ。

――まったく、よくやるよ。

納得してないからって一人で頑張られてもなぁ……

もう署内では事件は終わったこととして扱われてるってのに。

――蒸し返さないで欲しいよな。

ほんとそういうところ、彼は子供だよ。

ちゃんと認めてもらえるような。

そんな大人の、かっこいい探偵に……

／＊／

『施設内ニ正体不明ノ侵入者ヲ確認……

警戒レベル、イエロー。

施設内ノ警戒ヲ強化』

階段を下りた途端に建物内に響く放送。

その声は硬い人口音声。

建物内が表と同じように金属で覆われているのもあり、ますます秘密基地やアジトめいた雰囲気がある。

「えっ？

侵入者って……

私たちのこと…だよね？」

りせが呟いてスピーカーを探すが、それらしい物は見当たらない。
それでも何処からともなく放送は施設内にこだまする。

『警告！　警告！
侵入者ニ告グ！
直チニ施設カラ退去セヨ！
繰リ返ス。
直チニ施設カラ退去セヨ！』
「これって……
直斗くんが助けを拒んでるってこと？
よ、よく分かんないけどとにかく先を急ご！」

／＊／

一行は、シャドウを倒しながら地下へ地下へと進んでいった。
気分はさながら悪のアジトへと乗り込む主人公達、といったところだろうか。
小部屋や廊下の要所要所には赤い旗が掲げられて、その真ん中には金糸で刺繍された鳳凰。
小部屋は点在する監視カメラのモニター室になっていて、よく分からないスイッチに近未来的なキーボード、床に固定された金属製の回る椅子などが設えられている。
そしてＳＦに出てくるような電動で開く扉。
それらがそんな気分を演出していた。
総司のパーティが次のフロアへの階段を見つけ、りせを通じて合流する。
緩やかな階段。

「ねえセンパイ、覚えてる？」

階段を下りながらりせは総司に並ぶ。
シャドウ達は敵を認識するまでは粘性の闇であったり、低空を漂う黒い靄の姿をしている。
形を持った後は分からないが、その状態の時は段差が認識できないのか高低差がある場所にはやってこない。
つまり、階段は数少ない安全地帯だった。
ここでは普段後方にいて、先頭を行く総司に近づけないりせも隣を歩くことが出来るのだ。

「直斗くん、マヨナカテレビに映った時”人体改造手術を受ける”って言ってた……
それって、もしかして直斗くん、ここで改造されちゃうってことなのかな」
「それにしても”改造”って……
う～ん…何でそんな事になってんだろ?」

りせの言葉に千枝が首を傾げる。
マヨナカテレビの直斗は、別の人生を歩みたいと言っていた。
その手段が人体改造手術なのだろう。
だけど、直斗は事件に執着していた。
探偵であることも望んでいるようだった。
警察へのパイプを持つ祖父からの支援もある。
子供扱いされていたようではあるが、それは時間が解決するだろう。
直斗の望む”別の人生”、それが分からなかった。

「んなのカンケーねっスよ。
オレたちがその前に助け出すんスから!」

完二はそう言って、気合を入れる。

階段を降りきると、再び放送が入った。

『正体不明ノ侵入者ハ現在、地下４階ニ到達……
警戒レベル、オレンジ。
施設内ノ重要区画ヲ封鎖。
侵入者ヲ排除セヨ！』

合成音声と共に、金属と金属が擦れあう音が響く。
通路を曲がってきた巨大な質量。

「んなっ！」

陽介が叫ぶ。

『繰リ返ス。
侵入者ヲ排除セヨ！』

その合成音声の命令と、砲撃は同時だった。
総司は隣にいて無防備だったりせを壁際に押し倒し、陽介と完二は逆側に避け、クマは轟音と共にひっくり返った。
砲弾は階段口の上部に当たり、熱気を撒き散らす。
総司は身を起こして階段の方を見る。
まだ階段にいたりせ以外の女性陣も被害は無さそうで胸を撫で下ろす。
りせを階段に避難させ、手の中の剣を構えた。
だが、相手に剣が効くようには見えない。
なぜなら。

「せ、戦車かよっ！」

戦車だからだ。
悪態をつきながら陽介も武器を構える。
鋼鉄に包まれた車体を剣で斬れるとは思えない。
ましてや陽介の持つ包丁では刃も立たなそうだ。

「茜ちゃん達は階段で待機！
……ペルソナ！」

広間のような開けた場所ならともかく、ここでは人数が多すぎると反対に戦いにくい。
総司は指示を飛ばすと、素早く降魔ペルソナを切り替えてカードを握り潰した。
青白い炎の中、イザナギが具現化する。

「”マハジオダイン”！！」

幾筋もの雷が戦車に向けて降り注ぐ。
その攻撃で一瞬戦車は動きを止めるが、すぐにキャタピラを動かしてその巨体を再稼動させる。
耐性があるわけではないようだが、あまり効いた感じではない。
まだイザナギの経験が足りずに威力が出ていないのだ。
戦車の空砲。
りせから戦車が”チャージ”を使ったのだと報告が入る。

「来い、スサノオ！
”ガルダイン”！」
「ペルクマー！
”ブフダイン”！！」

陽介とクマが上位魔法を放つ。

強風で冷気が戦車の車体全体を包みあちこちを凍らせる。

「”ジオダイン”！」

そして動きが鈍ったところを完二の上位電撃魔法が襲った。
総司はその間にペルソナを変更する。
カードを破壊すると、青白い光から獣が飛び出す。
それは犬のように見えた。
体の周囲にいくつもの宝玉を浮かべた犬。

「ヤツフサ！
”マハスクカジャ”！」

総司が犬の名を呼んで、速度上昇の魔法を使う。
途端に軽くなる身体。
同時に戦車の主砲が火を噴いた。

『発射。
”マスタードボム”』

砲弾は空中で分かれ、総司達全員を襲う。
軽くなった身体で陽介と総司は攻撃をかわした。
だが、クマと完二が避け損ねたようだ。
総司はクマに回復を頼むと自身は”コンセントレイト”で魔力を増強させた。

「”メディラマ”！」

回復の光に包まれながら、完二と陽介がそれぞれ上位魔法を放つ。
戦車の動きがさらに鈍くなっている。

随分ガタがきているようだ。
最後の特攻とでもいうように、戦車が突っ込んで来た。
金属音をさせながら迫る履帯。
だが、相手の動きが鈍くなっている上に、総司達には”スクカジャ”がかかっている。
引きつけて、だけど危なげなく避けきり。

「”マハガルダイン”！！」

強化した魔力で無防備な側面を打ち抜いた。

／＊／

幾つかフロアを降りて、総司達は他と少し違う扉を見つけた。
他の扉はセンサーが仕込んであるのか触れるだけで口を開くが、その扉は触れても沈黙を守っている。

『ココカラ先ハ研究区画デス。
一般ノ戦闘員ノ立チ入リヲ禁止シマス。
身分証ヲ提示シテクダサイ』
「身分証……？」

合成音声の要求に総司が首を傾げる。
陽介が扉の横の壁に付いていた小さな機械を示した。

「なあ、ここにカードリーダーがあるぜ。
どっかにカードがあんのかも！」

機械の中央付近には縦に細長いスリットが入っている。
確かに、陽介が示したのはカードを読み取る機械のようだ。

となれば、どこかにカードがある筈だ。
おそらく、地下４階のアナウンスで封鎖された”重要区画”なのだろう。

「りせ、入るのにカードが必要なエリアがあった。
そっちでも探してくれ」
『了解、センパイ！』

中空に声をかけると、すぐに返事が返って来た。
りせは女性陣と一緒なので少し距離が離れているが、同じダンジョン内ならこうして意思疎通がとれる。
複数のパーティの様子を逐一確認し、フォローするという難しい役どころはこれがあるから可能なのだ。
重要区画というくらいなのだから何かある。
そう考えて念入りにフロアを見て回ったが、結局それらしい物を見つけることは出来なかった。
りせの把握するフロアの踏破状況も鍵のかかった扉の先以外は埋まっている。
シャドウが持ち歩いている可能性もあったが、そればかりに構っている余裕はない。
目的はあくまで直斗の救出なのだ。
一行は先を進むことにした。
そして、また幾つかフロアを降りて、茜のパーティが宝箱の中から一枚のカードを手に入れた。
曰く、”研究員用　認証キー”。
これが扉が要求していた身分証だろう。
一方、総司達は再びロックの掛かった扉を発見していた。
そちらは機密区域に通じるとかで、一般の戦闘員、研究員の立ち入りは出来ないらしい。
茜が見つけたカードとは別の物が必要なようだ。

「りせちゃん、総司くんにれんらくお願い。
あたしたちはいったんもどってふうさ区画調べるから、総司くんたちは引き続きこの階のたんさくお願い、って」
「おっけ！
……ん、いいよ」

茜の指示を受けて、りせは総司のパーティとやり取りをして頷く。

「じゃあ、研究区画にしゅっぱーつ！」
「「おー！」」

カードを持った手を振り上げる茜に、千枝とりせがノリよく応える。
雪子とキツネが微笑ましそうにその様子を見て目を和ませた。

／＊／

合成音声が身分証の提示を求める。
スリットにカードを通すと、ピッという電子音と共に閉ざされていた扉が開いた。

「やった！」

茜が嬉しそうに声を上げて、部屋の中を覗き込む。

「……他の所と変わらないね」

辺りを見回した雪子が言う。
研究区画といっても、実際は形作られたばかりの心の迷宮。

実際に研究が行われているわけではないのだろう。
他の小部屋と同じように、監視カメラの映像が見れるモニター室のような内装だった。

「あ、ほら、扉があるよ！」

千枝が言って、扉に駆け寄る。
この部屋には何もない。
何かがあるのなら更に奥、つまりは扉の向こうの筈だ。
その時、りせが何かに気付いた。

「千枝先輩！
気をつけて！
向こう側に強い気配がするよ！」
「えっ？」

りせの声に、千枝が立ち止まる。

『研究区画ニ不審者ノ侵入ヲ確認』

合成音声。
触っていないのに扉が開く。
その向こうに合成音声の主がいた。
大きく、扉越しではその全貌を見ることができない。

『コレヨリ排除スル！』

巨大な剣が、扉から突き出された。
扉の前に立っていた千枝を目掛けて。
瞳に映る、鋼色の軌跡。

床を蹴ったが、間に合わない。
剣は千枝の脇腹を深く裂いていた。

「きゃああっ！！」
「千枝！
”ディアラハン”！」

噴きだす血に真っ先に反応したのは雪子だった。
扇子がカードを破壊し、コノハナサクヤが具現化する。
上位回復呪文の緑光が千枝を包み、出血を止めた。
それだけではなく、ビデオの逆再生のように傷口が塞がっていく。

「サ、サンキュ！！」

バックステップで一度距離をとった千枝が雪子に声をかける。
千枝は切れた服に手を添えるが、そこに傷はすでになく、服の切り口と血の跡だけが今の攻撃が現実だったことを伝えていた。
巨大な剣が扉の向こうに引っ込み、もう一度突き出される。
それを、茜が止めた。
剣の刃の横幅は茜が完全に隠れることが出来そうなほどに広い。
そんな巨大な剣がラクロススティックと鍔迫り合いを演じる様はシュールだ。

「く、ぅ……」

茜は呻きつつも武器に力を込める。
降魔しているペルソナがそれに反応して、茜から青白い光が立ち上った。
斬撃の効かないペルソナを降魔している茜にとっては押し切られ

たとしても脅威はないが、このままでは動けない。
ジリジリと迫る刃。
それを死の体感としてペルソナを召喚する。
鍔迫り合いを続ける巨大な剣とラクロススティックに、もう一本長剣が合流した。
茜の背後に立った、赤い鎧（ジークフリード）の勇者。
1対2になったことで、均衡が崩れる。
巨大な剣が跳ね上げられ、茜とジークフリードが自由になる。

「ジークフリード…”空間殺法”！！」

茜の命令に従って、ジークフリードが縦横無尽に斬撃を放つ。
刃の嵐が巨大な剣を扉の向こうに押し戻した。

「”ブフーラ”！！」

千枝が呼び出したトモエが、さらにそれを後押する。
剣を相手にしていても倒せない。
振るっている相手を攻撃するには留まっていてはいけない。
相手が再び攻撃を仕掛けてくる前に、茜達は扉に飛び込んだ。

「わぁ！
巨大ロボだ！」

状況を忘れたような声を茜は上げた。
巨大な剣を振るっていた相手は、真っ赤なボディを持った巨大ロボ。
戦隊物が好きな彼女にとってはかなり好ましい外見のようだ。
その横にはジークフリードが控えている。
夏休み中のダンジョン巡り、そしてここまでの道のりが茜の能力

をジークフリードを無理せずとも召喚できるレベルまで取り戻させていた。

「う…またこのタイプ？」

美津夫のダンジョンで苦戦した相手と同タイプのシャドウにりせは顔を顰める。

「まあ、こないだのみたいに無茶な耐性はしてないみたいだし、マシなのかも。
物理と氷結には耐性なかったよ！
アルカナは正義…固体名、”圧倒の巨兵”！
後、このタイプは物理攻撃が得意だから！！」
「わかった！」

りせのアナライズ結果に千枝が応える。
圧倒の巨兵が剣を振り上げて力を込めた。
一瞬、その体が光り輝く。
物理威力増幅呪文、”チャージ”の光だ。
つまり、次に来るのは物理攻撃。
雪子が身構える。

『”金剛発破”』

次の瞬間、剣が叩きつけられ、衝撃波が茜達を襲った。

「きゃっ」
「……っ！」

防御した雪子はともかく、千枝と茜はその攻撃をまともに食らっ

てしまう。
茜が降魔しているジークフリードは斬撃、つまりは斬るタイプの攻撃を無効化するが、打撃や打ち抜くような攻撃は無効化できないと融通が利かない部分がある。
”金剛発破”は衝撃波による打撃系の攻撃。
剣を持っているから繰りだしてくる攻撃は斬撃だろうと茜は判断したのだが、それは甘かったらしい。
総司のペルソナは物理攻撃に強いのならば斬撃打撃貫通全てに強いので、その辺は便利そうだなと茜は思う。
だが、グチグチ言っていても仕方ない。
茜はジークフリードを送喚して別のページにしおりを挿む。
その横で、雪子がペルソナを召喚した。

「”アギダイン”！」

コノハナサクヤの炎が圧倒の巨兵を包み込む。

「炎も耐性なし！
……何コイツ、耐性ないの？
無個性？」

アナライズしながらりせは首を傾げる。
こういうタイプは珍しいのだ。

「”黒点撃”！」
「”コンセントレイト”！」

千枝のトモエが一撃を放つ。
そして茜が新たに呼び出したペルソナで魔法威力増幅呪文を唱えた。

刀身を炎で包んだ剣を持った黒い巨兵。
灼熱の王、スルトだ。
圧倒の巨兵が再びチャージを使う。

「皆！
ガードして！！」

りせの言うタイミングで身構えると、次の瞬間巨人の剣が地面に叩きつけられた。
”金剛発破”だ。

「”メディラマ”！」
「”タルカジャ”！」

衝撃を凌ぎきり、雪子が回復魔法を解き放ち、千枝が茜に攻撃力を上げる魔法をかける。
茜がスルトに命じた。

「放て……”ラグナロク”！！」

その言葉と共に、スルトが剣を薙ぎ払った。
迸った炎が、圧倒の巨兵を呑みこむ。
圧倒的な熱量。
上位魔法である”アギダイン”より強力な、特大魔法だ。
生物であれば一瞬で消し炭にしてしまいそうな炎の中で圧倒の巨兵は立ち竦む。

「……っ、何…このエネルギー……！！」

それに気付いたのは、やはり探知型のりせだった。

バイザーの向こうで目を見開く。
「皆っ、伏せて！！」
その声が、皆に届くのとほぼ同時に。
圧倒の巨兵の間接の接合部から光が洩れた。
咄嗟に動けなかった茜を、千枝が押し倒す。
茜は千枝の肩越しに、巨大ロボが爆発するのを見た。
勝てないと悟ったのか、自爆したのだ。
爆発の光が目を眩ませる。
同時に襲い来る衝撃。
轟音で、他に何も聞こえない。
しばらくして。
ようやく聞こえたのは泣きそうな様子で茜達を呼ぶりせの声。
「りせちゃん……？」
「あっ……茜ちゃん！」
茜は起き上がろうとするが、重くて動けない。
まだ千枝が覆い被さっていたのだ。
傍目から見ても大怪我で、頭から血を流している。
すぐ近くに雪子も倒れていた。
こちらも気絶しているようで、目を閉じている。
「今、センパイ呼ぶから……っ」
「だいじょうぶだよ」
「で、でも……」
「だいじょうぶ」
茜はもう一度言って、千枝の下から抜け出そうと体を動かす。

りせとキツネが手伝って、何とか千枝を雪子の横に寝かせる。
息は浅いが、双方とも気を失っているだけだ。
茜はペルソナ全書を繰る。

「えーと……あったあった。
おいで、ソロネ」

目当てのページを見つけた茜はペルソナを召喚する。
青白い光の中に現れたのは、黒いローブに身を包んだ、燃える木の巨大な車輪を背負った男。

「”メディアラハン”」

回復の光が全員を包み込む。
クマの影との戦いの際に茜の使った”メシアライザー”には劣るが、回復に特化したペルソナを扱う雪子もまだ使えないし、総司もまだ使えるペルソナを育てきっていなくて使えない魔法だ。
傷があっという間に癒えていく。

「すごい……」

りせが呟く。
その間に傷は全てなくなっていた。

「これで、後は自然に目が覚めるよ」

言って、茜はソロネを送喚するとジークフリードを降魔しなおす。
そして、部屋の隅にあった宝箱を開けた。
圧倒の巨兵はこれを守っていたのだ。
中身は”幹部用　認証キー”。

これでもう一つの封鎖区画に入ることが出来る。
茜はそれをポケットに入れると、千枝の横に腰を下ろした。
キツネがその茜に近付いて、口に咥えた葉っぱを差し出す。
近くの山からキツネが取ってきてくれる薬草だ。
精神疲労等に効き、ペルソナを召喚するのに精神力を使うペルソナ使いにとってありがたい薬だった。
その分、お金を取るのだが。
特別捜査隊の財布を握っているのは総司だが、茜は戦いの中で少し現金を得ている。
総司と同じように茜も戦いを通じてペルソナを覚醒することがある。
ペルソナ全書を持ち、そのページが全て埋まっている以上それに意味はないのだが、現金や武器が手に入るという副産物は結構重宝していた。
修学旅行には結局行けなかったが、短期間で2人分の旅費を貯める事ができたのはこのおかげなのだ。
キツネの前掛けの裏についたポケットにお金を入れてやると、嬉しそうにキツネは鳴いた。
茜は微笑んで、千枝の額の血をハンカチで拭う。

「ありがと、千枝ちゃん」

／＊／

アラートがなる。

『正体不明ノ侵入者、機密区画ニ侵入……
警戒レベル、レッド。
施設内ノ警戒ヲ更ニ強化。
侵入者ヲ排除セヨ！』

カードを使い、ようやく入ることのできた機密区画。
研究区画と同じく、内装には変わりないが、ダンジョンから伝わってくる拒絶感は今までと段違いに上がっている。

「うわっ……
相当マジで拒否られてる……」

総司でもそう思うのだから、探知型のりせはそれ以上なのだろう。
少し不安そうに辺りを見回す。
だが、立ち止まっている訳にはいかない。

『侵入者ヲ阻止セヨ！
侵入者ヲ阻止セヨ！』

その声とアラート音に導かれて、シャドウが集まってきているのだ。
倒し、避けてフロアを駆け抜ける。

「直斗くんの気配、近いよ！」

りせが報告する。
体当たりするようなスピードで扉に触れる。

「階段だ！」
「急げっ！
追ってきてる！」

総司達はその小部屋にあった階段に飛び込んだ。
ちらりと後ろを振り返ると、総司達を見失ったらしい粘性の闇が

戸惑ったように体を揺らして消えていく。
息をついて、階段を降りきる。
そこは短い通路になっていた。
あるのは今降りてきた階段と、大きな扉だけだ。

「ここが最深部かな？」
「そうみたい。
その扉の向こうに気配があるよ」

総司の言葉にりせが頷く。

「直斗ッ！！」

真っ先に完二が扉に手を伸ばす。
特にロックなどはかかっておらず、扉はあっさりと開く。
その向こうは、テレビに映っていた手術室となっていた。
ただ、手術室というには異様なものが手術台についている。
ロボットアームに取り付けられた巨大な丸鋸と巨大なドリル。
その手術台の前に、二人、直斗がいた。
私服の直斗。
怪我とかはなさそうだ。
もう一人は同じ私服に大きな白衣を纏っている。
その直斗は長い白衣の袖で目頭を押さえて、幼子のように泣いて直斗に縋っていた。
マヨナカテレビに出ていた時と同じ格好。
目頭を押さえていて目の色が確認できないが、様子といい、こちらがシャドウの方なのだろう。
完二の声に気付いて振り返った直斗は疲れたように溜め息をついた。

「待ちくたびれましたよ。
…この子の相手をするのに、ほとほと参っていたところです」

／＊／

――おお、君があの有名な？
ようこそ、歓迎するよ、白鐘直斗君。

いつもそう。

――白鐘君、もう帰っていいよ。
事件は解決したんだから。

いつになったら認めてくれるの？
どれだけ事件を解決すればいい？

――ここは遊び場ではないというのに。
子供は好き勝手してくれるよ、全く。

遊びじゃない。

――遊びはそっちじゃないの？

遊びなんかじゃない。
僕は、探偵だ。
探偵に、なりたいんだ。
強くてカッコイイ、小説に出てくるような……
そんな探偵に。
だけど……

だけど……

ああ。

早く、大人になりたい。

理想の探偵（後書き）

ついに茜が特大魔法持ちや、いつも降魔してるだけだったフリードさんを召喚できるＬｖになりました。
このＳＳでは経験を積ませてペルソナのＬｖが上がっていても、初期Ｌｖに到達すれば無理なく召喚できるという設定です。
それと、合体で頑張ればいけるであろう範囲でスキル付与しています。
Ｐ３Ｐ出身の茜はスキルカードがあるので４属性アリスとかやりたい放題できていいですね。

それにしても。
休日１日執筆できないとか辛いｗｗｗ

「やだぁ！
やだ、やだ、行かないで！！」

背を向けて総司達の元へ歩き出した直斗が、そんな言葉と共につんのめった。
直斗が振り返ると、シャツをしっかりと握りしめたもう一人と目が合う。

「君と話しても無意味だ。
僕はもう帰らないと……」

泣いて縋るもう一人を振り払って、直斗は言い含めるような口調で言った。

「なぁんで？
なんで僕だけ置いてくの！？
どぉしていつも僕だけひとりぼっちなのっ！？」

それでも納得しないもう一人は長い袖で顔を覆う。
寂しい、寂しいと泣き喚く直斗の影に、雪子が思いやりのある視線を送る。

「僕と同じ顔……
まるで僕だとでも言いたげだね」

だが雪子と違い、直斗はもう一人を切って捨てた。
一顧だにしない。

もう一人が動きを止めた。
それに、背を向けた直斗は気付かない。

「でも、君と僕とじゃ……」
「何をごまかしてんだい？
僕は、お前だよ」

直斗の影が、その口調を変えた。
目頭を押さえていた腕を下し、冷たい目で直斗を睨み付ける。

「子供の仕草は”ふり”じゃない……
お前の真実だ。
だってみんなお前に言うだろ……？
”子供のくせに、子供のくせに”ってさ」

豹変した影の様子に直斗は驚いて振り返る。
直斗ともう一人の目が合う。
影の金の瞳はどこまでも冷めていて、全てを諦めたような色をしていた。
今までの泣きじゃくっていた子供はどこにいったのか、冷めた目で、冷めた口調で影は言う。
いくら事件を解決しても、必死に考えても。
子供というだけで誰も本心では認めることはないのだと。

「”名探偵”扱いは、それが欲しい間だけ……
用が済んだら”子供は帰れ”だ。
世の中の二枚舌に、お前はなす術もない。
独りぼっちの、ただの子供だ」

直斗が目を逸らす。

顔色が悪い。
もう一人の直斗は、再び袖口に顔を埋めて泣き出した。

「僕、大人になりたい……
今すぐ、大人の男になりたい……
僕の事を、ちゃんと認めてほしい……」

直斗が小さく、やめろ、と呟いた。
だが、もう一人はやめない。

「僕は…居ていい意味がほしい……」

そう言って泣くもう一人に、直斗はもう一度やめろ、と今度はハッキリと言った。
自分の存在する意味なんて、自分で考えられる、と。
直斗の影は泣き止んで、その言葉を鼻で笑った。
無理だ、とキッパリと言ってのける。

「今現に子供である事実を、どうする？
本心じゃ憧れてるだろ？
強くてカッコイイ、小説の探偵みたいな、大人の男にさ。
それは裏を返せば、心の底で自分を子供と思ってるって事だ。
認めろよ……
お前は所詮子供さ……自分じゃどうしようもない」

言って、影は直斗に手を差し出した。

「さあ…そろそろ診察は終わりだ……
人体改造手術に移ろうか。
いいだろ……

白鐘”直斗”くん？」
「やめろ！！」

差し出された手を直斗が払う。
それは、今までで一番激しい拒絶だった。
もう一人がくすりと笑う。

「白鐘”ナオト”……
男らしくてカッコイイ名前だよな？」

そして、もう一人の直斗は決定的な一言を放つ。
直斗の真実を。

「けど、事実は変えられない。
性別の壁はなお越えられない。
そもそもオトコじゃないのに、強い大人の男になんて、なれる訳ないだろ」

それこそが、直斗の抱えた矛盾。
小説に出てくる探偵のような、ハードボイルドの大人の男になりたい直斗。
しかし女性として生まれてきた直斗。
叶うことのない夢。

「え、ちょ……
あいつ今…スゲー事口走ったぞ……」
「お…男じゃねえだと！？」

今まで外野で聞いていることしか出来なかった陽介や完二が声を漏らす。

直斗はその声で総司達がいた事を思い出したように顔を上げ、すぐに顔を逸らせた。
重々しく口を開く。

「駄々をこねてるつもりはない……
それじゃ、何も解決しない……」

その言葉に、直斗の影は爆笑した。
その言葉は、かつて直斗が言われた事だったのだ。

――駄々をこねていても、何も解決しないよ、ナオトくん。

「お前、それ言われた後、一人で泣いてたよな。
自分の口から言うなんて、何を守ろうとしてるんだ？
いいんだ、もう無理しなくていい。
そのための”人体改造手術”だ」

払われた手を、もう一度直斗の影は差し出した。
冷めた目。
だけど、その瞳には同情の光があった。

「駄々をこねたまま、一歩も動けずにいる……
僕にはその気持ちがよく分かる。
僕はお前なんだよ……」

否定しようと口を開いた直斗を止めようとした千枝を、完二が止める。
止められなかった否定の言葉が、直斗の口から飛び出した。

闇が、もう一人の直斗を包み込む。
それを完二は静かな表情で見守る。

「これでいいんだ……」

闇が凝って、直斗の影を中空に運んだ。
糸が切れたように倒れそうになった直斗を支えながら、完二は直斗の影から視線を外さない。
りせが直斗を受け取って、キツネと一緒に避難する。

「ちゃんと吐き出しゃいい。
オレらはアイツを倒して、ケツ持ってやりゃいい……
じゃねえとアイツ……
直斗のやつ、苦しいまんまだろ」
「フ……あははははっ！！
言うよね、偉そうに！」

直斗の影が大声で笑う。
その声は、直斗の声を残しながらも人工的な音声だ。
闇をまとった直斗の影は、あまり姿形は変わらなかった。
直斗をそのままロボットにしたかのような姿。
足の裏から火を噴いて体を浮かせている。
その背には飛行機のような鋼鉄の翼がついていて、それで空中でバランスを取っていた。

「いいよ、来なよ……
僕はキミみたいに粗暴で情に流されるタイプが一番嫌いだッ！！」

直斗の影はそう叫んで、オモチャのようなＳＦチックな銃を構える。

「よし、とにかく話は後だ！」

陽介が包丁を構え。

「来るよっ！！」

「いいぜ、来やがれ……

オレがガッチリ、ケツ持ちしてやっからよ！！」

りせがヒミコを召還してバイザーを被りながら言う。

そして先頭に立ち、武器である金属の板を構えながら完二は宣言した。

「我は影…真なる我……

さあ、特別手術を始めよっか！」

直斗の影が銃を放つ。

オモチャのような銃から、ＳＦのような光が銃弾となって完二を襲う。

光だからか。

完二が振り回した金属の板に反射して、あらぬ方向へ針路を変える。

「ほら、ダメだよ、患者はじっとしてなきゃ。

ちゃんと体に穴空けらんないだろ？」

銃は二丁。

もう一丁も完二に向けて放つ直斗。

その弾丸も完二は弾いた。

反射された光はりせの傍の床に突き刺さる。

バイザー越しにそれを見たりせは、その攻撃をアナライズした。

「今の光に触れないで！
召還能力を封じる効果があるみたい！」

りせの報告に、それぞれ了解、と返事をする。
茜は、宙に浮かぶ直斗の影を見上げた。
小さな茜では武器は届きそうにない。
ジークフリードなら届くだろうが……
少し考えて、茜はペルソナ全書を開く。
付箋の貼ってあるページを開いて栞を挟む。
マハオートはすでにかかっているのでジークフリードはすでに役目を果たしている。
カードを破壊して、スルトを呼び出す。

「”コンセントレイト”！」
「シキオウジ！
”チャージ”！！」

総司も折り紙で折ったような人型のペルソナ、シキオウジを呼び出し、茜と共に増幅魔法を使う。
雪子は扇子でカードを破壊し、コノハナサクヤを召還する。

「”アギダイン”！」

炎が、直斗の影を包む。

「火に耐性ありだよ！」

りせが報告する。

彼女の言う通り、あまり堪えた様子はない。
直斗の影が腕を薙ぐ。

「”ブフダイン”！」

やられたら、やりかえす。
直斗の影は雪子に向かって魔法を放つ。
コノハナサクヤが雪子を庇うが、氷結に弱いコノハナサクヤが宙に溶け、雪子は体勢を崩す。
薙いだ手とは逆の手に持った銃で、直斗の影は雪子へ銃を放つ。
体勢を崩した雪子には、その攻撃を避けることはできなかった。

「っく……」

雪子が呻く。
魔力が封じられる嫌な束縛感。
そして、精神力を削る嫌な感覚。

「天城、一旦下がって！
封印が解けるまで！」
「う、うん！」

総司の言葉に従って、起き上がった雪子はりせの所まで下がる。

「火に耐性持ってるくせに氷結魔法かよッ」

陽介が愚痴りながら、包丁を振るう。
刃がカードを破壊し、スサノオが姿を現す。

「”ガルダイン”！」

風の刃が直斗の影を襲う。
気流が乱れ、宙を飛ぶ直斗の影がよろめく。
直斗の影が腕を振るう。
狙いは、陽介。

「”ジオダイン”！」

雷が、スサノオを穿つ。
ジライヤの頃ならかなりのダメージを覚悟しなくてはならなかったが、スサノオに弱点はない。
身を包む雷を払いのけて、ジライヤは陽介の隣に降り立つ。
直斗の影は複数の属性を扱うタイプのようだ。
そして、攻撃する属性を決める決め手は。

「もしかして…反対属性なのかも……」

りせが呟く。
火を使うコノハナサクヤが氷結に弱いように。
風を使うジライヤが雷に弱かったように。
属性には相性が存在する。
直斗の影は、弱点属性である確率が高いであろう、反対属性での攻撃を行ってくる可能性がある。

「じゃあ、クマが試してみるクマ！！
”ブフダイン”！」
「”アギダイン”！」

クマが氷結魔法を放ち、直斗の影が火炎魔法を放つ。
氷結魔法を使うクマだが、弱点属性は火炎ではないので、ある程

度のダメージはあるものの体勢は崩さない。
だが、これで反対属性魔法を使ってくるのは確定のようだ。
火炎が弱点のトモエは氷結魔法を放つわけにはいかない。
弱点がばれないように、”チャージ”を使う。

「いくぞ、合わせろ!!」

総司が声を上げた。

「うん!」
「おっけ!」

増幅魔法を使った三人が息を揃える。
千枝がカードを蹴り砕いた。

「”ナバスネビュラ”!」
「”ラグナロク”!」
「”黒点撃”!」

総司のシキオウジが、茜のスルトが、千枝のコノエがその力を開放する。
光の爆発が影を包み、火炎耐性をもろともしないような劫火が熱で包み、一点の攻撃が打ち抜く。
その猛攻に直斗の影が一瞬硬直し、動きが止まったそこに影が差す。
ハッと直斗の影が顔を上げる。
その目に映るのは、黄色の刃。
雷を模した大剣が、直斗の影の肩口から腰にかけて斜めに薙ぐ。
完二のタケミカヅチだ。
体勢を立て直し、天井付近にまで飛んで逃れた直斗の影はため息

をついた。

「はぁ…なんでそんな暴れるの？」

言って、直斗の影は両手を広げる。

「”エレメンツゼロ”」

何かが、総司達全員を包み込んだ。

反射的に、その何かを振り払う。

直斗の影はその隙を逃さず、勢いをつけて完二へと突っ込んだ。

直前で止まり、その手を向ける。

「”ガルガリンアイズ”！！」

攻撃を受けた完二がその場に倒れる。

いきなり、体中から力が抜けたのだ。

「な、んだ…これ……っ」

「死んじゃえ！」

起き上がれない完二に、直斗が攻撃を放つ。

「”ブレイブザッパー”！」

銃口から出た光が刃となって突き出される。

至近距離からの攻撃。

倒れた完二には避けられない。

直斗の影と、完二の間に白い物が割り込んだ。

白くて薄い、紙で出来た人型。

シキオウジ。
刃は、紙の体を突き破り、しかし完二の目前でその動きを止めていた。
動きの止まった直斗の影に陽介が武器を突き出す。
直斗の影は後ろに飛んで包丁を避けた。
紙から刃が抜かれる。
そこにはあるはずの穴がない。
物理攻撃を無効にする能力だ。
シキオウジは今現在総司が呼び出せるペルソナの中で、一番耐性に優れている。
物理、火炎、氷結を完全に防ぎ、弱点属性である疾風もスキルで効かなくしている徹底ぶりなのだ。
総司の隣に、封印が解かれた雪子が復帰して並ぶ。
さっそくコノハナサクヤを召還して、完二に”上位回復魔法（ディアラハン）”をかけた。

「何だよ、大人しく死ねよ！
子供なんて、何にも出来やしないんだから！」

回復を終えて立ち上がった完二に向けて、直斗は忌々しそうに吐き捨てる。

「そんな事ない！」

それを黙って聞いていられないのは茜だ。
幼い体でも、自分に出来ることを全てやろうとする茜はその言葉には頷けない。

「あたしはこんなだけど…それでも、いろいろできるよ！
”コンセントレイト”！！」

茜が再び増幅魔法をを使う。

「嘘だ！！」

叫ぶように、直斗の影が声を荒げた。
放たれるのは先程茜が使った魔法の反対属性。

「”マハブフダイン”！！」

質量を持った吹雪が全員を襲う。
雪子と茜の体勢が崩れた。
コノハナサクヤとスルトが、集中力が途切れたことによって消える。
尻餅をついた茜が、驚いたように直斗の影を見上げる。

「なっ…なんで……
氷結吸収スキルつけてたのに……！」

呆然と呟く茜。
大抵のペルソナには弱点が存在する。
それを補うスキルを覚えさせることが出来るのがワイルドの強み。
スルトにもそれを覚えさせていたのだが、そのスキルが発動していない。

「……耐性が打ち消されてる……？
まさか、さっきの……！」

りせが呻く。
先程直斗の影が使った”エレメンツゼロ”。

あれは、属性耐性を消去する魔法。
ガードキルの一種だったのだ。
優位に立った直斗の影が機嫌を直して笑い声をあげる。

「ほら。
君には、君達には何もできない！
もう一発…！」

直斗の影が腕を振り上げた。

「総司くん！」

茜を庇おうと身じろぎをした総司を茜が止める。
茜は全書を開いた。
素早く付箋のページを開く。

「雪ちゃんを！！」

言って、栞を挟む。
総司が雪子を庇い、陽介達は防御姿勢をとる。
”エレメンツゼロ”が属性ガードキルならば、総司の降魔するシキオウジの氷結無効もなくなっているが、雪子がまともに氷結魔法を受けるより損害は少ないはずだ。

「”マハブフダイン”！！」
「アヌビス！
”マカラカーン”！！」

直斗の影が再び範囲氷結魔法を放つ。
同時に、茜が呼び出したジャッカルの頭を持つ冥界の神が手に持

った天秤を振るい、茜の前に光の壁を張る。
茜を襲った吹雪は、光の壁が遮り、吸収して直斗の影へと跳ね返す。
自身の魔法を反されて、直斗の影が小さく呻いた。
一方、吹雪を耐えきった総司は雪子を起こしてペルソナを変える。

「キクリヒメ！」

総司は衣装のあちこちに勾玉を施した美しい和装の女神を呼び出した。
雪子と二人がかりで”メディラマ”を使い、全員の傷を癒していく。

「”ヒートライザ”！」
「させるか！
”デカジャ”！！」

陽介が、直斗の影の身体強化魔法を打ち消す。

「行って、トモエ！
”黒点撃”！」
「GO、キントキドウジ！
”ブフダイン”！！」
「アリス！
”マハガルダイン”！」

千枝とクマ、そしてペルソナを変えた茜が攻撃を放つ。
突き出された薙刀が鋼鉄の羽を穿ち、吹雪が全身を打ち付け、童話に出てきそうな可愛らしい女の子が放った風の刃が直斗の影を地面に叩き付ける。

そして。

「いくぜ、直斗！！
歯ぁ、食いしばれ！！
”マッドアサルト”！」

タケミカヅチの雷の剣が直斗の影を打ち砕いた。
鋼の衣を剥がされてへたり込んだもう一人の直斗の前に、完二が仁王立ちになって言う。

「すっきりしたか？」

直斗の影はぽかんとした表情で完二を見上げ、しばらく考え込んだ後、一つ頷いた。
完二の差し出した手に掴まって立ち上がる。
視線の先で、直斗が目を覚ましていた。

／＊／

幼い頃に両親を事故で亡くした直斗は祖父に引き取られた。
代々探偵を営む白鐘の家。
祖父も、両親も。
直斗で5代目となる。
その為か、祖父の書斎にはたくさんの本が、とりわけ推理小説がたくさんあった。
その書斎が、幼少時代の直斗の世界。
あまり社交的ではなかった直斗は友達が作れず、推理小説だけが寂しさを紛らわせてくれた。
格好いいハードボイルドな大人の探偵。
それが将来の夢になるのにそう時間はかからず。

誇りを持って仕事をしていた両親を覚えている分、後を継ぐのにも疑問を持たなかった。

雪子のように窮屈に思うこともなく。

拒む気持ちも無く。

憧れて。

直斗の祖父は、自身に持ち込まれる相談事を内緒で、しかし積極的に手伝わせた。

それは、いつも独り推理小説を読んでいた直斗の夢を叶えようとした祖父の親心。

いつしか、直斗には少年探偵という肩書が付いて、探偵として依頼を受ける立場となった。

直斗は、順調に夢に向かって歩いていた。

だけど、上手く行く事ばかりではない。

子供だという事自体が気に障る人はどこに行っても一人はいたし、事件解決に協力しても、喜ばれるばかりでもなかった。

だけど、子供は成長する。

だから、それだけなら時間が解決しただろう。

だけど、子供だからという理由で気に障る人がいるのと同じくらい、女だからという理由で邪険にする人も存在するのだ。

成長しても。

否。

今は男装することで性別を誤認させているが、成長すれば誤魔化せなくなるだろう。

現に、抑え込んでいてもその成長は著しい。

身長は、全然伸びてくれないのに。

女でいることが嫌い。

確かに、小説には女性探偵だって出てくる。

でもそれは、直斗の望む”カッコイイ探偵”のイメージには合わなかった。

それに、警察は男社会。

軽視される理由が増えては、誰にも必要とされなくなる。
それが、怖かった。

「ごめん……
僕は知らないフリをして、君というコドモを閉じ込めてきた。
君はいつだって、僕の中にいた」

直斗は、もう一人と向かい合う。
本当は、分かってた。
必要とされなくなるなんて、思い込みだった事なんて。
求めていたのは、”大人になる事”でも”男になる事”でもなかった事なんて。
直斗が、影を受け入れる。
ありのままの、自分を。

「僕は君で…君は僕だ」

もう一人の直斗は泣きそうな笑顔で頷く。
泣きじゃくっていた時とは違う、大人びた、子供の笑顔。
青い光がもう一人を包み込み、姿を変える。
蝶のような、蛾のような羽をもった空飛ぶ小人。
その手には成人男性の身長にも届きそうなほど長い光の刀を持っている。

「スクナヒコナ……
一寸法師のモデルになったと言われている小人神ですね。
ペルソナ…ですか。
ズルイですよ……
こんな事、ずっと隠していたんですね」

よろけた直斗を、完二が支えた。
その傍に、皆が集まる。
消耗しているようだが、直斗の表情はスッキリと澄んでいた。

「はは…これじゃ警察の手に負えないわけだ……」

でも、これで確信できた。
事件がまだ終わっていない事を。

「まったく…体張っちゃって……」
「キバりすぎなんだよ、テメェは……」

心配そうに言う千枝と完二に、直斗は笑って見せる。

「信じてました。
来てくれるって……
でも、まさか…こんな大事とは…思ってなかったけど……」
「ったく…テメェはバカだ。
どこも天才じゃねえ」

呆れたように言う完二。
それに、直斗は頷いた。

「はい。
それで…いいんです。
……僕は子供、ですからね」

叶うことのない夢（後書き）

活動報告にこっそり書きましたが、ＰＣがご臨終なさいました。
このＳＳだけだけど避難させてて助かったｗｗ
というわけで、土曜に新しいＰＣ買ってきました！！

まぁ、数日間うんともすんとも言わなかったわりに新ＰＣ設置する前に足掻いてみたらついたんですけど。
なんとか他のデータも移せればいいな（執筆優先させたので別の部屋に放置中）。

菜々子のプレゼント

買い物を済ませ家に帰ると、堂島と足立が酒盛りをしていた。
机の上の皿にはスルメやチーズ等つまみになるものが食べ散らかされていて、林立するビールの缶は大半がすでに空のようだ。

「……ただいま」

あまりの惨状に茫然と呟くような声で茜が帰宅を告げると、酔って良い気分らしい足立が手に持った缶を持ち上げて振った。

「あ、おかえり～！
おっじゃましてま～す！」
「悪いな…今日は早上がりで……」

苦笑いしながら堂島が言う。
総司や菜々子が手伝うといっても、メインで片付けるのは家事を一手に引き受けている茜なのだ。
バツの悪そうな顔になるということは、その辺は分かっているのだろう。
堂島は足立ほどは泥酔はしていないらしい。

「ほらほらぁ、座んなよ～」

足立がヘラヘラと笑いながら向かい側の座布団を示す。
総司は示された座布団に座る。
茜は買って来たものを冷蔵庫に入れてから、台所のテーブルの椅子に座っていた菜々子の向かい側に座った。

「さっき署から電話あったんだけど、白鐘くん、見つかったんだよねー。
って、知ってるっけ、白鐘くん。
こっちに黙って居なくなっててさ、さっき見つかったみたいなんだ。
お騒がせだよね、まったくさー」

缶の中身を煽って足立が言う。
直斗は消耗してろくに動けなそうだったので、雪子が送って行った。
恐らく家に辿り着き、帰ったことの報告をしたのだろう。
疲れているだろうに、真面目である。

「しばらく学校来てないなって思ってたんだけど。
安心したよ」
「……意外と驚かないんだな。
見つかった事を知ってる…なんて事じゃあないよな？」

当たり障りのない返事をしたつもりだったのだが、堂島に睨まれて総司は冷や汗を流す。
何と言えばよいかと言葉を探していると、茜が口を開いた。

「知ってるよ」

そう言う茜に、総司は慌てて振り返る。
だが、茜は余裕の表情だ。
堂島が目を眇める。

「なんだと……？」
「だって、帰って来る時、見かけたもん。

ジュネスの近くで」

ニコリと微笑みながら言う茜に、今度は堂島が慌てた様子を見せる。

そういう展開は予想していなかったらしい。

「え……

そ、そうなのか……」

「やだな、堂島さんてば。

そういうクセ、染み付いちゃってんだから」

缶を煽って足立が言う。

だが、中身が入っていなかったようで首を傾げる。

缶を逆さまにして振れば、数滴だけビールが飛んだ。

「でも白鐘くん、なんで居なくなったんですかね？

ちょっと気難しそうだし、捜査から外れたから、拗ねて家出でもしたんすかね～？

いやぁ、居なくなったって最初に聞いた時はビックリしましたよ～。

もし第４の誘拐殺人なんて事んなったら、もう色々ご破算に……」

「足立……」

新しいビールの缶を開けながら喋る足立を堂島は窘める。

だが酔っている足立は、堂島の声に含まれる不機嫌の色に気付かない。

「でも犯人の少年、諸岡さん殺し以外には、証拠出ないっすね～。

これ、立件までいけんのかなあ？

やっぱ堂島さんの”カン”の通り、真犯人、別にいたりするんす

かね～」
「何遍言わせんだ！
ペラペラ喋んな！」
「おわ、す、すいません！」

堂島の剣幕に、足立は首を竦める。

「とにかく！
事件なんて気にせず、子供は子供らしくしてろ」

堂島は残っていたらしいビールを一気に飲んで、空き缶を机に置いた。
不機嫌なまま、もう寝ると言って居間を出ていく。
見送った足立は酔いが醒めてしまったようで、頭を掻きながら雰囲気悪くしてごめんね、と謝った。

「でも、堂島さんの言う通り！
事件のことは、僕ら警察に任せてほしいな。
堂島さんに心配かけさせちゃダメだよ～？」
「こわいこと、まだおきる？」
「ご、ごめんごめん、大丈夫だから！」

”めっ！”とでも言うように人差し指を立てて説教じみた事をいう足立だったが、不安そうに言う菜々子に、慌てた様子でフォローを入れる。

「犯人は捕まったんだし、もう怖い事起きないよ。
ね、大丈夫だよ～？」
「うん……」

だけど、総司達だけは知っている。
真犯人が別にいるということを。

■9／20

総司が商店街に行くと、四目内書店で集めているシリーズの最新刊が発売されていた。
表に平積みされている、最後の一冊。
買って外に出ると、ジョギングをしている千枝が目に入った。
声をかけると、千枝も総司に気付き、駆け寄ってくる。
千枝は、一人ではなく同行者がいた。
だが、それは人ではない。
少し太り気味の犬。
その首輪からリードが伸びていて千枝に握られているところを見ると、おそらくこの犬が修学旅行中に話を聞いた千枝の飼い犬なのだろう。

「精が出るね」
「……うん」
「この子がチョーソカベ？」

総司が聞くと、千枝が苦笑した。

「ムクだってば。
雪子が拾った犬でね。
雪子はそう呼んでるけど、あんまりだったから、ムクって名前付けたの」

訂正して、千枝は犬を紹介する。

拾われた恩を覚えているのか、それともただ美人が好きなのか、実は家族の誰よりもムクは雪子に懐いている。
雪子が千枝の家に遊びに来ると、涎を垂らして喜ぶ程だ。
だけど、雪子の家では買うことは出来なかった。

「……昔ね、道端で雪子が、こいつ抱えて座ってて。
声かけたら、家出したって言うんだ……
飼えないから捨てろって言われたから、って……
雪子、死んだみたいな顔してて……
あたし、必死で笑わせたんだ」

ジョギングをしていたせいか、ムクは息を切らしながら総司を見上げる。
総司はしゃがんで目線を合わせ、本を入れた紙袋を持ってない方の手で撫でた。
それを優しげな目で見ながら、千枝は話す。
雪子と友達になった経緯を。
その時の雪子があまりに儚げで。
それで千枝は雪子を守ろうと思ったのだ。
だけど、そう思っていたはずの自分の中に嫉妬と歪んだ優越感にまみれたシャドウがいた。

「あたし、あれから、自分の価値をちゃんと探そうって思ったんだ。
それで、頑張ってたの。
犯人捜したり、捕まえたり、修行したり。
ただもっと頼りになろうって…それだけ」

自分の価値さえ分かれば、”雪子や誰かに頼られてる自分”に酔うのをやめられると思ったから。
千枝は苦笑いを浮かべる。

「……あたし、何にも分かってなかった気がする……」
「自分と向き合うのって、難しいよ。
そう思えたなら、それは前進したからだと思う」
「ん…ありがと。
一歩の半分でも進めてたらいいんだけど」

千枝は、今度は恥ずかしそうに笑う。

「あたしね、雪子を守りたい。
菜々子ちゃんも、茜ちゃんも、皆…皆……」

雪子を守りたかった。
雪子だけがいればよかった。
だけど、今は。
守りたいものがどんどん増えていく。
守りたいものが増えるたび、心が温かくなっていく気がした。

「この気持ちだけは、ウソじゃない。
どうしても”守りたい”って思うんだ」
「うん」

総司が頷いて立ち上がる。
ムクが千枝を見上げた。
散歩の続きがしたいようだ。
頷いて、千枝は総司に向き直った。

「……じゃあね。
また明日、学校でね」
「ああ」

手を振って、千枝は走り出す。
ムクも、太っているせいか不格好ながらも走り出した。

「瀬多くん！」

千枝は少し走って、まだその場に留まっていた総司に向かって声を上げた。

「あたしね、瀬多くんのことも守りたいって思ってる」

自分より、ずっと何でも出来る人だけど。
自分じゃ頼りないかもしれないし、守ってもらう必要などないかもしれないけど。
それでも。

「だけど…だから、頼りにしていいからね！」

■１０／２

沖奈市。
総司達の暮らす八十稲羽市の隣の市ではあるが、都会と言っていい程度には開発されている。
電車で結構な時間揺られてなければ着けないが、娯楽施設やお洒落な店がここまで出ないとないので遥々やってくる八高生は少なくない。
今の総司達のように。

「わぁ…人がいっぱいだね」

はしゃいだ声を茜が上げる。

「茜ちゃんは沖奈は初めて？」

「うん！」

茜は雪子に答えながらキョロキョロと辺りを見渡していた。

確かに、行きかう人は多い。

都会といってもポートアイランドにはゆったりとした雰囲気があったが、こちらは少しゴミゴミした印象を受ける。

今日ここに来ているのは、総司と茜、雪子、千枝、りせ、そして完二。

直斗救出記念にパーッと遊ぼうという千枝の提案で集まったのだが、陽介とクマはジュネスの仕事で不参加となった。

休日なので仕事を詰め込まれたらしい。

「で、何します？

ボーリングとかカラオケっスか？」

「あ、行く場所はもう決めてるの」

完二が周辺にある娯楽施設の場所を思い出しながら言うが、りせは首を横に振る。

りせに示された店は”ＣＲＯＣＯ＊ＦＵＲ”。

雑貨も取り扱っているブティックで、女性向けの店だ。

総司も一人では入ったことはないが、女友達となら何度か入ったことがある。

完二が顔をしかめる。

可愛いもの好きではある完二だが、それは小動物的なものが対象であって女性向けなものが好きというわけではないのだ。

場違いなのは自分でもわかっていた。

「何であんなトコなんスか……
アイツ助けたし、パーッと遊ぼうって言うから……」
「だから、パーッっと買い物。
完二は荷物持ちという大役があるでしょ？」
抵抗を試みる完二だが、りせにばっさりと切られる。
「……先輩、何か言ってやってくださいよ」
最後の望みとばかりに完二は総司に助けを求めるが、総司の答えは達観したものだった。
すなわち、諦めろということだ。
「おっ、瀬多くんは話が早い」
「じゃあ、いっぱい買っちゃおうかな」
「私も、どーんと注ぎ込む！」
女性陣も物わかりのいい総司の返事に沸くが、総司としても買いたいものがあるのだ。
総司は茜と顔を見合わせて、にやりと笑った。

■１０／４

静かな家の中。
堂島は仕事で、総司と菜々子はそれぞれ学校に行っている。
だから、茜は独りお留守番。
独りきりは寂しいので会話相手が欲しいところだが、交流（コミュれ）できる相手も社会人や学生が多いので、結局はテレビを見たり裁縫したりして独りで過ごすことになる。
だけど、今日は違った。

誰も居ないからこそ、今のうちに。
普段、タイムサービスを活用するためと、テレビの中へ探索に行くのに都合がいいので買い物は夕方にするのだが、今日は午前中に済ませた。
そのうちの一つ。
商店街の近くで買った物は夕飯後まで知られたくないので総司の部屋に隠させてもらう。
もちろん、総司の許可は取ってある。
これは、二人の計画なのだ。
まず菜々子が帰ってきて、その後総司が帰って来る。
でも、まだ内緒。
喜んでくれるか楽しみで、菜々子が帰ってきてからポーカーフェイスを保つのが大変だった。
堂島からも、もうすぐ帰ると連絡が来る。
夕飯を作ろうと台所に立つ茜に、菜々子が手伝いを申し出た。
一緒に作ろう、と総司も引っ張ってくる。

「じゃあ、総司くんはサラダおねがい。
レタスとトマト。
後ツナがあるから」
「了解」

茜の指示に総司は頷き、冷蔵庫の野菜室からレタスとトマトを取り出す。

「菜々子は、えっと……」
「菜々ちゃんは、目玉焼き作って」
「うん！」

茜が仕事を割り振ると、菜々子は嬉しそうに笑う。

菜々子は一応包丁を使うこともできるが、火を使った調理は目玉焼きぐらいしかできない。
もう少し正確に言うと、まだ幼いのでそれ以上の事は堂島に止められているのだ。
その代わり、母親が亡くなり茜が台所を取り仕切るようになるまでは朝食として作っていたこともあって、焦がさず綺麗に作ることができる。
ちなみに菜々子と同じ年頃である茜が堂島に止められなかったのは、その前に自身の実力を見せて納得させたからだ。
その茜は担当するのは、メインの肉料理とスープ。

「バランスのいい、食せいかつがだいじなんだって。
”しゅしょく”、”しゅさい”、”ふくさい”……あかねちゃんいるから、いつもだいじょうぶだね！」

並んでいる食材から料理を想像しながら、菜々子は笑う。
今日は目玉焼きハンバーグだ。
それにツナサラダとコンソメスープ。
総司は野菜を洗って、切って盛り付けて。
茜は丸めて形を整えたひき肉の塊をフライパンに乗せる。

「……あのね、かぞくは助けあうんだって、先生、いってた」

菜々子は器に卵を落とし入れながら言う。
一旦器にいれないと、たまに卵の殻が入ってしまうのだ。

「お母さん死んじゃって、菜々子もお父さんも、さびしいけど……
でも、菜々子にはお父さんがいるから！
だから、お父さんがさびしくないように、菜々子ががんばらないとね！」

家族で、助け合う。
その初めの一つが、今日の料理の手伝いだったようだ。
ガラガラ、と玄関の戸が開く音と共に、ただいまと言う声。
おかえり、と言いつつ菜々子は茜を見て、総司を見上げた。

「お兄ちゃんたちも、かぞくだから……
いっしょにがんばろーね！」
「ああ、一緒にがんばろう」
「あたしも、がんばるよ」

笑い合って、三人は堂島を出迎える。
満面の笑みの出迎えに、堂島は少し驚いた顔になるが、すぐにその顔は優しげな笑みへと変わる。
総司は堂島が後ろ手で隠している物に気付き、一旦自分の部屋に戻った。
学習机の上に、大き目の箱と小さな箱が置いてある。
大きな方は茜が置いて行ったものだ。
小さい方を手に取り、総司は階下に戻る。
丁度、堂島が隠している物を菜々子に渡す所だった。

「誕生日おめでとう、菜々子」

菜々子が驚いた顔で堂島の差し出した包みを見る。
ジュネスのロゴがプリントされている。
受け取って、菜々子ははにかんだ笑みを浮かべた。

「ありがとう、お父さん！」
「こっちは、俺と茜ちゃんから」
「お兄ちゃん…あかねちゃん……

ありがとう！」

総司が部屋から持ってきた小箱を渡す。
沖奈市のＣＲＯＣＯ＊ＦＵＲで、総司と茜が二人で選んで買ったものだ。
茜が総司の部屋に置いた大きい方の箱は、菜々子の為に買ってきたホールケーキ。
総司が尚紀から聞いた、商店街の近くの洋菓子店のものである。
みんなで作った夕食に、生クリームたっぷりのショートケーキ。
それはとてもおいしくて、温かく、満ち足りた時間だった。

／＊／

軽い、澄んだ音が響く。
総司が風呂から上がり、居間に戻ると菜々子はその音に耳を傾けていた。
小物入れになっている、小さなオルゴール。
総司と茜が贈ったプレゼントだった。

「気に入ってくれた？」
「うん！」

菜々子が明るく笑う。
今日はよほど楽しかったようだ。
それに満足そうに総司も笑う。

「ね、お兄ちゃんのたんじょうびは？
あかねちゃんはね、まだたんじょうびは思い出せないんだって」
「残念ながら、４月の初めなんだ」

総司は稲羽に来る前に誕生日を迎えていた。
稲羽を去るのは3月下旬。
この家にいる間に誕生日は来ない。
そっかあ、と菜々子は残念そうに呟いた。

「…これ、お兄ちゃんにあげる！」

誕生日を祝えない代わりにとばかりに菜々子が差し出したのは1枚の写真。
それは、前に見たことのある写真だった。
菜々子が堂島に返したと言っていた、堂島と菜々子、そして菜々子の母親が映った家族写真。

「お父さんがね、やきまわし？　してくれた」

ネガがあったらしい。
総司が修学旅行に行く前日、菜々子は堂島から焼き増しした写真を受け取っていた。

「お兄ちゃんも、かぞくだから、かぞくのしゃしん、あげる。
今度、お父さんとお兄ちゃんとあかねちゃんと菜々子とで、しゃしんとろうね！」

菜々子の言葉に総司は頷く。
菜々子の笑顔はオルゴールの音色のように澄んでいる。
少し寂しげで儚げで、でもそれを乗り越えようとする強い意志を感じられる微笑み。

「えへへ……
お兄ちゃん、だいすき！」

この笑顔を守ろうと、総司は誓いを新たにした。

■10／5

白い霧が辺りを覆う中、5日から6日へと日付が変わる。
街灯の明かりがぼんやりと霧の中で存在を主張する。
そんな商店街には、ただ一人しか立っていなかった。
姿は相当近くにいないと判別できないだろう。
それほどに霧は深い。

「これで、何回目だったかな……
どうしようか…な……」

その人影はそんなことを呟いて、他に誰も居ない商店街を歩いていく。
靴音だけを響かせて。
深い霧だけが、それを見ていた。

菜々子のプレゼント（後書き）

明確な誕生日が決まってないのはプレイヤーの分身だからなんでしょうけど、総司の誕生日、勝手に（大体）決めちゃいましたごめんなさい。。

とりあえず、稲羽にいない間に誕生日迎えてたってことにしときました。

終盤の日付飛ぶあたりに入れるのも考えましたけどね。

そこには別のイベントが入るから。

１０／３、ゲームでは冷蔵庫の中にショートケーキが入ってます。

次の日の菜々子の誕生日用ですかね。

選択しだいでＰ４主が食べちゃうんですけど。

記憶喪失の王様

初めに、チャイムが鳴った。

その日、直斗は囮として少々派手に聞き込み捜査を行い、先程帰って一息ついた所だった。

直斗が現在住んでいる場所は、直斗の実家ではない。

警察に”特別捜査協力員”という事でアパートを用意してもらい、そこに独りで仮住まいしている。

遠いので、実家からでは毎日稲羽に出てくることができないのだ。

数日に一度、実家から身の回りの世話をしてくれる者が来るので不自由もしていなかった。

もう一度、チャイムが鳴る。

総司に啖呵を切った直斗だったが、中身は腕力に自身のない小柄な女の子。

やはり、恐怖心はあった。

おそるおそるドアを開けて外を見る。

外には、誰も居なかった。

悪戯かな、と首を傾げた瞬間。

後ろから腕が回されて、直斗の口が何かで塞がれた。

薬品独特の匂いが鼻孔を刺激する。

だが、完全に意識を失ったりはしなかった。

誘拐の手口が想像していたものと近かったので覚悟が出来ていたのもある。

だが一番の原因は薬品だ。

小説などではおなじみのクロロホルムなどの薬品では、人は簡単に意識を失わないものなのだ。

それでも、吸い込んでしまったせいで気分は悪くなる。

ふら付いた体に、すっぽりと袋が被せられた。

浮遊感。
抱え上げられたことを直斗は察した。
パニックと薬品酔いで働かない頭で、それでも少しでも情報を得るために考える。
手際、体格。
恐らく、男。
いくら直斗が小柄でも、流石に女性ではここまでスムーズにはいかないだろう。
会話も合図らしい音も聞こえない。
単独犯の可能性が高め。
必死に情報収集に努める直斗に、衝撃があった。
直斗には分からなかったが、この時にテレビに落とされたのだ。
直斗にハンカチが宛がわれてから、ものの数分間の出来事だった。
白い霧の中。
どこまでも堕ちていく感覚。
薬品のせいか、それとも。
この異常な状況のせいか。
あやふやな意識の中、どこまでも堕ちていく。
だけど直斗にとって、それは敗北ではなかった。
失敗でもなかった。
助けが来ることを、直斗は疑っていなかった。
きっと、彼らなら見つけてくれる、と。
だから、これは失敗ではない。
そしてなにより。
直斗は真実を一つ手に入れたのだ。

真犯人が別に存在する、という真実を。

白い霧の中。
直斗は。

■１０／６

直斗は目を開けた。
閉めたカーテンの隙間からは光が射している。
鳥の鳴き声。
直斗はまだ鳴り出す前だった目覚まし時計のアラームを解除して、テレビを付けた。
ニュースが今日の日付と、今日からの天気予報を告げる。
霧の夜は明けた。
今まで同じ人間が二度襲われた例はない。
自身の危機も脱したとみていいだろう。
直斗は冷蔵庫を開けて牛乳をコップに注ぐと、一気に煽った。
一息ついて、壁に掛けられた制服を見る。
そこには制服は2着あった。
それとも、2種類というべきだろうか。
どちらも、同じ八十神高等学校の物だ。
だけど根本的に別の制服だった。
セーラー服と学ラン。
女子用と男子用なのだ。
直斗は少し迷った後、学ランの方を手に取った。
自分は自分。
ありのままの自分。
変える必要なんてないのだ。
それに。
直斗は残されたセーラー服を見上げた。
そして少し頬を赤く染める。

やはり、スカートは恥ずかしいのだった。

／＊／

「そっか……
しかし、驚いたな……まさか犯人、マジで”玄関からピンポーン”かよ……」

放課後の特別捜査本部。
直斗の話を聞いて陽介が唸った。
雪子も浚われる前にチャイムの音を聞いている。
どうやら、誘拐犯は真向から何食わぬ顔で来るらしい。
直斗は、転校してきた時のようにわざわざ総司達を校門で待っていた。
助けてもらった礼と、そして捜査の協力を申し出るために。
そして放課後に直斗の話を聞くことになったのだが、肝心の犯人の顔などは見ることが出来なかったものの、それでも他の被害者達より覚えていることは多かった。
犯人の手口、恐らくではあるが性別、犯行にかかる時間。
特に、テレビに入れられるまでが数分という情報は大きいだろう。
道端に毎回テレビが落ちているという可能性はないといっていいだろうし、人一人抱えて数分で行ける範囲は限られている。
標的の家に人が入れるほど大きなテレビがあればいいが、そうでない場合ももちろんあるはずだ。
一旦浚って別の場所に連れて行ってるわけではないのなら、別のテレビを用意している可能性が高い。
ともかく、直斗と他の被害者の失踪体験は真似る必要のない所まで似ている。
亡くなった残り2人、そして雪子・完二・りせ・直斗をテレビの中に入れた真犯人は同一人物と見て間違いないだろう。

「久保はやはり、諸岡さんを殺したに過ぎません。
真犯人の手口を真似ただけの”模倣犯”です。
何処で”あの世界”について知ったのか、という謎は残りますが……」
「そう、それだ！
あたしがひっかかってたの！」

情報を整理していく直斗の説明に、千枝が声を上げた。
全員が千枝に注目する。

「つまりさ、久保は、テレビに入れる訳でしょ？
どうして同じ方法でモロキンを殺さなかったの？」

その質問に総司が口を開く。

「それについては、家で茜ちゃんと話して考えをまとめてある。
多分、合ってると思うんだけど」

今度は総司が注目を集めた。
話す内容は、打ち上げ後に茜と話した美津夫についての見解だ。
ペルソナ使いになるプロセスを考えると、美津夫がペルソナ使いだとは考えにくいという事。
つまり、テレビに入る…または入れるなんて思いつきもしなかったという可能性以前に、テレビに入る能力がなかったのではないかという事。

「でも、久保くんは私達も…他の人も自分がやったって言ってたよね。
それに、入れなかったらどうやってテレビに逃げ込めたの？」

「久保が真犯人の罪も被ろうとした理由は分からないけど……後の方は予想はできるよ。
多分、久保は……」
「久保も、入れられた…って事ですね？
つまり、久保も被害者だったって事ですか」
雪子の疑問に総司が口を開き、同じ答えに辿り着いた直斗が結論付ける。
総司は頷いた。
直斗が口元に拳を当てて悔しそうに唸る。
「本人から直に聴取できれば早いんですが……
生憎僕は、捜査からは外された身です。
警察は、逮捕してしまった容疑者を易々と覆さないでしょう……まして少年だ。
被害者としての聴取なんて受け入れてはくれないでしょう」
「テレビで記者会見とかやったのをひっくり返すのって、重たいからね……」
ため息をついてりせが言う。
直斗は頷く。
それこそが直斗が捜査から外された最大の理由。
記者会見の内容をひっくり返す、真犯人の存在を示唆する発言のせいだった。
一通りそれぞれの考えを言い合い、今日は解散しようかという流れになった頃、直斗は思い出したように顔を上げた。
「そうだ……明日の放課後、時間とって欲しいんですが」
「ん？
何かあんのか？」

ジュースの空き缶を持って立ち上がろうとしていた完二が椅子に座り直す。

「いえ…実は、クマくんを医者に診せてみたいんです」

直斗の提案に、皆がそれぞれ首を傾げた。

「獣医さん？」

「ジューイって、何クマ？」

雪子の天然な言葉に、直斗は苦笑する。

確かに普段クマのキグルミで、名前もクマだが、見せるのは中身。

直斗は、一応人間用のですと注釈した。

聞き慣れない単語に首を傾げるクマに直斗は完全にスルーして話を続ける。

「時間空けてくれるなら、明日の放課後に精密検査を受けられるように手配します。

クマくんが何者なのか、まずは普通に医者に診てもらうのもいいのかなと」

「クマが何者なのか…分かるの？」

直斗は隣に立つクマの顔を覗き込む。

結局、ジューイが何かは分からなかったが、自分に関わりがあるのを察して、クマは直斗を見つめ返した。

キグルミの無機質な瞳に直斗の顔が映り込む。

「クマくん…君の事は、聞いてるよ。

自分を探したいって気持ちは、僕も分かる。

だから、少しでも協力したいんだ」
「クマクマ～…ナオトクン、いい子クマね！
クマ、うれしい！」

嬉しそうにすり寄ってくるキグルミを、直斗は撫でる。
直斗は顔を上げ、それに……と呟く。
その顔は憂い顔で。

「それに？」

陽介が不安そうに台詞をオウム返しする。

「僕たち自身の事も、調べてみた方がいいかと思ったんです。
”向こうの世界”の霧や、あの”力”が、体に何か影響を蓄積させていないかどうか。
僕よりも皆さんの方が長いでしょうし、それに僕たちが平気でも、肉体的に未成熟な茜ちゃんに影響がないとは言い切れません。
記憶喪失の件もあります。
だから、一度診てもらった方がいいかと」
「えー、影響？
こ、怖い事サラっと言うなよ……」

直斗の言葉に、陽介は顔を顰めた。
その表情には、先程の不安も色濃く残っている。

「ん～、一応あたしは一度みてもらったんだけど……」
「いつ頃ですか？」
「…４月。
堂島さんにおいてもらえるようにたのんで…服そろえるのにお金もらって。

ついでにお医者さん行ってきなさいって」
「それじゃあ、やっぱりもう一度診てもらって経過を調べた方がいいですね」

茜の言葉に直斗は頷く。
前の診察が約半年前。
あれから何度もテレビの中の世界に入っているので、比較対象に使えるだろう。
茜は身元不明で保険もないが、診察費などは生活保護の一種で市が出す事になっているようだ。

「しかし医者か……
そっか…その発想無かったわ……」
「分かった。
明日は空けとくよ。
皆もそれでいい？」

息をつく陽介の横で総司が皆を見渡す。
皆が肯定し、直斗に頷いてみせた。

「じゃあ、病院には連絡しておきます。
それでは、明日の放課後に」

■１０／７

放課後、総司達は前日話し合った通りに病院で精密検査を受けた。
だが、精密検査といっても内容はごく普通の健康診断と変わらない。
身長体重などの基本的な測定、胸部エックス線に心電図検査。
血圧や血液の検査に診察。

どれもこれも学校の健康診断と同程度でしかない。
終わってロビーに繋がる廊下で落ち合った後も、陽介などは拍子抜けしたような表情になっていた。
機械に乗って回されたりする仰々しいのを内心期待していたらしい。
実際、結果を待たずとも異常はなさそうで、診察をする医者の方も不思議そうな顔をしていたぐらいだった。
例外は茜とクマぐらい。
その二人と、彼らを迎えに行っている直斗だけがまだこの場にいなかった。
別室で精密検査を受けていたクマの事は総司達には分からないが、茜が長引いているのは単純に記憶喪失の件の診察があるからで、異常があった等ではない。

「あ、戻ってきた」

廊下を歩いてきた三人に気付いて雪子が顔を上げる。

「お待たせしました」
「で、クマの事、何か分かったか？」
「分かりましたよ……
分からないって事が」

ぺこりとお辞儀をする直斗に、陽介が質問する。
直斗は一つため息をついて、首を横に振った。
クマは、レントゲンに映らなかったらしい。
何度撮ってもボヤけてしまうそうだ。
ただ、見た目の様子や触診では異常は見受けられず、医者からは機械の不調かもしれないから、心配なら別の病院へと言われたとのことだった。

「やっぱり、普通と違うんだね……」

雪子は呟いて、憂い顔になる。

その雪子にクマは笑いかけた。

「やだなーもー。

クマ、奥の奥まで見られちゃった」

「だから、見えてねーっての」

両腕で肩を抱いて身を捩るクマに、千枝が呆れた表情でツッコミを入れる。

「まー、異常はねえって事なんスよね」

「あたしも、異常なしだったよ。

記憶の方も大分戻ってきてるし、多分、自然に戻るだろうって」

「そっか、よかったね」

「うんっ！」

茜の記憶喪失の方の診察も経過は良いようで、機嫌良く茜が笑う。

雪子の言葉に、茜は元気よく頷いた。

結局、異常らしい異常は、クマが検査機器と相性が悪かったということだけだった。

鏡にも映るし、修学旅行で行ったゲーセンでプリクラも撮っていたから、写真にも映るはずだ。

ただ内面を写し撮ることができないのだろう。

「こいつもそうスけど、実際何なんスかね、ペルソナとか、シャドウとか……」

完二がため息をつく。
テレビの中の世界、そこに蠢くシャドウ、そしてペルソナ、魔法……
数ヶ月前まで知らなかった幻想（ファンタジー）のような現実（リアル）。
陽介も図書館やインターネットで調べたようだが、難しくてよく分からなかったらしい。
辛うじて理解できたのが、ペルソナやシャドウというのが心理学用語で、ペルソナには人格という意味があるということぐらいだった。

「そう言えば、茜ちゃんは”あの世界”について、結構詳しかったよね？
海とか、窓とか」
「え？
それ、本当かい？」

雪子が茜に話を振り、それに直斗が反応する。
確かにいつかそんな話を茜はしたが、ここにいる半数はその話を聞いていない。

「全部知ってるわけじゃないし、分かるわけじゃないけど……」
「教えて欲しい。
僕は、その話を知らないから」

頷く茜に直斗が頼んだ。
茜はもう一度頷いて話し始める。

「あの世界はね、人の心。
全ての人の心の中に元からある、無意識の海」

それは分析心理学における中心概念であり、人間の無意識の深層に存在する、個人の経験を越えた、集団・民族・人類の心に普遍的に存在する”元型（アーキタイプ）”

普遍的無意識という。

全てが混じり合っているが故に、そこには正も負もない。

だけど、水が淀んだところにゴミが溜まるように、負の心は固まることがある。

それが。

「それが…シャドウなんだね」

それが、シャドウ。

形を取る前の不定形の凝った闇の姿をしたシャドウは、まさに海に揺蕩う汚れと言っていいだろう。

だが、どんなにそれが汚くても。

どんなにそれが醜くても。

それは人間の心の一部分なのだ。

「うん。

ペルソナは、”もう一人の自分”。

みんながシャドウを”もう一人の自分”だと認めたように、ペルソナもそうなの」

「根っこはおんなじモンってか？

けど、そうか…ブッ倒したシャドウがペルソナに化けんだもんな……」

呟いて、納得したように完二が頷く。

「シャドウが負の心っていっても、ペルソナが正の心ってわけじゃない。

例えば、あたしやそうじくんは悪魔や死神のペルソナも呼ぶ。
イメージ的にもいい心って感じじゃないでしょ？」
「まあ、そうだよね」
千枝が茜の言葉を肯定する。
”敵”として対峙したシャドウが、”味方”として自身を守る。
だから誤解しがちになるが、負から変わるものが正になるとは限らない。
「ペルソナとシャドウは、同じものなの。
それを”自分自身”として制御出来ているか、出来ていないか。
その程度の違いなんだよ」
「僕がたまたま手に入れた、ある非公式な計画文書には、こう書いてありました。
シャドウとは抑圧下の力であり、自我がそれを制御する事でペルソナともなる……
なるほど…そういうことなんですね……」
直斗は言って、茜を促す。
あの世界とシャドウ、そしてペルソナ。
後はマヨナカテレビの話だ。
「マヨナカテレビは、その海をのぞくことのできる窓。
初めぼんやりしてるのは、みんなの無意識が混じり合ってるせいで……
そうだね…テレビで言うと、チューニングがあってないって感じ。
無意識の中に、確固たる人が入ることによってチューニングが合ってハッキリ映るんだと思う」
茜は、窓の外に視線を向けた。

窓の外には、明るく照らされた病院の中庭が見える。
テレビからあの世界に行くのは、そこの窓から外に出るのに似ている。
窓から海を眺め、窓から海に飛び込むのだ。

「ふうん……
何となく分かる気がするけど、やっぱり難しいな。
なーんか、自分自身の事なのに、分かんない事ばっかり」

りせが難しい顔で首を傾げる。
クマがにやりと笑った。

「分かる事もあるクマよー。
クマはね、イカしたデータを色々持ってんの」

意味深な言葉に、皆がクマに注目する。

「なんかさ、クマだけ見られるんじゃ、恥っずかしいから……」

クマは自分で”ジャーン！”と効果音を言いつつ、後ろ手に持っていた物を掲げた。
それは、数枚の紙。
クマはそれを胸の高さまで持ってきてペラペラと捲り出す。

「今のご時世、情報開示って大事ですよね。
という事で、みんなの検査結果、ドッキドキ大発表クマーッ！」

その紙はつい先程受けた精密検査のデータらしい。
もちろん、血液検査の結果などがもう出たとは思えないので、中身は正式なものではなく身長体重などのパーソナルデータの筈だ。

「な!?　じょ、冗談じゃないっての!
返してよ!」

だけど、それは何の慰めにもならない。
むしろ、専門用語だらけで見てもよく分からない細かいデータより、そちらの方が流出して欲しくない。
千枝が喚いてクマの手の中にある紙に手を伸ばすが、クマはするりと身をかわした。
陽介も悪乗りして、スリーサイズを発表しろとクマを煽る。
雪子と千枝がそれに慌てるが、りせだけは平然としている。

「私は別にいいけど?
とっくにプロフ出てるし。
あ、胸だけ2センチサバ読んだけど。
事務所に言われて」

りせはにんまりと笑って言う。
そして率先してクマの持ったデータを覗き込んだ。
頷きながら視線を紙の上に這わせていたりせは、ある一点で動きを止める。
その表情が驚愕の色に染まる。
緩々とりせの視線は直斗の方へ。
だが、顔を見ているわけではない。
りせの視線はもう少し下…胸元に向いている。
その迫力に、直斗が一歩下がる。
そして二、三度紙と直斗へと視線を往復させて呟く。

「これ…ホント?
え、計り間違えてない?」

何やらり直斗の項目にりせにとって看過できない情報が載っているようだ。
顔を真っ赤にした直斗がクマの持った紙を取り上げる。

「とっ！　とにかく！」
この検査結果では、僕らに健康上の問題は見つかりませんでした！
だから、これはもう、必要ありませんッ！
シュレッダーに入れてきます！」

言って、直斗は走って行ってしまう。
あまりにもあっという間で、止める暇もない。
そして、止める必要性も感じなかった。

■１０／１１

「あー！　わっかんねー！！
総司、問２、答え何！？」

ジュネスのフードコートに、陽介のそんな声が響き渡った。
ここに全員で集まる時は殆ど特別捜査隊としてなのだが、今日は違った。
大人数が座れる一番大きなテーブルを陣取って、机の上には教科書やノートや筆記具などが置かれている。
もうすぐテストという事で、勉強会を開催しているのだ。

「こないだやったところだろ。
”緑色が老化したから”、だ」

ノートから顔を上げて総司は間髪いれずに答える。

「あー、そっか…サンキュ！
はー、こういう時ばっかりはクマがうらやましいぜ……」

思い出したのかペンで頭を掻きながら礼を言う。
その視線が向かうのは、にこやかに笑いあう茜に菜々子にクマ。
中間テストと無縁の三人はこうしてお喋りに興じているのだ。

「クマさん、自分のこと分からないの？
あかねちゃんといっしょなんだね」
「……こっちの生活は、本当に楽しいクマ。
だけど、そう感じるほど、自分が何なのか気になっちゃって……」

菜々子の言葉にクマは頷く。
インターネット、書籍（但し漫画に限る）、テレビ…ジュネスの仕事や用事が入ってない時に、クマは優先的に自分の事を調べていた。
だけど、納得のいく答えは見つからない。
病院での精密検査でも、結局分からなかった。
明るく振舞っていても、本当は不安なのだ。
だけど、イメージはある。

「クマはね、シャドウがいっぱいのあそこで、何かきっと特別な存在だったんだと思う」

自身が住んでいたあの世界。
クマの現実。
そこにいたのはクマとシャドウだけだった。
その中で、ただ一人自我を持って自分の意志で行動していたクマ。
自分というのに気付いたのは、いつだったか。

あちらには時計やカレンダーといったものがないので分からない。
だけど、ずいぶん前の話だった。

「けど、その頃の事、アカネチャンみたいに忘れちゃったかなんかしたクマね……
でも、アカネチャン記憶戻ってきてる。
だから、クマの記憶もきっと戻ると思うクマよ」

記憶喪失の自分の中から現れた記憶喪失の少女。
記憶を取り戻しつつある茜。
それなら、自分の記憶も戻るはずだ。
それが、不安を抱えるクマの希望。

「……ねー、クマさん、きっと、王様だよ」

特別な存在。
それを考えていた菜々子が言う。

「王様はね、わるい人のノロイで、森の中にひとりだったって、本でよんだ。
クマさんも、そーだったんでしょ？」

記憶喪失の王様。
呪いをかけられてひとりぼっち。
あるのは話し相手にならない黒い影と空っぽのキグルミ（カラダ）。
だけど、ある時不思議な力を持った青年がやってきました。
王様は青年と絆を結びます。
絆は深まり、王様は空っぽだったキグルミに中身が出来ました。
呪いが薄くなってきているのです。

そして呪いが解けた時。
記憶喪失の王様は……

そうならいいな、とクマは思った。

脅迫の手紙

■１０／９

紙の上をペンが走る。
筆記体の流れるような文字が綴られていく。
問題を読むために所々止まるものの、それ以外でのペンの動きは非常に滑らかだ。
翻訳のバイトをしていたこともあり、英語の読解力は随分上がったと総司は思う。
受験英語よりも表現がフランクになってしまうのは玉に疵だが。
テスト前の最後の日曜日。
先日の勉強会では結局あまり勉強にならなかったので、総司はこの日を使って勉強に勤しんでいた。
しばらく無言で問題集を解いていく。
ふと、顔を上げる。
何かの音が聞こえた気がしたのだ。
時計を見ると、もうすぐ１３時といったところだった。
時間を確認したことで意識が現実に戻ったのか、今まで沈黙していた腹が音を立てる。
腹を押さえていると、部屋の扉がノックされた。

「総司くん」
「茜ちゃんか……
どうした？」

やってきたのは、茜。

「お昼ごはん、できたよ。

後、お客さん」
「客？」

丁度良い昼食のタイミング。
そして先程聞こえた気がした音はインターホンのチャイムの音だったようだ。
だが、来客が誰なのかは想像がつかない。
今日は誰とも約束してなかった筈だ。
首を傾げた総司に、茜が来客の名を告げた。

／＊／

「ん、おいしー！」

ちゅるん、とスパゲティを啜りこんで、りせは満面の笑みで言った。

「茜ちゃん、天才！
テレビで色々食べに行ったけど、全然負けてないよ、これ！」

惜しみない賞賛に、茜は頬を赤く染める。
ジャガイモやツナ缶など常にストックしてある食材だけで作った手軽なクリームスパゲティだったが、褒められれば嬉しいものだ。

「それで…今日はどうしたんだ、りせ？」

ニコニコと食べ進めるりせに、総司はフォークとスプーンで麺を絡めながら訪ねる。
りせは今思い出したとでも言うように、もう一口食べてから持ってきた鞄を開けた。

「突然ごめんね、センパイ。
ごちそうにまでなっちゃって……」

中から取り出したのは、レジ袋。
それを茜に渡す。
茜が中を覗き込むと、豆腐とがんもどきが入っていた。

「それ、おみやげ」
「わあ、ありがとう！
今日の夕ごはんにするね」
「これ渡しに、わざわざ？」
「あ、違うの。
本題は、こっち」

りせはもう一度、鞄の中に手を入れる。
そこから出てきたのは、教科書とノート。

「今度のテスト、範囲が広いの。
だから、ねっ？」

可愛らしく首を傾げるりせ。

「だから？」
「あーん、いじわるしないで、センパイ！
教えてもらわないと分かんないよー」

少し悪戯心を刺激されてとぼけてみれば、りせは泣きついてくる。
分かった分かった、と総司は降参して体を離させた。

「食べ終わったら、見てやるから」
「ほんと!?
ありがと、センパイ!」

嬉しそうにりせはきちんと座りなおして、食事を再開する。
スプーンの上でフォークを回してスパゲティを絡める。
口に運びながらりせはテレビに視線を向けた。
再放送のバラエティが流れている。

「そっか…これのイメージキャラ、”かなみ”になったんだ……」

りせの呟く声に、総司もテレビに顔を向けた。
CMに切り替わった画面の中で、女の子が可愛らしい表情を見せている。

「えっと……真下かなみ、だっけ?」

名前を思い出しながら総司は言う。
真下かなみ。
”かなみん”という愛称で売出し中のアイドルで、妹系と友達系の中間といった感じで、守ってあげたくなると人気は高い。
総司の言葉にりせは頷いた。

「うん。
同じ事務所の子。
後輩なの。
…かわいい子だから、売れそうだなーとは思ってたけど」
「菜々子のクラスにも、”かなみん”すきって友達、いるよ。
だから、菜々子、”りせちゃんのほうがいい!”って言うよ」

にっこりと笑って言う菜々子に、りせは驚いた顔を向けた。
だけど、その顔はすぐに伏せられる。
下されたフォークから、麺が解けて皿に戻った。

「で、でも私…テレビで見るのと全然違って…ガッカリ…したよね…きっと……」

フォークでスパゲティを突きながら言うりせに、菜々子は首を傾げる。

「してないよ？
だって菜々子、りせちゃんすき」
「え、あ、ありがと……
でもそれって、こっちの私を…好きって言ってくれたってことだよね……」
「こっち？
りせちゃんは、りせちゃんでしょ？
菜々子、すきだよ」
「あ、え…ええっと……
…ありがと、菜々子ちゃん。
私も菜々子ちゃんのこと、好きだよ」

しどろもどろになったりせが最後にそう言うと、菜々子はやった、と笑う。

「ごちそうさま！」

菜々子は手を合わせて、空いた皿を流しに持って行った。
その菜々子の背中を見送って、りせは自身の皿に視線を戻す。
少し冷えてしまったスパゲティを口に運ぶ。

「りせちゃんは、りせちゃんか……」

りせにとって、”りせ”と”りせちー”は別の存在だった。

”りせちー”も自分なんだと認めた今も、演技としてキャラを演じてるんであって”本当の自分”とは違うと思っている。

演じている内に、自分が分からなくなって。

だからそういう事を悩まなくてすむように休業した。

”本当の自分”を無くしてまで居たくなかったから。

”りせちー”を消せば、”本当の自分”が戻ってくると思っていた。

芸能界に未練は無い。

戻りたいとも思わない。

今はただ、”本当の自分”を見てくれる人達から”必要”なんだと言ってもらえるような自分でいたかった。

「仕事してると、すごい人数と知り合うけど、仕事抜きで人と会う機会って、逆に減るの。

減るっていうか、ゼロんなる……

だから”独り”のときって、ホント”独り”で……

思った事、色々飲み込むしか無くて……

だから……」

大勢に囲まれているのに、独りで。

「だから…今は、独りはイヤだよ……」

それがすごく寂しかった。

りせは顔を上げて総司を見つめる。

今は、一人でも独りじゃない。

総司や、仲間がいる。

「……そうだな」

りせと目を合わせたまま総司が頷く。
そして優しげに微笑む。

「とりあえず、今は一緒に勉強しようか」
「うぐっ」

りせが総司の言葉に呻く。
気が付けば、皿は空っぽになっていた。
苦笑しながら茜が皿を下げる。

「セ、センパイに教えてもらえるなら、頑張る！
ちゃんとやるから…できなくても笑わないでね！」

ヤケクソ気味にりせは筆記具を取り出した。

■１０／２０

朝から降っていた雨は、昼を過ぎたあたりで止んだ。
茜は縁側から外に出て空を見上げる。
縁側には主に洗濯物を干す時に使うつっかけがあってそれを履いたのだが、水がはねたのか少し湿っていた。
両腕を上げて伸びをする。
視線が向いた雨が上がったばかりの空は雲に覆われていた。
つっかけのまま庭を通って玄関の方へ行くと、カーポートの上から猫が茜を見下ろしてくる。
雨が止んだので出てきたのだろう。

堂島家は、飼ってもいないのに猫屋敷のように猫が複数たむろしている。
茜が堂島家に来た頃はそうでもなかったのだが、いつの間にやら猫の集会所のようになっていた。
ふと、茜は郵便受けに何かが入っているのに気付く。
朝刊は朝起きた時に取っているし、郵便配達が来るのは普段はもう少し後の時間。
蓋を開けて中身を取り出す。
中身は変哲もない封筒。
印刷された宛名。
茜はそれを見て、踵を返した。
小走りで戻っていく。
猫が、当てが外れたとばかりに不満げに鳴いた。

／＊／

総司は椅子に座ったまま、腕を上げて背伸びをする。
長い、一週間続いた中間テストが終わったのだ。

「ふああ～。
やぁっと終わったぁぁ……」

解放感に浸る総司の横で、欠伸をしながら陽介が立ち上がる。
それは、先程の台詞が示す通り、すごく眠そうで疲れ切った声だった。

「昨日徹夜したからぶっ倒れそうなんだよね……
俺、先帰るわ」
「ん、お疲れ」
「んじゃーなー」

フラフラと歩いていく陽介を総司は見送る。
見送って、一つ大きな欠伸が洩れる。
陽介のがうつったようだ。
総司は机の横に引っ掛けていた鞄を机の上に乗せて筆記具などを仕舞い出す。
その横で、雪子と千枝は答え合わせに余念がない。

「ああー、また間違えてるぅぅ……
神様仏様ペルソナ様！
赤点だけは…赤点だけは回避できてますように！！」

机に突っ伏していた千枝は、立ち上がった総司に気付いて顔を上げる。

「あ、瀬多くん帰るの？
一緒に帰ろ！
雪子、いい？」
「うん、もちろん」

慌てて立ち上がって帰る準備を始める千枝。
雪子も頷いて自分の鞄を手に取った。
程なく支度が出来たようで、千枝は総司に視線を送る。
総司は頷いた。

「じゃあ、行こうか」

三人揃って校門を出る。
午前中に降っていた雨は止んでいて、曇ってはいるけど今にも泣き出しそうな空模様、という程ではない。

畳まれた傘の先がアスファルトを引っ掻いた。

「テスト終わったし、次は文化祭だね。
うちのクラスって何すんだっけ？」
「まだ決まってないよ。
今度、投票で決めるって聞いたけど……
確かまだ案を募集中じゃなかったかな？」

歩きながら千枝は雪子に話を振り、雪子が答える。
確かにそろそろそんな季節だ。
だけど、テストの準備ですっかり忘れていた。

「案募集の話も聞いてなかった気がする……
文化祭、何日だっけ？」
「そ、そこからか……
で、雪子、何日？」

総司の言葉に千枝が肩を落とすが、その千枝もその程度の認識のようだ。

「２９日だよ。
２９、３０の二日間。
二日目が日曜だから、３１日は振替休日」
「本気でもう少しだな」
「花村あたり変なの考えてそうだよね。
アレなこととか」

後１０日もないスケジュールに総司は呆れる。
そんなに凝ったことは出来そうにない。
分かれ道に差し掛かり、歩く速さが鈍る。

「それじゃあ、またね」
「雪子、また明日！」
「じゃあな」

雪子とは、その分かれ道で別れる。
見送って、止まっていた足を再び動かす。
千枝はちらりと総司を見上げた。

「あの…あのね、聞いて欲しいんだ。
ずっと考えてたこと」

どうやら、千枝が一緒に帰ることを提案したのは話したいことがあったからのようだ。
立ち止まって千枝に向き直る。

「”あたしの価値はこれだ！”なんて……
自信持って言える人、いるのかな？
あたし、考えてみたけど自分の価値なんて全然分からなかった。
だけど、それでいいんだって思ったの」

先日会った時から、千枝はずっとその事を考えていたらしい。
そして、その結論は、”ずっと探していけばいい”ということだった。
どうせ、やることは変わらない。

「あたしは最後まで、キミの隣で一緒に戦うんだから」

千枝は、鞄から何かを取り出して、総司に差し出した。
総司の手の中に納まったのは、一対のリフトバンド。

「これ…あげる！
あっ、新品だから、キレイだよ！
実は、おそろい…だったりして。
あはは……」

照れながら千枝は袖を捲る。
確かにそのジャージの下の手首には渡されたものと同じリフトバンドが巻かれていた。

「あたしね、思うんだ。
この”力”は、きっと欲しくて得た力だって。
もっと、ちゃんと守るために……」

今なら、分かる。
自分の力は、ただもっと頼りにされるためなどという、自分の為の力ではないのだと。
この力は、雪子や、仲間や、家族や、この町を。
大事なものを、守る力なのだと。
千枝は、中空を見上げた。
そこには、何もない。
その空間に向かって、千枝は話しかけた。

「ね、キミもそう思うでしょ？
トモエ……」

千枝の言葉に答えて、青白い炎が灯り、トモエが姿を現す。
トモエはそのヘルメットの向こうで優しげに目を細め、姿を変える。
黒をベースにした衣装に銀の鎧。

光の両刃の薙刀をもった女性。

「スズカゴンゲン……
これが…あたしの新しい力……
ふふ……キミのおかげだね」

スズカゴンゲンの消えていった胸元を押さえて千枝は微笑む。
もう負ける気がしない。
挫ける気もしない。
この先、どんなに遠く離れても、きっと大丈夫だと千枝は思った。
この気持ちは変わらないのだから。

／＊／

自室の扉を開ける。
部屋の中には既に茜がいてソファに座っていた。
帰って早々、茜は総司に話があるとこっそり伝えていた。
こっそりという事は、”事件のこと”か”力のこと”の話に限られる。
菜々子や堂島がいる所では話せない。
だから、総司は夕飯後にこうして時間を取っていた。

「で、どうしたんだ？」

隣に座りながら訪ねる総司に、茜は持っていた封筒を渡す。

「今日ね、こんな手紙が届いたの。
切手はってない上に、あて名がそんなんだからさ…開けてみたの」

茜の言う通り、封は切られている。

宛名は”瀬多　総司　サマ”。
特徴のない印刷された文字。
切手も、消印もなし。
つまりは、直接投函。
ひっくり返す。
差出人の情報もない。
総司は、封筒の中から便箋を取り出した。
こちらも封筒と同じようにどこにでも売っている大量生産品で、
徹底的に個性というものが削ぎ落とされていた。

「……堂島さんには？」

文は簡潔で、読み終わるまでに時間はかからない。
読み終わった総司が訊ね、それに茜は首を振る。

「言ってない」
「ん…言わない方が、いいだろうな」

総司は一つ頷いた。

「明日、皆で話そう。
なるべく早く、ジュネスに行くから」

もう一度、文を読み直す。
そんなことをしたって文の内容は変わったりしないが。
たった一行の印刷された文字。
内容は……

■１０／２１

「”コレイジョウ　タスケルナ”。
警告、ですかね……」

直斗はじっくりと便箋を調べた後、テーブルの上に置いた。
たった一行で要求を伝える、簡潔な手紙。
千枝と陽介が身を乗り出す。
前日にメール連絡していたこともあって、集まりに欠けた者はいない。

「カタカナでカタコトって…ベタすぎない？」
「イタズラじゃねんスか？
マンガじゃあるめえし」

陽介より先に便箋を取れた千枝がヒラヒラさせながら文字を眺める。
その横で、完二が呆れたように息をついた。

「叔父さんには見せたのか？」

乗り出していた体を戻して総司に聞く陽介。
総司は首を横に振った。

「いや、見せない方がいいだろう」
「そうですね。
堂島さんは信頼できる方ですが……
見せるのは、控えた方がいいでしょう。
こんな手紙が来る経緯を説明できませんし、心配されて見張りでもつけられたら動けない」

茜と総司の判断に直斗は頷く。

この手紙が本当に警告文なら、一番重要なのは内容ではない。
”宛名入りで堂島家に届いた”、その一点だ。
それは、犯人が犯行を邪魔しているのが何処の誰かを、詳しく知っているという事を示している。
直斗は、総司達を一人一人調べて、リーダーとして動いているのが総司だという事を突き止めた。
実際、誰がメンバーを引っ張っているかは調べればすぐに分かった。
恐らく、犯人もそこまで突き止めている。
わざわざ家主が刑事である堂島家を選んで送りつけたのはそのためだろう。
そして同時に、この手紙から自身のことがバレることはないという自信が込められている。
個性のない封筒と便箋。
印刷された一文。
新聞の切り抜き文字を貼られるよりも得られる情報が少ない。
鑑識に頼んでも何もでないだろう。

「ほんと、イタズラであってくれ、マジで……」

陽介がため息をつく。

「でも、内容考えると、ただのイタズラにしては出来すぎかも……
もし犯人なら…なんで私たちの事そんなに知ってるのかな……
どこかで見てるとか……？」
「そういえば、直斗の性別、もう広まってるよな」

雪子の”見てる”という言葉に陽介は直斗を見た。
直斗は不承不承頷く。

「え、ええ。
噂、早いですよね。
もう一人のボクがバラしちゃうの、マヨナカテレビで流れてしまったようで」

学校に復帰して、直斗は好奇の目に晒された。
クラスの、どころか町中の人間に直斗の本当の性別が知られていたのだ。
予想外だったのは、妙に好意的に受け入れられた事だろうか。

「それだよ。
そのバラしたシーンって、俺らが助けに行った時のだろ？
もしかして、助けに行ってる俺らの姿も……」
「で、でも、あたしたちのしてる事、誰も知ってる感じしなくない？
学校とかでも噂聞かないし、テレビ見たって言った子からも、何も言われた事ないし……
噂でもちきりんなるの、失踪した人だけって気がするけど」

陽介の推察に千枝は首を傾げる。
確かに、被害者の事が噂になっても、それを救出している総司達の事は話題に上らない。
影が本人に語りかける時、総司達もその場に居合わせている。
それが映っていたのなら、総司達の事も映っていてもおかしくないのだが。
だが、不明な点が多すぎて、考えていても答えは見つからない。
今必要なのは、”犯人がこちらを知っている”という、その心構え。
それだけは共有しておくべきだろう。

／＊／

ザザ…ザザザ…ザ

その暗い部屋の光源は、砂嵐を映すテレビだけだった。
ぼんやりとした光が照らすのは、荒れ果てた部屋。
布団は敷きっぱなしの万年床。
転がる酒瓶や空になったカップメン。
紙くずに雑誌。
雑誌のほとんどは開いていて、同じ人物についての記事なのか、
開かれたページの殆どに同じ政治家の写真が掲載されていた。
部屋の主はペンを走らせる。
ノートにびっしりと。
衝動に突き動かされているように、激しく。

…ザ…ザザー…

部屋に響くのは、砂嵐の音と、ペンがノートをひっかく音。
そして、部屋の主の息遣い。

「世界の狂気から……」

部屋の主が呟く。
男の声だった。

「お前たちを守ってやる……
安心できる場所に連れて行ってやる……」

盲信、狂信。
その声には、そんな狂気が混じっていた。

一心不乱に文字を綴る。

「この世界より…ずっと安らかな場所へ……」

紙の上をペンが走る。

ザザザ……ザザザ

脅迫の手紙（後書き）

二人目、千枝覚醒！
こ、この調子で全員覚醒できるかな……

さあ、次は文化祭だ！！
正確に言うと女装回だ！！ｗｗｗ
これから構成考えるから次回か次々回かは分からないけど……

文化祭の出し物

■１０／３０

どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

暗雲とした気持ちで、髪の房を弄った。
これは自身の髪ではない。
いわゆるヘアピースと呼ばれるものだ。
三つ編みにしてたらしているのだが、結構重く感じる。
髪量の多い雪子やりせはいつもこんな重みに耐えてるのだろう。
尊敬する。
ずっとこの重みに耐えるつもりはないけど。
普段布に包まれている足元はスカスカするし、そのくせ長いスカートは足に絡み、動きにくい。
先に呼ばれて出て行った超絶ミニスカートのあいつは、これ以上のスカスカと動きにくさに耐えてるのだろう。
尊敬する。
代わってやるつもりはないけど。
思考に耽っていると、ついに名を呼ばれてしまった。
出ていかなくてはいけない。
最後の抵抗として、手を振った。
その軌道に合わせて、光のカードが舞う。
その内の一枚を選びとった。
こいつがいれば、もう恥ずかしくない気がする。
この程度。
こいつに、比べれば。

ああ本当に。

御立派です、マーラ様。

■１０／２２

休憩所　　正
ビデオ上映室　正
自習室　　下
合コン喫茶　　正正正Ｔ

話は、数日前に遡る。
黒板に書かれているのは、とある投票の結果だ。
見ての通り、圧倒的支持を受けている項目が一つある。

「ちょ、１位って…どうすんだよ！」
「オマエのせいだろっ！！」

陽介がボソボソと叫び、千枝がつっこみを入れる。
ネタにキワモノを一つ混ぜておこうと陽介が悪乗りして提案した結果、それが選ばれてしまったのだ。
つまり、２年２組の出し物は”合コン喫茶”ということになる。

思い返せば、多分ここから躓いたんだと総司は思う。

「てか、入れた連中も、どこまで本気なんだか。
自分らでやるって、分かってんのかな……」
千枝はウンザリしたような表情でぼやく。
総司は視線を逸らせた。

「私、合コンって行った事ないから、ちょっとだけ、興味あったっていうか……」
「うぉ、入れた人!?」
雪子の言葉に、裏切られたような声を上げる千枝。
同じように、よく分かってないけど入れたという人間は多いようだ。
前途多難の中、文化祭の準備は始まった。

■１０／２７

明るいＢＧＭが流れる店内。
数日に一度は訪れているといって過言ではないジュネスだが、今日は事件についての話し合いや、テレビの中へと行く為に訪れたわけではない。
それどころか、まだ授業時間であって放課後ではない。
千枝と雪子は、レジに商品を積み上げた。
大量の糊などの文房具に布やペンキ。
それら全てにバーコードリーダが当てられる。
二人は文化祭の出し物の飾りつけに使う品物の買い出しに来ていたのだ。
店員が表示された金額を読み上げて、雪子は預かっていた封筒の

中の現金を取り出す。

「あ、領収書お願いします。
八高2年2組で」
「はい」

千枝の言葉に、店員はにこやかに応じる。
地元の人間なのだろう。
千枝達の事情をすぐに理解したようだ。
雪子につり銭と領収書が渡され、袋に詰められた商品が千枝の方へ押し出される。
パンパンに詰まった大きなレジ袋が二つに、規格サイズよりずっと大きな紙袋一つ。
紙袋からは丸まった模造紙やロール状の布が飛び出している。
雪子がレジ袋を取り、千枝が紙袋を取る。
重いので、肩にかけることもできず、そのまま下げたまま学校へと向かう。

「もうちょっと人手連れて来れば良かったね」
「ホントだよまったく……
ペンキとか重い物頼むなら男手用意しとけっての」

千枝は大きなため息をついて、紙袋を持ち直した。
隣の雪子に顔を向ける。

「それにしてもさ、結局”合コン喫茶”て何すればいいの？
”フィーリングカップル”的な感じ？」

首を傾げる千枝の言葉に、雪子は思い出すように宙を見上げる。
雪子は、学校から出る前にクラス委員の男子と陽介が話している

所に出くわして、ある程度の事を聞いていた。
客には受付をしてもらって、人数が集まったらスタート。
喫茶店なので、お茶しながら質問タイム。
そして３０分程話したら気に入った人の番号を挙げ、相手がＯＫしたらカップル成立、という流れらしい。

「それ…本当に客来るのかなぁ？」

千枝が雪子の説明に胡散臭げな表情になる。
雪子は苦笑した。
重い荷物も会話で何とか紛らわせて、ようやく二人は学校に辿り着く。
昇降口でやっと荷物を降ろせた千枝は、自身の肩を揉みながら息をついた。

「っと、やっと帰って来れたねー」

下駄箱から、自分の上履きを取り出して履きかえる。
そして荷物をもう一度持ち上げようとして。

「んっ？」

昇降口前の掲示板に人だかりが出来ているのに気付いた。
掲示板は、毎月の行事の予定やテスト順位が貼り出されるので、時期によっては確かに人が集まるのだが、もう先日あったテスト結果は貼り出されて数日が経っている。
いまさら人が集まる理由が分からない。
千枝は、集まっていた内の一人に近付いた。
総司と運動部の関係で仲が良く、千枝も前から知っているので話しやすい、隣のクラスの一条だ。

「ね、一条くん、どうしたの？」

千枝が声をかけると、一条は驚いたように体を跳ねさせて振りむいた。

「あ……っ！

さ、里中さんっ！

お、応援してるから！！」

そう捲し立てて、一条は階段を駆け上がっていく。

千枝と雪子は顔を見合わせた。

「……？

何、あれ」

「さあ？

掲示板、見てたよね」

「んー…、ん？」

千枝は、人混みを掻きわけて先頭に出ると、掲示板の告示を見た。

読み進めていくうちに、千枝の顔が険しくなっていく。

そして出た言葉は。

「な、な、なんっじゃこりゃあああああ！！」

そんな獣の咆哮のような大声だった。

その声に驚いた周りの生徒達がそそくさと逃げていく。

人が掃けて、雪子も告示を読んだ。

「これって……」

雪子の呟き。
千枝は、片手を掲示板について項垂れる。
「ほっほ～う？
こういう事しちゃうんだ？
…こういう事するの…花村だよねえ……？」
そう言う千枝の顔は、背後にいる雪子からは見えない。
だけど、どういう表情をしているのか雪子には手に取るように分かった。
恐らく、自分も同じ表情をしているから。
二人はシャドウも裸足で逃げ出すような、そんな暗い笑みを浮かべていた。

■１０／２８

「なあ、お前の前居た学校ってさ、文化祭、どんな出し物があった？」
機嫌よさそうに総司の隣を歩きながら陽介が言う。
明日から文化祭。
昨日で大体のセッティングが終わったので、今日は飾り付けのラストスパートとなっている。
生憎今は曇っているが、週間天気予報では明日明後日と晴れ続き。
そういうこともあって朝から浮かれているのだろう。
総司は今まで参加した文化祭を思い出す。
あちこち転校を繰り返しているので、色々タイプの違う文化祭を

総司は経験していた。

「んー、教室内でいくつか出店みたいなの出してお祭りの雰囲気出したりとか、オーソドックスにお化け屋敷とか。少なくとも、”合コン喫茶”はなかったな」

「ハハ、だろうな」

総司の返答に陽介が笑う。

キワモノとして案に混ぜた陽介自身は、もちろん一般的な出し物のチョイスとは違うと分かっていた。

「茜ちゃんは”何でメイド喫茶にしなかったんだ”って言ってたけど」

「……茜ちゃん…それほどまでにメイドが好きか……

ともかく！

実はウチの文化祭さ、イベント盛りだくさんなんだよ！

俺さ、学校の行事のなかじゃ、けっこう楽しみにしてんだよね」

夏の一件を思い出して陽介は呻くが、気を取り直して総司に笑いかけて下駄箱の上履きを取る。

そして、靴を履き替えている総司の肩を組んで、耳元に口を寄せた。

「お前も楽しめよ！

楽しめるように、サプライズしといたからさ！

いろいろと、盛り上がってほしいもんな」

陽介の言葉に総司は首を傾げる。

「サプライズ？」

「ほら、そこの掲示板！」

行事が張り出される掲示板を指さして、陽介は総司を開放した。
総司は脱いだ靴を下駄箱に放り込む。
同じく上履きに履き替えた陽介と共に掲示板に近づいた。
掲示板には何人かが視線を向けていて、その内の一人が振り返った。

「お、花村！
期待してるぜ！」
「……？」

総司の知らない顔だが、陽介の知り合いだったらしい。
ニヤニヤと笑いながら言う男子生徒に陽介は怪訝な表情を浮かべる。
陽介は視線を掲示板に向けた。
いくつか文書の張り出しがされていて、その内の一つはテストの順位発表のものだ。

「女装コンって今年もやんのかよ。
懲りねーなぁ。
お、出場者書いてある。
ハハ、誰だよ、んな物好きは」

それもその内の一枚だった。
タイトルには”ミス？八高コンテスト出場者”とある。
これは2日目のイベントであるミスコンの前座で、こちらは男子の女装コンテストらしい。
陽介が出場者の名前を読み上げる。

「えー…花村陽介……
俺だーーーーッ！！」

陽介は叫んで掲示板に飛びついた。
顔を近づけて確かめてみても、書かれた名前は変わらない。
そして、それだけではなかった。

「え、それに…”巽完二”！？」
「ちょ…っ、”瀬多総司”って…俺も！？」

陽介の横で読み進めていた総司も掲示板に書かれた自身の名前に目を疑う。
何度読んでも、書かれている名前は”花村陽介”、”巽完二”、そして”瀬多総司”の三人の名前。
呆然とする総司の近くで、同じように告示を読んでいた女子生徒の会話が聞こえる。

「うわ、結構多いねー。
去年二人とかじゃなかった？」
「今年、他薦でも強制らしーじゃん？
誰かが推薦しちゃったんじゃん？」

総司は出場者名簿の下の方に書かれた注釈を読む。
曰く。
”自薦・他薦を問わず、申請された時点で辞退は不可とする”。

「……陽介」

ギギ、と顔を陽介に向けて総司は問いかける。

「……これが、”サプライズ”……？」
「や、違うって、マジで！
その横！　横！」

陽介は慌てたように掲示板の一角を示す。
ミス？八高コンテストの告知の横にあるのは、本当のミスコン、ミス八高コンテストの出場者名簿だ。
出場者の名前は総司の知っている名前ばかりだった。
”柏木典子”、”大谷花子”。
この辺は陽介の言うサプライズには入ってないだろう。
担任とクラスメイトではあるが。
問題は、その後に続く名前。
”天城雪子”、”里中千枝”、”久慈川りせ”、”白鐘直斗”。

「……どう考えてもこれの復讐じゃないか」
「……そーですね……」

総司は顔を俯けて顔を手で覆う。

「何で俺まで……」

■１０／２９

文化祭が始まった。
明るい笑い声、喧噪、賑やかな雰囲気。
総司達の教室も、明るく飾り付けられていた。
入口は入りやすいように扉が外されて、薄いピンクのカーテンが付けられ、開店中の今は隅でまとめられている。
紙テープで作られた鎖や色のついた薄い紙で作られた花で飾られた教室はとても華やかだ。

テーブルは机を複数くっつけてテーブルクロスをかけていて、三人ずつ対面で座る六人席が４つ。
机の上には花の咲いた可愛らしい鉢植えに、メニュー表。
２年２組の合コン喫茶は見事に形になっていた。
ただ、足りないのは一つだけ。

「ご、合コンやってまーす……
……も、もう、恥ずかしいな、これ……」

入り口で呼び込みをやっていた雪子が赤面して俯く。
総司は、教室内を見渡した。
明るい室内は、ガランとしている。
いるのは、総司を含めて五人。
この時間帯に店番をやっている彼らだけだった。
つまり、足りないのは客なのである。
割と致命的だ。
そもそも、人通りがあまりない。
もしかしたら、１年か３年で気合の入った出し物か何かがあって、そっちの階に人が流れているのかもしれない。

「見てってもらうには、サクラが必要かな。
……俺らで」

クラス委員の男子である委員長が呟く。
確かに、ただでさえ少ない人通りで客を得るならちゃんと営業している所を見せた方がいいだろう。
だが、人数が足りない。
六人席に対して、五人。
総司、陽介、委員長で男は三人いるので、後一人女子が必要だ。

「ちーっス」

話し合っていると、背後からそんな声が聞こえて振りかえる。
そこには、完二が立っていた。

「先輩方、様子見に来ました…よ？」

完二は、総司達の視線に不穏なものを感じたのか、たじろいたように立ち止まる。
総司達は顔を見合わせた。

「でも男４の女２だろ？」
「おまえら、どーせ明日、女装すんだろ？
どっちか、女の席に座れ」

委員長が陽介と総司を示して言う。
それに陽介は焦った様子で抗議する。
総司は、その隙にさっさと男子の方と割り振られた側の椅子に座った。
完二もあまり事態を理解している風ではないが、総司の隣に座る。

「じゃ、花村、おまえ女役な」

驚いた表情で固まった陽介に、委員長は告げた。

／＊／

昼下がり。
校舎中を笑い声と喧騒が包んでいるが、なぜかそれは遠く聞こえる。

沈黙が落ちる。
委員長が開始を告げるが、誰も動かない。
まだ11月に入ってもいないというのに、とても寒い。
雰囲気が真冬のようだ。

「……つか、何なんスか、これ」

重い沈黙に耐え切れず、完二が声を上げる。
説明も何もない状態で参加することになった完二は特に居心地が悪そうだ。
手持ち無沙汰で目の前に置かれたジュースに手を伸ばす。

「合コンのマネ……」
「……！？」

丁度口に含んだ所に陽介にそんな事を言われ、完二は小さく噴きだす。
横に座ってた総司はビクリと身体を震わせて少し椅子をずらした。

「かかるだろ」
「ごほっ…す、すんません……
じゃあ、ご、ご、ご趣味は……」
「乗ってくるな、お前！」

言われたままに合コンのまねごとを演じようとする完二に、陽介はつっこむ。
それに質問自体も、合コンというよりもお見合いのようだ。
だが、このまま沈黙の中過ごすのも不毛すぎる。
苦笑いしつつ千枝が口を開いた。

「しゅ、趣味はえっと、格闘全般でっす。
見る方メインね…あはは……
うわ、すげー恥ずかしい……」

千枝は赤面して顔を隠すようにして飲み物を口に運ぶ。

「わ、私は、ええと…シャ、シャドウ倒したり？」

今度は千枝が飲み物を噴きだした。
むせ返る千枝に、正面に座る完二が慌てて卓上ふきんを渡す。

「それ趣味じゃねーだろ！」
「そ、そっか、ごめん……」
「えーとじゃあ、こっちから質問するね！」

首を傾げる委員長に、水滴の飛んだテーブルクロスにふきんを押しつけながら、千枝が慌てて話を逸らす。

「……無いな」

だが、慌てたままでは何も質問が思いつかなかったらしい。
雪子がフォローに入る。

「好きな女の子のタイプは？」
「えーと…かわいい子？」

直球な質問に、委員長の意識が逸れた。
総司も後に続く。

「俺は…そうだな……

料理が上手な人がいいな」

正確に言うと、食べても死なない程度の。

こちらに来るまでは自分で作って食べるか、惣菜やカップ麺などが多かったので、茜が作るようになってから食生活が充実している。

茜はかなり料理が上手い方なので、そのレベルまでは期待しないが、少なくても安全な物を食べたいものだ。

「あー、分かる分かる！

俺も胃袋つかまれたい！！」

陽介が賛同し、女子二人が視線を逸らす。

総司は完二に視線を送った。

「あ、えと、オレはその……

ちょ、ちょっとミステリアスってか、強いように見えて意外にっていうか……」

とてもピンポイントな完二の言葉に、誰だか分かる全員が呆れた表情になる。

取り合えず、総司も何か質問してみることにした。

だけど、無難な話の振り方がよく分からない。

仕方ないので、陽介に振ってみる。

「陽介がこの中で気になる異性は？」

「えー、みんなカッコいいけどー、やっぱりぃ、頼りになるのは総司……ってアホかっ！！

素人にノリつっこみさすなっ！！」

ひとしきり騒いだ後、全員で一斉にため息をついた。

この出し物は、失敗したというしかないだろう。

■１０／３０

前日に続き、今日もいい天気。
絶好の、行楽日和と言えるだろう。

「わあ！
お祭りだね！」

人が多く、明るい雰囲気に菜々子が笑う。
一般公開の２日目、堂島は菜々子と茜を連れて八十神高等学校へと訪れていた。

「総司のやつは…確か２年２組だったな」
「お兄ちゃん、いるかな？」
「ミスコンに出るって言ってたから、着替え中じゃないかな？」

堂島は昇降口の掲示板に張り出された、出し物の位置が書き込まれた校内図を見ながら総司の教室の位置を確認する。
うきうきとした様子の菜々子に茜が答え、その単語に堂島は茜を見下ろした。

「……ミスコン？」
「うん。
女装するんだって」

堂島は聞き間違えかと思ったのだが、間違いではなかったらしい。

「何やってんだあいつは……」

顔を押さえて、堂島はため息をつく。
そんな堂島の服を菜々子が引っ張った。
「お父さん、今日はいつまでだいじょうぶ？」
「夕方までだな。
……すまないな、菜々子」
堂島は、菜々子の頭を撫でる。
今日子供達を総司の文化祭に連れてくるために休暇を取った堂島だったが、家を出る直前に出張するように電話があったのだ。
幸い、向こうへは朝一で顔を出せばいいらしいので時間には余裕があるが、それでも夜になる前にここを出なくてはならない。
謝る堂島に、菜々子は笑いかける。
「菜々子、大丈夫だよ。
あかねちゃんも、お兄ちゃんもいるし！
おるすばんも、じょーずにできるよ」
「そうか……」
留守番の時の電話の応対や、知らない人が来ても玄関を開けない等を、菜々子はきちんとやれる。
それは、堂島がいつも菜々子を一人にしていた証拠でもあった。
茜が来てからは土日はともかく、平日の留守番は殆どなくなったが、それは言い訳にもならないだろう。
茜は上手く追い返せる自信があるからか、セールス等の知らない人間でも玄関を開けてしまうので、正直、”子供の留守番”としては茜より菜々子の方が上手い。
「二人とも、行こ！」

茜が立ち止まったままの二人を急かす。

「ああ、そうだな」

堂島は菜々子の手を取り、茜の元へと向かった。

／＊／

文化祭には様々な出し物があった。

基本、一つの教室に一クラスの出し物。

空いている教室もあるが、そこは更衣室や、他の教室で邪魔になる机などをしまう用途で使っているようだ。

三人は順番に見て回る。

「ほう、このクラスは郷土資料展か」

「つぼがいっぱーい」

沢山の壺や昔の小道具などが並び、それの一つ一つに説明文がついている。

どこかの資料館から借りてきたのだろう。

教室の中も掲示用ボードで調べた事を模造紙に新聞のようにまとめ、貼ってある。

展示した後は楽かもしれないが、事前準備は手間がかかっただろう。

「おっと、菜々子、近付き過ぎるなよ。

割れ物だからな」

「はあい」

展示しているテーブルに駆け寄る菜々子に、堂島は声をかける。
菜々子は明るく返事をした。

キャアキャアと中の騒がしい教室。
必ず一クラスはやるだろう、文化祭定番のお化け屋敷。

「あ！　お化けやしき！
お化けやしきがあるよ！」

菜々子は繋いだ堂島の手をひっぱる。
壁には大きく”お化け屋敷”とあるが、ベタな選択への抵抗か、
入口には”ダークハウス”と書かれている。

「”ダークハウス”だって。
わ、ほんとに暗い」

中を覗き込んだ茜が声を上げる。
窓を全て覆い、暗幕をこれでもかと垂らした室内は何も見えない。
机と暗幕で壁を作り、曲がりくねった長い一本道の通路。

「慌てると転ぶぞ」

手の離れた菜々子に堂島は声をかける。

「ん、ほら。
掴まれ」

見えない中、堂島は手を伸ばした。
宙に延ばされた手の平に、手の平が乗せられる。

「お父さん？」

菜々子の声は遠くから聞こえた。

「ん？
菜々子じゃない？」

堂島は目を凝らす。
カチリという音と共に、乗せられた手の平の主が下から照らされた。
懐中電灯の光だ。
机の下に潜り込んで、暗幕の間から体を出した幽霊役の高校生。

「あー、怖かった！」
「あはは、お父さんが一番声上げてた！」
「と、とつぜんだったからビックリしただけだ」

明るい廊下に出た後、からかってくる菜々子に、堂島は真っ赤な顔でそう言った。

2年生の教室の連なる2階はガランとしていた。
人通りがあまりない。
1組は劇、総司のクラスである2組は喫茶店と聞いていたが……
堂島は、教室の前に出された看板の文字を読み上げる。

「”合コン喫茶”に…”ロミオとジュリエットとハムレット”？なんだこりゃ」
「取り合えず、オチだけは予想できるよね」

茜は言って、合コン喫茶を覗き込む。
喫茶店の中は明るく飾り付けされていたが、雰囲気が寒い。
店員らしい学生が向かい合って座って項垂れている。

「総司くん達、やっぱりいないや。そろそろ体育館に移動する？」
「そうだな」
「あ、ねえねえ。その前に、うらない、やっていい？」

菜々子が階段前のスペースを指さす。
そこには、小さな小屋が建っていた。
大人二人が座ればいっぱいになる程度の大きさで、青く塗られている。

「ああ、俺はここで待ってる」

堂島は頷いて、階段の近くの壁に背を預けた。
茜は小屋の入口を見上げた。
そこには、”占いの館ＴＨＥ長鼻　マギーのタロット占い”と書かれている。

「……長鼻？」

茜が呟いて、小屋を覗き込む。

そこには、茜が想像したのとは別の人物が待っていた。
銀髪の、清楚な女性。

「ふふ…いらっしゃい。
これはこれは…珍しいお客様だこと」

予想の人物とは些か異なったが、彼女が”そちら側の人”だということは茜にはすぐ理解できた。
似た人を、茜は知っている。

「キミは…”力を司る者”だね」
「ええ、その通りよ、茜様」
「わあ、すごい！
あかねちゃんの名前、当てちゃった！」

嬉しそうに言って、菜々子も小屋の中に入ってくる。
椅子は占い師に一つ、客に一つ。
間を青い布をかぶせられた机が遮る。
茜と菜々子は二人で一つの椅子に座り、入口のカーテンを閉めた。
机の真上に吊り下げられたランタンだけが光源で、その炎も青い。
揺れる炎は空間を幻想的に彩っていた。

「お姉さんがいるっていうのは聞いてたんだけど……エリザベスさん？」
「いいえ、それは妹よ。
私は、マーガレット。
お見知りおきを……」

マーガレットは柔らかく微笑んで軽く頭を下げる。

「ね、あかねちゃん。
あかねちゃんの事、うらなってもらったら？
きおく、もどるかどうか」
「……そうだね」

菜々子の言葉に、茜は頷いた。
病院で、その内記憶は戻るだろうと診断は出ている。
実際、もう殆どのところを思い出している。
だけど、菜々子の心が嬉しかった。

「お願いできる？」
「それでは……」

茜が言うと、マーガレットはタロットカードを机の上に広げる。
十分混ぜられると、今度はカードを山にした。
カードの山に手をかざすと、２枚のカードが捲られる。
それは……

堂島は、出てくる子供達に気付いて壁から背を離した。
首を傾げる菜々子に堂島も首を傾げる。

「どうした？」
「むずかしくて、よくわからなかった……
けーしとしんぱい？、だって。
お父さん、分かる？」
「いや、俺はそういうのはサッパリだ」

堂島は首を振る。
堂島自身は占いを信じていないし、タロットカードとトランプの

区別もつかない。
だが。

「ね、ミスコン始まっちゃうよ！
早く行こ！」

茜の明るい表情から悪い結果が出たとは思えない。
恐らく、心配のしすぎなのだろう。

／＊／

「レディース、エーン、ジェントルメーン！」

ピンク色のアフロの司会者がマイクへ声を吹き込む。
制服に真っ赤な蝶ネクタイにメガネと特徴的な姿をしているが、頭にしか目がいかない。
まるで桜の木のようだ。

「文化祭2日目の目玉イベント、”ミス？　八高コンテスト”の始まりでーす！！
さっそく一人目からご紹介しましょう！」

舞台の下手に立った司会者が上手を示す。

「稲羽の美しい自然が生み出した暴走特急、破壊力は無限大！
1年3組、巽完二ちゃんの登場だ！！」

リングネームのような紹介がなされ、呼ばれた完二が舞台に上がる。
白く薄いワンピースがひるがえり、観客の皆が息を呑んだ。

もちろん、悪い意味で。
猫背気味の背に、がに股で舞台に立つその姿。
白いワンピースは下から吹くとめくれ上がりそうなほど薄く、肩はむき出しで筋肉質の腕が丸見えとなっている。
真っ赤な口紅に、鋭い目、米神の少し上にある疵。
普段後ろに流している白い髪は白いワンピースの似合う某女優のような髪型にセットされていた。

「うっス！」

完二が観客席を睨み付けながら挨拶すると、途端に会場は阿鼻叫喚となった。

「ギャー！」
「キッモ！」
「これはひどい、ひどすぎる！」

周りの叫びに、堂島は頷くことしか出来ない。
あまりの出来に、完全に引いている。

「あー…確かにこれは……」
「なんか、あんな感じの女優、いたよね？」
「……似てるのは服装と髪型だけな」

茜の言葉に、堂島がボソリと呟く。
舞台の上では、恐る恐るといった様子で司会がマイクを差し出していた。
インタビューするようだ。
司会者の鏡と言えるのかもしれない。

「さー、僕も近付くのが恐ろしいんですが…チャームポイントはどこですか？」
「……目？」
「おーっと、意外にスタンダードだぁ！」
「異って、あんなやつだったのか……」

呆然と堂島は完二を見上げた。
何度か補導されている完二を見たことがある堂島だったが、やはりそういう所で見る一面と学校や仲間の前で見せる一面では違いがある。
実際、何度か総司が家に連れてきた時も随分印象が違ったことを覚えている。
だが、こういうイベントに参加するタイプとは思っていなかった。
嫌だと感じたら暴れるタイプだと思っていたのだ。

「かわいいよね？」
「……今度、眼科行っとけ」

全力で、堂島は茜につっこんだ。
司会が完二を視界に入れないように次の出場者を呼ぶ。

「1番手がコレでは、もう霞んでしまうんじゃないでしょうか、がけっぷちの2番手をご紹介！
ジュネスの御曹司にして爽やかイケメン、口を開けばガッカリ王子！
2年2組、花村陽介ちゃんの登場だ！！」
「ど、ども！」

舞台に上がり、完二の横に立ったのは、確かに陽介だ。
だがその恰好は、赤いスカートとリボンのブレザーで、白いニッ

トのベストを着ていた。
黒いハイソに茶のローファ、足が寒いのかしきりにモジモジと足をすり合わせている。
髪型はあまり整えきれておらず、ただ上の方で髪の一部をすくって赤いゴムで留めている。
化粧も乱雑だ。

「やっぱい！」
「花村先輩、いい線行くと思ったのにー！」

女生徒の嘆きの声。
確かに、陽介は二枚目半のようなポジションで見た目が良く、道化役もこなせるので人気があるのだろう。
ジュネス関連のいざこざがなければ浮いた噂の一つ二つ流れていたかもしれない。

「や、これいそうで怖い！」
「あー…確かにいるな、ああいうの……」

近くで聞こえた男子生徒の声に、堂島は頷いて同意する。
司会がマイクを陽介に向けた。

「さー、気合が入った服装ですが……
普段からこんな感じで？」
「んなワケねーだろ！
ねー…ですわよ？」

叫ぶように言った陽介は、我に返ったように言い直す。

「ジュネスのお兄ちゃん……お姉ちゃん？」

「んー、メイクと髪型なんとかすれば……」
「せんでよろしい」

再び、堂島は茜につっこむ。
舞台の上では、完二と陽介が何やら小さな声で言い合っているが、客席までは聞こえない。

「僕もう、おなかいっぱいになってきました！
続いて3番手、この人の登場です！」

司会が次の出場者の紹介を始める。

「都会の香り漂うビターマイルド、泣かした女は星の数！？
2年2組に舞い降りた転校生、瀬多総司ちゃん！」
「お兄ちゃんだ！」

嬉しそうに身を乗り出す菜々子。
それを椅子から転げ落ちないように支え、堂島は半眼になった。

「星の数って……確かに、女友達多いようだが……」

舞台袖から総司が現れる。
堂々とした足取り。
肩に担がれた竹刀。
おさげにセーラー服。
ただ、そのスカートはふくらはぎぐらいまである長い物だった。
どうみても一昔前のスケ番だ。

「や、やめてー！！」
「なんで先輩、こんなの出ちゃうのー！？」

「うおっ、先輩ってクールだと思ってたのに……」

あちこちから嘆きの声が聞こえる。

確かに、学校内での人気はかなりあるようだ。

「お兄ちゃん、キレー……」

うっとりと菜々子が呟く。

「確かに、似合うね」

「そりゃ、前二人に比べれば見れたシロモノだとは思うが……

あー、何言ってんだ俺は」

茜が同意し、堂島は言った後で顔を手で覆う。

確かに総司は綺麗な顔をしているし、化粧もばっちりだ。

だが、骨太で女らしい丸みとは無縁なので違和感もばっちりあるのだった。

「さー、物議をかもす出場ですが…自分で立候補を?」

マイクを差し出される総司。

総司は、それにキッパリと答えた。

「当然です」

「……なんだってあいつはこんなトコで男らしいんだ……?」

堂島は、ぐったりと背をパイプ椅子に預けた。

「さ〜て最後は飛び入り参加、出場者たちのお仲間が登場です!」

司会が最後の参加者の登場を告げる。
茜が首を傾げた。

「……飛び入り参加？」
「自称”王様ｆｒｏｍテレビの国”、キュートでセクシーな小悪魔ベイビー！
その名も”熊田”ちゃんだぁ！！」

その声と共に、舞台袖から美少女が現れた。
金髪碧眼。
水色のエプロンドレスに同色のカチューシャ。
不思議の国のアリスのコスプレのようだ。
だが、このコンテストに出ている以上、彼女は女の子ではない。
クマだ。
クマがスキップをするたびに、長い金髪とスカートが揺れる。
舞台中央に立ったクマは、くるりと回転した。
そして、手で銃を撃つ真似をする。

「ハートをぶち抜くゾ？」

この瞬間、優勝者は決まった。

文化祭の出し物（後書き）

＼御立派様！／

恥ずかしくて使った事無いので、どっかで御立派様出したかった。
別に反省はしていない。
結局名前だけだし。
マガレさんの占い結果は次回です。

黒板の表現、ケータイの人は読み辛いかもしれませんね。
これＵＰったら仮想携帯表示で見てみて、直せるようなら直しますが。
直しようがなかったらごめんね！

旅館でのひととき（前書き）

ツイッター見てくれてる人は（いたらの話だけど）知ってるかもしれませんが、クリスマス直前まで土日に執筆が出来ないリアルスケジュールになっております。
したがって、更新頻度は落ちると思います。

旅館でのひととき

「クマさん、すっごいかわいかったね！」

ミス？コンが終わった後の休憩時間。

菜々子がニコニコと笑いながら言う。

圧倒的な票差でミス？コンの優勝を飾ったクマは、確かに美少女としか言えない可愛らしさだった。

だが、特筆すべきはその後の言動だろう。

堂島は思い出して苦笑する。

「すごい喜びようだったな……」

優勝したクマへの賞品は”正真正銘のミスコンの特別審査員の座”というものだった。

所詮前座ということもあり、微妙な特典としか言いようがないが、それでも嬉しそうにガッツポーズをしたり、ピョンピョンと飛び跳ねて喜びを表現していたクマ。

あれほど喜ばれたら、そしてそれだけだったなら、その後のミスコンメンバーもやる気になっただろう。

水着審査。

それが、ひとしきり喜んだクマの要求だった。

もしかしたら、今頃は更衣室で着る着ないの騒ぎになっているかもしれない。

「そういえば、クマも参加したからあたし以外、みんなステージに登ることになるんだね」

総司に陽介に完二にクマ。

千枝に雪子にりせに直斗。
特別捜査隊のメンバーで参加していないのは茜だけだ。
今からでも飛び入りで、とかブツブツ呟く茜を、堂島は苦笑しつつ止める。
そして、ふと気づいたように動きを止めた。

「白鐘は？」
「なおとくん、女の子だよ？　だから、出てくるのはこれから」
「な…なんだ…と……！？」

堂島が驚愕の声を上げる。
その瞬間、体育館が暗くなった。

「レディース、エーン、ジェントルメーン！」

休憩時間が終わったのだ。
客席側の照明は落とされたまま、舞台がライトアップされる。

「文化祭2日目のメインイベント！
”正真正銘ミス八高コンテスト”！！
それではまずはこの方！」

桜色のアフロの司会が高らかに声をマイクに吹き込む。

「生物担当、2年2組の担任、柏木典子先生です！」

名を呼ばれ、ハイヒールの音を響かせて柏木が壇上へと上がる。
柏木が身にまとうのはいつものように、大きく胸元の開いた服。
舞台の中心に立った柏木は、科を作って太ももを撫でた。
ギリギリまで短いタイトスカートがたくし上げられる。

「うふふ…柏木典子よ。
先生のイケナイ授業…受けてみる？」

堂島が、呆然とした表情で舞台を見上げている。
他の皆も似たようなものだ。

「何？　柏木の優勝狙いってマジだったわけ？」
「引くわー」

そんな声が周りから聞こえてくるが、堂島も同じ心境のようだ。
ざわめきに次へ行った方がいいと感じたらしい司会が、次の出場者を呼ぶ。
だが、次の出場者を知っているだけに歯切れは悪い。

「えー…お次は2年2組、大谷花子さん！！」

柏木が下がり、花子が舞台の中央に立つ。

「大谷花子よぉ。
あなたたち、運がいいわぁ。
この私の美貌が拝めるんだからぁ」

一斉に、ブーイングが起きた。
身長以外は、どこもかしこも大きい女性だった。
顔など、先程出てきた柏木の４つ分ほどある。
それに比例するかのように出た腹。

「早く次をだせー！」
「凄まじい歓声ですね！

それでは審査を続けましょう！
では、次の方…2年2組、里中千枝さん！
どうぞ！」

激しいブーイングに、司会はさっさと次へと話を進める。
呼ばれて出てきた千枝は、いつもの豪快さと違い、借りてきた猫のように大人しい。
舞台の真ん中に出ると、引きつった笑みを浮かべた。

「さ、里中千枝です。
え、えっと、性格はおとなしくって…好きな食べ物は、プディングでぇす」

やっとの本番に、会場は盛り上がっていく。

「プディングって…プリンだよね？
菜々子も、プリンすき！
お兄ちゃんが作ったの、おいしかった！」

おそろいだね、と菜々子は笑う。
それに、茜は首を傾げた。
フードコートで皆でよく食べたり飲んだりしているが、プリンを食べている千枝を見たことがなかったのだ。
むしろ。

「千枝ちゃん、この前ジュネスでウルトラヤングセット食べてたよ」
「ウルトラヤングセット……？
あれ肉の量が凄まじくて、男子高校生が2人がかりでも厳しいって聞いたぞ……？」

肉を食べている所しか思い出せない。
チューインガムを噛んでるところを見た事はあるが、それも”肉ガム”という何とも怪しげな代物だった。

「ありがとうございましたー！
続きましては同じく2年2組、天城雪子さんです！」
「こ、こんにちは、天城雪子です」

次に出てきたのは、雪子。
マイクを向けられて自己紹介を始める。

「えっと、家は旅館を経営してます。
天城屋旅館です。
近くへお越しの際は、是非お立ち寄りください。
日帰り入浴も、出来ますので、どうぞごひいきに……」
「……宣伝？」

だが、その内容は旅館の事しかない。
茜がつっこみを入れる。

「ユカタ着る時行ったけど、キレイだったよ」
「次は温泉に入りたいね」

夏休みに行った旅館の中を思い出して菜々子が言う。
だが、通されたのは雪子の自宅の方だったので、旅館の中はロビーと自宅に繋がる部分ぐらいしか見ていない。
温泉に入る余裕もなかった。
次は堪能したい…茜と菜々子の感想はそうだったが、堂島は違う点に注目していた。
堂島はうんうんと頷く。

「事件のせいで客足落ちているそうだからな……こういう機会を逃さずＰＲ…商売人だな」
「はーい、ありがとうございましたー！
続きましては何とこの人、１年２組、久慈川りせさんです！」

呼ばれたりせが壇上へ上がった。
千枝や雪子と違う、堂々とした動きは歩くだけでも人を魅了する。

「こんにちはっ、久慈川でっす！
この町に来て日は浅いけど、とってもいいとこで、りせちー幸せだよっ！」

明るく笑い、りせは客席に手を振る。

「アイドル、休業中でごめんねっ！
りせちーも頑張るから、応援よろしく！」
「わあ！　りせちゃんだ、りせちゃんだ！！」
「ふむ、さすが本業…慣れてるな」
「すごい声通るね。
マイクなくても、体育館のはしからはしまで届くみたい」

確かに本業ということもあり、りせは観客の心を捉えるのが上手い。
完全に営業モードだ。
会場の熱気も増していく。

「いっやー、生りせちーですよー。
ありがとうございましたー！
続きましては噂の転校生、１年１組、白鐘直斗さん！」

一番りせを近くで見ることが出来た司会はほくほく顔で次の出場者である直斗を呼ぶ。
呼ばれて、直斗はステージの真ん中に出てきた。
いつも被っている帽子はなく、顔は真っ赤に染まっている。

「…し、白鐘直斗、です。
こんなコンテストで壇上に上がることになるなんて…夢にも思ったことが無くて……
その…何を言っていいのか……」

その声は上ずっていて、いつもより高い声に聞こえた。

「驚いた。
帽子取るだけでちゃんと女の子に見えるな」

堂島の言う通り、今の直斗はいつものようにズボンをはいているが、帽子で隠れていた顔が見えていること、少し声が高くなっていることで男の子には見えない。
帽子は、好きなのもあるかもしれないが、顔を隠して性別を誤魔化すのに必要な物だったようだ。

「なおとくんはメイド服としつじ服、どっちがいいかな……両方？」
「やめてやれって……」

唯一夏の終わりのメイド・執事服の件に参加してない直斗の衣装を真面目に考えてる茜に、堂島は苦笑する。
参加者は直斗で終わりらしく、司会はクマを呼ぶ。
特別審査員の出場者に対する質問コーナーがあるらしい。
だがそれは。

「千枝さん。
彼氏はいますか？」
「雪子さん、チッスの経験は？」
「直斗さん、体のくすぐったい部分は？」
「今度、りせちゃんのうちに遊びに行っていい？」

などと言った、自分の好みの女性に対するセクハラ発言オンリーといったものだった。

「……今の内にあの熊田ってのを逮捕しとくべきだと思うんだが」
「いいよ？
しても」

半眼になる堂島に、許可を出す茜。
司会の方もこれ以上はまずいと判断したのか、質問コーナーを切り上げて、次のコーナーへと進む。

「さ、さーて、ここで皆さんに驚きのお知らせです！
なんと！　今年から！
本コンテストに水着審査が加わりました！
それもこれも、この熊田さんのおかげです！」

だが、その気遣いも、事が水着審査では台無しである。

「ほ、本気でやるのか……」
「では、参加者の方々には水着に着替えて、また登場してもらいましょー！」
「水着？
泳ぐの？」

「あー、いや、そういうわけじゃない。
水着のファッションショーみたいなもんだ」

退場していく参加者を目で追いながら菜々子は首を傾げる。
その問いにはどもりながらも堂島が答えた。
しばらくの休憩の後、舞台袖に戻っていた司会が再び舞台の上に現れる。

「それでは、参加者の準備が整ったようなので、順番に登場していただきましょう！」

まずは柏木典子。
ワンピースタイプだが妙に布地の少ない黒い水着。
足がすらりと長く、確かに自信があるのも頷ける。
それでも柏木はあまり生徒に人気がない。
それは、性格と実年齢のせいだろう。
あからさまな誘惑するような言動、人気のある女生徒への隠しきれていない嫉妬。
いくら美人でも、そんな性格で、かつ自身の母親よりも年齢が上の女性となれば手を出そうとは思えないのである。

次に出てきたのは大谷花子。
ピンクのストライプのビキニ。
だが、胸より腹の方が大きく、目立っている。
正直、論外としか言いようがない。

次は千枝。

千枝の水着はスポーティなビキニ。
上は黄緑のストライプで、下はショートパンツ風のデザインとなっている。
千枝の明るい、健康的なイメージそのままといった雰囲気だ。

千枝の後は雪子。
下はスカートになっている白いビキニ。
紐の赤色がアクセントになっている。
長い艶やかな黒髪と相まって、清楚な色気がある。

そしてりせ。
ホルターネックのオレンジのビキニタイプ。
花がプリントされていて、明るく、そして可憐。
見せ方も心得ていて、そのままグラビアに乗っていてもおかしくなさそうだ。

「みんな、キレイだね！」
「うんうん、よく似合ってる。
堂島さん、何かコメントをどーぞ」

茜がさっきから黙ったままの堂島に話を振る。

「……そもそも、子供の水着姿にどんなコメントを期待してるんだ」
「一人大人混じってるけど」

柏木を指し示す。
苦笑する堂島。

それに菜々子が口を挟んだ。

「お父さんは、お母さんのが一番いいもんね！」

堂島は一瞬驚いた表情を浮かべるが、すぐに目元を和ませる。

そうだな、と頷いて堂島は菜々子の頭を撫でた。

菜々子は嬉しそうにくすくすと笑う。

「次はなおとくんだね、どんな水着かな～」

しばらくその微笑ましい様子を優しげな顔で見つめていた茜は、舞台の方へ視線を向けた。

りせの次に出てくるはずの直斗は、まだ出てきていない。

「……あれ？

白鐘さーん？」

不審に思ったのか、司会が舞台袖に向けて声をかける。

「出てきませんねー……」

司会は首を傾げて舞台袖に引っ込む。

そしてしばらくして戻ってきた彼が告げたのは、直斗の棄権。

「ええーっ！」

「何でお前が一番残念そうなんだ……」

溢れるどよめく声、失望の声。

それに普通に混じっている茜に、堂島は呆れたような声を上げた。

結局、そのまま投票、集計となる。

「お待たせしました、集計の結果が出ましたー！」

集計の間の休憩を挟み、司会が舞台の上に戻ってきた。
スポットライトが司会を照らす。

「集計結果ですが…男性票は、大きく分かれました！
ご意見も、それぞれの参加者に熱いコメントが送られています。
一方、女性票は”ある参加者”に集中！
これによってトップに躍り出たのは……」

ドラムロールが鳴りそうな溜めの後、優勝者が発表される。

「優勝は……白鐘直斗さんです！
彼女の中性的な魅力が、多くの女性のハートを離さなかったようですね。
では、白鐘直斗さんの表彰を、と言いたいところですが……白鐘直斗さんは現在、まだ席をはずしております」

棄権した直斗の優勝。
予想外で、ある意味予想通りの結果だ。
直斗は”探偵王子”として女子人気が高く、投票者の半数は女性。
そう考えると、こうなる事は初めから決まっていたのかもしれない。

「……ね、あの1番と2番の人、泣いてるよ」
「優勝する気だったのか……」

舞台の上で慰めあう柏木と花子の姿に気付いて茜が呟く。
堂島も驚愕しているようだ。

司会がマイクに向けて声を張り上げる。

「これにて、”ミス八高コンテスト”は終了させていただきます！！本日はご来場、ありがとうございました！！」

／＊／

体育館がざわめきに包まれる。

次の出し物の為に残るもの、知り合いを探すもの、教室棟に戻るもの。

「さて、とりあえず総司と合流しないとな。教室棟への渡り廊下の辺りにいれば会えるだろう」

堂島はパイプ椅子から立ち上がり、菜々子と茜に手を差し出す。

人ごみはあちこちに流れを作っていて、手を繋いでいないと迷子になってしまいそうなのだ。

「……」

「どうした、菜々子？」

「お兄ちゃん…春になったら、かえっちゃうんだよね……」

茜は堂島の手を取ったものの、菜々子は俯いて顔を上げない。

堂島が声をかけると菜々子が呟いた。

総司は、来年の４月になる前に稲羽を去る。

１年の海外出向を終えて、総司の両親が帰国するからだ。

「もうすぐ、冬になっちゃうね……」

もう１１月になる。

外も寒くなってきた。

「今のうちに、いっぱい甘えとけ」

「雪が降ったら、雪だるま作ろうね」

「……うん。

春まで、いっぱいあそぶ……」

菜々子は、堂島の手を取った。

体育館を後にする。

教室棟まで戻ると、既に総司達は渡り廊下に出ていて、近くのクラスが出している団子の出店で買い食いをしていた。

「お兄ちゃん！」

菜々子が駆け寄る。

総司はそれを優しく微笑んで出迎えた。

「堂島さん」

「見つかってよかった。

ん、何だ？」

飛び込んできた菜々子を受け止めて、総司は顔を上げる。

「実は、天城が部屋が空いてるから、皆で旅館に泊まりに来ないか、って。

菜々子ちゃんと茜ちゃんも連れて行っていいですか？」

「おう、そりゃ丁度良かった。

実は、これから県庁への出張があってな、帰りが明日になるんだ。

悪いが、子供たちの事を頼む」

「もちろん」

渡りに船な申し出に、堂島は頷く。
雪子も堂島に、お預かりしますと頭を下げた。

「すまんが、宜しくな」
「「いってらっしゃーい」」

背を向ける堂島に、茜と菜々子が手を振って見送る。

「おう、楽しめよ」

そう言って、堂島はその場を去って行った。
その背が見えなくなるまで見送って、菜々子は茜と顔を見合わせる。

「温泉、楽しみだね！」
「うん！
おとまりも、楽しみ！」

丁度、雪子の天城屋旅館ＰＲで今度は温泉を堪能したいと話し合っていた所だったのだ。
喜びも一塩である。
りせが、ポケットからデジカメを取り出した。

「ね、皆で、写真撮ろ！
記念に！！」
「お、いいねー。
あ、シャッターお願いできる？」

陽介が真っ先に同意し、団子屋の売り子にシャッターを頼む。

売り子にカメラを渡し、窓際に皆で並ぶ。
思い思いにポーズを決めたり、ピースをしたり。
売り子の掛け声と共にシャッターが切られた。

／＊／

天城屋旅館の食事は美味しく、騒げて楽しい時間だった。
皆で文化祭の出店を殆ど回ったので、話題にも事欠かなかった。
だけどそれが済んで今、部屋の雰囲気は暗い。
クマが泣きそうな顔で机に突っ伏す。

「みんな一緒の部屋じゃないクマね～……」
「……そりゃそうだろ」

クマの言葉に陽介がつっこみを入れる。
シーズン中の今、事件のせいで客が減っているとはいえ、空き部屋はあまりない。
女子の部屋と男子の部屋は隣どころか別の階になっていた。
だけど、雰囲気が暗いのはそのせいではない。
総司は周りを見渡す。
四人でもゆったりとした広さの部屋、品の良い調度品。
かなりの上部屋だ。
だが、ふすまの上には、何枚ものお札がペタペタと貼り付けてある。
シーズン中に空きそうもない上部屋に、お札。
突っ伏したクマ以外の三人で顔を見合わせていると、急に部屋の電話が鳴りだした。
三人とも体をビクつかせる。

「い、いきなり鳴るね、しかし！

か、完二、出てみ！」
「な、なにビビってんスか……」
陽介に背を押されて、完二は電話の受話器を持ち上げる。
昔ながらの黒電話。
それを持つ完二の手は微かに震えている。
「……はい」
神妙な声で応答する完二。
しばらく受話器に耳を傾けていた完二は、ふいに明るい声で礼を言って電話を切った。
「旅館の人からでした。
露天風呂、今ならけっこー空いてるらしいっス」
「素晴らしいサービスだな、天城屋旅館……
やな汗かいた……」
「んじゃ、流しに行きますか」
手で額を拭う陽介に完二は頷いてタオルなどの用意を始める。
クマも復活して嬉しそうに立ち上がった。
「クマ、みんなでおフロ、楽しみだなー。
みんなで同じ方向いて背中の流しっことか、富士山見ながら歌ったりするんでしょ？」
うきうきとした様子でクマが言う。
「これから入るのは露天だから、夜空を見ながら、かな。
背中の流しっこは出来るよ」

「うひょーい♪
いやー、それにしても、こっちは楽しいことばっかりクマよ。
これも、センセイがクマのところに、みんなを連れてきてくれたおかげだよね」

総司がそう答えると、クマは諸手を挙げて喜んだ。
クマは総司を見上げる。

「ありがとう、センセイ……」

独りの時は、何も感じなかった。
寂しさも、喜びも。
これは、総司に出会ってから手に入れた、クマの感情。
その感謝を全部こめて、クマは言った。
総司も優しく笑ってクマに頷いてみせる。

「おーい、エレベーターきてっぞー！」
「ああ、今行く！
クマ、行こう」

先にエレベーターを呼びに出た陽介の声が聞こえる。
総司はそれに返事をしてクマを促した。
クマは、満面の笑みでそれに頷く。

「おっけ！　行くクマよ！！」

／＊／

「わー、ひろーい！」

竹垣に囲まれた空間に、明るい声が響く。
暗い夜空に浮かぶ下弦の月が水面に映っている。

「転ばないようにね！」
「「はーい！」」

千枝の言葉に、子供二人が元気よく返事して、走っていく。
小さな桶で掛け湯をしながらそれを目で追っていた千枝は、隣で桶に湯を汲んでいる雪子に視線を移した。

「そういえば、となりの部屋、柏木先生と大谷さん泊まってたよ。ビックリしちゃった。
仲いいんだねー……」
「時々、泊りに来てくれるんだ。
辛いことがあると、泣きにくるみたいで……」

雪子は答えて、汲んだ湯を自身にかける。

「へー、やっぱ、直斗くんにコンテストで負けたのがくやしかったのかな？」

千枝がニヤリと笑って直斗を見ると、直斗は真っ赤な顔をして湯船に口の辺りまで浸かった。
りせも温泉に肩までつかりながら笑う。

「ま、あの二人、いいコンビだよね」

千枝と雪子も後に続き、手と足を湯船の中で思い切り伸ばした。

「あー、き・も・ち・いー！

やっぱ温泉は最高だねー。
直斗くんもこっちおいでよ、広いよ」

息をつき、隅っこに留まったままの直斗に声をかける。
直斗は千枝の言葉に頷き、少しだけ湯船の縁から離れた。
思い切りの悪さに、千枝と雪子とりせの三人が直斗を真ん中まで引きずり出す。

「直斗って、肌スベスベー」
「えっ、あ、あの……」
「わー、ほんとつるつる～」
「いいなー、色も白いしー、髪もさらっさらでさー」
「よぶんな肉も全然無いしー」
「ひゃっ！
ちょ、ちょっとドコ触って……
あ、茜ちゃん、菜々子ちゃん助けてっ」

あちこち触るのも忘れない。
真っ赤になった直斗は、露天内を一通り見て回って浸かりに来た子供二人に助けを求めた。

「あたしも触りたい！」
「茜ちゃんまで！？」

元気よく手を上げる茜に、直斗は驚愕の表情を浮かべる。

「ねえ、菜々子ちゃん、泳いでみる？」
「いーの！？」

その横で、一通り弄って満足した雪子が菜々子に話しかけていた。

雪子は昔から泳いでいるらしい。
今も泳いでいるのかと菜々子に聞かれて目を逸らしたことから、今も泳いでいるのだろう。
いつの間にか、端から端まで競争することになり、負けた人がドリンクを奢ることになっていた。
皆で欲しいドリンクを挙げていると、ガラガラと露天風呂の入口が開く音が響く。

「むっほ、広々クマ！
クマかき披露してやるクマ！」

そんなセリフと共に、雪子の真横で水しぶきが起こる。

「あいたっ！
…って…えええ！？」

雪子の横に飛び込んだのは、見覚えのある金髪碧眼の美少年。
クマだ。
入口の方を振り返ると、茫然と突っ立った総司達がいた。

「あああアンタらっ！？」
「なななな、なんでオメーらが！？」
「こ、こっちのセリフっ！」

声を荒げる千枝。
総司が声を上げる。

「に、逃げ……！」

だが、その言葉は最後まで発せられることはなかった。

菜々子は、驚いて総司達を見上げる。

「お兄ちゃんたち、こおっちゃったよ……？」

茫然と菜々子が呟く。

そこにあったのは、闖入者を閉じ込めた氷柱であった。

クマの氷結耐性もお構いなしである。

突然の事にクエスチョンマークを浮かべる菜々子に、慌てる女性陣。

「ちょ、ちょっと、今の…茜ちゃん……？」

「えっと…お風呂のぞかれた時は”しょけい”するように教えられてて……

つい、とっさに」

ボソボソと千枝が問うと、茜がバツが悪そうに笑う。

この中で、氷結魔法を扱えるのは茜、千枝、総司、クマの四人。

その内の二人が氷柱の中で、自身が違うとなると、後は茜しかいない。

それに、物理攻撃がメインでそれほど魔力に恵まれていない千枝には、ここまでの威力の氷結魔法を使う事は出来ない。

「しょ、処刑って…誰によ……」

「それより…どうしよ？」

呆れたように言う千枝。

茜は何とか話を逸らそうと氷柱を指さした。

「いいんじゃない？　このままで」

呆れたようにりせが半眼で氷柱を睨む。
その横で直斗は背を向け、必死になって体に巻いたタオルをきちんと巻き直していた。
しばらく氷柱を囲んでいると、入口に設えてある時計を見ていた雪子が、あ、と声を上げた。
雪子に視線が集中する。

「この時間、ここ男湯だった」

天城屋旅館には大浴場は複数あるものの、露天風呂は一つしかない。
そこで、時間によって男湯と女湯が切り替わるシステムらしい。

「時間、間違えちゃった…あはははは！」
「あ、あはははじゃないよ！」

爆笑する雪子に千枝が慌て、雪子と氷柱の間で視線を行ったり来たりさせる。

「と、とにかくお湯につけて！
氷溶かすから！」

茜が言って、氷柱に取りつく。
全員で氷柱を温泉の中に引きずり込んだ。

／＊／

脱衣所に、盛大なくしゃみが響いた。
浴衣を着た女性陣の輪の中で、バスタオルで身を包んだ被害者たちが震えている。

事情を知らない菜々子はりせと部屋に戻り、下手人である茜は残って手を合わせていた。

「ひ、ひでえよ、お前ら……ひっくしゅ」

「ご、ごめんって」

千枝がくしゃみをした陽介にタオルを追加しながら謝る。

「大体、何でこっちでペルソナ出せんだよ……」

完二が震えながら愚痴る。

だが、実際は茜が”こちら”でペルソナを出したのは初めてではない。

具体的に言うと、抜け駆けして修学旅行に参加したクマへの制裁としてキグルミを奪った時がそれだ。

青い光と共にマハオートが発動し茜の能力が強化され、だからこそ子供の腕力でもキグルミを奪取できたのだ。

「こっちは確かに”心の中の世界”じゃないから心の産物であるペルソナは出しにくいけど、絶対無理、ってわけじゃないんだよ。能力は落ちるし、同じペルソナ使いじゃなかったら、さらに効き辛いんだけど」

心をさらけ出すのは難しい。

だから、”こちら”ではペルソナを召喚するのは難しい。

だけど、いつでも胸の中にある心の力だ。

使えない筈がない。

ただ、認識できないが故に、ペルソナの力は普通の人間には伝わりにくい。

心が具現化しやすい”あちらの世界”に入るでもしなければ、普

通の人にはシャドウもペルソナも見る事は出来ない。
陽介や千枝は町中で覚醒し、ペルソナを具現化させているが、目撃されていないのはそのためだ。
いくら突然目の前に現れたところで、耳元で叫んだところで、盲目で聾者で、さらに気配も感じとれないのならば驚いてもらえるわけがない。
それは、そういうことなのだ。
火や氷などの属性攻撃ならともかく、回復魔法や精神攻撃などは普通の人間相手には殆ど効かないといっていい。

「……ホントに、ゴメンね？」

くしゃみをする総司を、茜は涙を浮かべた瞳で上目遣いで見上げる。

「…ああ、うん。
許すから、泣かないで、な？」

これで許さない人間はいないだろう。
そんな、攻撃力だった。
泣き落としって卑怯だよな、と総司は心の中で呟いた。

／＊／

ロビーに降りると、浴衣姿の雪子が立っていた。
エレベーターもある広いロビーは休憩所にもなっていて、くつろぐ為の応接セットや大きなテレビ、自販機や売店などがある。
今日は客として旅館にいる雪子だったが、やはり旅館の中の見栄えが気になるらしい。
テーブルの花の位置を直して、一つ頷いた。

歩いてきた総司に気付き、雪子は顔を上げる。

「あら、瀬多くん。
皆は？」
「大人しく布団にくるまってる。
俺は、暖かいものが飲みたくて」

総司は自販機を示す。
まだ体が冷えているのだ。
皆も同じようで、布団の中で震えている。
雪子は苦笑して、自販機にコインを入れた。

「お詫びに、奢る。
やそぜんざいでいい？」
「ああ」

ボタンが押され、取り出し口に缶が落ちる。
雪子はそれを総司に渡した。
プルタブを開けて少し飲むと、熱い餡子の甘みが口の中に広がる。
ほうっ、と息をつく。

「そういえば、あの部屋、山野アナが泊まった部屋だろ。
お札とか貼ってあったぞ」
「ふふ、ごめんなさい。
お祓いはしてあるから、いいかなって」

雪子は悪びれなくクスクスと笑う。

「私ね、ここを出て行くの…やめようと思うの」

総司の横に立って、雪子は言った。
雪子は、女将になるのが嫌なわけではなかった。
今頃になって、そう思う。
自分で決めたことではなかったから、レールに乗せられているような気がしたから嫌だったのだ。
嫌なら逃げるしかないと決めつけ、連れ出してくれる誰かを願った。
誰かを願う事をやめた後は逃げるための準備を始めた。
だけど。

「私、今は違う。
この旅館を守りたいって思う……
ここはやっぱり…私の大切な場所だから……」

旅館を馬鹿にされた時、悔しかった。
自分が、自分こそがここを守りたいと、そう思った。

「あとね、料理もだけど、資格の勉強も続けるつもり。
出て行くつもりはなくなったけど、きっと、やって損は無いと思うから。
この前、板長が”随分マシになりましたね”って褒めてくれたの。
もう”不毛な味”なんて言わせないんだから」

きっと、出て行って一人暮らしをしてたら、後悔していただろう。
自分一人で、何でもできるようになりたかった。
ずっと千枝を頼り続けて。
ずっと自分を連れ出してくれる王子様を待ち続けて。
だから、誰にも頼らず、一人で立ちたいと思っていた。
だけど、その考えは凄くおこがましいものだったと雪子は思う。
人は、独りでは生きられない。

「私、気付けてよかった。
旅館があって、家族がいて、仲居さんや板前さんたちがいて……
そういう、優しい…輪の中で育ててくれたから、今の私があるんだよね……
そう思ったら、私の人生って、私の問題じゃないんだよ。
だから……」

雪子は総司から視線を外して、宙を見上げる。
雪子には、謝らなければいけない存在がいた。
その名を呼ぶ。

「ごめんね、コノハナサクヤ。
私はあなたを連れて行くって言ったけど……
私は、私の意志で、ここに残る」

雪子から青白い光が立ち上り、その中にコノハナサクヤが現れる。
コノハナサクヤが花びらの衣を振るった。
コノハナサクヤを光が包む。
光は、やまない。
桜の翼のようだった羽衣は、硬質化してまるで後光のように眩しく輝く。
それを纏う、自らが白く発光する女性。
それが新しい、雪子の心の姿だった。

「応援してくれるの……？
ありがとう、アマテラス……」

カードとなり消えた残滓を抱きしめた雪子は、総司に向き直った。

「瀬……総司、くん。
あなたが私に、気付かせてくれた……」

雪子は、浴衣の袖の中から何かを取り出し、総司に差し出した。

「これ…あげる」

総司の手の中に落とされたのは、神社のお守り。
キツネが住まう、辰姫神社の物だった。

「総司くんを、守ってくれますように」
「神頼み？」
「……うん。
私は、ここに残る。
総司くんは、ここから出て行く。
だから」

くすりと笑う総司に、雪子も笑う。

「どんなに離れても、会えなくなっても、きっと、ずっと、この気持ちは変わらない。
あなたは、私の……大事な人。
ふふ、親友…って呼べる男の子なんて初めて。
すごく、嬉しい」

それは、後悔なんて一つもない、そんな明るい笑顔だった。

「今日は、ゆっくりしていってね。
精一杯、おもてなししちゃうから！」

／＊／

月の光が茜を照らす。
風景がよく見える大きな窓。
その前に置かれた安楽椅子に茜は腰掛けていた。
閉められた障子の向こうではロビーに降りて行った雪子以外が寝ている。
今この部屋で、起きているのは茜だけ。
時計の音だけが響く、静かな空間。

「”刑死者”と”審判”、か……」

月を見上げながら、茜は呟いた。
正位置の”刑死者”、逆位置の”審判”。
それは、マーガレットの占いで、示されたカードだった。
茜のこれからを示す、カード。
”刑死者”の正位置の意味は”自己犠牲、忍耐”、”審判”の逆位置は”再起不能、後悔”。

「自己犠牲？　再起不能？
そんなの、とっくだよ」

茜は小さく笑う。
後悔こそしていないものの、それは、すでに通過した出来事だった。
茜は、自分自身を使って救ったのだから。
そして、おそらくは。
次も、ためらわないだろう。
椅子の前に置かれた机の上にあるその時計の針が、全て１２の文字を指す。

時間は流れ続ける。
世界は死の色に染まらない。
時は、待たない。
すべてを等しく、終わりへと運んでゆく。

旅館でのひととき（後書き）

文化祭、強敵でした。
イベント長すぎる…ミスコンだけで４ｋ文字以上あるんですがっ！
途中でばっさりカットしたくなりました。
個人的にメインはミス？コンの方だと思うんで。
Ｐ３クロスなら処刑は外せませんよね！

親子の絆

■11／2

総司が帰ると、茜と菜々子は二人でテレビを見ていた。
普段ならこの時間だと料理中か、料理が終わって他の事をしているかだが、台所は片付いていて料理をした痕跡はない。

「あれ、今日はどうしたんだ?」
「堂島さんから電話あってね。
今日は夕飯作らないで待ってろ、って」
「ふうん?」

総司の問いに答える茜。
テレビはニュースを流している。
総司は座布団の上に腰を下ろす。

『それでは、次のニュースです。
”環境を考える会”代表の香西氏が、市内の小学校を訪れ、霧の影響を現地調査しました。
稲羽市ではここ数年、頻繁に濃霧が発生していますが……』

稲羽市に関するニュースに、総司は視線をテレビに向ける。
ニュースで取り上げられた稲羽市在住の人間が事件に巻き込まれる以上、やはり敏感にならざるを得ない。
ニュースは、政治家の一人が稲羽に来て視察を行ったという内容だった。
視察の理由は、ここ数年頻繁に発生する濃霧による体への影響の事実関係の調査だったらしい。

確かに、総司は町の人たちと調査がてらよく会話を交わしているが、そこには様々な憶測が飛び交っていた。
ひどいものになると、ジュネスが毒ガスを流しているのだと言い切る人間までいる始末。
ちなみに、数年前だとまだジュネスが出来る前だ。
ＶＴＲの中で香西氏が視察のコメントを語る。

『現代は、些細な環境の変化にも目を配り、政治に反映させていかなければならない。
今日私はある生徒と話したが、その子は風評に惑わされず自分の言葉で話していた。
本来は我々大人こそが、そうでなければならない。
我々は常に、子供たちの未来を管理する必要がある』

玄関が開く音に、すぐさま菜々子が反応する。

「ただいまー」
「かえってきた！」

堂島を出迎えに走っていく菜々子。

『集まった保護者達からは拍手が上がりましたが、一方で、選挙に向けた人気取りとの評もあり……』

ニュースは続いている。
だが、これ以上稲羽については触れなそうだ。
総司も堂島を出迎える。

「おう、またせたな」
「おかえり。

今日はどうしたんです？」
「あーっと、そうだったな。
それじゃまずは……そうだな。
ちょっと、三人隣の部屋に行ってろ」

堂島は総司の問いに、キョロキョロと辺りを見回した後、襖の向こうを示す。
首を傾げつつ、言われた通りに隣の部屋に移動する。
移動してしばらくすると、戻っていいぞと呼ばれ、襖を開けた。
居間の机の上には料理が並べられていた。
ジュネスの食品売り場に売ってあるパーティセット。
パーティセットの中身は揚げ物が多いので、サイドメニューとしてサラダ系の惣菜が並ぶ。
そして机の真ん中には……
菜々子が感嘆の声を上げる。

「わぁ…っ！　ケーキ！？
まるいのだ！！
きょう、なんのおいわい！？」

小ぶりのホールケーキ。
可愛らしくデコレーションされているが、チョコ板のプレート等はついておらず、記念日を思わせる飾りもない。

「あー、えっとだな……
今日は”家族”の大事な日なんだ」
「だいじな日……？」

菜々子が首を傾げる。
総司はちらりと壁にかかったカレンダーを見た。

特に何も印はついていない。
堂島は頷く。

「そうだ。
お前と、総司と、茜と、俺が、”家族”になる記念日だ」

堂島の言葉に茜が顔を上げる。
そして一つ呟いた。

「家族……」

菜々子が堂島を見上げて、素直に思った事を質問する。

「……いままでは？」

菜々子としては、堂島は父親、総司は兄、そして茜は双子の姉のような、そんな存在なのである。
とっくに家族だと菜々子は思っていた。
堂島が言葉に詰まる。

「そ、それはだな……
と、とにかくな、ちゃんと、”家族”になる記念日なんだ」
「ふぅん……
よくわかんないけど……
でも…なんかうれしいね！！」

首を傾げながらも、菜々子は嬉しそうに笑う。
堂島はニヤリと笑って茜と総司を見やる。

「総司も、茜も、俺の事”お父さん”って呼んでいいんだぞ？」

「……お父さん？」
「ああ」
茜が言うと、堂島は満足げに頷いた。
赤くなって茜は俯く。
茜は赤く染まった顔を誤魔化すように手で頬を包んだ。
「は、はずかしいね……」
だけど、満更でもなさそうだ。
「ほら、総司も呼んでみろ」
「堂島さん的には”お兄さん”の方が嬉しいんじゃ？」
「ははは」
お父さん、と面と向かって言うのは恥ずかしかった総司がそう言うと、堂島は明るい笑い声を上げた。
茜が総司の服の裾を引っ張る。
「ねえねえ、総司くん！
せっかく家族になるんならさ、これからあたしの事、呼び捨てで呼んでよ！」
「あ！　菜々子も！」
「ん。
茜、菜々子……これでいい？」
期待を込めて見上げてくる二人の名前を呼び捨てで呼ぶ。
満面の笑みで二人は頷いた。
「「うんっ！」」

「よし、じゃあ、食おうか」

堂島の言葉に全員が定位置に座り、手を合わせる。

いただきますの声が、居間に響いた。

／＊／

「あー、その…なんだ。

今日は、妙なことにつき合わせて、その…悪かったな」

総司が後片付けをしていると、そう言いながら堂島が寝室から戻ってきた。

惣菜とパーティセットはトレイに乗っていたが、箸や取り分け用の小皿、ケーキを切る時に使った包丁など洗い物がゼロになったわけではないのだ。

はしゃぎ疲れた茜と菜々子が眠気を訴え、堂島が寝かせに寝室に行っている間に洗い物をしていたのである。

総司は流していた水を止めて、手の水気を振り払った。

「いや、楽しかった。

ありがとうございます」

「そうか……優しいな、お前は」

総司が言うと、堂島はホッとしたような表情を浮かべた。

今回の事は、堂島の自己満足だった。

こんなことでもしないと、ケジメを付けられないと思った自分自身の。

そして、菜々子に知っておいて欲しかった。

堂島が、ちゃんと家族として菜々子を大切に思っていることを。

菜々子が日に日に千里に似てくると感じて辛かったこともある。

笑った顔も。
気の強さも。
それで、思い出す。
失ってしまった最愛の人を。
菜々子を迎えに行って、千里は事故にあった。
迎えに行ったせいで、千里は死んだ。
そう考えてしまうこともあった。
それでも、菜々子がいるだけで堂島は救われてきたのだ。
もし独りだったなら、姉の頼みだからとて総司を預かるなんて考えられなかっただろう。
記憶喪失で不安を抱えた子供だとて、茜を預かるなんて考えもしなかっただろう。

「多分、俺は…怖かったんだ。
誰かを真っ直ぐ受け止めて……
大切な家族を作って……そしてまた、それを無くしてしまうかもしれないのが。
逃げるヤツを追うことに逃げてたなんて、まったく滑稽だな……」
「逃げるの、やめた？」

堂島は頷く。

「俺はもう二度と、大切なものを失くさない。
絶対に……」

失くすのを怖がるのではなく、失くさないために。
だから逃げるのも悔やむのも、もう終わり。

「……絶対にだ」

これは、総司がくれた強さだ。
静かに誓いを立てて、堂島は総司に向き直る。
「お前も、何か困ったことがあったらすぐに俺に言えよ」
総司は、初めて堂島に父を感じた。
確かに、父性は前から感じていた。
でもそれは、菜々子に対しての物だ。
自分にとって、堂島はやはり”親切な母の弟”だった。
だけど。
「……うん」
総司は頷く。
総司にとって、親はただ血が繋がっていて生活費を出してくれるだけの存在だった。
――だってあたし、ちのつながってる人たちより、”ほんと”があったもん。
それは、いつか茜が言った言葉。
その意味が、やっと分かった。
確かにこの人は”本当のお父さん”だ。
そう思ったからこそ。
秘密を持っているのが辛いと思った。
■11／4
ピンポーン。

呼び鈴が鳴る。
台所を片付けていた茜がエプロンで濡れた手を拭う。
「あたし出るよ。
…はぁい！」
立ち上がろうとした総司に声をかけて、茜は小走りで玄関に向かう。
だけど、一足先に菜々子が応対に出ていた。
偶然廊下にいた菜々子の方が玄関に近かったのだ。
玄関を開けた先には作業着を着た男が立っていた。
「あ、いなば急便です。
ちょっと道を尋ねたいんですが、高橋さんのお宅ってどちらでしょうか？」
ここなんですけど、と男が差し出した小包の送り状には確かにこのあたりの番地が書いてあった。
珍しい名前でもないし、この辺りに高橋という家は数件ある。
しかも親戚同士で名前も似ている。
田舎では同じ苗字の親戚が一所に固まっているのは珍しくない。
それでどこが正解か分からなかったのだろう。
菜々子は番地からどこの高橋さんなのかを確かめて、道を教える。
「ああ、そうなんですか。
ありがとう、お嬢ちゃん」
男は笑顔で軽くお辞儀して、玄関前に止めたトラックに戻っていく。

見送って、菜々子は玄関を閉めた。

「何だった?」

「高橋さんちどこですかって……」

そっか、と茜は頷く。

茜はここに来て約半年。

コミュニティを結んでいる相手の家ならともかく、誰がどの家に住んでいるかなんてまだよく分かっていない。

茜が出ても、結局菜々子に聞くしかなかっただろう。

菜々子は隣に立った茜に答えながら、鍵をかける。

堂島はまだ帰ってきていなかったが、彼は鍵を持っている。

深夜になることもザラなので、夜は鍵をかけるように言われていた。

二人で居間に戻ると、総司は電話中だった。

総司の様子からすると、堂島のようだ。

「おと…堂島さん、なんて?」

電話を切った総司に茜は声をかける。

「明日帰ってくるって」

「そっか……」

堂島は、昨日から妙に忙しそうだ。

警察の中では連続殺人事件は久保美津夫が犯人ということで解決ムードに入っているからそう仕事は無い筈なのだが。

「菜々子、さみしくないよ。

だって、みんな、かぞくだから」

「……うん」

菜々子の言葉に、茜は小さく頷く。
そして、ふと思いついたように手を叩いた。

「あ、ねえねえ。
コタツない？　コタツ。
寒くなってきたし、コタツでダンランしたい！」
「コタツ、あるよ！
出そう、出そう！」

明るく言う茜に、菜々子は同調する。
総司も笑って、隣室の方へと視線を移した。

「じゃあ、コタツ布団持ってくるよ、押し入れ？」
「うん！」

菜々子の言葉に頷いて、総司は押入れを開ける。
引っ張り出して、手で叩く。
少し、埃っぽい。
季節物でずっと押入れに入っていたからその辺は仕方ないだろう。
今日我慢して、明日干せばいい。
茜と菜々子が机の天板を持ち上げ、総司がコタツ布団を机の脚の方に被せる。
天板を乗せて、コードをコンセントに差して準備完了。

「よし…っと。
これでＯＫ」

全員コタツ布団の中に足を入れて、菜々子がコンセントいついた

スイッチを手に取る。

「スイッチ、いれるよ」

菜々子がスイッチを切から入にする。
しばらくして。
わくわくした表情を浮かべていた茜が首を傾げる。

「……？
あったかくならないね」

茜はコタツ布団を捲って中を覗き込む。
赤外線コタツの赤い光はなく、ただ暗い。

「中、暗いよ」
「つかない。
こわれてるね」

何度かカチカチとスイッチを切り替えていた菜々子が、諦めたようにため息をつく。
茜も残念そうだ。

「よし、今日は金曜だし、休みになったら最新型を買いに行こう」
「え、買うの？
ジュネス？」

総司が言うと菜々子の表情が一気に明るくなった。

「やったー！
こんどのお休み、ジュネスだ！」

／＊／

鼻歌を歌いながら、ソファに座った茜は足をプラプラさせる。
時刻はもうすぐ夜の１２時。
雨が降り続いている。
マヨナカテレビが映るかもしれないこの状況だが、茜は楽しそうだ。

「ごきげんだな」

総司がカーテンを閉めながら言うと、茜はもちろん、と答えた。

「だって、コタツだよ！
あたし、コタツ未経験」
「そうなのか？」
「少なくとも、思い出したはんいではね」

確かに、最近はフローリングにテーブルに椅子がデフォルトで床に座ること自体が少なくなっている今、こたつのある家庭は少なくなっているのかもしれない。
だが、コタツ大好きな日本人としては、未経験の日本人がいることが信じられない。
親がほぼ家を出ている分注意してくれる人がいなくて、総司はよくコタツの中で寝てしまったものだ。

「あれの魔力はすごいぞ。
抜け出せなくなる」
「ミカン、買ってこなきゃ。
コタツにミカンってオヤクソクなんでしょ？

後、猫！
猫、外から連れてくる？」

夢を膨らませている茜に苦笑して、総司は電気を消す。
暗闇の中、総司は茜の横に腰かけた。

「……さて、そろそろか」

総司の声と共に、電源の切れたテレビが光り出す。

「……映ってる……」

砂嵐と霧の向こうを見通そうと、総司は目を細める。
そこには確かに人影が写っていた。
だけどその映像は今までの中のどれよりも不鮮明で、不明瞭。
年頃、性別、何も分からない。

「ぼやけてよく見えないな。
小さいけど…遠くにいるのか……？」
「これじゃ性別も分からないね。
でも、最近稲羽で有名になった人っていたっけ？」

茜が首を傾げる。
久保の逮捕から数ヶ月経った事もあり、しばらくは繰り返し特集を組んでいたマスコミも今は大人しい。
実際、最近は稲羽に関するニュース自体が少なくなってきている。
最近の稲羽に関するニュースといえば……
総司が思い出しながら口を開く。

「最近だと、こないだやってた政治家が来たやつじゃないか？

ほら、霧の風説のなんとか…ってやつ。
あれぐらいしか稲羽に関するニュースやってなかったと思うんだけど」
「でも、確かその政治家、稲羽の人じゃないよね。
もう帰ってるはずだよ」
「そうなんだよなぁ……」

狙われるのが稲羽在住の人間である以上、その政治家が狙われる確率は低いと言っていい。
直斗のように一時的にでもこちらに住んでいるのならともかく、もう中央に帰っているのならば尚更だ。

「……とにかく、明日は午前中授業だ。
昼にジュネスに集まろう」
「うん……」

総司の言葉に茜は頷く。

「また…事件起きちゃうのかな……」

暗い声で茜は呟いた。
総司は茜の背をポンポンと叩く。
犠牲者が出るのを止める。
その為に、ここにいるのだ。

■11／5

昨日から続く雨は、まだ降り続いている。
そんな悪天候の中だったが、放課後のジュネスに総司達は一人として欠ける事無く集まっていた。

「人影…確かに映りましたね」

直斗がまず口を開く。

探偵として現実的な真実を追い求めていた直斗にとって、マヨナカテレビはただの”都市伝説”であり、”オカルト”だった。

その自分が、”迷信”に目を凝らす。

それに驚きを感じた。

しかも、それがただの迷信でないなら尚更だ。

だが、昨日の映像はあまりにぼやけていて、誰も人物の特定に至った者はいなかった。

そんな中、茜が軽く手を挙げる。

「誰が映ってるかまでは分かんないんだけど……」

一つ前置きして、茜が話し始めた。

「ちょっと前、ぼやけて映るのはチューニングが合ってないんだろうって言ったよね？」

「ああ」

総司が言い、皆が頷く。

つい先日した話だ。

忘れてはいない。

「多分、映している方も誰だか分かってないのかも……」

対象の事を考えている時さえ、チューニングは合わずに映像はぼやける。

なら、対象が分からないならさらにチューニングが合わないとい

う事だ。
だが、対象が分からないとはどういうことだろうか。
メディアに出た人間が対象なら、姿かたちはある程度分かるはずだ。

「何それ…じゃあ、もしかして、無差別とかもありえる……？」
「どうでしょう……
人影は一つのように見えましたけど……」

確かに、対象者が多くて絞り切れず、チューニングが合わない事もあるだろうが……
不安そうに呟くりせに、直斗は首を傾げる。

「クマ、”あっち”に人は？」

陽介が訊くと、クマは首を横に振る。

「それはナシ。
まだ誰も来てないよ？
でもさ、映った人、体格、細っこくなかった？」
「いやー、あんだけボンヤリで体格も何も無いっしょ」

千枝が呆れたように息をついた。
ここで話し合っていても、これ以上の進展は望めそうにない。
幸いと言えばいいのか、今振っているこの雨が止むのは日が変わってからになるだろうと天気予報は報じていた。
今日も、マヨナカテレビは確認できる。
皆は顔を見合わせ、頷いた。

／＊／

「ただいまー」
「ただいま」

二人が帰った時には、既に日は落ちていた。
まだそれほど遅い時間ではないが、流石にこの時期になると目に見えて日が落ちるのが早くなる。
11月に入り、今まで温かかったのが嘘のように冷え込んできた。
エコバッグを抱え、傘を差している総司に代わり、鍵は茜が開ける。
中に入って戸を閉めると、風がない分、随分寒さがマシな気がした。
居間に向かうと、堂島が既に帰ってきていた。

「おかえり
…総司、お前に手紙が来てるぞ」

台所のテーブルに荷物を置いている総司に、堂島は封筒を差し出す。
受け取って、総司は動きを止めた。
切手の貼っていない封筒。
宛名には”瀬多　総司　サマ”と印字されている。

「あ……」
「ここで、開けろ」

息を呑んだ総司に、堂島が静かに告げる。
その瞳は、鋭い。

「……」

総司は封筒を裏返した。
そこには何もない。
差出人の住所も、名前も。
ゆっくりと封を破る。
中身は一枚の便箋。
紙の真ん中に、印刷された文字が並ぶ。

”コンドコソ　ヤメナイト　ダイジナヒトガ　イレラレテ　コロサレルヨ”。

総司から堂島は便箋を取り上げ、その簡潔な文を読む。

「これは、何だ？」
「……」

堂島が訊いてくるが総司は答えられない。

「差出人の丸っきり無い手紙なんて、そう届くもんじゃないんだ。お前、やっぱり……」

何度も、訊こうと思った。
頻発する数日間の行方不明者。
その空白の後、必ず総司がいる。
行方不明になる前に忠告を与えていたことすらあった。
総司がこの事件に何らかの形で関わっている。
それを堂島は確信していた。
そして、こちらは勘でしかないが、この行方不明事件が稲羽を騒がせていた連続殺人事件と関わりがあることも。

「俺は……」

それでも堂島が訊かなかったのは……

堂島が絞り出すような声を出す。

「俺は、俺はお前の家族だぞ!?

俺は、そんなに頼りないか……!?」

「違うっ!

そうじゃ、ない……」

総司は首を横に振る。

「俺はお前を…家族だと思うから、あえて問い詰めないで来た。

けど間違いだったな……家族だからこそ、もっと早くに言うべきだった」

堂島は総司の腕を掴んだ。

総司と目を合わせる。

「今日こそ、本当の事を話してもらうぞ……」

「お、お父さん……」

厳しい様子の堂島を、泣きそうな顔で菜々子が見上げる。

茜も、思いつめているような表情をしている。

二人をチラリと横目で見て、堂島はもう一度総司へと向き直った。

「別の場所で続きだ。

俺が納得できるまでは帰さない。

それがお前の為でもある……いいな?」

こんな脅迫めいた手紙が届く以上、犯人は総司を邪魔者として認識している。
守るために、保護する必要があった。

「菜々子、茜。
お前たちは、家にいろ」
「ダメ。
あたしも、行く」

茜が堂島の服の裾を掴んで首を振る。
堂島はしゃがんで茜と目線を合わせ、頭を撫でた。
不安そうにしている茜を少しでも、落ち着くように。

「……大丈夫だ。
ケンカしてるわけじゃない」
「……ちがうの」

だけど、それは勘違いだ。

「何が？」

喧嘩だと思って不安になっているのではない。
茜は総司と同じ立場だから。

「あたしにも、関係あるから。
話す、から……」

総司と同じ秘密を抱えているから。
万が一にも、嫌われるかもしれない、そう思う事が怖かった。
泣きそうな声で言う茜に堂島は頷く。

「……分かった。
茜も来い」
「うん……」
「菜々子。
すぐ帰るから、先に寝てるんだ」

堂島に言われ、菜々子は不安そう表情で総司を見上げる。

「すぐ、帰るから」
「うん……まってる」

菜々子は小さく頷いた。

／＊／

ツー、ツー。

携帯電話から聞こえる無機質な電子音。
それに陽介は首を傾げた。

「あれ？
出ないな、総司……」

ボタンを押して待ち受け画面まで戻り、手の中のケータイをクマに渡す。

「まあ、こうやって使うんだよ」

それは、陽介がクマの為に用意したケータイだった。

大抵クマは陽介と共にいるが、それでも離れているときに連絡を取れないのは不便に思ったからだ。
なにせ、好奇心いっぱいのクマは勝手に遊びに行ってしまうこともしばしば。
先日もいつの間にか居なくなったと思ったら、別の階である家具フロアのベッドで寝ていて、今こうやって罰である棚卸に付き合わされている。
連絡が取れないとどうにも心配になってしまうのだ。

「あ…IT時代！！」
「子供用の安っちーやつだけどな」
「ありがと、ヨースケ……」

受け取ったクマは目をキラキラと輝かせる。
陽介は息をついて、手に持った商品を棚に並べた。

「……今夜も雨だし、テレビのチェック忘れないようにって思ったんだけど……
総司のヤツ、何してんのかな……」

／＊／

パチン、と堂島はケータイをたたむ。

「これは、預っておく」

背広のポケットにケータイが仕舞われる。
呼び出し音はもう鳴らない。
堂島が電源を切ってしまっていた。

「さあ、話してもらおうか。
お前たちは、何に首を突っ込んでる？」

部屋の真ん中に置かれたデスク。
総司とそれを挟んで座った堂島は、鋭い目を総司と茜の二人に向ける。
そこは仮眠室を兼ねているのか、テレビとベッドも備えてある部屋で、ただの取調室にしては広い。
堂島の中では事情聴取というよりも、保護のついでに事情を聴くというのが大きいのかもしれない。
だが、その声色は固い。
足立もオロオロと所在なさげにドアの近くに控えていた。

「あの警告状はなんだ？
何故あんなものがお前に届いた？」

チラリと茜は総司を見た後、口を開く。

「あたしたちは、あの事件を追ってるの」
「逆さ磔連続殺人事件、だな」

堂島の言葉に茜は頷く。
堂島は苦い表情を浮かべた。

「何故だ？
警察は信用できなかったか？」

その言葉に、茜は首を横に振る。

「警察には、無理だから……」

「……無理？
なぜそんなことが言える？」
「犯人は、殺人にテレビの中の世界を使ってる」
無理だと言われ、少し険しい顔になっていた堂島は、茜の続く言葉に疑問符を浮かべた。
茜はその様子に気付いているが構わずに話を続ける。
「テレビの中に入れるのは、ペルソナっていう心の力を具現化する力を持っている人だけで……
だけど、それを良いことに、世界を渡る力を持たない人をテレビの中に人を入れて、殺してる人がいるの。
2件目から3件目まで、結構ブランクあったでしょ？
それは、あたしたちが助けてたからなんだよ」
3件目はテレビの世界が使われなかったから防げなかったんだけど、と茜は説明を締めくくった。
堂島は、しばらくポカンとした表情を浮かべた後、片手で目元を隠して俯く。
そこには、落胆の色があった。
「……俺は、全部話すというからお前の同行を許可したんだぞ」
「ウソじゃない。
ウソなんかじゃない！」
身を乗り出して、茜は首を振る。
「ペルソナ？
人がテレビん中に入る？
信じられる筈ないだろう？

俺は…今日こそは、本当の事を話してもらえると思ったんだがな……」

だが堂島は俯いたまま、茜と目を合わせようとしない。
泣きそうな顔で、茜は総司を見上げる。
総司は少し考えた後、部屋の一角を示した。

「……茜」
「うん」

それで茜は、総司が何を言いたいのかを悟り、椅子から立ち上がった。
向かうのは、部屋の一角。

「堂島さん」
「……なんだ」

茜が堂島を呼ぶ。
億劫そうに堂島は茜の方へと振り返った。
茜は部屋の隅にあるテレビの前に立っている。

「テレビ、手の平くっつけてみて」

ため息をついて、堂島は立ち上がって茜の元へ行く。
手を伸ばし、テレビ画面に触れる。
もちろん、何も起こらない。
ただ、ペタリと画面に指紋が付くぐらいだ。
その手に、茜は手を重ねた。

「ほら見ろ、何も起きないじゃ……のわっ！？」

堂島が悲鳴を上げる。
いきなり腕の支えがなくなってたたらを踏んだのだ。
見ると、添えられた茜の小さな手と共に、堂島の腕はテレビに入り込んでいた。
テレビに穴が開いたとか、そんなレベルの話ではない。
腕に触れる感触は、茜の手の平だけで、画面には水面に手を入れた時のように波紋が広がっている。

「腕が……」
「分かった？
誰かが…あっちに入れる人の誰かが、こうやって被害者をテレビの中に放り込んでるの」
「……」

呆然と、堂島はテレビに入り込んだ自身の腕を見つめている。

「ふわー、どうなってんの？
これ」
「足立さんも、試してみる？」

興味深そうに足立が腕の刺さったテレビを覗き込んだ。
堂島は、腕を戻す。
茜は添えてた手でテレビを指さした。

「いやー、僕はいいよ！
何か怖いし！」

足立は慌てたように一歩下がり、手のひらをヒラヒラと動かして拒否の意を表す。

「被害者の共通点は、メディアで取り上げられて知名度が上がった人間。
浚われる前に、マヨナカテレビに映るんだ」
「……マヨナカテレビ？」
自分の手を見ていた堂島が呟く。
総司は頷く。
「都市伝説として稲羽内で広まってる話で、結構な人数が見てる。”雨の日の真夜中、日が変わるときに電気を消して電源を入れていないテレビを見ていると人影が映る”ってやつ。
それに映った人間が、浚われて、落とされるんだ。
昨日も、特定は出来なかったけど映った。
事件は、まだ終わっていない」
黙ったまま総司の話を聞いていた堂島は、椅子に座りなおした。
茜もテレビの傍から総司の隣に戻って椅子に座る。
ちらり、と堂島は時計を見た。
「雨、まだ止んでなかったよな」
「……うん」
「……そうか」
堂島は茜の言葉に頷いて、懐から総司から没収した警告状を取り出した。
それは、それ以上指紋などが付かないようにと、ジッパーのついた食品保存用の小袋に入れてある。
証拠品袋の代わりだ。
それを、足立に渡す。

「鑑識に回せ。
後、出る時、電気消してけ」
「マヨナカテレビなら、家でも見れるよ」

電気を消せという指示の意味を読み取った茜が言う。
時間には、まだ余裕がある。
家に帰って菜々子を寝かしつけてからでも、十分に。

「だめだ。
お前たちは、ここから出るな」
「そうそう、ここなら安全だしさ。
大人しくここにいてよ、ね？
ここに連れてきたのは話を聞くってのもあるけど、保護する必要があったからなんだし。
なんせあんな手紙見ちゃったら、心配になっちゃうもんね。
堂島さんの親ごこ…あいた！
ごめんなさい！」

長々と喋り出した足立を堂島は拳で黙らせ、部屋の外へと放り出す。
扉を閉めて、部屋の電気を消した。
暗くなった部屋。
窓から差し込む電灯の光だけが視界を確保してくれている。
雨の中月明かりがないので、それがなかったら物の輪郭すら見えないだろう。
堂島はぶつからないように気を付けながら椅子まで戻り、深く腰掛けた。

「ここで、待つ。

いいな？」
「うん……」

堂島の声は、固く、厳しい。
だけど、信じてくれた。
こうやって、非科学的な事を試そうとしてくれている。
半信半疑でも。
それが嬉しくて、茜は小さく微笑んだ。

／＊／

「ナナチャンとこ、遊びに行く！
遊ぶ約束、たくさんしたからね！」

自分の物となったケータイをマジマジと見つめていたクマが唐突にそんな事を言い出した。
手に入れたオモチャを見せたい子供のようだ。
だがまだ棚卸も半ばで、しかも、もう夜遅い。
陽介は時計を確認する。
やはり、もう夕飯時としても遅い時間だった。
人の家に軽々しく上り込んでいいような時間ではない。
だけど、陽介は一つ気になる事があった。
それは先程総司にかけた電話が繋がらなかった事。
しかも、ただ繋がらなかったのではなく、出た瞬間に通話を終了したようなのだ。
家にいるならそんな事する必要ないし、折り返しの電話があってもいいはずだ。

「……もしかして、さっき総司が電話に出なかったのって出かけてるからか？」

もしかしたら、出先で電話に出れないのかもしれない。
電車の中等、電話に出れないようなシチュエーションは普通にある。
昼間マヨナカテレビを確認するように話し合ったが、家庭の事情でそういう事もあるだろう。
自身だって、こうやって棚卸で家にいないのだから。

「じゃあ、ナナチャンお留守番!?
かわいそークマよ!
ねえねえねえねえ!」
「いや、総司いなくても茜ちゃんいるだろ。
あー、でも一応電話してみっか」

強請ってくるクマにウンザリした表情を浮かべながらも、陽介はクマからケータイを借りて電話帳を呼び出す。
自分のケータイは仕事中なので、バックヤードの一室に置いてあるロッカーの中に置いてある。
だからクマのを使うしかないのだ。

「茜ちゃん、ケータイ持ってないんだよな……
なら家電…っと……
今度総司に言ってみるか」

電話帳から総司の項目を呼び出し、その中の自宅として登録してある番号を選択する。
耳に響く呼び出し音。

『……もしもし』

今度は切れることなく繋がった。
菜々子の声が陽介の耳に飛び込んでくる。

「あ、菜々子ちゃん？
俺、花村だけど。
えと、お兄ちゃんは？」

陽介の質問の答えは簡潔な物だった。

『…いない』

その、たった一言。

「じゃあ、茜ちゃんは？」
『二人とも、いない。
へんなてがみが来て、それを見たら、お父さん、おこって……
けーさつに、お兄ちゃんとあかねちゃん、つれてった……』
「ちょ、ちょっと!?
警察に連れてった!?」

思わず陽介が叫ぶと、ケータイに耳を近づけて聞いていたクマが陽介からケータイを取り上げた。
自分の耳に当て、明るい声を出す。

「こんばんは、あなたのクマクマー。
また一緒にジュース飲んだり、お菓子食べるクマよ」

その横で、陽介は真剣な顔で思考に耽る。

「お兄ちゃんたちの様子は、クマたちが見てくるクマ。

だから、心配しなくていいクマよー」

変な手紙が来て、総司と茜が警察署に連れて行かれた。
電話に出れない理由は分かった。
拘束されているなら電話に出してもらえないことも頷ける。
そして、連れて行かれる原因となった”へんなてがみ”は事件に関係している筈だ。
事件に関係している、変な手紙。

「まさか、またあの”警告状”!?
二通目が来たって事か!?
それを、堂島さんが見て…警察に?」

陽介が顔を上げた。
クマはまだ話している。
菜々子を元気づけるのも大事だが、今は、事態を皆に伝えないといけない。
陽介は、クマに手を突き出した。

「クマ、いったん電話切れ!
みんなに連絡する!」

親子の絆（後書き）

Ｐ４ＡのＤＶＤ１巻見ました！
いやー、良かったです（＊´∀｀）＝３
テレビオンエア版と結構違いましたよ。
追加された3分もですけど、ＯＰＥＤが2話からのと同じ本来のに差し替わってたり。
事前にマヨナカ生テレビとかで1巻のカバーイラスト見てたんですが、近くで見ると更に番長カッコよかったです。

とりあえず、何とか堂島コミュも予定のとこまで上げて１１／４に突入することができました。
コミュの予定が結構キツキツなんで、１話で数人ＭＡＸとかそのうち来そうだｗｗ
でも、コミュ入れなかったらもっと薄い話になってしまってたかもですね。

推理パートの完二の影の無さが……
選択肢のある４主より喋らないです。
さすがテレビで殺人→テレビで撲殺の思考回路。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4478s/

永劫の世界へ

2011年11月28日02時48分発行